杉浦非水装幀

夏目漱石集

改造社版



夏目漱石とその筆蹟

「夏目漱石集」目次

漱石先生小傳

先生は慶應三年正月五日牛込の馬場下で生れ大正五年十二月九日年五十で早稲田南町七番地で亡くなつた。その亡くなつた所と生れ且つ育つた所とは、僅か四五町の一筋道で繋がつてゐる、同じ牛込區内であつた。明治四十年の秋、先生が本郷の西片町から早稲田へ越して來た時にも、思ひなしか、先生にはある特別な感情が動いてゐるらしく見えた。亡くなる前年に、先生は『硝子戸の中』の中や『道草』の中で、自分の子供の時分の思ひ出を色々に書いてゐるが、是も先生がその牛込の然も生れた場所に近く住んでゐるといふ事實の意識が、さういふ事を思ひ出させる力強い機縁の一つにはなつてゐたに違ひない。

然し先生の幼年時代は、決して幸福だとは言はれなかつた。二女三男の後に生れて、先生は親からの愛情を人並に享受する事が出來なかつた。先生はすぐ里子に出された。また間もなく養子にやられた。是がどういふ印象を先生の心に與へ、また其後先生にどういふ因縁をつくつる。先生が生家に歸つて來たのは七つの年である。さうして籍がちやんと復つて來たのは、先生の二十二の年である。さうしてこの年の七月に先生は、第一高等中學校の豫科を卒業して、本科に入學する事になつた。

正岡子規は作家夏目漱石を作り上げる上に必要缺くべからざる存在であつた。春秋流に言へば、正岡子規がなかつたら作家夏目漱石は存在しなかつたかも知れない。先生がその正岡さんと知り合ひになつたのは、凡そ此時分の事の樣である。

先生は大學を卒業してから松山に行つた、それから熊本へ行つた、熊本からロンドンへ行つた。ロンドンから歸つて東京に住む樣になつてから、正岡さんの弟子の高濱さんと正岡さんの殘して行つた雜誌「ホトトギス」とが、先生洋行中に亡くなつた正岡さんの代理を勤めて、先生に小説を書かせ出した。それが『吾輩は猫である』である。後に先生が、俺は何でも自分で進んでやつた事がない、發句を作るのも文章をかくのも小説を作るのも、みんな人から勸められてやり出した事だ、と言つてゐたが、まつたくそれに違ひないと思ふ。その點で先生ほど内氣はといふと、或は橋口さんなどから勸められて始めたものかも知れない。

先生が大學を止めて「朝日新聞」に這入つてからの事は、到る所で書かれ、誰でも知つてゐる事であるから、別に書かない。唯修善寺での大吐血は、先生の内生活に大回轉を與へた意味で、非常に重大な事件であつたといふ事丈を此所では注意するに止めて置きたいと思ふ。先生はその後殆んど毎年の樣に胃潰瘍に見舞はれた。さうして最後にはその爲めに命をとられた。先生はその繼起を、天からの音づれの樣にも感じてゐたのではないかとも想像される。先生は、人を責めるより前に自分を責めようとする樣に、人を憎むよりも前に先づ人を愛さうとする樣に、さうして、ひつくるめて人間を離れて自然に即かうとする樣に、心持が段々に變つて行つた。その心持の光を最初に感じさせるものは、先生の修善寺の日記である。また『思ひ出す事など』である。

昭和二年五月　　小宮豐隆

吾輩は猫である抄

一

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたか頓と見當がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いて居た事丈は記憶して居る。吾輩はこゝで始めて人間といふものを見た。然もあとで聞くと、それは書生といふ人間で一番獰惡な種族であつたさうだ。此書生といふのは時々我々を捕まへて煮て食ふといふ話である。然し其當時は何といふ考へもなかつたから別段恐ろしいとも思はなかつた。但彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフハフハした感じが有つた計りである。掌の上で少し落ち附いて書生の顔を見たが、所謂人間といふものゝ見始めであらう。此時妙なものだと思つた感じが今でも殘つて居る。第一毛を以て裝飾されべき筈の顔がつるつるして丸で藥罐だ。其後猫にも大分逢つたがこんな片輪には一度も出會した事がない。加之顔の眞中が餘りに突起して居る。さうして其穴の中から時々ぷうぷうと烟を吹く。どうも咽せぽくて實に弱つた。是が人間の飲む煙草といふものである事は漸く此頃知つた。

此書生の掌の裏でしばらくはよい心持に坐つて居つたが、暫くすると非常な速力で運轉し始めた。書生が動くのか自分丈が動くのか分らないが無暗に眼が廻る。胸が惡くなる。到底助からないと思つて居ると、どさりと音がして眼から火が出た。夫迄は記憶して居るが、あとは何の事やらいくら考へ出さうとしても分らない。

ふと氣が附いて見ると書生は居ない。澤山居つた兄弟が一疋も見えぬ。肝心の母親さへ姿を隱して仕舞つた。其上今迄の所とは違つて無暗に明るい。眼を明いて居られぬ位だ。はてな何でも容子が可笑しいと、のそのそ這ひ出して見ると非常に痛い。吾輩は藁の上から急に笹原の中へ棄てられたのである。

漸くの思ひで笹原を這ひ出すと向うに大きな池がある。吾輩は池の前に坐つて、どうしたらよからうと考へて見た。別に是といふ分別も出ない。暫らくして泣いたら書生が又迎ひに來てくれるかと考へ附いた。ニャー、ニャーと試みにやつて見たが誰も來ない。其内池の上をさらさらと風が渡つて日が暮れかゝる。腹が非常に減つて來た。泣き度くても聲が出ない。仕方がない、何でもよいから食物のある所迄あるかうと決心をして、そろりそろりと池を左に廻り始めた。どうも非常に苦しい。そこを我慢して無理やりに這つて行くと、漸くの事で何となく人間臭い所へ出た。此所へ這入つたらどうにかなると思つて、竹垣の崩れた穴からとある邸内にもぐり込んだ。縁は不思議なもので、もし此竹垣が破れて居なかつたなら、吾輩は遂に路傍に餓死したかも知れんのである。一樹の蔭とはよく云つたものだ。此垣根の穴は今日に至る迄吾輩が隣家の三毛を訪問する時の通路になつて居る。偖邸へは忍び込んだもの丶是から先どうして善いか分らない。其内に暗くなる、腹は減る、寒さは寒し、雨が降つて來るといふ始末で、もう一刻も猶豫が出來なくなつた。仕方がないから兎に角明るくて暖かさうな方へ方へとあるいて行く。今から考へると其時は既に家の内に這入つて居つたのだ。こゝで吾輩は

彼の書生以外の人間を再び見るべき機會に遭遇したのである。第一に逢つたのがおさんである。是は前の書生より一層亂暴な方で、吾輩を見るや否やいきなり頸筋をつかんで表へ抛り出した。いや是は駄目だと思つたから、眼をねぶつて運を天に任せて居た。然しひもじいのと寒いのにはどうしても我慢が出來ん。吾輩は再びおさんの隙を見て臺所へ這ひ上がつた。すると間もなく又投げ出された。吾輩は投げ出されては這ひ上り、這ひ上がつては投げ出され、何でも同じ事を四五遍繰り返したのを記憶して居る。其時におさんと云ふ者はつくづくいやになつた。此間おさんの三馬を偸んで此返報をしてやつてから、やつと胸の痞が下りた。吾輩が最後につまみ出されようとしたときに、此家の主人が騒々しい何だといひながら出て來た。下女は吾輩をぶら下げて主人の方へ向けて、此宿なしの小猫がいくら出しても出してもお臺所へ上がつて來て困りますといふ。主人は鼻の下の黒い毛を撚りながら吾輩の顔を暫らく眺めて居つたが、やがてそんなら内へ置いてやれといつたまゝ奥へ這入つて仕舞つた。主人は餘り口を利かぬ人と見えた。下女は口惜しさうに吾輩を臺所へ抛り出した。かくして吾輩は遂に此家を自分の住家と極める事にしたのである。

吾輩の主人は滅多に吾輩と顔を合せる事がない。職業は教師ださうだ。學校から歸ると終日書齋に這入つたぎり殆んど出て來る事がない。家のものは大變な勉強家だと思つて居る。當人も勉強家であるかの如く見せて居る。然し實際はうちのものがいふ樣な勤勉家ではない。吾輩は時々忍び足に彼の書齋を覗いて見るが、彼はよく晝寢をして居る事がある。時々讀みかけてある本の上に涎をたらして居る。彼は胃弱で皮膚の色が淡黄色を帶びて彈力のない不活潑な徴候をあらはして居る。其癖に大飯を食ふ。大飯を食つた後でタカヂヤスターゼを飲む。飲んだ後で書物をひろげる。二三ページ讀むと眠くなる。涎を本の上へ垂らす。是が彼の毎夜繰り返す日課である。吾輩は猫ながら時々考へる事がある。教師といふものは實に樂なものだ。人間と生れたら教師となるに限る。こんなに寢て居て勤まるものなら猫にでも出來ぬ事はないと。夫でも主人に云はせると教師程つらいものはないさうで、彼は友達が來る度に何とかかんとか不平を鳴らして居る。

吾輩が此家へ住み込んだ當時は、主人以外のものには甚だ不人望であつた。どこへ行つても跳ね付けられて相手にしてくれ手がなかつた。如何に珍重されなかつたかは、今日に至るまで名前さへつけてくれないのでも分る。吾輩は仕方がないから、出來得る限り吾輩を入れてくれた主人の傍に居る事をつとめた。朝主人が新聞を讀むときは必ず彼の膝の上に乘る。彼が晝寢をするときは必ず其脊中に乘る。是はあながち主人が好きといふ譯ではないが、別に構ひ手がなかつたから已むを得んのである。其後色々經驗の上、朝は飯櫃の上、夜は炬燵の上、天氣のよい晝は椽側へ寢る事とした。然し一番心持の好いのは夜に入つてこゝのうちの子供の寢床へもぐり込んで一所にねる事である。此子供といふのは五つと三つで、夜になると二人が一つ床へ入つて一間へ寢る。吾輩はいつでも彼等の中間に己れを容るべき餘地を見出してどうにか、かうにか割り込むのであるが、運惡く子供の一人が眼を醒ますが最後大變な事になる。子供は――殊に小さい方が質がわるい――猫が來た〳〵といつて夜中でも何でも大きな聲で泣き出すのである。すると例の神經胃弱性の主人は必ず眼をさまして次の部屋から飛び出してくる。現に先達ても物指で尻ぺたをひどく叩かれた。

吾輩は人間と同居して彼等を觀察すればする程、彼等は我儘なものだと斷言せざるを得ない樣になつた。殊に吾輩が時々同衾する子供の如きに至つては言語道斷である。自分の勝手な時は人を逆さにしたり、頭へ袋をかぶせたり、抛り出したり、へつゝひの中へ押し込んだりする。而も吾輩の方で少しでも手出しをしようものなら家内總がゝりで追ひ廻して迫害を加へる。此間も一寸疊で爪を磨いたら、細君が非常に怒つてそれから容易に座敷へ入れない。臺所の板の間で他が顫へて居ても一向平氣なものである。吾輩の尊敬する筋向うの白君抔は逢ふ度毎に人間程不人情なものはないと言つて居らるゝ。白君は先日玉の樣な子猫を四疋産まれたのである。所がそこの家の書生が三日目にそいつを裏の池へ持つて行つて四疋ながら棄てて來たさうだ。白君は涙を流して其一部始終を話した上、どうしても我等猫族が親子の愛を完くして美しい家族的生活をするには人間と戰つて之を剿滅せねばならぬといはれた。一々尤もの議論と思ふ。又隣の三毛君抔は人間が所有權といふ事を解して居ないといつて大いに憤慨して居る。元來我々同族間では目刺の頭でも鰡の臍でも一番先に見附けたものが之を食ふ權利があるものとなつて居る。もし相手が此規約を守らなければ腕力に訴へてよい位のものだ。然るに彼等人間は毫も此觀念がないと見えて、我等が見附けた御馳走は必ず彼等の爲に掠奪せらるゝのである。彼等は其強力を頼んで正當に吾人が食ひ得べきものを奪つて澄まして居る。白君は軍人の家に居り、三毛君は代言の主人を持つて居る。吾輩は教師の家に住んで居る丈、こんな事に關すると兩君よりも寧ろ樂天である。唯其日々々が何うにか斯うにか送られゝばよい。いくら人間だつて、さういつ迄も榮える事もあるまい。まあ氣を永く猫の時節を待つがよからう。

我儘で思ひ出したから一寸吾輩の家の主人が此我儘で失敗した話をしよう。元來此主人は何といつて人に勝れて出來る事もないが、何にでもよく手を出したがる。俳句をやつて「ほとゝぎす」へ投書をしたり、新體詩を「明星」へ出したり、間違ひだらけの英文をかいたり、時によると弓に凝つたり、謡を習つたり、又あるときはヴイオリン抔をブー〳〵鳴らしたりするが、氣の毒な事には、どれもこれも物になつて居らん。其癖やり出すと胃弱の癖にいやに熱心だ。後架の中で謡をうたつて、近所で後架先生と渾名をつけられて居るにも關せず一向平氣なもので、矢張り是は平の宗盛にて候を繰り返して居る。皆がそら宗盛だと吹き出す位である。此主人がどういふ考へになつたものか、吾輩の住み込んでから一月許り後のある月の月給日に、大きな包みを提げてあわたゞしく歸つて來た。何を買つて來たのかと思ふと、水彩繪具と毛筆とワットマンといふ紙で、今日から謡や俳句をやめて繪をかく決心と見えた。果して翌日から當分の間といふものは毎日毎日書齋で晝寝もしないで繪計りかいて居る。然し其のかき上げたものを見ると何をかいたものやら誰にも鑑定がつかない。當人もあまり甘くないと思つたものか、ある日其友人で美學とかをやつて居る人が來た時に、下の樣な話をして居るのを聞いた。

「どうも旨くかけないものだね。人のを見ると何でもない樣だが、自ら筆をとつて見ると今更の樣に六づかしく感ずる」是は主人の述懐である。成程詐りのない處だ。彼の友は金縁の眼鏡越しに主人の顔を見ながら、「さう初めから上手にはかけないさ。第一室内の想像計りで畫がかける譯のものではない。昔以太利の大家ア、ドレア・デル・サルトが言つた事がある。畫

をかくなら何でも自然其物を寫せ。天に星辰あり。地に露華あり。飛ぶに禽あり。走るに獸あり。池に金魚あり。枯木に寒鴉あり。自然は是一幅の大活畫なりと。どうだ君も畫らしい畫をかゝうと思ふなら、ちと寫生をしたら」「へえアンドレア・デル・サルトがそんな事をいつた事があるかい。ちつとも知らなかつた。成程こりや尤もだ。實に其通りだ」と主人は無暗に感心して居る。金縁の裏には嘲ける樣な笑が見えた。

其翌日吾輩は例の如く椽側に出て心持善く晝寢をして居たら、主人が例になく書齋から出て來て、吾輩の後で何かしきりにやつて居る。不圖眼が覺めて何をして居るかと一分許り細目に眼をあけて見ると、彼は餘念もなくアンドレア・デル・サルトを極め込んで居る。吾輩は此有樣を見て覺えず失笑するのを禁じ得なかつた。彼は彼の友に揶揄せられたる結果として先づ手始めに吾輩を寫生しつゝあるのである。吾輩は既に十分寢た。欠伸がしたくて堪らない。然し折角主人が熱心に筆を執つて居るのを動いては氣の毒だと思うてぢつと辛抱して居つた。彼は今吾輩の輪廓をかき上げて顏のあたりを色彩つて居る。吾輩は自白する。吾輩は猫として決して上乘の出來ではない。背といひ毛並といひ顏の造作といひ敢て他の猫に勝るとは決して思つて居らん。然しいくら不器量の吾輩でも、今吾輩の主人に描き出されつゝある樣な妙な姿とは、どうしても思はれない。第一色が違ふ。吾輩は波斯産の猫の如く黄を含める淡灰色に漆の如き斑入りの皮膚を有して居る。是丈は誰が見ても疑ふべからざる事實と思ふ。然るに今主人の彩色を見ると、黄でもなければ黑でもない、灰色でもなければ褐色でもない、さればとて是等を交ぜた色でもない。只一種の色であるといふより外に評し方のない色である。其上不思議な事は眼がない。尤も是は寢て居る所を寫生したのだから無理もないが、眼らしい所さへ見えないから盲猫だか寢て居る猫だか判然しないのである。吾輩は心中ひそかにいくらアンドレア・デル・サルトでも是では仕樣がないと思つた。然し其熱心には感服せざるを得ない。可成なら動かずに居つてやり度いと思つたが、さつきから小便が催うして居る。身内の筋肉はむづ〳〵する。最早一分も猶豫が出來ぬ仕儀となつたから、不得已失敬して兩足を前へ存分のして、首を低く押し出してあーあと大なる欠伸をした。さてかうなつて見ると、もう大人しくして居ても仕方がない。どうせ主人の豫定は打ち壞したのだから、序に裏へ行つて用をたさうと思つてのそ〳〵這ひ出した。すると主人は失望と怒りを掻き交ぜた樣な聲をして、座敷の中から「此馬鹿野郎」と怒鳴つた。此主人は人を罵るときは必ず馬鹿野郎といふのが癖である。外に惡口の言ひ樣を知らないのだから仕方がないが、今迄辛抱した人の氣も知らないで、無暗に馬鹿野郎呼ばはりは失敬だと思ふ。それも平生吾輩が彼の背中へ乘る時に少しは好い顏でもするなら此漫罵も甘んじて受けるが、こつちの便利になる事は何一つ快くしてくれた事もないのに、小便に立つたのを馬鹿野郎とは酷い。元來人間といふものは自己の力量に慢じて皆んな增長して居る。少し人間より強いものが出て來て窘めてやらなくては此先どこ迄增長するか分らない。

我儘も此位なら我慢するが、吾輩は人間の不德について是よりも數倍悲しむべき報道を耳にした事がある。

吾輩の家の裏に十坪許りの茶園がある。廣くはないが瀟灑とした心持ち好く日の當たる所だ。うちの子供があまり騷いで樂々晝寢の出來ない時や、餘り退屈で腹加減のよくない折杯は、吾輩はいつでも此所へ出て浩然の氣を養ふの

が例である。ある小春の穏やかな日の二時頃であつたが、吾輩は昼飯後快く一睡した後、運動かた〴〵この茶園へと歩を運ばした。茶の木の根を一本々々嗅ぎながら、西側の杉垣のそばまでくると、枯菊を押し倒して其上に大きな猫が前後不覚に寝て居る。彼は吾輩の近附くのも一向心付かざる如く、又心付くも無頓着なる如く、大きな鼾をして長々と体を横たへて眠つて居る。他の庭内に忍び入りたるものが斯くまで平気に睡られるものかと、吾輩は窃かに其の大胆なる度胸に驚かざるを得なかつた。彼は純粋の黒猫である。僅かに午を過ぎたる太陽は、透明なる光線を彼の皮膚の上に抛けかけて、きら〳〵する柔毛の間より眼に見えぬ炎でも燃え出づる様に思はれた。彼は猫中の大王とも云ふべき程の偉大なる体格を有して居る。吾輩の倍はたしかにある。吾輩は嘆賞の念と、好奇の心に前後を忘れて彼の前に佇立して余念もなく眺めて居ると、静かなる小春の風が杉垣の上から出たる梧桐の枝を軽く誘つて、ばら〳〵と二三枚の葉が枯菊の茂みに落ちた。大王はくわつと其真丸の眼を開いた。今でも記憶して居る。其眼は人間の珍重する琥珀といふものよりも遥かに美しく輝いて居た。彼は身動きもしない。双眸の奥から射る如き光を吾輩の矮小なる額の上にあつめて、おい、おめえは一体何だと云つた。大王にしては少々言葉が卑しいと思つたが、何しろ其声の底に犬をも挫しぐべき力が籠つて居るので、吾輩は少なからず恐れを抱いた。然し挨拶をしないと険呑だと思つたから「吾輩は猫である。名前はまだない」と可成平気を装つて冷然と答へた。然し此時吾輩の心臓は慥かに平時よりも烈しく鼓動して居つた。彼は大いに軽蔑せる調子で「何、猫だ？猫が聞いてあきれらあ。全てえ何処に住んでるんだ」随分傍若無人である。「吾輩はこゝの教師の家に居るのだ」「どうせそんな事だらうと思つた。いやに瘠せてるぢやねえか」と大王丈に気焔を吹きかける。言葉附から察すると、どうも良家の猫とも思はれない。然し其膏ぎつて肥満して居る所を見ると、御馳走を食つてるらしい、豊かに暮らして居るらしい。吾輩は「さう云ふ君は一体誰だい」と聞かざるを得なかつた。「己れや車屋の黒よ」昂然たるものだ。車屋の黒は此近辺で知らぬ者なき乱暴猫である。然し車屋丈に強い許りでちつとも教育がないから、あまり誰も交際しない。同盟敬遠主義の的になつて居る奴だ。吾輩は彼の名を聞いて少々尻こそばゆき感じを起こすと同時に、一方では少々軽侮の念も生じたのである。吾輩は先づ彼がどの位無学であるかを試して見ようと思つて、左の問答をして見た。

「一体車屋と教師とはどつちがえらいだらう」

「車屋の方が強いに極まつて居らあな、おめえのうちの主人を見ねえ、丸で骨と皮ばかりだぜ」

「君も車屋の猫丈に大分強さうだ。車屋に居ると御馳走が食へると見えるね」

「何、おれなんざ、どこの国へ行つたつて食ひ物に不自由はしねえ積りだ。おめえなんかも茶畠ばかりぐる〳〵廻つて居ねえで、ちつと己の後へくつ附いて来て見ねえ。一と月とたゝねえうちに見違へる様に太れるぜ」

「追つてさう願ふ事にしよう。然し家は教師の方が車屋より大きいのに住んで居る様に思はれる」

「箆棒め、うちなんかいくら大きくたつて腹の足しになるもんか」

彼は大いに肝癪に障つた様子で、寒竹をそいだ様な耳を頻りとぴく附かせてあらゝかに立ち去つた。吾輩が車屋の黒と知己になつたのはこれからである。

其後吾輩は度々黒と邂逅する。邂逅する毎に

彼は車屋相當の氣焰を吐く。先に吾輩が耳にしたといふ不徳事件も實は黒から聞いたのである。

或日例の如く吾輩と黒は暖かい茶畠の中で寢轉びながら色々雜談をして居ると、彼はいつもの自慢話をさも新しさうに繰り返したあとで、吾輩に向つて下の如く質問した。「おめえは今迄に鼠を何疋とつた事がある」智識は黒よりも餘程發達して居る積りだが、腕力と勇氣とに至つては到底黒の比較にはならないと覺悟はして居たものゝ、此問に接した時は、さすがに極りが善くはなかつた。けれども事實は事實で詐る譯には行かないから、吾輩は「實はとらう〳〵と思つてまだ捕らない」と答へた。黒は彼の鼻の先からぴんと突張つて居る長い髭をびり〳〵と震はせて非常に笑つた。元來黒は自慢をする丈にどこか足りない所があつて、彼の氣焰を感心した樣に咽喉をころ〳〵鳴らして謹聽して居れば甚だ御し易い猫である。吾輩は彼と近附になつてから直に此呼吸を飲み込んだから、此場合にもなまじひ己れを辯護して益々形勢をわるくするのも愚である。いつその事、彼に自分の手柄話をしやべらして御茶を濁すに若くはないと思案を定めた。そこで大人しく「君抔は年が年であるから大分とつたらう」とそゝのかして見た。果然彼は墻壁の缺所に吶喊して來た。「たんとでもねえが三四十はとつたらう」とは得意氣なる彼の答であつた。彼は猶語をつゞけて「鼠の百や二百は一人でいつでも引き受けるが、いたちつてえ奴は手に合はねえ。一度いたちに向つて酷い目に逢つた」「へえ成程」と相槌を打つ。黒は大きな眼をぱちつかせて云ふ。「去年の大掃除の時だ。うちの亭主が石灰の袋を持つて椽の下へ這ひ込んだらおめえ、大きないたちの野郎が面喰つて飛び出したと思ひねえ」「ふん」と感心して見せる。「いたちつてけども、何、鼠の少し大きいぐれえのものだ。此畜生つて氣で追つかけてとう〳〵泥溝の中へ追ひ込んだと思ひねえ」「うまく遣つたね」と喝采してやる。「所がおめえ、いざつてえ段になると奴め、最後つ屁をこきやがつた。臭えの臭くねえのつて、夫からつてえものはいたちを見ると胸が惡くならあ」彼は是に至つて恰も去年の臭氣を今猶感ずる如く前足を揚げて鼻の頭を二三遍なで廻した。吾輩も少々氣の毒な感じがする。ちつと景氣を附けてやらうと思つて「然し鼠なら君に睨まれては百年目だらう。君は餘り鼠を捕るのが名人で、鼠計り食ふものだから、そんなに肥つて色つやが善いのだらう」黒の御機嫌をとる爲めの此質問は不思議にも反對の結果を呈出した。彼は喟然として大息していふ。「考げえると詰らねえ。いくら稼いで鼠をとつたつて——一てえ人間程ふてえ奴は世の中に居ねえぜ。人のとつた鼠をみんな取り上げやがつて交番へ持つて行きあがる。交番ぢや誰が捕つたか分らねえから其たんびに五錢宛くれるぢやねえか。うちの亭主なんか己の御蔭でもう壹圓五十錢位儲けて居やがる癖に、碌なものを食はせた事もありやしねえ。おい、人間てものあ體の善い泥棒だぜ」さすが無學の黒も此位の理窟はわかると見えて、頗る怒つた容子で背中の毛を逆立てゝ居る。吾輩は少々氣味が惡くなつたから善い加減に其場を胡魔化して家へ歸つた。此時から吾輩は決して鼠をとるまいと決心した。然し黒の子分になつて鼠以外の御馳走を猟つてあるく事もしなかつた。御馳走を食ふよりも寢て居た方が氣樂でいゝ。教師の家に居ると猫も教師の樣な性質になると見える。用心しないと今に胃弱になるかも知れない。

教師といへば吾輩の主人も近頃に至つては到底水彩畫に於て望みのない事を悟つたものと見

えて、十二月一日の日記にこんな事をかきつけた。

〇〇と云ふ人に今日の會で始めて出逢つた。あの人は大分放蕩をした人だと云ふが、成程通人らしい風采をして居る。かう云ふ質の人は女に好かれるものだから〇〇が放蕩をしたと云ふよりも放蕩をする可く餘儀なくせられたと云ふのが適當であらう。あの人の細君は藝者ださうだ、羨ましい事である。元來放蕩家を惡くいふ人の大部分は放蕩をする資格のないものが多い。又放蕩家を以て自任する連中のうちにも、放蕩する資格のないものが多い。是等は餘儀なくされないのに無理に進んでやるのである。恰も吾輩の水彩畫に於けるが如きもので、到底卒業する氣づかひはない。然るにも關せず、自分丈は通人だと思つて澄まして居る。料理屋の酒を飲んだり待合へ這入るから通人となり得るといふ論が立つなら、吾輩も一廉の水彩畫家になり得る理窟だ。吾輩の水彩畫の如きはかゝない方がましであると同じ様に、愚昧なる通人よりも山出しの大野暮の方が遙かに上等だ。

通人論は一寸首肯しかねる。又藝者の細君を羨ましいなどといふ所は教師としては口にすべからざる愚劣の考へであるが、自己の水彩畫に於ける批評眼丈は慥かなものだ。主人は斯くの如く自知の明あるにも關せず、其自惚心は中々抜けない。中一日置いて十二月四日の日記にこんな事を書いて居る。

昨夜は僕が水彩畫をかいて到底物にならんと思つて、そこらに抛つて置いたのを誰かが立派な額にして欄間に懸けて呉れた夢を見た。偖て額になつた所を見ると、我ながら急に上手になつた。非常に嬉しい。是なら立派なものだと獨りで眺め暮らして居ると、夜が明けて眼が覺めて、矢張り元の通り下手である事が朝日と共に明瞭になつて仕舞つた。

主人は夢の裡迄水彩畫の未練を背負つてあるいて居ると見える。是では水彩畫家は無論夫子の所謂通人にもなれない質だ。

主人が水彩畫を夢に見た翌日、例の金縁眼鏡の美學者が久し振りで主人を訪問した。彼は座につくと、劈頭第一に「畫はどうかね」と口を切つた。主人は平氣な顔をして「君の忠告に從つて寫生を力めて居るが、成程寫生をすると今迄氣のつかなかつた物の形や、色の精細な變化抔がよく分る様だ。西洋では昔から寫生を主張した結果今日の様に發達したものと思はれる。さすがアンドレア・デル・サルトだ」と日記の事はおくびにも出さないで、又アンドレア・デル・サルトに感心する。美學者は笑ひながら「實は君、あれは出鱈目だよ」と頭を掻く。「何が」と主人はまだ騙された事に氣がつかない。「何がつて君の頻りに感服して居るアンドレア・デル・サルトさ。あれは僕の一寸捏造した話だ。君がそんなに眞面目に信じようとは思はなかつたハヽヽヽ」と大喜悦の體である。吾輩は縁側で此對話を聞いて、彼の今日の日記には如何なる事が記さるゝであらうかと豫め想像せざるを得なかつた。此美學者はこんな好い加減な事を吹き散らして人を擔ぐのを唯一の樂しみにして居る男である。彼はアンドレア・デル・サルト事件が主人の情線に如何なる響を傳へたかを毫も顧慮せざるものゝ如く、得意になつて下の様な事を饒舌つた。

「いや時々冗談を言ふと人が眞に受けるので大いに滑稽的美感を挑撥するのは面白い。先達てある學生にニコラス・ニックルビーがギボンに忠告して彼の一世の大著述なる佛國革命史

を佛語で書くのをやめにして英文で出版させたと言つたら、此學生が又馬鹿に記憶のよい男で、日本文學會の演説會で眞面目に僕の話した通りを話したのは滑稽であつた。所が其時の傍聽者は約百名許りであつたが、皆熱心にそれを傾聽して居つた。夫からまだ面白い話がある。先達て或文學者の居る席でハリソンの歷史小說セオファーノの話しが出たから、僕はあれは歷史小說の中で白眉である。ことに女主人公が死ぬ所は鬼氣人を襲ふ樣だと評したら、僕の向うに坐つて居る知らんと云つた事のない先生が、さう〳〵あすこは實に名文だといつた。夫れで僕は此男も矢張り僕同樣此小說を讀んで居らないといふ事を知つた」神經胃弱性の主人は眼を丸くして問ひかけた。「そんな出鱈目をいつて若し相手が讀んで居たらどうする積りだ」恰も人を欺くのは差し支へない、只化の皮があらはれた時に困るぢやないかと感じたものゝ如くである。美學者は少しも動じない。「なに其時や別の本と間違へたとか何とか云ふ許りさ」と云つてけら〳〵笑つて居る。此美學者は金縁の眼鏡は掛けて居るが、其性質が車屋の黑に似た所がある。主人は默つて日の出を輪に吹いて、吾輩にはそんな勇氣はないと云はん許りの顏をして居る。美學者はそれだから畫をかいても駄目だといふ目付で、「然し冗談は冗談だが、畫といふものは實際六づかしいものだよ、レオナルド・ダ・ヴインチは門下生に寺院の壁のしみを寫せと敎へた事があるさうだ。なる程雪隱抔に這入つて雨の漏る壁を餘念なく眺めて居ると、中々うまい模樣畫が自然に出來て居るぜ。君注意して寫生して見給へ、屹度面白いものが出來るから」「又欺すのだらう」「いえ是丈は慥かだよ。實際奇警な語ぢやないか、ダ・ヴインチでもいひさうな事だあね」「成程奇警には相違ないな」と主人は半分降參をした。然し彼はまだ雪隱で寫生はせぬ樣だ。

車屋の黑は其後跛になつた。彼の光澤ある毛は漸々色が褪めて拔けて來る。吾輩が琥珀よりも美しいと評した彼の眼には眼脂が一杯たまつて居る。殊に著しく吾輩の注意を惹いたのは彼の元氣の消沈と其體格の惡くなつた事である。吾輩が例の茶園で彼に逢つた最後の日、どうだと云つて尋ねたら、「いゝ、いたちの最後屁と肴屋の天秤棒には懲り〳〵だ」といつた。

赤松の間に二三段の紅を綴つた紅葉は昔の夢の如く散つて、つくばひに近く代る〴〵花瓣をこぼした紅白の山茶花も殘りなく落ち盡した。三間半の南向の椽側に冬の日脚が早く傾いて木枯の吹かない日は殆んど稀になつてから吾輩の晝寢の時間も狹められた樣な氣がする。

主人は毎日學校へ行く。歸ると書齋に立て籠る。人が來ると、敎師が厭だ〳〵といふ。水彩畫も滅多にかかない。タカヂヤスターゼも功能がないといつてやめて仕舞つた。子供は感心に休まないで幼稚園へかよふ。歸ると唱歌を歌つて、毬をついて、時々吾輩を尻尾でぶら下げる。

吾輩は御馳走も食はないから別段肥りもしないが、先づ〳〵健康で跛にもならずに其日其日を暮らして居る。鼠は決して取らない。おさんは未だに嫌ひである。名前はまだつけて呉れないが、慾をいつても際限がないから生涯此敎師の家で無名の猫で終る積りだ。

二

吾輩は新年來多少有名になつたので、猫ながら一寸鼻が高く感ぜらるゝのは難有い。

元朝早々主人の許へ一枚の繪端書が來た。是は彼の交友某畫家からの年始狀であるが、上部を赤、下部を深綠で塗つて、其眞中に一の動物が蹲踞つて居る所をパステルでかいてある。主人は例の書齋で此繪を横から見たり、

遠くから眺めたりして、うまい色だなといふ。既に一應感服したものだから、もうやめにするかと思ふと、矢張り横から見たり、縦から見たりして居る。からだを捩ぢ向けたり、手を伸ばして年寄が三世相を見る様にしたり、又は窓の方へむいて鼻の先迄持つて來たりして見て居る。早くやめて呉れないと、膝が揺れてたまらない。漸くの事で身體が餘り苦しくなつたと思つたら、小さな聲で一體何をかいたのだらうといふ。主人は有繫吾輩の色には感服したが、かいてある動物の正體が分らぬので、さつきから苦心をしたものと見える。そんな分らぬ肖像を書かと思ひながら、寝て居た眼を上品に半ば開いて、落ち附き拂つて見ると紛れもない自分の肖像だ。主人の様にアンドレア・デル・サルトを極め込んだものでもあるまいが、畫家丈に形體も色彩もちやんと整つて出來て居る。誰が見たつて猫に相違ない。少し眼識のあるものなら、猫の中でも他の猫ぢやない、吾輩である事が判然とわかる様に立派に描いてある。この位明瞭な事を分らずにかく迄苦心するかと思ふと、少し人間が氣の毒になる。出來る事なら其繪が吾輩であるといふ事を知らしてやりたい。吾輩であるといふ事は好し分らないにしても、せめて猫であるといふ事丈は分らしてやりたい。然し人間といふものは到底吾輩猫族の言語を解し得る位に天の恵に浴して居らん動物であるから、殘念ながら其儘にして置いた。

一寸讀者に斷つて置きたいが、元來人間が何ぞといふと猫々と、事もなげに輕侮の口調を以て吾輩を評價する癖があるは甚だよくない。人間の糟から牛と馬が出來て、牛と馬の糞から猫が製造された如く考へるのは、自分の無智に心附かんで高慢な顔をする教師抔には有り勝ちの事でもあらうが、はたから見て餘り見つともいゝものぢやない。いくら猫だつて、さう粗末簡便には出來ぬ。よそ目には一列一體、平等無差別、どの猫も自家固有の特色抔はない様であるが、猫の社會に這入つて見ると中々複雜なもので、十人十色といふ人間界の語は其儘こゝにも應用が出來るのである。目附でも、鼻附でも、毛並でも、足並でも、みんな違ふ。髭の張り具合から耳の立ち按排、尻尾の垂れ加減に至る迄同じものは一つもない。器量、不器量、好き嫌ひ、粋無粋の數を盡して千差萬別といつても差し支へない位である。其樣に判然たる區別が存して居るにも關はらず、人間の眼は只向上とか何とかいつて、空ばかり見て居るものだから、吾等の性質は無論、相貌の末を識別する事すら到底出來ぬのは氣の毒だ。同類相求むとは昔からある語だそうだが、其通り、餅屋は餅屋、猫は猫で、猫の事なら矢張り猫でなくては分らぬ。いくら人間が發達したつて是許りは駄目である。況んや實際をいふと彼等が自ら信じて居る如くえらくも何ともないのだから猶更六づかしい。又況んや同情に乏しい吾輩の主人の如きは、相互を殘りなく解するといふが愛の第一義であるといふことすら分らない男なのだから仕方がない。彼は性の惡い牡蠣の如く書齋に吸ひ附いて、嘗て外界に向つて口を開いた事がない。それで自分丈は頗る達觀した様な面構へをして居るのは一寸可笑しい。達觀しない證據には、現に吾輩の肖像が眼の前にあるのに少しも悟つた様子もなく、今年は征露の第二年目だから大方熊の畫だらう抔と氣の知れぬことをいつて澄まして居るのでもわかる。

吾輩が主人の膝の上で眼をねむりながら斯く考へて居ると、やがて下女が第二の繪端書を持つて來た。見ると活版で、舶來の猫が四五疋ずらりと行列してペンを握つたり書物を開いたり勉強をして居る。その内の一疋は席を離れ

て机の角で西洋の猫じや猫じやを躍つて居る。其上に日本の墨で「吾輩は猫である」と黒々とかいて、右の側に、書を讀むや躍るや猫の春一日といふ俳句さへ認められてある。是は主人の舊門下生より來たので、誰が見たつて一見して意味がわかる筈であるのに、迂濶な主人はまだ悟らないと見えて不思議さうに首を捻つて、はてな、今年は猫の年かなと獨り言をいつた。吾輩が是程有名になつたのを未だ氣が着かずに居ると見える。

所へ下女が又第三の端書を持つてくる。今度は繪端書ではない。恭賀新年とかいて、傍に乍恐縮かの猫へも宜しく御傳聲奉願上候とある。如何に迂遠な主人でも、かう明らさまに書いてあれば分るものと見えて、漸く氣が附いた樣にフンと云ひながら吾輩の顏を見た。其眼付が今迄とは違つて多少尊敬の意を含んで居る樣に思はれた。今迄世間から存在を認められなかつた主人が急に一個の新面目を施したのも、全く吾輩の御蔭だと思へば、此位の眼付は至當だらうと考へる。

折柄門の格子がチリン、チリン、チリヽヽヽンと鳴る。大方來客であらう。來客なら下女が取次に出る。吾輩は肴屋の梅公がくる時の外は出ない事に極めて居るのだから、平氣で、もとの如く主人の膝に坐つて居つた。すると主人は高利貸にでも飛び込まれた樣に不安な顏付をして玄關の方を見る。何でも年賀の客を受けて酒の相手をするのが厭らしい。人間も此位偏屈になれば申し分はない。そんなら早くから外出でもすればよいのに、夫程の勇氣も無い。

愈牡蠣の根性をあらはして居る。しばらくすると下女が來て、寒月さんが御出でになりましたといふ。此寒月といふ男は矢張り主人の舊門下生であつたさうだが、今では學校を卒業して、何でも主人より立派になつて居るといふ話である。此男がどういふ譯か、よく主人の所へ遊びに來る。來ると自分を戀つて居る女が有りさうな、無ささうな、世の中が面白さうな、詰まらなさうな、凄い樣な艶つぽい樣な文句許り並べては歸る。主人の樣なしなびかけた人間を求めて、態々こんな話をしに來るからして合點が行かぬが、あの牡蠣的主人がそんな談話を聞いて時々相槌を打つのは猶面白い。

「暫らく御無沙汰をしました。實は去年の暮から大いに活動して居るものですから、出よう出ようと思つても、つい此方角へ足が向かないので」と羽織の紐をひねくりながら謎見た樣な事をいふ。「どつちの方角へ足が向くかね」と主人は眞面目な顏をして、黒木綿の紋付羽織の袖口を引つ張る。此羽織は木綿でゆきが短かい、下からべんべら物が左右へ五分位宛はみ出して居る。「エヘヽヽ少し違つた方角で」と寒月君が笑ふ。見ると今日は前齒が一枚缺けて居る。「君齒をどうかしたかね」と主人は問題を轉じた。「えゝ實はある所で椎茸を食ひましてね」「何を食つたつて？」「其の、少し椎茸を食つたんで。椎茸の傘を前齒で噛み切らうとしたらぼろりと齒が缺けましたよ」「椎茸で前齒がかけるなんざ、何だか爺々臭いね。俳句にはなるかも知れないが、戀にはならん樣だな」と平手で吾輩の頭を輕く叩く。「あゝ其猫が例のですか、中々肥つてるぢやありませんか、夫なら車屋の黒にだつて負けさうもありませんね、立派なものだ」と寒月君は大いに吾輩を賞める。「近頃大分大きくなつたのさ」と自慢さうに頭をぽか〳〵なぐる。賞められたのは得意であるが頭が少々痛い。「一昨夜もちよいと合奏會をやりましてね」と寒月君は又話をもとへ戻す。「どこで？」「どこでも、そりや御聞きにならんでもよいでせう。ヴアイオリンが三挺とピヤノの伴奏で中々面白かつたです。ヴアイオリンも三挺位になると下手でも聞かれるもの

ですね」二人は女で、私が其中へまじりましたが、自分でもよく彈けたと思ひました」「ふん、そして其女といふのは何者かね」と主人は羨ましさうに問ひかける。元來主人は平常枯木寒巖の樣な顔附はして居るものゝ、實の所は決して婦人に冷淡な方ではない。嘗て西洋の或小説を讀んだら、其中にある一人物が出て來て、其が大抵の婦人には必ずちよつと惚れる。勘定をして見ると往來を通る婦人の七割弱には戀着するといふ事が諷刺的に書いてあつたのを見て、これは眞理だと感心した位な男である。そんな浮氣な男が何故牡蠣的生涯を送つて居るかと云ふのは吾輩猫抔には到底分らない。或人は失戀の爲だとも云ふし、或人は胃弱のせいだとも云ふし、又或人は金がなくて臆病な性質だからと云ふ。どつちにしたつて明治の歷史に關係する程な人物でもないのだから構はない。然し寒月君の女連れを羨まし氣に尋ねた事丈は事實である。寒月君は面白さうに口取の蒲鉾を箸で挾んで半分前齒で食ひ切つた。吾輩は又缺けはせぬかと心配したが、今度は大丈夫であつた。「なに二人とも去る所の令孃ですよ、御存じの方ぢやありません」と餘所々々しい返事をする。「ナール」と主人は引つ張つたが「程」を略して考へて居る。寒月君はもう善い加減な時分だと思つたものか、「どうも好い天氣ですな、御閑なら御一所に散歩でもしませうか、旅順が落ちたので市中は大變な景氣ですよ」と促して見る。主人は旅順の陷落より女連れの身元を聞きたいと云ふ顔で、しばらく考へ込んで居たが、漸く決心をしたものと見えて、「それぢや出るとしよう」と思ひ切つて立つ。矢張り黒木綿の紋附羽織に、兄の記念とかいふ二十年來着古した結城紬の綿入を着たまゝである。いくら結城紬が丈夫だつて、かう着つゞけではたまらない。所々が薄くなつて、日に透かして見ると裏からつぎを當てた針の目が見える。主人の服裝には師走も正月もない。ふだん着も餘所ゆきもない。出るときは懷手をしてぶらりと出る。外に着る物がないからか、有つても面倒だから着換へないのか、吾輩には分らぬ。但し此丈は失戀の爲とも思はれない。

兩人が出て行つたあとで、吾輩は一寸失敬して寒月君の食ひ切つた蒲鉾の殘りを頂戴した。吾輩も此頃では普通一般の猫ではない。先づ桃川如燕以後の猫か、グレーの金魚を偸んだ猫位の資格は充分あると思ふ。車屋の黒抔は固より眼中にない。蒲鉾の一切位頂戴したつて人から彼此云はれる事もなからう。それに此の人目を忍んで間食するといふ癖は、何も吾輩猫族に限つた事ではない。うちのお三抔はよく細君の留守中に餅菓子抔を失敬しては頂戴し、頂戴しては失敬して居る。お三計りぢやない。現に上品な仕附を受けつゝあると細君から吹聽せられて居る小兒ですら此傾向がある。四五日前のことであつたが、二人の子供が馬鹿に早くから眼を覺まして、まだ主人夫婦の寢て居る間に、對ひ合うて食卓に着いた。彼等は毎朝主人の食ふ麵麭の幾分に、砂糖をつけて食ふのが例であるが、此日は丁度砂糖壺が卓の上に置かれて匙さへ添へてあつた。いつもの樣に砂糖を分配してくれるものがないので、大きい方がやがて壺の中から一匙の砂糖をすくひ出して自分の皿の上へあけた。すると小さいのが姉のした通り同分量の砂糖を同方法で自分の皿の上にあけた。暫らく兩人は睨み合つて居たが、大きいのが又匙をとつて一杯をわが皿の上に加へた。小さいのもすぐ匙をとつてわが分量を姉と同一にした。すると姉が又一杯すくつた。妹も負けずに一杯を附加した。姉が又壺へ手を懸ける、妹が又匙をとる。見てる間に一杯、一杯一杯と重なつて、遂には兩人の皿には山盛

の砂糖が堆くなつて、壺の中には一匙の砂糖も餘つて居らぬ樣になつたとき、主人が寢ぼけ眼を擦りながら室を出て、切角しやくひ出した砂糖を元の壺の中へ入れて仕舞つた。こんな所を見ると、人間は利己主義から割り出した公平といふ念は猫より優つて居るかも知れぬが、智慧は却つて猫より劣つて居る樣だ。そんなに山盛にしないうちに早く甞めて仕舞へばいいにと思つたが、例の如く、吾輩の言ふ事抔は通じないのだから、氣の毒ながら御櫃の上から默つて見物して居た

寒月君と出掛けた主人はどこをどう歩いたものか、其晩遲く歸つて來て、翌日食卓についたのは九時頃であつた。例の御櫃の上から拜見して居ると、主人はだまつて雜煮を食つて居る。代へては食ひ、代へては食ふ。餅の切れは小さいが、何でも六切か七切食つて、最後の一切れを椀の中へ殘して、もうよさうと箸を置いた。他人がそんな我儘をすると、中々承知しないのであるが、主人の威光を振り廻して得意なる彼は、濁つた汁の中に焦げ爛れた餅の死骸を見て平氣で濟まして居る。細君が袋戸の奧からタカヂヤスターゼを出して卓の上に置くと、主人は「それは利かないから飮まん」といふ。「でもあなた、澱粉質のものには大變功能があるさうですから、召し上がつたらいいでせう」と飮ませたがる。「澱粉だらうが何だらうが駄目だよ」と頑固に出る。「あなたはほんとに厭きつぽい」と細君が獨り言の樣にいふ。「厭きつぽいのぢやない、藥が利かんのだ」「それだつて先達て中は大變によく利く〳〵と仰しやつて毎日々々上がつたぢやありませんか」「此間うちは利いたのだよ、此頃は利かないのだよ」と對句の樣な返事をする。「そんなに飮んだり止めたりしちや、いくら功能のある藥でも利く氣遣ひはありません。もう少し辛抱が能くなくつちやあ胃弱なんぞは外の病氣たあ違つて直らないわねえ」と御盆を持つて控へたお三を顧る。「それは本當の所で御座います。もう少し召し上がつて御覽にならないと、とても善い藥か惡い藥かわかりますまい」とお三は一も二もなく細君の肩を持つ。「何でもいい、飮まんのだから飮まんのだ、女なんかに何がわかるものか、默つて居ろ」「どうせ女ですわ」と細君がタカヂヤスターゼを主人の前へ突き附けて、是非詰腹を切らせようとする。主人は何にも云はず立つて書齋へ這入る。細君とお三は顏を見合はせてにや〳〵と笑ふ。こんなときに後からくつ附いて行つて膝の上へ乘ると、大變な目に逢はされるから、そつと庭から廻つて書齋の椽側へ上がつて障子の隙から覗いて見ると、主人はエピクテタスとか云ふ人の本を披いて見て居た。もしそれが平常の通りわかるなら、一寸えらい所がある。五六分すると其本を叩き附ける樣に机の上へ抛り出す。大方そんな事だらうと思ひながら猶注意して居ると、今度は日記帳を出して下の樣な事を書きつけた。

寒月と、根津、上野、池の端、神田邊を散歩、池の端の待合の前で藝者が裾模樣の春着をきて羽根をついて居た。衣裝は美しいが顏は頗るまづい。何となくうちの猫に似て居た。

何も顏のまづい例に特に吾輩を出さなくつても、よささうなものだ。吾輩だつて喜多床へ行つて顏さへ剃つて貰やあ、そんなに人間と異つた所はありやしない。人間はかう自惚れて居るから困る。

寶丹の角を曲がると、又一人藝者が來た。是は脊のすらりとした撫肩の恰好よく出來上がつた女で、着て居る薄紫の衣服も素直に着こなされて上品に見えた。白い齒を出して笑ひながら「源ちやん昨夕は——つ

い忙しかつたもんだから」と云つた。但し其聲は旅鴉の如く皺枯れて居つたので、折角の風采も大いに下落した様に感ぜられたから、所謂源ちやんなるものゝ如何なる人なるかを振り向いて見るも面倒になつて、懐手の儘御成道へ出た。寒月は何だとなくそはそはして居る如く見えた。

人間の心理程解し難いものはない。此主人の今の心は怒つて居るのだか、浮かれて居るのだか、又は哲人の遺書に一道の慰安を求めつゝあるのか、ちつとも分らない。世の中を冷笑して居るのか、世の中へ交りたいのだか、くだらぬ事に肝癪を起こして居るのか、物外に超然として居るのだか、薩張り見當が附かぬ。猫抔はそこへ行くと單純なものだ。食ひ度ければ食ひ、寐たければ寐る、怒るときは一生懸命に怒り、泣くときは絶體絶命に泣く。第一日記抔といふ無用のものは決してつけない。つける必要がないからである。主人の様に裏表のある人間は日記でも書いて世間に出されない自己の面目を暗室内に發揮する必要があるかも知れないが、我等猫屬に至ると行住坐臥、行屎送尿、悉く眞正の日記であるから、別段そんな面倒な手數をして、己の眞面目を保存するには及ばぬと思ふ。日記をつけるひまがあるなら椽側に寐て居る迄の事さ。

神田の某亭で晩餐を食ふ。久し振りで正宗を二三杯飲んだら今朝は胃の具合が大變いゝ。胃弱には晩酌が一番だと思ふ。タカヂヤスターゼは無論いかん。誰が何と云つても駄目だ。どうしたつて利かないものは利かないのだ。

無暗にタカヂヤスターゼを攻撃する。獨りで喧嘩をして居る様だ。今朝の肝癪がちよつと此所へ尾を出す。人間の日記の本色は斯う云ふ邊に存するのかも知れない。

先達て〇〇は朝飯を廢すると胃がよくなると云うたから二三日朝飯をやめて見たが、腹がぐうぐう鳴る許りで功能はない。△△は是非香の物を斷てと忠告した。彼の說によると凡て胃病の原因は漬物にある。漬物さへ斷てば胃病の源を涸らす譯だから本復は疑ひなしといふ論法であつた。夫から一週間許り香の物に箸を觸れなかつたが、別段の驗も見えなかつたから、近頃は又食ひ出した。××に聞くとそれは按腹揉療治に限る。但し普通のではゆかぬ。皆川流といふ古流な揉み方で一二度やらせれば大抵の胃病は根治出來る。安井息軒も大變此按摩術を愛して居た。坂本龍馬の様な豪傑でも時々は治療をうけたと云ふから、早速上根岸迄出掛けて揉まして見た。所が骨を揉まなければ癒らぬとか、臟腑の位置を一度顚倒しなければ根治がしにくいとかいつて、それはそれは殘酷な揉み方をやる。後で身體が綿の様になつて昏睡病にかゝつた様な心持ちがしたので、一度で閉口してやめにした。A君は是非固形體を食ふなといふ。夫から、一日牛乳許り飲んで暮らして見たが、此時は腸の中でどぼりどぼり音がして大水でも出た様に思はれて終夜眠れなかつた。B氏は横膈膜で呼吸して内臟を運動させれば自然と胃の働きが健全になる譯だから試しにやつて御覽といふ。是も多少やつたが何となく腹中が不安で困る。夫に時々思ひ出した様に一心不亂にかゝりはするものゝ五六分立つと忘れて仕舞ふ。忘れまいとすると横膈膜が氣になつて本を讀む事も文章をかく事も出來ぬ。美學者の迷亭が此體を見て、産氣のついた男ぢやあるまいし止すがいゝと冷かしたから、此頃は廢してしまつた。C先生は蕎

麥を食つたらよからうと云ふから、早速かけともりをかはる〴〵食つたが、此は腹が下る許りで何等の功能もなかつた。余は年來の胃弱を直す爲に出來得る限りの方法を講じて見たが凡て駄目である。只昨夜寒月と傾けた三杯の正宗は慥かに利目がある。是からは毎晩二三杯宛飮む事にしよう。

これも決して長く續く事はあるまい。主人の心は吾輩の眼球の樣に間斷なく變化して居る。何をやつても永持ちのしない男である。其上日記の上で胃病をこんなに心配して居る癖に、表向は大いに痩我慢をするから可笑しい。先達て其友人で某といふ學者が尋ねて來て、一種の見地から凡ての病氣は父祖の罪惡と自己の罪惡の結果に外ならないと云ふ議論をした。大分研究したものと見えて、條理が明晰で秩序が整然として立派な說であつた。氣の毒ながらうちの主人抔は到底之を反駁する程の頭腦も學問もないのである。然し自分が胃病で苦しんで居る際だから、何とかかんとか辯解をして自己の面目を保たうと思つた者と見えて、「君の說は面白いが、あのカーライルは胃弱だつたぜ」と恰もカーライルが胃弱だから自分の胃弱も名譽であると云つた樣な、見當違ひの挨拶をした。すると友人は「カーライルが胃弱だつて、胃弱の病人が必ずカーライルにはなれないさ」と極め附けたので主人は默然として居た。かくの如く虛榮心に富んで居るものゝ實際は矢張り胃弱でない方がいゝと見えて、今夜から晚酌を始めるなどといふのは一寸滑稽だ。考へて見ると今朝雜煮をあんなに澤山食つたのも昨夜寒月君と正宗をひつくり返した影響かも知れない。吾輩も一寸雜煮が食つて見たくなつた。

吾輩は猫であるが大抵のものは食ふ。車屋の黑の樣に橫丁の肴屋迄遠征をする氣力はないし、新道の二絃琴の師匠の所の三毛の樣に贅澤は無論云へる身分でない。從つて存外嫌ひは少い方だ。子供の食ひこぼした麵麭も食ふし、餅菓子の餡もなめる。香の物は頗るまづいが經驗の爲め澤庵を二切許りやつた事がある。食つて見ると妙なもので大抵の物は食へる。あれは嫌だ、是は嫌だと云ふのは贅澤な我儘で、到底教師の家に居る猫抔の口にすべき所でない。主人の話しによると佛蘭西にバルザックといふ小說家があつたさうだ。此男が大の贅澤屋で――尤も是は口の贅澤屋ではない、小說家丈に文章の贅澤を盡したといふ事である。バルザックが或日自分の書いて居る小說中の人間の名をつけようと思つて色々つけて見たが、どうしても氣に入らない。所へ友人が遊びに來たので一所に散步に出掛けた。友人は固より何も知らずに連れ出されたのであるが、バルザックは兼て自分の苦心して居る名を目附けようといふ考へだから、往來へ出ると何もしないで店先の看板ばかり見て步行いて居る。所が矢張り氣に入つた名がない。友人を連れて無暗にあるく。友人は譯がわからずにくつ附いて行く。彼等は遂に朝から晚迄巴理を探檢した。其歸りがけにバルザックは不圖ある裁縫屋の看板が目についた。見ると看板にマーカスといふ名がかいてある。バルザックは手を拍つて「是だ〳〵是に限る。マーカスは好い名ぢやないか。マーカスの上へZといふ頭文字をつける、すると申し分のない名が出來る。Zでなくてはいかん。Z. Marcus は實にうまい。どうも自分で作つた名はうまくつけた積りでも何となく故意とらしい所があつて面白くない。漸くの事で氣に入つた名が出來た」と、友人の迷惑は丸で忘れて、一人嬉しがつたといふが、小說中の人間の名前をつけるに一日巴理を探檢しなくてはならない樣では隨分手數のかかる話だ。贅澤も此位出來れば結構なものだが、吾輩の樣に牡蠣的主人を

持つ身の上ではとてもそんな氣は出ない。何でもいゝ、食へさへすれば、といふ氣になるのも境遇の然らしむる所であらう。だから今雜煮が食ひ度くなつたのも決して贅澤の結果ではない。何でも食へる時に食つて置かうといふ考へから、主人の食ひ剩した雜煮がもしや臺所に殘つて居はすまいかと思ひ出したからである。……臺所へ廻つて見る。

今朝見た通りの餅が、今朝見た通りの色で椀の底に膠着して居る。白狀するが餅といふものは今迄一返も口に入れた事がない。見るとうまさうにもあるし、又少しは氣味がわるくもある。前足で上にかゝつて居る菜つ葉を掻き寄せる。爪を見ると餅の上皮が引き掛かつてねばねばする。嗅いで見ると釜の底の飯を御櫃へ移す時の樣な香がする。食はうかな、やめようかな、とあたりを見廻す。幸か不幸か誰も居ない。お三は暮も春も同じ樣な顏をして羽根をついて居る。子供は奥座敷で「何と仰しやる兎さん」を歌つて居る。食ふとすれば今だ。もし此機をはづすと來年迄は餅といふものゝ味を知らずに暮らして仕舞はねばならぬ。吾輩は此刹那に猫ながら一の眞理を感得した。「得難き機會は凡ての動物をして、好まざる事をも敢てせしむ。」吾輩は實を云ふとそんなに雜煮を食ひ度くはないのである。否、椀底の樣子を熟視すればする程氣味が惡くなつて、食ふのが厭になつたのである。此時もしお三でも勝手口を開けたなら、奥の子供の足音がこちらへ近附くのを聞き得たなら、吾輩は惜し氣もなく椀を見捨てたらう。しかも雜煮の事は來年迄念頭に浮ばなかつたらう。所が誰も來ない、いくら躊躇して居ても誰も來ない。早く食はぬか食はぬかと催促される樣な心持ちがする。吾輩は椀の中を覗き込み乍ら、早く誰か來てくれゝばいゝと念じた。矢張り誰も來てくれない。吾輩はとう〳〵雜煮を食はなければならぬ。最後にからだ全體の重量を椀の底へ落とす樣にして、あぐりと餅の角を一寸許り食ひ込んだ。此位力を込めて食ひ附いたのだから、大抵なものなら嚙み切れる譯だが、驚いた！　もうよからうと思つて齒を引かうとすると引けない。もう一返嚙み直さうとすると動きがとれない。餅は魔物だなと疳づいた時は既に遲かつた。沼へでも落ちた人が足を拔かうと焦慮る度にぶく〳〵深く沈む樣に、嚙めば嚙む程口が重くなる、齒が動かなくなる。齒答へはあるが、齒答へがある丈でどうしても始末をつける事が出來ない。美學者迷亭先生が嘗て吾輩の主人を評して、君は割り切れない男だといつた事があるが、成程うまい事をいつたものだ。此餅も主人と同じ樣にどうしても割り切れない。嚙んでも嚙んでも、三で十を割る如く盡未來際方のつく期はあるまいと思はれた。此煩悶の際吾輩は覺えず第二の眞理に逢着した。「凡ての動物は直覺的に事物の適不適を豫知す。」眞理は既に二つ迄發明したが、餅がくつ附いて居るので毫も愉快を感じない。齒が餅の肉に吸收されて、拔ける樣に痛い。早く食ひ切つて逃げないとお三が來る。子供の唱歌もやんだ樣だ、屹度臺所へ馳け出して來るに相違ない。煩悶の極尻尾をぐる〳〵振つて見たが何等の功能もない。耳を立てたり寢かしたりしたが駄目である。考へて見ると耳と尻尾は餅と何等の關係もない。要するに振り損の、立て損の、寢かし損であると氣が附いたからやめにした。漸くの事是は前足の助けを借りて餅を拂ひ落すに限ると考へ附いた。先づ右の方をあげて口の周圍を撫で廻す。撫でた位で割り切れる譯のものではない。今度は左の方を伸ばして口を中心として急劇に圓を劃して見る。そんな呪で魔は落ちない。辛防が肝心だと思つて左右交る〴〵に動かしたが、矢張り依然とし

て齒は餅の中にぶら下がつて居る。えゝ面倒だと兩足を一度に使ふ。すると不思議な事に此時丈は後足二本で立つ事が出來た。何だか猫でない樣な感じがする。猫であらうが、あるまいが、かうなつた日にやあ構ふものか、何でも餅の魔が落ちる迄やるべしといふ意氣込みで無茶苦茶に顏中引つ掻き廻す。前足の運動が猛烈なので動ともすると中心を失つて倒れかゝる。倒れかゝる度に後足で調子をとらなくてはならぬから、一つ所に居る譯にも行かんので、臺所中あちら、こちらと飛んで廻る。我ながらよくこんなに器用に起つて居られたものだと思ふ。第三の眞理が驀地に現前する。「危きに臨めば平常なし能はざる所のものを爲し能ふ。之を天祐といふ。」幸ひに天祐を享けたる吾輩が一生懸命餅の魔と戰つて居ると、何だか足音がして奧より人が來る樣な氣合である。こゝで人に來られては大變だと思つて、愈躍起となつて臺所をかけ廻る。足音は段々近附いてくる。あゝ殘念だが天祐が少し足りない。とう／＼子供に見附けられた。「あら猫がお雜煮を食べて踊を踊つて居る」と大きな聲をする。此聲を第一に聞きつけたのがおさんである。羽根も羽子板も打ち遣つて勝手から「あらまあ」と飛び込んで來る。細君は縮緬の紋附で「いやな猫ねえ」と仰せられる。主人さへ書齋から出て來て「此馬鹿野郎」といつた。面白い／＼といふのは子供計りである。さうしてみんな申し合はせた樣にげら／＼笑つて居る。腹は立つ、苦しくはある、踊はやめる譯にゆかぬ、弱つた。漸く笑ひがやみさうになつたら、五つになる女の子が「おかあ樣、猫も隨分ね」といつたので狂瀾を既倒に何とかするといふ勢で又大變笑はれた。人間の同情に乏しい實例も大分見聞したが、此時程恨めしく感じた事はなかつた。遂に天祐もどつかへ消え失せて、在來の通り四つ這ひになつて、眼を白黒くするの醜態を演ずる迄に閉口した。さすが見殺しにするのも氣の毒と見えて「まあ餅をとつて遣れ」と主人がお三に命ずる。お三はもつと踊らせようぢやありませんかといふ眼附で細君を見る。細君は踊は見たいが、殺して迄見る氣はないのでだまつて居る。「取つてやらんと死んで仕舞ふ、早くとつて遣れ」と主人は再び下女を顧る。お三は御馳走を半分食べかけて夢から起こされた時の樣に、氣のない顏をして餅をつかんでぐいと引く。寒月君ぢやないが前齒がみんな折れるかと思つた。どうも痛いの痛くないのつて、餅の中へ堅く食ひ込んで居る齒を情容赦もなく引つ張つたから堪らない。吾輩が「凡ての安樂は困苦を通過せざるべからず」と云ふ第四の眞理を經驗して、けろ／＼とあたりを見廻した時には、家人は既に奧座敷へ這入つて仕舞つて居つた。

こんな失敗をした時には内に居てお三なんぞに顏を見られるのも何となくばつが惡い。いつその事氣を易へて新道の二絃琴の御師匠さんの所の三毛子でも訪問しようと臺所から裏へ出た。三毛子は此近邊で有名な美貌家である。吾輩は猫には相違ないが物の情は一通り心得て居る。うちで主人の苦い顏を見たり、お三の劍突を食つて氣分が勝れん時は必ず此異性の朋友の許を訪問して色々な話しをする。すると、いつの間にか心が晴々して今迄の心配も苦勞も何もかも忘れて、生れ變つた樣な心持になる。女性の影響といふものは實に莫大なものだ。杉垣の隙から、居るかなと思つて見渡すと、三毛子は正月だから首輪の新しいのをして行儀よく緣側に坐つて居る。其背中の丸さ加減が言ふに言はれん程美しい。曲線の美を盡して居る。尻尾の曲り加減、足の折り具合、物憂げに耳をちよい／＼振る景色なども到底形容が出來ん。ことによく日の當たる所に暖かさうに、

品よく控へて居るものだから、身體は靜肅端正の態度を有するにも關はらず、天鵞絨を欺く程の滑らかな滿身の毛は春の光を反射して風なきにむら〳〵と微動する如く思はれる。吾輩はしばらく恍惚として眺めて居たが、やがて我に歸ると同時に、低い聲で「三毛子さん〳〵」と前足で招いた。三毛子は「あら先生」と椽を下りる。赤い首輪につけた鈴がちやらちやらと鳴る。おや正月になつたら鈴迄つけたな、どうもいゝ音だと感心して居る間に、吾輩の傍に來て「あら先生、御目出度う」と尾を左へ振る。吾等猫屬間で御互に挨拶をするときには尾を棒の如く立てて、それを左へぐるりと廻すのである。町内で吾輩を先生と呼んで呉れるのは此三毛子計りである。吾輩は前回斷つた通りまだ名はないのであるが、教師の家に居るものだからせめて三毛子丈は尊敬して先生々々といつて呉れる。吾輩も先生と云はれて滿更惡い心持ちもしないから、はい〳〵と返事をして居る。「やあ御目出度う、大分立派に御化粧が出來ましたね」「えゝ去年の暮御師匠さんに買つて頂いたの、宜いでせう」とちやら〳〵鳴らして見せる。「成程善い音ですな、吾輩抔は生れてから、そんな立派なものは見た事がないですよ」「あらいやだ、みんなぶら下げるのよ」と又ちやら〳〵鳴らす。「いゝ音でせう、あたし嬉しいわ」とちやら〳〵ちやら〳〵續け樣に鳴らす。「あなたのうちの御師匠さんは大變あなたを可愛がつて居ると見えますね」と吾身に引きくらべて暗に欣羨の意を洩らす。三毛子は無邪氣なものである。「ほんとよ、丸で自分の子供の樣よ」とあどけなく笑ふ。猫だつて笑はないとは限らない。人間は自分より外に笑へるものが無い樣に思つて居るのは間違ひである。吾輩が笑ふのは鼻の孔を三角にして咽喉佛を震動させて笑ふのだから人間にはわからぬ筈である。「一體あなたの所の御主人は何ですか」「あら御主人だつて、妙なのね。御師匠さんだわ。二絃琴の御師匠さんよ」「それは吾輩も知つて居ますがね。その御身分は何なんです。何れ昔は立派な方なんでせう」「えゝ」

　君を待つ間の姫小松……

障子の内で御師匠さんが二絃琴を彈き出す。「宜い聲でせう」と三毛子は自慢する。「宜い樣だが、吾輩にはよくわからん。全體何といふものですか」「あれ？　あれは何とかつてものよ。御師匠さんはあれが大好きなの。……御師匠さんはあれで六十二よ。隨分丈夫だわね」六十二で生きて居る位だから丈夫と云はねばなるまい。吾輩は「はあ」と返事をした。少し間が拔けた樣だが別に名答も出て來なかつたから仕方がない。「あれでも、もとは身分が大變よかつたんだつて。いつでも左樣仰しやるの」「へえ元は何だつたんです」「何でも天璋院樣の御祐筆の妹の御嫁に行つた先の御つかさんの甥の娘なんだつて」「何ですつて？」「あの天璋院樣の御祐筆の妹の御嫁にいつた……」「成程。少し待つて下さい。天璋院樣の妹の御祐筆の……」「あらさうぢやないの、天璋院樣の御祐筆の妹の……」「よろしい分りました、天璋院樣のでせう」「えゝ」「御祐筆のでせう」「さうよ」「御嫁に行つた」「妹の御嫁に行つたですよ」「さう〳〵間違つた。妹の御嫁に入つた先の」「御つかさんの甥の娘なんですとさ」「御つかさんの甥の娘なんですか」「えゝ。分つたでせう」「いゝえ。何だか混雜して要領を得ないですよ。詰る所天璋院樣の何になるんですか」「あなたも餘つ程分らないのね。だから天璋院樣の御祐筆の妹の御嫁に行つた先の御つかさんの甥の娘なんだつて、さつきつから言つてるんぢやありませんか」「それはすつかり分つて居るんですがね」「夫が分りさへすればいゝんでせう」

「えゝ」と仕方がないから降參をした。吾々は時とすると理詰めの虚言を吐かねばならぬ事がある。

障子の中で二絃琴の音がぱつたりやむと、御師匠さんの聲で「三毛や三毛や、御飯だよ」と呼ぶ。三毛子は嬉しさうに「あら御師匠さんが呼んで入らつしやるから、私歸るわ、よくつて?」わるいと云つたつて仕方がない。「それぢや又遊びに入らつしやい」と鈴をちやら〳〵鳴らして庭先迄かけて行つたが、急に戻つて來て「あなた大變色が惡くつてよ、どうかしやしなくつて」と心配さうに問ひかける。まさか雜煮を食つて踊を踊つたとも云はれないから、「何、別段の事もありませんが、少し考へ事をしたら頭痛がしてね。あなたと話しでもしたら直るだらうと思つて實は出掛けて來たのですよ」「さう、御大事になさいまし。左樣なら」少しは名殘惜し氣に見えた。是で雜煮の元氣も皆張りと回復した。いゝ心持ちになつた。歸りに例の茶園を通り拔けようと思つて霜柱の融けかゝつたのを踏みつけながら建仁寺の崩れから顔を出すと、又車屋の黒が枯菊の上に背を山にして欠伸をして居る。近頃は黒を見て恐怖する樣な吾輩ではないが、話しをされると面倒だから知らぬ顔をして行き過ぎようとした。黒の性質として他が己を輕侮したと認むるや否や決して默つて居ない。「おい、名なしの權兵衛、近頃ぢや乙う高く留まつてるぢやあねえか。いくら教師の飯を食つたつて、そんな高慢ちきな面あするねえ。人つけ面白くもねえ」黒は吾輩の有名になつたのを、まだ知らんと見える。説明して遣りたいが到底分る奴ではないから、先づ一應の挨拶をして出來得る限り早く御免蒙るに若くはないと決心した。「いや黒君、御目出度う。不相變元氣がいゝね」と尻尾を立てゝ左へくるりと廻す。黒は尻尾を立てたぎり挨拶もしない。「何、御目出てえ? 正月で御目出たけりや、御めえなんざあ年が年中御目出てえ方だらう。氣をつけろい、此吹子の向う面め」吹子の向うづらといふ句は罵詈の言語である樣だが、吾輩には了解が出來なかつた。「一寸伺ふが吹子の向うづらと云ふのはどう云ふ意味かね」「へん、手めえが惡體をつかれてる癖に、其譯を聞きや世話あねえ。だから正月野郎だつて事よ」正月野郎は詩的であるが、其意味に至ると吹子の何とかよりも一層不明瞭な文句である。參考の爲一寸聞いて置きたいが、聞いたつて明瞭な答辯は得られぬに極まつてゐるから、面と對つた儘無言で立つて居つた。聊か手持無沙汰の體である。すると突然黒のうちの神さんが大きな聲を張り揚げて、「おや棚へ上げて置いた鮭がない。大變だ。又あの黒の畜生が取つたんだよ。ほんとに憎らしい猫だつちやありやしない。今に歸つて來たら、どうするか見て居やがれ」と怒鳴る。初春の長閑な空氣を無遠慮に震動させて、枝を鳴らさぬ君が御代を大いに俗了して仕舞ふ。黒は怒鳴るなら、怒鳴りたい丈怒鳴つて居ろと云はぬ許りに横着な顔をして、四角な顋を前へ出しながら、あれを聞いたかと合圖をする。今迄は黒との應對で氣がつかなかつたが、見ると彼の足の下には一切れ二錢三厘に相當する鮭の骨が泥だらけになつて轉がつて居る。「君不相變やつてるな」と今迄の行き掛りは忘れて、つい感投詞を奉呈した。黒は其位な事では中々機嫌を直さない。「何がやつてるでえ、此野郎。しやけの一切や二切で相變らずたあ何だ。人を見縊つた事をいふねえ。憚りながら車屋の黒だあ」と腕まくりの代りに右の前足を逆かに肩の邊迄掻き上げた。「君が黒君だと云ふ事は、始めから知つてるさ」「知つてるのに、相變らずやつてるたあ何だ。何だてえ事よ」と熱いのを頻りに吹き懸ける。人間なら胸倉をとられて小突き

捲される所である。少々辟易して、内心困つた事になつたと思つて居ると、再び例の神さんの大聲が聞こえる。「ちよいと西川さん、おい西川さんてば、用があるんだよ此人あ。牛肉を一斤すぐ持つて來るんだよ。いゝかい、分つたかい、牛肉の堅くない所を一斤だよ」と牛肉注文の聲が四隣の寂寞を破る。「へん年に一遍牛肉を誂へると思つて、いやに大きな聲を出しやあがらあ。牛肉一斤が隣近所へ自慢なんだから始末に終へねえ阿魔だ」と黒は嘲りながら四つ足を踏ん張る。吾輩は挨拶の仕様もないから默つて見て居る。「一斤位ぢやあ承知が出來ねえんだが、仕方がねえ、いゝから取つときや、今に食つてやらあ」と自分の爲に誂へたものゝ如くいふ。「今度は本當の御馳走だ。結構々々」と吾輩は可成彼を歸さうとする。「おめつちの知つた事ぢやねえ。默つてゐろ。うるせえや」と云ひ作ら突然後足で霜柱の崩れた奴を吾輩の頭へばさりと浴びせ掛ける。吾輩が驚いて、からだの泥を拂つて居る間に黒は垣根を潛つて、どこかへ姿を隠した。大方西川の牛を覘ひに行つたものであらう。

家へ歸ると座敷の中がいつになく春めいて、主人の笑ひ聲さへ陽氣に聞こえる。はてなと明け放した縁側から上がつて主人の傍へ寄つて見ると、見馴れぬ客が來て居る。頭を綺麗に分けて、木綿の紋附の羽織に小倉の袴を着けて、至極眞面目さうな書生體の男である。主人の手あぶりの角を見ると春慶塗の巻烟草入と竝んで、越智東風君を紹介致候水島寒月といふ名刺があるので、此客の名前も、寒月君の友人であるといふ事も知れた。主客の對話は途中からであるから前後がよく分らんが、何でも吾輩が前回に紹介した美學者迷亭君の事に關して居るらしい。

「それで面白い趣向があるから是非一所に來いと仰しやるので」と客は落ち附いて云ふ。「何ですか、其西洋料理へ行つて午飯を食ふのに就いて趣向があるといふのですか」と主人は茶を注ぎ足して客の前へ押しやる。「さあ其趣向といふのが、其時は私にも分らなかつたんですが、何れあの方の事ですから、何か面白い種があるのだらうと思ひまして……」「一所に行きましたか、なる程」「所が驚いたのです」主人はそれ見たかと云はぬ許りに、膝の上に乘つた吾輩の頭をぼかと叩く。少し痛い。「又馬鹿な茶番見た様な事なんでせう。あの男はあれが癖でね」と急にアンドレア。デル。サルト事件を思ひ出す。

「へゝー。君、何か變つたものを食はうぢやないかと仰しやるので」「何を食ひました」「先づ獻立を見ながら色々料理に就いての御話しがありました」「誂へない前にですか」「えゝ」「夫から」「夫から首を捻つてボイの方を御覽になつて、どうも變つたものもない樣だなと仰しやると、ボイは負けぬ氣で鴨のロースか小牛のチャップ抔は如何ですと云ふと、先生は、そんな月並を食ひにわざ／＼こゝ迄來やしないと仰しやるんで、ボイは月並といふ意味が分らんものですから妙な顏をして默つて居ましたよ」「さうでせう」「夫から私の方を御向きになつて、君佛蘭西や英吉利へ行くと隨分天明調や萬葉調が食へるんだが、日本ぢやどこへ行つたつて版で押した樣で、どうも西洋料理へ這入る氣がしないと云ふ樣な大氣燄で――全體あの方は洋行なすつた事があるのですかな」「何、迷亭が洋行なんかするもんですか、そりや金もあり、時もあり、行かうと思へば何時でも行かれるんですがね。大方是から行く積りの所を、過去に見立てた洒落なんでせう」と主人は自分ながらうまい事を言つた積りで誘ひ出し笑ひをする。客は左迄感服した様子もない。「さうですか、私は又いつの間に洋行なさつたかと思つて、つい眞面目に拜聽

して居ました。それに見に來た樣になめくぢのソップの御話しや蛙のシチュウの形容をなさるものですから」「そりや誰かに聞いたんでせう、うそをつく事は中々名人ですからね」「どうも左樣の樣で」と主人は花瓶の水仙を眺める。少しく殘念の氣色にも取られる。「ぢや趣向といふのは、それなんですね」と主人が念を押す。「いえ、夫はほんの冒頭なので、本論は是からなのです」「ふーん」と主人は好奇的な感投詞を插む。「夫から、とてもなめくぢや蛙は食はうつても食へやしないから、まあトチメンボー位な所で負けとく事にしようぢやないか君、と御相談なさるものですから、私はつい何の氣なしに、それがいゝでせう、といつて仕舞つたので」「へーとちめんぼうは妙ですな」「えゝ全く妙なのですが、先生が餘り眞面目だものですから、つい氣がつきませんでした」と恰も主人に向つて麁忽を詫びて居る樣に見える。「夫からどうしました」と主人は無頓着に聞く。客の謝罪には一向同情を表して居らん。「それからボイに、おいトチメンボーを二人前持つて來いといふと、ボイがメンチボーですかと聞き直しましたが、先生は益眞面目な貌でメンチボーぢやない、トチメンボーだと訂正されました」「なある。其トチメンボーといふ料理は一體あるんですか」「さあ私も少し可笑しいとは思ひましたが、如何にも先生が沈着であるし、其上あの通りの西洋通で入らつしやるし、ことに其時は洋行なすつたものと信じ切つて居たものですから、私も口を添へてトチメンボーだトチメンボーだとボイに教へてやりました」「ボイはどうしました」「ボイがね、今考へると實に滑稽なんですがね、暫らく思案して居ましてね、甚だ御氣の毒樣ですが今日はトチメンボーは御生憎樣で、メンチボーなら御二人前すぐに出來ますと云ふと、先生は非常に殘念な樣子で、夫ぢや折角こゝ迄來た甲斐がない。どうかトチメンボーを都合して食はせてもらふ譯には行くまいかと、ボイに二十錢銀貨をやられると、ボイはそれでは兎も角も料理番と相談して參りませうと奧へ行きましたよ」「大變トチメンボーが食ひたかつたと見えますね」「しばらくしてボイが出て來て、眞に御生憎で、御誂へならこしらへますが少々時間がかかります、と云ふと迷亭先生は落ち附いたもので、どうせ我々は正月でひまなんだから、少し待つて食つて行かうぢやないかと云ひ乍ら、ポッケットから葉卷を出してぷかり〳〵吹かし始められたので、私も仕方がないから、懷から日本新聞を出して讀み出しました。するとボイは又奧へ相談に行きましたよ」「いやに手數が掛かりますな」と主人は戰爭の通信を讀む位の意氣込みで席を前める。「するとボイが又出て來て、近頃はトチメンボーの材料が拂底で龜屋へ行つても横濱の十五番へ行つても買はれませんから、當分の間は御生憎樣でと氣の毒さうに云ふと、先生はそりや困つたな、折角來たのになあと、私の方を御覽になつて頻りに繰り返さるので、私も默つて居る譯にも參りませんから、どうも遺憾ですな、遺憾極まるですなと調子を合はせたのです」「御尤もで」と主人が賛成する。何が御尤もだか吾輩にはわからん。「するとボイも氣の毒だと見えて、其內材料が參りましたら、どうか願ひますつてんでせう。先生が材料は何を使ふかねと問はれると、ボイはへゝゝと笑つて返事をしないんです。材料は日本派の俳人だらうと先生が押し返して聞くと、ボイはへえ左樣で、それだものだから近頃は横濱へ行つても買はれませんので、まことに御氣の毒樣と云ひましたよ」「アハヽヽ、夫が落ちなんですか、こりや面白い」と主人はいつになく大きな聲で笑ふ。膝が搖れて吾輩は落ちかゝる。主人は夫にも頓着なく笑ふ。**アンドレア・デル・**

サルトに罹つたのは自分一人でないと云ふ事を知つたので、急に愉快になつたものと見える。「夫から二人で表へ出ると、どうだ君うまく行つたらう、橡面坊を種に使つた所が面白からうと大得意なんです。敬服の至りですと云つて御別れした様なものゝ、實は午飯の時刻が延びたので大変空腹になつて弱りましたよ」「夫は御迷惑でしたらう」と主人は始めて同情を表する。是には吾輩も異存はない。しばらく話しが途切れて吾輩の咽喉を鳴らす音が主客の耳に入る。

東風君に冷たくなつた茶をぐつと飲み干して、「實は今日參りましたのは、少々先生に御願ひがあつて參つたので」と改まる。「はあ、何か御用で」と主人も負けずに澄ます。「御承知の通り、文學美術が好きなものですから……」「結構で」と油を注す。「同志丈がよりまして先達てから朗讀會といふのを組織しまして、毎月一回會合して此方面の研究を是から續け度い積りで、既に第一回は去年の暮に開いた位であります」「一寸伺つて置きますが、朗讀會と云ふと何か節奏でも附けて、詩歌文章の類を讀む樣に聞こえますが、一體どんな風にやるんです」「まあ初めは古人の作からはじめて、追々は同人の創作なんかもやる積りです」「古人の作といふと白樂天の琵琶行の樣なものでもあるんですか」「いゝえ」「蕪村の春風馬堤曲の種類ですか」「いゝえ」「それぢや、どんなものをやつたんです」「先達ては近松の心中物をやりました」「近松？あの淨瑠璃の近松ですか」近松に二人はない。近松といへば戯曲家の近松に極まつて居る。夫を聞き直す主人は餘程愚だと思つて居ると、主人は何も分らずに吾輩の頭を丁寧に撫でて居る。藪睨みから惚れられたと自認して居る人間もある世の中だから、此位の誤謬は決して驚くに足らんと撫でらるゝが儘に澄まして居た。「えゝ」と答へて東風子は主人の顔色を窺ふ。「それぢや一人で朗讀するのですか、又は役割を極めてやるんですか」「役を極めて懸合でやつて見ました。其主意は可成作中の人物に同情を持つて其性格を發揮するのを第一として、夫に手眞似や身振りを添へます。白は可成其時代の人を寫し出すのが主で、御孃さんでも丁稚でも、其人物が出てきた樣にやるんです」「ぢや、まあ芝居見た樣なものぢやありませんか」「えゝ衣裳と書割がない位なものですな」「失禮ながらうまく行きましたか」「まあ第一回としては成功した方だと思ひます」「それで此前やつたと仰しやる心中物といふと」「其の、船頭が御客を乘せて芳原へ行く所なんで」「大變な幕をやりましたな」と教師丈に一寸首を傾ける。鼻から吹き出した日の出の煙が耳を掠めて顔の横手へ廻る。「なあに、そんなに大變な事もないんです。登場の人物は御客と、船頭と、花魁と仲居と遣手と見番丈ですから」と東風子は平氣なものである。主人は花魁といふ名をきいて一寸苦い顔をしたが、仲居、遣手、見番といふ術語に就いて明瞭の知識がなかつたと見えて先づ質問を呈出した。「仲居といふのは娼家の下婢にあたるものですかな」「まだよく研究はして見ませんが、仲居は茶屋の下女で、遣手といふのが女部屋の助役見た樣なものだらうと思ひます」東風子はさつき其人物が出て來る樣に假色を使ふと云つた癖に、遣手や仲居の性格をよく解して居らんらしい。「成程仲居は茶屋に隷屬するもので、遣手は娼家に起臥する者ですね。次に見番と云ふのは人間ですか、又は一定の場所を指すのですか、もし人間とすれば男ですか女ですか」「見番は何でも男の人間だと思ひます」「何を司どつて居るんですかな」「さあ、そこ迄はまだ調べが屆いて居りません。其内調べて見ませう」これで懸合をやつた日にや頓珍漢

なものが出來るだらうと、吾輩は主人の顏を一寸見上げた。主人は存外眞面目である。「それで朗讀會の外にどんな人が加はつたんですか」「色々居りました。花魁が法學士のK君でしたが、口髯を生して、女の甘つたるいせりふを使ふのですから一寸妙でした。それに其花魁が癪を起こす所があるので……」「朗讀でも癪を起こさなくつちやいけないんですか」と主人は心配さうに尋ねる。「えゝ兎に角表情が大事ですから」と東風子はどこ迄も文藝家の氣で居る。「うまく癪が起こりましたか」と主人は警句を吐く。「癪丈は第一回には、些と無理でした」と東風子も警句を吐く。「所で君は何の役割でした」と主人が聞く。「私は船頭」「へー、君が船頭」君にして船頭が務まるものなら僕にも幇間位はやれると云つた樣な語氣を洩らす。やがて「船頭は無理でしたか」と御世辭のない所を打ち明ける。東風子は別段癪に障つた樣子もない。矢張り沈着な口調で「其船頭で折角の催しも龍頭蛇尾に終りました。實は會場の隣りに女學生が四五人下宿して居ましてね、それがどうして聞いたものか、其日は朗讀會があるといふ事をどこかで探知して會場の窓下へ來て傍聽して居たものと見えます。私が船頭の假色を使つて、漸く調子づいて是なら大丈夫と思つて得意にやつて居ると、……つまり身振りがあまり過ぎたのでせう、今迄耐へて居た女學生が一度にわつと笑ひだしたものですから、驚いた事も驚いたし、極りが惡い事も惡いし、それで腰を折られてから、どうしても後がつゞけられないので、とう／＼其限りで散會しました」第一回としては成功だと稱する朗讀會がこれでは、失敗はどんなものだらうと想像すると笑はずには居られない。覺えず咽喉佛がごろ／＼鳴る。主人は愈柔らかに頭を撫でて呉れる。人を笑つて可愛がられるのは難有いが、聊か無氣味な所もある。「夫は飛んだ事で」と主人は正月早々弔詞を述べて居る。「第二回からは、もつと奮發して盛大にやる積りなので、今日出ましたのも全く其爲で、實は先生にも一つ御入會の上御盡力を仰ぎたいので」「僕にはとても癪なんか起こせませんよ」と消極的の主人はすぐに斷りかける。「いえ、癪抔は起こして頂かんでもよろしいので、こゝに賛助員の名簿が」と云ひながら紫の風呂敷から大事さうに小菊版の帳面を出す。「是へどうか御署名の上御捺印を願ひたいので」と帳面を主人の膝の前へ開いたまゝ置く。見ると現今知名な文學博士、文學士連中の名が行儀よく勢揃ひをして居る。「はあ、賛成員にならん事もありませんが、どんな義務があるのですか」と牡蠣先生は掛念の體に見える。「義務と申して別段是非願ふ事もない位で、只御名前丈を御記入下さつて賛成の意さへ御表し下されば其で結構です」「そんなら這入ります」と義務のかゝらぬ事を知るや否や主人は急に氣輕になる。責任さへないと云ふ事が分つて居れば謀叛の連判狀へでも名を書き入れますと云ふ顏附をする。加之かう知名の學者が名前を列ねて居る中に姓名丈でも入籍させるのは、今迄こんな事に出合つた事のない主人に取つては無上の光榮であるから返事の勢のあるのも無理はない。「一寸失敬」と主人は書齋へ印をとりに這入る。吾輩はぼたりと疊の上へ落ちる。東風子は菓子皿の中のカステラをつまんで一口に頰張る。モゴ／＼しばらくは苦しさうである。吾輩は今朝の雜煮事件を一寸思ひ出す。主人が書齋から印形を持つて出て來た時は、東風子の胃の中にカステラが落ち附いた時であつた。主人は菓子皿のカステラが一切足りなくなつた事には氣が附かぬらしい。もし氣がつくとすれば第一に疑はれるものは吾輩であらう。

東風子が歸つてから、主人が書齋に入つて机の上を見ると、いつの間にか迷亭先生の手紙が來て居る。

「新年の御慶目出度申納候。……」

いつになく出が眞面目だと主人が思ふ。迷亭先生の手紙に眞面目なのは殆どないので、此間抔は其後別に戀着せる婦人も無之、いづ方より艶書も參らず、先づ／＼無事に消光罷り在り候間、乍憚御休心可被下候と云ふのが來た位である。それに較べると此年始狀は例外にも世間的である。

「一寸參堂仕り度候へども、大兄の消極主義に反して、出來得る限り積極的方針を以て、此千古未曾有の新年を迎ふる計畫故、毎日々々目の廻る程の多忙、御推察願上候。……」

成程あの男の事だから正月は遊び廻るのに忙しいに違ひないと、主人は腹の中で迷亭君に同意する。

「昨日は一刻のひまを偸み、東風子にトチメンボーの御馳走を致さんと存じ候處、生憎材料拂底の爲め其意を果さず、遺憾千萬に存候。……」

そろ／＼例の通りになつて來たと主人は無言で微笑する。

「明日は某男爵の歌留多會、明後日は審美學協會の新年宴會、其明日は鳥部教授歡迎會、其又明日は……」

うるさいなと、主人は讀みとばす。

「右の如く、謠曲會、俳句會、短歌會、新體詩會等、會の連發にて當分の間は、のべつ幕無しに出勤致し候爲、不得已賀狀を以て拜趨の禮に易へ候段不惡御宥恕被下度候。……」

別段くるにも及ばんさと、主人は手紙に返事をする。

「今度御光來の節は久し振りにて晩餐でも供し度心得に御座候。寒厨何の珍味も無之候へども、せめてはトチメンボーでもと只今より心掛居候。……」

まだトチメンボーを振り廻して居る。失敬なと主人は一寸むつとする。

「然しトチメンボーは近頃材料拂底の爲、ことに依ると間に合ひ兼候も計りがたきにつき、其節は孔雀の舌でも御風味に入れ可申候。……」

兩天秤をかけたなと主人は、あとが讀みたくなる。

「御承知の通り孔雀一羽につき、舌肉の分量は小指の半ばにも足らぬ程故健啖なる大兄の胃嚢を充たす爲には……」

うそをつけと主人は打ち遣つた樣にいふ。

「是非共二三十羽の孔雀を捕獲致さゞる可からずと存候。然る所孔雀は動物園、淺草花屋敷等には、ちらほら見受け候へども、普通の鳥屋抔には一向見當り不申、苦心此事に御座候。……」

獨りで勝手に苦心して居るのぢやないかと主人は毫も感謝の意を表しない。

「此孔雀の舌の料理は往昔羅馬全盛の砌、一時非常に流行致し候ものにて、豪奢風流の極度と平生よりひそかに食指を動かし居候次第、御諒察可被下候。……」

何が御諒察だ、馬鹿なと主人は頗る冷淡である。

「降つて十六七世紀の頃迄は全歐を通じて孔雀は宴席に缺くべからざる好味と相成居候。レスター伯がエリザベス女皇をケニルウォースに招待致し候節も慥か孔雀を使用致し候樣記憶致候。有名なるレンブラントが畫き候饗宴の圖にも孔雀が尾を廣げたる儘卓上に横たはり居候。……」

孔雀の料理史をかく位なら、そんなに多忙でもなささうだと不平をこぼす。

「とにかく近頃の如く御馳走の食べ續けにてはさすがの小生も遠からぬうちに大兄の如く胃弱と相成るは必定……」

大兄の如くは餘計だ。何も僕を胃弱の標準にしなくても濟むと主人はつぶやいた。

「歴史家の説によれば羅馬人は日に二度三度も宴會を開き候由、日に二度も三度も方丈の食饌に就き候へば如何なる健胃の人にても消化機能に不調を釀すべく、從つて自然は大兄の如く……」

又大兄の如くか、失敬な。

「然るに贅澤と衛生とを兩立せしめんと研究を盡したる彼等は不相當に多量の滋味を貪ると同時に胃腸を常態に保持するの必要を認め、こゝに一の秘法を案出致し候。……」

はてねと主人は急に熱心になる。

「彼等は食後必ず入浴致候。入浴後一種の方法によりて浴前に嚥下せるものを悉く嘔吐し、胃内を掃除致し候。胃内廓清の功を奏したる後又食卓に就き、飽く迄珍味を風好し、風好し了れば又湯に入りて之を吐出致候、かくの如くすれば好物は貪り次第貪り候も毫も内臓の諸機關に障害を生ぜず、一擧兩得とは此等の事を可申かと愚考致候。……」

成程一擧兩得に相違ない。主人は羨ましさうな顔をする。

「廿世紀の今日交通の頻繁、宴會の增加は申す迄もなく、軍國多事征露の第二年とも相成候折柄、吾人戰勝國の國民は、是非共羅馬人に倣つて此入浴嘔吐の術を研究せざるべからざる機會に到着致し候事と自信致候。左もなくば折角の大國民も近き將來に於て悉く大兄の如く胃病患者と相成る事と竊かに心痛罷りあり候。……」

又大兄の如くか、癪に障る男だと主人が思ふ。

「此際吾人西洋の事情に通ずる者が古史傳説を考究し、既に廢絶せる秘法を發見し、之を明治の社會に應用致し候はゞ所謂禍を未萌に防ぐの功德にも相成り平素逸樂を擅に致し候御恩返も相立ち可申と存候。……」

何だか妙だなと首を捻る。

「依て此間中よりギボン、モンセン、スミス等諸家の著述を渉獵致し居候へども未だに發見の端緒をも見出し得ざるは殘念の至に存候。然し御存じの如く小生は一度思ひ立ち候事は成功するまでは決して中絶仕らざる性質に候へば嘔吐方を再興致し候も遠からぬうちと信じ居り候次第。右發見次第御報道可仕候につき、左樣御承知可被下候。就てはさきに申上候トチメンボー及び孔雀の舌の御馳走も可相成は右發見後に致し度、左すれば小生の都合は勿論、既に胃弱に惱み居らるゝ大兄の爲にも御便宜かと存候。草々不備」

何だとう〳〵擔がれたのか、あまり書方が眞面目だものだからつい仕舞まで本氣にして讀んで居た。新年匆々こんな惡戲をやる迷亭は餘つ程ひま人だなあと主人は笑ひながら云つた。

夫から四五日は別段の事もなく過ぎ去つた。白磁の水仙がだん〳〵凋んで、青軸の梅が瓶ながら漸々開きかゝるのを眺め暮らして許り居てもつまらんと思つて、一兩度三毛子を訪問して見たが逢はれない。最初は留守だと思つたが、二返目には病氣で寢て居るといふ事が知れた。障子の中で例の御師匠さんと下女が話しをして居るのを手水鉢の葉蘭の蔭に隱れて聞いて居

るとからであつた。
「三毛は御飯をたべるかい」「いゝえ今朝からまだ何も食べません、あつたかにして御炬燵に寐かして置きました」
何だか猫らしくない。丸で人間の取扱ひを受けて居る。一方では自分の境遇と比べて見て羨ましくもあるが、一方では己が愛して居る猫がかく迄厚遇を受けて居ると思へば嬉しくもある。
「どうも困るね、御飯をたべないと、身體が疲れる許りだからね」「さうで御座いますとも、私共でさへ一日御膳を頂かないと、明くる日はとても働けませんもの」
下女は自分より猫の方が上等な動物である様な返事をする。實際此家では下女よりも猫の方が大切かも知れない。
「御醫者様へ連れて行つたのかい」「えゝ、あの御醫者は餘程妙で御座いますよ。私が三毛をだいて診察場へ行くと、風邪でも引いたのかつて私の脈をとらうとするんでせう。いえ病人は私では御座いません。これですつて三毛を膝の上へ直したら、にやにや笑ひながら、猫の病氣はわしにも分らん、抛つて置いたら今に癒るだらうつてんですもの、あんまり苛いぢや御座いませんか。腹が立つたから、それぢや見て戴かなくつてもよう御座います。是でも大事の猫なんですつて、三毛を懐へ入れてさつさと歸つて參りました」「ほんにねえ」
「ほんにねえ」は到底吾輩のうち抔で聞かれる言葉ではない。矢張り天璋院様の何とかの何とかでなくては使へない、甚だ雅であると感心した。
「何だかしくしく云ふ様だが……」「えゝきつと風邪を引いて咽喉が痛むんで御座いますよ。風邪を引くと、どなたでも御咳が出ますからね……」
天璋院様の何とかの何とかの下女丈に馬鹿丁寧な言葉を使ふ。「それに近頃は肺病とか云ふものが出來てなう」「ほんとに此頃の様に肺病だのペストだのつて新しい病氣計り殖えた日にや油斷も隙もなりやしませんので御座いますよ」「舊幕時代に無い者に碌な者はないから御前も氣をつけないといかんよ」「さうで御座いませうかねえ」
下女は大いに感動して居る。
「風邪を引くといつても餘り出あるきもしない様だつたに……」「いえね、あなた、それが近頃は惡い友達が出來ましてね」
下女は國事の秘密でも語る時の様に大得意である。
「惡い友達？」「えゝあの表通の教師の所に居る薄ぎたない雄猫で御座いますよ」「教師と云ふのは、あの毎朝無作法な聲を出す人かえ」「えゝ顔を洗ふたんびに鵞鳥が絞め殺される様な聲を出す人で御座んす」
鵞鳥が絞め殺される様な聲はうまい形容である。吾輩の主人は毎朝風呂場で含嗽をやる時、楊枝で咽喉をつつ突いて妙な聲を無遠慮に出す癖がある。機嫌の惡い時はやけにがあがあやる。機嫌の好い時は元氣づいて猶があがあやる。つまり機嫌のいゝ時も惡い時も休みなく勢よくがあがあやる。細君の話しではこゝへ引き越す前迄はこんな癖はなかつたさうだが、ある時不圖やり出してから今日迄一日もやめた事がないといふ。一寸厄介な癖であるが、なぜこんな事を根氣よく續けて居るのか、吾等猫抔には到底想像もつかん。それも先づよいとして「薄ぎたない猫」とは隨分酷評をやるものだと猶耳を立ててあとを聞く。
「あんな聲を出して何の呪になるか知らん。御維新前は中間でも草履取りでも相應の作法は心得たもので、屋敷町抔で、あんな顔の洗ひ方

をするものは一人も居らなかつたよ」「さうで御座いませうともねえ」

下女は無暗に敬服しては、無暗にねえを使用する。

「あんな主人を持つて居る猫だから、どうせ野良猫さ。今度來たら少し叩いて御遣り」「叩いて遣りますとも、三毛の病氣になつたのも全くあいつの御蔭に相違御座いませんもの、乾度讐をとつてやります」

飛んだ寃罪を蒙つたものだ。こいつは滅多に近寄れないと三毛子にはとう〳〵逢はずに歸つた。

歸つて見ると主人は書齋の中で何か沈吟の體で筆を執つて居る。二絃琴の御師匠さんの所で聞いた評判を話したら、さぞ怒るだらうが、知らぬが佛とやらで、うん〳〵云ひながら神聖な詩人になり濟まして居る。

所へ當分多忙で行かれないと云つて、懲々年始狀をよこした迷亭君が飄然とやつて來る。「何か新體詩でも作つて居るのかね。面白いのが出來たら見せ給へ」と云ふ。「うん、一寸うまい文章だと思つたから今翻譯して見ようと思つてね」と主人は重たさうに口を開く。「文章? 誰の文章だい」「誰のか分らんよ」「無名氏か、無名氏の作にも隨分いゝのがあるから中々馬鹿に出來ない。全體どこにあつたのか」と問ふ。「第二讀本」と主人は落ち附き拂つて答へる。「第二讀本? 第二讀本がどうしたんだ」「僕の翻譯して居る名文と云ふのは第二讀本の中にあると云ふ事さ」「冗談ぢやない。孔雀の舌の讐を際どい所で討たうと云ふ寸法なんだらう」「僕は君の様な法螺吹きとは違ふさ」と口髭を捻る。泰然たるものだ。「昔ある人が山陽に、先生近頃名文は御座らぬかといつたら、山陽が馬子の書いた借金の催促狀を示して近來の名文は先づ是でせうと云つたといふ話があるから、君の審美眼も存外慥かかも知れん。どれ讀んで見給へ、僕が批評してやるから」と迷亭先生は審美眼の本家の様な事を云ふ。主人は禪坊主が大燈國師の遺誡を讀む様な聲を出して讀み始める。「巨人引力」「何だい巨人引力と云ふのは」「巨人引力と云ふ題さ」「妙な題だな、僕には意味がわからんね」「引力と云ふ名を持つて居る巨人といふ積りさ」「少し無理な積りだが表題だから先づ負けて置くとしよう。夫から早々本文を讀むさ、君は聲がいゝから中々面白い」「雜ぜかへしてはいかんよ」と豫め念を押して又讀み始める。

ケートは窓から外面を眺める。小兒が球を投げて遊んで居る。彼等は高く球を空中に擲つ。球は上へ上へとのぼる。暫くすると落ちて來る。彼等は又球を高く擲つ。再び、三度。擲つ度に球は落ちてくる。何故落ちるのか、何故上へ上へとのみのぼらぬかとケートが問く。「巨人が地中に住む故に」と母が答へる。「彼は巨人引力である。彼は強い。彼は萬物を己れの方へと引く。彼は家屋を地上に引く。引かねば飛んで仕舞ふ。小兒も飛んで仕舞ふ。葉が落ちるのを見たらう。あれは巨人引力が呼ぶのである。本を落とす事があらう。巨人引力が來いといふからである。球が空にあがる。巨人引力は呼ぶ、呼ぶと落ちてくる」

「それぎりかい」「むゝ、甘いぢやないか」「いや是は恐れ入つた。飛んだ所でトチメンボーの御返禮に預かつた」「御返禮でもなんでもないさ。實際うまいから譯して見たのさ。君はさう思はんかね」と金縁の眼鏡の奧を見る。「どうも驚いたね。君にして此伎倆あらんとは。全く今度といふ今度は擔がれたよ。降參々々」と一人で承知して一人で喋舌る。主人には一向通じない。「何も君を降參させる考へはないさ。只面白い文章だと思つたから譯して見た計り

さ」「いや實に面白い。さう來なくつちや本ものでない。凄いものだ。恐縮だ」「そんなに恐縮するには及ばん。僕も近頃は水彩畫をやめたから、其代りに文章でもやらうと思つてね」「どうして、遠近無差別黑白平等の水彩畫の比ぢやない。感服の至りだよ」「さうほめてくれると僕も乘り氣になる」と主人は飽く迄も感違ひをして居る。

所へ寒月君が先日は失禮しましたと這入つて來る。「いや失敬。今大變な名文を拜聽して、トチメンボーの亡魂を退治られた所で」と迷亭先生は譯のわからぬ事をほのめかす。「はあ、さうですか」と是も譯の分らぬ挨拶をする。主人丈は左のみ浮かれた氣色もない。「先日は君の紹介で越智東風と云ふ人が來たよ」「あゝ上がりましたか、あの越智東風と云ふ男は至つて正直な男ですが、少し變つて居る所があるので、或は御迷惑かと思ひましたが、是非紹介して呉れといふものですから……」「別に迷惑の事もないがね……」「こちらへ上がつても自分の姓名のことについて何か辯じて行きやしませんか」「いいえ、そんな話しもなかつた樣だ」「さうですか、どこへ行つても初對面の人には自分の名前の講釋をするのが癖でしてね」「どんな講釋をするんだい」と事あれかしと待ち構へた迷亭君は口を入れる。「あの東風と云ふのを音で讀まれると大變氣にするので」「はてね」と迷亭先生は金唐革の煙草入から煙草をつまみ出す。「私の名は越智東風ではありません、越智こちですと必ず斷りますよ」「妙だね」と雲井を腹の底迄呑み込む。「それが全く文學熱から來たので、こちと讀むと遠近と云ふ成語になる、のみならず其姓名が韻を踏んで居ると云ふのが得意なんです。それだから東風を音で讀むと僕が折角の苦心を人が買つて呉れないといつて不平を云ふのです」「こりや成程變つてる」と迷亭先生は圖に乘つて腹の底から雲井を鼻の孔迄吐き返す。途中で煙が戸惑ひをして喉の出口へ引きかゝる。先生は煙管を握つてごほん／＼と咽び返る。「先日來た時は朗讀會で船頭になつて女學生に笑はれたといつて居たよ」と主人は笑ひながら云ふ。「うむそれ／＼」と迷亭先生が煙管で膝頭を叩く。吾輩は險呑になつたから少し傍を離れる。「其朗讀會さ。先達てトチメンボーを御馳走した時にね。其話が出たよ。何でも第二回には知名の文士を招待して大會をやる積りだから、先生にも是非御臨席を願ひ度いつて。夫から僕が今度も近松の世話物をやる積りかいと聞くと、いえ此次はずつと新しいものを撰んで金色夜叉にしましたと云ふから、君にや何の役が當たつてるかと聞いたら、私はお宮ですといつたのさ。東風のお宮は面白からう。僕は是非出席して喝采しようと思つてるよ」「面白いでせう」と寒月君が妙な笑ひ方をする。「然し、あの男はどこ迄も誠實で輕薄な所がないから好い。迷亭抔とは大違ひだ」と主人はアンドレア・デル・サルトと孔雀の舌とトチメンボーの復讐を一度にとる。迷亭君は氣にも留めない樣子で、「どうせ僕抔は行徳の俎と云ふ格だからなあ」と笑ふ。「まづそんな所だらう」と主人が云ふ。實は行徳の俎と云ふ語を主人は解さないのであるが、さすが永年教師をして胡魔化しつけて居るものだから、こんな時には教場の經驗を社交上にも應用するのである。「行徳の俎と云ふのは何の事ですか」と寒月が眞率に聞く。主人は床の方を見て「あの水仙は暮に僕が風呂の歸りがけに買つて來て插したのだが、よく持つぢやないか」と行徳の俎を無理にねぢ伏せる。「暮と云へば、去年の暮に僕は實に不思議な經驗をしたよ」と迷亭が煙管を大神樂の如く指の先で廻す。「どんな經驗か、聞かし給へ」と主人は行徳の俎を遠く後に見捨てた氣で、ほつ

と息をつく。迷亭先生の不可思議な經驗といふのを聞くと左の如くである。

「一昨日の二十七日と記憶して居るがね。例の東風が來宅の上是非文藝上の御高話を伺ひたいから在宿を願ふと云ふ先觸れがあつたので、朝から心待ちに待つて居ると先生中々來ないやね。晝飯を食つてストーヴの前でバリー・ペーンの滑稽物を讀んで居る所へ靜岡の母から手紙が來たから見ると、年寄丈にいつ迄も僕を子供の樣に思つてね。寒中は夜間外出をするなとか、冷水浴もいゝがストーヴを焚いて室を煖かにしてやらないと風邪を引くとか、色色の注意があるのさ。成程親は難有いものだ、他人にはとてもかうはいかないと、呑氣な僕も其時丈は大いに感動した。それにつけても、こんなにのらくらして居ては勿體ない。何か大著述でもして家名を揚げなくてはならん。母の生きて居るうちに天下をして明治の文壇に迷亭先生あるを知らしめたいと云ふ氣になつた。それから猶讀んで行くと御前なんぞは實に仕合せ者だ。露西亞と戰爭が始まつて若い人達は大變な辛苦をして御國の爲に働いて居るのに、節季師走でもお正月の樣に氣樂に遊んで居ると書いてある。――僕はこれでも母の思つてる樣に遊んぢや居ないやね――其後へ持つて來て、僕の小學校時代の朋友で今度の戰爭に出て死んだり負傷したものゝ名前が列擧してあるのさ、其名前を一々讀んだ時には何だか世の中が味氣なくなつて、人間もつまらないと云ふ氣が起つたよ。一番仕舞にね。私しも取る年に候へば初春の御雜煮を祝ひ候も今度限りかと……何だか心細い事が書いてあるんで、猶の事氣がくさ〳〵して仕舞つて、早く東風が來れば好いと思つたが、先生どうしても來ない。其中とう〳〵晩飯になつたから、母へ返事でも書かうと思つて一寸十二三行かいた。母の手紙は六尺以上もあるのだが、僕にはとてもそんな藝は出來んから、何時でも十行內外で御免蒙る事に極めてあるのさ。すると一日動かずに居つたものだから、胃の具合が妙に苦しい。東風が來たら待たせて置けと云ふ氣になつて、郵便を入れながら散歩に出掛けたと思ひ給へ。いつになく富士見町の方へは足が向かないで土手三番町の方へ我知らず出て仕舞つた。丁度其晩は少し曇つて、から風が御濠の向うから吹き付ける、非常に寒い。神樂坂の方から汽車がヒューと鳴つて土手下を通り過ぎる。大變淋しい感じがする。暮、戰死、老衰、無常迅速抔と云ふ奴が頭の中をぐる〳〵馳け廻る。よく人が首を縊ると云ふが、こんな時にふと誘はれて死ぬ氣になるのぢやないかと思ひ出す。一寸首を上げて土手の上を見ると、何時の間にか例の松の眞下に來て居るのさ」

「例の松た、何だい」と主人が斷句を投げ入れる。

「首懸の松さ」と迷亭は領を縮める。

「首懸の松は鴻の臺でせう」寒月が波紋をひろげる。

「鴻の臺のは鐘懸の松で、土手三番町のは首懸の松さ。なぜかう云ふ名が付いたかと云ふと、昔からの言ひ傳へで誰でも此松の下へ來ると首が縊り度くなる。土手の上に松は何十本となくあるが、そら首縊りだと來て見ると必ず此松へぶら下がつて居る。年に二三返は屹度ぶら下がつて居る。どうしても他の松では死ぬ氣にならん。見ると、うまい具合に枝が往來の方へ橫に出て居る。あゝ好い枝振りだ。あの儘にして置くのは惜しいものだ。どうかしてあすこの所へ人間を下げて見たい、誰か來ないかしらと、四邊を見渡すと生憎誰も來ない。仕方がない、自分で下がらうか知らん。いや〳〵自分が下がつては命がない、危いからよさう。然し昔の希臘人は宴會の席で首縊りの眞似をして

條理を添へたと云ふ點がある。一人が臺の上へ登つて縄の結び目へ首を入れる途端に、他のものが臺を蹴返す。首を入れた當人は臺を引かれると同時に縄をゆるめて飛び下りるといふ趣向である。果してそれが事實なら別段恐るゝにも及ばん、僕も一つ試みようと枝へ手を懸けて見るゝ好い具合に撓る、撓り按排が實に美的である。首がかゝつてふは〳〵する所を想像して見ると嬉れしくて堪らん。是非やる事にしようと思つたが、もし東風が來て待つて居ると氣の毒だと考へ出した。それでは先つ東風に逢つて約束通り話しをして、それから出直さうと云ふ氣になつて遂にうちへ歸つたのさ」

「それで市が榮えたのかい」と主人が聞く。

「面白いですな」と寒月がにや〳〵しながら云ふ。

「うちへ歸つて見ると東風は來て居ない。然し今日は無據處差支へがあつて出られぬ。何れ永日御面晤を期すといふ端書があつたので、やつと安心して、これなら心置きなく首が縊れる、嬉しいと思つた。で早速下駄を引き懸けて、急ぎ足で元の所へ引き返して見る……」と云つて主人と寒月の顔を見て澄まして居る。

「見るとどうしたんだい」と主人は少し焦れる。

「いよ〳〵佳境に入りますね」と寒月は羽織の紐をひねくる。

「見ると、もう誰か來て先へぶら下がつて居る。たつた一足違ひでねえ君、殘念な事をしたよ。今考へると何でも其時は死神に取りつかれたんだね。ゼームス抔に云はせると副意識下の幽冥界と、僕が存在して居る現實界が、一種の因果法によつて互に感應したんだらう。實に不思議な事があるものぢやないか」迷亭は澄まし返つて居る。

主人はまたやられたと思ひ乍ら何も云はずに空也餅を頬張つて口をもご〳〵云はして居る。

寒月は火鉢の灰を丁寧に掻き馴らして、俯向いてにや〳〵笑つて居たが、やがて口を開く。極めて靜かな調子である。

「成程伺つて見ると不思議な事で一寸有りさうにも思はれませんが、私抔は自分で矢張り似た樣な經驗をつい近頃したものですから、少しも疑ふ氣になりません」

「おや君も首を縊り度くなつたのかい」

「いえ私のは首ぢやないんで。是も丁度明ければ昨年の暮の事で、しかも先生と同日同刻位に起つた出來事ですから、猶更不思議に思はれます」

「こりや面白い」と迷亭も空也餅を頬張る。

「其日は向島の知人の家で忘年會兼合奏會がありまして、私もそれへヴァイオリンを携へて行きました。十五六人令孃やら令夫人が集まつて中々盛會で、近來の快事と思ふ位に萬事が整つて居ました。晩餐も濟み合奏も濟んで、四方山の話が出て時刻も大分遲くなつたから、もう暇乞ひをして歸らうかと思つて居ますと、某博士の夫人が私のそばへ來て、あなたは○○子さんの御病氣を御承知ですかと小聲で聞きますので、實は其兩三日前に逢つた時には平生の通り何所も惡い樣には見受けませんでしたから、私も驚いて精しく樣子を聞いて見ますと、私の逢つた其晩から急に發熱して色々な譫語を絶間なく口走るさうで、其丈なら宜いですが、其譫語のうちに私の名が時々出て來るといふのです」

主人は無論、迷亭先生も御安くないね抔といふ月並は云はず。靜肅に謹聽して居る。

「醫者を呼んで見てもらふと、何だか病名はわからんが、何しろ熱が劇しいので腦を侵して居るから、もし睡眠劑が思ふ樣に功を奏しないと危險であると云ふ診斷ださうで、私はそれを聞くや否や一種いやな感じが起つたのです。

丁度夢でうなされる時の様な重くるしい感じで、周圍の空氣が急に固形體になつて四方から吾身をしめつける如く思はれました。歸り道にも此事ばかりが頭の中にあつて苦しくて堪らない。あの綺麗な、あの快活な、あの健康な〇〇子さんが……」

「一寸失敬だが待つて呉れ給へ。さつきから伺つて居ると〇〇子さんと云ふのが二返ばかり聞こえる様だが、もし差支へがなければ、承りたいね、君」と主人を顧みると、主人も「うむ」と生返事をする。

「いやそれ丈は當人の迷惑になるかも知れませんから廢しませう」

「凡て曖々然として昧々然たるかたで行く積りかね」

「冷笑なさつてはいけません、極眞面目な話なんですから……兎に角あの婦人が急にそんな病氣になつた事を考へると、實に飛花落葉の感慨で胸が一杯になつて、總身の活氣が一度にストライキを起こした様に元氣がにはかに滅入つて仕舞ひまして、只蹌々として踉々といふ形で吾妻橋へきかゝつたのです。欄干に倚つて下を見ると滿潮か干潮か分りませんが、黒い水がかたまつて只動いて居る様に見えます。花川戸の方から人力車が一臺馳けて來て橋の上を通りました。其提灯の火を見送つて居ると、段々小さくなつて札幌ビールの處で消えました。私は又水を見る。すると遙かの川上の方で私の名を呼ぶ聲が聞こえるのです。はてな、今時分人に呼ばれる譯はないが誰だらうと水の面をすかして見ましたが、暗くて何も分りません。氣のせいに違ひない、早々歸らうと思つて、一足二足あるき出すと、又微かな聲で遠くから私の名を呼ぶのです。私は又立ち留まつて耳を立てて聞きました。三度目に呼ばれた時には欄干に捕まつて居ながら膝頭ががく/\悸へ出したのです。其聲は遠くの方か、川の底から出る様ですが、紛れもない〇〇子の聲なんでせう。私は覺えず「はーい」と返事をしたのです。其返事が大きかつたものですから靜かな水に響いて、自分で自分の聲に驚かされて、はつと周圍を見渡しました。人も犬も月も何も見えません。其時に私は此「夜」の中に卷き込まれて、あの聲の出る所へ行きたいと云ふ氣がむら/\と起つたのです。〇〇子の聲が又苦しさうに、訴へる様に、救ひを求める様に私の耳を刺し通したので、今度は「今直ぐに行きます」と答へて欄干から半身を出して黒い水を眺めました。どうも私を呼ぶ聲が浪の下から無理に洩れて來る様に思はれましてね。此水の下だなと思ひながら私はとう/\欄干の上に乘りましたよ。今度呼んだら飛び込まうと決心して流を見詰めて居ると又憐れな聲が糸の様に浮いて來る。こゝだと思つて力を込めて一反飛び上つておいて、そして小石か何ぞの様に未練なく落ちて仕舞ひました」

「とう/\飛び込んだのかい」と主人が眼をぱちつかせて問ふ。

「其所迄行かうとは思はなかつた」と迷亭が自分の鼻の頭を一寸つまむ。

「飛び込んだ後は氣が遠くなつて、しばらくは夢中でした。やがて眼がさめて見ると寒くはあるが、ちつとも濡れた所も何もない、水を飲んだ様な感じもしない。慥かに飛び込んだ筈だが實に不思議だ。こりや變だと氣が付いて其所いらを見渡すと驚きましたね。水の中へ飛び込んだ積りで居た所が、つい間違つて橋の眞中へ飛び下りたので、其時は實に殘念でした。前と後ろの間違丈であの聲の出る所へ行く事が出來なかつたのです」寒月はにや/\笑ひながら例の如く羽織の紐を荷厄介にして居る。

「ハヽヽヽ是は面白い。僕の經驗とよく似て居

る所が奇だ。矢張りゼームス教授の材料になるね。人間の感應と云ふ題で寫生文にしたら乾度文壇を驚かすよ。……そして其の「子さんの病氣はどうなつたかね」と迷亭先生が追窮する。

「二三日前年始に行きましたら、門の内で下女と羽根を突いて居ましたから病氣に全快したものと見えます」

主人は最前から沈思の體であつたが、此時漸く口を開いて、「僕にもある」と負けぬ氣を出す。

「あつて、何があるんだい」迷亭の眼中に主人抔は無論ない。

「僕のも去年の暮の事だ」

「みんな去年の暮は暗合で妙ですな」と寒月が笑ふ。缺けた前齒のうちに空也餅が着いて居る。

「矢張り同月同刻ぢやないか」と迷亭がまぜ返す。

「いや日は違ふ様だ。何でも二十日頃だよ。細君が御歳暮の代りに攝津大掾を聞かして呉れろと云ふから、連れて行つてやらん事もないが今日の語り物は何だと聞いたら、細君が新聞を參考して鰻谷だと云ふのさ。鰻谷は嫌ひだから今日はよさうと其日はやめにした。翌日になると細君がまた新聞を持つて來て、今日は堀川だからいゝでせうと云ふ。堀川は三味線もので賑やかな許りで實がないからよさうと云ふと、細君は不平な顔をして引き下がつた。其翌日になると細君が云ふには今日は三十三間堂です。私は是非攝津の三十三間堂が聞きたい。あなたは三十三間堂も御嫌ひか知らないが、私に聞かせるのだから一所に行つて下すつても宜いでせうと手詰めの談判をする。御前がそんなに行きたいなら行つても宜しい、然し一世一代と云ふので大變な大入だから到底突懸けに行つたつて這入れる氣遣ひはない。元來あゝ云ふ場所へ行くには茶屋と云ふものがあつて、それと交渉して相當の席を豫約するのが正當の手續きだから、それを踏まないで常規を脱した事をするのはよくない、殘念だが今日はやめようと云ふと、細君は凄い眼付をして、私は女ですからそんな六づかしい手續きなんか知りませんが、大原のお母さんも、鈴木の君代さんも正當の手續きを踏まないで立派に聞いて來たんですから、いくらあなたが教師だからつて、さう手數のかゝる見物をしないでも濟みませう、あなたはあんまりだと泣く様な聲を出す。それぢや駄目でもまあ行く事にしよう。晩飯をくつて電車で行かうと降參をすると、行くなら四時迄に向うへ着く様にしなくつちや行けません、そんなぐづ／＼しては居られませんと急に勢がいゝ。何故四時迄に行かなくては駄目なんだと聞き返すと、其位早く行つて場所をとらなくちや這入れないからですと鈴木の君代さんから教へられた通りを述べる。それぢや四時を過ぎればもう駄目なんだねと念を押して見たら、えゝ駄目ですともと答へる。すると君、不思議な事には其時から急に惡寒がし出してね」

「奥さんがですか」と寒月が聞く。

「なに細君はぴん／＼して居らあね。僕がさ。何だか穴の開いた風船玉の様に一度に萎縮する感じが起こると思ふと、もう眼がぐら／＼して動けなくなつた」

「急病だね」と迷亭が註釋を加へる。

「あゝ困つた事になつた。細君が年に一度の願ひだから是非叶へてやりたい。平生叱り附けたり、口を利かなかつたり、身上の苦勞をさせたり、子供の世話をさせたりする許りで、何一つ洒掃薪水の勞に酬いた事はない。今日は幸ひ時間もある、嚢中には四五枚の堵物もある。連れて行けば行かれる。細君も行きたいだらう、僕も連れて行つてやりたい。是非連れて行つてやり度いが、から惡寒がして眼がくらんでは電車へ

乘る所か、玄關へ下りる事も出來ない。あゝ氣の毒だ氣の毒だと思ふと猶惡寒がして猶眼がくらんでくる。早く醫者に見てもらつて服藥でもしたら四時前には全快するだらうと、それから細君と相談をして甘木醫學士を迎ひにやると生憎昨夜が當番でまだ大學から歸らない。二時頃にはお歸りになりますから、歸り次第すぐ上げますと云ふ返事である。困つたなあ、今杏仁水でも飲めば四時前には屹度癒るに極まつて居るんだが、運の惡い時には何事も思ふ樣に行かんもので、たまさか細君の喜ぶ笑顏を見て樂しまうと云ふ豫算も、がらりと外れさうになつて來る。細君は恨めしい顏付をして、到底入らつしやれませんかと聞く。行くよ、必ず行くよ。四時迄には屹度直つて見せるから安心して居るがいゝ、早く顏でも洗つて着物でも着換へて待つて居るがいゝ、と口では云つた樣なもの、胸中は無限の感慨である。惡寒は益劇しくなる、眼は愈ぐら／＼する。もし四時迄に全快して約束を履行する事が出來なかつたら、氣の狹い女の事だから何をするかも知れない。情ない仕儀になつて來た。どうしたらよからう。萬一の事を考へると今の内に有爲轉變の理、生者必滅の道を說き聞かして、もしもの變が起つた時取り亂さない位の覺悟をさせるのも、夫の妻に對する義務ではあるまいかと考へ出した。僕は速かに細君を書齋へ呼んだよ。呼んでお前は女だけれども many a slip 'twixt the cup and the lip と云ふ西洋の諺位は心得て居るだらうと聞くと、そんな横文字なんか誰が知るもんですか、あなたは人が英語を知らないのを御存じの癖にわざと英語を使つて人にからかふのだから、宜しう御座います、どうせ英語なんかは出來ないんですから。そんなに英語が御好きなら、何故耶蘇學校の卒業生かなんかをお貰ひなさらなかつたんです。あなた位冷酷な人はありはしない、と非常な權幕なんで、僕も折角の計畫の腰を折られて仕舞つた。君等にも辯解するが僕の英語は決して惡意で使つた譯ぢやない。全く妻を愛する至情から出たので、それを妻の樣に解釋されては僕も立つ瀨がない。それにさつきからの惡寒と眩暈で少し腦が亂れて居る所へもつて來て、早く有爲轉變、生者必滅の理を呑み込ませようと少し急き込んだものだから、つい細君の英語を知らないと云ふ事を忘れて、何の氣も附かずに使つて仕舞つた譯さ。考へると是は僕が惡い、全く手落ちであつた。此失敗で惡寒は益強くなる、眼は愈ぐら／＼する。細君は命ぜられた通り風呂場へ行つて兩肌を脫いで御化粧をして、簞笥から着物を出して着換へる。もう何時でも出掛けられますと云ふ風情で待ち構へて居る。僕は氣が氣でない。早く甘木君が來て呉れゝば善いがと思つて時計を見るともう三時だ。四時にはもう一時間しかない。「そろ／＼出掛けませうか」と細君が書齋の開き戸を開けて顏を出す。自分の妻を褒めるのは可笑しい樣であるが、僕は此時程細君を美しいと思つた事はなかつた。もろ肌を脫いで石鹼で磨き上げた皮膚がぴかついて黑縮緬の羽織と反映して居る。其顏が石鹼と攝津大掾を聞かうと云ふ希望との二つで、有形無形の兩方面から輝いて見える。どうしても其希望を滿足させて出掛けてやらうと云ふ氣になる。それぢや奮發して行かうかな、と一ぷくふかして居ると漸く甘木先生が來た。うまい、注文通りに行つた。が容體をはなすと、甘木先生は僕の舌を眺めて、手を握つて、胸を敲いて背を撫でて、目縁を引つ繰り返して、頭蓋骨をさすつて、しばらく考へ込んで居る。『どうも少し險呑な樣な氣がしまして』と僕が云ふと、先生は落ち附いて『いえ格別の事も御座いますまい』と云ふ。『あの一寸位外出致しても差支

へは御座いますまいね」と細君が聞く。「左樣」と先生は又考へ込む。「御氣分さへ御惡くなければ……」「氣分は惡いですよ」と僕が云ふ。「おや兎も角も頓服と水藥を上げますから」「えゝどうか、何だか、危い樣になりさうですな」「いや決して御心配になる程の事ぢや御座いません。神經を御起こしになるといけませんよ」と先生が歸る。三時は三十分過ぎた。下女を藥取りにやる。細君の嚴命で馳け出して行つて、馳け出して歸つてくる。四時十五分前である。四時にはまだ十五分ある。すると四時十五分前頃から、今迄何とも無かつたのに急に嘔氣を催して來た。細君は水藥を茶碗へ注いで僕の前へ置いてくれたから、茶碗を取り上げて飲まうとすると、胃の中からゲーと云ふ物が吶喊して出てくる。不得已茶碗を下へ置く。細君は「早く御飲みになつたら宜いでせう」と逼る。早く飲んで早く出掛けなくては義理が惡い。思ひ切つて飲んで仕舞はうと又茶碗へ唇をつけると、又ゲーが執念深く妨害をする。飲まうとしては茶碗を置き、飲まうとしては茶碗を置いて居ると、茶の間の時計がチン／＼チン／＼と四時を打つた。さあ四時だ、愚圖々々しては居られんと茶碗を又取り上げると、不思議だねえ君、實に不思議とは此事だらう、四時の音と共に吐き氣がすつかり留まつて、水藥が何の苦なしに飲めたよ。それから四時十分頃になると、甘木先生の名醫と云ふ事も始めて理解する事が出來たんだが、背中がぞく／＼するのも、眼がぐらぐらするのも夢の樣に消えて、當分立つ事も出來まいと思つた病氣が忽ち全快したのは嬉しかつた」

「それから歌舞伎座へ一所に行つたのかい」と迷亭が要領を得んと云ふ顔附をして聞く。

「行きたかつたが、四時を過ぎちや這入れないと云ふ細君の意見なんだから仕方がない、やめにしたさ。もう十五分許り早く甘木先生が來て吳れたら僕の義理も立つし、妻も滿足したらうに、僅か十五分の差でね、實に殘念な事をした。考へ出すとあぶない所であつたと今でも思ふのさ」

語り了つた主人は漸く自分の義務を濟ました樣な風をする。是で兩人に對して顔が立つと云ふ氣かも知れん。

寒月は例の如く缺けた齒を出して笑ひながら「それは殘念でしたな」と云ふ。迷亭はとぼけた顔をして、「君の樣な親切な夫を持つた細君は實に仕合せだなあ」と獨り言の樣にいふ。障子の蔭でエヘンと云ふ細君の咳拂ひが聞こえる。

吾輩は大人しく三人の話しを順番に聞いて居たが、可笑しくも悲しくもなかつた。人間といふものは時間を潰す爲に強ひて口を運動させて、可笑しくもない事を笑つたり、面白くもない事を嬉しがつたりする外に能もない者だと思つた。吾輩の主人の我儘で偏狹な事は前から承知して居たが、平常は言葉數を使はないので何だか了解しかねる點がある樣に思はれて居た。その了解しかねる點に少しは恐ろしいと云ふ感じもあつたが、今の話しを聞いてから急に輕蔑したくなつた。彼はなぜ兩人の話しを沈默して聞いて居られないのだらう。負けぬ氣になつて愚にもつかぬ駄辯を弄すれば何の所得があるだらう。エピクテタスにそんな事を爲ろと書いてあるのか知らん。要するに主人も寒月も迷亭も太平の逸民で、彼等は絲瓜の如く風に吹かれて超然と澄まし切つて居る樣なものゝ、其實は矢張り娑婆氣もあり慾氣もある。競爭の念、勝たう／＼の心は彼等が日常の談笑中にもちら／＼とほのめいて、一歩進めば彼等が平常罵倒して居る俗骨共と一つ穴の動物になるのは猫より見て氣の毒の至りである。只其言語動作が普通の半可通の如く、紋切形の厭味を帶

びてないのは聊かの取得でもあらう。から考へると急に主人の談話が面白くなくなつたので、三毛子の樣子でも見て來ようかと二絃琴の御師匠さんの庭口へ廻る。門松注目飾りは既に取り拂はれて正月も早十日となつたが、うらゝかな春日は一流れの雲も見えぬ深き空より四海天下を一度に照らして、十坪に足らぬ庭の面も元日の曙光を受けた時より鮮やかな活氣を呈して居る。緣側に座蒲團が一つあつて人影も見えず、障子も立て切つてあるのは御師匠さんは湯にでも行つたのか知らん。御師匠さんは留守でも構はんが、三毛子は少しは宜い方か、それが氣掛りである。ひつそりして人の氣合もしないから、泥足の儘緣側へ上がつて座蒲團の眞中へ寐轉んで見るといゝ心持ちだ。ついうと〳〵として、三毛子の事も忘れてうたゝ寐をして居ると、急に障子のうちで人聲がする。

「御苦勞だつた。出來たかえ」御師匠さんは矢張り留守ではなかつたのだ。「はい遲くなりまして、佛師屋へ參りましたら丁度出來上がつた所だと申しまして」「どれお見せなさい。あゝ綺麗に出來た。是で三毛も浮ばれませう。金は剝げる事はあるまいね」「えゝ念を押しましたら上等を使つたから是なら人間の位牌よりも持つと申して居りました。……夫から猫譽信女の譽の字は崩した方が恰好がいゝから少し劃を變へたと申しました」「どれ〳〵早速御佛壇へ上げて御線香でも上げませう」

三毛子はどうかしたのかな、何だか樣子が變だと蒲團の上へ立ち上がる。チーン、南無猫譽信女、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と御師匠さんの聲がする。

「御前も回向をしてお遣りなさい」

チーン、南無猫譽信女、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と今度は下女の聲がする。吾輩は急に動悸がして來た。座蒲團の上に立つた儘、木彫の猫の樣に眼も動かさない。

「ほんとに殘念な事を致しましたね。始めはちよつと風邪を引いたんで御座いませうがねえ」「甘木さんが藥でも下さると、よかつたかも知れないよ」「一體あの甘木さんが惡う御座いますよ、あんまり三毛を馬鹿にし過ぎますあね」「さう人樣の事を惡く云ふものではない。是も壽命だから」

三毛子も甘木先生に診察して貰つたものと見える。

「つまる所表通の教師のうちの野良猫が無暗に誘ひ出したからだと、わたしは思ふよ」「えゝあの畜生が三毛のかたきで御座いますよ」

少し辯解したかつたが、こゝが我慢のし所と唾を呑んで聞いて居る。話しはしばし途切れる。

「世の中は自由にならんものでなう。三毛の樣な器量よしは早死をするし。不器量な野良猫は達者でいたづらをして居るし……」「其通りで御座いますよ。三毛の樣な可愛らしい猫は鐘と太鼓で探してあるいたつて、二人とは居りませんからね」二匹と云ふ代りに二人といつた。下女の考へでは猫と人間とは同種族のものと思つて居るらしい。さう云へば此下女の顔は吾等猫屬と甚だ類似して居る。

「出來るものなら三毛の代りに……」「あの敎師の所の野良が死ぬと御誂へ通りに參つたんで御座いますがねえ」

御誂へ通りになつては、ちと困る。死ぬと云ふ事はどんなものか、まだ經驗した事がないから好きとも嫌ひとも云へないが、先日餘り寒いので火消壺の中へもぐり込んで居たら、下女が吾輩の居るのも知らんで上から蓋をした事があつた。其時の苦しさは考へても恐ろしくなる程であつた。白君の說明によるとあの苦しみが今少し續くと死ぬのであるさうだ。三毛子の身

代りになるのなら苦情もないが、あの苦しみを受けなくては死ぬ事が出来ないのなら、誰の為めでも死にたくはない。

「然し猫でも坊さんの御経を読んでもらつたり、戒名をこしらへてもらつたのだから心残りはあるまい」「さうで御座いますとも、全く果報者で御座いますよ。たゞ慾を云ふとあの坊さんの御経があまり軽少だつた様で御座いますね」「少し短か過ぎた様だつたから、大変御早う御座いますねと御尋ねをしたら、月桂寺さんは、えゝ利目のある所をちよいとやつて置きました、なに猫だからあの位で充分浄土へ行かれますと仰しやつたよ」

「あらまあ……然しあの野良なんかは……」

吾輩は名前はないと屡ば断つて置くのに、此下女は野良々々と吾輩を呼ぶ。失敬な奴だ。

「罪が深いんですから、いくら難有い御経だつて浮ばれる事は御座いませんよ」

吾輩は其後野良が何百遍繰り返されたかを知らぬ。吾輩は此の際限なき談話を中途で聞き棄てて、布団をすべり落ちて縁側から飛び下りた時、八萬八千八百八十本の毛髪を一度にたてて身震ひをした。其後二絃琴の御師匠さんの近所へは寄り附いた事がない。今頃は御師匠さん自身が月桂寺さんから軽少な御回向を受けて居るだらう。

近頃は外出する勇気もない。何だか世間が慵く感ぜらるゝ。主人に劣らぬ程の無性猫となつた。主人が書斎にのみ閉じ籠つて居るのを人が失恋だ失恋だと評するのも無理はないと思ふ様になつた。

鼠はまだ取つた事がないので、一時はお三から放逐論さへ呈出された事もあつたが、主人は吾輩の普通一般の猫でないと云ふ事を知つて居るものだから、吾輩は矢張りのらくらして此家に起臥して居る。此点に就いては、深く主人の恩を感謝すると同時に其活眼に対して敬服の意を表するに躊躇しない積りである。お三が吾輩を知らずして虐待するのは別に腹も立たない。今に左甚五郎が出て来て、吾輩の肖像を楼門の柱に刻み、日本のスタンランが好んで吾輩の似顔をカンヴスの上に描く様になつたら、彼等鈍瞎漢は始めて自己の不明を恥づるであらう。

三

三毛子は死ぬ、黒は相手にならず、聊か寂寞の感はあるが、幸ひ人間に知己が出来たので左程退屈とも思はぬ。先達ては主人の許へ吾輩の写真を送つて呉れと手紙で依頼した男がある。此間は岡山の名産吉備団子を態々吾輩の名宛で届けて呉れた人がある。段々人間から同情を寄せらるゝに従つて、己が猫である事は漸く忘却してくる。猫よりはいつの間にか人間の方へ接近して来た様な心持になつて、同族を糾合して二本足の先生と雌雄を決しようなどと云ふ料簡は昨今の所毛頭ない。夫のみか折々は吾輩も亦人間界の一人だと思ふ折さへある位に進化したのは頼母しい。敢て同族を軽蔑する次第ではない、只性情の近き所に向つて一身の安きを置くは勢の然らしむる所で、之を変心とか、軽薄とか、裏切りとか評せられては些と迷惑する。斯様な言語を弄して人を罵詈するものに限つて融通の利かぬ貧乏性の男が多い様だ。かう猫の習癖を脱化して見ると三毛子や黒の事計り荷厄介にして居る訳には行かん、矢張り人間同等の気位で彼等の思想言行を評隲したくなる。是も無理はあるまい。只其位な見識を有して居る吾輩を矢張り一般猫児の毛の生えたもの位に思つて、主人が吾輩に一言の挨拶もなく、吉備団子をわが物顔に喰ひ尽したのは残念の次第である。写真もまだ撮つて送らぬ容子だ。是も不平と云へば不平だが、

主人は主人、吾輩は吾輩で、相互の見解が自然異なるのは致し方もあるまい。吾輩はどこ迄も人間になり濟まして居るのだから、交際をせぬ猫の動作は、どうしても一寸筆に上りにくい。迷亭、寒月諸先生の評判丈で御免蒙る事に致さう。

　今日は上天氣の日曜なので、主人はのそ〳〵書齋から出て來て、吾輩の傍へ筆硯と原稿用紙を竝べて腹這ひになつて、しきりに何か唸つて居る。大方草稿を書き卸す序開きとして妙な聲を發するのだらうと注目して居ると、稍暫らくして筆太に「香一炷」とかいた。果てな、詩になるか、俳句になるか、香一炷とは、主人にしては少し洒落過ぎて居るかと思ふ間もなく、彼は香一炷を書き放しにして、新たに行を改めて「さつきから天然居士の事をかかうと考へて居る」と筆を走らせた。筆は夫丈ではたと止まつたぎり動かない。主人は筆を持つて首を捻つたが別段名案もないものと見えて筆の穗を嘗めだした。唇が眞黑になつたと見て居ると、今度は其下へ一寸丸をかいた。丸の中へ點を二つうつて眼をつける。眞中へ小鼻の開いた鼻をかいて、眞一文字に口を横へ引つ張つた、是では文章でも俳句でもない。主人も自分で愛想が盡きたと見えて、そこ〳〵に顏を塗り消して仕舞つた。主人は又行を改める。彼の考へによると行さへ改めれば詩か賛か語か錄か何かになるだらうと只宛もなく考へて居るらしい。やがて「天然居士は空間を研究し、論語を讀み、燒芋を食ひ、鼻汁を垂らす人である」と言文一致體で一氣呵成に書き流した。何となくごた〳〵した文章である。夫から主人は之を遠慮なく朗讀して、いつになく「ハヽヽヽ面白い」と笑つたが、「鼻汁を垂らすのは、ちと酷だから消さう」と其句丈へ棒を引く。一本で濟む所を二本引き、三本引き、綺麗な併行線を描く。線がほかの行迄食み出しても構はず引いて居る。線が八本竝んでもあとの句が出來ないと見えて、今度は筆を捨てて髯を捻つて見る。文章を髯から捻り出して御覽に入れますと云ふ見幕で猛烈に捻つてはねぢ上げ、ねぢ下ろして居る所へ、茶の間から細君が出て來てぴたりと主人の鼻の先へ坐る。「あなた一寸」と呼ぶ。「なんだ」と主人は水中で銅鑼を叩く樣な聲を出す。返事が氣に入らないと見えて、細君は又「あなた一寸」と出直す。「なんだよ」と今度は鼻の穴へ親指と人さし指を入れて鼻毛をぐつと拔く「今月はちつと足りませんが……」「足りん筈はない、醫者へも藥禮は濟ましたし、本屋へも先月拂つたぢやないか、今月は餘らなければならん」と澄まして拔き取つた鼻毛を天下の奇觀の如く眺めて居る。「夫でもあなたが御飯を召し上らんで麵麭を御食べになつたり、ジャムを御舐めになるものですから」「元來ジャムを幾罐舐めたのかい」「今月は八つ入りましたよ」「八つ？そんなに舐めた覺えはない」「あなた許りぢやありません、子供も舐めます」「いくら舐めたつて五六圓位なものだ」と主人は平氣な顏で鼻毛を一本々々丁寧に原稿紙の上へ植ゑ附ける。肉が附いて居るのでぴんと針を立てた如くに立つ。主人は思はぬ發見をして感じ入つた體で、ふつと吹いて見る。粘着力が強いので決して飛ばない。「いやに頑固だな」と主人は一生懸命に吹く。「ジャム許りぢやないんです、外に買はなけりやならない物もあります」と細君に大いに不平な氣色を兩頰に漲らす。「あるかも知れないさ」と主人は又指を突き込んでぐいと鼻毛を拔く。赤いのや、黑いのや、種々の色が交る中に一本眞白なのがある。大いに驚いた樣子で穴の開く程眺めて居た主人は指の股へ挾んだ儘、其鼻毛を細君の顏の前へ出す。「あら、いやだ」と細君は顏をしかめて、主人の手を突き戻す。「一

寸見ろ、鼻毛の白髪だ」と主人は大いに感動した様子である。さすがの細君も笑ひながら茶の間へ這入る。經濟問題は斷念したらしい。主人は又天然居士に取り懸かる。

鼻毛で細君を追ひ拂つた主人は、先づ是で安心と云はぬ許りに鼻毛を拔いては原稿をかかうと焦る體であるが、中々筆は動かない。「燒芋を食ふも蛇足だ、割愛しよう」と遂に此句も抹殺する。「香一炷もあまり唐突だから已めろ」と惜し氣もなく筆誅する。餘す所は「天然居士は空間を研究し、論語を讀む人である」と云ふ一句になつて仕舞つた。主人は是では何だか簡單すぎる樣だなと考へて居たが、えゝ面倒臭い、文章は御廢しにして、銘丈にしろと、筆を十文字に揮つて原稿紙の上へ下手な文人畫の蘭を勢よくかく。折角の苦心も一字殘らず落第となつた。夫から裏を返して、「空間に生れ、空間を究め、空間に死す。空たり間たり天然居士、噫」と意味不明な語を連ねて居る所へ例の如く迷亭が這入つて來る。迷亭は人の家も自分の家も同じものと心得て居るのか案內も乞はず、づかづか上がつてくる、のみならず時には勝手口から飄然と舞ひ込む事もある。心配、遠慮、氣兼、苦勞を生れる時どこかへ振り落とした男である。

「又巨人引力かね」と立つた儘主人に聞く。「さう何時でも巨人引力許り書いては居らんさ。天然居士の墓銘を撰して居る所なんだ」と大袈裟な事を云ふ。「天然居士と云ふなあ矢張り偶然童子の樣な戒名かね」と迷亭は相變らず出鱈目を云ふ。「偶然童子と云ふのもあるのかい」「なに有りやしないが、先づ其見當だらうと思つて居らあね」「偶然童子と云ふのは僕の知つたものぢやない樣だが、天然居士と云ふのは君の知つてる男だぜ」「一體だれが天然居士なんて名を附けて澄まして居るんだい」「例の曾呂崎の事だ。卒業して大學院へ這入つて空間論と云ふ題目で研究して居たが、餘り勉強し過ぎて腹膜炎で死んで仕舞つた。曾呂崎はあれでも僕の親友なんだからな」「親友でもいゝさ、決して惡いとは云やしない。然し其曾呂崎を天然居士に變化させたのは一體誰の所作だい」「僕さ、僕がつけてやつたんだ。元來坊主のつける戒名程俗なものは無いからな」と天然居士は餘程雅な名の樣に自慢する。迷亭は笑ひながら「まあ其墓碑銘と云ふ奴を見せ給へ」と原稿を取り上げて「何だ……空間に生れ、空間を究め、空間に死す、空たり間たり天然居士噫」と大きな聲で讀み上げる。「成程是あ善い、天然居士相當の所だ」

主人は嬉しさうに「善いだらう」と云ふ。「此墓銘を澤庵石へ彫り附けて本堂の裏手へ力石の樣に抛り出して置くんだね。雅でいゝや、天然居士も浮ばれる譯だ」「僕もさうしようと思つて居るのさ」と主人は至極眞面目に答へたが「僕あ一寸失敬するよ、ぢき歸るから、猫にでもからかつて居て呉れ給へ」と迷亭の返事も待たず風然と出て行く。

計らずも迷亭先生の接待掛りを命ぜられて無愛想な顏もして居られないから、ニヤーニヤーと愛嬌を振り蒔いて膝の上へ這ひ上がつて見た。すると迷亭は「イヨー大分肥つたな、どれ」と無作法にも吾輩の襟髪を攫んで宙へ釣るす。「あと足を斯うぶら下げては、鼠は捕れさうもない、……どうです奥さん、此猫は鼠を捕りますかね」と吾輩許りでは不足だと見えて、隣の室の細君に話しかける。「鼠所ぢや御座いません。御雜煮を食べて踊りををどるんですもの」と細君は飛んだ所で舊惡を訐く。吾輩は宙乘りをしながらも少々極りが惡かつた。迷亭はまだ吾輩を卸して呉れない。「成程踊りでもをどりさうな顏だ。奥さん此猫は油斷のならない相好ですぜ。昔の草雙紙にある猫又に似て居ますよ」と勝手な事を言ひ乍ら、頻りに細君に話しかける。

細君は迷惑さうに針仕事の手をやめて座敷へ出てくる。

「どうも御退屈樣、もう歸りませう」と茶を注ぎ易へて迷亭の前へ出す。「どこへ行つたんですかね」「どこへ參るにも斷つて行つた事の無い男ですから分りかねますが、大方御醫者へでも行つたんでせう」「甘木さんですか、甘木さんもあんな病人に捕まつちや災難ですな」「へえ」と細君は挨拶の仕樣もないと見えて簡單な答へをする。迷亭は一向頓着しない。「近頃はどうです、少しは胃の加減がいゝんですか」「いゝか惡いか頓と分りません、いくら甘木さんにかゝつたつて、あんなにジャム計り甞めては胃病の直る譯がないと思ひます」と細君は先刻の不平を暗に迷亭に洩らす。「そんなにジャムを甞めるんですか、丸で子供の樣ですね」「ジャム計りぢやないんで、此頃は胃病の藥だとか云つて大根卸しを無暗に甞めますので……」「驚いたな」と迷亭は感嘆する。「何でも大根卸しの中にはヂヤスターゼが有るとか云ふ話を新聞で讀んでからです」「成程、それでジャムの損害を償はうと云ふ趣向ですな。中々考へて居らあ、ハヽヽヽ」と迷亭は細君の訴へを聞いて大いに愉快な氣色である。「此間抔は赤ん坊に迄甞めさせまして……」「ジャムをですか」「いゝえ大根卸しを……あなた。坊や御父樣がうまいものをやるから御出でつて、――たまに子供を可愛がつて呉れるかと思ふと、そんな馬鹿な事計りをするんです。二三日前には中の娘を抱いて簞笥の上へ上げましてね……」「どう云ふ趣向がありました」と迷亭は何を聞いても趣向づくめに解釋する。「なに趣向も何も有りやしません。只其上から飛び下りて見ろと云ふんですわ、三つや四つの女の子ですもの、そんな御轉婆が出來る筈がないです」「成程こりや趣向が無さ過ぎましたね。然しあれで腹の中は毒のない善人ですよ」「あの上腹の中に毒があつちや、辛抱は出來ませんわ」と細君は大いに氣焔を揚げる。「まあそんなに不平を云はんでも善いでさあ。斯うやつて不足なく其日々々が暮らして行かれゝば上の分ですよ。苦沙彌君抔は道樂はせず、服裝にも構はず、地味に世帶向きに出來上がつた人でさあ」と迷亭は柄にない說教を陽氣な調子でやつて居る。「所があなた大違ひで……」「何か內々でやりますかね。油斷のならない世の中だからね」と飄然とふは〳〵した返事をする。「ほかの道樂はないですが、無暗に讀みもしない本計り買ひましてね。それも善い加減に見計らつて買つて呉れると善いんですけれど、勝手に丸善へ行つちや何冊でも取つて來て、月末になると知らん顏をして居るんですもの、去年の暮なんか、月々のが溜つて大變困りました」「なあに書物なんか取つて來る丈取つて來て構はんですよ。拂ひをとりに來たら、今にやる〳〵と云つて居りや歸つて仕舞ひまさあ」「それでも、さう何時迄も引つ張る譯には參りませんから」と細君は憮然として居る。「それぢや、譯を話して書籍費を削減させるさ」「どうして、そんな事を云つたつて、中々聞くものですか。此間抔は貴樣は學者の妻にも似合はん、毫も書籍の價値を解して居らん。昔し羅馬に斯う云ふ話がある。後學の爲聞いて置けと云ふんです」「そりや面白い、どんな話ですか」迷亭は乘り氣になる。細君に同情を表して居るといふより寧ろ好奇心に驅られて居る。「何でも昔し羅馬に樽金とか云ふ王樣があつて……」「樽金？ 樽金はちと妙ですぜ」「私は唐人の名なんか六づかしくて覺えられませんわ。何でも七代目なんださうです」「成程七代目樽金は妙ですな。ふん其七代目樽金がどうかしましたかい」「あら、あなた迄冷かしては立つ瀬がありませんわ。知つていらつしやるなら敎へて下さればいゝぢやありません

か、人の悪い」と細君は迷亭へ食つて掛かる。

「何、冷かすなんて、そんな人の悪い事をする僕ぢやない。只七代目樽金は振つてると思つてね……えゝお待ちなさいよ、羅馬の七代目の王様ですね。からつと、慥かには覺えて居ないがタークヰン・ゼ・プラウドの事でせう。まあ誰でもいゝ、その王様がどうしました」「その王様の所へ一人の女が本を九冊持つて來て買つて呉れないかと云つたんださうです」「成程」「王様がいくらなら賣るといつて聞いたら大變な高い事を云ふんですつて。餘り高いもんだから少し負けないかと云ふと其女がいきなり九冊の内の三冊を火にくべて焚いて仕舞つたさうです」「惜しい事をしましたな」「其本の内には豫言か何か外で見られない事が書いてあるんですつて」

「へえー」「王様は九冊が六冊になつたから少しは價も減つたらうと思つて六冊でいくらだと聞くと、矢張り元の通り一文も引かないさうです。それは亂暴だと云ふと、其女は又三冊をとつて火にくべたさうです。王様はまだ未練があつたと見えて、餘つた三冊をいくらで賣ると聞くと、矢張り九冊分のねだんを呉れと云ふさうです。九冊が六冊になり、六冊が三冊になつても、代價は元の通り一厘も引かない、それを引かせようとすると、殘つてる三冊も火にくべるかも知れないので、王様はとう〳〵高い御金を出して焚け餘りの三冊を買つたんですつて……どうだ此話で少しは書物の難有味が分つたか、どうだと力むのですけれど、私にや何が難有いんだか、まあ分りませんね」と細君は一家の見識を立てて迷亭の返答を促す。さすがの迷亭も少し窮したと見えて、袂からハンケチを出して吾輩をじやらして居たが、「然し奥さん」と急に何か考へ附いた樣に大きな聲を出す。「あんなに本を買つて矢鱈に詰め込むものだから人から少しは學者だとか何とか云はれるんですよ。此間ある文學雑誌を見たら苦沙彌君の評が出て居りましたよ」「ほんとに?」と細君は向き直る。主人の評判が氣にかゝるのは、矢張り夫婦と見える。

「何とかいてあつたんです」「なあに二三行許りですがね。苦沙彌君の文は行雲流水の如しとありましたよ」細君は少しにこ〳〵して「それぎりですか」「其次にね――出づるかと思へば忽ち消え、逝いては長しなへに歸るを忘るとありましたよ」細君は妙な顔をして「賞めたんでせうか」と心元ない調子である。「まあ賞めた方でせうな」と迷亭は澄ましてハンケチを吾輩の眼の前にぶら下げる。「書物は商賣道具で仕方も御座んすまいが、餘つ程偏屈でしてねえ」迷亭は又別途の方面から來たなと思つて「偏屈は少々偏屈ですね、學問をするものはどうせあんなですよ」と調子を合はせる樣な、辯護をする樣な、不即不離の妙答をする。「先達て抔は學校から歸つてすぐわきへ出るのに着物を着換へるのが面倒だものですから、あなた、外套も脱がないで、机へ腰を掛けて御飯を食べるのです。御膳を炬燵櫓の上へ乘せまして――私は御櫃を抱へて坐つて見て居りましたが可笑しくつて……」

「何だかハイカラ首實檢の樣ですな。然しそんな所が苦沙彌君の苦沙彌君たる所で――兎に角月並でない」と切ない褒め方をする。「月並か月並でないか女には分りませんが、なんぼ何でも、餘り亂暴ですわ」「然し月並より好いですよ」と無暗に加勢すると、細君は不滿な樣子で、「一體月並々々と皆さんが、よく仰しやいますが、どんなのが月並なんです」と開き直つて月並の定義を質問する。「月並ですか、月並と云ふと――左樣、ちと説明し惡いのですが……」「そんな曖昧なものなら月並だつて好ささうなものぢやありませんか」と細君は女人一流の論理法で詰め寄せる。「曖昧ぢやありませんよ、ちやんと分つて居ます、只説明し惡い丈の事でさあ」「何でも

自分の嫌な事を月並と云ふんでせう」と細君は我知らず穿つた事を云ふ。迷亭もかうなると何とか月並の處置を附けなければならぬ仕儀となる。「奥さん、月並と云ふのはね、先づ年は二八か二九からぬと言はず語らず物思ひの間に寝轉んで居て、此日や天氣晴朗とくると必ず一瓢を携へて墨堤に遊ぶ連中を云ふんです」「そんな連中があるでせうか」と細君は分らんものだから好い加減な挨拶をする。「何だかごた／＼して私には分りませんわ」と遂に我を折る。「それぢや馬琴の胴へメジヨオ・ペンデニスの首をつけて、一二年歐洲の空氣で包んで置くんですね」「さうすると月並が出來るでせうか」迷亭は返事をしないで笑つて居る。「何、そんな手數のかかる事をしないでも出來ます。中學校の生徒に白木屋の番頭を加へて二で割ると立派な月並が出來上がります」「さうでせうか」と細君は首を捻つた儘納得し兼ねたと云ふ風情に見える。

「君まだ居るのか」と主人はいつの間にやら歸つて來て、迷亭の傍へ坐る。「まだ居るのかは些と酷だな、すぐ歸るから待つて居給へと言つたぢやないか」「萬事あれなんですもの」と細君は迷亭を顧る。「今君の留守中に君の逸話を殘らず聞いて仕舞つたぜ」「女は兎角多辯でいかん、人間も此猫位沈默を守るといゝがな」と主人は吾輩の頭を撫でゝ見せる。「君は赤ん坊に大根卸しを嘗めさしたさうだな」「ふむ」と主人は笑つたが、「赤ん坊でも近頃の赤ん坊は中々利口だぜ。其れ以來、坊や辛いのはどこと聞くと屹度舌を出すから妙だ」「丸で犬に藝を仕込む氣で居るから殘酷だ。時に寒月はもう來さうなものだな」「寒月が來るのかい」と主人は不審な顔をする。「來るんだ。午後一時迄に苦沙彌の家へ來いと端書を出して置いたから」「人の都合も聞かんで勝手な事をする男だ。寒月を呼んで何をするんだい」「なあに、今日のはこつちの趣向ぢやない、寒月先生自身の要求さ。先生何でも理學協會で演說をするとか云ふのでね。其稽古をするから、僕に聽いてくれと云ふから、そりや丁度いゝ、苦沙彌にも聞かしてやらうと云ふのでね。そこで君の家へ呼ぶ事にして置いたのさ――なあに、君はひま人だから丁度いゝやね――差支へなんぞある男ぢやない、聞くがいゝさ」と迷亭は獨りで呑み込んで居る。「物理學の演說なんか僕にや分らん」と主人は少々迷亭の專斷を憤つたものゝ如くに云ふ。「所が其問題がマグネ附けられたノッヅルに就いて抔と云ふ乾燥無味なものぢやないんだ。首縊りの力學と云ふ脫俗超凡な演題なのだから傾聽する價値があるさ」「君は首を縊り損なつた男だから傾聽するが好いが、僕なんざあ……」「歌舞伎座で惡寒がする位の人間だから聞かれないと云ふ結論は出さうもないぜ」と例の如く輕口を叩く。細君はホヽと笑つて主人を顧ながら次の間へ退く。主人は無言の儘吾輩の頭を撫でる。此時のみは非常に丁寧な撫で方であつた。

それから約七分位すると注文通り寒月君が來る。今日は晚に演說をするといふので例になく立派なフロックを着て、洗濯し立ての白襟を聳かして、男振りを二割方上げて、「少し後れまして」と落ち附き拂つて挨拶をする。「さつきから二人で大待ちに待つた所なんだ。早速願はう、なあ君」と主人を見る。主人も已むを得ず「うむ」と生返事をする。寒月君はいそがない。「コップへ水を一杯頂戴しませう」と云ふ。「いよ／＼本式にやるのか、次には拍手の請求と御出でなさるだらう」と迷亭は獨りで騷ぎ立てる。寒月君は內隱しから草稿を取り出して、徐ろに「稽古ですから、御遠慮なく御批評を願ひます」と前置をして、愈演說の御浚ひを始める。

「罪人を絞罪の刑に處すると云ふ事は重にアングロサクソン民族間に行はれた方法でありま

して、夫より古代に溯つて考へますと、首縊りは重に自殺の方法として行はれた者であります。猶太人中に在つては罪人を石を抛け附けて殺す習慣であつたさうで御座います。舊約全書を研究して見ますと所謂ハンギングなる語は罪人の死體を釣るして野獸又は肉食鳥の餌食とする意義と認められます。ヘロドタスの說に從つて見ますと、猶太人はエジプトを去る以前から夜中死骸を曝されることを痛く忌み嫌つた樣に思はれます。エジプト人は罪人の首を斬つて胴丈を十字架に釘附けにして夜中曝し物にしたさうで御座います。波斯人は……」「寒月君首縊りと緣が段々遠くなる樣だが大丈夫かい」と迷亭が口を入れる。「是から本論に這入る所ですから、少々御辛抱を願ひます。……偖て波斯人はどうかと申しますと是も矢張り處刑には磔を用ひた樣で御座います。但し生きて居るうちに張附けに致したものか、死んでから釘を打つたものか、其邊はちと分りかねます……」「そんな事は分らんでもいゝさ」と主人は退屈さうに欠伸をする。「まだ色々御話し致したい事も御座いますが、御迷惑であらつしやいませうから……」「あらつしやいませうより、入らしやいませうの方が聞きいゝよ、ねえ苦沙彌君」と又迷亭が咎め立てをすると、主人は「どつちでも同じ事だ」と氣のない返事をする。「偖て愈、本題に入りまして辯じます」「辯じますなんて講釋師の云ひ草だ。演舌家はもつと上品な詞を使つて貰ひ度いね」と迷亭先生又交ぜ返す。「辯じますが下品なら何と云つたらいゝでせう」と寒月君は少々むつとした調子で問ひかける。「迷亭のは聽いて居るのか、交ぜ返して居るのか判然しない。寒月君そんな彌次馬に構はず、さつさと遣るが好い」と主人は可成早く難關を切り抜けようとする。「むつとして辯じましたる柳かな、かね」と迷亭は不相變飄然たる事を云ふ。寒月は思はず吹き出す。「眞に處刑として絞殺を用ひましたのは、私の調べました結果によりますると、オヂセーの二十二卷目に出て居ります。即ち彼のテレマカスがペネロピーの十二人の侍女を絞殺するといふ條で御座います。希臘語で本文を朗讀しても宜しう御座いますが、ちと衒ふ樣な氣味にもなりますから已めに致します。四百六十五行から、四百七十三行を御覽になると分ります」「希臘語云々はよした方がいゝ、さも希臘語が出來ますと云はん許りだ、ねえ苦沙彌君」「それは僕も贊成だ。そんな物欲しさうな事は言はん方が奥床しくて好い」と主人はいつになく直ちに迷亭に加擔する。兩人は毫も希臘語が讀めないのである。「それでは此兩三句は今晩拔く事に致しまして次を辯じ――えゝ申し上けます」

「此絞殺を今から想像して見ますと、之を執行するに二つの方法があります。第一は、彼のテレマカスがユーミアス及びフイリーシヤスの援けを藉りて繩の一端を柱へ括りつけます。そして其繩の所々へ結び目を穴に開けて此穴へ女の頭を一つ宛入れて置いて、片方の端をぐいと引つ張つて釣るし上けたものと見るのです」「つまり西洋洗濯屋のシヤツの樣に女がぶら下がつたと見れば好いんだらう」「其通りで、それから第二は繩の一端を前の如く柱へ括り附けて、他の一端も始めから天井へ高く釣るのです。そして其の高い繩から何本か別の繩を下げて、夫に結び目の輪になつたのを附けて女の頸を入れて置いて、いざと云ふ時に女の足臺を取りはづすと云ふ趣向なのです」「たとへて云ふと繩暖簾の先へ提灯玉を釣るした樣な景色と思へば間違ひはあるまい」「提灯玉と云ふ玉は見た事がないから何とも申されませんが、もしあるとすれば其邊の所かと思ひます。――夫で是から力學的に第一の場合は到底成立すべきも

のでないと云ふ事を證據立てて御覽に入れます」「面白いな」と迷亭が云ふと「うん面白い」と主人も一致する。

「先づ女が同距離に釣られると假定します。又一番地面に近い二人の女の首と首を繋いで居る繩はホリゾンタルと假定します。そこで$\alpha_1\alpha_2\cdots\cdots\alpha_6$を繩が地平線と形づくる角度とし、$T_1T_2\cdots\cdots T_6$を繩の各部が受ける力と見做し、$T_7=X$は繩の尤も低い部分の受ける力とします。Wは勿論女の體重と御承知下さい。どうです御解りになりましたか」

迷亭と主人は顔を見合せて「大抵分つた」と云ふ。但し此大抵と云ふ度合は兩人が勝手に作つたのだから他人の場合には應用が出來ないかも知れない。「偖て多角形に關する御存じの平均性理論によりますと、下の如く十二の方程式が立ちます。$T_1\cos\alpha_1=T_2\cos\alpha_2$……(1) $T_2\cos\alpha_2=T_3\cos\alpha_3$……(2)……」「方程式は其位で澤山だらう」と主人は亂暴な事を云ふ。「實は此式が演説の首腦なんですが」と寒月君は甚だ殘り惜し氣に見える。「夫ぢや首腦丈は逐つて何ふ事にしようぢやないか」と迷亭も少々恐縮の體に見受けられる。「この式を略して仕舞ふと折角の力學的研究が丸で駄目になるのですが……」

「何、そんな遠慮は入らんから、ずん〳〵略すさ」と主人は平氣で云ふ。「それでは仰せに從つて、無理ですが略しませう」「それがよからう」と迷亭が妙な所で手をぱち〳〵と叩く。

「夫から英國へ移つて論じますと、ベオウルフの中に絞首架即ちガルガと申す字が見えますから絞罪の刑は此時代から行はれたものに違ないと思はれます。ブラクストーンの説に依ると、若し絞罪に處せられる罪人が、萬一繩の具合で死に切れぬ時には再度同樣の刑罰を受くべきものだとしてありますが、妙な事にはピヤース・プローマンの中には假令兇漢でも二度絞める法はないと云ふ句があるのです。まあどつちが本當か知りませんが、惡くすると一度で死ねない事が往々實例にあるので。千七百八十六年に有名なフイツゼラルドと云ふ惡漢を絞めた事がありました。所が妙なはずみで一度目には臺から飛び降りるときに繩が切れて仕舞つたのです。又やり直すと今度は繩が長過ぎて足が地面へ着いたので矢張り死ねなかつたのです。とう〳〵三返目に見物人が手傳つて往生さしたと云ふ話です」「やれ〳〵」と迷亭はこんな所へくると急に元氣が出る。「本當に死損ひだな」と主人迄浮かれ出す。「まだ面白い事があります、首を縊ると脊が一寸許り延びるさうです。是は慥かに醫者が計つて見たのだから間違ひはありません」「それは新工夫だね、どうだい、苦沙彌抔はちと釣つて貰つちや、一寸延びたら人間並になるかも知れないぜ」と迷亭が主人の方を向くと、主人は案外眞面目で「寒月君、一寸位脊が延びて生き返る事があるだらうか」と聞く。「それは駄目に極まつて居ます。釣られて脊髓が延びるからなんで、早く云ふと脊が延びると云ふより壞れるんですからね」「それぢや、まあ止めよう」と主人は斷念する。

演説の續きは、まだ中々長くあつて寒月君は首縊りの生理作用にまで論及する筈で居たが、迷亭が無暗に風來坊の樣な珍語を挾むのと、主人が時々遠慮なく欠伸をするので、遂に中途でやめて歸つて仕舞つた。其晩は寒月君が如何なる態度で如何なる雄辯を振つたか、遠方で起つた出來事の事だから吾輩には知れよう譯がない。

二三日は事もなく過ぎたが、或日の午後二時頃又迷亭先生は例の如く空々として偶然童子の如く舞ひ込んで來た。座に着くと、いきなり「君越智東風の高輪事件を聞いたかい」と旅順陷落の號外を知らせに來た程の勢を示す。「知ら

ん、近頃は合はんから」と主人は平生の通り陰氣である。「けふは其の東風子の失策物語を御報道に及ばうと思つて忙しい所を態々來たんだよ」「またそんな御出な事を云ふ、君は全體不埒な男だ」「ハヽヽ、不埒と云はんより寧ろ無埒の方だらう。それ丈は鳥渡區別して置いて貰はんと名譽に關係するからな」「おんなし事だ」と主人は嘯いて居る。「純然たる天然居士の再來だ。―此前の日曜に東風子が高輪泉岳寺に行つたんださうだ。此の寒いのによせばいゝのに。――第一今時泉岳寺抔へ參るのはさも東京を知らない、田舍者の樣ぢやないか」「それは東風の勝手さ。君がそれを留める權利はない」「成程權利は正にない。權利はどうでもいゝが、あの寺内に義士遺物保存會と云ふ見世物があるだらう。君知つてるか」「うんにや」「知らない？だつて泉岳寺へ行つた事はあるだらう」「いゝや」「ない？ こりや驚いた。道理で大變東風を辯護すると思つた。江戸つ子が泉岳寺を知らないのは情ない」「知らなくても教師は務まるからな」と主人は愈天然居士になる。「そりや好いが、其展覽場へ東風が這入つて見物して居ると、そこへ獨逸人が夫婦連れで來たんだつて。それが最初は日本語で東風に何か質問したさうだ。所が先生例の通り獨逸語が使つて見度くて溜らん男だらう。そら二口三口べら〳〵遣つて見たとさ。すると存外うまく出來たんだ―後で考へるとそれが災の本さね」「それからどうした」と主人は遂に釣り込まれる。「獨逸人が大高源吾の蒔繪の印籠を見て、『之を買ひ度いが賣つてくれるだらうか』と聞くんださうだ。其時東風の返事が面白いぢやないか、日本人は清廉の君子許りだから到底駄目だと云つたんだとさ。其邊は大分景氣がよかつたが、夫から獨逸人の方では恰好な通辯を得た積りで頻りに聞くさうだ」「何を？」「それがさ、何だか分る位なら心配はないんだが、早口で無暗に問ひ掛けるものだから少しも要領を得ないのさ。たまに分るかと思ふと鳶口や掛矢の事を聞かれる。西洋の鳶口や掛矢は先生何と翻譯して善いのか習つた事が無いんだから弱らあね」「尤もだ」と主人は教師の身の上に引き較べて同情を表する。「所へ閑人が物珍しさうにぽつ〳〵集まつてくる。仕舞ひには東風と獨逸人を四方から取り卷いて見物する。東風は顏を赤くしてへどもどする。初めの勢に引き易へて先生大弱りの體さ」「結局どうなつたんだい」「仕舞ひに東風が我慢出來なくなつたと見えてさいならと日本語で云つてぐん〳〵歸つて來たさうだ。さいならは少し變だ、君の國ではさよならをさいならと云ふかつて聞いて見たら、何、矢つ張りさよならですが相手が西洋人だから調和を計るために、さいならにしたんだつて、東風子は苦しい時でも調和を忘れない男だと感心した」「さいならはいゝが西洋人はどうした」「西洋人はあつけに取られて茫然と見て居たさうだ、ハヽヽヽ面白いぢやないか」「別段面白い事もない樣だ。それを態々報知に來る君の方が餘つ程面白いぜ」と主人は卷煙草の灰を火桶の中へはたき落とす。折柄格子戸のベルが飛び上がる程鳴つて、「御免なさい」と鋭い女の聲がする。迷亭と主人は思はず顏を見合はせて沈默する。

主人のうちへ女客は稀有だなと見て居ると、かの鋭い聲の所有主は縮緬の二枚襲を疊へ擦り附けながら這入つて來る。年は四十の上を少し越した位だらう。拔け上がつた生え際から前髪が堤防工事の樣に高く聳えて、少くとも顏の長さの二分の一丈天に向つてせり出して居る。眼が切通しの坂位な勾配で、直線に釣るし上げられて左右に對立する。直線とは鯨より細いといふ形容である。鼻丈は無暗に大きい。人の鼻を盜んで來て顏の眞中へ据ゑ附けた樣に見える。

坪程の小庭へ招魂社の石燈籠を移した時の如く、獨りで幅を利かして居るが、何となく落ち附かない。其鼻は所謂鍵鼻で、ひと度は精一杯高くなつて見たが、是では餘りだと中途から謙遜して、先の方へ行くと、初めの勢に似ず垂れかゝつて、下にある唇を覗き込んで居る。かく著しい鼻だから、此女が物を云ふときは口が物を云ふと云はんより、鼻が口をきいて居るとしか思はれない。吾輩は此の偉大なる鼻に敬意を表する爲、以來は此女を稱して鼻子鼻子と呼ぶ積りである。鼻子は先づ初對面の挨拶を終つて、「どうも結構な御住居ですこと」と座敷中を睨め廻す。主人は「嘘をつけ」と腹の中で言つた儘、ぷか〳〵煙草をふかす。迷亭は天井を見ながら「君、ありや雨洩りか、板の木目か、妙な模様が出て居るぜ」と暗に主人を促す。「無論雨の洩りさ」と主人が答へると、「結構だなあ」と迷亭が澄まして云ふ。鼻子は社交を知らぬ人達だと腹の中で憤る。しばらくは三人鼎坐の儘無言である。

「ちと伺ひたい事があつて、參つたんですが」と鼻子は再び話しの口を切る。「はあ」と主人が極めて冷淡に受ける。これではならぬと鼻子は「實は私はつい御近所で――あの向う横丁の角屋敷なんですが」「あの大きな西洋館の倉のあるうちですか、道理であすこには金田と云ふ標札が出て居ますな」と主人は漸く金田の西洋館と金田の倉を認識した様だが、金田夫人に對する尊敬の度合は前と同様である。「實は宿が出まして御話しを伺ふんですが、會社の方が大變忙しいもんですから」と今度は少し利いたらうといふ眼附をする。主人は一向動じない。鼻子の先刻からの言葉遣ひが、初對面の女としては餘り存在過ぎるので既に不平なのである。「會社でも一つぢや無いんです。二つも三つも兼ねて居るんです。夫にどの會社でも重役なんで――多分御存知でせうが」是でも恐れ入らぬかと云ふ顏附をする。元來こゝの主人は博士とか大學教授とかいふと非常に恐縮する男であるが、妙な事には實業家に對する尊敬の度は極めて低い。實業家よりも、中學校の先生の方がえらいと信じて居る。よし信じて居らんでも融通の利かぬ性質として、到底實業家、金滿家の恩顧を蒙る事は覺束ないと諦めて居る。いくら先方が勢力家でも、財産家でも、自分が世話になる見込みのないと思ひ切つた人の利害には極めて無頓着である。夫だから學者社會を除いて他の方面の事には極めて迂濶で、ことに實業界抔では、どこに、だれが何をして居るか一向知らん。知つても尊敬畏服の念は毫も起らんのである。鼻子の方では天が下の一隅にこんな變人が矢張り日光に照らされて生活して居ようとは夢にも知らない。今迄世の中の人間にも大分接して見たが、金田の妻ですと名乘つて、急に取扱ひの變らない場合はない。どこの會へ出ても、どんな身分の高い人の前でも立派に金田夫人で通して行かれる。況んやこんな燻り返つた老書生に於てをやで、私の家は向う横丁の角屋敷ですとさへ云へば、職業抔は聞かぬ先から驚くだらうと豫期して居たのである。

「金田つて人を君知つてるか」と主人は無雜作に迷亭に聞く。「知つてるとも、金田さんは僕の伯父の友達だ。此間なんざ園遊會へ御出でになつた」と迷亭は眞面目な返事をする。「へえ君の伯父さんてえな誰だい」「牧山男爵さ」と迷亭は愈眞面目である。主人が何か云はうとして云はぬ先に、鼻子は急に向き直つて迷亭の方を見る。迷亭は大島紬に古渡更紗か何か重ねて澄まして居る。「おや、あなたが牧山様の――何でいらつしやいますか、些とも存じませんで、甚だ失禮を致しました。牧山様には始終御世話になると、宿で毎々御噂を致して居ります」

と急に丁寧な言葉使ひをして、御まけに御辭儀迄する。迷亭は「へえゝ何、ハ、、、」と笑つて居る。主人はあつ氣に取られて無言で二人を見て居る。「慥か娘の緣邊の事に就きましても色色牧山さまへ御心配を願ひましたさうで……」「へえー、さうですか」と是許りは迷亭にも些と唐突過ぎたと見えて、一寸魂消た樣な聲を出す。「實は方々から呉れ〳〵と申し込みは御座いますが、こちらの身分もあるもので御座いますから、滅多な所へも片附けられませんので……」「御尤もで」と迷亭は漸く安心する。「それに就いて、あなたに伺はうと思つて上がつたんですがね」と鼻子は主人の方を見て急に存在な言葉に返る。「あなたの所へ水島寒月といふ男が度度上がるさうですが、あの人は全體どんな風な人でせう」「寒月の事を聞いて、何にするんです」と主人は苦々敷く云ふ。「やはり御令孃の御婚儀上の關係で、寒月君の性行の一斑を御承知になりたいといふ譯でせう」と迷亭が氣轉を利かす。「それが伺へれば大變都合が宜しいので御座いますが……」「それぢや、御令孃を寒月に御遣りになりたいと仰しやるんで」「遣りたいなんてえんぢや無いんです」と鼻子は急に主人を參らせる。「外にも段々口が有るんですから、無理に貰つて頂かないだつて困りやしません」「それぢや寒月の事なんか聞かんでも好いでせう」と主人も躍起となる。「然し御隱しなさる譯もないでせう」と鼻子も少々喧嘩腰になる。迷亭は雙方の間に坐つて、銀煙管を軍配團扇の樣に持つて、心の裡で八卦よいやよいやと怒鳴つて居る。「ぢやあ寒月の方で是非貰ひたいとでも云つたのですか」と主人が正面から鐵砲を喰はせる。「貰ひたいと云つたんぢやないんですけれども……」「貰ひたいだらうと思つていらつしやるんですか」と主人は此婦人鐵砲に限ると覺つたらしい。「話しはそんなに運んでるんぢやありませんが――寒月さんだつて滿更嬉しくない事もないでせう」と土俵際で持ち直す。「寒月が何かその御令孃に戀着したといふ樣な事でもありますか」あるなら云つて見ろと云ふ權幕で主人は反り返る。「まあ、そんな見當でせうね」今度は主人の鐵砲が少しも功を奏しない。今迄面白氣に行司氣取りで見物して居た迷亭も鼻子の一言に好奇心を挑發されたものと見えて、煙管を置いて前へ乘り出す。「寒月が御孃さんに附け文でもしたんですか、是や愉快だ、新年になつて逸話が又一つ殖えて話しの好材料になる」と一人で喜んで居る。「附け文ぢやないんです、もつと烈しいんでさあ、御二人とも御承知ぢやありませんか」と鼻子は乙にからまつて來る。「君知つてるか」と主人は狐附きの樣な顏をして迷亭に聞く。迷亭も馬鹿氣た調子で、「僕は知らん、知つて居りや君だ」と詰まらん所で謙遜する。「いえ御兩人共御存じの事ですよ」と鼻子丈大得意である。「へえー」と御兩人は一度に感じ入る。「御忘れになつたら私から御話しをしませう。去年の暮向島の阿部さんの御屋敷で演奏會があつて、寒月さんも出掛けたぢやありませんか。其晩歸りに吾妻橋で何かあつたでせう――詳しい事は言ひますまい、當人の御迷惑になるかも知れませんから――あれ丈の證據がありや充分だと思ひますが、どんなものでせう」と金剛石入りの指環の嵌まつた指を、膝の上へ並べてつんと居ずまひを直す。偉大なる鼻が益異彩を放つて、迷亭も主人も有れども無きが如き有樣である。

主人は無論、さすがの迷亭も此不意擊には膽を抜かれたものと見えて、しばらくは呆然として瘧の落ちた病人の樣に坐つて居たが、驚愕の箍がゆるんで漸々持前の本態に復すると共に、滑稽と云ふ感じが一度に吶喊してくる、兩人は申し合はせた如く、ハ、、、」と笑ひ崩れ

る。鼻子許りは少し當てが外れて、此際笑ふのは甚だ失禮だと兩人を睨みつける。「あれが御孃さんですか。成程こりやいゝ、仰しやる通りだ、ねえ苦沙彌君、全く寒月は御孃さんを戀つてるに相違ないね……もう隱したつて仕樣がないから白狀しようぢやないか」「ウフン」と主人は言つた儘である。「本當に御隱しなさつても不可ませんよ、ちやんと種は上がつてるんですからね」と鼻子は又得意になる。「かうなりや仕方がない。何でも寒月君に關する事實は御參考の爲めに陳述するさ。おい苦沙彌君、君が主人だのに、さう、にや／＼笑つて居ては埒があかんぢやないか。實に祕密といふものは恐ろしいものだねえ。いくら隱しても、どこからか露見するからな。――然し不思議と云へば不思議ですねえ、金田の奧さん、どうして此祕密を御探知になつたんです、實に驚きますな」と迷亭は一人で喋舌る。「私の方だつて、ぬかりはありませんやね」と鼻子はしたり顏をする。「あんまり、ぬかりが無さ過ぎる樣ですぜ。一體誰に御聞きになつたんです」「ぢき此裏に居る車屋の神さんからです」「あの黒猫の居る車屋ですか」と主人は眼を丸くする。「えゝ、寒月さんの事ぢや、餘つ程使ひましたよ。寒月さんが、こゝへ來る度に、どんな話しをするかと思つて車屋の神さんを頼んで一々知らせて貰ふんです」「そりや苛い」と主人は大きな聲を出す。「なあに、あなたが何をなさらうと仰しやらうと、夫に構つてるんぢやないんです。寒月さんの事丈ですよ」「寒月の事だつて、誰の事だつて――全體あの車屋の神さんは氣に食はん奴だ」と主人は一人怒り出す。「然しあなたの垣根のそとへ來て立つて居るのは向うの勝手ぢやありませんか。話しが聞こえてわるけりや、もつと小さい聲でなさるか、もつと大きなうちへ御這入んなさるがいゝでせう」と鼻子は少しも赤面した樣子がない。「車屋許りぢやありません。新道の二絃琴の師匠からも大分色々な事を聞いて居ます」「寒月の事をですか」「寒月さん許りの事ぢやありません」と少し凄い事を云ふ。主人は恐れ入るかと思ふと「あの師匠はいやに上品ぶつて自分丈人間らしい顏をして居る、馬鹿野郎です」「憚り樣、女ですよ。野郎は御門違ひです」と鼻子の言葉使ひは益御里をあらはして來る。是では丸で喧嘩をしに來た樣なものであるが、そこへ行くと迷亭は矢張り迷亭で、此談判を面白さうに聞いて居る。鐵枴仙人が軍鷄の蹴合ひを見る樣な顏をして平氣で聞いて居る。

惡口の交換では到底鼻子の敵でないと自覺した主人は、暫らく沈默を守るの已むを得ざるに至らしめられて居たが、漸く思ひ附いたか、「あなたは寒月の方から御孃さんに戀着した樣にばかり仰しやるが、私の聞いたんぢや、少し違ひますぜ、ねえ迷亭君」と迷亭の救ひを求める。「うん、あの時の話しぢや、御孃さんの方が、始め病氣になつて――何だか譫語をいつた樣に聞いたね」「なに、そんな事はありません」と金田夫人は判然たる直線流の言葉使ひをする。「それでも、寒月は慥かに○○博士の夫人から聞いたと云つて居ましたぜ」「それがこつちの手なんでさあ、○○博士の奧さんを頼んで寒月さんの氣を引いて見たんでさあね」「○○の奧さんは、夫を承知で引き受けたんですか」「えゝ、引き受けて貰ふたつて、只ぢや出來ませんやね、それやこれやで色々物を使つて居るんですから」「是非寒月君の事を根掘り葉掘り御聞きにならなくつちや御歸りにならないと云ふ決心ですかね」と迷亭も少し氣持を惡くしたと見えて、いつになく手障りのあらい言葉を使ふ。「いゝや君、話したつて損の行く事ぢやなし、話さうぢやないか、苦沙彌君。――奧さん、私でも苦沙彌でも寒月君に關する事實で差支へのない事

は、みんな話しますからね、――さう、順を立てて段々聞いて下さると都合がいゝですね」鼻子は漸く納得してそろ〳〵質問を呈出する。一時荒立てた言葉遣ひも迷亭に對しては又もとの如く丁寧になる。「寒月さんも理學士ださうですが、全體どんな事を専門にして居るので御座います」「大學院では地球の磁氣の研究をやつて居ます」と主人が眞面目に答へる。不幸にして其意味が鼻子に分らんものだから「へえー」とは云つたが、怪訝な顔をして居る。「それを勉強すると博士になれませうか」と聞く。「博士にならなければ遣れないと仰しやるんですか」と主人は不愉快さうに尋ねる。「えゝ。只の學士ぢやね、いくらでもありますからね」と鼻子は平氣で答へる。主人は迷亭を見て愈いやな顔をする。「博士になるかならんかは僕等も保證する事が出來んから、ほかの事を聞いて頂く事にしよう」と迷亭もあまり好い機嫌ではない。「近頃でも其地球の――何かを勉強して居るんで御座いませうか」「二三日前は首縊りの力學と云ふ研究の結果を理學協會で演説しました」と主人は何の氣も附かずに云ふ。「おやいやだ、首縊りだなんて餘つ程變人ですねえ。そんな首縊りや何かやつてたんぢや、とても博士にはなれますまいね」「本人が首を縊つちやあ六づ箇敷いですが、首縊りの力學なら成れないとも限らんです」「さうでせうか」と今度は主人の方を見て顔色を窺ふ。悲しい事に力學と云ふ意味がわからんので落ち附き兼ねて居る。然し是しきの事を尋ねては金田夫人の面目に關すると思つてか、只相手の顔色で八卦を立てて見る。主人の顔は澁い。「其外になにか、分り易いものを勉強して居りますまいか」「さうですな、先達て團栗のスタビリチーを論じて併せて天體の運行に及ぶと云ふ論文を書いた事があります」「團栗なんぞでも大學校で勉強するものでせうか」「さあ僕も素人だからよく分らんが、何しろ、寒月君がやる位なんだから、研究する價値があると見えますな」と迷亭は澄まして冷かす。鼻子は學問上の質問は手に合はんと斷念したものと見えて、今度は話頭を轉ずる。「御話しは違ひますが――此御正月に椎茸を食べて前齒を二枚折つたさうぢや御座いませんか」「えゝ其の缺けた所に空也餅がくつ附いて居ましてね」と迷亭は此質問こそ吾繩張り内だと急に浮かれ出す。「色氣のない人ぢや御座いませんか。何たつて楊子を使はないんでせう」「今度逢つたら注意して置きませう」と主人がくす〳〵笑ふ。「椎茸で齒がかける位ぢや、餘程齒の性が惡いと思はれますが、如何なものでせう」「善いとは言はれますまいな――ねえ迷亭」「善い事はないが一寸愛嬌があるよ。あれぎり、まだ塡めない所が妙だ。今だに空也餅引掛所になつてるなあ奇觀だぜ」「齒を塡める小遣がないので缺けなりにして置くんですか、又は物好きで缺けなりにして置くんでせうか」「何も永く前齒缺成を名乘る譯でもないでせうから御安心なさいよ」と迷亭の機嫌は段々回復してくる。鼻子は又問題を改める。「何か御宅に手紙かなんぞ當人の書いたものでも御座いますなら一寸拜見したいもんで御座いますが」「端書なら澤山あります、御覽なさい」と主人は書齋から三四十枚持つて來る。「そんなに澤山拜見しないでも――其内の二三枚丈……」「どれ〳〵僕が好いのを選つてやらう」と迷亭先生は「是なざあ面白いでせう」と一枚の繪端書を出す。「おや繪もかくんで御座いますか、中々器用ですね、どれ拜見しませう」と眺めて居たが「あらいやだ、狸だよ。何だつて選りに選つて狸なんぞかくんでせうね――夫でも狸と見えるから不思議だよ」と少し感心する。「其文句を讀んで御覽なさい」と主人が笑ひながら云ふ。鼻子は下女が新聞を讀む樣に讀み出す。「舊暦の歲

の夜、山の狸が園遊會をやつて盛に舞踏します。其歌に曰く、來いさ、としの夜で、御山婦美も來まいぞ。スッポコポンノポン」何ですこりや、人を馬鹿にして居るぢや御座いませんか」と鼻子は不平の體である。「此天女は御氣に入りませんか」と迷亭が又一枚出す。見ると天女が羽衣を着て、琵琶を彈いて居る。「此天女の鼻が少し小さ過ぎる樣ですが」「何、それが人並ですよ、鼻より文句を讀んで御覽なさい」文句にはかうある。「昔ある所に一人の天文學者がありました。ある夜いつもの樣に高い臺に登つて、一心に星を見て居ますと、空に美しい天女が現はれ、此世では聞かれぬ程の微妙な音樂を奏し出したので、天文學者は身に沁む寒さも忘れて聞き惚れて仕舞ひました。朝見ると其天文學者の死骸に霜が眞白に降つて居ました。是は本當の噺だと、あのうそつきの爺やが申しました」「何の事ですこりや、意味も何もないぢやありませんか、是でも理學士で通るんですかね。ちつと文藝倶樂部でも讀んだらよささうなものですがねえ」と寒月君散々にやられる。迷亭は面白半分に「是やどうです」と三枚目を出す。今度は活版で帆懸舟が印刷してあつて、例の如く其下に何か書き散らしてある。「よべの泊りの十六小女郎、親がないとて、荒磯の千鳥、さよの寢覺の千鳥に泣いた、親は船乘り波の底」「うまいのねえ、感心だ事、話せるぢやありませんか」「話せますかな」「えゝ是なら三味線に乘りますよ」「三味線に乘りや本物だ。是や如何です」と迷亭は無暗に出す。「いえ、もう是丈拜見すれば、ほかのは澤山で、そんなに野暮でないんだと云ふ事は分りましたから」と一人で合點して居る。鼻子は是で寒月に關する大抵の質問を卒へたものと見えて、「是は甚だ失禮を致しました。どうか私の參つた事は寒月さんへは内々に願ひます」と得手勝手な要求をする。寒月の事は何でも聞かなければならないが、自分の方の事は一切寒月へ知らしてはならないと云ふ方針と見える。迷亭も主人も「はあ」と氣のない返事をすると、「いづれ其内御禮は致しますから」と念を入れて言ひながら立つ。見送りに出た兩人が席へ返るや否や、迷亭が「ありや何だい」と云ふと、主人も「ありや何だい」と雙方から同じ問をかける。奧の部屋で細君が怺へ切れなかつたと見えてクツ〳〵笑ふ聲が聞こえる。迷亭は大きな聲を出して、「奧さん〳〵、月並の標本が來ましたぜ。月並もあの位になると中々振つて居ますなあ。さあ遠慮は入らんから、存分御笑ひなさい」

主人は不滿な口氣で「第一氣に喰はん顏だ」と惡らしさうに云ふと、迷亭はすぐ引きうけて、「鼻が顏の中央に陣取つて乙に構へて居るなあ」とあとを附ける。「然も曲がつて居らあ」「少し猫背だね。猫背の鼻は、ちと奇拔過ぎる」と面白さうに笑ふ。「夫を剋する顏だ」と主人は猶口惜しさうである。「十九世紀で賣れ殘つて、二十世紀で店曝しに逢ふと云ふ相だ」と迷亭は妙な事ばかり云ふ。所へ細君が奧の間から出て來て、女丈に、「あんまり惡口を仰しやると、又車屋の神さんにいつけられますよ」と注意する。「少しいつける方が藥ですよ、奧さん」「然し顏の讒訴抔をなさるのは、あまり下等ですわ、誰だつて好んであんな鼻を持つてる譯でもありませんから――夫に相手が婦人ですからね、あんまり苛いわ」と鼻子の鼻を辯護すると、同時に自分の容貌も間接に辯護して置く。「何ひどいものか。あんなのは婦人ぢやない、愚人だ、ねえ迷亭君」「愚人かも知れんが、中々えら者だ。大分引き搔かれたぢやないか」「全體教師を何と心得て居るんだらう」「裏の車屋位に心得て居るのさ。あゝ云ふ人物に尊敬されるには博士に成るに限るよ、一體博士になつて置かんのが君

の不了簡さ、ねえ奥さん、さうでせう」と迷亭は笑ひ乍ら細君を顧る。「博士なんて到底駄目ですよ」と主人は細君に迄見離される。「是でも今になるかも知れん、輕蔑するな。貴樣なぞは知るまいが昔アイソクラチスと云ふ人は九十四歳で大著述をした。ソフオクリスが傑作を出して天下を驚かしたのは、殆ど百歳の高齢だつた。シモニヂスは八十で妙詩を作つた。おれだつて……」「馬鹿々々しいわ、あなたの様な胃病でそんなに永く生きられるものですか」と細君はちやんと主人の壽命を豫算して居る。「失敬な、——甘木さんへ行つて聞いて見ろ——元來御前がこんな皺苦茶な黑木綿の羽織や、つぎだらけの着物を着せて置くから、あんな女に馬鹿にされるんだ。あしたから迷亭の着て居るやうな奴を着るから出して置け」「出して置けつて、あんな立派な御召は御座んせんわ。金田の奥さんが迷亭さんに丁寧になつたのは、伯父さんの名前を聞いてからですよ。着物の咎ぢや御座いません」と細君うまく責任を逃れる。

主人は伯父さんと云ふ言葉を聞いて急に思ひ出した様に、「君に伯父があると云ふ事は、今日始めて聞いた。今迄つひに噂をした事がないぢやないか。本當にあるのかい」と迷亭に聞く。迷亭は待つてたと云はぬ許りに「うん、其伯父さ、其伯父が馬鹿に頑物でねえ——矢張りその十九世紀から連綿と今日迄生き延びて居るんだかね」と主人夫婦を半々に見る。「オホ、、、、面白い事計り仰しやつて、どこに生きていらつしやるんです」「靜岡に生きてますがね、それが只生きてるんぢや無いです。頭にちよん髷を頂いて生きてるんだから恐縮しまさあ。帽子を被れつてえと、おれは此年になるが、まだ帽子を被る程寒さを感じた事がないと威張つてるんです——寒いからもつと寐て入らつしやいと云ふと、人間は四時間寐れば充分だ、四時間以上寐るのは贅澤の沙汰だつて朝暗いうちから起きてくるんです。それでね、おれも睡眠時間を四時間に縮めるには永年修業をしたもんだ、若いうちは何うしても眠たくて行かなんだが、近頃に至つて始めて隨處任意の蔗境に入つて甚だ嬉しいと自慢するんです。六十七になつて寐られなくなるなあ當り前でさあ。修業も絲瓜も入つたものぢやないのに當人は全く克己の力で成功したと思つてるんですからね。それで外出する時には、屹度鐵扇をもつて出るんですがね」「なににするんだい」「何にするんだか分らない、只持つて出るんだね。まあステッキの代り位に考へてるかも知れんよ。所が先達て妙な事がありましてね」と今度は細君の方へ話しかける。「へえー」と細君が差し合ひのない返事をする。「此年の春突然手紙を寄こして山高帽子とフロックコートを至急送れと云ふんです。一寸驚いたから、郵便で問ひ返した所が老人自身が着ると云ふ返事が來ました。二十三日に靜岡で祝捷會があるから夫迄に間に合ふ樣に、至急調達しろと云ふ命令なんです。所が可笑しいのは命令中にからあるんです。帽子は好い加減な大きさのを買つて呉れ、洋服も寸法を見計らつて大丸へ注文して呉れ……」「近頃は大丸でも洋服を仕立てるのかい」「なあに、先生、白木屋と間違へたんだあね」「寸法を見計らつて呉れたつて無理ぢやないか」「そこが伯父の伯父たる所さ」「どうした？」「仕方がないから見計らつて送つてやつた」「君も亂暴だな。夫で間に合つたのかい」「まあ、どうにか、かうにか落ち附いたんだらう。國の新聞を見たら、當日牧山翁は珍しくフロックコートにて、例の鐵扇を持ち……」「鐵扇丈は離さなかつたと見えるね」「うん死んだら棺の中へ鐵扇丈は入れてやらうと思つて居るよ」「それでも帽子も洋服も、うまい具合に着られて善かつた」「所が大間違ひ

さ、僕も無事に行つて仕舞つたと思つてると、暫らくして國から小包が屆いたから、何か禮でも呉れた事と思つて開けて見たら、例の山高帽子さ、手紙が添へてあつてね、折角御求め被下候へども少々大きく候間、帽子屋へ御遣はしの上、御縮め被下度候、縮め賃は小爲替にて此方より御送可申上候とあるのさ。隨分迂濶だなと主人は己より迂濶なものゝ天下にある事を發見して大いに滿足の體に見える。やがて「それからどうした」と聞く。「どうするつたつて仕方がないから僕が頂戴して被つて居らあ」「あの帽子かあ」と主人がにや〳〵笑ふ。「其方が男爵で入らつしやるんですか」と細君が不思議さうに尋ねる。「誰がです」「其鐵扇の伯父さまが」「なあに漢學者でさあ、若い時聖堂で朱子學か何かに凝り固まつたものだから、電氣燈の下で恭しくちよん髷を頂いて居るんです、仕方がありません」とやたらに顋を撫で廻す。「それでも君は、さつきの女に牧山男爵と云つた樣だぜ」「さう仰しやいましたよ、私も茶の間で聞いて居りました」と細君も是丈は主人の意見に同意する。「さうでしたかな、アハヽヽヽ」と迷亭は譯もなく笑ふ。「そりや嘘ですよ。僕に男爵の伯父がありや、今頃は局長位になつてまさあ」と平氣なものである。「何だか變だと思つた」と細君は嬉しさうな、心配さうな顏附をする。「あら、まあ、能く眞面目であんな嘘が附けますねえ。あなたも餘つ程法螺が御上手でいらつしやる事」と細君は非常に感心する。「僕より、あの女の方が上手でさあ」「あなただつて御負けなさる氣遣ひはありません」「然し奧さん、僕の法螺は單なる法螺ですよ。あの女のは、みんな魂膽があつて、曰く付きの嘘ですぜ。たちが惡いです。猿智慧から割り出した術數と、天來の滑稽趣味と混同されちや、コメヂーの神樣も活眼の士なきを嘆ぜざるを得ざる譯に立ち至りますからな」主人は俯目になつて「どうだか」と云ふ。細君は笑ひながら「同じ事ですわ」と云ふ。

吾輩は今迄向ふ横丁へ足を踏み込んだ事はない。角屋敷の金田とは、どんな構へか見た事は無論ない。聞いた事さへ今が始めてである。主人の家で實業家が話頭に上つた事は一返もないので、主人の飯を食ふ吾輩迄が此方面には單に無關係なるのみならず、甚だ冷淡であつた。然るに先刻圖らずも鼻子の訪問を受けて、餘所ながら其談話を拜聽し、其令孃の艶美を想像し、又其富貴、權勢を思ひ浮べて見ると、猫ながら安閑として椽側に寢轉んで居られなくなつた。しかのみならず吾輩は寒月君に對して甚だ同情の至りに堪へん。先方では博士の奧さんやら、車屋の神さんやら、二絃琴の天璋院迄買收して知らぬ間に、前齒の缺けたのさへ探偵して居るのに、寒月君の方では只ニヤ〳〵して羽織の紐許り氣にして居るのは、如何に卒業したての理學士にせよ、あまり能がなさ過ぎる。と云つて、あゝ云ふ偉大な鼻を顏の中に安置して居る女の事だから、滅多な者では寄り附ける譯の者ではない。かう云ふ事件に關しては主人は寧ろ無頓着で且つ餘りに錢がなさ過ぎる。迷亭は錢に不自由はしないが、あんな偶然童子だから、寒月に援けを與へる便宜は尠からう。して見ると可哀相なのは首縊りの力學を演説する先生許りとなる。吾輩でも奮發して、敵城へ乘り込んで其動靜を偵察してやらなくては、あまりに不公平である。吾輩は猫だけれど、エピクテタスを讀んで机の上へ叩きつける位な學者の家に寄寓する猫で、世間一般の癡猫、愚猫とは少しく撰を異にして居る。此冒險を敢てする位の義侠心は固より尻尾の先に疊み込んである。何も寒月君に恩になつたと云ふ譯もないが、是はたゞに個人の爲にする血氣躁狂の沙汰

ではない。大きく云へば公平を好み中庸を愛する天意を現實にする天晴な美擧だ。人の許諾を經ずして吾妻橋事件抔を到る處に振り廻す以上は、人の軒下に犬を忍ばして、其報道を得々として逢ふ人に吹聽する以上は、車夫、馬丁、無頼漢、ごろつき書生、日雇婆、産婆、妖婆、按摩、頓馬に至る迄を使用して、國家有用の材に煩を及ぼして顧みざる以上は――猫にも覺悟がある。幸ひ天氣も好い、霜解けは少々閉口するが道の爲には一命もすてる。足の裏へ泥が着いて、椽側へ梅の花の印を押す位な事は、只お三の迷惑にはなるか知れんが、吾輩の苦痛とは申されない。翌日とも云はず是から出掛けようと勇猛精進の大決心を起こして臺所迄飛んで出たが「待てよ」と考へた。吾輩は猫として進化の極度に達して居るのみならず、腦力の發達に於ては敢て中學の三年生に劣らざる積りであるが、悲しいかな咽喉の構造丈はどこ迄も猫なので人間の言語は饒舌れない。よし首尾よく金田邸へ忍び込んで、充分敵の情勢を見屆けた所で、肝心の寒月君に教へてやる譯に行かない。主人にも迷亭先生にも話せない。話せないとすれば土中にある金剛石の日を受けて光らぬと同じ事で、折角の知識も無用の長物となる。是は愚だ、やめようか知らんと上り口で佇んで見た。

然し一度思ひ立つた事を中途で已めるのは、白雨が來るかと待つて居る時黒雲共隣國へ通り過ぎた樣に、何となく殘り惜しい。それも非がこつちにあれば格別だが、所謂正義の爲、人道の爲なら、たとひ無駄死をやる迄も進むのが、義務を知る男兒の本懷であらう。無駄骨を折り、無駄足を汚す位は猫として適當の所である。猫と生れた因果で寒月、迷亭、苦沙彌諸先生と三寸の舌頭に相互の思想を交換する技倆はないが、猫丈に忍びの術は諸先生より達者である。他人の出來ぬ事を成就するのは其自身に於て愉快である。吾一箇でも、金田の内幕を知るのは、誰も知らぬより愉快である。人に告げられんでも人に知られて居るなと云ふ自覺を彼等に與ふる丈が愉快である。こんなに愉快が續々出て來ては行かずには居られない。矢張り行く事に致さう。

向ふ横町へ來て見ると、聞いた通りの西洋館が角地面を吾物顏に占領して居る。この主人も此西洋館の如く傲慢に構へて居るんだらうと、門を這入つて其建築を眺めて見たが、只人を威壓しようと、二階造りが無意味に突つ立つて居る外に何等の能もない構造であつた。迷亭の所謂月並とは是であらうか。玄關を右に見て、植込の中を通り拔けて、勝手口へ廻る。さすがに勝手は廣い。苦沙彌先生の臺所の十倍は慥かにある。先達て「日本新聞」に詳しく書いてあつた大隈伯の勝手にも劣るまいと思ふ位整然とぴか／＼して居る。「模範勝手だな」と這入り込む。見ると漆喰で叩き上げた二坪程の土間に、例の車屋の神さんが立ち乍ら、御飯焚と車夫を相手に頻りに何か辯じて居る。こいつは劍呑だと水桶の裏へかくれる。「あの教師あ、うちの旦那の名を知らないのかね」と飯焚が云ふ。「知らねえ事があるもんか、此界隈で金田さんの御屋敷を知らなけりや眼も耳もねえ片輪だあな」是は抱へ車夫の聲である。「なんとも云へないよ。あの教師と來たら、本より外に何も知らない變人なんだからねえ。旦那の事を少しでも知つてりや恐れるかも知れないが、駄目だよ、自分の子供の歳さへ知らないんだもの」と神さんが云ふ。「金田さんでも恐れねえかな、厄介な唐變木だ。構あ事あねえ、みんなで威嚇かしてやらうぢやねえか」「それが好いよ。奥樣の鼻が大き過ぎるの、顏が氣に喰はないのつて――そりやあ酷い事を云ふんだよ。自分の面あ今戸燒の

狸見た様な癖に――あれで一人前だと思つて居るんだから遣り切れないぢやないか」「顔ばかりぢやない、手拭を提げて湯に行く所からして、いやに高慢ちきぢやないか。自分位えらい者は無い積りで居るんだよ」と苦沙彌先生は飯焚にも大いに不人望である。「何でも大勢であいつの垣根の傍へ行つて悪口を散々いつてやるんだね」「さうしたら乾度恐れ入るよ」「然し、こつちの姿を見せちやあ面白くねえから、聲丈聞かして、勉強の邪魔をした上に、出來る丈じらして遣れつて、さつき奥様が言ひ附けて御出でなすつたぜ」「そりや分つて居るよ」と神さんは悪口の三分の一を引き受けると云ふ意氣を示す。成程この手合が苦沙彌先生を冷かしに來るなと三人の横を、そつと通り拔けて奥へ這入る。猫の足はあれども無きが如し、どこを歩いても不器用な音のした試しがない。空を踏むが如く、雲を行くが如く、水中に磬を打つが如く、洞裏に瑟を鼓するが如く、醍醐の妙味を甞めて言詮の外に冷暖を自知するが如し。月並な西洋館もなく、模範勝手もなく、車屋の神さんも、權助も、飯焚も、御孃さまも、仲働も、鼻子夫人も、夫人の旦那様もない。行きたい所へ行つて聞き度い話しを聞いて、舌を出し尻尾を掉つて、髭をぴんと立てて悠々と歸るのみである。殊に吾輩は此道に掛けては日本一の堪能である。草雙紙にある猫又の血脈を受けて居りはせぬかと自ら疑ふ位である。蟇の額には夜光の明珠があると云ふが、吾輩の尻尾には神祇釋教戀無常は無論の事、滿天下の人間を馬鹿にする一家相傳の妙藥が詰め込んである。金田家の廊下を人の知らぬ間に横行する位は、仁王様が心太を踏み潰すよりも容易である。此時吾輩は我ながら、わが力量に感服して、是も不斷大事にする尻尾の御蔭だなと氣が附いて見ると只置かれない。吾輩の尊敬する尻尾大明神を禮拜してニャン運長久を祈らばやと、一寸低頭して見たが、どうも少し見當が違ふ様である。可成尻尾の方を見て三拜しなければならん。尻尾の方を見ようと身體を廻すと尻尾も自然と廻る。追ひ附かうと思つて首をねぢると尻尾も同じ間隔をとつて、先へ馳け出す。成程天地玄黄を三寸裏に收める程の靈物だけあつて、到底吾輩の手に合はない。尻尾を環る事七度半にして草臥れたからやめにした。少々眼がくらむ。どこに居るのだか一寸方角が分らなくなる。構ふものかと滅茶苦茶にあるき廻る。障子の裏で鼻子の聲がする。こゝだと立ち留まつて、左右の耳をはすに切つて、息を凝らす。「貧乏教師の癖に生意氣ぢやありませんか」と例の金切り聲を振りたてる。「うん、生意氣な奴だ、ちと懲らしめの爲にいぢめてやらう。あの學校にや國のものも居るからな」「誰が居るの？」「津木ピン助や福地キシャゴが居るから、頼んでからかはしてやらう」吾輩は金田君の生國は分らんが、妙な名前の人間計り揃つた所だと少々驚いた。金田君は猶語をついで、「あいつは英語の教師かい」と聞く。「はあ、車屋の神さんの話しでは英語のリードルか何か専門に教へるんだつて云ひます」「どうせ碌な教師ぢやあるめえ」あゝ、あるめえにも尠からず感心した。「此間ピン助に遇つたら、私の學校にや妙な奴が居ります。生徒から先生番茶は英語で何と云ひますと聞かれて、番茶は savage tea であると眞面目に答へたんで、教員間の物笑ひとなつて居ます。どうもあんな教員があるから、ほかのものの迷惑になつて困りますと云つたが、大方あいつの事だぜ」「あいつに極まつて居ますさあ、そんな事を云ひさうな面構へですよ、いやに髭なんか生やして」「怪しからん奴だ」髭を生やして怪しからなければ猫抔は一疋だつて怪しかり様がない。「それにあの迷亭とか、へゞれけとか云ふ奴は、まあ何

てえ顛狂な跳ねつ返りなんでせう。伯父の牧山男爵だなんて、あんな顔に男爵の伯父なんざ、有る筈がないと思つたんですもの」「御前がどこの馬の骨だか分らんものの言ふ事を眞に受けるのも悪い」「悪いつて、あんまり人を馬鹿にし過ぎるぢやありませんか」と大變残念さうである。不思議な事には寒月君の事は一言半句も出ない。吾輩の忍んで來る前に評判記は濟んだものか、又は既に落第と事が極まつて念頭にないものか、其邊は懸念もあるが仕方がない。しばらく佇んで居ると廊下を隔てて向うの座敷でベルの音がする。そらあすこにも何か事がある。後れぬ先に、と其方角へ歩を向ける。

來て見ると女が獨りで何か大聲で話して居る。其聲が鼻子とよく似て居る所を以て推すと、是が即ち當家の令孃、寒月君をして未遂入水を敢てせしめたる代物だらう。惜哉障子越しで玉の御姿を拜する事が出來ない。從つて顔の眞中に大きな鼻を祭り込んで居るか、どうだか受け合へない。然し談話の模樣から鼻息の荒い所抔を綜合して考へて見ると、滿更人の注意を惹かぬ獅子鼻とも思はれない。女はしきりに喋舌つて居るが相手の聲が少しも聞こえないのは、噂にきく電話といふものであらう。

「御前は大和かい。明日ね、行くんだからね、鶉の三を取つて置いて御呉れ、いゝかえ——分つたかい。——なに分らない？ おやいやだ。鶉の三を取るんだよ。——なんだつて。——取れない？ 取れない筈はない、とるんだよ——へゝゝゝ御冗談をだつて——何が御冗談なんだよ——いやに人を御ひやらかすよ。全體御前は誰だい。長吉だ？ 長吉なんぞぢや譯が分らない。御神さんに電話口へ出ろつて御云ひな——なに？ 私で何でも辨じます？——お前は失敬だよ。妾を誰だか知つてるのかい。金田だよ。——へゝゝゝ善く存じて居りますだつて。ほんとに馬鹿だよ此人あ。——金田だつてえばさ。——なに？——毎度御贔屓にあづかりまして難有う御座います？ 何が難有いんだね。御禮なんか聞きたかあないやね——おや又笑つてるよ。御前は餘つ程愚物だね。仰せの通りだつて？——あんまり人を馬鹿にすると電話を切つて仕舞ふよ。いゝのかい。困らないのかよ——默つてちや分らないぢやないか、何とか御云ひなさいな」電話は長吉の方から切つたものか何の返事もないらしい。令孃は癇癪を起こしてやけにベルをジャラ〳〵と廻す。足元で狆が驚いて急に吠え出す。是は迂濶に出來ないと、急に飛び下りて緣の下へもぐり込む。

折柄廊下を近づく足音がして障子を開ける音がする。誰か來たなと一生懸命に聞いて居ると、「御孃樣、旦那樣と奥樣が呼んで入らつしやいます」と小間使らしい聲がする。「知らないよ」と令孃は劍突を食はせる。「一寸用があるから孃を呼んで來いと仰しやいました」「うるさいね、知らないつてば」と令孃は第二の劍突を食はせる。「…水島寒月さんの事で御用があるんださうで御座います」と小間使は氣を利かして機嫌を直さうとする。「寒月でも水月でも知らないんだよ——大嫌ひだわ、絲瓜が戸惑ひをした樣な顔をして」第三の劍突は、憐れなる寒月君が留守中に頂戴する。「おや御前いつ束髪に結つたの」小間使はほつと一息ついて「今日」と可成單簡な挨拶をする。「生意氣だねえ、小間使の癖に」と第四の劍突を別方面から食はす。「さうして新しい半襟を掛けたぢやないか」「へえ、先達て御孃樣から頂きましたので、結構過ぎて勿體ないと思つて行李の中へ仕舞つて置きましたが、今迄のが餘り汚れましたから掛け易へました」「いつ、そんなものを上げた事があるの」「此御正月、白木屋へ入らつしやいまして、御求め遊ばしたので——鶯茶へ相撲の番附を染

め出したので御座います。妾には地味過ぎていやだから御前に上げようと仰しやつた、あれで御座います」「あらいやだ善く似合ふのね。にくらしいわ」「恐れ入ります」「褒めたんぢやない。にくらしいんだよ」「へえ」「そんなによく似合ふものを、何故だまつて貰つたんだい」「へえ」「御前にさへ、其位似合ふなら、妾にだつて可笑しい事あないだらう」「きつと善く御似合ひ遊ばします」「似合ふのが分つてる癖に何故默つてゐるんだい。さうして澄まして掛けて居るんだよ、人の惡い」劍突は留めどもなく連發される。此さき、事局はどう發展するかと謹聽して居る時、向うの座敷で「富子や、富子や」と大きな聲で金田君が令孃を呼ぶ。令孃は已むを得ず「はい」と電話室を出て行く。吾輩より少し大きな狆が顏の中心に眼と口を引き集めた樣な面をして附いて行く。吾輩は例の忍び足で再び勝手から往來へ出て、急いで主人の家に歸る。探檢は先づ十二分の成績である。

歸つて見ると、綺麗な家から汚い所へ移つたので、何だか日當りの善い山の上から薄黒い洞窟の中へ入り込んだ樣な心持ちがする。探檢中は、ほかの事に氣を奪はれて部屋の裝飾、襖、障子の具合抔には眼も留まらなかつたが、わが住居の下等なるを感ずると同時に彼の所謂月並が戀しくなる。敎師よりも矢張り實業家がえらい樣に思はれる。吾輩も少し變だと思つて、例の尻尾に伺ひを立てゝ見たら、其通り其通りと尻尾の先から御託宣があつた。座敷へ這入つて見ると驚いたのは迷亭先生まだ歸らない、卷煙草の吸殼を蜂の巢の如く火鉢の中へ突き立てて、大胡坐で何か話し立てて居る。いつの間にか寒月君さへ來て居る。主人は手枕をして天井の雨洩りを餘念もなく眺めて居る。不相變太平の逸民の會合である。

「寒月君、君の事を譫語にまで言つた婦人の名は、當時秘密であつた樣だが、もう話しても善からう」と迷亭がからかひ出す。「御話しをしても、私丈に關する事なら差し支へないんですが、先方の迷惑になる事ですから」「まだ駄目かなあ」「それにある博士夫人に約束をして仕舞つたもんですから」「他言をしないと云ふ約束かね」「えゝ」と寒月君は例の如く羽織の紐をひねくる。其紐は賣品にあるまじき紫色である。「其紐の色は、ちと天保調だな」と主人が寢ながら云ふ。主人は金田事件抔には無頓着である。「さうさ、到底日露戰爭時代のものではないな。陣笠に立葵の紋の附いたぶつ割き羽織でも着なくつちや納まりの附かない紐だ。織田信長が聟入をするとき頭の髮を茶筅に結つたと云ふが其節用ひたのは、慥かそんな紐だよ」と迷亭の文句は不相變長い。「實際是は爺が長州征伐の時に用ひたのです」と寒月君は眞面目である。

「もういゝ加減に博物館へでも獻納してはどうだ。首縊りの力學の演者、理學士水島寒月君ともあらうものが、賣れ殘りの旗本の樣な出立をするのはちと體面に關する譯だから」「御忠告の通りに致してもいゝのですが、此紐が大變よく似合ふと云つて呉れる人もありますので――」

「誰だい、そんな趣味のない事を云ふのは」と主人は寢返りを打ちながら大きな聲を出す。「それは御存じの方なんぢやないんで――」「御存じでなくてもいゝや、一體誰だい」「去る女性なんです」「ハヽヽヽ餘程茶人だなあ。當てゝ見ようか、矢張り隅田川の底から君の名を呼んだ女なんだらう、其羽織を着てもう一返御陀佛を極め込んぢやどうだい」と迷亭が橫合から飛び出す。「へヽヽヽもう水底から呼んでは居りません。こゝから乾の方角にあたる淸淨な世界で……」「あんまり淸淨でもなさゝうだ、毒毒しい鼻だぜ」「へえ？」と寒月は不審な顏をする。「向う橫丁の鼻がさつき押しかけて來たん

だよ、こゝへ。實に僕等二人は驚いたよ、ねえ苦沙彌君」「うむ」と主人は寐ながら茶を飮む。「鼻つて誰の事です」「君の親愛なる久遠の女性の御母堂樣だ」「へえー」「金田の妻といふ女が君の事を聞きに來たよ」と主人が眞面目に說明してやる。驚くか、嬉しがるか、恥づかしがるかと寒月君の樣子を覗つて見ると、別段の事もない。例の通り靜かな調子で、「どうか私に、あの娘を貰つて呉れと云ふ依賴なんでせう」と、又紫の紐をひねくる。「所が大違ひさ、其御母堂なるものが偉大なる鼻の所有主でね……」迷亭が半ば言ひ懸けると、主人が「おい君、僕はさつきから、あの鼻に就いて俳體詩を考へて居るんだがね」と木に竹を接いだ樣な事を云ふ。隣の室で細君がくす〳〵笑ひ出す。「隨分君も呑氣だなあ、出來たのかい」「少し出來た。第一句が此顏に鼻祭りと云ふのだ」「夫から？」「次が此鼻に神酒供へといふのさ」「次の句は？」「まだ夫ぎりしか出來て居らん」「面白いですな」と寒月君がにや〳〵笑ふ。「次へ穴二つ幽かなりと附けちやどうだ」と迷亭はすぐ出來る。すると寒月が「奧深く毛も見えずはいけますまいか」と各々出鱈目を竝べて居ると、垣根に近く、往來で「今戸焼の狸狸」と四五人わい〳〵云ふ聲がする。主人も迷亭も一寸驚いて表の方を、垣の隙からすかして見ると、「ワハヽヽヽ」と笑ふ聲がして遠くへ散る足の音がする。「今戸焼の狸といふな何だい」と迷亭が不思議さうに主人に聞く。「何だか分らん」と主人が答へる。「中々振つて居ますな」と寒月君が批評を加へる。迷亭は何を思ひ出したか急に立ち上がつて、「吾輩は年來美學上の見地から此鼻に就いて研究した事が御座いますから、其一斑を披瀝して、御兩君の淸聽を煩はし度いと思ひます」と演舌の眞似をやる。主人は餘りの突然にぼんやりして、無言の儘迷亭を見て居る。寒月は「是非承はりたいものです」と小聲で云ふ。「色々調べて見ましたが鼻の起源はどうも確と分りません。第一の不審は、もし之を實用上の道具と假定すれば穴が二つで澤山である。何もこんなに横風に眞中から突き出して見る必要がないのである。所がどうして段々御覽の如く斯樣にせり出して參つたか」と自分の鼻を抓んで見せる。「あんまりせり出しても居らんぢやないか」と主人は御世辭のない所を云ふ。「兎に角引つ込んでは居りませんからな。只一個の孔が併んで居る狀態と混同なすつては誤解を生ずるに至るかも計られませんから、豫め御注意をして置きます。――で愚見によりますと、鼻の發達は吾々人間が鼻汁をかむと申す微細なる行爲の結果が自然と蓄積してかく著明なる現象を呈出したもので御座います」「佯りのない愚見だ」と又主人が寸評を插入する。「御承知の通り鼻汁をかむ時は、是非鼻を抓みます、鼻を抓んで、ことに此局部丈に刺激を與へますと、進化論の大原則によつて、此局部は此刺激に應ずるが爲め他に比例して不相當な發達を致します。皮も自然堅くなります、肉も次第に硬くなります。遂に凝つて骨となります」「それは少し――さう自由に肉が骨に一足飛びに變化は出來ますまい」と理學士丈あつて寒月君が抗議を申し込む。迷亭は何喰はぬ顏で陳べ續ける。「いや御不審は御尤もですが、論より證據此通り骨があるから仕方がありません。既に骨が出來る。骨は出來ても鼻汁は出ますな。出ればかまずには居られません。此作用で骨の左右が削り取られて細い高い隆起と變化して參ります――實に恐ろしい作用です。點滴の石を穿つが如く、賓頭盧の頭が自ら光明を放つが如く、不思議薰不思議臭の喩の如く、斯樣に鼻筋が通つて堅くなります」「それでも君のなんざ、ぶく〳〵だぜ」「演者自身の局部は回護の恐れがありますから、態と

論じませんが、かの金田の御母堂の持たせらるゝ鼻の如きは、尤も發達せる尤も偉大なる天下の珍品として御兩君に紹介して置きたいと思ひます」寒月君は思はず「ヒヤ〳〵」と云ふ。「然し物も極度に達しますと、偉觀には相違御座いませんが、何となく怖ろしくて近づき難いものであります。あの鼻梁抔は素晴らしいには違ひ御座いませんが、少々峻嶮過ぎるかと思はれます。古人のうちにてもソクラテス、ゴールドスミス若しくはサッカレーの鼻抔は構造の上から云ふと隨分申し分は御座いませうが、其の申し分のある所に愛嬌が御座います。鼻高きが故に貴からず、奇なるが爲に貴しとは此故でも御座いませうか。下世話にも鼻より團子と申しますれば、美的價値から申しますと、先づ迷亭位の所が適當かと存じます」寒月と主人は「フ、フ、」と笑ひ出す。迷亭自身も愉快さうに笑ふ。「偖て只今迄辯じましたのは――」「先生辯じまいたは少し講釋師の樣で下品ですから、よして頂きませう」と寒月君は先日の復讐をやる。「左樣、然らば顏を洗つて出直しませうかな。――えゝ――是から鼻と顏の權衡に一言論及したいと思ひます。他に關係なく單獨に鼻論をやりますと、かの御母堂抔はどこへ出しても恥づかしからぬ鼻――鞍馬山で展覽會があつても恐らく一等賞だらうと思はれる位な鼻を所有して入らせられますが、悲しいかなあれは眼、口、其他の諸先生と何等の相談もなく出來上がつた鼻であります。ジュリアス・シーザーの鼻は大したものに相違御座いません。然しシーザーの鼻を鋏でちよん切つて、當家の猫の顏へ安置したらどんな者で御座いませうか。喩にも猫の額と云ふ位な地面へ、英雄の鼻柱が突兀として聳えたら、碁盤の上へ奈良の大佛を据ゑ附けた樣なもので、少しく比例を失するの極、其美的價値を落とす事だらうと思ひます。御母堂の鼻はシーザーのそれの如く、正しく英姿颯爽たる隆起に相違御座いません。然し其周圍を圍繞する顏面的條件は如何な者でありませう、無論當家の猫の如く劣等ではない。然し癲癇病みのおかめの如く眉の根に八字を刻んで、細い眼を釣るし上げらるゝのは事實であります。諸君、此顏にして此鼻ありと嘆ぜるを得んではありませんか」迷亭の言葉が少し途切れる途端、裏の方で「まだ鼻の話しをして居るんだよ。何てえ業突く張りだらう」と云ふ聲が聞こえる。「車屋の神さんだ」と主人が迷亭へ教へてやる。迷亭は又やり始める。「計らざる裏手にあたつて、新たに異性の傍聽者のある事を發見したのは演者の深く名譽と思ふ所であります。殊に宛轉たる嬌音を以て、乾燥なる講筵に一點の艶味を添へられたのは實に望外の幸福であります。可成通俗的に引き直して佳人淑女の眷顧に背かざらん事を期する譯でありますが、是からは少々力學上の問題に立ち入りますので、勢ひ御婦人方には御分りにくいかも知れません、どうか御辛防を願ひます」寒月君は力學と云ふ語を聞いて又にや〳〵する。「私の證據立てようとするのは、此鼻と此顏は到底調和しない、ツアイシングの黃金律を失して居ると云ふ事なんで、夫を嚴格に力學上の公式から演繹して御覽に入れようと云ふのであります。先づHを鼻の高さとします。αは鼻と顏の平面の交叉より生ずる角度であります。Wは無論鼻の重量と御承知下さい。どうです大抵お分りになりましたか。……」「分るものか」と主人が云ふ。「寒月君はどうだい」「私にもちと分りかねますな」「そりや困つたな。苦沙彌はとにかく、君は理學士だから分るだらうと思つたのに。此式が演說の首腦なんだから之を略しては今迄やつた甲斐がないのだが――まあ仕方がない。公式は略して結論丈話さう」「結論があるか」と主人が不思

議さうに聞く。「當り前さ、結論のない演説は、デザートのない西洋料理の樣なものだ。――いいか、兩君よく聞き給へ、是からが結論だぜ。――偖て以上の公式にウイルヒョウ、ワイスマン諸家の説を參酌して考へて見ますと、先天的形體の遺傳は無論の事許さねばなりません。又此形體に追陪して起る心意的狀況は、たとひ後天性は遺傳するものにあらずとの有力なる説あるにも關せず、ある程度迄は必然の結果と認めねばなりません。從つて斯くの如く身分に不似合なる鼻の持主の生んだ子には、其鼻にも何か異狀ある事と察せられます。寒月君抔は、まだ年が御若いから金田令孃の鼻の構造に於て特別の異狀を認められんかも知れませんが、かゝる遺傳は潛伏期の長いものでありますから、いつ何時氣候の劇變と共に、急に發達して御母堂のそれの如く、咄嗟の間に膨脹するかも知れません。それ故に此御婚儀は、迷亭の學理的論證によりますと、今の内御斷念になつた方が安全かと思はれます。是には當家の御主人は無論の事、そこに寢て居らるゝ猫又殿にも御異存は無からうと存じます」主人は漸う起き返つて「そりや無論さ。あんなものの娘を誰が貰ふものか。寒月君もらつちやいかんよ」と大變熱心に主張する。吾輩も聊か贊成の意を表する爲に、にやーにやーと二聲許り鳴いて見せる。寒月君は別段騷いだ樣子もなく「先生方の御意向がさうなら、私は斷念してもいゝんですが、もし當人がそれを氣にして病氣にでもなつたら罪ですから――」「ハヽヽヽ艶罪と云ふ譯だ」主人丈は大いにむきになつて「そんな馬鹿があるものか、あいつの娘なら碌な者でないに極まつてらあ、初めて人のうちへ來ておれを遣り込めに掛かつた奴だ。傲慢な奴だ」と獨りでぷん／＼する。すると又垣根のそばで三四人が「ワハヽヽヽ」と云ふ聲がする。一人が「高慢ちきな唐變木だ」と云ふと、一人が「もつと大きな家へ這入りてえだらう」と云ふ。又一人が「御氣の毒だがいくら威張つたつて蔭辨慶だ」と大きな聲をする。主人は緣側へ出て負けない樣な聲で「八釜しい、何だわざ／＼そんな塀の下へ來て」と怒鳴る。「ワハヽヽヽ、サヱジ・チーだ、サヱジ・チーだ」と口々に罵る。主人は大いに逆鱗の體で突然起つてステッキを持つて、往來へ飛び出す。迷亭は手を拍つて「面白い、やれやれ」と云ふ。寒月は羽織の紐を撚つてにや／＼する。吾輩は主人のあとを附けて垣の崩れから往來へ出て見たら、眞中に主人が手持無沙汰にステッキを突いて立つて居る。人通りは一人もない。一寸狐に抓まれた體である。

倫敦塔

二年の留学中只一度倫敦塔を見物した事がある。其後再び行かうと思つた日もあるが止めにした。人から誘はれた事もあるが断つた。一度で得た記憶を二返目に打ち壊すのは惜しい、三たび目に拭ひ去るのは尤も残念だ。「塔」の見物は一度に限ると思ふ。

行つたのは着後間もないうちの事である。其頃は方角もよく分らんし、地理抔は固より知らん。丸で御殿場の兎が急に日本橋の真中へ抛り出された様な心持ちであつた。表へ出れば人の波にさらはれるかと思ひ、家に帰れば汽車が自分の部屋に衝突しはせぬかと疑ひ、朝夕安き心はなかつた。此響、此群集の中に二年住んで居たら、吾が神経の繊維も遂には鍋の中の麩海苔の如くべと〳〵になるだらうと、マクス・ノルダウの退化論を今更の如く大真理と思ふ折さへあつた。

しかも余は他の日本人の如く紹介状を持つて世話になりに行く宛もなく、又在留の旧知とては無論ない身の上であるから、恐々ながら一枚の地図を案内として毎日見物の為め若しくは用達の為め出あるかねばならなかつた。無論汽車へは乗らない、馬車へも乗れない、滅多な交通機関を利用しようとすると、どこへ連れて行かれるか分らない。此の広い倫敦を蜘蛛手十字に往来する汽車も馬車も電気鉄道も鋼条鉄道も余には何等の便宜をも与へる事が出来なかつた。余は已むを得ないから四つ角へ出る度に地図を披いて通行人に押し返されながら足の向く方角を定める。地図で知れぬ時は人に聞く、人に聞いて知れぬ時は巡査を探す、巡査でゆかぬ時は又他の人に尋ねる、何人でも合点の行く人に出逢ふ迄は捕へては聞き呼び掛けては聞く。かくして漸くわが指定の地に至るのである。

「塔」を見物したのは恰も此方法に依らねば外出の出来ぬ時代の事と思ふ。来るに来所なく去るに去所を知らずと云ふと禅語めくが、余はどの路を通つて「塔」に着したか又如何なる町を横ぎつて吾家に帰つたか未だに判然しない。どう考へても思ひ出せぬ。只「塔」を見物した丈は慥かである。「塔」其物の光景は今でもあり〳〵と眼に浮べる事が出来る。前はと問はれると困る、後はと尋ねられても返答し得ぬ。只前を忘れ後を失したる中間が会釈もなく明るい。恰も闇を裂く稲妻の眉に落つると見えて消えたる心地がする。倫敦塔は宿世の夢の焼点の様だ。

倫敦塔の歴史は英国の歴史を煎じ詰めたものである。過去と云ふ怪しき物を蔽へる戸帳が自づと裂けて龕中の幽光を二十世紀の上に反射するものは倫敦塔である。凡てを葬る時の流れが逆しまに戻つて古代の一片が現代に漂ひ来れりとも見るべきは倫敦塔である。人の血、人の肉、人の罪が結晶して馬、車、汽車の中に取り残されたるは倫敦塔である。

此倫敦塔を塔橋の上からテームス河を隔てゝ眼の前に望んだとき、余は今の人か将た古への人かと思ふ迄我を忘れて余念もなく眺め入つた。冬の初めとはいひながら物静かな日である。空は灰汁桶を掻き交ぜた様な色をして低く塔の上に垂れ懸かつて居る。壁土を溶かし込んだ様に見ゆるテームスの流れは波も立てず音もせず無理矢理に動いて居るかと思はるゝ。帆懸舟が一隻塔の下を行く。風なき河に帆をあやつるのだから不規則な三角形の白き翼がいつ迄も同じ

所に停まつて居る樣である。傳馬の大きいのが一艘上つて來る。只一人の船頭が艫に立つて艪を漕ぐ、是も殆ど動かない。塔橋の欄干のあたりには白き影がちら／＼する、大方鷗であらう。見渡した處凡ての物が靜かである、物憂げに見える、眠つて居る、皆過去の感じである。さうして其中に冷然と二十世紀を輕蔑する樣に立つてゐるのが倫敦塔である。汽車も走れ、電車も走れ、苟も歷史の有らん限りは我のみは斯くてあるべしと云はぬ許りに立つて居る。其の偉大なるには今更の樣に驚かれた。此建築を俗に塔と稱へて居るが塔と云ふは單に名前のみで實は幾多の櫓から成り立つ大きな地城である。並び聳ゆる櫓には丸きもの角張りたるもの色々の形狀はあるが、何れも陰氣な灰色をして前世紀の記念を永劫に傳へんと誓へる如く見える。九段の遊就館を石で造つて二三十並べてさうして其を蟲眼鏡で覗いたら或は此「塔」に似たものが出來上がりはしまいかと考へた。余はまだ眺めて居る。セピヤ色の水分を以て飽和したる空氣の中にぼんやり立つて眺めて居る。二十世紀の倫敦がわが心の裏から次第に消え去ると同時に眼前の塔影が幻の如き過去の歷史を吾が腦裏に描き出して來る。朝起きて吸る澁茶に立つ烟りの寢足らぬ夢の尾を曳く樣に感ぜらるゝ。暫らくすると向ふ岸から長い手を出して余を引つ張るかと怪しまれて來た。今迄佇立して身動きもしなかつた余は急に川を渡つて塔に行き度くなつた。長い手は猶々強く余を引く。余は忽ち歩を移して塔橋を渡り懸けた。長い手はぐい／＼牽く。塔橋を渡つてからは一目散に塔門迄馳せ着けた。見る間に三萬坪に餘る過去の一大磁石は現世に浮游する此小鐵屑を吸收し了つた。門を入つて振り返つたとき、

憂の國に行かんとするものは此門を潛れ、

永劫の呵責に遭はんとするものは此門をくゞれ。

迷惑の人と伍せんとするものは此門をくゞれ。

正義は高き主を動かし、神威は、最上智は、最初愛は、われを作る。

我が前に物なし、只無窮あり、我は無窮に忍ぶものなり。

此門を過ぎんとするものは一切の望を捨てよ。

といふ句がどこぞに刻んではないかと思つた。余は此時既に常態を失つて居る。

空濠にかけてある石橋を渡つて行くと向ふに一つの塔がある。是は丸形の石造で石油タンクの狀をなして恰も巨人の門柱の如く左右に屹立して居る。其中間を連ねて居る建物の下を潛つて向へ拔ける。中塔とは此事である。少し行くと左手に鐘塔が峙つ。眞鐵の盾、黑鐵の甲が野を蔽ふ秋の陽炎の如く見えて敵遠くより寄すると知れば塔上の鐘を鳴らす。星黑き夜、壁上を歩む哨兵の隙を見て、逃れ出づる囚人の、逆しまに落す松明の影より闇に消ゆるときも塔上の鐘を鳴らす。心傲れる市民の、君の政非なりとて蟻の如く塔下に押し寄せて犇き騷ぐときも亦塔上の鐘を鳴らす。塔上の鐘は事あれば必ず鳴らす。ある時は無二に鳴らし、ある時は無三に鳴らす。祖來る時は祖を殺しても鳴らし、佛來る時は佛を殺しても鳴らした。霜の朝、雪の夕、雨の日、風の夜を何遍となく鳴らした鐘は今いづこへ行つたものやら、余が頭をあげて蔦に古りたる櫓を見上げたときは寂然として既に百年の響を收めて居る。

又少し行くと右手に逆賊門がある。門の上には聖タマス塔が聳えて居る。逆賊門とは名前からが既に恐ろしい。古來から塔中に生きながら

ら葬られたる幾千の罪人は皆舟から此門迄護送されたのである。彼等が舟を捨てゝ一度此門を通過するや否や婆娑の太陽は再び彼等を照らさなかつた。テームスは彼等にとつての三途の川で此門は冥府に通ずる入口であつた。彼等は涙の浪に揺られて此洞窟の如く薄暗きアーチの下迄漕ぎ附けられる。口を開けて鰯を吸ふ鯨の待ち構へて居る所迄来るや否やギーと軋る音と共に厚樫の扉は彼等と浮世の光とを長しへに隔てる。彼等はかくして遂に宿命の鬼の餌食となる。明日食はれるか明後日食はれるか或は又十年の後に食はれるか鬼より外に知るものはない。此門に横附けにつく舟の中に坐して居る罪人の途中の心はどんなであつたらう。櫂がしわる時、雫が舟縁に滴る時、漕ぐ人の手の動く時毎に吾が命を刻まるゝ様に思つたであらう。白き鬚を胸迄垂れて寛やかに黒の法衣を纏へる人がよろめきながら舟から上がる。是は大僧正クランマーである。青き頭巾を眉深に被り空色の絹の下に鎖帷子をつけた立派な男はワイアットであらう。是は會釋もなく舷から飛び上がる。はなやかな鳥の毛を帽に插して黄金作りの太刀の柄に左の手を懸け、銀の留め金にて飾れる靴の爪先を、輕げに石段の上に移すのはローリーか。余は暗きアーチの下を覗いて、向ふ側には石段を洗ふ波の光の見えはせぬかと首を延ばした。水はない。逆賊門とテームス河とは堤防工事の竣功以来全く縁がなくなつた。幾多の罪人を呑み、幾多の護送船を吐き出した逆賊門は昔の名残に其裾を洗ふ笹波の音を聞く便りを失つた。只向ふ側に存する血塔の壁上に大いなる鐵環が下がつて居るのみだ。昔は舟の纜を此鐶に繋いだといふ。

左へ折れて血塔の門を入る。今は昔薔薇の亂に目に餘る多くの人を幽閉したのは此塔である。草の如く人を薙ぎ、鶏の如く人を潰し、乾鮭の如く屍を積んだのは此塔である。血塔と名をつけたのも無理はない。アーチの下に交番の様な箱があつて、其側に冑形の帽子をつけた兵隊が銃を突いて立つて居る。頗る眞面目な顔をして居るが、早く當番を濟まして、例の酒舗で一杯傾けて、一件にからかつて遊び度いといふ人相である。塔の壁は不規則な石を疊み上げて厚く造つてあるから表面は決して滑らかではない。所々に蔦がからんで居る。高い所に窓が見える。建物の大きい所為か下から見ると甚だ小さい。鐵の格子がはまつて居る様だ。番兵が石像の如く突つ立ちながら腹の中で情婦と巫山戯て居る傍に、余は眉を攅め手をかざして此高窓を見上げて佇む。格子を洩れて古代の色硝子に微かなる日影がさし込んできらきらと反射する。やがて煙の如き幕が開いて空想の舞臺があり〳〵と見える。窓の内側は厚き戸帳が垂れて晝もほの暗い。窓に對する壁は漆喰も塗らぬ丸裸の石で隣の室とは世界滅却の日に至るまで動かぬ仕切が設けられて居る。只其眞中の六疊許りの場所は冴えぬ色のタペストリで蔽はれて居る。地は納戸色、模様は薄き黄で、裸體の女神の像と、像の周圍に一面に染め抜いた唐草である。石壁の横には、大きな寐臺が横たはる。厚樫の心も透れと深く刻みつけたる葡萄と、葡萄の蔓と、葡萄の葉が手足の觸るる場所丈光を射返す。此寐臺の端に二人の小兒が見えて來た。一人は十三四、一人は十歳位と思はれる。幼き方は床に腰をかけて、寐臺の柱に半ば身を倚せ、力なき兩足をぶらりと下げて居る。右の肱を、傾けたる顔と共に前に出して、年嵩なる人の肩に懸ける。年上なるは幼き人の膝の上に金にて飾れる大きな書物を開げて、其のあけてある頁の上に右の手を置く。象牙を揉んで柔らかにしたる如く美しい手であ

る。二人とも烏の翼を欺く程の黑き上衣を着て居るが色が極めて白いので一段と目立つ。髪の色、眼の色、偖ては眉根鼻附から衣裝の末に至る迄兩人共殆ど同じ樣に見えるのは兄弟だからであらう。

兄が優しく淸らかな聲で膝の上なる書物を讀む。

「我が眼の前に、わが死ぬべき折の樣を想ひ見る人こそ幸あれ。日毎夜毎に死なんと願へ。やがては神の前に行くなる吾の何を恐るゝ……」

弟は世に憐れなる聲にて「アーメン」と云ふ。折から遠くより吹く木枯の高き塔を撼がして、一度は壁も落つる許りにゴーと鳴る。弟はひたと身を寄せて兄の肩に首をすり附ける。雪の如く白い蒲團の一部がほかと膨れ返る。兄は又讀み始める。

「朝ならば夜の前に死ぬと思へ。夜ならば翌日ありと頼むな。覺悟をこそ尊べ。見苦しき死に樣ぞ恥の極みなる……」

弟又「アーメン」と云ふ。其聲は顫へて居る。兄は靜かに書をふせて、かの小さき窓の方へ歩みよりて外の面を見ようとする。窓が高くて脊が足りぬ。床几を持つて來て其上につまだつ。百里をつゝむ黑霧の奧にぼんやりと冬の日が寫る。屠れる犬の生血にて染め拔いた樣である。兄は「今日も亦斯うして暮れるのか」と弟を顧る。弟は只「寒い」と答へる。「命さへ助けて呉るゝなら伯父樣に王の位を進ぜるものを」と兄が獨り言の樣につぶやく。弟は「母樣に逢ひたい」とのみ云ふ。此時向うに掛かつて居るタペストリに織り出してある女神の裸體像が風もないのに二三度ふはり／＼と動く。

忽然舞臺が廻る。見ると塔門の前に一人の女が黑い喪服を着て悄然として立つて居る。面影は靑白く窶れては居るが、どことなく品格のよい氣高い婦人である。やがて錠のきしる音がしてぎいと扉が開くと內から一人の男が出て來て恭しく婦人の前に禮をする。

「逢ふ事を許されてか」と女が問ふ。

「否」と氣の毒さうに男が答へる。「逢はせまつらんと思へど、公の掟なれば是非なしと諦め給へ。私の情賣るは安き間の事にてあれど」と急に口を緘みてあたりを見渡す。濠の內からかいつぶりがひよいと浮き上がる。

女は頸に懸けたる金の鎖を解いて男に與へて「只束の間を垣間見んとの願ひなり。女人の頼み引き受けぬ君につれなし」と云ふ。

男は鎖を指の先に卷きつけて思案の體である。かいつぶりはふいと沈む。やゝありていふ、「牢守は牢の掟を破りがたし。御子等は變る事なく、すこやかに月日を過ごさせ給ふ。心安く覺して歸り給へ」と金の鎖を押し戾す。女は身動きもせぬ。鎖ばかり敷石の上に落ちて鏘然と鳴る。

「如何にしても逢ふ事は叶はずや」と女が尋ねる。

「御氣の毒なれど」と牢守が云ひ放つ。

「黑き塔の影、堅き塔の壁、寒き塔の人」と云ひながら女はさめ／＼と泣く。

舞臺が又變る。

丈の高い黑裝束の影が一つ中庭の隅にあらはれる。苔寒き石壁の中からスーと拔け出た樣に思はれた。夜と霧との境に立つて朦朧とあたりを見廻す。暫くすると同じ黑裝束の影が又一つ陰の底から湧いて出る。櫓の角に高くかかる星影を仰いで「日は暮れた」と脊の高いのが云ふ。「晝の世界に顏は出せぬ」と一人が答へる。「人殺しも多くしたが今日程寢覺めの惡い事はまたとあるまい」と高き影が低い方を向く。「タペストリの裏で二人の話しを立ち聞きした時は、いつその事止めて歸らうかと思うた」と低

いのが正直に云ふ。「絞める時、花の様な唇がぴり〳〵と顫うた」「透き通る様な額に紫色の筋が出た」「あの唸つた聲がまだ耳に附いて居る」。黒い影が再び黒い夜の中に吸ひ込まれる時櫓の上で時計の音ががあんと鳴る。

空想は時計の音と共に破れる。石像の如く立つて居た番兵は銃を肩にしてコトリ〳〵と敷石の上を歩いて居る。あるき乍ら一件と手を組んで散歩する時を夢みて居る。

血塔の下を拔けて向うへ出ると綺麗な廣場がある。其眞中が少し高い、其高い所に白塔がある。白塔は塔中の尤も古きもので昔の天主である。竪二十間、横十八間、高さ十五間、壁の厚さ一丈五尺、四方に角樓が聳えて所々にはノーマン時代の銃眼さへ見える。千三百九十九年國民が三十三ケ條の非を擧げてリチャード二世に讓位をせまつたのは此塔中である。僧侶、貴族、武士、法士の前に立つて彼が天下に向つて讓位を宣告したのは此塔中である。爾時讓りを受けたるヘンリーは起つて十字を額と胸に畫して云ふ「父と子と聖靈の名によつて、我ヘンリーは此大英國の王冠と御代とを、わが正しき血、惠みある神、親愛なる友の援けを藉りて襲ぎ受く」と。偖て先王の運命は何人も知る者がなかつた。其死骸がポント・フラクト城より移されて聖ポール寺に着した時、二萬の群集は彼の屍を繞つて其骨立せる面影に驚かされた。或は云ふ、八人の刺客がリチャードを取り卷いた時、彼は一人の手より斧を奪ひて一人を斬り二人を倒した。去れどもエクストンが背後より下せる一撃の爲に遂に恨を呑んで死なれたと。或る者は天を仰いで云ふ「あらずあらず。リチャードは斷食をして自らと、命の根をたたれたのぢや」と。何れにしても難有くない。帝王の歴史は悲慘の歴史である。

階下の一室は昔ヲルター・ロリーが幽囚の際萬國史の草を記した所だと云ひ傳へられて居る。彼がエリザ式の半ずぼんに絹の靴下を膝頭で結んだ右足を左の上へ乘せて鵞ペンの先を紙の上へ突いたまゝ首を少し傾けて考へて居る所を想像して見た。然し其部屋は見る事が出來なかつた。

南側から入つて螺旋狀の階段を上ると茲に有名な武器陳列場がある。時々手を入れるものと見えて皆ぴか〳〵光つて居る。日本に居つた時歴史や小説で御目にかゝる丈で一向要領を得なかつたものが一々明瞭になるのは甚だ嬉しい。然し嬉しいのは一時の事で今では丸で忘れて仕舞つたから矢張り同じ事だ。只猶記憶に殘つて居るのが甲冑である。其中でも實に立派だと思つたのは慥かヘンリー六世の着用したものと覺えて居る。全體が鋼鐵製で所々に象嵌がある。尤も驚いたのは其偉大な事である。かゝる甲冑を着けたものは少くとも身の丈七尺位の大男でなくてはならぬ。余が感服して此甲冑を眺めて居るとコトリ〳〵と足音がして、余の傍へ歩いて來るものがある。振り向いて見るとビーフ・イーターである。ビーフ・イーターと云ふと始終牛でも食つて居る人の様に思はれるがそんなものではない。彼は倫敦塔の番人である。絹帽を潰した様な帽子を被つて美術學校の生徒の様な服を纏うて居る。太い袖の先を括つて腰の所を帶でしめて居る。服にも模様がある。模様は蝦夷人の着る半纏について居る様な頗る單純の直線を竝べて角形に組み合はしたものに過ぎぬ。彼は時として槍をさへ携へる事がある。穗の短かい柄の先に毛の下がつた三國志にでも出さうな槍をもつ。其ビーフ・イーターの一人が余の後に止まつた。彼はあまり脊の高くない、肥り肉の白髯の多いビーフ・イーターであつた。「あなたは日本人ではありませんか」と微笑しながら尋ねる。余は現今の英國

人と話しをして居る氣がしない。彼が三四百年の昔から一寸顏を出したか、又は余が急に三四百年の古へを覗いた樣な感じがする。余は默して輕くうなづく。こちらへ來給へと云ふから尾いて行く。彼は指を以て日本製の古き具足を指して、見たかと云はぬ許りの眼附をする。余は又だまつてうなづく。是は蒙古よりチャーレス二世に獻上になつたものだとビーフ・イーターが說明をして吳れる。余は三たびうなづく。

白塔を出てボーシャン塔に行く。途中に分捕の大砲が並べてある。其前の所が少しばかり鐵柵で圍ひ込んで、鎖の一部に札が下がつて居る。見ると仕置場の跡とある。二年も三年も長いのは十年も日の通はぬ地下の暗室に押し込められたものが、或日突然地上に引き出さるゝかと思ふと地下よりも猶恐ろしき此場所へ只据ゑらるゝ爲であつた。久しぶりに青天を見て、やれ嬉しやと思ふ間もなく、目がくらんで物の色さへ定かには瞳中に寫らぬ先に、白き斧の刃がひらりと三尺の空を切る。流れる血は生きて居るうちから既に冷たかつたであらう。烏が一疋下りて居る。翼をすくめて黒い嘴をとがらせて人を見る。百年碧血の恨が凝つて化鳥の姿となつて長く此の不吉な地を守る樣な心地がする。吹く風に楡の木がざわ〳〵と動く。見ると枝の上にも烏が居る。暫くすると又一羽飛んでくる。何處から來たか分らぬ。傍に七つ許りの男の子を連れた若い女が立つて烏を眺めて居る。希臘風の鼻と、珠を溶いた樣にうるはしい目と、眞白な頸筋を形づくる曲線のうねりとが少からず余の心を動かした。子供は女を見上げて「鴉が、鴉が」と珍しさうに云ふ。それから「鴉が寒さうだから、麵麭をやりたい」とねだる。女は靜かに「あの鴉は何もたべたがつて居やしません」と云ふ。子供は「なぜ」と聞く。女は長い睫の奧に漾うて居る樣な眼で鴉を見詰めながら「あの鴉は五羽居ます」といつたぎり子供の問には答へない。何か獨りで考へて居るかと思はるゝ位澄まして居る。余は此女と此鴉の間に何か不思議の因緣でもありはせぬかと疑つた。彼は鴉の氣分をわが事の如くに云ひ、三羽しか見えぬ鴉を五羽居ると斷言する。あやしき女を見捨てゝ余は獨りボーシャン塔に入る。

倫敦塔の歷史はボーシャン塔の歷史であつて、ボーシャン塔の歷史は悲酸の歷史である。十四世紀の後半にエドワード三世の建立にかゝる此三層塔の一階室に入るものは、其の入るの瞬間に於て、百代の遺恨を結晶したる無數の記念を周圍の壁上に認むるであらう。凡ての怨、凡ての憤、凡ての憂と悲とは此怨、此憤、此の憂と悲の極端より生ずる慰藉と共に九十一種の題辭となつて今に猶觀る者の心を寒からしめて居る。冷やかなる鐵筆に無情の壁を彫つてわが不運と定業とを天地の間に刻み附けたる人は、過去といふ底なし穴に葬られて、空しき文字のみいつ迄も娑婆の光を見る。彼等は强ひて自らを愚弄するにあらずやと怪しまれる。世に反語といふがある。白といふて黒を意味し、小と唱へて大を思はしむ。凡ての反語のうち自ら知らずして後世に殘す反語程猛烈なるはまたとあるまい。墓碣と云ひ、記念碑と云ひ、賞牌と云ひ、綬章と云ひ、此等が存在する限りは、空しき物質に、ありし世を偲ばしむるの具となるに過ぎない。われは去る、われを傳ふるものは殘ると思ふは、去るわれを傳ましむる媒介物の殘る意にて、われ其者の殘る意にあらざるを忘れたる人の言葉と思ふ。未來の世迄反語を傳へて泡沫の身を嘲る人のなす事と思ふ。余は死ぬ時に辭世も作るまい。死んだ後は墓碑も建てゝもらふまい。肉は燒き骨は粉にして西風の強く吹く日大空に向つて撒き散らし

てもらはう抔と入らざる取越苦勞をする。

題辭の書體は固より一樣でない。あるものは閑に任せて叮寧な楷書を用ひ、あるものは心急ぎてか口惜し紛れかがり／＼と壁を掻いて擲り書きに彫り附けてある。又あるものは自家の紋章を刻み込んで其中に古雅な文字をとゞめ、或は楯の形を描いて其内部に讀み難き句を殘して居る。書體の異なる樣に言語も亦決して一樣でない。英語は勿論の事、以太利語も羅甸語もある。左り側に「我が望は基督にあり」と刻されたのはパスリユといふ坊樣の句だ。此パスリユは千五百三十七年に首を斬られた。其傍に JOHAN DECKER と云ふ署名がある。デッカーとは何者だか分らない。階段を上つて行くと戸の入口に T. C. といふのがある。是も頭文字丈で誰やら見當がつかぬ。其から少し離れて大變綿密なのがある。先づ右の端に十字架を描いて心臟を飾り附け、其脇に骸骨と紋章を彫り込んである。少し行くと楯の中に下の樣な句をかき入れたのが目につく。「運命は空しく我をして心なき風に訴へしむ。時も摧けよ、わが星は悲しかれ、われにつれなかれ」次には「凡ての人を尊べ。衆生をいつくしめ。神を恐れよ。王を敬へ」とある。

斯んなものを書く人の心の中はどの樣であつたらうと想像して見る。凡そ世の中に何が苦しいと云つて所在のない程の苦しみはない。意識の內容に變化のない程の苦しみはない。使へる身體は眼に見えぬ繩で縛られて動きのとれぬ程の苦しみはない。生きるといふは活動して居るといふ事であるに、生きながら此活動を抑へらるゝのは生といふ意味を奪はれたると同じ事で、その奪はれたを自覺する丈が死よりも一層の苦痛である。此壁の周圍をかく迄に塗抹した人々は皆此死よりも辛い苦痛を甞めたのである。忍ばるゝ限り堪へらるゝ限りは此苦痛と戰つた末、居ても起つてもたまらなく爲つた時、始めて釘の折や鋭き爪を利用して無事の內に仕事を求め、太平の裏に不平を洩らし、平地の上に波瀾を描いたものであらう。彼等が題せる一字一畫は、號泣、涕涙、其他凡て自然の許す限りの排悶的手段を盡したる後、猶飽く事を知らざる本能の要求に餘儀なくせられたる結果であらう。

又想像して見る。生れて來た以上は生きねばならぬ。敢て死を怖るゝとは云はず、只生きねばならぬ。生きねばならぬと云ふは耶蘇孔子以前の道で、又耶蘇孔子以後の道である。何の理窟も入らぬ、只生きたいから生きねばならぬのである。凡ての人は生きねばならぬ。此獄に繫がれたる人も亦此大道に從つて生きねばならなかつた。同時に彼等は死ぬべき運命を眼前に控へて居つた。如何にせば生き延びらるゝだらうかとは時々刻々彼等の胸裏に起る疑問であつた。一度此室に入るものは必ず死ぬ。生きて天日を再び見たものは千人に一人しかない。彼等は遲かれ早かれ死なねばならぬ、去れど古今に亘る大眞理は彼等に誨へて生きよと云ふ、飽く迄も生きよと云ふ。彼等は已むを得ず彼等の爪を磨いだ。尖れる爪の先を以て堅き壁の上に一と書いた。一をかける後も眞理は古への如く生きよと囁く、飽く迄も生きよと囁く。彼等は剝がれたる爪の癒ゆるを待つて再び二とかいた。斧の刃に肉飛び骨摧ける明日を豫期した彼等は冷やかなる壁の上に只一となり二となり線となり字となつて生きんと願つた。壁の上に殘る橫縱の疵は生を欲する執着の魂魄である。余が想像の絲を茲迄たぐつて來た時、室內の冷氣が一度に背の毛穴から身の內に吹き込む樣な感じがして覺えずぞつとした。さう思つて見ると何だか壁が濕つぽい。指先で撫でゝ見るとぬらりと露にすべる。指先を見ると眞赤だ。壁の隅から

からぽたり〳〵と露の珠が垂れる。床の上を見ると其滴りの痕が鮮やかな紅の紋を不規則に連ねる。十六世紀の血がにじみ出したと思ふ。壁の奥の方から唸り聲さへ聞こえる。唸り聲が段々と近くなると其が夜を洩るゝ凄い歌と變化する。こゝは地面の下に通ずる穴倉で其内には人が二人居る。鬼の國から吹き上げる風が石の壁の破れ目を通つて小やかなカンテラを煽るから、只さへ暗い室の天井も四隅も煤色の油煙で渦巻いて動いて居る樣に見える。幽かに聞こえた歌の音は窖中に居る一人の聲に相違ない。歌の主は腕を高くまくつて大きな斧を轆轤の砥石にかけて一生懸命に磨いで居る。其傍には一挺の斧が抛け出してあるが、風の具合で其白い刃がぴかり〳〵と光る事がある。他の一人は腕組をした儘立つて砥の轉るのを見て居る。髯の中から顔が出て居て其半面をカンテラが照らす。照らされた部分が泥だらけの人蔘の樣な色に見える。「かう毎日の樣に舟から送つて來ては、首斬り役も繁昌だなう」と髯がいふ。「左樣さ、斧を磨ぐ丈でも骨が折れるわ」と歌の主が答へる。是は脊の低い眼の凹んだ煤色の男である。「昨日は美しいのをやつたなあ」と髯が惜しさうにいふ。「いや顔は美しいが頸の骨は馬鹿に堅い女だつた。御蔭で此通り刃が一分許りかけた」とやけに轆轤を廻す、シュ〳〵〳〵と鳴る間から火花がピチ〳〵と出る。磨ぎ手は聲を張り揚げて歌ひ出す。

　切れぬ筈だよ女の頸は戀の恨みで刃が折れる。

シュ〳〵〳〵と鳴る音の外には聽こえるものもない。カンテラの光が風に煽られて磨ぎ手の右の頰を射る。煤の上に朱を流した樣だ。「あすは誰の番かな」と稍ありて髯が質問する。「あすは例の婆樣の番さ」と平氣に答へる。

　生える白髮を浮氣が染める、首を斬られりや血が染める。

と高調子に歌ふ。シュ〳〵〳〵と轆轤が廻る。ピチ〳〵と火花が出る。「アハヽヽ、もう善からう」と斧を振り翳して灯影に刃を見る。「婆樣ぎりか、外に誰も居ないか」と髯が又問をかける。「それから例のがやられる」「氣の毒な、もうやるか、可哀相になう」といへば、「氣の毒ぢやが仕方がないわ」と眞黑な天井を見て嘯く。

　忽ち窖も首斬りもカンテラも一度に消えて余はボーシャン塔の眞中に茫然と佇んで居る。ふと氣が附いて見ると傍に先刻鴉に麵麭をやりたいと云つた男の子が立つて居る。例の怪しい女もとの如くついて居る。男の子が壁を見て「あすこに犬がかいてある」と驚いた樣に云ふ。女は例の如く過去の權化と云ふべき程の屹とした口調で、「犬ではありません。左が熊、右が獅子で、是はダッドレー家の紋章です」と答へる。實の所余も犬か豚だと思つて居たのであるから、今此女の說明を聞いて益不思議な女だと思ふ。さう云へば今ダッドレーと云つたとき其言葉の内に何となく力が籠つて、恰も己の家名でも名乘つた如くに感ぜらるゝ。余は息を凝らして兩人を注視する。女は猶說明をつゞける。「此紋章を刻んだ人はジョン・ダッドレーです」恰もジョンは自分の兄弟の如き語調である。「ジョンには四人の兄弟があつて、其兄弟が熊と獅子の周圍に刻み附けられてある草花でちやんと分ります」見ると成程四通りの花だか葉だかが油繪の枠の樣に熊と獅子を取り卷いて彫つてある。「こゝにあるのは Acorns で是は Ambrose の事です。こちらにあるのが Rose で Robert を代表するのです。下の方に忍冬が描いてありませう。忍冬は Honeysuckle だから Henry に當たるのです。左の上に塊まつて居るのが Geranium で是は G…」と云つたぎり默つて居る。見ると珊瑚

の樣な唇が電氣でも懸けたかと思はれる迄にぶる／＼と顫へて居る。蝮が鼠に向つたときの舌の先の如くだ。しばらくすると女は此紋章の下に書き附けてある題辭を朗かに誦した。

Yow that the beasts do wel be-
[hold and se,
May deme with ease wherefore
[here made they be
With borders wherein.......
[....
4 brothers' names who list to
[serche the grovnd.

女は此句を生れてから今日迄毎日日課として諳誦した樣に一種の口調を以て誦し了つた。實を云ふと壁にある字は甚だ見惡い。余の如きものは首を捻つても一字も讀めさうにない。余は益此女を怪しく思ふ。

氣味が惡くなつたから通り過ぎて先へ拔ける。銃眼のある角を出ると滅茶苦茶に書き綴られた、模樣だか文字だか分らない中に、正しき畫で、小く「ジエーン」と書いてある。余は覺えず其前に立ち留まつた。英國の歷史を讀んだものでジエーン・グレーの名を知らぬ者はあるまい。又其薄命と無慘の最期に同情の涙を濺がぬ者はあるまい。ジェーンは義父と所天の野心の爲に十八年の春秋を罪なくして惜し氣もなく刑場に賣つた。蹂み躙られたる薔薇の蕊より消え難き香の遠く立ちて、今に至る迄史を繙く者をゆかしがらせる。希臘語を解しプレートーを讀んで一代の碩學アスカムをして舌を捲かしめたる逸事は、此詩趣ある人物を想見するの好材料として何人の腦裏にも保存せらるゝであらう。余はジェーンの名の前に立ち留まつたぎり動かない。動かないと云ふより寧ろ動けない。空想の幕は既にあいて居る。

始めは兩方の眼が霞んで物が見えなくなる。やがて暗い中の一點にパッと火が點ぜられる。其火が次第々々に大きくなつて内に人が動いて居る樣な心持ちがする。次にそれが漸々明るくなつて丁度雙眼鏡の度を合せる樣に判然と眼に映じて來る。次に其景色が段々大きくなつて遠方から近づいて來る。氣がついて見ると眞中に若い女が坐つて居る、右の端には男が立つて居る樣だ。兩方共どこかで見た樣だなと考へるうち、瞬く間にズッと近づいて余から五六間先で果と停まる。男は前に穴倉の裏で歌をうたつて居た、眼の凹んだ、煤色をした、脊の低い奴だ。磨ぎすました斧を左手に突いて腰に八寸程の短刀をぶら下げて身構へて立つて居る。余は覺えずギョッとする。女は白き手巾で目隱しをして兩の手で首を載せる臺を探す樣な風情に見える。首を載せる臺は日本の薪割臺位の大きさで前に鐵の環が着いて居る。臺の前部に藁が散らしてあるのは流れる血を防ぐ要愼と見えた。背後の壁にもたれて二三人の女が泣き崩れて居る、侍女でもあらうか。白い毛裘を折り返した法衣を裾長く引く坊さんが、うつ向いて女の手を臺の方角へ導いてやる。女は雪の如く白い服を着けて、肩にあまる金色の髮を時々雲の樣に搖らす。ふと其顔を見ると驚いた。眼こそ見えね、眉の形、細き面、なよやかなる頸の邊りに至る迄、先刻見た女其儘である。思はず馳け寄らうとしたが足が縮んで一歩も前へ出る事が出來ぬ。女は漸く首斬り臺を探り當てゝ兩の手をかける。唇がむづ／＼と動く。最前男の子にダッドレーの紋章を說明した時と寸分違はぬ。やがて首を少し傾けて「わが夫ギルドフォード・ダッドレーは既に神の國に行つてか」と聞く。肩を搖り越した一握りの髮が輕くうねりを打つ。坊さんは「知り申さぬ」と答へて「まだ眞の道に入り玉ふ心はなきか」と問ふ。女屹として「まこととは吾と吾

夫の信ずる道をこそ言へ。御身達の道は迷ひの道、誤りの道よ」と返す。坊さんは何も言はずに居る。女は稍落ち附いた調子で「吾夫が先なら追ひ附かう、後ならば誘うて行かう。正しき神の国に、正しき道を踏んで行かう」と云ひ終つて落つるが如く首を臺の上に投げかける。眼の凹んだ、煤色の、背の低い首斬り役が重た氣に斧をエイと取り直す。余の洋袴の膝に二三點の血が迸ると思つたら、凡ての光景が忽然と消え失せた。

あたりを見廻すと男の子を連れた女はどこへ行つたか影さへ見えない。狐に化かされた樣な顔をして茫然と塔を出る。歸り道に又鐘塔の下を通つたら高い窓からガイフォークスが稻妻の樣な顔を一寸出した。「今一時間早かつたら……此三本のマッチが役に立たなかつたのは實に殘念である」と云ふ聲さへ聞こえた。自分ながら少々氣が變だと思つてそこ〳〵に塔を出る。塔橋を渡つて後を顧みたら、北の國の例か此日もいつの間にやら雨となつて居た。糠粒を針の目からこぼす樣な細かいのが滿都の紅塵と煤煙を溶かして濛々と天地を鎖す裏に地獄の影の樣にぬつと見上げられたのは倫敦塔であつた。

無我夢中に宿に着いて、主人に今日は塔を見物して來たと話したら、主人が鴉が五羽居たでせうと云ふ。おや此主人もあの女の親類かなと内心大いに驚くと主人は笑ひながら「あれは奉納の鴉です。昔からあすこに飼つて居るので、一羽でも數が不足すると、すぐあとをこしらへます、夫だからあの鴉はいつでも五羽に限つて居ます」と手もなく説明するので、余の空想の一半は倫敦塔を見た其日のうちに打ち壞はされて仕舞つた。余は又主人に壁の題辭の事を話すと、主人は無造作に「えゝ、あの落書ですか、詰まらない事をしたもんで、折角綺麗な所を臺なしにして仕舞ひましたねえ、なに罪人の落書だなんて當てになつたもんぢやありません、贋も大分ありまさあね」と澄ましたものである。余は最後に美しい婦人に逢つた事と其婦人が我々の知らない事や到底讀めない字句をすら〳〵讀んだ事抔を不思議さうに話し出すと、主人は大いに輕蔑した口調で「そりや當り前でさあ、皆あすこへ行く時にや案内記を讀んで出掛けるんでさあ、其位の事を知つてたつて何も驚くにやあたらないでせう、何頗る別嬪だつて――倫敦にや大分別嬪が居ますよ、少し氣を附けないと險呑ですぜ」と飛んだ所へ火の手が揚がる。是で余の空想の後半が又打ち壞はされた。主人は二十世紀の倫敦人である。

夫からは人と倫敦塔の話をしない事に極めた。又再び見物に行かない事に極めた。

此篇は事實らしく書き流してあるが、實の所過半想像的の文字であるから、見る人は其心で讀まれん事を希望する。塔の歴史に關して時々戲曲的に面白さうな事柄を選んで綴り込んで見たが、旨く行かんので所々不自然の痕迹が見えるのは已むを得ない。其中エリザベス（エドワード四世の妃）が幽閉中の二王子に逢ひに來る場と、二王子を殺した刺客の述懷の場は沙翁の歴史劇リチャード三世のうちにもある。沙翁はクラレンス公爵の塔中で殺さるゝ場を寫すには正筆を用ひ、王子を絞殺する模樣をあらはすには仄筆を使つて刺客の語を藉り裏面から其樣子を描出して居る。嘗て此劇を讀んだとき、其所を大いに面白く感じた事があるから、今其趣向を其儘用ひて見た。然し對話の内容周圍の光景等は無論余の空想から捏出したもので沙翁とは何等の關係もない。夫から斷頭吏の歌をうたつて

斧を磨ぐ所に就いて一言して置くが、此趣向は全くエーンズウオースの「倫敦塔」と云ふ小説から來たもので、余は之に對して些少の創意をも要求する權利はない。エーンズウオースには斧の刃のこぼれたのをソルスベリ伯爵夫人を斬る時の出來事の樣に記してある。余が此書を讀んだとき斷頭場に用ふる斧の刃のこぼれたのを首斬り役が磨いで居る景色を僅かに一二頁に足らぬ所ではあるが非常に面白いと感じた。加之斧を磨ぎながら亂暴な歌を平氣でうたつて居ると云ふ事が、同じく十五六分の所作ではあるが、全篇を活動せしむるに足る程の戲曲的出來事だと深く興味を覺えたので、今其趣向其儘を踏襲したのである。但し歌の意味も文句も、二吏の對話も、暗窖の光景も一切趣向以外の事は余の空想から成つたものである。序だからエーンズウオースが獄門役に歌はせた歌を紹介して置く。

The axe was sharp, and heavy
[as lead,
As it touched the neck, off
[went the head!
Whir—whir—whir—whir!

Queen Anne laid her white
[throat upon the block,
Quietly waiting the fatal shock;
The axe it severed it right in
[twain,
And so quick—so true—that
[she felt no pain.
Whir—whir—whir—whir!
Salisbury's countess, she would
[not die
As a proud dame should—deco-
[rously.
Lifting my axe, I split her
[skull,
And the edge since then has
[been notched and dull.
Whir—whir—whir—whir!
Queen Catherine Howard gave
[me a fee—
A chain of gold—to die easily:
And her costly present she did
[not rue,
For I touched her head and
[away it flew!
Whir—whir—whir—whir!

此全章を譯さうと思つたが到底思ふ樣に行かないし、且餘り長過ぎる恐れがあるから已めにした。

一、王子幽閉の場と、ジエーン所刑の場に就いては有名なるドラロッシの繪畫が尠からず余の想像を助けて居る事を一言して聊か感謝の意を表する。

舟より上がる囚人のうちワイアットとあるは有名なる詩人の子にてジエーンの爲め兵を擧げたる人、父子同名なる故紛れ易いから記して置く。

塔中四邊の風致景物を今少し精細に寫す方が讀者に塔其物を紹介して其地を踏ましむる思ひを自然に引き起こさせる上に於いて必要な條件とは氣が附いて居るが、何分かゝる文を草する目的で遊覽した譯ではないし、且年月が經過して居るから判然たる景色がどうしても眼の前にあらはれ惡い。從つて動ともすると主觀的の句が重複して、ある時は讀者に不愉快な感じを與へはせぬかと思ふ所もあるが、右の次第だから仕方がない。

カーライル博物館

公園の片隅に通り掛りの人を相手に演説をして居る者がある。向うから來た釜形の尖つた帽子を被いて古ぼけた外套を猫背に着た爺さんがそこへ歩みを佇めて演説者を見る。演説者はぴたりと演説をやめてつか〳〵と此村夫子のたたずめる前に出て來る。二人の視線がひたと行き當たる。演説者は濁りたる田舍調子にて御前はカーライルぢやないかと問ふ。如何にもわしはカーライルぢやと村夫子が答へる。チェルシーの哲人と人が言ひ囃すのは御前の事かと問ふ。成程世間ではわしの事をチェルシーの哲人と云ふ樣ぢや。セージと云ふは鳥の名だに、人間のセージとは珍しいなと演説者はから〳〵と笑ふ。村夫子は成程猫も杓子も同じ人間ぢやのに殊更に哲人抔と異名をつけるのは、あれは鳥ぢやと渾名すると同じ樣なものだなう。人間は矢張り當り前の人間で善かりさうなものだのに。と答へて是もから〳〵と笑ふ。

余は晩餐前に公園を散歩する度に川縁の椅子に腰を卸して向う側を眺める。倫敦に固有なる濃霧は殊に岸邊に多い。余が櫻の杖に頤を支へて眞正面を見て居ると、遙かに對岸の往來を這ひ廻る霧の影は次第に濃くなつて、五階立の町續きの下から漸々此の搖曳くものの裏に薄れ去つて來る。仕舞ひには遠き未來の世を眼前に引き出したる樣に窈然たる空の中に取り留めのつかぬ鳶色の影が殘る。其時此鳶色の奧にぽたり〳〵と鈍き光が滴る樣に見え初める。三層四層五層共に瓦斯を點じたのである。余は櫻の杖をついて下宿の方へ歸る。歸る時必ずカーライルと演説使ひの話を思ひだす。彼の溟濛たる瓦斯の霧に混ずる所が往時此村夫子の住んで居つたチェルシーなのである。

カーライルは居らぬ。演説者も死んだであらう。然しチェルシーは以前の如く存在して居る。否彼の多年住み古した家屋敷さへ今猶儼然と保存せられてある。千七百八年チェイン・ロウが出來てより以來、幾多の主人を迎へ幾多の主人を送つたかは知らぬが、兎に角今日迄昔の儘で殘つて居る。カーライルの歿後は有志家の發起で彼の生前使用したる器物調度圖書典籍を蒐めて之を各室に按排し好事のものには何時でも縦覽せしむる便宜さへ謀られた。

文學者でチェルシーに縁故のあるものを擧げると昔トマス・モア、下つてスモレット、猶下つてカーライルと同時代にはリ・ハント抔が尤も著名である。ハントの家はカーライルの直き近傍で、現にカーライルが此家に引き移つた晩尋ねて來たといふ事がカーライルの記錄に書いてある。又ハントがカーライルの細君にシェレーの塑像を贈つたといふ事も知れて居る。此外にエリオットの居つた家とロセッチの住んだ邸がすぐ傍の川端に向いた通にある。然し是等は皆既に代がかはつて現に人が這入つて居るから見物は出來ぬ。只カーライルの舊廬のみは六ペンスを拂へば何人でも又何時でも隨意に觀覽が出來る。

チェイン・ローは河岸端の往來を南に折れる小路でカーライルの家は其の右側の中頃に在る。番地は二十四番地だ。

毎日の樣に川を隔てて霧の中にチェルシーを眺めた余はある朝遂に橋を渡つて其の有名なる庵を叩いた。

庵といふと物寂びた感じがある。少くとも

瀟洒とか風流とかいふ念と伴なふ。然しカーライルの宅はそんな贅澤なものではない。市街から直ちに戸が敷ける程の道傍に建てられた四階造りの眞四角な家である。
出張つた所も引き込んだ所もないのべつに眞直に立つて居る。丸で大製造場の煙突の根本を切つてきて之に天井を張つて窓をつけた様に見える。
是が彼が北の田舍から始めて倫敦へ出て來て探しに探し拔いて漸くの事で探し宛てた家である。彼は西を探し南を探しハンプステッドの北を探して終に恰好の家を探し出す事が出來ず、最後にチェイン・ローへ來て此家を見てもまだすぐに取極める程の勇氣がなかつたのである。四千萬の愚物と天下を罵つた彼も住家には閉口したと見えて、其愚物の中に當然勘定せらるべき細君へ向けて委細を報知して其意向を確めた。細君の答へに「御申越の借家は二軒共不都合もなき樣存候へば、倫敦へ上り候迄双方共御明け置願度若し又それ迄に取極め候必要相生じ候節は御一存にて如何とも御取計らひ被下度候」とあつた。カーライルは書物の上でこそ自分獨りわかつた樣な事をいふが、家を極めるには細君の助けに依らなくては駄目と覺悟をしたものと見えて、夫人の上京する迄手を束ねて待つて居た。四五日すると夫人が來る。そこで今度は二人して又東西南北を馳け廻つた揚句の果矢張チェイン・ローが善いといふ事になつた。兩人がこゝに引き越したのは千八百三十四年の六月十日で、引越の途中に下女の持つて居たカナリヤが籠の中で囀つたといふ事迄知れて居る。夫人が此家を撰んだのは大いに氣に入つたものか外に相當なのがなくて已むを得なんだのか、いづれにもせよ此の烟突の如く四角な家は年に三百五十圓の家賃を以て此新世帶の夫婦を迎へたのである。カーライルは此クロムエルの如きフレデリック大王の如き又製造場の烟突の如き家の中でクロムエルを著はしフレデリック大王を著はしヂスレリーの周旋にかゝる年給を辭して四角四面に暮らしたのである。

余は今此四角な家の石階の上に立つて鬼の面のノツカーをコツ／＼と敲く。暫らくすると内から五十恰好の肥つた婆さんが出て來て御這入りと云ふ。最初から見物人と思つて居るらしい。婆さんはやがて名簿の樣なものを出して御名前をといふ。余は倫敦滯留中四たび此家に入り四たび此名簿に余が名を記録した覺えがある。此時は實に余の名の記入初であつた。可成丁寧に書く積りであつたが例に因つて甚だ見苦しい字が出來上がつた。前の方を繰りひろげて見ると日本人の姓名は一人もない。して見ると日本人でこゝへ來たのは余が始めてだなと下らぬ事が嬉しく感ぜられる。婆さんがこちらへと云ふから左手の戸をあけて町に向いた部屋に這入る。是は昔客間であつたさうだ。色々なものが並べてある。壁に畫やら寫眞やらがある。大概はカーライルと夫婦の肖像の樣だ。後の部屋にカーライルの意匠に成つたといふ書棚がある。夫に書物が澤山詰まつて居る。六づかしい本がある。下らぬ本がある。古びた本がある。讀めさうもない本がある。其外にカーライルの八十の誕生日の記念の爲に鑄たといふ銀牌と銅牌がある。金牌は一つもなかつた樣だ。凡て金と名のつくものが無暗にかお／＼して何時迄も平氣に殘つて居るのを、もらうた者の短命なるに對照して考へると妙な感じがする。夫から二階へ上がる。こゝに又大きな本棚があつて、本が例の如く一杯詰まつて居る。矢張り讀めさうもない本、聞いた事のなささうな本、入りさうもない本が多い。勘定をしたら百三十五部あつた。此部屋も一時は客間になつて居たさうだ。ビ

スマークがカーライルに送つた手紙と普露西の勲章がある。フレデリック大王傳の御蔭と見える。細君の用ひた寢臺がある。頗る不器用な飾り氣のないものである。

案内者はいづれの國でも同じものと見える。さつきから婆さんは室内の繪畫器具に就いて一々説明を與へる。五十年間案内者を專門に修業したものでもあるまいが、非常に熟練したものである。何年何月何日にどうしたからしたと恰も口から出任せに喋舌つて居る樣である。然も其流暢な辯舌に抑揚があり節奏がある。調子が面白いから其方ばかり聽いて居ると何を言つて居るのか分らなくなる。始めのうちは聞き返したり問ひ返したりして見たが仕舞ひには面倒になつたから、御前は御前で勝手に口上を述べなさい、わしはわしで自由に見物するからといふ態度をとつた。婆さんは人か聞かうが聞くまいが口上丈は必ず述べますといふ風で、別段厭きた氣色もなく、何年何月何日をやつて居る。

余は東側の窓から首を出して一寸近所を見渡した。眼の下に十坪程の庭がある。右も左も又向うも石の高塀で仕切られて其形は矢張り四角である。四角はどこ迄も此家の附屬物かと思ふ。カーライルの顔は決して四角ではなかつた。彼は寧ろ懸崖の中途が陷落して草原の上に伏しかゝつた樣な容貌であつた。細君は上出來の辣韮の樣に見受けらるゝ。今余の案内をして居る婆さんはあんぱんの如く丸い。余が婆さんの顔を見て成程丸いなと思ふとき婆さんは又何年何月何日を誦し出した。余は再び窓から首を出した。

カーライル云ふ。裏の窓より見渡せば見ゆるものは茂る葉の木株、碧なる野原、及びその間に點綴する勾配の急なる赤き屋根のみ。西風の吹く此頃の眺めはいと晴れやかに心地よし。

余は茂る葉を見ようと思ひ、青き野を眺めようと思うて、實は裏の窓から首を出したのである。首は既に二返出したが青いものも何も見えぬ。右に家が見える。左に家が見える。向うにも家が見える。其上には鉛色の空が一面に胃病やみの樣に不精無精に垂れかゝつて居るのみである。余は首を縮めて窓より中へ引き込めた。案内者はまだ何年何月何日の續きを朗かに讀誦して居る。

カーライル又云ふ。倫敦の方を見れば眼に入るものはヱストミンスター、アベーとセント。ポールズの高塔の頂のみ。其他幻の如き殿宇は煤を含む雲の影の去るに任せて隱見す。

「倫敦の方」とは既に時代後れの話である。今日チェルシーに來て倫敦の方を見るのは家の中に坐つて家の方を見ると同じ理窟で、自分の眼で自分の見當を眺めると云ふのと大した差違はない。然しカーライルは自ら倫敦に住んで居るとは思はなかつたのである。彼は田舍に閑居して都の中央にある大伽藍を遙かに眺めた積りであつた。余は三度首を出した。そして彼の所謂「倫敦の方」へと視線を延ばした。然しヱストミンスターも見えぬ、セント・ポールズも見えぬ。數萬の家、數十萬の人、數百萬の物音は余と堂宇との間に立ちつゝある、漾ひつゝある、動きつゝある。千八百三十四年のチェルシーと今日のチェルシーとは丸で別物である。余は又首を引き込めた。婆さんは默然として余の背後に佇立して居る。

三階に上がる。部屋の隅を見ると冷やかにカーライルの寢臺が横たはつて居る。青き戸帳が物靜かに垂れて空しき臥床の裡は寂然として薄暗い。木は何の木か知らぬが細工は只無器用で素朴であるといふ外に何等の特色もない。其上に身を横たへた人の身の上も思ひ合はさるゝ。傍には彼が平生使用した風呂桶が九鼎の如く

傍けに置かれてある
　風呂桶とはいふものゝバケツの大きいものに過ぎぬ。彼が此大鍋の中で倫敦の煤を洗ひ落としたかと思ふと益其人となりが偲ばるゝ。不図首を上げると壁の上に彼が往生した時に取つたといふ漆喰製の面型がある。此顔だなと思ふ。此炬燵櫓位の高さの風呂に入つて此質素な寐台の上に寐て四十年間八釜敷い小言を吐き續けに吐いた顔は是だなと思ふ。婆さんの淀みなき口上が電話口で横濱の人の挨拶を聞く様に聞こえる。
　宜しければ上がりませうと婆さんがいふ。余は既に倫敦の塵と音を遙かの下界に残して五重の塔の天邊に獨坐する様な気分がして居るのに耳の元で「上がりませう」といふ催促を受けたから、まだ上があるのかなと不思議に思つた。さあ上がらうと同意する。上がれば上がる程怪しい心持ちが起こりさうであるから。
　四階へ來た時は縹緲として何事とも知らず嬉しかつた。嬉しいといふよりはどことなく妙であつた。こゝは屋根裏である。天井を見ると左右は低く中央が高く馬の鬣の如き形をして其の一番高い脊筋を通して硝子張りの明り取りが着いて居る。此アチックに洩れて來る光線は皆頭の上から眞直に這入る。さうして其頭の上は硝子一枚を隔てゝ全世界に通ずる大空である。眼に遮るものは微塵もない。カーライルは自分の經營で此室を作つた。作つて此を書齋とした。書齋としてこゝに立籠つた。立籠つて見て始めてわが計畫の非なる事を悟つた。夏は暑くて居りにくゝ、冬は寒くて居りにくい。案内者は朗讀的にこゝ迄述べて余を顧た。眞丸な顔の底に笑の影が見える。余は無言の儘うなづく。
　カーライルは何の爲に此の天に近き一室の經營に苦心したか。彼は彼の文章の示す如く電光的の人であつた。彼の癇癪は彼の身邊を圍繞して無遠慮に起こる音響を無心に聞き流して著作に耽るの餘裕を與へなかつたと見える。洋琴の聲、犬の聲、鷄の聲、鸚鵡の聲、一切の聲は悉く彼の鋭敏なる神經を刺激して懊惱已む能はざらしめたる極、遂に彼をして天に最も近く人に尤も遠ざかれる住居を此四階の天井裏に求めしめたのである。
　彼のエイトキン夫人に與へたる書翰にいふ「此夏中は開け放ちたる窓より聞こゆる物音に惱まされ候事一方ならず色々修繕も試み候へども寸毫も利目無之夫より篤と熟考の末家の眞上に二十尺四方の部屋を建築致す事に取極め申候是は壁を二重に致し光線は天井より取り風通しは一種の工夫をもつて差支なき樣致し仕掛に候へば出來上り候上は假令天下の騒ぎ共一時に鬨の聲を揚げ候とも閉口仕らざる積りに御座候」
　斯くの如く豫期せられたる書齋は二千圓の費用にて先づ〳〵思ひ通りに落成を告げて豫期通りの效果を奏したが、之と同時に思ひ掛けなき障害が又主人公の耳邊に起こつた。成程洋琴の音もやみ、犬の聲もやみ、鷄の聲、鸚鵡の聲も案の如く聞こえなくなつたが、下層に居るときは考へだに及ばなかつた寺の鐘、汽車の笛、偖ては何とも知れず遠きより來る下界の聲が呪の如く彼を追ひかけて舊の如くに彼の神經を苦しめた。
　聲。英國に於てカーライルを苦しめたる聲は獨逸に於てショペンハウアを苦しめたる聲である。ショペンハウアいふ「カントは活力論を著はせり、余は反つて活力を弔ふ文を草せんとす。物を打つ音、物を敲く音、物の轉がる音は皆活力の濫用にして余は之が爲に日々苦痛を受くればなり。音響を聞きて何等の感をも起こさざる多數の人我說をきかば笑ふべし。去

れど世に理窟をも感ぜず思想をも感ぜず詩歌をも感ぜず美術をも感ぜざるものあらば、そは正に此輩なる事を忘るゝ勿れ。彼等の頭腦の組織は頑獨にして曇り鈍き事其原因たるは疑ふべからず カーライルとショペンハウアとは實に十九世紀の好一對である。余が此の如く回想しつゝあつた時に、例の婆さんがどうです下りませうかと促す。

一層を下る毎に下界に近づく樣な心持がする。冥想の皮が剝ける如く感ぜらるゝ。階段を降り切つて最下の欄干に倚つて通りを眺めた時には遂に依然たる一個の俗人となり了つて仕舞つた。案內者は平氣な顏をして廚を御覽なさいといふ。廚は往來よりも下にある。今余が立ちつゝある所より又左へ六段の階を下らねばならぬ。是は今案內をして居る婆さんの住居になつて居る。隅に大きな竈がある。婆さんは例の朗讀調を以て「千八百四十四年十月十二日有名なる詩人テニソンが初めてカーライルを訪問した時彼等兩人は此竈の前に對坐して互に煙草を燻らすのみにて二時間の間一言も交へなかつたのであります」といふ。天上に在つて音聲を厭ひたる彼は地下に入つても沈默を愛したるものか。

最後に勝手口から庭に案內される。例の四角な平地を見廻して見ると木らしい木、草らしい草は少しも見えぬ。婆さんの話しによると昔は櫻もあつた、葡萄もあつた。胡桃もあつたさうだ。カーライルの細君はある年二十五錢許りの胡桃を得たさうだ。婆さん云ふ「庭の東南の隅を去る五尺餘の地下にはカーライルの愛犬ニロが葬られて居ります。ニロは千八百六十年二月一日に死にました。墓標も當時は存して居りましたが惜しいかな其後取り拂はれました」と中々精しい。

カーライルが麥藁帽を阿彌陀に被つて寢卷姿の儘啣へ煙管で逍遙したのは此庭園である。夏の最中には蔭深き敷石の上にさゝやかなる天幕を張り其下に机をさへ出して餘念もなく述作に從事したのは此庭園である。星明らかなる夜最後の一ぷくをのみ終りたる後、彼が空を仰いで「嗚呼余が最後に汝を見るの時は瞬刻の後ならん。全能の神が造れる無邊大の劇場、眼に入る無限、手に觸るゝ無限、是も亦我が眉目を掠めて去らん、而して余は遂にそを見るを得ざらん。わが力を致せるや虛ならず、知らんと欲するや切なり。而もわが知識は只此の如く微なり」と叫んだのも此庭園である。

余は婆さんの勞に酬ゆる爲に婆さんの掌の上に一片の銀貨を載せた難有うと云ふ聲さへも朗讀的であつた。一時間の後倫敦の塵と煤と車馬の音とテームス河とはカーライルの家を別世界の如く遠き方へと隔てた。

薤露行

世に傳ふるマロリーのアーサー物語は簡淨素樸と云ふ點に於て珍重すべき書物ではあるが古代のものだから一部の小說として見ると散漫の譏りは免れぬ。況して材を其一局部に取つて纏まつたものを書かうとすると到底萬事原著による譯には行かぬ。從つて此篇の如きも作者の隨意に事實を前後したり、場合を創造したり、性格を書き直したりして可也小說に近いものに改めて仕舞うた。主意はこんな事が面白いから書いて見ようといふので、マロリーが面白いからマロリーを紹介しようと云ふのではない。其の積りで讀まれん事を希望する。

實を云ふとマロリーの寫したランスロットは或點に於て車夫の如く、ギニギアは車夫の情婦の樣な感じがある。此一點丈でも書き直す必要は充分あると思ふ。テニソンのアイヂルスは優麗都雅の點に於て古今の雄篇たるのみならず性格の描寫に於ても十九世紀の人間を古代の舞臺に躍らせる樣なかきぶりであるから、かゝる短篇を草するには大いに參考すべき長詩であるは云ふ迄もない。元來なら記憶を新たにする爲め一應讀み返す筈であるが、讀むと冥々のうちに眞似がしたくなるからやめた。

一　夢

百、二百、簇がる騎士は數をつくして北の方なる試合へと急げば、石に古りたるカメロットの館には、只王妃ギニギアの長く牽く衣の裾の響のみ殘る。

薄紅の一枚をむざとばかりに肩より投げ懸けて、白き二の腕さへ明らさまなるに、裳のみは輕く捌く珠の履をつゝみて、猶餘りあるを後ざまに石階の二級に垂れて登る。登り詰めたる階の正面には大いなる花を鈍色の奧に織り込める戸帳が、人なきをかこち顏なる樣にてそよとも動かぬ。ギニギアは幕の前に耳押し附けて一重向うに何事をか聽く。聽き了りたる横顏を又眞向うに反して石段の下を鋭き眼にて窺ふ。濃やかに斑を流したる大理石の上は、こゝかしこに白き薔薇が暗きを洩れて和らかき香を放つ。君見よと宵に贈れる花輪のいつ摧けたる名殘か。しばらくは吾が足に纏はる絹の音にさへ心置ける人の、何の思案か、屹と立ち直りて、纖き手の動くと見れば、深き幕の波を描いて、眩ゆき光り矢の如く向ひ側なる室の中よりギニギアの頭に戴ける冠を照らす。輝けるは眉間に中る金剛石ぞ。

「ランスロット」と幕押し分けたる儘にて云ふ。天を憚り、地を憚る中に、身も世も入らぬ迄力の籠りたる聲である。戀に敵なければ、わが戴ける冠を畏れず。

「ギニギア！」と應へたるは室の中なる人の聲とも思はれぬ程優しい。廣き額を半ば埋めて又捲き返る髮の、黑きを誇る許り亂れたるに、頬の色は釣り合はず蒼白い。

女は幕をひく手をつと放して内に入る。裂目を洩れて斜に大理石の階段を横切りたる日の光は、一度に消えて、薄暗かりの中に戸帳の模樣のみ際立ちて見える。左右に開く廻廊には圓柱の影の重なりて落ちかゝれども、影なれば音もせず。生きたるは室の中なる二人のみと

思はる。

「北の方なる試合にも參り合はせず。亂れたるは額にかゝる髮のみならじ」と女は心ありげに問ふ。晴れかゝりたる眉に晴れがたき雲の蟠りて、弱き笑の強ひて憂の裏より洩れ來る。

「贈りまつれる薔薇の香に醉ひて」とのみにて男は高き窓より表の方を見やる。折からの五月である。館を繞りて緩く逝く江に千本の柳が明かに影を蘸して、空に崩るゝ雲の峯さへ水の底に流れ込む。動くとも見えぬ白帆に、人あらば節面白き舟歌も興がらう。河を隔てて木の間隱れに白く挽く筋の、一縷の絲となつて烟に入るは、立ち上る朝日影に蹄の塵を揚げて、けさアーサーが圓卓の騎士と共に北の方へと飛ばせたる本道である。

「うれしきものに罪を思へば、罪長かれと祈る憂き身ぞ。君一人館に殘る今日を忍びて、今日のみの縁とならばうからまし」と女は安からぬ心の程を口元に見せて、珊瑚の唇をぴりぴりと動かす。

「今日のみの縁とは？　墓に堰かるゝあの世迄も渝らじ」と男は黑き瞳を返して女の顏を眤と見る。

「左ればこそ」と女は右の手を高く擧げて廣げたる掌を竪にランスロットに向ける。手頸を纏ふ黃金の腕輪がきらりと輝くときランスロットの眸は何知らず動いた。「左ればこそ！」と女は繰り返す。「薔薇の香に醉へる病を、病と許せるは我等二人のみ。このカメロットに集まる騎士は、五本の指を五十度繰り返すとも數へ難きに、一人として北に行かぬランスロットの病を疑はぬはなし。束の間に危きを貪りて、長き逢ふ瀨の淵と變らば……」と云ひながら擧げたる手をはたと落とす。かの腕輪は再びきらめいて、玉と玉と撃てる音か、戛然と瞬時の響を起こす。

「命は長き賜物ぞ、戀は命よりも長き賜物ぞ。心安かれ」と男は流石に大膽である。

女は兩手を延ばして、戴ける冠を左右より抑へて「此冠よ、此冠よ。わが額の燒ける事は」と云ふ。願ふ事の叶はば此黃金、此珠玉の飾りを脫いで窓より下に投げ附けて見ばやといへる樣である。白き腕のすらりと絹をすべりて、抑へたる冠の光の下には、渦を卷く髮の毛の、珠の輪には抑へ難くて、頰のあたりに靡きつゝ洩れかゝる。肩にあつまる薄紅の衣の袖は、胸を過ぎてより豐かなる襞を描いて、裾は強けれども剛からざる線を三筋程床の上迄引く。ランスロットは只窈窕として眺めて居る。前後を截斷して、過去未來を失念したる間に只ギニギアの形のみがあり〳〵と見える。機微の邃きを照らす鏡は、女の有てる凡てのうちにて、尤も明らかなるものと云ふ。苦しきに堪へかねて、われとわが頭を抑へたるギニギアを打ち守る人の心は、飛ぶ鳥の影の疾きが如くに女の胸にひらめき渡る。苦しみは拂ひ落とす蜘蛛の巣と消えて剩すは嬉しき人の情ばかりである。「かくてあらば」と女は危き間に際どく擦り込む石火の樂しみを、長しへに續けかしと念じて兩頰に笑を湛らす。

「かくてあらん」と男は始めより思ひ極めた態である。

「されど」と少時して女は又口を開く。「かくてあらん爲め　北の方なる試合に行き給へ。けさ立てる人々の蹄の痕を追ひ懸けて病癒えぬと申し給へ。此頃の蔭口、二人をつゝむ疑ひの雲を晴らし給へ」

「左程に人が怖くて戀がなろうか」と男は亂るゝ髮を廣き額に拂つて、わざと作らから〳〵と笑ふ。高き室の靜かなる中に、常ならず快からぬ響が傳はる。笑へるははたと已めて、此帳の

風なきに動くさうな」と室の入口迄歩を移して、ことさらに厚き幕を揺り動かして見る。あやしき響は収まって寂寞の故に帰る。

「昔見し夢の――夢の中なる響の名残か」と女の顔には忽ち紅落ちて、冠の星はきら／＼と震ふ。男も何事か心躁ぐ様にて、ゆうべ見しと云ふ夢を、女に物語らする。

「薔薇咲く日なり。白き薔薇と、赤き薔薇と、黄なる薔薇の間に臥したるは君とわれのみ。楽しき日は落ちて、楽しき夕暮の薄明りの、尽くる限りはあらじと思ふ。其の時に戴けるは此冠なり」と指を挙げて眉間をさす。冠の底を二重にめぐる一疋の蛇は黄金の鱗を細かに身に刻んで、擡げたる頭には青玉の眼を嵌めてある。

「わが冠の肉に喰ひ入る許り焼けて、頭の上に衣擦る如き音を聞くとき、此黄金の蛇はわが髪を繞りて動き出す。頭は君の方へ、尾はわが胸のあたりに、波の如くに延びるよと見る間に、君とわれは腥き縄にて、断つべくもあらぬ迄に纏はるゝ。中四尺を隔てゝ近寄るに力なく、離るゝに術なし。たとひ忌はしき絆なりとも、此縄の切れて二人離れ／＼に居らんよりはとは、其時苦しきわが胸の奥なる心遣りなりき。嚙まるゝとも螫さるゝとも、口縄の朽ち果つる迄斯くてあらんと思ひ定めたるに、あら悲し。薔薇の花の紅なるが、めら／＼と燃え出して、繋げる蛇を焼かんとす。しばらくして君とわれの間にあまれる一尋余りは、真中より青き烟を吐いて金の鱗の色変り行くと思へば、あやしき臭を立てゝふすと切れたり。身も魂もこれ限り消えて失せよと念ずる耳元に、何者かから／＼と笑ふ声して夢は醒めたり。醒めたるあとにも猶耳を襲ふ声はありて、今聞ける君が笑も、宵の名残かと骨を撼がす」と落ち付かぬ眼を長き睫の裏に隠してランスロットの気色を窺ふ。七十五度の闘技に、馬の背を滑るは無論、鐙さへはづせる事なき勇士も、此夢を奇しとのみは思はず。快からぬ眉根は自ら逼りて、結べる口の奥には歯さへ喰ひ締るならん。

「さらば行かう。後れ馳せに北の方へ行かう」と拱いたる手を振りほどいて、六尺二寸の躯をゆらりと起こす。

「行くか？」とはギニギアの半ば疑へる言葉である。疑へる中には、今更ながら別れの惜しまるゝ心地さへほのめいて居る。

「行く」と云ひ放って、つか／＼と戸口にかゝる幕を半ば掲げたが、やがてするりと踵を回らして、女の前に、白き手を執りて、発熱かと怪しまるゝ程のあつき唇を、冷やかに柔らかき甲の上につけた。暁の露しげき百合の花瓣をひたふるに吸へる心地である。ランスロットは後をも見ずして石階を馳け降りる。

やがて三たび馬の嘶く音がして中庭の石の上に堅き蹄が鳴るとき、ギニギアは高殿を下りて、騎士の出づべき門の真上なる窓に倚りて、かの人の出づるを遅しと待つ。黒き馬の鼻面が下に見ゆるとき、身を半ば投げだして、行く人の為めに白き絹の尺ばかりなるを振る。頭に戴ける金冠の、美しき髪を滑りてか、からりと馬の鼻を掠めて砕くる許りに石の上に落つる。

槍の穂先に冠をかけて、窓近く差し出した時、ランスロットとギニギアの視線がはたと行き合ふ。「忌まはしき冠よ」と女は受けとりながら云ふ。「さらば」と男は馬の太腹をける。白き兜の挿毛のさと靡くあとに、残るは漠々たる塵のみ。

二　鏡

有りの儘なる浮世を見ず、鏡に写る浮世のみを見るシャロットの女は高き台の中に只一人

住む。活ける世を鏡の裡にのみ知る者に、面を合はす友のあるべき由なし。

春恋し、春恋しと囀る鳥の数々に、耳欹てて木の葉隠れの翼の色を見んと思へば、窓に向はずして壁に切り込む鏡に向ふ。鮮やかに写る羽の色に日の色さへも其儘である。

シャロットの野に麦刈る男、麦打つ女の歌にやあらん、谷を渡り水を渡りて、幽かなる音の高き台に他界の声の如く糸と細りて響く時、シャロットの女は傾けたる耳を掩うて又鏡に向ふ。河のあなたに囀る鳥の、果は空とも野とも覚束なき間より洩れ出づる悲しき調と思へはなるべし。

シャロットの路行く人も亦悉くシャロットの女の鏡に写る。あるときは赤き帽の首打ち振りて馬追ふさまも見ゆる。あるときは白き髯の寛き衣を纏ひて、長き杖の先に小さき瓢を括しつけながら行く巡礼姿も見える。又あるときは頭より只一枚と思はるゝ真白の上衣被りて、眼口も手足も確と分かちかねたるが、けたゝましげに鉦打ち鳴らして過ぎるも見ゆる。是は癩をやむ人の前世の業を自ら世に告ぐる、むごき仕打ちたりとシャロットの女は知るすべもあらぬ。

旅商人の背に負へる包みの中には赤きリボンのあるか、白き下着のあるか、珊瑚、瑪瑙、水晶、真珠のあるか、包める中を照らさねば、中にあるものは鏡には写らず。写らねばシャロットの女の眸には映ぜぬ。

古き幾世を照らして、今の世のシャロットにありとある物を照らす。悉く照らして択ぶ所なければシャロットの女の眼に映るものも亦限りなく多い。只影なれば写りては消え、消えては写る。鏡のうちに永く停まる事は天に懸かる日と雖も難い。活ける世の影なれば斯く果敢なきか、あるひは活ける世が影なるかとシャロットの女は折々疑ふ事がある。明らさまに見ぬ世なれば影ともまこととも断じ難い。影なれば果敢なき姿を鏡にのみ見て不足はなからう。影ならずば？——時にはむら〳〵と起こる一念に窓際に馳けよりて思ふさま鏡の外なる世を見んと思ひ立つ事もある。シャロットの女の窓より眼を放つときはシャロットの女に呪ひのかゝる時である。シャロットの女は鏡の限る天地のうちに跼蹐せねばならぬ。一重隔て、二重隔てて、広き世界を四角に切るとも、自滅の期を寸時も早めてはならぬ。

去れど有りの儘なる世は罪に濁ると聞く。住み佗めば山に遯るゝ心安さもあるべし。鏡の裏なる狭き宇宙の小さければとて、憂き事の降りかゝる十字の街に立ちて、行き交ふ人に気を配る辛さはあらず。何者か因果の波を一たび起こしてより、万頃の乱れは永劫を極めて尽きざるを、渦捲く中に頭をも、手をも、足をも攫はれて、行く吾の果は知らず。かゝる人を賢しと云はば、高き台に一人を住み古りて、しろかねの白き光の、表とも裏とも分かち難きあたりに、幻の世を尺に縮めて、あらん命を土さへ踏まで過ごすは阿呆の極みであらう。わが見るは動く世ならず、動く世を動かぬ物の助けにて、余所ながら窺ふ世なり。活殺生死の乾坤を定裏に拈出して、五彩の色相を静中に描く世なり。かく観ずればこの女の運命もあながちに嘆くべきにあらぬを、シャロットの女は何の心を躁がして窓の外なる下界を見んとする。

鏡の長さは五尺に足らぬ。黒鉄の黒きを磨いて本来の白きに帰すマーリンの術になるとか。魔法に名を得し彼の云ふ。——鏡の表に霧こめて秋の日の上れども晴れぬ心地なるは不吉の兆なり。曇る鏡の露を含みて、芙蓉に滴る音を聴くとき、対へる人の身の上に危き事あり。砉然と故なきに響を起こして、白き筋の横縦に

鏡に浮くとき、其人末期の覺悟せよ。――シャロットの女が幾年月の久しき間此鏡に向へるかは知らぬ。朝に向ひ夕に向ひ、日に向ひ月に向ひて、厭くてふ事のあるをさへ忘れたるシャロットの女の眼には霧立つ事も、露置く事もあらざれば、泥して裂けんとする虞ありとは夢にだも知らず。湛然として音なき秋の水に臨むが如く、瑩朗たる面を過ぐる森羅の影の、繽紛として去るあとは、太古の色なき境をまのあたりに現はす。無限上に徹する大空を鑄固めて、打てば音ある五尺の裏に壓し集めたるを――シャロットの女は夜毎日毎に見る。

夜毎日毎に鏡に向へる女は、夜毎日毎に鏡の傍に坐りて、夜毎日毎の錦を織る。ある時は明るき錦を織り、ある時は暗き錦を織る。

シャロットの女の投ぐる梭の音を聽く者は、淋しき皐の上に立つ、高き臺の窓を恐る〳〵見上げぬ事はない。親も逝き子も逝きて、新しき代に只一人取り殘されて、命長き吾を恨み顔なる年寄の如く見ゆるが、岡の上なるシャロットの女の住居である。蔦鎖す古き窓より洩るゝ梭の音の、絶間なき振子の如く、日を刻み月を刻むに急なる樣なれど、其音はあの世の音なり。靜かなるシャロットには、空氣さへ重たげにて、常ならば動くべしとも思はれぬを、只此梭の音のみにそゝのかされて、幽かにも震ふか。淋しさは音なき時の淋しさにも勝る。恐る恐る高き臺を見上げたる行人は耳を掩うて走る。

シャロットの女の織るは不斷の錦である。草むらの萌草の厚く茂れる底に、釣鐘の花の沈める樣を織るときは、花の影のいつ浮くべしとも見えぬ程の濃き色である。うな原のうねりの中に、雪と散る浪の花を浮かすときは、底知れぬ深さを一枚の薄きに疊む。あるときは黑き地に、燃ゆる焰の色にて十字架を描く。濁世にはびこる罪障の風は、すきまなく天下を吹いて、十字を織れる經緯の目にも入ると覺しく、焰の色は絹を離れて飛ばんとす。――薄暗き女の部屋は焼け落つるかと怪しまれて明るい。

戀の絲と誠の絲を横縱に梭くぐらせば、手を肩に組み合はせて天を仰げるマリヤの姿となる。狂ひを縱に怒りを緯に、霰ふる木枯の夜を織り明かせば、荒野の中に白き髯飛ぶリアの面影が出る。恥づかしき紅と恨めしき黄色を縒り合はせては、逢うて絶えたる人の心を讀むべく、温和しき黄と思ひ上がれる紫を交る交るに疊めば、魔に誘はれし乙女の、我は顔に高ぶれる態を寫す。長き袂に雲の如くにまつはるは人に言へぬ願の絲の亂れなるべし。

シャロットの女の眼は深く、額廣く、唇さへも女には似で薄からず。夏の日の上りてより、刻を盛る砂時計の九たび落ち盡したれば、今ははや午過ぎなるべし。窓を洩る日の眼を射るに、室のうちは夏知らぬ洞窟の如くに暗い。輝けるは只五尺に餘る鐵の鏡と、肩に漂ふ長き髪のみ。右手より投げたる梭を左手に受けて、女は不圖鏡の裡を見る。研ぎすましたる劍よりも寒き光の、例ながらうぶ毛の末をも照らすよと思ふうちに――底事ぞ！　音なくて颯と曇るは霧か、鏡の面は巨人の息をまともに浴びたる如く光を失ふ。今迄見えたシャロットの岸に連なる柳も隱れる。柳の中を流るゝシャロットの河も消える。河に沿うて往きつ來りつする人影は無論さゝぬ。――梭の音ははたと已んで女の瞼は黑き睫と共に微かに顫へた。「凶事か」と叫んで鏡の前に寄るとき、曇は一刷に晴れて、河も柳も人影も元の如くに見はれる。梭は再び動き出す。

女はやがて世にあるまじき悲しき聲にて歌ふ。

　　うつせみの世を、

うつゝに住めば、
住みうからまし、
むかしも今も。
うつくしき戀、
うつす鏡に、
色やうつろふ、
朝な夕なに。

鏡の中なる遠柳の枝が風に靡いて動く間に、忽ち銀の光がさして、熱き埃を薄く揚げ出す。銀の光は南より北に向つて眞一文字にシャロットに近づいてくる。女は小羊を覘ふ鷲の如くに、影とは知りながら瞬きもせず鏡の裏を見詰むる。十丁にして盡きた柳の木立を風の如くに駈け抜けたものを見ると、鍛へ上げた鋼の鎧に滿身の日光を浴びて、同じ兜の鉢金よりは尺に餘る白き毛を、飛び散れとのみ毿々と靡かして居る。栗毛の駒の逞しきを、頭も胸も革に裹みて飾れる鋲の數は篩ひ落とせし秋の夜の星宿を一度に集めたるが如き心地である。女は息を凝らして眼を据ゑる。

曲がれる堤に沿うて、馬の首を少し左へ向け直すと、今迄は横にのみ見えた姿が、眞正面に鏡にむかつて進んでくる。太き槍をレストに收めて、左の肩に盾を懸けたり。女は領を延ばして盾に描ける模樣を確と見分けようとする體であつたが、かの騎士は何の會釋もなく此鐵鏡を突き破つて通り抜ける勢で、愈目の前に近づいた時、女は思はず梭を抛げて、鏡に向つて高くランスロットと叫んだ。ランスロットは兜の廂の下より耀く眼を放つて、シャロットの高き臺を見上げる。爛々たる騎士の眼と、針を束ねたる如き女の鋭き眼とは鏡の裡にてはたと出合つた。此時シャロットの女は再び「サー・ランスロット」と叫んで、忽ち窓の傍に馳け寄つて蒼き顔を半ば世の中に突き出だす。人と馬とは、高き臺の下を、遠きに去る地震の如くに馳け抜ける。

ぴちりと音がして皓々たる鏡は忽ち眞二つに割れる。割れたる面は再びぴちぴちと氷を碎くが如く粉微塵になつて室の中に飛ぶ。七卷八卷織りかけたる布帛はふつふつと切れて風なきに鐵片と共に舞ひ上がる。紅の絲、緑の絲、黄の絲、紫の絲はほつれ、千切れ、解け、もつれて土蜘蛛の張る網の如くにシャロットの女の顔に、手に、袖に、長き髪毛にまつはる。「シャロットの女を殺すものはランスロット。ランスロットを殺すものはシャロットの女。わが末期の呪ひを負うて北の方へ走れ」と女は兩手を高く天に擧げて、朽ちたる木の野分を受けたる如く、五色の絲と氷を欺く碎片の亂るゝ中に轟と仆れる。

三　袖

可憐なるエレーンは人知らぬ菫の如く、アストラットの古城を照らして、ひそかに墜ちし春の夜の星の、紫深き露に染まりて月日を經たり。訪ふ人は固よりあらず。共に住むは二人の兄と眉さへ白き父親のみ。

「騎士はいづれに去る人ぞ」と老人は穩やかなる聲にて問ふ。

「北の方なる仕合に參らんと、是迄は鞭うつて追ひ懸けたれ。夏の日の永きにも似ず、いつしか暮れて、暗がりに路さへ岐れたるを。――乘り捨てし馬も恩に嘶かん。一夜の宿の情深きに酬いまつるものなきを恥づ」と答へたるは、具足を脱いで、黄なる袍に姿を改めたる騎士なり。シャロットを馳せる時何事とは知らず、岩の凹みの秋の水を浴びたる心地して、かりの宿りを求め得たる今に至る迄、頬の蒼きが殊更の如く目に立つ。

エレーンは父の後に小さき身を隠して、此ア

ストラツトに、如何なる風の誘ひにか、かく凜凜しき壯夫を吹き寄せたるとゝ、折々は鶴と瘠せたる老人の肩をすかして、恥づかしの睫の下よりランスロットを見る。菜の花、豆の花ならば戯るゝ術もあらう。偃蹇として澗底に嘯く松が枝には舞ひ寄る路のとてもなければ、白き胡蝶は薄き翼を收めて身動きもせぬ。

「無心ながら宿貸す人に申す」と稍ありてランスロットが云ふ。「明日と定まる仕合の催しに、後れて乘り込む我の、何の誰よと人に知らるゝは興なし。新しきを嫌はず、古きを辭せず、人の見知らぬ楯あらば貸し玉へ」

老人ははたと手を拍つ。「望める楯を貸し申さう。――長男チアーは去ぬる騎士の鬪技に足を痛めて今猶蓐を離れず。其時彼が持ちたるは白地に赤く十字架を染めたる楯なり。只の一度の仕合に傷つきて、其創口はまだ癒えざれば、赤き血架は空しく壁に古りたり。是を驕して思ふ如く人々を驚かし給へ」

ランスロットは腕を扼して「夫こそは」と云ふ。老人は猶言葉を續ぐ。

「次男ラヴェンは健氣に見ゆる若者にてあるを、アーサー王の催しにかゝる晴れの仕合に參り合はせずば、騎士の身の口惜しかるべし。只怯が栗毛の跡のあとに倶し連れよ。翌日を急げと彼に申し聞かせん程に」

ランスロットは何の思案もなく「心得たり」と心安げに云ふ。老人の頰に疊める皺のうちには、嬉しき波がしばらく動く。女ならずばわれも行かんと思へるはエレーンである。

木に倚るは蔦、まつはりて幾世を離れず。宵に逢ひて朝に分かるゝ君と我の、われにはまつはるべき月日もあらず。繊き身の寄り添はば、幹吹く嵐に、根なしかづらと倒れもやせん。寄り添はずば、人知らずひそかに括る戀の糸、振り切つて君は去るべし。愛溶けて瞼に餘る、露の底なる光を見ずや。わが住める館こそ古けれ、春を知る事は生れて十八度に過ぎず。物の憐れの胸に漲るは、鎖せる雲の自ら晴れて、麗らかなる日影の大地を渡るに異ならず。野をうづめ、谷を埋めて千里の外に暖かき光をひく、明らかなる君が眉目にはたと行き逢へる今の思ひは、坑を出でて天下の春風に吹かれたるが如きを――言葉さへ交はさず、あすの別れとはつれなし。

燭盡きて更を惜しめども、更盡きて客は寢ねたり。寢ねたるあとにエレーンは、合はぬ瞼の間より男の姿の無理に瞳の奥に押し入らんとするを、幾たびか拂ひ落とさんと力めたれど詮なし。強ひて合はぬ目を合はせて、此影を追はんとすれば、いつの間にか其人の姿は既に瞼の裏に潛む。苦しき夢に襲はれて、世を恐ろしと思ひし夜もある。魂消える物の怪の話にをのゝきて、眠らぬ耳に鷄の聲をうれしと起き出でた事もある。去れど恐ろしきも苦しきも、皆われ安かれと願ふ心の反響に過ぎず。われと云ふ可愛き者の前に夢の魔を置き、物の怪の祟りを据ゑての恐れと苦しみである。今宵の惱みは其等にはあらず。我と云ふ個靈の消え失せて、求むれども遂に得難きを、驚きて迷ひて、果ては情なくて斯くは亂るゝなり。我を司どるものゝ我にはあらで、先に見し人の姿なるを奇しく、怪しく、悲しく念じ煩ふなり。いつの間に我はランスロットと變りて常の心はいづこへか喪へる。エレーンと吾名を呼ぶに、應ふるはエレーンならず、中庭に馬乘り捨てて、廂深き兜の奥より、高き櫓を見上げたるランスロットである。再びエレーンと呼ぶにエレーンはランスロットぢやと答へる。エレーンは亡せてかと問へば在りと云ふ。いづこにと聞けば知らぬと云ふ。エレーンは微かなる毛孔の末に潛みて、いつか昔の樣に歸らん。エレーンに八萬

四千の毛孔ありて、エレーンが八萬四千壺の香油を注いで、日に其膚を滑らかにするとも、潛めるエレーンは遂に出現し來る期はなからう。

やがてわが部屋の戸帳を開きて、エレーンは壁に釣る長き衣を取り出だす。燭にすかせば燃ゆる眞紅の色なり。室にはびこる夜を呑んで、一枚の衣に眞晝の日影を集めたる如く鮮やかである。エレーンは衣の領を右手につるして、暫らくは眩きものと眺めたるが、やがて左手に握る短刀を鞘ながら二三度振る。から〳〵と床に音さして、すはと云ふ間に閃めきは目を掠めて紅深きうちに隱れる。見れば美しき衣の片袖は惜し氣もなく斷たれて、殘るは鞘の上にふはりと落ちる。途端に裸ながらの手燭は、風に打たれて颯と消えた。外は片破月の空に更けたり。

右手に捧ぐる袖の光をしるべに、暗きをすりぬけてエレーンはわが部屋を出る。右に折れると兄の住居、左を突き當れば今宵の客の寢所である。夢の如くなよやかなる女の姿は、地を踏まざるに歩めるか、影よりも靜かに、ランスロットの室の前にとまる。――ランスロットの夢は成らず。

聞くならくアーサー大王のギニギアを娶らんとして心惑へる折、居ながらに世の成行を知るマーリンは、首を掉りて慶事を肯んぜず。此女後に思はぬ人を慕ふ事あり、娶る君に悔あらん。と只管に諫めしとぞ。聞きたる時の我に罪なければ思はぬ人の誰なるかは知るべくもなく打ち過ぎぬ。思はぬ人の誰なるかを知りたる時、天が下に數多く生れたるもののうちにて、この悲しき命に廻り合はせたる我を恨み、このうれしき幸を享けたる己れを悦びて、樂しみと苦しみの綯りたる繩を斷たんともせず、此年月を經たり。心疚しきは願はず。疚しき中に蜜あるはうれし。疚しければこそ蜜をも醸せと思ふ折さへあれば、卓を共にする騎士の我を疑ふ此日に至る迄王妃を棄てず。只疑ひの積もりて證據と凝らん時――ギニギアの捕はれて杭に燒かるる時――此時を思へばランスロットの夢は未だ成らず。

眠られぬ戸に何物かほとと障つた氣合である。枕を離るゝ頭の、音する方に、しばらくは振り向けるが、又元の如く落ち附いて、あとは古城の亡骸に脈も通はず、靜かである。

再び障つた音は、殆ど敲いたと云ふべくも高い。慥かに人ありと思ひ極めたるランスロットは、やをら身を臥床に起こして、「たぞ」と云ひつゝ戸を半ば引く。差しつくる蠟燭の火のふき込められしか、取り直して今度は戸口に立てる乙女の方にまたゝく。乙女の顔は翳せる赤き袖の影に隱れて居る。面映ゆきは灯火のみならず。

「此の深き夜を……迷へるか」と男は驚きの舌を途切れ〳〵に動かす。

「知らぬ路にこそ迷へ。年古く住みなせる家のうちを――鼠だに迷はじ」と女は微かなる聲ながら、思ひ切つて答へる。

男は只怪しとのみ女の顔を打ち守る。女は尺に足らぬ紅絹の衝立に、花よりも美しき顔をかくす。常に勝る豐頰の色は、湧く血潮のく流るゝか、あざやかなる絹のたすけか。たゞ隱しかねたる鬢の毛の肩に亂れて、頭には白き薔薇を輪に貫きて三輪挿したり。

白き香の鼻を撲つて、絹の影なる花の數さへ見分けたる時、ランスロットの胸には忽ちギニギアの夢の話が湧き返る。何故とは知らず、悉く身は慄えて、手に持つ燭を取り落とせるかと驚きて我に歸る。乙女はわが前に立てる人の心を讀む由もあらず。

「紅に人のまことはあれ。恥づかしの片袖を、乞はれぬに參らする。兜を捲いて勝負せよと

の願なり」とかの袖を押し遣る如く前に出だす。男は容易に答へぬ。

「女の贈り物受けぬ君は騎士か」とエレーンは訴ふる如くに下よりランスロットの顔を覗く。覗かれたる人は薄き唇を一文字に結んで、燃ゆる片袖を、右の手に半ば受けたる儘、當惑の眉を思案に刻む。やゝありて云ふ。「戰に臨む事は大小六十餘度、闘技の場に登つて槍を交へたる事は其數を知らず。未だ佳人の贈り物を、身に帶びたる試しなし。情あるあるじの子の、情深き賜物を辭むは禮なけれど…」

「禮とも云へ、禮なしとも云ひてやみね。禮の爲に、夜を目して參りたるにはあらず。思ひの籠る此片袖を天が下の勇士に贈らん爲に參りたり。切に受けさせ給へ」とこゝ迄踏み込みたる上は、かよわき乙女の、却て一徹に動かすべくもあらず。ランスロットは惑ふ。

カメロットに集まる騎士は、弱きと強きを通じてわが盾の上に描かれたる紋章を知らざるはあらず。又わが腕に、わが兜に、美しき人の贈り物を見たる事なし。あすの試合に後るゝは、始めより出づる筈ならぬを、半途より思ひ返しての仕業故である。闘技の埒に馬乗り入れてランスロットよ、後れたるランスロットよ、と謳はるゝ丈ならば其迄の浮名である。去れど後れたるは病のため、後れながらも參りたるはまことの病にあらざる證據よと云はば何と答へん。今幸ひに知らざる人の盾を借りて、知らざる人の袖を纏ひ、二十三十の騎士を斃す迄深くわが面を包まば、ランスロットと名乘をあげて人驚かす夕暮に、――誰彼共にわざと後れたる我を肯はん。病と臥せる我の作略を面白しと感ずる者さへあらう。――ランスロットは漸くに心を定める。

部屋のあなたに輝くは物の具である。鎧の胴に立て懸けたるわが盾を輕々と片手に提げて、女の前に置きたるランスロットは云ふ。

「嬉しき人の眞心を兜にまくは騎士の譽れ。難有し」とかの袖を女より受け取る。

「うけてか」と片頰に笑める樣は、谷間の姫百合に朝日影さして、しげき露の痕なく晞けるが如し。

「あすの勝負に用なき盾を、逢ふ迄の形見と殘す。試合果てて再びこゝを過ぎる迄守り給へ」

「守らでやは」と女は跪いて兩手に盾を抱く。ランスロットは長き袖を眉のあたりに揭げて、「赤し、赤し」と云ふ。

此時櫓の上を烏鳴き過ぎて、夜はほの〴〵と明け渡る。

四　罪

アーサーを嫌ふにあらず、ランスロットを愛するなりとはギニヸアの己れにのみ語る胸のうちである。

北の方なる試合果てて、行けるものは皆館に歸れるをランスロットのみは影さへ見えず。歸れかしと念ずる人の便りは絶えて、思はぬものの鐮を連ねてカメロットに入るは、見るも益なし。一日には二日を數へ、二日には三日を數へ、遂に兩手の指を悉く折り盡して十日に至る今日迄猶歸るべしとの願を掛けたり。

「遲き人のいづこに繫がれたる」とアーサーは左迄に心を惱ませる氣色もなく云ふ。

高き室の正面に、石にて築く段は一級、半ばは厚き毛氈にて蔽ふ。段の上なる、大いなる椅子に豐かに倚るがアーサーである。

「繫ぐ日も、繫ぐ月もなきに」とギニヸアは答ふるが如く答へざるが如くもてなす。王を二尺左に離れて、床几の上に、纖き指を組み合はせて、膝より下は長き裳にかくれて履の在りかさへ定かならず。

よそ／＼しくは答へたれ、心は其人の名を呼[illegible]聞きを。[illegible]の[illegible]に[illegible]えたるを、[illegible]き出にて[illegible]は口[illegible]し。ギニギアは又口を開く。

「後れて行くものに後れて帰る文か」と云ひ捨てゝ[illegible]に笑ふ。女の笑ふときは危い。

「後れたるは其ならぬ[illegible]の[illegible]なるべし」とアーサーも穏やかに笑ふ。アーサーの笑にも特別の意味がある。

　恋といふ字の耳に響くとき、ギニギアの胸は、錐に刺されし痛みを受けて、すはやと躍り上がる。耳の裏には颯と音して熱き血を注す。アーサーは知らぬ顔である。

「あの袖の主こそ美しからん。……」

「あの袖とは？　袖の主とは？　美しからんとは？」とギニギアの呼吸ははずんで居る。

「白き挿毛に、赤き鉢巻ぞ。さる人の贈り物とは見たれ。繋がるゝも道理ぢや」とアーサーは又からからと笑ふ。

「主の名は？」

「名は知らぬ。只美しき故に美しい少女と云ふと聞く。過ぐる十日を繋がれて、残る幾日を繋がるゝ身に果報あれ。カメロットに足は向くまじ」

「美しき少女！　美しき少女！」と続け様に叫んで、ギニギアは薄き履に三たび石の床を踏みならす。肩に負ふ髪の時ならぬ波を描いて、二尺余る[illegible]を一時に打ち振る。

　夫に二心なきを神の道との教へは古し。神の道に従ふの心易きも知らずと云はじ。心易きを自ら捨てゝ、捨てたる後の苦しみを嬉しと見しも君が為なり。春風に心なく、花自ら開く。花に罪ありとは下れる世の言の葉に過ぎず。恋を写す鏡の明らかなるは鏡の徳なり。かく観ずる裡に、人にも世にも振り棄てられたる時の慰藉はあるべし。かく観ぜんと思ひ詰めたる今頃を、わが乗れる足台は覆へされて、踵を支ふるに一塵だになし。引き付けられたる鐵と磁石の、自然に引き附けられたるを咎も恐れず、世を憚りの関一重あなたへ越せば、生涯の落ち附はあるべしと念じたるに、引き寄せたる磁石は火打石と化して、吾を焦がす[illegible]に無間の空裏を冥府へ隕つる。わが坐る床几の底抜けて、わが乗る[illegible]の床崩れて、わが踏む大地の殻裂けて、己を支ふる者は悉く消えたるに等し。ギニギアは組める手を胸の前に合はせたる儘、右手よりも左手よりも[illegible]、片手に握る力を、片手に抜いて、苦しき胸の[illegible]を人に知れぬ方へ洩らさんとするなり。

「なに事ぞ」とアーサーは聞く。

「なに事とも知らず」と答へたるは、アーサーを欺けるにもあらず、又己れを誣ひたるにもあらず。知らざるを知らずと云ふのみ。まことはわが口にせる言葉すら知らぬ間に唇を離れ出でたり。

　かく夢の萌す時は、[illegible]一筋の[illegible]色を訪ねて、過ぎし春に[illegible]を[illegible]む。[illegible]の[illegible]よりは凄しきを、遥[illegible]自らさへ[illegible]かと疑ふ。はからざる[illegible]りの胸を打ちて、[illegible]を[illegible]へるギニギアの、己を責むる[illegible]われに[illegible]ざされたる[illegible]には、[illegible]として[illegible]とも切なき[illegible]に[illegible]る。何事も[illegible]せぬ[illegible]に、驚きの[illegible]をわが頭の上にあつめたるアーサーを、わが夫と悟れる時のギニギアの眼には、アーサーは[illegible]らし[illegible]のアーサーにあらず。

　人を傷つけたるわが罪を悔ゆるとき、傷負へる人の傷ありと心附かぬ時程傷の甚だしきはあらず。聖徒に向つて鞭を加へたる非の恐ろしきは、鞭うてるものの身に跳ね返る罰なきに、自らと二つの非を悔いたればなり。罪を[illegible]ふアーサーの前に恥づる心は、[illegible]ぬアーサーの前[illegible]に、わが罪を心のうちに鳴らすは[illegible]から[illegible]ず。ギニギアは[illegible]として前に[illegible]する[illegible]を

知る。

「人の身の上はわが上とこそ思へ。人戀はぬ昔は知らず、嫁ぎてより幾夜か經たる。赤き袖の主のランスロットを思ふ事は、御身のわれを思ふ如くなるべし。贈り物あらば、百日も十日を、二十日を、歸るを忘るべきに、罵るは卑しとアーサーは王妃の方を見て不審の顔附である。

「美しき少女！」とギニギアは三たびエレーンの名を繰り返す。このたびは鋭き聲にあらず去りとては憐れを寄せたりとも見えず。

アーサーは椅子に倚る身を半ば回らして云ふ「御身とわれと始めて逢へる昔を知るか。丈に餘る石の十字を深く地に埋めたるに蔦這ひかゝる春の頃なり。路に迷ひて御堂にしばし憩はんと入れば、銀に鏤む祭壇の前に、空色の衣を肩より流して、黄金の髪に雲を起こせるは誰ぞ」

女はふるへる聲にて、あゝとのみ云ふ。床しからぬにもあらぬ昔の、今は忘るゝをのみ心易しと念じたる矢先に、忽然と容赦もなく描き出されたるを堪へ難く思ふ。

「安からぬ胸に、捨てて行ける人の歸るを待つと、凋れたる聲にてわれに語る御身の聲をきく迄は、天つ下れるマリヤの此寺の神壇に立てりとのみ思へり」

「逝ける日は追へども歸らざるに逝ける事は長しへに暗きに葬る能はず。思ふまじと誓へる心に發矢と中たる古き火花もあり。

「伴なひて館に歸し參らせんと云へば、黄金の髪を動かして、何處へ、ともとうなづく」と途中に句を切つたアーサーは、身を起こして、兩手にギニギアの手を抑へながら上より妃の顔を覗き込む。新たなる記憶につれて、新たなる愛の波が、しきりと打ち返したのであらう。――王妃の頬は屍を抱くが如く冷たい。アーサーは覺えず抑へたる手を放す。折から廻廊を遠く人の踏む音がして、罵る如き幾多の聲は次第にアーサーの室に逼る。

入口に掛けたる厚き幕は總に絞らず。長く垂れて床をかくす。かの足音の戸に近くしばらくとまる時、垂れたる幕を二つに裂いて髪多く丈高き一人の男があらはれた。モードレッドである。

モードレッドは會釋もなく室の正面迄つかつかと進んで、王の立てる壇の下にとゞまる。續いて入るはアグラヴェン、逞しき腕の、寛き袖を洩れて、赭き頭の、かたく衣の襟に括られて、色さへ變る程肉づける男である。二人の後には物色する遑なきに、どや／＼と我勝ちに亂れ入りて、モードレッドを一人前に、ずらりと並ぶ、數は凡てにて十二人。何事かなくては叶はぬ。

モードレッドは、王に向つて會釋せる頭を擡げて、底力のある聲にて云ふ。「罪あるを罰するは王者の事か」

「問はずもあれ」と答へたアーサーは今更と云ふ面持ちである。

「罪あるは高きをも辭せざるか」とモードレッドは再び王に向つて問ふ。

アーサーは我とわが胸を敲いて「黄金の冠は邪の頭に戴かず。天子の衣は惡を隱さず」と壇上に延び上がる。肩に括る緋の衣の、裾は開けて、白き裏が雪の如く光る。

「罪あるを許さずと誓はば、君が傍に坐せる女をも許さじ」とモードレッドは臆する氣色もなく、一指を擧げてギニギアの眉間を指す。ギニギアは屹と立ち上がる。

茫然たるアーサーは雷火に打たれたる啞の如く、わが前に立てる人――地を抽き出でし巖とばかり立てる人――を見守る。口を開けるはギニギアである。

「罪ありと我を誣ひるか。何をあかしに、何の

罪を数へんとはする。詐りは天も照覧あれ」と纖き手を抜け出でよと空高く擧げる。

「罪は一つ。ランスロットに聞け。あかしはあれぞ」と鷹の眼を後に投ぐれば、並びたる十二人は悉く右の手を高く差し上げつゝ、「神も知る、罪は逃れず」と口々に云ふ。

ギニギアは倒れんとする身を、危く壁掛に扶けて「ランスロット！」と幽かに叫ぶ。王は迷ふ。肩に纏はる緋の衣の裏を半ば返して、右手の掌を十三人の騎士に向けたる儘にて迷ふ。

此時館の中に「黒し、黒し」と叫ぶ聲が石堞に響を反して、窈然と遠く鳴る木枯の如くに傳はる。やがて河に臨む水門を、天にひゞけと錆びたる鐵鎖に軋らせて開く音がする。室の中なる人々は顔と顔を見合はす。只事ではない。

五 舟

「鍪に巻ける絹の色に、槍突き合はす敵の目も眩むべし。ランスロットは其日の試合に、二十餘人の騎士を仆して、引き擧ぐる間際に始めて吾名をなのる。驚く人の醒めぬ間を、ラヹンと共に埒を出でたり。行く末は勿論アストラットぢや」と三日過ぎてアストラットに歸れるラヹンは父と妹に物語る。

「ランスロット？」と父は驚きの眉を張る。女は「あな」とのみ髪に挿す花の色を顫はす。

「二十餘人の敵と渡り合へるうち、何者の槍を受け損じてか、鎧の胴を二寸下がりて、左の股に創を負ふ……」

「深き創か」と女は固唾を呑んで、懸念の眼を睜る。

「鞍に堪へぬ程にはあらず。夏の日の暮れ難きに暮れて、蒼き夕を草深き原のみ行けば、馬の蹄は露に濡れたり。……二人は一言も交はさぬ。ランスロットの何の思案に沈めるかは知らず、われは昼の試合のまたあるまじき派手やかさを偲ぶ。風渡る梢もなければ馬の沓の地を鳴らす音のみ高し。……路は分かれて二筋となる」

「左へ切ればこゝ迄十哩ぢや」と老人が物知り顔に云ふ。

「ランスロットは馬の頭を右へ立て直す」

「右？ 右はシャロットへの本街道、十五哩は確かにあらう」是も老人の説明である。

「其シャロットの方へ――後より呼ぶ吾を顧もせで轡を鳴らして去る。已むなくて吾も従ふ。不思議なるはわが馬を振り向けんとしたる時、前足を躍らしてあやしくも嘶ける事なり嘶く聲の果知らぬ夏野に、末廣に消えて、馬の足掻の常の如く、わが手綱の思ふ儘に運びし時は、ランスロットの影は、夜と共に微かなる奥に消えたり。――われは鞍を敲いて追ふ」

「追ひ附いてか」と父と妹は聲を揃へて問ふ。

「追ひ附ける時は既に遅くあつた。乗る馬の息の、闇押し分けて白く立ち上がるを、いやがうへに鞭うつて長き路を一散に馳け通す。黒きものの夫かとも見ゆる影が、二丁許り先に現はれたる時、われは肺を逆しまにしてランスロットと呼ぶ。黒きものは聞かざる眞似して行く。幽かに聞こえたるは轡の音か。怪しきは差しこ急げる様もなきに容易くは追ひ附かれず。漸くの事間一丁程に逼りたる時、黒きものは夜の中に織り込まれたる如く、ふつと消える。合點行かぬわれは益追ふ。シャロットの入口に渡したる石橋に、蹄も砕けよと乗り懸けしと思へば、馬は何物にか躓きて前足を折る。騎るわれは鬣をさかに扱いて前にのめる。戞と打つは石の上と心得しに、われより先に斃れたる人の鎧の袖なり」

「あぶない！」と老人は眼の前の事の如くに叫ぶ。

「あぶなきはわが上ならず。われより先に倒れたるランスロットの事なり……」

「倒れたるはランスロットか」と妹は魂消ゆる程の聲に、椅子の端を握る。椅子の足は折れたるにあらず。

「橋の袂の柳の裏に、人住むとしも見えぬ庵室あるを、試みに敲けば、世を逃れたる隠士の居なり。幸ひと冷たき人を擔ぎ入るゝ。兜を脱げば眼さへ氷りて……」

「薬を擦り、草を煮るは隠士の常なり。ランスロットを蘇してか」と父は話し半ばに我句を投げ入るゝ。

「よみ返しはしたれ。よみに在る人と擇ぶ所はあらず。吾に歸りたるランスロットはまことの吾に歸りたるにあらず。魔に襲はれて夢に物云ふ人の如く、あらぬ事のみ口走る。あるときは罪々と叫び、あるときは王妃——ギニギア——シャロットと云ふ。隠士が心を込むる草の香も、煮えたる頭には一點の涼氣を吹かず。……」

「枕邊にわれあらば」と少女は思ふ。

「一夜の後たぎりたる脳の漸く平ぎて、静かなる昔の影のちら〳〵と心に映る頃、ランスロットはわれに去れと云ふ。心許さぬ隠士は去るなと云ふ。兎角して二日を經たり。三日目の朝、われと隠士の眠り覺めて、病む人の顔色の、今朝如何あらんと臥床を窺へば——在らず。劒の先にて古壁に刻み殘せる句には罪は吾を追ひ吾は罪を追ふとある」

「逃れしか」と父は聞き、「いづこへ」と妹はきく。

「いづこと知らば尋ぬる便りもあらん。茫々と吹く夏野の風の限りは知らず。西東日の通ふ境は極めがたければ、獨り歸り來ぬ。——隠士は云ふ、病愈らで去る、かの人の身は危し。狂ひて走る方はカメロットなるべし。とうつゝのうちに口走れる言葉にてそれと察せしと見ゆれど、われは確と、さは思はず」と語り終つて盃に盛る苦き酒を一息に飲み干して虹の如き氣を吹く。妹は立つてわが室に入る。

花に戯むるゝ蝶のひるがへるを見れば、春に憂ありとは天下を擧げて知らぬ。去れど冷やかに日落ちて、月さへ闇に隠るゝ宵を思へ。——ふる露のしげきを思へ。——薄き翼のいかばかり薄きかを思へ。——廣き野の草の陰に、琴の爪程小さきものの潜むを思へ。——畳む羽に置く露の重きに過ぎて、夢さへ苦しかるべし。果知らぬ原の底に、あるに甲斐なき身を縮めて、誘ふ風にも砕くる危きを恐るゝは淋しからう。エレーンは長くは持たぬ。

エレーンは盾を眺めて居る。ランスロットの預けた盾を眺め暮らして居る。其盾には丈高き女の前に、一人の騎士が跪いて、愛と信とを誓へる模様が描かれて居る。騎士の鎧は銀、女の衣は炎の色に燃えて、地は黒に近き紺を敷く。赤き女のギニギアなりとは憐れなるエレーンの夢にだも知る由がない。

エレーンは盾の女を已と見立てて、跪けるをランスロットと思ふ折さへある。斯くあれと念ずる思ひの、いつか心の裏を抜け出でて、斯くの通りと盾の表にあらはれるのであらう。斯くありて後と、あらぬ礎を一度築ける上には、そら事を重ねて、其そら事の未來さへも想像せねば已まぬ。

重ね上げたる空想は、又崩れる。兒戯に積む小石の塔を蹴返す時の如くに崩れる。崩れたるあとの吾に歸りて見ればランスロットは在らぬ。氣を狂ひてカメロットの遠きに走れる人の、吾が傍にあるべき所謂はなし。離るゝとも、誓さへ渝らずば、千里を繋ぐ牽き綱もあらう。ランスロットとわれは何を誓へる？　エレーンの眼には涙が溢れる。

涙の中に又思ひ返す。ランスロットこそ誓はざれ。一人誓へる吾の渝るべくもあらず。二人の中に成り立つをのみ誓とは云はじ。われとわが心にちぎるも誓には洩れず。此誓だに破らずばと思ひ詰める。エレーンの頰の色は褪せる。

死ぬ事の恐ろしきにあらず、死したる後にランスロットに逢ひ難きを恐るゝ。去れど此世にての逢ひ難きに比ぶれば、未来に逢ふの却て易きかとも思ふ。罌粟散るを憂しとのみ眺むべからず、散ればこそ又咲く夏もあり。エレーンは食を断つた。

衰へは春野焼く火と小さき胸を侵して、愁は衣に堪へぬ玉骨を寸々に削る。今迄は長き命とのみ思へり。よしやいつ迄もと貪る願ひはなくとも、死ぬと云ふ事は夢にさへ見しためしあらず。束の間の春と思ひあたれる今日となりて、つら〳〵世を観ずれば、日に開く蕾の中にも恨はあり。円く照る明月のあすをと問はば淋しからん。エレーンは死ぬより外の浮世に用なき人である。

今は是迄の命と思ひ詰めたるとき、エレーンは父と兄とを枕邊に招きて「わが為にランスロットへの文かきて玉はれ」と云ふ。父は筆と紙を取り出でて、死なんとする人の言の葉を一々に書き附ける。

「天が下に慕へる人は君ひとりなり。君一人の為に死ぬるわれを憐れと思へ。陽炎燃ゆる黒髪の、長き乱れの土となるとも、胸に彫るランスロットの名は、星変る後の世迄も消えじ。愛の炎に染めたる文字の、土水の因果を受くる理なしと思へば。睫に宿る露の珠に、写ると見れば砕けたる、君の面影の脆くもあるかな。わが命もしかく脆きを、涙あらば濺げ。基督も知る、死ぬる迄清き乙女なり」

書き終りたる文字は怪しげに乱れて定かならず。年寄の手の顫へたるは、老の為とも悲しみの為とも知れず。

女又云ふ。「息絶えて、身の暖かなるうち、右の手に此文を握らせ給へ。手も足も冷え尽したる後、ありとある美しき衣にわれを着飾り給へ。隙間なく黒き布しき詰めたる小船の中にわれを載せ給へ。山に野に白き薔薇、白き百合を採り尽して舟に投げ入れ給へ。――舟は流し給へ」

かくしてエレーンは眼を眠る。眠りたる眼は開く期なし。父と兄とは唯々として遺言の如く、憐れなる少女の亡骸を舟に運ぶ。

古き江に漣さへ死して、風吹く事を知らぬ顔に平かである。舟は今緑罩むる陰を離れて中流に漕ぎ出づる。櫂操るは只一人、白き髪の白き髯の翁と見ゆ。ゆるく掻く水は、物憂げに動いて、一櫂ごとに鉛の如き光を放つ。舟は波に浮ぶ睡蓮の睡れる中に、音もせず乗り入りては乗り越して行く。蕚傾けて舟を通したるあとには、軽く曳く波足と共にしばらく揺れて、花の姿は常の静けさに帰る。押し分けられた葉の再び浮き上がる表には、時ならぬ露が珠を走らす。

舟は杳然として何処ともなく去る。美しき亡骸と、美しき衣と、美しき花と、人とも見えぬ一個の翁とを載せて去る。翁は物をも云はぬ。只静かなる波の中に長き櫂をくゞらせては、くゞらす。木に彫る人を鞭うつて起たしめたるか、櫂を動かす腕の外には活きたる所なきが如くに見ゆる。

と見れば雪よりも白き白鳥が、収めたる翼に波を裂いて、王者の如く悠然と水を練り行く。長き頸の高く伸したるに、気高き姿はあたりを払つて、恐るゝものありとしも見えず。うねる流を傍目もふらず、舳に立つて舟を導く。舟はいづく迄もと、鳥の羽に裂けたる波の合は

ぬ間を隨ふ、兩岸の柳は青い。

シャロットを過ぐる時、いづくともなく悲しき聲が、左の岸より古き水の寂寞を破つて、動かぬ波の上に響く。「うつせみの世を、……うつゝ……に住めば……」絶えたる音はあとを引いて、引きたるは又しばらくに絶えんとす。聞くものは死せるエレーンと、艫に坐る翁のみ。翁は耳さへ借さぬ。只長き櫂をくゞらせてはくゞらする。思ふに聾なるべし。

空は打ち返したる綿を厚く敷けるが如く重い。流を挾む左右の柳は、一本毎に緑をこめて濛々と烟る。渺茫と冥府の界に立ちて迷へる人のあらば、其人の靈を迎へたるが此氣色である。晝に似たる少女の、舟に乘りて他界へ行くを、立ちならんで送るのでもあらう。

舟はカメロットの水門に横附けに流れて、はたと留まる。白鳥の影は波に沈んで、岸高く峙てる樓閣の黒く水に映るのが物凄い。水門は左右に開けて、石階の上にはアーサーとギニギアを前に、城中の男女が悉く集まる。

エレーンの屍は凡ての屍のうちにて最も美しい。涼しき額を、雲と亂るゝ黄金の髮に埋めて、笑へる如く横たはる。肉に附着するあらゆる肉の不淨を拭ひ去つて、靈其物の面影を口鼻の間に示せるは朗らかにも又極めて清い。苦しみも、憂ひも、恨みも、憤りも——世に忌はしきものの痕なければ土に歸る人とは見えず。

王は嚴かなる聲にて「何者ぞ」と問ふ。櫂の手を休めたる老人は唖の如く口を開かぬ。ギニギアはつと石階を下りて、亂るゝ百合の花の中より、エレーンの右の手に握る文を取り上げて何事と封を切る。

悲しき聲は又水を渡りて、「……うつくしき……戀、色や……うつろふ」と細き絲ふつて波うたせたる時の如くに人々の耳を貫く。

讀み終りたるギニギアは、腰をのして舟の中なるエレーンの額——透き徹るエレーンの額に、顫へたる唇をつけつゝ「美しき少女！」と云ふ。同時に一滴の熱き涙はエレーンの冷たき頰の上に落つる。

十三人の騎士は目と目を見合はせた。

坊っちゃん

一

親譲りの無鐵砲で子供の時から損ばかりして居る。小學校に居る時分學校の二階から飛び降りて一週間程腰を拔かした事がある。なぜそんな無闇をしたと聞く人があるかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出して居たら、同級生の一人が冗談に、いくら威張つても、そこから飛び降りる事は出來まい。弱蟲やーい。と囃したからである。小使に負ぶさつて歸つて來た時、おやぢが大きな眼をして、二階位から飛び降りて腰を拔かす奴があるかと云つたから、此次は拔かさずに飛んで見せますと答へた。

親類のものから西洋製のナイフを貰つて綺麗な刃を日に翳して、友達に見せて居たら、一人が光る事は光るが切れさうもないと云つた。切れぬ事があるか、何でも切つて見せると受け合つた。そんなら君の指を切つて見ろと注文したから、何だ指位此通りだと右の手の親指の甲をはすに切り込んだ。幸ひナイフが小さいのと、親指の骨が堅かつたので、今だに親指は手に附いて居る。然し創痕は死ぬ迄消えぬ。

庭を東へ二十歩に行き盡すと、南上がりに聊か許りの菜園があつて、眞中に栗の木が一本立つて居る。是は命より大事な栗だ。實の熟する時分は起き拔けに背戸を出て落ちた奴を拾つてきて、學校で食ふ。菜園の西側が山城屋といふ質屋の庭續きで、此質屋に勘太郎といふ十三四の倅が居た。勘太郎は無論弱蟲である。弱蟲の癖に四つ目垣を乘りこえて、栗を盜みにくる。ある日の夕方折戸の蔭に隱れて、とう／＼勘太郎を捕まへてやつた。其時勘太郎は逃げ路を失つて、一生懸命に飛びかゝつて來た。向うは二つ許り年上である。弱蟲だが力は強い。鉢の開いた頭を、こつちの胸へ宛ててぐい／＼押した拍子に、勘太郎の頭がすべつて、おれの袷の袖の中に這入つた。邪魔になつて手が使へぬから、無暗に手を振つたら、袖の中にある勘太郎の頭が、左右へぐら／＼靡いた。仕舞ひに苦しがつて袖の中から、おれの二の腕へ食ひ附いた。痛かつたから勘太郎を垣根へ押しつけて置いて、足搦をかけて向うへ倒してやつた。山城屋の地面は菜園より六尺がた低い。勘太郎は四つ目垣を半分崩して、自分の領分へ眞逆樣に落ちて、ぐうと云つた。勘太郎が落ちるときに、おれの袷の片袖がもげて、急に手が自由になつた。其晩母が山城屋に詫びに行つた序でに袷の片袖も取り返して來た。

此外いたづらは大分やつた。大工の兼公と肴屋の角をつれて、茂作の人參畠をあらした事がある。人參の芽が出揃はぬ處へ藁が一面に敷いてあつたから、其上で三人が半日相撲をとりつゞけに取つたら、人參がみんな踏みつぶされて仕舞つた。古川の持つて居る田圃の井戸を埋めて尻を持ち込まれた事もある。太い孟宗の節を拔いて、深く埋めた中から水が湧き出て、そこいらの稻に水がかゝる仕掛であつた。其時分はどんな仕掛か知らぬから、石や棒ちぎれをぎう／＼井戸の中へ押し込んで、水が出なくなつたのを見屆けて、うちへ歸つて飯を食つて居たら、古川が眞赤になつて怒鳴り込んで來た。慥か罰金を出して濟んだ樣である。

おやぢは些ともおれを可愛がつて呉れなかつ

た。母は兄計り贔屓にして居た。此兄は、やに色が白くつて、芝居の眞似をして女形になるのが好きだつた。おれを見る度に、こいつはどうせ碌なものにはならない、とおやぢが云つた。亂暴で亂暴で行く先が案じられると母が云つた。成程碌なものにはならない。御覽の通りの始末である。行く先が案じられたのも無理はない。只懲役に行かないで生きて居る計りである。

母が病氣で死ぬ二三日前臺所で宙返りをして、へつつひの角で肋骨を撲つて大いに痛かつた。母が大層怒つて、御前の樣なものの顔は見たくないと云ふから、親類へ泊りに行つて居た。するととう〳〵死んだと云ふ報知が來た。さう早く死ぬとは思はなかつた。そんな大病なら、もう少し大人しくすればよかつたと思つて歸つて來た。さうしたら例の兄がおれを親不孝だ、おれの爲に、おつかさんが早く死んだんだと云つた。口惜しかつたから、兄の横面を張つて大變叱られた。

母が死んでからは、おやぢと兄と三人で暮して居た。おやぢは何もせぬ男で、人の顔さへ見れば貴樣は駄目だ駄目だと口癖の樣に云つて居た。何が駄目なんだか今に分らない。妙なおやぢが有つたもんだ。兄は實業家になるとか云つて頻りに英語を勉强して居た。元來女の樣な性分で、ずるいから、仲がよくなかつた。十日に一遍位の割で喧嘩をして居た。ある時將棋をさしたら卑怯な待駒をして、人が困ると嬉しさうに冷やかした。あんまり腹が立つたから、手に在つた飛車を眉間へ擲きつけてやつた。眉間が割れて少々血が出た。兄がおやぢに言付けた。おやぢがおれを勘當すると言ひ出した。

其時はもう仕方がないと觀念して先方の云ふ通り勘當される積りで居たら、十年來召し使つて居る清と云ふ下女が、泣きながらおやぢに詫まつて、漸くおやぢの怒りが解けた。それにも關らずあまりおやぢを怖いとは思はなかつた。却て此清と云ふ下女に氣の毒であつた。此下女はもと由緒のあるものだつたさうだが、瓦解のときに零落して、つい奉公迄する樣になつたのだと聞いて居る。だから婆さんである。此婆さんがどう云ふ因縁か、おれを非常に可愛がつて呉れた。不思議なものである。母も死ぬ三日前に愛想をつかした——おやぢも年中持て餘してゐる——町内では亂暴者の惡太郎と爪彈きをする——此おれを無暗に珍重してくれた。おれは到底人に好かれる性でないとあきらめて居たから、他人から木の端の樣に取扱はれるのは何とも思はない、却て此清の樣にちやほやしてくれるのを不審に考へた。清は時々臺所で人の居ない時に あなたは眞直でよい御氣性だ、と賞める事が時々あつた。然しおれには清の云ふ意味が分らなかつた。好い氣性なら清以外のものも、もう少し善くしてくれるだらうと思つた。清がこんな事を云ふ度におれは御世辭は嫌ひだと答へるのが常であつた。すると婆さんは夫だから好い御氣性ですと云つては、嬉しさうにおれの顔を眺めて居る。自分の力でおれを製造して誇つてる樣に見える。少々氣味がわるかつた。

母が死んでから清は愈おれを可愛がつた。時々は子供心になぜあんなに可愛がるのかと不審に思つた。つまらない、廢せばいゝのにと思つた。氣の毒だと思つた。夫でも清は可愛がつてくれる。折々は自分の小遣で金鍔や紅梅燒を買つてくれる。寒い夜などはひそかに蕎麥粉を仕入れて置いて、いつの間にか寐て居る枕元へ蕎麥湯を持つて來てくれる。時には鍋燒饂飩さへ買つてくれた。只食ひ物計りではない。靴足袋を貰つた。鉛筆も貰つた。帳面も貰つた。是はずつと後の事であるが金を三圓許り貸してくれた

事さへある。何も貸せと云つた譯ではない。向うで部屋へ持つて來て御小遣がなくて御困りでせう、御使ひなさいと云つて呉れたんだ。おれは無論入らないと云つたが、是非使へと云ふから、借りて置いた。實は大變嬉しかつた。其三圓を蝦蟇口へ入れて、懷へ入れたなり便所へ行つたら、すぽりと後架の中へ落として仕舞つた。仕方がないから、のそ〳〵出て來て實は是々だと清に話した所が、清は早速竹の棒を捜して來て、取つて上げますと云つた。しばらくすると井戸端でざあ〳〵音がするから、出て見たら竹の先へ蝦蟇口の紐を引つ懸けたのを水で洗つて居た。夫から口をあけて壹圓札を改めたら茶色になつて模樣が消えかゝつて居た。清は火鉢で乾かして、是でいゝでせうと出した。一寸かいで見て臭いやと云つたら、それぢや御出しなさい、取り換へて來て上げますからと、どこでどう胡魔化したか札の代りに銀貨を三圓持つて來た。此三圓は何に使つたか忘れて仕舞つた。今に返すよと云つたきり、返さない。今となつては十倍にして返してやりたくつても返せない。

清が物を呉れる時には必ずおやぢも兄も居ない時に限る。おれは何が嫌ひだと云つて人に隱れて自分丈得をする程嫌ひな事はない。兄とは無論仲がよくないけれども、兄に隱して清から菓子や色鉛筆を貰ひたくはない。なぜ、おれ一人に呉れて、兄さんには遣らないのかと清に聞く事がある。すると清は澄ましたもので御兄樣は御父樣が買つて御上げなさるから構ひませんと云ふ。是は不公平である。おやぢは頑固だけれども、そんな依怙贔屓はせぬ男だ。然し清の眼から見るとさう見えるのだらう。全く愛に溺れて居たに違ひない。元は身分のあるものでも教育のない婆さんだから仕方がない。單に是計りではない。贔屓目は恐ろしいものだ。清はおれを以て將來立身出世して立派なものになると思ひ込んで居た。其癖勉強をする兄は色計り白くつて、迚も役には立たないと一人できめて仕舞つた。こんな婆さんに逢つては叶はない。自分の好きなものは必ずえらい人物になつて、嫌ひなひとは屹度落ち振れるものと信じて居る。おれは其時から別段何になると云ふ了見もなかつた。然し清がなる〳〵と云ふ者だから、矢つ張り何にか成れるんだらうと思つて居た。今から考へると馬鹿々々しい。ある時抔は清にどんなものになるだらうと聞いて見た事がある。所が清にも別段の考へもなかつた樣だ。只手車へ乘つて、立派な玄關のある家をこしらへるに相違ないと云つた。

夫から清はおれがうちでも持つて獨立したら、一所になる氣で居た。どうか置いて下さいと何遍も繰り返して頼んだ。おれも何だかうちが持てる樣な氣がして、うん置いてやると返事丈はして置いた。所が此女は中々想像の強い女で、あなたはどこが御好き、麴町ですか麻布ですか、御庭へぶらんこを御こしらへ遊ばせ、西洋間は一つで澤山です抔と勝手な計畫を獨りで並べて居た。其時は家なんか欲しくも何ともなかつた。西洋館も日本建も全く不用であつたから、そんなものは欲しくないと、いつでも清に答へた。すると、あなたは慾がすくなくつて、心が綺麗だと云つて又賞めた。清は何と云つても賞めてくれる。

母が死んでから五六年の間此狀態で暮らして居た。おやぢには叱られる。兄とは喧嘩をする。清には菓子を貰ふ、時々賞められる。別に望みもない、是で澤山だと思つて居た。ほかの子供も一概にこんなものだらうと思つて居た。清が何かにつけて、あなたは御可哀相だ不仕合せだと無暗に云ふものだから、それぢや可哀相で不仕合せなんだらうと思つた。其外に苦にな

る事は少しもなかつた。只おやぢが小遣を呉れないには閉口した。

母が死んでから六年目の正月におやぢも卒中で亡くなつた。其年の四月におれはある私立の中學校を卒業する。六月に兄は商業學校を卒業した。兄は何とか會社の九州の支店に口があつて行かなければならん。おれは東京でまだ學問をしなければならない。兄は家を賣つて財産を片附けて任地へ出立すると云ひ出した。おれはどうでもするが宜からうと返事をした。どうせ兄の厄介になる氣はない。世話をしてくれるにした所で、喧嘩をするから、向うでも何とか云ひ出すに極まつて居る。なまじひ保護を受ければこそ、こんな兄に頭を下げなければならない。牛乳配達をしても食つてられると覺悟をした。兄は夫から道具屋を呼んで來て、先祖代々の瓦落多を二束三文に賣つた。家屋敷はある人の周旋である金滿家に讓つた。此方は大分金になつた樣だが、詳しい事は一向知らぬ。おれは一ケ月以前から、しばらく前途の方向のつく迄神田の小川町へ下宿して居た。清は十何年居たうちが人手に渡るのを大いに殘念がつたが、自分のものでないから、仕樣がなかつた。あなたがもう少し年をとつて入らつしやれば、こゝが御相續が出來ますものをとしきりに口說いて居た。もう少し年を取つて相續が出來るものなら、今でも相續が出來る筈だ。婆さんは何も知らないから年さへ取れば兄の家がもらへると信じて居る。

兄とおれは斯樣に分かれたが、困つたのは清の行く先である。兄は無論連れて行ける身分でなし、清も兄の尻にくつ附いて九州下り迄出掛ける氣は毛頭なし、と云つて此時のおれは四疊半の安下宿に籠つて、夫すらもいざとなれば直ちに引き拂はねばならぬ始末だ。どうする事も出來ん。清に聞いて見た。どこかへ奉公でもする氣かねと云つたら、あなたが御うちを持つて、奧さまを御貰ひになる迄は、仕方がないから、甥の厄介になりませうと漸く決心した返事をした。此甥は裁判所の書記で先づ今日には差支なく暮らして居たから、今迄も清に來るなら來いと二三度勸めたのだが、清は假令下女奉公はしても年來住み馴れた方がいゝと云つて應じなかつた。然し今の場合知らぬ屋敷へ奉公易へをして入らぬ氣兼を仕直すより甥の厄介になる方がましだと思つたのだらう。夫にしても早くうちを持ての、妻を貰への、來て世話をするのと云ふ。親身の甥よりも他人のおれの方が好きなのだらう。

九州へ立つ二日前兄が下宿へ來て金を六百圓出して是を資本にして商賣をするなり、學資にして勉強をするなり、どうでも隨意に使ふがいゝ、其代りあとは構はないと云つた。兄にしては感心なやり方だ、何の六百圓位貰はんでも困りはせんと思つたが、例に似ぬ淡泊な處置が氣に入つたから、禮を云つて貰つて置いた。兄は夫から五十圓出して之を序に清に渡してくれと云つたから、異議なく引き受けた。二日立つて新橋の停車場で分かれたきり兄には其後一遍も逢はない。

おれは六百圓の使用法に就いて寐ながら考へた。商賣をしたつて面倒くさくつて旨く出來るものぢやなし、ことに六百圓の金で商賣らしい商賣がやれる譯でもなからう。よしやれるとしても、今の樣ぢや人の前へ出て敎育を受けたと威張れないから詰り損になる計りだ。資本抔はどうでもいゝから、これを學資にして勉強してやらう。六百圓を三に割つて一年に二百圓宛使へば三年間は勉強が出來る。三年間一生懸命にやれば何か出來る。夫からどこの學校へ這入らうと考へたが、學問は生來どれもこれも好きでない。ことに語學とか文學とか云ふものは

眞平御免だ。新體詩などと來ては二十行あるうちで一行も分らない。どうせ嫌ひなものなら何をやつても同じ事だと思つたが、幸ひ物理學校の前を通り掛かつたら生徒募集の廣告が出て居たから何も緣だと思つて規則書をもらつてすぐ入學の手續をして仕舞つた。今考へると是も親讓りの無鐵砲から起こつた失策だ。

三年間まあ人並に勉强はしたが別段たちのいゝ方でもないから、席順はいつでも下から勘定する方が便利であつた。然し不思議な者で、三年立つたらとう／＼卒業して仕舞つた。自分でも可笑しいと思つたが苦情を云ふ譯もないから大人しく卒業して置いた。

卒業してから八日目に校長が呼びに來たから、何か用だらうと思つて、出掛けて行つたら、四國邊のある中學校で數學の教師が入る。月給は四十圓だが、行つてはどうだと云ふ相談である。おれは三年間學問はしたが實を云ふと教師になる氣も、田舍へ行く考へも何もなかつた。尤も教師以外に何をしようと云ふあてもなかつたから、此相談を受けた時、行きませうと卽席に返事をした。是も親讓りの無鐵砲が祟つたのである。

引き受けた以上は赴任せねばならぬ。此三年間は四疊半に蟄居して小言は只の一度も聞いた事がない。喧嘩もせずに濟んだ。おれの生涯のうちでは比較的呑氣な時節であつた。然しかうなると四疊半も引き拂はねばならん。生れてから東京以外に踏み出したのは、同級生と一所に鎌倉へ遠足した時計りである。今度は鎌倉所ではない。大變な遠くへ行かねばならぬ。地圖で見ると海濱で針の先程小さく見える。どうせ碌な所ではあるまい。どんな町で、どんな人が住んで居るか分らん。分らんでも困らない。心配にはならぬ。只行く計りである。尤も少々面倒臭い。

家を疊んでからも清の所へは折々行つた。清の甥と云ふのは存外結構な人である。おれが行くたびに、居りさへすれば、何くれと款待して呉れた。清はおれを前へ置いて、色々おれの自慢を甥に聞かせた。今に學校を卒業すると麹町邊へ屋敷を買つて役所へ通ふのだ抔と吹聽した事もある。獨りで極めて一人で喋舌るから、こつちは困つて顏を赤くした。夫も一度や二度ではない。折々おれが小さい時寐小便をした事迄持ち出すには閉口した。甥は何と思つて清の自慢を聞いて居たか分らぬ。只清は昔風の女だから、自分とおれの關係を封建時代の主從の樣に考へて居た。自分の主人なら甥の爲にも主人に相違ないと合點したものらしい。甥こそいゝ面の皮だ。

愈約束が極まつて、もう立つと云ふ三日前に清を尋ねたら、北向の三疊に風邪を引いて寐て居た。おれの來たのを見て起き直るが早いか、坊つちやん何時家をお持ちなさいますと聞いた。卒業さへすれば金が自然とポッケットに湧いて來ると思つて居る。そんなに豪い人をつらまへて、まだ坊つちやんと呼ぶのは愈馬鹿氣て居る。おれは單簡に當分うちは持たない。田舍へ行くんだと云つたら、非常に失望した容子で、胡麻鹽の鬢の亂れを頻りに撫でた。餘り氣の毒だから、行く事は行くがぢき歸る。來年の夏休みには屹度歸る」と慰めてやつた。夫でも妙な顏をして居るから「何を見やげに買つて來てやらう、何が欲しい」と聞いて見たら「越後の笹飴が食べたい」と云つた。越後の笹飴なんて聞いた事もない。第一方角が違ふ。「おれの行く田舍には笹飴はなささうだ」と云つて聞かしたら「そんなら、どつちの見當です」と聞き返した。「西の方だよ」と云ふと「箱根のさきですか手前ですか」と問ふ。隨分持てあました。

出立の日には朝から來て、色々世話をやい

た。來る途中小間物屋で買つて來た歯磨と楊子と手拭をズックの革鞄に入れて呉れた。そんな物は入らないと云つても中々承知しない。車を並べて停車場へ着いて、プラットフォームの上へ出た時、車へ乘り込んだおれの顔を眤と見て「もうお別れになるかも知れません。随分御機嫌よう」と小さな聲で云つた。目に涙が一杯溜まつて居る。おれは泣かなかつた。然しもう少しで泣く所であつた。汽車が餘つ程動き出してから、もう大丈夫だらうと思つて、窓から首を出して、振り向いたら、矢つ張り立つて居た。何だか大變小さく見えた。

二

ぶうと云つて汽船がとまると、艀が岸を離れて、漕ぎ寄せて來た。船頭は眞裸に赤ふんどしをしめてゐる。野蠻な所だ。尤も此熱さでは着物はきられまい。日が強いので水がやに光る。見詰めて居ても眼が眩む。事務員に聞いて見るとおれは此所へ降りるのださうだ。見る所では大森位な漁村だ。人を馬鹿にしてゐらあ、こんな所に我慢が出來るものかと思つたが仕方がない。威勢よく一番に飛び込んだ。續いて五六人は乘つたらう。外に大きな箱を四つ許り積み込んで赤ふんは岸へ漕ぎ戻して來た。陸へ着いた時も、いの一番に飛び上がつていきなり、磯に立つて居た鼻つたれ小僧をつらまへて中學校はどこだと聞いた。小僧は茫やりして、知らんがのと云つた。氣の利かぬ田舎ものだ。猫の額程な町内の癖に、中學校のありかも知らぬ奴があるものか。所へ妙な筒つぽうを着た男がきて、こつちへ來いと云ふから、尾いて行つたら、港屋とか云ふ宿屋へ連れて來た。やな女が聲を揃へてお上がりなさいと云ふので上がるのがいやになつた。門口へ立つたなり中學校を教へろと云つたら、中學校は是から汽車で二里許り行かなくちやいけないと聞いて、猶上がるのがいやになつた。おれは、筒つぽうを着た男から、おれの革鞄を二つ引きたくつて、のそのそあるき出した。宿屋のものは變な顔をして居た。

停車場はすぐ知れた。切符も譯なく買つた。乘り込んで見るとマッチ箱の様な汽車だ。ごろごろと五分許り動いたと思つたら、もう降りなければならない。道理で切符が安いと思つた。たつた三錢である。夫から車を傭つて、中學校へ來たら、もう放課後で誰も居ない。宿直は一寸用達に出たと小使が教へた。随分氣樂な宿直がゐるものだ。校長でも尋ねようかと思つたが、草臥れたから、車に乘つて宿屋へ連れて行けと車夫に云ひ附けた。車夫は威勢よく山城屋と云ふうちへ横附けにした。山城屋とは質屋の勘太郎の屋號と同じだから一寸面白く思つた。

何だか二階の階子段の下の暗い部屋へ案内した。熱くつて居られやしない。こんな部屋はいやだと云つたら、生憎みんな塞がつて居りますからと云ひながら、革鞄を抛り出した儘出て行つた。仕方がないから部屋の中へ這入つて汗をかいて我慢して居た。やがて湯に入れと云ふから、ざぶりと飛び込んで、すぐ上がつた。歸りがけに覗いて見ると涼しさうな部屋が澤山空いてゐる。失敬な奴だ。嘘をつきやあがつた。それから下女が膳を持つて來た。部屋は熱かつたが、飯は下宿のよりも大分旨かつた。給仕をしながら下女がどちらから御出でになりましたと聞くから、東京から來たと答へた。すると東京はよい所で御座いませうと云つたから當り前だと答へてやつた。膳を下げた下女が臺所へ行つた時分、大きな笑ひ聲が聞こえた。くだらないから、すぐ寐たが、中々寐られない。熱い計りではない。騒々しい。下宿の五倍位八釜

しい。うと〳〵したら清の夢を見た。清が越後の笹飴を笹ぐるみ、むしや〳〵食つて居る。笹は毒だからよしたらよからうと云ふと、いえ此笹が御藥で御座いますと云つて旨さうに食つて居る。おれがあきれ返つて大きな口を開いてハヽヽヽと笑つたら眼が覺めた。下女が雨戸を明けてゐる。相變らず空の底が突き拔けた樣な天氣だ。

道中をしたら茶代をやるものだと聞いて居た。茶代をやらないと粗末に取り扱はれると聞いて居た。こんな、狹くて暗い部屋へ押し込めるのも茶代をやらない所爲だらう。見すぼらしい服裝をして、ズックの革鞄と毛繻子の蝙蝠傘を提げてるからだらう。田舍者の癖に人を見括つたな。一番茶代をやつて驚かしてやらう。おれは是でも學資の餘りを三十圓程懷に入れて東京を出て來たのだ。汽車と汽船の切符代と雜費を差し引いて、まだ十四圓程ある。みんなやつたつて是からは月給を貰ふんだから構はない。田舍者はしみつたれだから五圓もやれば驚いて眼を廻すに極まつて居る。どうするか見ろと澄まして顏を洗つて、部屋へ歸つて待つてると、昨夕の下女が膳を持つて來た。盆を持つて給仕をしながらにや〳〵笑つてる。失敬な奴だ。顏のなかをお祭りでも通りやしまいし。是でも此下女の面より餘つ程上等だ。飯を濟ましてからにしようと思つて居たが、癪に障つたから、中途で五圓札を一枚出して、あとで是を帳場へ持つて行けと云つたら、下女は變な顏をして居た。夫から飯を濟ましてすぐ學校へ出懸けた。靴は磨いてなかつた。

學校は昨日車で乘りつけたから、大概の見當は分つて居る。四つ角を二三度曲がつたらすぐ門の前へ出た。門から玄關迄は御影石で敷きつめてある。きのふ此敷石の上を車でがら〳〵と通つた時は、無暗に仰山な音がするので少し弱つた。途中から小倉の制服を着た生徒に澤山逢つたが、みんな此門を這入つて行く。中にはおれより脊が高くつて強さうなのが居る。あんな奴を敎へるのかと思つたら何だか氣味が惡くなつた。名刺を出したら校長室へ通した。校長は薄髯のある、色の黑い、眼の大きな狸の樣な男である。やに勿體ぶつて居た。まあ精出して勉強してくれと云つて、恭しく大きな印の捺さつた辭令を渡した。此辭令は東京へ歸るとき丸めて海の中へ抛り込んで仕舞つた。校長は今に職員に紹介してやるから、一々其人に此辭令を見せるんだと言つて聞かした。餘計な手數だ。そんな面倒な事をするより此辭令を三日間敎員室へ張り附ける方がましだ。

敎員が控所へ揃ふのは一時間目の喇叭が鳴らなくてはならぬ。大分時間がある。校長は時計を出して見て、追々ゆるりと話す積りだが、先づ大體の事を呑み込んで置いて貰はうと云つて、夫から敎育の精神について長い御談義を聞かした。おれは勿論いゝ加減に聞いて居たが、途中から是は飛んだ所へ來たと思つた。校長の云ふ樣にはとても出來ない。おれ見た樣な無鐵砲なものをつらまへて、生徒の模範になれの、一校の師表と仰がれなくては行かんの、學問以外に個人の德化を及ぼさなくては敎育者になれないの、と、無暗に法外な注文をする。そんなえらい人が月給四十圓で遙々こんな田舍へくるもんか。人間は大概似たもんだ。腹が立てば誰でも喧嘩の一つ位はするだらうと思つてたが、此樣子ぢや滅多に口も利けない、散歩も出來ない。そんな六づかしい役なら雇ふ前にこれ〳〵だと話すがいゝ。おれは嘘をつくのが嫌ひだから、仕方がない、だまされて來たのだとあきらめて、思ひ切りよく、こゝで斷つて歸つちまはうと思つた。宿屋へ五圓やつたから財布の中には九圓なにがししかない。九圓ぢや東京迄は歸

れない。茶代なんかやらなければよかつた。惜しい事をした。然し九圓だつて、どうかならない事はない。旅費は足りなくつても嘘をつくよりましだと思つて、到底あなたの仰しやる通りにや出來ません、此辭令は返しますと云つたら、校長は狸の樣な眼をぱちつかせておれの顔を見て居た。やがて、今のは只希望である、あなたが希望通り出來ないのはよく知つて居るから心配しなくつてもいゝと云ひながら笑つた。其位よく知つてるなら、始めから威嚇さなければいゝのに。

さう、かうする内に喇叭が鳴つた。教場の方が急にがや〳〵する。もう教員も控所へ揃ひましたらうと云ふから、校長に尾いて教員控所へ這入つた。廣い細長い部屋の周圍に机を並べてみんな腰をかけて居る。おれが這入つたのを見て、みんな申し合はせた樣におれの顔を見た。見世物ぢやあるまいし。夫から申し附けられた通り一人々々の前へ行つて辭令を出して挨拶をした。大概は椅子を離れて腰をかゞめる計りであつたが、念の入つたのは差し出した辭令を受け取つて一應拜見をして夫を恭しく返却した。丸で宮芝居の眞似だ。十五人目に體操の教師へと廻つて來た時には同じ事を何返もやるので少々じれつたくなつた。向うは一度で濟む、こつちは同じ所作を十五返繰り返して居る。少しはひとの了見も察して見るがいゝ。

挨拶をしたうちに教頭のなにがしと云ふのが居た。是は文學士ださうだ。文學士と云へば大學の卒業生だからえらい人なんだらう。妙に女の樣な優しい聲を出す人だつた。尤も驚いたのは此暑いのにフランネルの襯衣を着て居る。いくらか薄い地には相違なくつても暑いには極まつてる。文學士丈に御苦勞な服裝をしたもんだ。しかも夫が赤シャツだから人を馬鹿にして居る。あとで聞いたら此男は年が年中赤シャツを着るんださうだ。妙な病氣があつた者だ。當人の說明では赤は身體に藥になるから、衛生の爲にわざ〳〵誂へるんださうだが、入らざる心配だ。そんなら序に着物も袴も赤にすればいゝ。夫から英語の教師に古賀とか云ふ大變顔色の惡い男が居た。大概顔の蒼い人は痩せてるもんだが此男は蒼くふくれて居る。昔小學校へ行く時分、淺井の民さんと云ふ子が同級生にあつたが、此淺井のおやぢが矢張り、こんな色つやだつた。淺井は百姓だから、百姓になるとあんな顔になるかと淸に聞いて見たら、さうぢやありません、あの人はうらなりの唐茄子計り食べるから、蒼くふくれるんですと教へて呉れた。それ以來蒼くふくれた人を見れば必ずうらなりの唐茄子を食つた酬いだと思ふ。此の英語の教師もうらなり計り食つてるに違ない。尤もうらなりとは何の事か今以て知らない。淸に聞いて見た事はあるが、淸は笑つて答へなかつた。大方淸も知らないんだらう。夫からおれと同じ數學の教師に堀田と云ふのが居た。是は逞しい毬栗坊主で、叡山の惡僧と云ふべき面構である。人が丁寧に辭令を見せたら見向きもせず、やあ君が新任の人か、些と遊びに來給へ、アハヽヽと云つた。何がアハヽヽだ。そんな禮儀を心得ぬ奴の所へ誰が遊びに行くものか。おれは此時から此坊主に山嵐と云ふ渾名をつけてやつた。漢學の先生は流石に堅いものだ。昨日御着きで、嘸御疲れで、夫でもう授業を御始めで、大分御勵精で、——とのべつに辨じたのは愛嬌のある御爺さんだ。畫學の教師は全く藝人風だ。べら〳〵した透綾の羽織を着て、扇子をぱちつかせて、御國はどちらでげす、え？東京？夫りや嬉しい、御仲間が出來て……私もこれで江戸つ子ですと云つた。こんなのが江戸つ子なら江戸には生れたくないもんだと心中に考へた。其ほか一人々々に就いてこ

んな事を書けばいくらでもある。然し際限がないからやめる。

挨拶が一通り濟んだら、校長が今日はもう引き取つてもいゝ、尤も授業上の事は數學の主任と打ち合せをして置いて、明後日から課業を始めてくれと云つた。數學の主任は誰かと聞いて見たら例の山嵐であつた。忌々しい、こいつの下に働くのかおや／＼と失望した。山嵐は「おい君どこに宿まつてるか、山城屋か、うん、今に行つて相談する」と云ひ殘して白墨を持つて教場へ出て行つた。主任の癖に向ふから來て相談するなんて不見識な男だ。然し呼び附けるよりは感心だ。

夫から學校の門を出て、すぐ宿へ歸らうと思つたが、歸つたつて仕方がないから、少し町を散歩してやらうと思つて、無暗に足の向く方をあるき散らした。縣廳も見た。古い前世紀の建築である。兵營も見た。麻布の聯隊より立派でない。大通りも見た。神樂坂を半分に狹くした位な道幅で町並はあれより落ちる。二十五萬石の城下だつて高の知れたものだ。こんな所に住んで御城下だ抔と威張つてる人間は可哀相なものだと考へながらくると、いつしか山城屋の前に出た。廣い樣でも狹いものだ。是で大抵は見盡くしたのだらう。這入つて飯でも食はうと門口を這入つた。帳場に坐つて居たかみさんが、おれの顏を見ると急に飛び出して來て御歸り……と板の間へ頭をつけた。靴を脱いで上がると、御座敷があきましたからと下女が二階へ案内をした。十五疊の表二階で大きな床の間がついて居る。おれは生れてからまだこんな立派な座敷へ這入つた事はない。此後いつ這入れるか分らないから、洋服を脱いで浴衣一枚になつて座敷の眞中へ大の字に寢て見た。いゝ心持ちである。

晝飯を食つてから早速清へ手紙をかいてやつた。おれは文章がまづい上に字を知らないから手紙をかくのが大嫌ひだ。又やる所もない。然し清は心配して居るだらう。難船して死にやしないか抔と思つちや困るから、奮發して長いのを書いてやつた。其文句はからである。

「きのふ着いた。つまらん所だ。十五疊の座敷に寢て居る。宿屋へ茶代を五圓やつた。かみさんが頭を板の間へすりつけた。昨夜は寢られなかつた。清が笹飴を笹ごと食ふ夢を見た。來年の夏は歸る。今日は學校へ行つてみんなにあだなをつけてやつた。校長は狸、教頭は赤シャツ、英語の教師はうらなり、數學は山嵐、畫學はのだいこ。今に色々な事をかいてやる。左樣なら」

手紙をかいて仕舞つたら、いゝ心持ちになつて眠氣がさしたから、最前の樣に座敷の眞中へのび／＼と大の字に寢た。今度は夢も何も見ないでぐつすり寢た。この部屋かいと大きな聲がするので眼が覺めたら、山嵐が這入つて來た。最前は失敬、君の受持ちは……と人が起き上がるや否や談判を開かれたので大いに狼狽した。受持ちを聞いて見ると別段六づかしい事もなさゝうだから承知した。此位の事なら、明後日は愚、明日から始めろと云つたつて驚かない。授業上の打ち合せが濟んだら、君はいつ迄こんな宿屋に居る積りでもあるまい、僕がいゝ下宿を周旋してやるから移り玉へ。外のものでは承知しないが僕が話せばすぐ出來る。早い方がいゝから、今日見て、あす移つて、あさつてから學校へ行けば極りがいゝと一人で呑み込んで居る。成程十五疊敷にいつ迄居る譯にも行くまい。月給をみんな宿料に拂つても追つつかないかもしれぬ。五圓の茶代を奮發してすぐ移るのはちと殘念だが、どうせ移る者なら、早く引き越して落ち附く方が便利だから、そこの所はよろしく山嵐に頼む事にした。すると山嵐は兎も角も一所

に來て見ろと云ふから、行つた。町はづれの岡の中腹にある家で至極閑靜だ。主人は骨董を賣買するいか銀と云ふ男で、女房は亭主よりも四つ許り年嵩の女だ。中學校に居た時ヰッチと云ふ言葉を習つた事があるが此女房は正にヰッチに似て居る。ヰッチだつて人の女房だから構はない。とう／＼明日から引き移る事にした。歸りに山嵐は通町で氷水を一杯奢つた。學校で逢つた時はやに横風な失敬な奴だと思つたが、こんなに色々世話をしてくれる所を見ると、わるい男でもなささうだ。只おれと同じ樣にせつかちで肝癪持ちらしい。あとで聞いたら此男が一番生徒に人望があるのださうだ。

三

愈學校へ出た。初めて教場へ這入つて高い所へ乘つた時は、何だか變だつた。講釋をしながら、おれでも先生が勤まるのかと思つた。生徒は八釜しい。時々圖拔けた大きな聲で先生と云ふ。先生には應へた。今迄物理學校で毎日先生々々と呼びつけて居たが、先生と呼ぶのと、呼ばれるのは雲泥の差だ。何だか足の裏がむづむづする。おれは卑怯な人間ではない、臆病な男でもないが、惜しい事に膽力が缺けて居る。先生と大きな聲をされると、腹の減つた時に丸の内で午砲を聞いた樣な氣がする。最初の一時間は何だかいゝ加減にやつて仕舞つた。然し別段困つた質問も掛けられずに濟んだ。控所へ歸つて來たら、山嵐がどうだいと聞いた。うんと單簡に返事をしたら山嵐は安心したらしかつた。

二時間目に白墨を持つて控所を出た時には何だか敵地へ乘り込む樣な氣がした。教場へ出ると今度の組は前より大きな奴ばかりである。おれは江戸つ子で華奢に小作りに出來て居るから、どうも高い所へ上がつても押しが利かない。喧嘩なら相撲取とでもやつて見せるが、こんな大僧を四十人も前へ竝べて、只一枚の舌をたゝいて恐縮させる手際はない。然しこんな田舍者に弱身を見せると癖になると思つたから、成るべく大きな聲をして、少々卷き舌で講釋してやつた。最初のうちは生徒も煙に捲かれてぼんやりして居たから、それ見ろと益得意になつて、べらんめい調を用ひてたら、一番前の列の眞中に居た、一番強さうな奴が、いきなり起立して先生と云ふ。そら來たと思ひながら、何だと聞いたら、「あまり早うて分らんけれ、もちつと、ゆる／＼遣つて、おくれんかな、もし」と云つた。おくれんかな、もしは生温い言葉だ。早過ぎるなら、ゆつくり云つてやるが、おれは江戸つ子だから君等の言葉は使へない、分らなければ、分る迄待つてるがいゝと答へてやつた。此調子で二時間目は思つたより、うまく行つた。只歸りがけに生徒の一人が一寸此問題を解釋をしておくれんかなもし、と出來さうもない幾何の問題を持つて逼つたには冷汗を流した。仕方がないから、何だか分らない、此次教へてやると急いで引き揚げたら、生徒がわあと囃した。其中に出來ん／＼と云ふ聲が聞こえる。箆棒め、先生だつて、出來ないのは當り前だ。出來ないのを出來ないと云ふのに不思議があるものか。そんなものが出來る位なら、四十圓でこんな田舍へくるもんかと控所へ歸つて來た。今度はどうだと又山嵐が聞いた。うんと云つたが、うん丈では氣が濟まなかつたから、此學校の生徒は分らずやだなと云つてやつた。山嵐は妙な顏をして居た。

三時間目も、四時間目も、晝過ぎの一時間も大同小異であつた。最初の日に出た級は、孰れも少々づゝ失敗した。教師はたで見る程樂ぢやないと思つた。授業は一通り濟んだがまだ歸

れない、三時迄ぼつ然として待つてなくてはならん。三時になると、受持級の生徒が自分の教室を掃除して報知にくるから檢分をするんださうだ。夫から、出席簿を一應調べて漸く御暇が出る。いくら月給で買はれた身體だつて、あいた時間迄學校へ縛りつけて机と睨めつくらをさせるなんて法があるものか。然しほかの連中はみんな大人しく御規則通りやつてるから新參のおればかり、だゞを捏ねるのも宜しくないと思つて我慢をして居た。歸りがけに、君何でも蚊んでも三時過迄學校にゐさせるのは愚だぜと山嵐に訴へたら、山嵐はさうさアハヽヽと笑つたが、あとから眞面目になつて、君餘り學校の不平を云ふと、いかんぜ。云ふなら僕丈に話せ、隨分妙な人も居るからなと忠告がましい事を云つた。四つ角で分かれたから詳しい事は聞くひまがなかつた。夫からうちへ歸つてくると、宿の亭主が御茶を入れませうと云つてやつて來る。御茶を入れると云ふから御馳走をするのかと思ふと、おれの茶を遠慮なく入れて自分が飲むのだ。此樣子では留守中も勝手に御茶を入れませうを一人で履行して居るかも知れない。亭主が云ふには手前は書畫骨董がすきで、とうとうこんな商賣を内々で始める樣になりました。あなたも御見受け申す所大分御風流でいらつしやるらしい。ちと道樂に御始めなすつては如何ですと、飛んでもない勸誘をやる。二年前ある人の使に帝國ホテルへ行つた時は錠前直しと間違へられた事がある。ケットを被つて、鎌倉の大佛を見物した時は車屋から親方と云はれた。其外今日迄見損なはれた事は隨分あるが、まだおれをつらまへて大分御風流でいらつしやると云つたものはない。大抵はなりや樣子でも分る。風流人なんて云ふものは、畫を見ても、頭巾を被るか短册を持つてるものだ。このおれを風流人だ抔と眞面目に云ふのは只の曲者ぢやない。おれはそんな呑氣な隱居のやる樣な事は嫌ひだと云つたら、亭主はへゝゝゝと笑ひながらいえ始めから好きなものは、どなたも御座いませんが、一旦此道に這入ると中々出られませんと一人で茶を注いで妙な手附をして飲んで居る。實はゆうべ茶を買つてくれと頼んで置いたのだが、こんな苦い濃い茶はいやだ。一杯飲むと胃に答へる樣な氣がする。今度からもつと苦くないのを買つてくれと云つたら、かしこまりましたと又一杯しぼつて飲んだ。人の茶だと思つて無暗に飲む奴だ。主人が引き下がつてから、あしたの下讀をしてすぐ寐て仕舞つた。

それから毎日々々學校へ出ては規則通り働く、毎日々々歸つて來ると主人が御茶を入れませうと出てくる。一週間許りしたら學校の樣子も一通りは飲み込めたし、宿の夫婦の人物も大概は分つた。他の教師に聞いて見ると辭令を受けた一週間から一ケ月位の間は自分の評判がいゝだらうか、惡いだらうか非常に氣に掛かるさうであるが、おれは一向そんな感じはなかつた。教場で折々しくじると其時丈はやな心持ちだが三十分許り立つと綺麗に消えて仕舞ふ。おれは何事によらず長く心配しようと思つても心配が出來ない男だ。教場のしくじりが生徒にどんな影響を與へて、其影響が校長や教頭にどんな反應を呈するか丸で無頓着であつた。おれは前に云ふ通りあまり度胸の据つた男ではないのだが、思ひ切りは頗るいゝ人間である。此學校がいけなければすぐどつかへ行く覺悟で居たから、狸も赤シャツも些とも恐ろしくはなかつた。まして教場の小僧共なんかには愛嬌も御世辭も使ふ氣になれなかつた。學校はそれでいゝのだが下宿の方はさうはいかなかつた。亭主が茶を飲みに來る丈なら我慢もするが、色々な物を持つてくる。始めに持つて來たのは何でも印材で十許り並べて置いて、みんなで三圓な

ら安い物だ御買ひなさいと云ふ。田舎巡りのへボ絵師ぢゃあるまいし、そんなものは入らないと云つたら、今度は華山とか何とか云ふ男の花鳥の掛物をもつて来た。自分で床の間へかけて、いゝ出来ぢゃありませんかと云ふから、さうかなと好い加減に挨拶をすると、華山には二人ある、一人は何とか華山で、一人は何とか華山ですが、此幅はその何とか華山の方だと、くだらない講釈をしたあとで、どうですあなたなら十五円にして置きます。御買ひなさいと催促をする。金がないと断ると、金なんか、いつでも宜う御座いますと中々頑固だ。金があつても買はないんだと、其時は追つ払つちまつた。其次には鬼瓦位な大硯を担ぎ込んだ。是は端渓です、端渓ですと二遍も端渓がるから、面白半分に端渓た何だいと聞いたら、すぐ講釈を始め出した。端渓には上層中層下層とあつて、今時のものはみんな上層ですが、是は慥かに中層です、此眼を御覧なさい。眼が三つあるのは珍しい、潑墨の具合も至つて宜しい、試めして御覧なさいと、おれの前へ大きな硯を突きつける。いくらだと聞くと、持主が支那から、持つて帰つて来て是非売りたいと云ひますから、御安くして三十円にして置きませうと云ふ。此男は馬鹿に相違ない。学校の方はどうかかうか無事に勤まりさうだが、かう骨董責めに逢つてはとても長く続きさうにない。

其うち学校もいやになつた。ある日の晩大町と云ふ所を散歩して居たら郵便局の隣りに蕎麦とかいて、下に東京と注を加へた看板があつた。おれは蕎麦が大好きである。東京に居つたときでも蕎麦屋の前を通つて薬味の香ひをかぐと、どうしても暖簾がくゞりたくなつた。今日迄は数学と骨董で蕎麦を忘れて居たが、かうして看板を見ると素通りが出来なくなる。序だから一杯食つて行かうと思つて上がり込んだ。見ると看板程でもない。東京と断る以上はもう少し綺麗にしさうなものだが、東京を知らないのか、金がないのか、滅法きたない。畳は色が変つて御負けに砂でざら／＼して居る。壁は煤で真黒だ。天井はランプの油烟で燻ぼつてるのみか、低くつて、思はず首を縮める位だ。只麗々と蕎麦の名前をかいて張り付けたねだん付け丈は全く新しい。何でも古いうちを買つて二三日前から開業したに違ひなからう。ねだん付の第一号に天麩羅とある。おい天麩羅を持つてこいと大きな声を出した。すると此時迄隅の方に三人かたまつて、何かつる／＼ちゆ／＼食つて居た連中が、ひとしくおれの方を見た。部屋が暗いので、一寸気がつかなかつたが顔を合はせると、みんな学校の生徒である。先方で挨拶をしたから、おれも挨拶をした。其晩は久し振りに蕎麦を食つたので、旨かつたから天麩羅を四杯平げた。

翌日何の気もなく教場へ這入ると、黒板一杯位な字で天麩羅先生とかいてある。おれの顔を見てみんなわあと笑つた。おれは馬鹿々々しいから、天麩羅を食つちや可笑しいかと聞いた。すると生徒の一人が、然し四杯は過ぎるぞな、もし、と云つた。四杯食はうが五杯食はうがおれの銭でおれが食ふのに文句があるもんかと、さつさと講義を済まして控所へ帰つて来た。十分立つて次の教場へ出ると一つ天麩羅四杯也、但し笑ふ可からず。と黒板にかいてある。さつきは別に腹も立たなかつたが今度は癪に障つた。冗談も度を過ごせばいたづらだ。焼餅の黒焦のやうなもので誰も賞め手はない。田舎者は此呼吸が分らないからどこ迄押して行つても構はないと云ふ了見だらう。一時間あるくと見物する町もない様な狭い都に住んで、外に何も芸がないから天麩羅事件を日露戦争の様に触れちらかすんだらう。憐れな奴等だ。子

僕の時から、こんなに教育されるから、いやにひねつこびた、植木鉢の楓見た樣な小人が出來るんだ。無邪氣なら一所に笑つてもいゝが、こりやなんだ、小供の癖に乙に毒氣を持つてる。おれはだまつて、天麩羅を消して、こんないたづらが面白いか、卑怯な冗談だ。君等は卑怯と云ふ意味を知つてるか、と云つたら、自分がした事を笑はれて怒るのが卑怯ぢやらうがな、もしと答へた奴がある。やな奴だ。わざ〳〵東京からこんな奴を教へに來たのかと思つたら情なくなつた。餘計な減らず口を利かないで勉強しろと云つて授業を始めて仕舞つた。夫から次の教場へ出たら天麩羅を食ふと減らず口が利き度くなるものなりと書いてある。どうも始末に終へない。あんまり腹が立つたから、そんな生意氣な奴は教へないと云つてすた〳〵歸つて來てやつた。生徒は休みになつて喜んださうだ。かうなると學校より骨董の方がまだましだ。

天麩羅蕎麥もうちへ歸つて、一晩寐たらそんなに肝癪に障らなくなつた。學校へ出て見ると、生徒も出てゐる。何だか譯が分らない。夫から三日許りは無事であつたが、四日目の晩に住田と云ふ所へ行つて團子を食つた。此の住田と云ふ所は温泉のある町で城下から汽車だと十分許り、歩行いても三十分で行かれる、料理屋も温泉宿も、公園もある上に遊廓がある。おれの這入つた團子屋は遊廓の入口にあつて、大變うまいと云ふ評判だから、温泉に行つた歸りがけに一寸食つて見た。今度は生徒にも逢はなかつたから、誰も知るまいと思つて、翌日學校へ行つて、一時間目の教場へ這入ると團子二皿七錢と書いてある。實際おれは二皿食つて七錢拂つた。どうも厄介な奴等だ。二時間目にも屹度何かあると思ふと遊廓の團子旨い〳〵と書いてある。あきれ返つた奴等だ。團子が夫で濟んだと思つたら今度は赤手拭と云ふのが評判になつた。何の事だと思つたら、詰らない來歴だ。おれはこゝへ來てから、毎日住田の温泉へ行く事に極めて居る。ほかの所は何を見ても東京の足元にも及ばないが温泉丈は立派なものだ。折角來た者だから毎日這入つてやらうと云ふ氣で晩飯前に運動旁出掛ける。所が行く時は必ず西洋手拭の大きな奴をぶら下げて行く。此手拭が湯に染まつた上へ、赤い縞が流れ出したので一寸見ると紅色に見える。おれは此手拭を行きも歸りも、汽車に乘つてもあるいても、常にぶら下げて居る。それで生徒がおれの事を赤手拭赤手拭と云ふんださうだ。どうも狹い土地に住んでるとうるさいものだ。まだある。温泉は三階の新築で上等は浴衣をかして、流しをつけて八錢で濟む。其上女が天目へ茶を載せて出す。おれはいつでも上等へ這入つた。すると四十圓の月給で毎日上等へ這入るのは贅澤だと云ひ出した。餘計な御世話だ。まだある。湯壺は花崗石を疊み上げて、十五疊敷位の廣さに仕切つてある。大抵は十三四人漬かつてるがたまには誰も居ない事がある。深さは立つて乳の處まであるから、運動の爲に、湯の中を泳ぐのは中々愉快だ。おれは人の居ないのを見濟ましては十五疊の湯壺を泳ぎ巡つて喜んで居た。所がある日三階から威勢よく下りて今日も泳げるかとざくろ口を覗いて見ると大きな札へ黑々と湯の中で泳ぐべからずとかいて貼りつけてある。湯の中で泳ぐものは、あまり有るまいから、此貼札はおれの爲に特別に新調したのかも知れない。おれはそれから泳ぐのは斷念した。泳ぐのは斷念したが、學校へ出て見ると、例の通り黑板に湯の中で泳ぐべからずと書いてあるには驚いた。何だか生徒全體がおれ一人を探偵して居る樣に思はれた。くさくさした。生徒が何を云つたつて、やらうと思つ

た事をやめる様なおれではないが、何でこんな狭苦しい鼻の先がつかへる様な所へ來たのかと思ふと情なくなつた。それでうちへ歸ると相變らず骨董責めである。

四

學校には宿直があつて、職員が代る〴〵これをつとめる。但し狸と赤シャツは例外である。何で此兩人が當然の義務を免れるのかと聞いて見たら奏任待遇だからと云ふ。面白くもない。月給は澤山とる、時間は少い、夫で宿直を逃れるなんて不公平があるものか。勝手な規則をこしらへて、それが當り前だと云ふ様な顔をしてゐる。よくまああんなに圖迂々々しく出來るものだ。これに就いては大分不平であるが、山嵐の説によると、いくら一人で不平を竝べたつて通るものぢやないさうだ。一人だつて二人だつて正しい事なら通りさうなものだ。山嵐は might is right といふ英語を引いて説諭を加へたが、何だか要領を得ないから、聞き返して見たら強者の權利と云ふ意味ださうだ。強者の權利位なら昔から知つて居る。今更山嵐から講釋をきかなくつてもいゝ。強者の權利と宿直とは別問題だ。狸や赤シャツが強者だなんて、誰が承知するものか。議論は議論として此宿直が愈おれの番に廻つて來た。一體疳性だから夜具蒲團抔は自分のものへ樂に寐ないと寐た様な心持ちがしない。子供の時から、友達のうちへ泊まつた事は殆どない位だ。友達のうちでさへ厭なら學校の宿直は猶更厭だ。厭だけれども、是が四十圓のうちへ籠つてゐるなら仕方がない。我慢して勤めてやらう。

教師も生徒も歸つて仕舞つたあとで、一人ぽかんとして居るのは随分間が抜けた者だ。宿直部屋は教場の裏手にある寄宿舍の西はづれの一室だ。一寸這入つて見たが、西日をまともに受けて、苦しくつて居たゝまれない。田舍丈あつて秋がきても、氣長に暑いもんだ。生徒の賄を取りよせて晩飯を濟ましたが、まづいには恐れ入つた。よくあんなものを食つて、あれ丈に暴れられたもんだ。それで晩飯を急いで四時半に片附けて仕舞ふんだから豪傑に違ひない。飯は食つたが、まだ日が暮れないから寐る譯に行かない。一寸温泉に行きたくなつた。宿直をして外へ出るのはいゝ事だか、惡い事だかしらないが、かうつくねんとして重禁錮同様な憂目に逢ふのは我慢の出來るもんぢやない。始めて學校へ來た時當直の人はと聞いたら、一寸用達に出たと小使が答へたのを妙だと思つたが、自分に番が廻つて見ると思ひ當たる。出る方が正しいのだ。おれは小使に一寸出てくると云つたら、何か御用ですかと聞くから、用ぢやない、温泉へ這入るんだと答へて、さつさと出掛けた。赤手拭は宿へ忘れて來たのが殘念だが今日は先方で借りるとしよう。

夫から可也ゆるりと、出たり這入つたりして、漸く日暮方になつたから、汽車へ乘つて古町の停車場迄來て下りた。學校迄は是から四丁だ。譯はないとあるき出すと、向うから狸が來た。狸は是から此汽車で温泉へ行かうと云ふ計畫なんだらう。すた〳〵急ぎ足にやつてきたが、擦れ違つた時おれの顔を見たから、一寸挨拶をした。すると狸はあなたは今日は宿直ではなかつたですかねえと眞面目くさつて聞いた。無かつたですかねえもないもんだ。二時間前おれに向つて今夜は始めての宿直ですね。御苦勞さま。と禮を云つたぢやないか。校長なんかになるといやに曲がりくねつた言葉を使ふもんだ。おれは腹が立つたから、えゝ宿直です、宿直ですから、是から歸つて泊まる事は慥かに泊まりますと云ひ捨てゝ澄まして歩き出した。竪

町の四つ角迄くると今度は山嵐に出喰はした。どうも狭い所だ。出てあるきさへすれば必ず誰かに逢ふ。「おい君は宿直ぢやないか」と聞くから「うん、宿直だ」と答へたら、「宿直が無暗に出てあるくなんて、不都合ぢやないか」と云つた。「些とも不都合なもんか、出てあるかない方が不都合だ」と威張つて見せた。「君のずぼらにも困るな、校長か教頭に出逢ふと面倒だぜ」と山嵐に似合はない事を云ふから「校長にはたつた今逢つた。暑い時には散歩でもしないと宿直も骨でせうと校長が、おれの散歩をほめたよ」と云つて、面倒臭いから、さつさと學校へ歸つて來た。

夫から日はすぐくれる。暮れてから二時間許りは小使を宿直部屋へ呼んで話しをしたが夫も飽きたから、寐られない迄も床へ這入らうと思つて、寐卷に着換へて、蚊帳を捲くつて、赤い毛布を跳ねのけて、頓と尻持を突いて仰向けになつた。おれが寐る時に頓と尻持をつくのは子供の時からの癖だ。わるい癖だと云つて小川町の下宿に居た時分、二階下に居た法律學校の書生が苦情を持ち込んだ事がある。法律の書生なんてものは弱い癖に、やに口が達者なもので、愚な事を長たらしく述べ立てるから、寐る時にどん／＼音がするのはおれの尻がわるいのぢやない。下宿の建築が粗末なんだ。掛け合ふなら下宿へ掛け合へと凹ましてやつた。此宿直部屋は二階ぢやないから、幾ら、どしんと倒れても構はない。成る可く勢よく倒れないと寐た樣な心持ちがしない。あゝ愉快だと足をうんと延ばすと、何だか兩足へ飛び付いた。ざら／＼して蚤の樣でもないからこいつあと驚いて、足を二三度毛布の中で振つて見た。するとざら／＼と當たつた物が、急に殖え出して脛が五六ケ所、股が二三ケ所、尻の下でぐちやりと踏み潰したのが一つ、臍の所迄飛び上がつたのが一つ——愈驚いた。早速起き上がつて、毛布をぱつと後ろへ抛ると、蒲團の中から、バツタが五六十飛び出した。正體の知れない時は多少氣味が惡かつたが、バツタと相場が極まつて見たら急に腹が立つた。バツタの癖に人を驚かしやがつて、どうするか見ろといきなり括り枕を取つて、二三度擲きつけたが、相手が小さ過ぎるから勢よく抛げつける割に利目がない。仕方がないから、又蒲團の上へ坐つて、煤掃の時に蓙を丸めて疊を叩く樣に、そこら近邊を無暗にたゝいた。バツタが驚いた上に、枕の勢で飛び上がるものだから、おれの肩だの頭だの鼻の先だのへくつ付いたり、ぶつかつたりする。頭へ附いた奴は枕で叩く譯に行かないから、手で攫んで、一生懸命に擲きつける。忌々しい事に、いくら力を出しても、ぶつかる先が蚊帳だから、ふわりと動く丈で少しも手答へがない。バツタは擲きつけられた儘蚊帳へつらまつて居る。死にもどうもしない。漸くの事に三十分許りでバツタは退治た。箒を持つて來てバツタの死骸を掃き出した。小使が來て何ですかと云ふから、何ですかもあるもんか、バツタを床の中に飼つとく奴がどこの國にある。間抜め。と叱つたら、私は存じませんと辯解をした。存じませんで濟むかと箒を椽側へ抛り出したら、小使は恐る／＼箒を擔いで歸つて行つた。

おれは早速寄宿生を三人ばかり總代に呼び出した。すると六人出て來た。六人だらうが十人だらうが構ふものか。寐卷の儘腕まくりをして談判を始めた。

「なんでバツタなんか、おれの床の中へ入れた」

「バツタた何ぞな」と眞先の一人がいつた。やに落ち附いて居やがる。此學校ぢや校長ばかりぢやない生徒迄曲がりくねつた言葉を使ふんだらう。

「バッタを知らないのか、知らなけりや見せてやろふ」と云つたが、生憎掃き出して仕舞つて一匹も居ない。又小使を呼んで、「さつきのバッタを持つてこい」と云つたら、「もう掃溜へ棄ててしまひましたが、拾つて参りませうか」と聞いた。「うんすぐ拾つて来い」と云ふと小使は急いで駈け出したが、やがて半紙の上へ十匹許り載せて来て「どうも御気の毒ですが、生憎夜で是丈しか見当りません。あしたになりましたらもつと拾つて参ります」と云ふ。小使迄馬鹿だ。おれはバッタの一つを生徒に見せて「バッタた是だ、大きなづう体をして、バッタを知らないた、何の事だ」と云ふと、一番左の方に居た顔の丸い奴が「そりや、イナゴぞな、もし」と生意気におれを遣り込めた。「篦棒め、イナゴもバッタも同じもんだ。第一先生を捕まへてなもした何だ。菜飯は田楽の時より外に食ふもんぢやない」とあべこべに遣り込めてやつたら「なもしと菜飯とは違ふぞな、もし」と云つた。いつ迄行つてもなもしを使ふ奴だ。

「イナゴでもバッタでも、何でおれの床の中へ入れたんだ。おれがいつ、バッタを入れて呉れと頼んだ」

「誰も入れやせんがな」

「入れないものが、どうして床の中に居るんだ」

「イナゴは温い所が好きぢやけれ、大方一人で御這入りたのぢやあろ」

「馬鹿あ云へ。バッタが一人で御這入りになるなんて――バッタに御這入りになられてたまるもんか。――さあなぜこんないたづらをしたか、云へ」

「云へてゝ、入れんものを説明しやうがないがな」

けちな奴等だ、自分のした事が云へない位なら、てんで仕ないがいゝ。証拠さへ挙がらなければ、しらを切る積りで図太く構へて居やがる。おれだつて中学に居た時分は少しはいたづらもしたもんだ。然しだれがしたと聞かれた時に、尻込みをする様な卑怯な事は只の一度もなかつた。仕たものは仕たので、仕ないものは仕ないに極まつてる。おれなんぞは、いくら、いたづらをしたつて潔白なものだ。嘘を吐いて罰を逃げる位なら、始めからいたづらなんかやるものか。いたづらと罰はつきもんだ。罰があるからいたづらも心持ちよく出来る。いたづら丈で罰は御免蒙るなんて下劣な根性がどこの国に流行ると思つてるんだ。金は借りるが、返す事は御免だと云ふ連中はみんな、こんな奴等が卒業してやる仕事に相違ない。全体中学校へ何しに這入つてるんだ。学校へ這入つて、嘘を吐いて、胡魔化して、陰でこせ／＼生意気な悪いたづらをして、さうして大きな面で卒業すれば教育を受けたもんだと癇違ひをして居やがる。話せない雑兵だ。

おれはこんな腐つた了見の奴等と談判するのは胸糞が悪いから、「そんなに云はれなきや、聞かなくつていゝ。中学校へ這入つて、上品も下品も区別が出来ないのは気の毒なものだ」と云つて六人を逐つ放してやつた。おれは言葉や様子こそ余り上品ぢやないが、心はこいつらよりも遥かに上品な積りだ。六人は悠々と引き揚げた。上部丈は教師のおれより余つ程えらく見える。実は落ち附いて居る丈猶悪い。おれには到底是程の度胸はない。

夫から又床へ這入つて横になつたら、さつきの騒動で蚊帳の中はぶん／＼唸つて居る。手燭をつけて一匹宛焼くなんて面倒な事は出来ないから、釣手をはづして、長く畳んで置いて部屋の中で横竪十文字に振つたら、環が飛んで手の甲をいやと云ふ程撲つた。三度目に床へ這入つた時は少々落ち附いたが中々寝られない。時計

を見ると十時半だ。考へて見ると厄介な所へ來たものだ。一體中學の先生なんて、どこへ行つても、こんなものを相手にするなら氣の毒なものだ。よく先生が品切れにならない。余つ程辛抱強い朴念仁がなるんだらう。おれには到底やり切れない。それを思ふと淸なんてのは見上げたものだ。敎育もない身分もない婆さんだが、人間としては頗る尊い。今迄はあんなに世話になつて別段難有いとも思はなかつたが、かうして一人で遠國へ來て見ると、始めてあの親切がわかる。越後の笹飴が食ひたければ、わざわざ越後迄買ひに行つて食はしてやつても、食はせる丈の價値は充分ある。淸はおれの事を慾がなくつて、眞直な氣性だと云つてほめるが、ほめられるおれよりも、ほめる本人の方が立派な人間だ。何だか淸に逢ひたくなつた。

淸の事を考へながら、のつそつして居ると、突然おれの頭の上で、數で云つたら三四十人もあらうか、二階が落つこちる程どん、どん、どんと拍子を取つて床板を踏みならす音がした。すると足音に比例した大きな鬨の聲が起こつた。おれは何事が持ち上がつたのかと驚いて飛び起きた。飛び起きる途端に、はゝあさつきの意趣返しに生徒があばれるのだなと氣がついた。手前のわるい事は惡かつたと言つて仕舞はないうちは罪は消えないもんだ。わるい事は、手前達に覺えがあるだらう。本來なら寢てから後悔してあしたの朝でも謝りに來るのが本筋だ。たとひ、あやまらない迄も恐れ入つて、靜肅に寢て居るべきだ。それを何だ此騷ぎは。寄宿舍を建てて豚でも飼つて置きやあしまいし。氣狂ひじみた眞似も大抵にするがいゝ。どうするか見ろと、寢卷の儘宿直部屋を飛び出して、梯子段を三股半に二階迄躍り上がつた。すると不思議な事に、今迄頭の上で、確かにどたばた暴れて居たのが、急に靜まり返つて、人聲所か足音もしなくなつた。是は妙だ。ランプは既に消してあるから、暗くてどこに何が居るか判然と分らないが、人氣のあるとないとは樣子でも知れる。長く東から西へ貫いた廊下には鼠一匹も隱れて居ない。廊下のはづれから月がさして、遙か向うが際どく明るい。どうも變だ、己は子供の時から、よく夢を見る癖があつて、夢中に跳ね起きて、わからぬ寢言を云つて、人に笑はれた事がよくある。十六七の時ダイヤモンドを拾つた夢を見た晩なぞは、むくり立ち上がつて、そばに居た兄に、今のダイヤモンドはどうしたと非常な勢で尋ねた位だ。其時は三日ばかりうち中の笑ひ草になつて大いに弱つた。ことによると今のも夢かも知れない。然し確かにあばれたに違ひないがと、廊下の眞中で考へ込んで居ると、月のさして居る向ふのはづれで、一二三わあと、三四十人の聲がかたまつて響いたかと思ふ間もなく、前の樣に拍子を取つて、一同が床板を踏み鳴らした。夫見ろ夢ぢやない矢張り事實だ。靜かにしろ、夜なかだぞ、とこつちも負けん位な聲を出して、廊下を向ふへ駈けだした。おれの通る路は暗い、只はづれに見える月あかりが目標だ。おれが駈け出して、二間も來たかと思ふと、廊下の眞中で、堅い大きなものに向脛をぶつけて、あ、痛いが頭へひびく間に、身體はすとんと前へ抛り出された。こん畜生と起き上がつて見たが、馳けられない。氣はせくが、足丈は云ふ事を利かない。じれつたいから、一本足で飛んで來たら、もう足音も人聲も靜まり返つて、森として居る。いくら人間が卑怯だつて、こんなに卑怯に出來る者ぢやない。まるで豚だ。かうなれば隱れて居る奴を引きずり出してあやまらせてやる迄はひかないぞと、心を極めて寢室の一つを開けて中を檢査しようと思つたが、開かない。錠をかけてあるのか、机か何か積んで立て懸けてあるの

か、押しても押しても、決して開かない。今度は向う合せの北側の室を試みた。開かない事は矢っ張り同然である。おれが戸をあけて中に居る奴を引っ捕まへてやらうと焦慮つてると、又東のはづれで鬨の聲と足拍子が始まつた。此野郎申し合せて、東西相應じておれを馬鹿にする氣だな、とは思つたが偖てどうしていゝか分らない。正直に白狀してしまふが、おれは勇氣のある割合に智慧が足りない。こんな時にはどうしていゝか薩張りわからない。わからないけれども、決して負ける積りはない。此儘に濟ましてはおれの顔にかゝはる。江戸つ子は意氣地がないと云はれるのは殘念だ。宿直をして鼻垂れ小僧にからかはれて、手のつけ樣がなくつて、仕方がないから泣き寐入りにしたと思はれちや一生の名折れだ。是でも元は旗本だ。旗本の元は清和源氏で、多田の滿仲の後裔だ。こんな土百姓とは生れからして違ふんだ。只智慧のない所が惜しい丈だ。どうしていゝか分らないのが困る丈だ。困つたつて負けるものか。正直だから、どうしていゝか分らないんだ。世の中に正直が勝たないで、外に勝つものがあるか、考へて見ろ。今夜中に勝てなければ、あした勝つ。あした勝てなければ、あさつて勝つ。あさつて勝てなければ、下宿から辨當を取り寄せて勝つ迄こゝに居る。おれはかう決心をしたから、廊下の眞中にあぐらをかいて夜のあけるのを待つて居た。蚊がぶん／＼來たけれども何ともなかつた。さつき、ぶつけた向脛を撫でゝ見ると、何だかぬら／＼する。血が出るんだらう。血なんか出たければ勝手に出るがいゝ。其うち最前からの疲れが出て、ついうとうと寐て仕舞つた。何だか騒がしいので、眼が覺めた時はえつ糞しまつたと飛び上がつた。おれの坐つてた右側にある戸が半分あいて、生徒が二人おれの前に立つて居る。おれは正氣に返つて、はつと思ふ途端に、おれの鼻の先にある生徒の足を引つ攫んで、力任せにぐいと引いたら、そいつは、どたりと仰向けに倒れた。ざまを見ろ。殘る一人が一寸狼狽した所を、飛びかかつて、肩を抑へて二三度こづき廻したら、あつけに取られて、眼をぱち／＼させた。さあおれの部屋へ來いと引つ立てると、弱虫だと見えて、一も二もなく尾いて來た。夜はとうにあけて居る。

おれが宿直部屋へ連れて來た奴を詰問し始めると、豚は打つても擲いても豚だから、只知らんがなで、どこ迄も通す了見と見えて、決して白狀しない。其うち一人來る、二人來る、段々二階から宿直部屋へ集まつてくる。見るとみんな眠さうに瞼をはらして居る。けちな奴等だ。一晩位寐ないで、そんな面をして男と云はれるか。面でも洗つて議論に來いと云つてやつたが、誰も面を洗ひに行かない。

おれは五十人餘りを相手に約一時間許り押問答をして居ると、ひよつくり狸がやつて來た。あとから聞いたら、小使が學校に騒動がありますつて、わざ／＼知らせに行つたのださうだ。是しきの事に、校長を呼ぶなんて意氣地がなさ過ぎる。夫だから中學校の小使なんぞをしてるんだ。

校長は一通りおれの說明を聞いた。生徒の言草も一寸聞いた。追つて處分する迄は、今迄通り學校へ出ろ。早く顔を洗つて、朝飯を食はないと時間に間に合はないから、早くしろと云つて寄宿生をみんな放免した。手溫い事だ。おれなら即席に寄宿生を悉く退校して仕舞ふ。こんな悠長なことをするから生徒が宿直員を馬鹿にするんだ。其上おれに向つて、あなたも嘸御心配で御疲れでせう、今日は御授業に及ばんと云ふから、おれはかう答へた。――いえ、ちつとも心配ぢやありません。こんな事が毎晩あつ

ても命のある間は心配にやなりません。授業はやります、一晩位寐なくつて授業が出來ない位なら、頂戴した月給を學校の方へ割戻します。校長は何と思つたものか、暫らくおれの顏を見詰めて居たが、然し顏が大分はれて居ますよと注意した。成程何だか少々重たい氣がする。其上べた一面痒い。蚊が余つ程刺したに相違ない。おれは顏中ぼりぼり搔きながら、顏はいくら腫れたつて、口は慥かにきけますから、授業には差し支へませんと答へた。校長は笑ひながら、大分元氣ですねと賞めた。實を云ふと賞めたんぢやあるまい、ひやかしたんだらう。

五

君釣に行きませんかと赤シャツがおれに聞いた。赤シャツは氣味の惡い様に優しい聲を出す男である。丸で男だか女だか分りやしない。男なら男らしい聲を出すもんだ。ことに大學卒業生ぢやないか。物理學校でさへおれ位な聲が出るのに、文學士がこれぢや見つともない。

おれはさうですなあと少し進まない返事をしたら、君釣をした事がありますかと失敬な事を聞く。あんまりないが、子供の時、小梅の釣堀で鮒を三匹釣つた事がある。夫から神樂坂の毘沙門の縁日で八寸許りの鯉を針で引つ懸けて、しめたと思つたら、ぼちやりと落として仕舞つたが、是は今考へても惜しいと云つたら、赤シャツは顋を前の方へ突き出してホヽヽヽと笑つた。何もさう氣取つて笑はなくつても、よささうな者だ。「夫ぢや、まだ釣の味は分らんですな。御望みならちと傳授しませう」と頗る得意である。だれが御傳授をうけるものか。一體釣や獵をする連中はみんな不人情な人間ばかりだ。不人情でなくつて、殺生をして喜ぶ譯がない。魚だつて、鳥だつて殺されるより生きてる方が樂に極まつてる。釣や獵をしなくつちや活計がたゝないなら格別だが、何不足なく暮らして居る上に、生き物を殺さなくつちや寐られないなんて贅澤な話だ。かう思つたが向うは文學士丈に口が達者だから、議論ぢや叶はないと思つて、だまつてた。すると先生此おれを降參させたと癇違ひして、早速傳授しませう。御ひまなら、今日どうです、一所に行つちや。吉川君と二人ぎりぢや、淋しいから、來給へとしきりに勸める。吉川君と云ふのは畫學の教師で例の野だいこの事だ。此野だは、どういふ了見だか、赤シャツのうちへ朝夕出入して、どこへでも隨行して行く。丸で同輩ぢやない。主從見た樣だ。赤シャツの行く所なら、野だは必ず行くに極まつて居るんだから、今更驚きもしないが、二人で行けば濟む所を、なんで無愛想のおれへ口を掛けたんだらう。大方高慢ちきな釣道樂で、自分の釣る所をおれに見せびらかす積りかなんかで誘つたに違ひない。そんな事で見せびらかされるおれぢやない。鮪の二匹や三匹釣つたつて、びくともするもんか。おれだつて人間だ、いくら下手だつて絲さへ卸しや、何かかゝるだらう、こゝでおれが行かないと、赤シャツの事だから、下手だから行かないんだ、嫌ひだから行かないんぢやないと邪推するに相違ない。おれはかう考へたから、行きませうと答へた。それから、學校を仕舞つて、一應うちへ歸つて、支度を整へて、停車場で赤シャツと野だを待ち合せて濱へ行つた。船頭は一人で、舟は細長い東京邊では見た事もない恰好である。さつきから船中見渡すが釣竿が一本も見えない。釣竿なしで釣が出來るものか、どうする量見だらうと野だに聞くと、沖釣には竿は用ひません、絲丈でげすと顋を撫でゝ黒人じみた事を云つた。かう遣り込められる位ならだまつて居れば宜かつた。

船頭はゆつくり〳〵漕いでゐるが熟練は恐ろしいもので、見返ると、濱が小さく見える位もう出てゐる。高柏寺の五重の塔が森の上へ拔け出して針の様に尖がつてる。向う側を見ると青島が浮いてゐる。是は人の住まない島ださうだ。よく見ると石と松ばかりだ。成程石と松ばかりぢや住めつこない。赤シャツは、しきりに眺望していゝ景色だと云つてる。野だは絶景でげすと云つてゐる。絶景だか何だか知らないが、いゝ心持ちには相違ない。ひろ〳〵とした海の上で、潮風に吹かれるのは薬だと思つた。いやに腹が減る。「あの松を見給へ、幹が眞直で、上が傘の様に開いてターナーの畫にありさうだね」と赤シャツが野だに云ふと、野だは「全くターナーですね。どうもあの曲り具合つたらありませんね。ターナーそつくりですよ」と心得顔である。ターナーとは何の事だか知らないが、聞かないでも困らない事だから默つて居た。舟は島を右に見てぐるりと廻つた。波は全くない。是で海だとは受け取りにくい程平だ。赤シャツの御蔭で甚だ愉快だ。出來る事なら、あの島の上へ上がつて見たいと思つたから、あの岩のある所へは舟はつけられないんですかと聞いて見た。つけられん事もないですが、釣をするには、あまり岸ぢやいけないですと赤シャツが異議を申し立てた。おれは默つてた。すると野だがどうです教頭、是からあの島をターナー島と名づけようぢやありませんかと余計な發議をした。赤シャツはそいつは面白い、吾々は是からさう云はうと賛成した。此吾々のうちにおれも這入つてるなら迷惑だ。おれには青島で澤山だ。あの岩の上に、どうです、ラフアエルのマドンナを置いちや。いゝ畫が出來ますぜと野だが云ふと、マドンナの話しはよさうぢやないかホヽヽと赤シャツが氣味の悪い笑ひ方をした。なに誰も居ないから大丈夫ですと、一寸おれの方を見たが、わざと顔をそむけてにやにやと笑つた。おれは何だかいやな心持ちがした。マドンナだらうが、小旦那だらうが、おれの關係した事でないから、勝手に立たせるがよからうが、人に分らない事を言つて分らないから聞いたつて構やしませんて云ふ様な風をする。下品な仕草だ。是で當人は私も江戸つ子でげすと云つてる。マドンナと云ふのは何でも赤シャツの馴染の藝者の渾名か何かに違ひないと思つた。なじみの藝者を無人島の松の木の下に立たして眺めて居れば世話はない。夫を野だが油繪にでもかいて展覧會へ出したらよからう。

此所らがいゝだらうと船頭は舟をとめて、錨を卸した。幾尋あるかねと赤シャツが聞くと、六尋位だと云ふ。六尋位ぢや鯛は六づかしいなと、赤シャツは絲を海へなげ込んだ。大將鯛を釣る氣と見える、豪膽なものだ。野だは、なに教頭の御手際ぢやかゝりますよ。それになぎですからと御世辭を云ひながら、是も絲を繰り出して投げ入れる。何だか先に錘の様な鉛がぶら下がつてる丈だ。浮がない。浮がなくつて釣をするのは寒暖計なしで熱度をはかる様なものだ。おれには到底出來ないと見てゐると、さあ君もやり玉へ絲はありますかと聞く。絲はあまる程あるが、浮がありませんと云つたら、浮がなくつちや釣が出來ないのは素人ですよ。かうしてね、絲が水底へついた時分に、舷の所で人指しゆびで呼吸をはかるんです、食ふとすぐ手に答へる。そらきた、と先生急に絲をたぐり始めるから、何がかゝつたかと思つたら何もかからない、餌がなくなつてた許りだ。いゝ氣味だ。教頭、殘念な事をしましたね、今のは慥かに大ものに違ひなかつたんですが、どうも教頭の御手際でさへ逃げられちや、今日は油斷が出來ませんよ。然し逃げられても何ですね。浮と

睨めくらをしてゐる連中よりはましですね。丁度齒どめがなくつちや自轉車へ乘れないのと同程度ですからねと、野だは妙な事ばかり喋舌る。よつぽど撲りつけてやらうかと思つた。おれだつて人間だ、教頭ひとりで借り切つた海ぢやあるまいし。廣い所だ。鰹の一匹位義理にだつてかゝつて呉れるだらうと、どぼんと錘と絲を抛り込んでいゝ加減に指の先であやつつてゐた。

しばらくすると、何だかピク〳〵と絲にあたるものがある。おれは考へた。こいつは魚に相違ない。生きてるものでなくちや、かうピクつく譯はない。しめた、釣れたとぐい〳〵手繰り寄せた。おや釣れましたかね、後世恐るべしだと野だがひやかすうち、絲はもう大概手繰り込んで只五尺ばかり程しか、水に浸いて居らん。船縁から覗いて見たら、金魚の様な縞のある魚が絲にくつついて左右に漾ひ乍ら、手に應じて浮き上がつてくる。面白い。水際から上げるとき、ポチヤリと跳ねたから、おれの顔は潮水だらけになつた。漸くつらまへて針をとらうとするが中々取れない。捕まへた手はぬるぬるする。大いに氣味がわるい。面倒だから絲を振つて胴の間へ擲きつけたら、すぐ死んで仕舞つた。赤シヤツと野だは驚いて見てゐる。おれは海の中で手をざぶ〳〵と洗つて、鼻の先へあてがつて見た。まだ腥臭い。もう懲り〳〵だ、何が釣れたつて魚は握りたくない。魚も握られたくなからう。さう〳〵絲を捲いて仕舞つた。

一番槍は御手柄だがゴルキぢや、と野だが又生意氣を云ふと、ゴルキと云ふと露西亞の文學者見た様な名だねと赤シヤツが洒落た。さうですね、丸で露西亞の文學者ですねと野だはすぐ贊成しやがる。ゴルキが露西亞の文學者で、丸木が芝の寫眞師で、米のなる木が命の親だらう。一體此赤シヤツはわるい癖だ。誰を捕まへても片假名の唐人の名を並べたがる。人には夫々專門があつたものだ。おれの様な數學の教師にゴルキだか車力だか見當がつくものか、少しは遠慮するがいゝ。云ふならフランクリンの自傳だとかプッシング・ツー・ゼ・フロントだとか、おれでも知つてる名を使ふがいゝ。赤シヤツは時々帝國文學とか云ふ眞赤な雜誌を學校へ持つて來て難有さうに讀んでゐる。山嵐に聞いて見たら、赤シヤツの片假名はみんなあの雜誌から出るんださうだ。帝國文學も罪な雜誌だ。

それから赤シヤツと野だは一生懸命に釣つて居たが、約一時間許りのうちに二人で十五六上げた。可笑しい事に釣れるのも、釣れるのも、みんなゴルキ許りだ。鯛なんて藥にしたくつてもありやしない。今日は露西亞文學の大當りだと赤シヤツが野だに話してゐる。あなたの手腕でゴルキなんですから、私なんぞがゴルキなのは仕方がありません。當り前ですなと野だが答へてゐる。船頭に聞くと此小魚は骨が多くつて、まづくつて、とても食べられないんださうだ。只肥料には出來るさうだ。赤シヤツと野だは一生懸命に肥料を釣つて居るんだ。氣の毒の至りだ。おれは一匹で懲りたから、胴の間へ仰向けになつて、さつきから大空を眺めて居た。釣をするより此方が餘程洒落て居る。

すると二人は小聲で何か話しを始めた。おれにはよく聞こえない、又聞きたくもない。おれは空を見ながら清の事を考へて居る。金があつて、清をつれて、こんな綺麗な所へ遊びに來たら嘸愉快だらう。いくら景色がよくつても野だ抔と一所ぢや詰まらない。清は皺苦茶だらけの婆さんだが、どんな所へ連れて出たつて恥づかしい心持ちはしない。野だの様なのは、馬車に乘らうが、船に乘らうが、凌雲閣へのらうが、到底寄り附けたものぢやない。おれが教頭で赤

シャツがおれだつたら、矢つ張りおれにへけつけ御世辭を使つて赤シャツを冷かすに違ひない。江戸つ子は輕薄だと云ふが成程こんなものが田舍巡りをして、私は江戸つ子でげすを繰返して居たら、輕薄は江戸つ子で、江戸つ子は輕薄の事だと田舍者が思ふに極まつてる。こんな事を考へて居ると、何だか二人がくす〳〵笑ひ出した。笑ひ聲の間に何か云ふが、途切れ〳〵でとんと要領を得ない。「えゝ？　どうだか……」「……全くです……知らないんですから……罰ですね」「まさか……」「バッタを……本當ですよ」

おれは外の言葉には耳を傾けなかつたが、バッタと云ふ野だの語を聽いた時は、思はず乾となつた。野だは何の爲かバッタと云ふ言葉丈ことさら力を入れて、明瞭におれの耳に這入る樣にして、其あとをわざとぼかして仕舞つた。おれは動かないで矢張り聞いて居た。

「又例の堀田が……」「さうかも知れない……」

「天麩羅……ハヽヽヽ」「……煽動して……」

「團子も？……」

言葉は斯樣に途切れ〳〵であるけれども、バッタだの、天麩羅だの、團子だのと云ふ所を以て推し測つて見ると、何でもおれのことに就いて内所話しをして居るに相違ない。話すならもつと大きな聲で話すがいゝ、又内所話しをする位なら、おれなんか誘はなければいゝ。いけ好かない連中だ。バッタだらうが雪踏だらうが、非はおれにある事ぢやない。校長が一先づあづけろと云つたから、狸の顏にめんじて只今の所は控へて居るんだ。野だの癖に入らぬ批評をしやがる。毛筆でもしやぶつて引つ込んでるがいゝ。おれの事は遲かれ早かれ、おれ一人で片附けて見せるから差支へはないが、又例の堀田がとか煽動してとか云ふ文句が氣にかゝる。堀田がおれを煽動して騷動を大きくしたと云ふ意味なのか、或は堀田が生徒を煽動しておれをいぢめたと云ふのか方角がわからない。青空を見て居ると、日の光が段々弱つて來て、少しはひやりとする風が吹き出した。線香の烟の樣な雲が、透き徹る底の上を靜かに伸して行つたと思つたら、いつしか底の奧に流れ込んで、うすくもやを掛けた樣になつた。

もう歸らうかと赤シャツが思ひ出した樣に云ふと、えゝ丁度時分ですね。今夜はマドンナの君に御逢ひですかと野だが云ふ。赤シャツは馬鹿あ云つちやいけない、間違ひになると、船縁に身を倚たした奴を、少し起き直る。エヘヽヽ大丈夫ですよ。聞いたつて……」と野だが振り返つた時、おれは皿の樣な眼を野だの頭の上へまともに浴びせ掛けてやつた。野だはまぼしさうに引つ繰り返つて、や、こいつは降參だと首を縮めて、頭を掻いた。何といふ猪口才だらう。

船は靜かな海を岸へ漕ぎ戻る。君釣はあまり好きでないと見えますねと赤シャツが聞くから、えゝ寐て居て空を見る方がいゝですと答へて、吸ひかけた卷烟草を海の中へたゝき込んだら、ジュと音がして櫓の足で掻き分けられた浪の上を搖られながら漾つていつた。「君が來たんで生徒も大いに喜んで居るから、奮發してやつて呉れ給へ」と今度は釣には丸で縁故もない事を云ひ出した。「あんまり喜んでも居ないでせう」「いえ、御世辭ぢやない。全く喜んで居るんです、ね、吉川君」「喜んでる所ぢやない。大騷ぎです」と野だはにや〳〵と笑つた。こいつの云ふ事は一々癪に障るから妙だ。「然し君注意しないと、險呑ですよ」と赤シャツが云ふから「どうせ險呑です。かうなりや險呑は覺悟です」と云つてやつた。實際おれは免職になるか、寄宿生を悉くあやまらせるか、どつちか一つにする了見で居た。「さう云つちや、取りつき所もないが——實は僕も敎頭として君の爲を思ふか

ら云ふんだから、わるく取つちや困る」「教頭は全く君に好意を持つてるんですよ。僕も及ばずながら、同じ江戸つ子だから、成可長く御在校を願つて、御互に力にならうと思つて、是でも蔭ながら盡力して居るんですよ」と野だが人間並の事を云つた。野だの御世話になる位なら首を縊つて死んぢまはあ。

「夫でね、生徒は君の來たのを大變歡迎して居るんだが、そこには色々の事情があつてね。君も腹の立つ事もあるだらうが、こゝが我慢だと思つて、辛抱してくれ玉へ。決して君の爲にならない樣な事はしないから」

「色々の事情た、どんな事情です」

「夫が少し込み入つてるんだが、まあ段々分りますよ。僕が話さないでも自然と分つて來るです、ね吉川君」

「えゝ中々込み入つてますからね。一朝一夕にや到底分りません。然し段々分ります、僕が話さないでも自然と分つて來るです」と野だは赤シャツと同じ樣な事を云ふ。

「そんな面倒な事情なら聞かなくてもいゝんですが、あなたの方から話し出したから伺ふんです」

「そりや御尤もだ。こつちで口を切つて、あとをつけないのは無責任ですね。夫ぢや是丈の事を云つて置きませう。あなたは失禮ながら、まだ學校を卒業したてで、教師は始めての經驗である。所が學校と云ふものは中々情實のあるもので、さう書生流に淡泊には行かないですからね」

「淡泊に行かなければ、どんな風に行くんです」

「さあ君はさう率直だから、まだ經驗に乏しいと云ふんですがね……」

「どうせ經驗には乏しい筈です。履歴書にも書いときましたが二十三年四ケ月ですから」

「さ、そこで思はぬ邊から乘ぜられる事があるんです」

「正直にして居れば誰が乘じたつて怖くはないです」

「無論怖くはない、怖くはないが、乘ぜられる。現に君の前任者がやられたんだから、氣を附けないといけないと云ふんです」

野だが大人しくなつたなと氣が附いてふり向いて見ると、いつしか艫の方で船頭と釣の話しをして居る。野だが居ないんで餘つ程話しよくなつた。

「僕の前任者が、誰に乘ぜられたんです」

「だれと指すと、其人の名譽に關係するから云へない。又判然と證據のない事だから云ふと此方の落度になる。とにかく、折角君が來たもんだから、こゝで失敗しちや僕等も君を呼んだ甲斐がない、どうか氣を附けてくれ玉へ」

「氣をつけろつたつて、是より氣の附け樣はありません。わるい事をしなけりや好いんでせう」

赤シャツはホヽヽヽと笑つた。別段おれは笑はれる樣な事を云つた覺えはない。今日只今に至る迄是でいゝと堅く信じて居る。考へて見ると世間の大部分の人はわるくなる事を奬勵して居る樣に思ふ。わるくならなければ社會に成功はしないものと信じて居るらしい。たまに正直な純粹な人を見ると、坊つちやんだの小僧だのと難癖をつけて輕蔑する。夫ぢや小學校や中學校で嘘をつくな、正直にしろと倫理の先生が教へない方がいゝ。いつそ思ひ切つて學校で嘘をつく法とか、人を信じない術とか、人を乘せる策を教授する方が、世の爲にも當人の爲にもなるだらう。赤シャツがホヽヽヽと笑つたのは、おれの單純なのを笑つたのだ。單純や眞率が笑はれる世の中ぢや仕樣がない。清はこんな時に決して笑つた事はない。大いに感心し

て聞いたもんだ。清の方が赤シャツより餘つ程上等だ。

「無論惡い事をしなければ好いんですが、自分丈惡い事をしなくつても、人の惡いのが分らなくつちや、矢つ張りひどい目に逢ふでせう。世の中には磊落な様に見えても、淡泊な様に見えても、親切に下宿の世話なんかしてくれても、油斷の出來ないのがありますから……。大分寒くなつた。もう秋ですね、濱の方は靄でセピヤ色になつた。いゝ景色だ。おい、吉川君どうだい、あの濱の景色は……」と大きな聲を出して野だを呼んだ。「なある程こりや奇絶ですね。時間があると寫生するんだが、惜しいですね、此儘にしておくのは」と野だは大いにたゝく。

港屋の二階に灯が一つついて、汽車の笛がピューと鳴るとき、おれの乘つて居た舟は礒の砂へざぐりと、舳をつき込んで動かなくなつた。御早う御歸りと、かみさんが、濱に立つて赤シャツに挨拶する。おれは船端から、やつと掛聲をして礒へ飛び下りた。

六

野だは大嫌ひだ。こんな奴は澤庵石をつけて海の底へ沈めちまふ方が日本の爲だ。赤シャツは聲が氣に食はない。あれは持前の聲をわざと氣取つてあんな優しい様に見せてるんだらう。いくら氣取つたつて、あの面ぢや駄目だ。惚れるものがあつたつてマドンナ位なものだ。然し教頭丈に野だより六づかしい事を云ふ。うちへ歸つて、彼奴の申し條を考へて見ると一應尤もの様でもある。判然とした事は云はないから、見當がつきかねるが、何でも山嵐がよくない奴だから用心しろと云ふのらしい。それならさうと確乎斷言するがいゝ、男らしくもない。さうして、そんな惡い教師なら、早く免職さしたらよからう。教頭なんて文學士の癖に意氣地のないもんだ。蔭口をきくのでさへ、公然と名前が云へない位な男だから、弱蟲に極まつてる。弱蟲は親切なものだから、あの赤シャツも女の様な親切ものなんだらう。親切は親切、聲は聲だから、聲が氣に入らないつて、親切を無にしちや筋が違ふ。夫にしても世の中は不思議なものだ、蟲の好かない奴が親切で、氣の合つた友達が惡漢だなんて、人を馬鹿にして居る。大方田舍だから萬事東京のさかに行くんだらう。物騒な所だ。今に火事が氷つて、石が豆腐になるかも知れない。然し、あの山嵐が生徒を煽動するなんて、いたづらをしさうもないがな。一番人望のある教師だと云ふから、やらうと思つたら大抵の事は出來るかも知れないが、――第一そんな廻りくどい事をしないでも、ぢかにおれを捕まへて喧嘩を吹き懸けりや手數が省ける譯だ。おれが邪魔になるなら、實は是々だ、邪魔だから辭職してくれと云や、よささうなもんだ。物は相談づくでどうでもなる。向ふの云ひ條が尤もなら、明日にでも辭職してやる。こゝ許り米が出來る譯でもあるまい。どこの果へ行つたつて、のたれ死はしない積りだ。山嵐も余つ程話せない奴だな。

こゝへ來た時第一番に氷水を奢つたのは山嵐だ。そんな裏表のある奴から、氷水でも奢つてもらつちや、おれの顔に關る。おれはたつた一杯しか飲まなかつたから一錢五厘しか拂はしやしない。然し一錢だらうが五厘だらうが、詐欺師の恩になつては、死ぬ迄心持ちがよくない。あした學校へ行つたら、一錢五厘返して置かう。おれは清から三圓借りて居る。其三圓は五年經つた今日迄まだ返さない。返せないんぢやない、返さないんだ。清は今に返すだらう抔と、苟めにもおれの懐中をあてにはして居ない。おれも今に返さう抔と他人がましい義理立てはしない積りだ。こつちがこんな心配をすれ

ばする程清の心を疑ぐる樣なもので、清の美しい心にけちを附けると同じ事になる。返さないのは清を踏みつけるのぢやない、清をおれの片破れと思ふからだ。清と山嵐とは固より比べ物にならないが、たとひ氷水だらうが、甘茶だらうが、他人から恵を受けて、だまつて居るのは向うを一角の人間と見立てて、其人間に對する厚意の所作だ。割前を出せば夫丈の事で濟む所を、心のうちで難有いと恩に着るのは錢金で買へる返禮ぢやない。無位無官でも一人前の獨立した人間だ。獨立した人間が頭を下げるのは百萬兩より尊い御禮と思はなければならない。

　おれは是でも山嵐に一錢五厘奮發させて、百萬兩より尊い返禮をした氣で居る。山嵐は難有いと思つて然るべきだ。それに裏へ廻つて卑劣な振舞をするとは怪しからん野郎だ。あした行つて一錢五厘返して仕舞へば借も貸もない。さうして置いて喧嘩をしてやらう。

　おれはこゝ迄考へたら、眠くなつたからぐうぐう寐て仕舞つた。あくる日は思ふ仔細があるから、例刻より早目に出校して山嵐を待ち受けた。所が中々出て來ない。うらなりが出て來る。漢學の先生が出て來る。野だが出て來る。仕舞ひには赤シャツ迄出て來たが山嵐の机の上は白墨が一本竪に寐て居る丈で閑靜なものだ。おれは、控所へ這入るや否や返さうと思つて、うちを出る時から、湯錢の樣に手の平へ入れて一錢五厘、學校迄握つて來た。おれは脊つ手だから、開けて見ると一錢五厘が汗をかいて居る。汗をかいてる錢を返しちや山嵐が何とか云ふだらうと思つたから、机の上へ置いてふう〳〵吹いて又握つた。所へ赤シャツが來て昨日は失敬、迷惑でしたらうと云つたから、迷惑ぢやありません、御蔭で腹が減りましたと答へた。すると赤シャツは山嵐の机の上へ肱を突いて、あの盤臺面をおれの鼻の側面へ持つて來たから、何をするかと思つたら、君昨日歸りがけに船の中で話した事は、祕密にしてくれ玉へ。まだ誰にも話しやしますまいねと云つた。女の樣な聲を出す丈に心配性な男と見える。話さない事は慥かである。然し是から話さうと云ふ心持ちで、既に一錢五厘手の平に用意して居る位だから、こゝで赤シャツから口留めをされちや、些と困る。赤シャツも赤シャツだ。山嵐と名を指さないにしろ、あれ程推察の出來る謎をかけて置きながら、今更其謎を解いちや迷惑だとは教頭とも思へぬ無責任だ。元來ならおれが山嵐と戰爭をはじめて鎬を削つてる眞中へ出て堂々とおれの肩を持つべきだ。夫でこそ一校の教頭で、赤シャツを着て居る主意も立つと云ふもんだ。

　おれは教頭に向つて、まだ誰にも話さないが、是から山嵐と談判する積りだと云つたら、赤シャツは大いに狼狽して、君そんな無法な事をしちや困る。僕は堀田君の事に就いて、別段君に何も明言した覺えはないんだから――君がもし茲で亂暴を働いてくれると、僕は非常に迷惑する。君は學校に騷動を起す積りで來たんぢやなからうと妙に常識をはづれた質問をするから、當り前です、月給をもらつたり、騷動を起したりしちや、學校の方でも困るでせうと云つた。すると赤シャツはそれぢや昨日の事は君の參考丈にとめて、口外してくれるなと汗をかいて依賴に及ぶから、よろしい、僕も困るんだが、そんなにあなたが迷惑ならよしませうと受け合つた。君大丈夫かいと赤シャツは念を押した。どこ迄女らしいんだか奥行がわからない。文學士なんて、みんなあんな連中なら詰まらんものだ。辻褄の合はない、論理に缺けた注文をして恬然として居る。然も此おれを疑ぐつてる。憚りながら男だ。受け合つた事を裏

へ廻つて反古にする樣なさもしい了見は持つてるもんか。
　所へ兩隣りの机の所有主も出校したんで、赤シャツは早々自分の席へ歸つて行つた。赤シャツは歩き方から氣取つてる。部屋の中を往來するのでも、音を立てない樣に靴の底をそつと落とす。音を立てないであるくのが自慢になるもんだとは、此時から始めて知つた。泥棒の稽古ぢやあるまいし、當り前にするがいゝ。やがて始業の喇叭がなつた。山嵐はとう〳〵出て來ない。仕方がないから、一錢五厘を机の上へ置いて教場へ出掛けた。
　授業の都合で一時間目は少し後れて、控所へ歸つたら、ほかの教師はみんな机を控へて話しをして居る。山嵐もいつの間にか來て居る。缺勤だと思つたら遲刻したんだ。おれの顏を見るや否や今日は君の御蔭で遲刻したんだ。罰金を出し玉へと云つた。おれは机の上にあつた一錢五厘を出して、是をやるから取つて置け。先達て通町で飮んだ氷水の代だと山嵐の前へ置くと、何を云つてるんだと笑ひかけたが、おれが存外眞面目で居るので、詰まらない冗談をするなと錢をおれの机の上に掃き返した。おや山嵐の癖にどこ迄も奢る氣だな。
「冗談ぢやない本當だ。おれは君に氷水を奢られる因縁がないから、出すんだ。取らない法があるか」
「そんなに一錢五厘が氣になるなら取つてもいゝが、なぜ思ひ出した樣に、今時分返すんだ」
「今時分でも、いつ時分でも、返すんだ。奢られるのがいやだから返すんだ」
　山嵐は冷然とおれの顏を見てふんと云つた。赤シャツの依賴がなければ、こゝで山嵐の卑劣をあばいて大喧嘩をしてやるんだが、口外しないと受け合つたんだから動きがとれない。人がこんなに眞赤になつてるのにふんと云ふ理窟があるものか。
「氷水の代は受け取るから、下宿は出て呉れ」
「一錢五厘受け取ればそれでいゝ。下宿を出ようが出まいがおれの勝手だ」
「所が勝手でない、昨日、あすこの亭主が來て君に出て貰ひたいと云ふから、其譯を聞いたら亭主の云ふのは尤もだ。夫でももう一應慥かめる積りで今朝あすこへ寄つて詳しい話を聞いてきたんだ」
　おれには山嵐の云ふ事が何の意味だか分らない。
「亭主が君に何を話したんだか、おれが知つてるもんか。さう自分丈で極めたつて仕樣があるか。譯があるなら譯を話すが順だ。てんから亭主の云ふ方が尤もだなんて失敬千萬な事を云ふな」
「うん、そんなら云つてやらう。君は亂暴であの下宿で持て餘されて居るんだ。いくら下宿の女房だつて、下女たあ違ふぜ。足を出して拭かせるなんて、威張り過ぎるさ」
「おれが、いつ下宿の女房に足を拭かせた」
「拭かせたかどうだか知らないが、兎に角向うぢや、君に困つてるんだ。下宿料の十圓や十五圓は懸物を一幅賣りや、すぐ浮いてくるつて云つてたぜ」
「利いた風な事をぬかす野郎だ。そんなら、なぜ置いた」
「なぜ置いたか、僕は知らん、置く事は置いたんだが、いやになつたんだから、出ろと云ふんだらう。君出てやれ」
「當り前だ。居てくれと手を合はせたつて、居るものか。一體そんな云ひ懸りを云ふ樣な所へ周旋する君からして不埒だ」
「おれが不埒か、君が大人しくないんだか、どつちかだらう」
　山嵐もおれに劣らぬ肝癪持ちだから、負け

嫌ひな大きな聲を出す。控所に居た連中は何事が始まつたかと思つて、みんな、おれと山嵐の方を見て、顋を長くしてぼんやりして居る。おれは、別に恥づかしい事をした覺えはないんだから、立ち上がりながら、部屋中一通り見渡してやつた。みんなが驚いてるなかに野だ丈は面白さうに笑つて居た。おれの大きな眼が、貴樣も喧嘩をする積りかと云ふ權幕で、野だの干瓢づらを射貫いた時に、野だは突然眞面目な顏をして、大いにつゝしんだ。少し怖かつたと見える。其うち喇叭が鳴る。山嵐もおれも喧嘩を中止して教場へ出た。

午後は、先夜おれに對して無禮を働いた寄宿生の處分法に就いての會議だ。會議と云ふものは生れて始めてだから頓と容子が分らないが、職員が寄つてたかつて自分勝手な說をたてて、夫を校長が好い加減に纏めるのだらう、纏めると云ふのは黑白の決しかねる事柄に就いて云ふべき言葉だ。この場合の樣な、誰が見たつて不都合としか思はれない事件に、會議をするのは暇潰しだ。誰が何と解釋したつて異說の出よう筈がない。こんな明白なのは即座に校長が處分して仕舞へばいゝに。随分決斷のない事だ。校長つてものが、これならば、何の事はない、煮え切らない愚圖の異名だ。

會議室は校長室の隣りにある細長い部屋で、平常は食堂の代理を勤める。黑い皮で張つた椅子が二十脚ばかり、長いテーブルの周圍に並んで一寸神田の西洋料理屋位な格だ。其テーブルの端に校長が坐つて、隣に赤シャツが構へる。あとは勝手次第に席に着くんださうだが、體操の教師丈はいつも席末に謙遜すると云ふ話だ。おれは樣子が分らないから、博物の教師と漢學の教師の間へ這入り込んだ。向うを見ると山嵐と野だが並んでる。野だの顏はどう考へても劣等だ。喧嘩はしても山嵐の方が遙かに趣がある。おやぢの葬式の時に小日向の養源寺の座敷にかゝつて居た懸物は此顏によく似て居る。坊主に聞いて見たら韋駄天と云ふ怪物ださうだ。今日は怒つてるから、眼をぐるぐる廻しちや、時々おれの方を見る。そんな事で威嚇かされて堪るもんかと、おれも負けない氣で、矢つ張り眼をぐりつかせて、山嵐をにらめてやつた。おれの眼は恰好はよくないが、大きい事に於ては大抵な人には負けない。あなたは眼が大きいから役者になると屹度似合ひますと清がよく云つた位だ。

もう大抵御揃ひでせうかと校長が云ふと、書記の川村と云ふのが一つ二つと頭數を勘定して見る。一人足りない。一人不足ですがと考へてゐたが、是は足りない筈だ。唐茄子のうらなり君が來て居ない。おれとうらなり君とはどう云ふ宿世の因縁かしらないが、此人の顏を見て以來どうしても忘れられない。控所へくれば、すぐ、うらなり君が眼につく、途中をあるいて居ても、うらなり先生の樣子が心に浮ぶ。溫泉へ行くと、うらなり君が時々蒼い顏をして湯壺のなかに膨れて居る。挨拶をするとへえと恐縮して頭を下げるから氣の毒になる。學校へ出てうらなり君程大人しい人は居ない。滅多に笑つた事もないが、餘計な口をきいた事もない。おれは君子と云ふ言葉を書物の上で知つてるが、是は字引にある計りで、生きてるものではないと思つてたが、うらなり君に逢つてから始めて、矢つ張り正體のある文字だと感心した位だ。

此位關係の深い人の事だから、會議室へ這入るや否や、うらなり君の居ないのは、すぐ氣がついた。實を云ふと、此男の次へでも坐らうかと、ひそかに目標にして來た位だ。校長はもうやがて見えるでせうと、自分の前にある紫の袱紗包をほどいて、蒟蒻版の樣な物を

読んで居る。赤シャツは琥珀のパイプを絹ハンケチで磨き始めた。此男は是が道樂である。赤シャツ相當の所だらう。ほかの連中は隣り同志で何だか私語き合つて居る。手持無沙汰なのは鉛筆の尻に着いて居る、護謨の頭でテーブルの上へしきりに何か書いて居る。野だは時々山嵐に話しかけるが、山嵐は一向應じない。只うん とかあゝとか云ふばかりで、時々怖い眼をして、おれの方を見る。おれも負けずに睨め返す。

所へ待ちかねた、うらなり君が氣の毒さうに這入つて來て少々用事がありまして、遲刻致しましたと慇懃に狸に挨拶をした。では會議を開きますと狸は先づ書記川村に蒟蒻版を配附させる。見ると最初が處分の件、次が生徒取締の件、其他二三ヶ條である。狸は例の通り勿體ぶつて、敎育の生靈と云ふ見えでこんな意味の事を述べた。「學校の職員や生徒に過失のあるのは、みんな自分の寡德の致す所で、何か事件がある度に、自分はよく是で校長が勤まるとひそかに慚愧の念に堪へんが、不幸にして今回も亦かゝる騷動を引き起したのは、深く諸君に向つて謝罪しなければならん。然し一たび起つた以上は仕方がない、どうにか處分をせんければならん、事實は旣に諸君の御承知の通りであるからして、善後策について腹藏のない事を參考の爲に御述べ下さい」

おれは校長の言葉を聞いて、成程校長だの狸だのと云ふものは、えらい事を云ふもんだと感心した。から校長が何もかも責任を受けて、自分の咎だとか、不德だとか云ふ位なら、生徒を處分するのは、やめにして、自分から先へ免職になつたらよささうなもんだ。さうすればこんな面倒な會議なんぞを開く必要もなくなる譯だ。第一常識から云つても分つてる。おれが大人しく宿直をする。生徒が亂暴をする。わるいのは校長でもなけりや、おれでもない。生徒丈に極まつてる。もし山嵐が煽動したとすれば、生徒と山嵐を退治れば、夫で澤山だ。人の尻を自分で背負ひ込んで、おれの尻だ、おれの尻だと吹き散らかす奴が、どこの國にあるもんか、狸でなくつちや出來る藝當ぢやない。彼はこんな條理に適はない議論を吐いて、得意氣に一同を見廻した。所が誰も口を開くものがない。博物の敎師は第一敎場の屋根に烏がとまつてるのを眺めて居る。漢學の先生は蒟蒻版を疊んだり、延ばしたりしてる。山嵐はまだおれの顏をにらめて居る。會議と云ふものがこんな馬鹿氣たものなら、缺席して晝寐でもして居る方がましだ。

おれは、じれつたく成つたから、一番大いに辯じてやらうと思つて、半分尻をあげかけたら、赤シャツが何か云ひ出したから、やめにした。見るとパイプを仕舞つて、縞のある絹ハンケチで顏をふきながら、何か云つて居る。あの手巾は屹度マドンナから卷き上げたに相違ない。男は白い麻を使ふもんだ。「私も寄宿生の亂暴を聞いて甚だ敎頭として不行屆であり、且平常の德化が少年に及ばなかつたのを深く慚づるのであります。でかう云ふ事は、何か陷缺があると起こるので、事件其物を見ると何だか生徒丈がわるい樣であるが、其眞相を極めると責任は却て學校にあるかも知れない。だから表面上に現はれた所丈で嚴重な制裁を加へるのは、却て未來の爲によくないかとも思はれます。且少年血氣のものであるから活氣があふれて、善惡の考へはなく、半ば無意識にこんな惡戯をやる事はないとも限らん。で固より處分法は校長の御考へにある事だから、私の容喙する限りではないが、どうか其邊を御斟酌になつて、なるべく寬大な御取計ひを願ひたいと思ひます」

成程狸が狸なら、赤シャツも赤シャツだ。生

徒があばれるのは、生徒がわるいんぢやない教師が惡いんだと公言して居る。氣狂が人の頭を撲り附けるのは、なぐられた人がわるいから、氣狂がなぐるんださうだ。難有い仕合せだ。活氣にみちて困るなら運動場へ出て相撲でも取るがいゝ、半ば無意識に床の中へバッタを入れられて堪るもんか。此樣子ぢや寐頸をかゝれても、半ば無意識だつて放免する積りだらう。

　おれはかう考へて何か云はうかなと考へて見たが、云ふなら人を驚かす樣に滔々と述べたてなくつちや詰まらない、おれの癖として、腹が立つたときに口をきくと、二言か三言で必ず行き塞まつて仕舞ふ。狸でも赤シャツでも人物から云ふと、おれよりも下等だが、辯舌は中々達者だから、まづい事を喋舌つて揚足を取られちや面白くない。一寸腹案を作つて見ようと、胸のなかで文章を作つてる。すると前に居た野だが突然起立したには驚いた。野だの癖に意見を述べるなんて生意氣だ。野だは例のへらへら調で「實に今回のバッタ事件及び吶喊事件は吾々心ある職員をして、ひそかに吾校將來の前途に危惧の念を抱かしむるに足る珍事でありまして、吾々職員たるものは此際奮つて自ら省て、全校の風紀を振肅しなければなりません。それで只今校長及び教頭の御述べになつた御說は、實に肯綮に中つた剴切な御考へで私は徹頭徹尾賛成致します。どうか成るべく寛大の御處分を仰ぎたいと思ひます」と云つた。野だの云ふ事は言語はあるが意味がない、漢語をのべつに陳列するぎりで譯が分らない。分つたのは徹頭徹尾賛成致しますと云ふ言葉だけだ。

　おれは野だの云ふ意味は分らないけれども、何だか非常に腹が立つたから、腹案も出來ないうちに起ち上がつて仕舞つた。「私は徹頭徹尾反對です……」と云つたがあとが急に出て來ない。「……そんな頓珍漢な處分は大嫌ひです」とつけたら、職員が一同笑ひ出した。「一體生徒が全然惡いです。どうしても詫らせなくつちやあ、癖になります。退校さしても構ひません。……何だ失敬な、新しく來た教師だと思つて……」と云つて着席した。すると右隣に居る博物が、生徒がわるい事もわるいが、あまり嚴重な罰抔をすると却て反動を起こしていけないでせう。矢つ張り教頭の仰しやる通り、寛大な方に賛成します」と弱い事を云つた。左隣の漢學は穩便說に賛成と云つた。歷史も教頭と同說と云つた。忌々しい、大抵のものは赤シャツ黨だ。こんな連中が寄り合つて學校を立てて居りや世話はない。おれは生徒をあやまらせるか、辭職するか二つのうち一つに極めてるんだから、もし赤シャツが勝ちを制したら、早速うちへ歸つて荷作りをする覺悟で居た。どうせ、こんな手合を辯口で屈伏させる手際はなし、させた所でいつ迄御交際を願ふのは、此方で御免だ。學校に居ないとすればどうなつたつて構ふもんか。また何か云ふと笑ふに違ひない。だれが云ふもんかと澄まして居た。

　すると今迄默つて聞いて居た山嵐が奮然として起ち上がつた。野郎又赤シャツ賛成の意を表するな、どうせ、貴樣とは喧嘩だ、勝手にしろと見てゐると山嵐は硝子窓を振はせる樣な聲で「私は教頭及び其他諸君の御說には全然不同意であります。と云ふものは此事件はどの點から見ても五十名の寄宿生が新來の教師某氏を輕侮して之を翻弄しようとした所爲とより外には認められんのであります。教頭は其原因を教師の人物如何に御求めになる樣でありますが失禮ながら夫は失言かと思ひます。某氏が宿直にあたられたのは着後早々の事で、未だ生徒に接せられてから二十日に滿たぬ頃であります。此の短かい二十日間に於て生徒は君の學問人物を

許容し得る餘地がないのであります。制裁されべき至當な理由があつて、制裁を受けたのなら生徒の行爲に斟酌を加へる理由もありませうが、何等の原因もないのに新來の先生を愚弄する樣な輕薄な生徒を寛假しては學校の威信に關はる事と思ひます。教育の精神は單に學問を授けるばかりではない、高尚な、正直な、武士的な元氣を鼓吹すると同時に、野卑な、輕躁な、暴慢な惡風を掃蕩するにあると思ひます。もし反動が恐ろしいの、騷動が大きくなるのと姑息な事を云つた日には此弊風はいつ矯正出來るか知れません。かゝる弊風を杜絶する爲にこそ吾々は此學校に職を奉じて居るので、之を見逃す位なら始めから教師にならん方がいゝと思ひます。私は以上の理由で寄宿生一同を嚴罰に處する上に、當該教師の面前に於て公に謝罪の意を表せしむるのを至當の所置と心得ます」と云ひながら、どんと腰を卸した。一同はだまつて何も言はない。赤シャツは又パイプを拭き始めた。おれは何だか非常に嬉しかつた。おれの云はうと思ふ所をおれの代りに山嵐がすつかり言つてくれた樣なものだ。おれはかう云ふ單純な人間だから、今迄の喧嘩は丸で忘れて、大いに難有いと云ふ顏を以て、腰を卸した山嵐の方を見たら、山嵐は一向知らん面をしてゐる。

　しばらくして山嵐は又起立した。「只今一寸失念して言ひ落としましたから、申します。當夜の宿直員は宿直中外出して温泉に行かれた樣であるが、あれは以ての外の事と考へます。苟も自分が一校の留守番を引き受けながら、咎める者のないのを幸ひに、場所もあらうに温泉抔へ入湯に行く抔と云ふのは大きな失體である。生徒は生徒として、此點に就いては校長からとくに責任者に御注意あらん事を希望します」

　妙な奴だ、ほめたと思つたら、あとからすぐ人の失策をあばいて居る。おれは何の氣もなく、前の宿直が出あるいた事を知つて、そんな習慣だと思つて、つい温泉迄行つて仕舞つたんだが、成程さう云はれて見ると、これはおれが惡かつた。攻撃されても仕方がない。そこでおれは又起つて「私は正に宿直中に温泉に行きました。是は全くわるい。あやまります」と云つて着席したら、一同が又笑ひ出した。おれが何か云ひさへすれば笑ふ。つまらん奴等だ。貴樣等は是程自分のわるい事を公にわるかつたと斷言出來るか、出來ないから笑ふんだらう。

　夫れから校長は、もう大抵御意見もない樣でありますから、よく考へた上で處分しませうと云つた。序だから其結果を云ふと、寄宿生は一週間の禁足になつた上に、おれの前へ出て謝罪をした。謝罪をしなければ其時辭職して歸る所だつたがなまじひ、おれの云ふ通りになつたのでとう〱大變な事になつて仕舞つた。夫はあとから話すが、校長は此時會議の引き續きだと號してこんな事を云つた。生徒の風儀は、教師の感化で正していかなくてはならん。其一着手として、教師は可成飮食店抔に出入しない事にしたい。尤も送別會抔の節は特別であるが、單獨にあまり上等でない場所へ行くのはよしたい――たとへば蕎麥屋だの、團子屋だの――と云ひかけたら又一同が笑つた。野だが山嵐を見て天麩羅と云つて目くばせをしたが山嵐は取り合はなかつた。いゝ氣味だ。

　おれは腦がわるいから、狸の云ふことなんかよく分らないが、蕎麥屋や團子屋へ行つて、中學の教師が勤まらなくつちや、おれ見た樣な食ひ心棒にや到底出來つ子ないと思つた。それなら、夫でいゝから、初手から蕎麥と團子の嫌ひなものと注文して雇ふがいゝ。だんまりで辭令を下げて置いて、蕎麥を食ふな、團子を食ふな

と罪な御布令を出すのは、おれの様な外に道樂のないものに取つては大變な打撃だ。すると赤シャツが又口を出した。「元來中學の教師なぞは社會の上流に位するものだからして、單に物質的の快樂ばかり求める可きものでない。其方に耽るとつい品性にわるい影響を及ぼす様になる。然し人間だから、何か娯樂がないと、田舍へ來て狹い土地では到底暮らせるものでない。其で釣に行くとか、文學書を讀むとか、又は新體詩や俳句を作るとか、何でも高尚な精神的娯樂を求めなくつてはいけない……」

だまつて聞いてると勝手な熱を吹く。沖へ行つて肥料を釣つたり、ゴルキが露西亜の文學者だつたり、馴染の藝者が松の木の下に立つたり、古池へ蛙が飛び込んだりするのが精神的娯樂なら、天麩羅を食つて團子を呑み込むのも精神的娯樂だ。そんな下さらない娯樂を授けるより赤シャツの洗濯でもするがいゝ。あんまり腹が立つたから「マドンナに逢ふのも精神的娯樂ですか」と聞いてやつた。すると今度は誰も笑はない。妙な顏をして互に眼と眼を見合はせてゐる。赤シャツ自身は苦しさうに下を向いた。夫見ろ。利いたらう。只氣の毒だつたのはうらなり君で、おれがかう云つたら蒼い顏を益蒼くした。

七

おれは卽夜下宿を引き拂つた。宿へ歸つて荷物をまとめて居ると、女房が何か不都合でも御座いましたか、御腹の立つ事があるなら、云つて御呉れたら改めますと云ふ。どうも驚く。世の中にはどうして、こんな要領を得ない者ばかり揃つてるんだらう。出て貰ひたいんだか居て貰ひたいんだか分りやしない。丸で氣狂だ。こんな者を相手に喧嘩をしたつて江戸つ子の名折れだから、車屋をつれて來てさつさと出て來た。

出た事は出たが、どこへ行くといふあてもない。車屋がどちらへ參りますと云ふから、だまつて尾いて來い、今にわかる、と云つて、すたすたやつて來た。面倒だから山城屋へ行かうかとも考へたが、又出なければならないから、つまり手數だ。かうして歩行いてるうちには下宿とか、何とか看板のあるうちを目附け出すだらう。さうしたら、そこが天意に叶つたわが宿と云ふ事にしよう。とぐる〳〵、閑靜で住みよささうな所をあるいてるうち、とう〳〵鍛冶屋町へ出て仕舞つた。こゝは士族屋敷で下宿屋抔のある町でないから、もつと賑やかな方へ引き返さうかとも思つたが、不圖いゝ事を考へ附いた。おれが敬愛するうらなり君は此町内に住んで居る。うらなり君は土地の人で先祖代々の屋敷を控へてゐるから、此邊の事情には通じて居るに相違ない。あの人を尋ねて聞いたら、よささうな下宿を敎へてくれるかも知れない。幸ひ一度挨拶に來て勝手は知つてるから、搜してあるく面倒はない。こゝだらうと、いゝ加減に見當をつけて、御免々々と二返許り云ふと、奧から五十位な年寄が古風な紙燭をつけて、出て來た。おれは若い女も嫌ひではないが、年寄を見ると何だかなつかしい心持ちがする。大方淸がすきだから、其魂が方々の御婆さんに乘り移るんだらう。是は大方うらなり君の御母さんだらう、切り下げの品格のある婦人だが、よくうらなり君に似て居る。まあ御上がりと云ふ所を、一寸御目にかゝりたいからと、主人を玄關迄呼び出して實は是々だが君どこか心當りはありませんかと尋ねて見た。うらなり先生夫は嘸御困りで御座いませう、としばらく考へて居たが、此裏町に萩野と云つて老人夫婦ぎりで暮らして居るものがある、いつぞや座敷を明けて置いても無駄だから、慥かな人があるなら貸してもい

いから周旋してくれと頼んだ事がある。今でも貸すかどうか分らんが、まあ一所に行つて聞いて見ませうと、親切に連れて行つてくれた。其夜から萩野の下宿人となつた。驚いたのは、おれがいか銀の座敷を引き拂ふと翌日から入れ違ひに野だが平氣な顔をして、おれの居た部屋を占領した事だ。さすがのおれも是にはあきれた。世の中はいかさま師許りで、御互に乘せつこをして居るのかも知れない。いやになつた。

世間がこんなものなら、おれも負けない氣で、世間並にしなくちや遣り切れない譯になる。巾着切りの上前をはねなければ三度の御膳が戴けないと、事が極まればかうして、生きてるのも考へ物だ。と云つてぴんぴんした達者なからだで、首を縊つちや先祖へ濟まない上に、外聞が惡い。考へると物理學校抔へ這入つて、數學なんて役にも立たない藝を覺えるよりも、六百圓を資本にして牛乳屋でも始めればよかつた。さうすれば淸もおれの傍を離れずに濟むし、おれも遠くから婆さんの事を心配しずに暮らされる。一所に居るうちは、さうでもなかつたが、かうして田舍へ來て見ると淸は矢つ張り善人だ。あんな氣立のいゝ女は日本中さがして歩行いたつて滅多にはない。婆さん、おれの立つときに、少々風邪を引いて居たが今頃はどうしてるか知らん。先達ての手紙を見たら嘸喜んだらう。それにしても、もう返事がきさうなものだが――おれはこんな事許り考へて二三日暮らして居た。氣になるから、宿の御婆さんに、東京から手紙は來ませんかと時々尋ねて見るが、聞くたんびに何も參りませんと氣の毒さうな顔をする。こゝの夫婦はいか銀とは違つて、もとが士族だけに双方共上品だ。爺さんが夜になると、變な聲を出して謠をうたふには閉口するが、いか銀の樣に御茶を入れませうと無暗に出て來ないから大きに樂だ。御婆さんは時々部屋へ來て色々な話しをする。どうして奧さんをお連れなさつて、一所に御出でなんだのぞなもしなどと質問をする。奧さんがある樣に見えますかね。可哀想に是でもまだ二十四ですぜと云つたらそれでも、あなた二十四で奧さんが御有りなさるのは當り前ぞなもしと冒頭を置いて、どこの誰さんは二十で御嫁を御貰ひたの、どこの何とかさんは二十二で子供を二人御持ちたのと、何でも例を半ダース許り擧げて反駁を試みたには恐れ入つた。それぢや僕も二十四で御嫁を御貰ひるけれ、世話をして御呉れんかなと田舍言葉を眞似て頼んで見たら、御婆さん正直に本當かなもしと聞いた。

「本當の本當のつて僕あ、嫁が貰ひたくつて仕方がないんだ」

「左樣ぢやらうがな、もし。若いうちは誰もそんなものぢやけれ」此挨拶には痛み入つて返事が出來なかつた。

「然し先生はもう、御嫁が御有りなさるに極まつとらい。私はちやんと、もう、睨らんどるぞなもし」

「へえ、活眼だね。どうして、睨らんどるんですか」

「何故してて。東京から便りはないか、便りはないかてゝ、毎日便りを待ち焦がれて御いでるぢやないかなもし」

「こいつあ驚いた。大變な活眼だ」

「中りましたらうがなもし」

「さうですね。中つたかも知れませんよ」

「然し今時の女子は、昔と違うて油斷が出來んけれ、御氣を御付けたがえゝぞなもし」

「何ですかい、僕の奧さんが東京で間男でもこしらへて居りますかい」

「いゝえ、あなたの奧さんは慥かぢやけれど……」

「それで、漸と安心した。夫ぢや何を氣を附けるんですい」
「あなたのは慥か――あなたのは慥かぢやが――」
「何處に不慥かのが居ますかね」
「こゝ等にも大分居ります。先生、あの遠山の御孃さんを御存知かなもし」
「いゝえ、知りませんね」
「まだ御存知ないかなもし。こゝらであなた一番の別嬪さんぢやがなもし。あまり別嬪さんぢやけれ、學校の先生方はみんなマドンナ〳〵と言ふといでるぞなもし。まだお聞きんのかなもし」
「うん、マドンナですか。僕あ藝者の名かと思つた」
「いゝえ、あなた。マドンナと云ふと唐人の言葉で別嬪さんの事ぢやらうがなもし」
「さうかも知れないね。驚いた」
「大方畫學の先生が御附けた名ぞなもし」
「野だがつけたんですかい」
「いゝえ、あの吉川先生が御附けたのぢやがなもし」
「其マドンナが不慥かなんですかい」
「其マドンナさんが不慥かなマドンナさんでな、もし」
「厄介だね。渾名の附いてる女にや昔から碌なものは居ませんからね。さうかも知れませんよ」
「ほん當にさうぢやなもし。鬼神のお松ぢやの、妲妃のお百ぢやのて、怖い女が居りましたなもし」
「マドンナも其同類なんですかね」
「其マドンナさんがなもし、あなた。そらあの、あなたを此所へ世話をして御呉れた古賀先生なもし――あの方の所へ御嫁に行く約束が出來て居たのぢやがなもし――」
「へえ、不思議なもんですね。あのうらなり君が、そんな艶福のある男とは思はなかつた。人は見懸けによらない者だな。ちつと氣を附けよう」
「所が、去年あすこの御父さんが御亡くなりて、――夫迄は御金もあるし、銀行の株も持つて御出でるし、萬事都合がよかつたのぢやが――夫からと云ふものは、どう云ふものか急に暮し向きが思はしくなくつて――詰り古賀さんがあまり御人が好過ぎるけれ、御欺されたんぞなもし。それやこれやで御輿入も延びて居る所へ、あの教頭さんが御出でて、是非御嫁にほしいと御云ひるのぢやがなもし」
「あの赤シャツがですか。ひどい奴だ。どうもあのシャツは只のシャツぢやないと思つてた。それから？」
「人を頼んで掛け合うてお見ると、遠山さんでも古賀さんに義理があるから、すぐには返事は出來かねて――まあよう考へて見よう位の挨拶を御したのぢやがなもし。すると赤シャツさんが、手蔓を求めて遠山さんの方へ出入をおしる樣になつて、とう〳〵あなた、御孃さんを手馴附けてお仕舞ひたのぢやがなもし。赤シャツさんも赤シャツさんぢやが、御孃さんも御孃さんぢやてゝ、みんなが惡く云ひますのよ。一旦古賀さんへ嫁に行くてゝ承知をしときながら、今更學士さんがお出でたけれ、其方に替へよてゝ、それぢや今日樣へ濟むまいがなもし、あなた」
「全く濟まないね。今日樣所か明日樣にも、明後日樣にも、いつ迄行つたつて濟みつこありませんね」
「夫で古賀さんに御氣の毒ぢやてゝ、御友達の堀田さんが教頭の所へ意見をしに御行きたら、赤シャツさんが、あしは約束のあるものを横取りする積りはない。破約になれば貰ふかも知れ

んが、今の所は遠山家と只交際をして居る計りぢや、遠山家と交際をするには別段古賀さんに済まん事もなからうと御云ひるけれ、堀田さんも仕方がなしに御戻りたさうな。赤シャツさんと堀田さんは、それ以来折合がわるいと云ふ評判ぞなもし」

「よく色々な事を知つてますね。どうして、そんな詳しい事が分るんですか。感心しちまつた」

「狭いけれ何でも分りますぞなもし」

分り過ぎて困る位だ。此容子ぢやおれの天麩羅や団子の事も知つてるかも知れない。厄介な所だ。然し御蔭様でマドンナの意味もわかるし、山嵐と赤シャツの関係もわかるし大いに後学になつた。只困るのはどつちが悪者だか判然しない。おれの様な単純なものには白とか黒とか片づけて貰はないと、どつちへ味方をしていゝか分らない。

「赤シャツと山嵐たあ、どつちがいゝ人ですかね」

「山嵐て、何ぞなもし」

「山嵐と云ふのは堀田の事ですよ」

「そりや強い事は堀田さんの方が強さうぢやけれど、然し赤シャツさんは学士さんぢやけれ働きはある方ぞなもし。夫から優しい事も赤シャツさんの方が優しいが、生徒の評判は堀田さんの方がえゝといふぞなもし」

「つまり何方がいゝんですかね」

「つまり月給の多い方が豪いのぢやらうがなもし」

是ぢや聞いたつて仕方がないから、やめにした。夫から二三日して学校から帰ると御婆さんがにこ〳〵して、へえ御待遠さま。やつと参りました。と一本の手紙を持つて来てゆつくり御覧と云つて出て行つた。取り上げて見ると清からの便りだ。符箋が二三枚ついてるからよく調べると、山城屋から、いか銀の方へ廻して、いか銀から、萩野へ廻つて来たのである。其上山城屋では一週間計り逗留して居る。宿屋丈に手紙迄泊める積りなんだらう。開いて見ると、非常に長いもんだ。坊つちやんの手紙を頂いてから、すぐ返事をかゝうと思つたが、生憎風邪を引いて一週間許り寐て居たものだから、つい遅くなつて済まない。其上今時の御嬢さんの様に読み書きが達者でないものだから、こんなまづい字でも、かくのに余っ程骨が折れる。甥に代筆を頼まうと思つたが、折角あげるのに自分でかかなくつちや、坊つちやんに済まないと思つてわざ〳〵下がきを一返して、それから清書をした。清書をするには二日で済んだが、下書きをするには四日かゝつた。読みにくいかも知れないが、是でも一生懸命にかいたのだから、どうぞ仕舞迄読んでくれ。と云ふ冒頭で四尺ばかり何やらかやら認めてある。成程読みにくい。字がまづい許りではない、大抵平仮名だから、どこで切れてどこで始まるのだか句読をつけるのに余っ程骨が折れる。おれは焦つ勝ちな性分だから、こんな長くて、分りにくい手紙は五円やるから読んでくれと頼まれても断るのだが、此時ばかりは真面目になつて、始めから終ひ迄読み通した。読み通した事は事実だが、読む方に骨が折れて、意味がつながらないから、又頭から読み直して見た。部屋のなかは少し暗くなつて、前の時より見にくくなつたから、とう〳〵椽鼻へ出て腰をかけながら丁寧に拝見した。すると初秋の風が芭蕉の葉を動かして、素肌に吹きつけた帰りに、読みかけた手紙を庭の方へなびかしたから、仕舞ぎはには四尺あまりの半切れがさらり〳〵と鳴つて、手を放すと、向うの生垣迄飛んで行きさうだ。おれはそんな事には構つて居られない。坊つちやんは竹を割つた様な気性だが、只肝癪が強過ぎてそ

れが心配になる。――ほかの人に無暗に渾名なんかつけるのは人に恨まれるもとになるから、矢鱈に使つちやいけない、もしつけたら、清丈に手紙で知らせろ。――田舎者は人がわるいさうだから、氣をつけて苛い目に遭はない樣にしろ。――氣候だつて東京より不順に極まつてるから、寐冷をして風邪を引いてはいけない。坊つちやんの手紙はあまり短か過ぎて、容子がよくわからないから、此次には責めて此手紙の半分位の長さのを書いてくれ。――宿屋へ茶代を五圓やるのはいゝが、あとで困りやしないか、田舎へ行つて頼りになるは御金ばかりだから、なるべく儉約して、萬一の時に差支へない樣にしなくつちやいけない。――御小遣ひがなくて困るかも知れないから爲替で十圓あげる。――先達て坊つちやんからもらつた五十圓を、坊つちやんが、東京へ歸つて、うちを持つ時の足しにと思つて、郵便局へ預けて置いたが、此十圓を引いてもまだ四十圓あるから大丈夫だ。――成程女と云ふものは細かいものだ。

おれが緣鼻で清の手紙をひらつかせながら、考へ込んで居ると、しきりの襖をあけて、萩野の御婆さんが晩めしを持つてきた。まだ見て御出でるのかなもし。えつぽど長い御手紙ぢやなもし、と云つたから、えゝ大事な手紙だから風に吹かしては見、吹かしては見るんだと自分でも要領を得ない返事をして膳についた。見ると今夜も薩摩芋の煮つけだ。こゝのうちは、いか銀よりも丁寧で、親切で、しかも上品だが、惜しい事に食ひ物がまづい。昨日も芋一昨日も芋で今夜も芋だ。おれは芋は大好きだと明言したには相違ないが、かう立てつゞけに芋を食はされては命がつゞかない。うらなり君を笑ふ所か、おれ自身が遠からぬうちに芋のうらなり先生になつちまふ。清ならこんな時に、おれの好きな鮪のさし身か、蒲鉾のつけ燒を食はせるんだが、貧乏士族のけちん坊と來ちや仕方がない。どう考へても清と一所でなくつちあ駄目だ。もしあの學校に長くでも居る模樣なら、東京から召び呼せてやらう。天麩羅蕎麥を食つちやならない、團子を食つちやならない、夫で下宿に居て芋計り食つて黄色くなつて居ろなんて教育者はつらいものだ。禪宗坊主だつて、是よりは口に榮耀をさせて居るだらう。――おれは一皿の芋を平げて、机の抽斗から生卵を二つ出して、茶碗の緣でたゝき割つて、漸く凌いだ。生卵ででも榮養をとらなくつちや一週二十一時間の授業が出來るものか。

今日は清の手紙で湯に行く時間が遲くなつた。然し毎日行きつけたのを一日でも缺かすのは心持ちがわるい。汽車にでも乘つて出懸けようと、例の赤手拭をぶら下げて停車場迄來ると二三分前に發車した計りで、少々待たなければならぬ。ベンチへ腰を懸けて、敷島を吹かして居ると、偶然にもうらなり君がやつて來た。おれはさつきの話を聞いてから、うらなり君が猶更氣の毒になつた。平常から天地の間に居候をして居る樣に、小さく構へてゐるのが如何にも憐れに見えたが、今夜は憐れ所の騷ぎではない。出來るならば月給を倍にして、遠山の御孃さんと明日から結婚さして、一ヶ月許り東京へでも遊びにやつて遣りたい氣がした矢先だから、や御湯ですか、さあ、こつちへ御懸けなさいと威勢よく席を讓ると、うらなり君は恐れ入つた體裁で、いえ構うておくれなさるな、と遠慮だか何だか矢つ張り立つてる。少し待たなくつちや出ません、草臥れますから御懸けなさいと又勸めて見た。實はどうかして、そばへ懸けて貰ひたかつた位に氣の毒で堪らない。それでは御邪魔を致しませうと漸くおれの云ふ事を聞いて呉れた。世の中には野だ見た樣に生意氣な、出ないで濟む所へ必ず顏を出す奴も居る。山

崖の様におれが居なくつちや日本が困るだらうと云ふ様な面を肩の上へ載せてる奴もゐる。さうかと思ふと、赤シャツの様にコスメチックと色男の問屋を以て自ら任じてゐるのもある。教育が生きてフロックコートを着ればおれになるんだと云はぬ許りの狆もゐる。皆々夫相應に威張つてゐるんだが、このうらなり先生の様に在れどもなきが如く、人質に取られた人形の様に大人しくしてゐるのは見た事がない。顔はふくれて居るが、こんな結構な男を捨てて赤シャツに靡くなんて、マドンナも餘つ程氣の知れないおきやんだ。赤シャツが何ダース寄つたつて、これ程立派な旦那様が出來るもんか。

「あなた何所か惡いんぢやありませんか。大分たいぎさうに見えますが……」

「いえ、別段是と云ふ持病もないですが……」

「そりや結構です。からだが惡いと人間も駄目ですね」

「あなたは大分御丈夫の様ですな」

「えゝ瘠せても病氣はしません。病氣なんてものあ大嫌ひですから」

うらなり君は、おれの言葉を聞いてにや〳〵と笑つた。所へ入口で若々しい女の笑聲が聞こえたから、何心なく振り反つて見るとえらい奴が來た。色の白い、ハイカラ頭の、脊の高い美人と、四十五六の奥さんとが並んで切符を賣る窓の前に立つて居る。おれは美人の形容杯が出來る男でないから何も云へないが全く美人に相違ない。何だか水晶の珠を香水で暖ためて、掌へ握つて見た様な心持ちがした。年寄の方が脊は低い。然し顔はよく似て居るから親子だらう。おれは、今、來たなと思ふ途端に、うらなり君の事は全然忘れて、若い女の方ばかり見てゐた。すると、うらなり君が突然おれの隣から立ち上がつて、そろ〳〵女の方へ歩行き出したんで、少し驚いた。マドンナぢやないかと思つた。三人は切符所の前で輕く挨拶してゐる。遠いから何を云つてるのか分らない。

停車場の時計を見るともう五分で發車だ。早く汽車がくればいゝがなと、話し相手が居なくなつたので待ち遠しく思つて居ると、又一人あわてて場内へ馳け込んで來たものがある。見れば赤シャツだ。何だかべら〳〵然たる着物へ縮緬の帯をだらしなく卷きつけて、例の通り金鎖をぶらつかして居る。あの金鎖は贋物である。赤シャツは誰も知るまいと思つて、見せびらかして居るが、おれはちやんと知つてる。赤シャツは馳け込んだなり、何かきよろ〳〵して居たが、切符賣下所の前に話して居る三人へ慇懃に御辭儀をして、何か二こと、三こと、云つたと思つたら、急にこつちへ向いて、例の如く猫足にあるいて來て、や、君も湯ですか、僕は乘り後れやしないかと思つて心配して急いで來たら、まだ三四分ある。あの時計は慥かかしらんと、自分の金側を出して、二分程ちがつてると云ひながら、おれの傍へ腰を卸した。女の方はちつとも見返らないで杖の上へ顋をのせて、正面ばかり眺めて居る。年寄の婦人は時々赤シャツを見るが、若い方は横を向いた儘である。いよいよマドンナに違ひない。

やがて、ピューと汽笛が鳴つて、車がつく。待ち合はせた連中はぞろ〳〵吾れ勝ちに乘り込む。赤シャツはいの一番に上等へ飛び込んだ。上等へ乘つたつて威張れる所ではない。住田まで上等が五錢で下等が三錢だから、僅か二錢違ひで上下の區別がつく。かういふおれでさへ上等を奮發して白切符を握つてるんでもわかる。尤も田舍者はけちだから、たつた二錢の出入でも頗る苦になると見えて、大抵は下等へ乘る。赤シャツのあとからマドンナとマドンナの御袋が上等へ這入り込んだ。うらなり君は活版で押した様に下等ばかりへ乘る男だ。先生、

下等の車室の入口へ立つて、何だか躊躇の體であつたが、おれの顔を見るや否や思ひ切つて、飛び込んで仕舞つた。おれは此時何となく氣の毒でたまらなかつたから、うらなり君のあとから、すぐ同じ車室へ乘り込んだ。上等の切符で下等へ乘るに不都合はなからう。

温泉へ着いて、三階から、浴衣のなりで湯壺へ下りて見たら、又うらなり君に逢つた。おれは會議や何かでいざと極まると、咽喉が塞がつて饒舌れない男だが、平常は随分辯ずる方だから、色々湯壺のなかでうらなり君に話しかけて見た。何だか憐れぽくつて堪らない。こんな時に一口でも先方の心を慰めてやるのは、江戸つ子の義務だと思つてる。所が生憎うらなり君の方では、うまい具合にこつちの調子に乘つてくれない。何を云つても、えとかいえとかぎりで、しかも其えといえが大分面倒らしいので、仕舞ひにはとう〳〵切り上げて、こつちから御免蒙つた。

湯の中では赤シヤツに逢はなかつた。尤も風呂の數は澤山あるのだから、同じ汽車で着いても、同じ湯壺で逢ふとは極まつて居ない。別段不思議にも思はなかつた。風呂を出て見るといい月だ。町内の兩側に柳が植わつて、柳の枝が丸い影を往來の中へ落として居る。少し散歩でもしよう。北へ登つて町のはづれへ出ると、左に大きな門があつて、門の突き當りが御寺で、左右が妓樓である。山門のなかに遊廓があるなんて、前代未聞の現象だ。一寸這入つて見たいが、又狸から會議の時にやられるかも知れないから、やめて素通りにした。門の並びに黒い暖簾をかけた、小さな格子窓の平屋はおれが團子を食つて、しくじつた所だ。丸提灯に汁粉、御雜煮とかいたのがぶらさがつて、提灯の火が、軒端に近い一本の柳の幹を照らしてゐる。食ひたいなと思つたが我慢して通り過ぎた。

食ひたい團子の食へないのは情ない。然し自分の許嫁が他人に心を移したのは、猶情ないだらう。うらなり君の事を思ふと、團子は愚か、三日位斷食しても不平をこぼせない譯だ。本當に人間程宛にならない者はない。あの顔を見ると、どうしたつて、そんな不人情な事をしさうには思へないんだが——うつくしい人が不人情で、冬瓜の水膨れの樣な古賀さんが善良な君子なのだから、油斷が出來ない。淡泊だと思つた山嵐は生徒を煽動したと云ふし。生徒を煽動したのかと思ふと、生徒の處分を校長に逼るし。厭味で練りかためた樣な赤シヤツが存外親切で、おれに餘所ながら注意をしてくれるかと思ふと、マドンナを胡魔化したり。胡魔化したのかと思ふと、古賀の方が破談にならなければ結婚は望まないんだと云ふし。いか銀が難癖をつけて、おれを追ひ出すかと思ふと、すぐ野だ公が入れ替つたり——どう考へても宛にならない。こんな事を清にかいてやつたら定めて驚く事だらう。箱根の向うだから化物が寄り合つてるんだと云ふかも知れない。

おれは、生來構はない性分だから、どんな事でも苦にしないで今日迄凌いで來たのだが、此所へ來てからまだ一ケ月立つか、立たないうちに、急に世のなかを物騒に思ひ出した。別段際だつた大事件にも出逢はないのに、もう五つ六つ年を取つた樣な氣がする。早く切り上げて東京へ歸るのが一番よからう。抔と夫から夫へ考へて、いつか石橋を渡つて野芹川の堤へ出た。川と云ふとえらさうだが實は一間位な、ちよろ〳〵した流で、土手に沿うて十二丁程下ると相生村へ出る。村には觀音樣がある。

温泉の町を振り返ると、赤い灯が月の光の中にかゞいて居る。太鼓が鳴るのは遊廓に相違ない。川の流は淺いけれども早いから、神經質の水の樣にやたらに光る。ぶら〳〵土手の上をあ

るきながら、約三丁も來たと思つたら、向うに人影が見え出した。月に透かして見ると影は二つある。温泉へ來て村へ歸る若い衆かも知れない。夫にしては唄もうたはない。存外靜かだ。

段々歩行いて行くと、おれの方が早足だと見えて、二つの影法師が、次第に大きくなる。一人は女らしい。おれの足音を聞きつけて、十間位の距離に逼つた時、男が忽ち振り向いた。月は後からさして居る。其時おれは男の様子を見て、はてなと思つた。男と女は又元の通りにあるき出した。おれは考へがあるから、急に全速力で追つ懸けた。先方は何の氣もつかずに最初の通り、ゆる／＼歩を移して居る。今は話し聲も手に取る様に聞こえる。土手の幅は六尺位だから、並んで行けば三人が漸くだ。おれは苦もなく後から追ひ附いて、男の袖を擦り抜けざま、二足前へ出した踵をぐるりと返して男の顔を覗き込んだ。月は正面からおれの五分刈の頭から顋の先迄、會釋もなく照らす。男はあつと小聲に云つたが、急に横を向いて、もう歸らうと女を促すが早いか、温泉の町の方へ引き返した。

赤シャツは圖太くて胡魔化す積りか、氣が弱くて名乘り損なつたのかしら。所が狹くて困つてるのは、おれ許りではなかつた。

八

赤シャツに勸められて釣に行つた歸りから、山嵐を疑ぐり出した。無い事を種に下宿を出ろと云はれた時は、愈不埒な奴だと思つた。所が會議の席では案に相違して滔々と生徒嚴罰論を述べたから、おや變だなと首を捩つた。萩野の婆さんから、山嵐が、うらなり君の爲に赤シャツと談判をしたと聞いた時は、それは感心だと手を拍つた。此樣子ではわる者は山嵐ぢやあるまい、赤シャツの方が曲がつてるんで、好い加減な邪推を實しやかに、しかも遠廻しに、おれの頭の中へ、浸み込ましたのではあるまいかと迷つてる矢先へ、野芹川の土手で、マドンナを連れて散歩なんかして居る姿を見たから、それ以來赤シャツは曲者だと極めて仕舞つた。曲者だか何だかよくは分らないが、とも角も善い男ぢやない。表と裏とは違つた男だ。人間は竹の様に眞直でなくつちや頼母しくない。眞直なものは喧嘩をしても心持ちがいゝ。赤シャツの様なやさしいのと、親切なのと、高尚なのと、琥珀のパイプとを自慢さうに見せびらかすのは油斷が出來ない、滅多に喧嘩も出來ないと思つた。喧嘩をしても、回向院の相撲の樣な心持ちのいゝ喧嘩は出來ないと思つた。さうなると一錢五厘の出入で控所全體を驚かした議論の相手の山嵐の方がはるかに人間らしい。會議の時に金壺眼をぐりつかせて、おれを睨めた時は憎い奴だと思つたが、あとで考へると、それも赤シャツのねち／＼した猫撫聲よりはましだ。實はあの會議が濟んだあとで、よつぽど仲直りをしようかと思つて、一こと二こと話しかけて見たが、野郎返事もしないで、まだ眼を剝つて見せたから、此方も腹が立つて其儘にして置いた。

夫以來山嵐はおれと口を利かない。机の上へ返した一錢五厘は未だに机の上に乘つて居る。ほこりだらけになつて乘つて居る。おれは無論手が出せない、山嵐は決して持つて歸らない。此一錢五厘が二人の間の墻壁になつて、おれは話さうと思つても話せない、山嵐は頑として默つてる。おれと山嵐には一錢五厘が祟つた。仕舞ひには學校へ出て一錢五厘を見るのが苦になつた。

山嵐とおれが絶交の姿となつたに引き易へて、赤シャツとおれは依然として在來の關係を保つて、交際をつゞけて居る。野芹川で逢つた

翌日抔は、學校へ出ると第一番におれの傍へ來て、君今度の下宿はいゝですかの又一所に露西亞文學を釣りに行かうぢやないかのと色々な事を話しかけた。おれは少々憎らしかつたから、「昨夕は二返逢ひましたね」と云つたら、「えゝ停車場で——君はいつでもあの時分出掛けるのですか、遅いぢやないか」と云ふ。「野芹川の土手でも御目に懸かりましたね」と喰らはしてやつたら、「いゝえ僕はあつちへは行かない、湯に這入つて、すぐ歸つた」と答へた。何もそんなに隠さないでもよからう、現に逢つてるんだ。よく嘘をつく男だ。是で中學の教頭が勤まるなら、おれなんか大學總長がつとまる。おれは此時から愈赤シャツを信用しなくなつた。信用しない赤シャツとは口をきいて、感心して居る山嵐とは話しをしない。世の中は隨分妙なものだ。

ある日の事赤シャツが一寸君に話しがあるから、僕のうち迄來てくれと云ふから、惜しいと思つたが溫泉行きを缺勤して四時頃出掛けて行つた。赤シャツは一人ものだが、教頭丈に下宿はとくの昔に引き拂つて立派な玄關を構へて居る。家賃は九圓五拾錢ださうだ。田舍へ來て九圓五拾錢拂へばこんな家へ這入れるなら、おれも一つ奮發して、東京から清を呼び寄せて喜ばしてやらうと思つた位な玄關だ。賴むと云つたら、赤シャツの弟が取次に出て來た。此弟は學校で、おれに代數と算術を敎はる至つて出來のわるい子だ。其癖渡りものだから、生れ附いての田舍者よりも人が惡い。

赤シャツに逢つて用事を聞いて見ると、大將例の琥珀のパイプで、きな臭い煙草をふかしながら、こんな事を云つた。「君が來てくれてから、前任者の時代よりも成績がよくあがつて、校長も大いにいゝ人を得たと喜んで居るので——どうか學校でも信賴して居るのだから、其積りで勉強していたゞきたい」

「へえ、さうですか、勉強つて今より勉強は出來ませんが——」

「今の位で充分です。只先達て御話しした事ですね、あれを忘れずに居て下さればいゝのです」

「下宿の世話なんかするものあ劍呑だと云ふ事ですか」

「さう露骨に云ふと、意味もない事になるが——まあ善い、精神は君にもよく通じて居る事と思ふから。そこで君が今の樣に出精して下されば、學校の方でも、ちやんと見て居るんだから、もう少しして都合さへつけば、待遇の事も多少はどうにかなるだらうと思ふんですがね」

「へえ、俸給ですか。俸給なんかどうでもいゝんですが、上がれば上がつた方がいゝですね」

「それで幸ひ今度轉任者が一人出來るから——尤も校長に相談して見ないと無論受け合へない事だが——其俸給から少しは融通が出來るかも知れないから、それで都合をつける樣に校長に話して見ようと思ふんですがね」

「どうも難有う。だれが轉任するんですか」

「もう發表になるから話しても差し支へないでせう。實は古賀です」

「古賀さんは、だつてこゝの人ぢやありませんか」

「こゝの地の人ですが、少し都合があつて——半分は當人の希望です」

「どこへ行くんです」

「日向の延岡で——土地が土地だから一級俸上がつて行く事になりました」

「誰か代りが來るんですか」

「代りも大抵極まつてるんです。其代りの具合で君の待遇上の都合もつくんです」

「はあ、結構です。然し無理に上がらないでも構ひません」

「とも角も僕は校長に話す積りです。夫で校

長も同意見らしいが、追つては君にもつと働いて頂かなくてはならん樣になるかも知れないから、どうか今から其積りで覺悟をしてやつて貰ひたいですね」
「今より時間でも増すんですか」
「いゝえ、時間は今より減るかも知れませんが――」
「時間が減つて、もつと働くんですか、妙だな」
「一寸聞くと妙だが、――判然とは今言ひにくいが――まあつまり、君にもつと重大な責任を持つて貰ふかも知れないと云ふ意味なんです」
おれには一向分らない。今より重大な責任と云へば、數學の主任だらうが、主任は山嵐だから、やつこさん中々辭職する氣遣ひはない。夫に、生徒の人望があるから轉任や免職は學校の得策であるまい。赤シャツの談話はいつでも要領を得ない。要領は得なくつても用事は是で濟んだ。夫から少し雜談をして居るうちに、うらなり君の送別會をやる事や、就いてはおれが酒を飮むかと云ふ問や、うらなり先生は君子で愛すべき人だと云ふ事や――赤シャツは色々辯じた。仕舞ひに話をかへて君俳句をやりますかと來たから、こいつは大變だと思つて、俳句はやりません、左樣ならと、そこ〳〵に歸つて來た。發句は芭蕉か髮結床の親方のやるもんだ。數學の先生が朝顏やに釣瓶をとられて堪るもんか。
歸つてうんと考へ込んだ。世間には隨分氣の知れない男が居る。家屋敷は勿論、勤める學校に不足のない故郷がいやになつたからと云つて、知らぬ他國へ苦勞を求めに出る。夫も花の都の電車が通つてる所なら、まだしもだが、日向の延岡とは何の事だ。おれは船つきのいゝ此所へ來てさへ、一ヶ月立たないうちにもう歸りたくなつた。延岡と云へば山の中も山の中も大變な山の中だ。赤シャツの云ふ所によると船から上がつて、一日馬車へ乘つて、宮崎へ行つて、宮崎から又一日車へ乘らなくつては着けないさうだ。名前を聞いてさへ、開けた所とは思へない。猿と人とが半々に住んでる樣な氣がする。いかに聖人のうらなり君だつて、好んで猿の相手になりたくもないだらうに、何と云ふ物數奇だ。
所へ不相變婆さんが夕食を運んで出る。今日も赤芋ですかいと聞いて見たら、いえ今日は御豆腐ぞなもしと云つた。どつちにしたつて似たものだ。
「御婆さん古賀さんは日向へ行くさうですね」
「ほん當に御氣の毒ぢやなもし」
「御氣の毒だつて、好んで行くんなら仕方がないですね」
「好んで行くて、誰がぞなもし」
「誰がぞなもしつて、當人がさ。古賀先生が物數奇に行くんぢやありませんか」
「そりやあなた、大違ひの勘五郎ぞなもし」
「勘五郎かね。だつて今赤シャツがさう云ひましたぜ。夫が勘五郎なら赤シャツは嘘つきの法螺右衛門だ」
「敎頭さんが、さう御云ひるのは尤もぢやが、古賀さんの御往きともないのも尤もぞなもし」
「そんなら兩方尤もなんですね。御婆さんは公平でいゝ。一體どう云ふ譯なんですい」
「今朝古賀の御母さんが見えて、段々譯を御話したがなもし―」
「どんな譯を御話したんです」
「あそこも御父さんが御亡くなりてから、あたし達が思ふ程暮し向きが豐かになうて御困りぢやけれ、御母さんが校長さんに御頼みて、もう四年も勤めて居るものぢやけれ、どうぞ毎月頂くものを、今少しふやして御呉れんかてゝ、あなた」

「成程」

「校長さんが、ようまあ考へて見とかうと御云ひたけな。夫で御母さんも安心して、今に増給の御沙汰があろぞ、今月か來月かと首を長くし待つて御いでた所へ、校長さんが一寸來てくれと古賀さんに御云ひるけれ、行つて見ると、氣の毒だが學校は金が足りんけれ、月給を上げる譯にゆかん。然し延岡になら空いた口があつて、其方なら毎月五圓餘分にとれるから、御望み通りでよからうと思つて、其手續にしたから行くがえゝと云はれたけな。——」

「ぢや相談ぢやない、命令ぢやありませんか」

「左様よ。古賀さんはよそへ行つて月給が増すより、元の儘でもえゝから、こゝに居りたい。屋敷もあるし、母もあるからと御頼みたけれど、もう、さう極めたあとで、古賀さんの代りは出來て居るけれ仕方がないと校長が御云ひたげな」

「へん人を馬鹿にしてら、面白くもない。ぢや古賀さんは行く氣はないんですね。だうれで變だと思つた。五圓位上がつたつて、あんな山の中へ猿の御相手をしに行く唐變木はまづないからね」

「唐變木て、先生なんぞなもし」

「何でもいゝでさあ、——全く赤シャツの作略だね。よくない仕打だ。まるで欺撃ですね。それでおれの月給を上げるなんて、不都合な事があるものか。上げてやるたつて、誰が上がつて遣るものか」

「先生は月給が御上がりるのかなもし」

「上げてやるつて云ふから、斷らうと思ふんです」

「何で、御斷りるのぞなもし」

「何でも御斷りだ。御婆さん、あの赤シャツは馬鹿ですぜ。卑怯でさあ」

「卑怯でもあなた、月給を上げておくれたら、大人しく頂いて置く方が得ぞなもし。若いうちはよく腹の立つものぢやが、年をとつてから考へると、も少しの我慢ぢやあつたのに惜しい事をした。腹立てた爲にこないな損をしたと悔むのが當り前ぢやけれ、お婆の言ふ事をきいて、赤シャツさんが月給をあけてやろと御言ひたら、難有うと受けて御置きなさいや」

「年寄の癖に餘計な世話を燒かなくつてもいい。おれの月給は上がらうと下がらうとおれの月給だ」

婆さんはだまつて引き込んだ。爺さんは呑氣な聲を出して謠をうたつてる。謠といふものは讀んでわかる所を、やに六づかしい節をつけて、わざと分らなくする術だらう。あんな者を毎晩飽きずに唸る爺さんの氣が知れない。おれは謠所の騷ぎぢやない。月給を上げてやらうと云ふから、別段欲しくもなかつたが、入らない金を餘して置くのも勿體ないと思つて、よろしいと承知したのだが、轉任したくないものを無理に轉任させて其男の月給の上前を跳ねるなんて不人情な事が出來るものか。當人がもとの通りでいゝと云ふのに延岡下り迄落ちさせるとは一體どう云ふ了見だらう。太宰權帥でさへ博多近邊で落ちついたものだ、河合又五郎だつて相良でとまつてるぢやないか。とにかく赤シャツの所へ行つて斷つて來なくつちやあ氣が濟まない。

小倉の袴をつけて又出掛けた。大きな玄關へ突つ立つて頼むと云ふと、又例の弟が取次に出て來た。おれの顏を見てまた來たかと云ふ眼附をした。用があれば二度だつて三度だつて來る。よる夜なかだつて叩き起こさないとは限らない。教頭の所へ御機嫌伺ひにくる樣なおれと見損なつてるか。是でも月給が入らないから返しに來たんだ。すると弟が今來客中だと云ふから、玄關でいゝから一寸御目にかゝ

りたいと云つたら奥へ引き込んだ。足元を見ると、疊付きの薩摩下駄がある。奥でもう萬歳ですよと云ふ聲が聞こえる。御客とは野だだなと氣がついた。野だでなくては、あんな黄色い聲を出して、こんな藝人じみた下駄を穿くものはない。

しばらくすると、赤シャツがランプを持つて玄關迄出て來て、まあ上がり給へ、外の人ぢやない吉川君だ、と云ふから、いえ此所で澤山です。一寸話せばいゝんです、と云つて、赤シャツの顔を見ると金時の様だ。野だ公と一杯飲んでると見える。

―さつき僕の月給をあげてやると云ふ御話しでしたが、少し考へが變つたから斷りに來たんです―

赤シャツはランプを前へ出して、奥の方からおれの顔を眺めたが、咄嗟の場合返事をしかねて茫然として居る。増給を斷る奴が世の中にたつた一人飛び出して來たのを不審に思つたのか、斷るにしても、今歸つた許りで、すぐ出直して來なくつてもよささうなものだと呆れ返つたのか、又は双方合併したのか、妙な口をして突つ立つた儘である。

―あの時承知したのは、古賀君が自分の希望で轉任すると云ふ話でしたからで……―

―古賀君は全く自分の希望で半ば轉任するんです―

―さうぢやないんです、こゝに居たいんです。元の月給でもいゝから、郷里に居たいのです―

―君は古賀君から、さう聞いたのですか―

―そりや當人から、聞いたんぢやありません―

―ぢや誰から御聞きです―

―僕の下宿の婆さんが、古賀さんの御母さんから聞いたのを今日僕に話したのです―

―ぢや、下宿の婆さんがさう云つたのですね―

―まあさうです―

―それは失禮ながら少し違ふでせう。あなたの仰しやる通りだと、下宿屋の婆さんの云ふ事は信ずるが、教頭の云ふ事は信じないと云ふ様に聞こえるが、さう云ふ意味に解釋して差し支へないでせうか―

おれは一寸困つた。文學士なんてものは矢つ張りえらいもんだ。妙な所へこだはつて、ねちねち押し寄せてくる。おれはよく親父から貴様はそゝつかしくて駄目だ駄目だと云はれたが、成程少々そゝつかしい様だ。婆さんの話しを聞いてはつと思つて飛び出して來たが、實はうらなり君にもうらなりの御母さんにも逢つて詳しい事情は聞いて見なかつたのだ。だから斯う文學士流に斬り付けられると、一寸受け留めにくい。

正面からは受け留めにくいが、おれはもう赤シャツに對して不信任を心の中で申し渡して仕舞つた。下宿の婆さんもけちん坊の慾張り屋に相違ないが、嘘は吐かない女だ、赤シャツの様に裏表はない。おれは仕方がないから、かう答へた。

―あなたの云ふ事は本當かも知れないですが―とにかく増給は御免蒙ります―

―それは益可笑しい。今君がわざわざ御出でに成つたのは増俸を受けるには忍びない理由を見出したからの様に聞こえたが、其理由が僕の説明で取り去られたにも拘はらず増俸を否まれるのは少し解しかねる様ですね―

―解しかねるかも知れませんがね。とに角斷りますよ」

―そんなに否なら強ひてとまでは云ひませんが、さう二三時間のうちに、特別の理由もないのに豹變しちや、將來君の信用にかゝはる―

「かゝはつても構はないです」

―そんな事はない筈です、人間に信用程大切なものはありませんよ。よしんば今一歩譲つて、

—下宿の主人が……—

—主人ぢゃない、婆さんです—

どちらでも宜しい。下宿の婆さんが君に話した事を事實とした所で、君の増給は古賀君の所得を削つて得たものではないでせう。古賀君は延岡へ行かれる。其代りがくる。其代りが古賀君よりも多少低給で來てくれる。其剩餘を君に廻すと云ふのだから、君は誰にも氣の毒がる必要はない筈です。古賀君は延岡で只今よりも榮進される、新任者は最初からの約束で安くくる。それで君が上がられゝば、是程都合のいゝ事はないと思ふですがね。いやなら否でもいゝが、もう一返うちでよく考へて見ませんか

おれの頭はあまりえらくないのだから、何時もなら、相手がかう云ふ巧妙な辯舌を揮へばおやさうかな、それぢゃ、おれが間違つてたと恐れ入つて引きさがるのだけれども、今夜はさうは行かない。こゝへ來た最初から赤シャツは何だか蟲が好かなかつた。途中で親切な女見た様な男だと思ひ返した事はあるが、それが親切でも何でもなさゝうなので、反動の結果今ぢゃ餘つ程厭になつて居る。だから先がどれ程うまく論理的に辯論を逞しくしようとも、堂々たる教頭流におれを遣り込めようとも、そんな事は構はない。議論のいゝ人が善人とはきまらない。遣り込められる方が惡人とは限らない。表向は赤シャツの方が重々尤もだが、表向がいくら立派だつて、腹の中迄惚れさせる譯には行かない。金や威力や理窟で人間の心が買へる者なら、高利貸でも巡査でも大學教授でも一番人に好かれなくてはならない。中學の教頭位な論法でおれの心がどう動くものか。人間は好き嫌ひで働くものだ。論法で働くものぢゃない。

あなたの云ふ事は尤もですが、僕は増給がいやになつたんですから、まあ斷ります。考へたつて同じ事です。左様なら」と云ひすてゝ門を出た。頭の上には天の川が一筋かゝつて居る。

九

うらなり君の送別會のあると云ふ日の朝、學校へ出たら、山嵐が突然、君先達てはいか銀が來て、君が亂暴して困るから、どうか出る様に話して見れと頼んだから、眞面目に受けて、君に出てやれと話したのだが、あとから聞いて見ると、あいつは惡い奴で、よく僞筆へ贋落款抔を押して賣りつけるさうだから、全く君の事も出鱈目に違ひない。君に懸物や骨董を賣りつけて、商賣にしようと思つてた所が、君が取り合はないで儲けがないものだから、あんな作りごとをこしらへて胡魔化したのだ。僕はあの人物を知らなかつたので君に大變失敬した、勘辨し給へと長々しい謝罪をした。

おれは何とも云はずに、山嵐の机の上にあつた、一錢五厘をとつておれの蝦蟇口のなかへ入れた。山嵐は君それを引き込めるのかと不審さうに聞くから、うんおれは君に奢られるのがいやだつたから、是非返す積りで居たが、其後段々考へて見ると矢つ張り奢つて貰ふ方がいゝ様だから、引き込ますんだと説明した。山嵐は大きな聲をしてアハヽヽと笑ひながら、そんなら、何故早く取らなかつたのだと聞いた。實は取らう取らうと思つてたが、何だか妙だから其儘にして置いた。近來は學校へ來て一錢五厘を見るのが苦になる位いやだつたと云つたら、君は餘つ程負け惜しみの強い男だと云ふから、君は餘つ程剛情張りだと答へてやつた。それから二人の間にこんな問答が起こつた。

—君は一體どこの産だ—

—おれは江戸つ子だ—

—うん江戸つ子か、道理で負け惜しみが強いと思つた」

「君はどこだ」
「僕は會津だ」
「會津つぽか、強情な譯だ。今日の送別會へ行くのかい」
「行くとも、君は？」
「おれは無論行くんだ。古賀さんが立つ時は、濱迄見送りに行かうと思つてる位だ」
「送別會は面白いぜ、出て見給へ。今日は大いに飲む積りだ」
「勝手に飲むがいゝ。おれは肴を食つたら、すぐ歸る。酒なんか飲む奴は馬鹿だ」
「君はすぐ喧嘩を吹き懸ける男だ。成程江戸つ子の輕俳な風を、よく、あらはしてる」
「何でもいゝ、送別會へ行く前に一寸おれの家へ御寄り、話しがあるから」

山嵐は約束通りおれの下宿へ寄つた。おれは此間から、うらなり君の顔を見る度に氣の毒で堪らなかつたが、愈送別の今日となつたら、何だか憐れつぽくつて、出來る事なら、おれが代りに行つてやりたい樣な氣がしだした。それで送別會の席上で、大いに演説でもして其行を盛にしてやりたいと思ふのだが、おれのべらんめえ調子ぢや、到底物にならないから、大きな聲を出す山嵐を雇つて、一番赤シャツの荒膽を挫いでやらうと考へ付いたから、わざ〳〵山嵐を呼んだのである。

おれは先づ冒頭としてマドンナ事件から說き出したが、山嵐は無論マドンナ事件はおれより詳しく知つて居る。おれが野芹川の土手の話をして、あれは馬鹿野郎だと云つたら、山嵐が君は誰を捕まへても馬鹿呼ばはりをする。今日學校で自分の事を馬鹿と云つたぢやないか。自分が馬鹿なら、赤シャツは馬鹿ぢやない。自分は赤シャツの同類ぢやないと主張した。夫ぢや赤シャツは腑拔の呆助だと云つたら、さうかも知れないと山嵐は大いに賛成した。山嵐は强い事は强いが、こんな言葉になると、おれより遙かに字を知つて居ない。會津つぽなんてものはみんな、こんな、ものなんだらう。

夫から增給事件と將來重く登用すると赤シャツが云つた話をしたら山嵐はふゝんと鼻から聲を出して、それぢや僕を免職する考へだなと云つた。免職する積りだつて、君は免職になる氣かと聞いたら、誰がなるものか、自分が免職になるなら、赤シャツも一所に免職させてやると大いに威張つた。どうして一所に免職させる氣かと押して尋ねたら、そこはまだ考へて居ないと答へた。山嵐は强さうだが、智慧はあまりなささうだ。おれが增給を斷つたと話したら、大將大きに喜んで流石江戸つ子だ、えらいと賞めてくれた。

うらなりが、そんなに厭がつてゐるなら、何故留任の運動をしてやらなかつたと聞いて見たら、うらなりから話を聞いた時は、既にきまつて仕舞つて、校長へ二度、赤シャツへ一度行つて談判して見たが、どうする事も出來なかつたと話した。夫に就いても古賀があまり好人物過ぎるから困る。赤シャツから話があつた時、斷然斷わるか、一應考へて見ますと逃げればいゝのに、あの辯舌に胡魔化されて、卽席に許諾したものだから、あとからお母さんが泣きついても、自分が談判に行つても役に立たなかつたと非常に殘念がつた。

今度の事件は全く赤シャツが、うらなりを遠ざけて、マドンナを手に入れる策略なんだらうとおれが云つたら、無論さうに違ひない。あいつは大人しい顔をして、惡事を働いて、人が何か云ふと、ちやんと逃道を拵へて待つてるんだから、餘つ程奸物だ。あんな奴にかゝつては鐵拳制裁でなくつちや利かないと、瘤だらけの腕をまくつて見せた。おれは序だから、君の腕は强さうだな柔術でもやるかと聞いて見た。す

ると大將の腕へ力瘤を入れて、一寸摑んで見ろと云ふから、指の先で揉んで見たら、何の事はない湯屋にある輕石の樣なものだ。

おれは餘り感心したから、君その位の腕なら、赤シャツの五人や六人は一度に張り飛ばされるだらうと聞いたら、無論さと云ひながら、曲げた腕を伸ばしたり、縮ましたりすると、力瘤がぐるり〳〵と皮のなかで廻轉する。頗る愉快だ。山嵐の證明する所によると、かんじん綯りを二本より合はせて、この力瘤の出る所へ卷きつけて、うんと腕を曲げると、ぷつりと切れるさうだ。かんじんよりなら、おれにも出來さうだと云つたら、出來るものか、出來るならやつて見ろと來た。切れないと外聞がわるいから、おれは見合はせた。

君どうだ、今夜の送別會に大いに飲んだあと、赤シャツと野だを撲つてやらないかと面白半分に勸めて見たら、山嵐はさうだなと考へて居たが、今夜はまあよさうと云つた。何故と聞くと、今夜は古賀に氣の毒だから――それにどうせ撲る位なら、あいつらの惡い所を見屆けて現場で撲らなくつちや、こつちの落度になるからと、分別のありさうな事を附加した。山嵐でもおれよりは考へがあると見える。

ぢや演説をして古賀君を大いにほめてやれ、おれがすると江戸つ子のぺら〳〵になつて重みがなくていけない。さうして、きまつた所へ出ると、急に溜飲が起つて咽喉の所へ、大きな丸が上がつて來て言葉が出ないから、君に讓るからと云つたら、妙な病氣だな、ぢや君は人中ぢや口は利けないんだね、困るだらう、と聞くから、何そんなに困りやしないと答へて置いた。

さうかうする内に時間が來たから、山嵐と一所に會場へ行く。會場は花晨亭と云つて、當地で第一等の料理屋ださうだが、おれは一度も足を入れた事がない。もとの家老とかの屋敷を買ひ入れて、其儘開業したと云ふ話だが、成程見懸けからして嚴めしい構へだ。家老の屋敷が料理屋になるのは、陣羽織を縫ひ直して、胴着にする樣なものだ。

二人が着いた頃には、人數ももう大概揃つて、五十疊の廣間に二つ三つ人間の塊まりが出來て居る。五十疊丈に床は素敵に大きい。おれが山城屋で占領した十五疊敷の床とは比較にならない。尺を取つて見たら二間あつた。右の方に赤い模樣のある瀨戸物の瓶を据ゑて、其中に松の大きな枝が插してある。松の枝を插して何にする氣か知らないが、何ヶ月立つても散る氣遣ひがないから、錢が懸らなくつて、よからう。あの瀨戸物はどこで出來るんだと博物の教師に聞いたら、あれは瀨戸物ぢやありません、伊萬里ですと云つた。伊萬里だつて瀨戸物ぢやないかと、云つたら、博物はえへゝゝと笑つて居た。あとで聞いて見たら、瀨戸で出來る燒物だから、瀨戸と云ふのださうだ。おれは江戸つ子だから、陶器の事を瀨戸物といふのかと思つて居た。床の眞中に大きな懸物があつて、おれの顏位な大きさな字が二十八字かいてある。どうも下手なものだ。あんまり不味いから、漢學の先生に、なぜあんなまづいものを麗々と懸けて置くんですと尋ねた所、先生があれは海屋と云つて有名な書家のかいた物だと教へてくれた。海屋だか何だか、おれは今だに下手だと思つて居る。

やがて書記の川村がどうか御着席をと云ふから、柱があつて靠りかゝるのに都合のいゝ所へ坐つた。海屋の懸物の前に狸が羽織袴で着席すると、左に赤シャツが同じく羽織袴で陣取つた。右の方は今日の主人公だと云ふのでうらなり先生、是も日本服で控へて居る。おれは洋服だから、かしこまるのが窮屈だつたから、

すぐ胡坐をかいた。隣の體操教師は黑ずぼんで、ちやんとかしこまつて居る。體操の教師丈にいやに修業が積んで居る。やがて御膳が出る。徳利が竝ぶ。幹事が立つて、一言開會の辭を述べる。夫から狸が立つ、赤シャツが起つ。悉く送別の辭を述べたが、三人共申し合はせた樣にうらなり君の、良教師で、好人物な事を吹聽して、今回去られるのは洵に殘念である、學校としてのみならず、個人として大いに惜しむ所であるが、御一身上の御都合で切に轉任を御希望になつたのだから致し方がないと云ふ意味を述べた。こんな嘘をついて送別會を開いて、それでちつとも恥づかしいとも思つて居ない。ことに赤シャツに至つて三人のうちで一番うらなり君をほめた。此良友を失ふのは實に自分に取つて大なる不幸であるとまで云つた。しかも其いひ方がいかにも尤もらしくつて、例のやさしい聲を一層やさしくして述べ立てるのだから、始めて聞いたものは、誰でも屹度だまされるに極まつてる。マドンナも大方此手で引つ掛けたんだらう。赤シャツが送別の辭を述べ立ててゐる最中、向う側に坐つて居た山嵐がおれの顏を見て一寸稻光をさした。おれは返電として人指し指でべつかんこうをして見せた。

赤シャツが席に復するのを待ちかねて、山嵐がぬつと立ち上がつたから、おれは嬉しかつたので、思はず手をぱち／＼と拍つた。すると狸を始め一同が悉くおれの方を見たには少々困つた。山嵐は何を云ふかと思ふと只今校長始めことに教頭は古賀君の轉任を非常に殘念がられたが、私は少々反對で古賀君が一日も早く當地を去られるのを希望して居ります。延岡は僻遠の地で、當地に比べたら物質上の不便はあるだらう。が、聞く所によれば風俗の頗る淳朴な所で、職員生徒悉く上代樸直の氣風を帶びて居るさうである。心にもない御世辭を振り蒔いたり、美しい顏をして君子を陷れたりするハイカラ野郎は一人もないと信ずるからして、君の如き温良篤厚の士は必ず其地方一般の歡迎を受けられるに相違ない。吾輩は大いに古賀君の爲に此轉任を祝するのである。終りに臨んで君が延岡に赴任されたら、其地の淑女にして、君子の好逑となるべき資格あるものを撰んで一日も早く圓滿なる家庭をかたち作つて、かの不貞無節なる御轉婆を事實の上に於て慚死せしめん事を希望します。えへん／＼と二つばかり大きな咳拂ひをして席に着いた。おれは今度も手を叩かうと思つたが、又みんながおれの面を見るといやだから、やめにして置いた。山嵐が坐ると今度はうらなり先生が起つた。先生は御丁寧に、自席から、座敷の端の末座迄行つて、慇懃に一同に挨拶をした上、今般は一身上の都合で九州へ參る事になりましたに就いて、諸先生方が小生の爲に此の盛大なる送別會を御開き下さつたのは、まことに感銘の至りに堪へぬ次第で――ことに只今は校長、教頭其他諸君の送別の辭を頂戴して、大いに難有く服膺する譯であります。私は是から遠方へ參りますが、何卒從前の通り御見捨なく御愛顧の程を願ひます。とへえつく張つて席に戻つた。うらなり君はどこ迄人が好いんだか、殆ど底が知れない。自分がこんなに馬鹿にされてゐる校長や、教頭に恭しく御禮を云つてゐる。それも義理一遍の挨拶ならだが、あの樣子や、あの言葉つきや、あの顏つきから云ふと、心から感謝してゐるらしい。こんな聖人に眞面目に御禮を云はれたら、氣の毒になつて、赤面しさうなものだが狸も赤シャツも眞面目に謹聽して居る計りだ。

挨拶が濟んだら、あちらでもチュー、こちらでもチューと云ふ音がする。おれも眞似をして汁を飲んで見たがまづいもんだ。口取に蒲鉾は

ついてるが、どす黒くて竹輪の出來損ひである。刺身も並んでるが、厚くつて鮪の切身を生で食ふと同じ事だ。それでも隣近所の連中はむしや／＼旨さうに食つて居る。大方江戸前の料理を食つた事がないんだらう。
　其うち燗徳利が頻繁に往來し始めたら、四方が急に賑やかになつた。野だ公は恭しく校長の前へ出て盃を頂いてる。いやな奴だ。うらなり君は順々に獻酬をして、一巡周る積りと見える。甚だ御苦勞である。うらなり君がおれの前へ來て、一つ頂戴致しませうと袴のひだを正して申し込まれたから、おれも窮屈にズボンの儘かしこまつて、一盃差し上げた。折角參つて、すぐ御別れになるのは殘念ですね。御出立はいつです、是非濱迄御見送りをしませうと云つたら、うらなり君はいえ御用多の所決して夫には及びませんと答へた。うらなり君が何と云つたつて、おれは學校を休んで送る氣で居る。
　夫から一時間程するうちに席上は大分亂れて來る。まあ一杯、おや僕が飲めと云ふのに……などと呂律の巡りかねるのも一人二人出來て來た。少々退屈したから便所へ行つて、昔風な庭を星明りにすかして眺めて居ると山嵐が來た。どうだ最前の演說はうまかつたらう。と大分得意である。大賛成だが一ケ所氣に入らないと抗議を申し込んだら、どこが不賛成だと聞いた。
「美しい顔をして人を陷れる樣なハイカラ野郎は延岡に居らないから……と君は云つたらう」
「うん」
「ハイカラ野郎丈では不足だよ」
「おや何と云ふんだ」
「ハイカラ野郎のペテン師の、イカサマ師の、猫つ被りの、香具師の、モヽンガーの、岡つ引きの、わん／＼鳴けば犬も同然な奴とでも云ふがいゝ」
　おれには、さう舌は廻らない。君は能辯だ。第一單語を大變澤山知つてる。それで演說が出來ないのは不思議だ
「なにこれは喧嘩のときに使はうと思つて、用心の爲に取つて置く言葉さ。演說となつちや、さうは出ない」
「さうかな、然しぺら／＼出るぜ。もう一遍やつて見給へ」
「何遍でもやるさ、いゝか。――ハイカラ野郎のペテン師の、イカサマ師の……」
と云ひかけて居ると、緣側をどたばた云はして、二人ばかり、よろ／＼しながら馳け出して來た。
「兩君そりやひどい、――逃げるなんて、――僕が居るうちは決して逃がさない、さあのみ玉へ。――いかさま師……面白い、いかさま面白い。――さあ飲み玉へ」
とおれと山嵐をぐい／＼引つ張つて行く。實は此兩人共便所に來たのだが、醉つてるもんだから、便所へ這入るのを忘れて、おれ等を引つ張るのだらう。醉つ拂ひは目の中る所へ用事を拵へて、前の事はすぐ忘れて仕舞ふんだらう。
「さあ、諸君いかさま師を引つ張つて來た。さあ飲ましてくれ玉へ。いかさま師をうんと云ふ程、醉はしてくれ玉へ。君逃げちやいかん」
と逃げもせぬ、おれを壁際へ壓し附けた。諸方を見廻して見ると、膳の上に滿足な肴の乘つて居るのは一つもない。自分の分を綺麗に食ひ盡して、五六間先へ遠征に出た奴も居る。校長はいつ歸つたか姿が見えない。
　所へ御座敷はこちら？と藝者が三四人這入つて來た。おれも少し驚いたが、壁際へ押し附けられて居るんだから、凝として只見て居

た。すると今迄床柱へもたれて例の琥珀のパイプを自慢さうに啣へて居た、赤シャツが急に起つて、座敷を出にかゝつた。向うから這入つて来た藝者の一人が、行き違ひながら、笑つて挨拶をした。その一人は一番若くて一番奇麗な奴だ。遠くて聞こえなかつたが、おや今晩は位云つたらしい。赤シャツは知らん顔をして出て行つたぎり、顔を出さなかつた。大方校長のあとを追つ懸けて帰つたんだらう。

藝者が来たら座敷中急に陽気になつて、一同が鬨の聲を揚げて歓迎したのかと思ふ位、騒しい。そうして或る奴はなんこを攫む。その聲の大きな事、丸で居合抜の稽古の様だ。こつちでは拳を打つてる。よつ、はつ、と夢中で両手を振る所は、ダーク一座の操り人形より余つ程上手だ。向うの隅ではおい御酌だ、と徳利を振つて見て、酒だ〳〵と言ひ直して居る。どうも八釜しくて騒々しくつて堪らない。其うちで手持無沙汰に下を向いて考へ込んでるのはうらなり君許りである。自分の為に送別會を開いてくれたのは、自分の転任を惜しんでくれるんぢやない。みんなが酒を呑んで遊ぶ為だ。自分独りが手持無沙汰で苦しむ為だ。こんな送別會なら開いてもらはない方が余程ましだ。

しばらくしたら、銘々胴間聲を出して何か唄ひ始めた。おれの前へ来た一人の藝者が、あんた、なんぞ唄ひなはれ、と三味線を抱へたから、おれは唄はない、貴様唄つて見ろと云つたら、金や太鼓でねえ、迷子の迷子の三太郎と、どんどこ、どんのちやんちきりん、叩いて廻つて逢はれるものならば、わたしなんぞも、金や太鼓でどんどこ、どんのちやんちきりんと叩いて廻つて逢ひたい人がある、と二息にうたつて、おゝしんどと云つた。おゝしんどなら、もつと楽なものをやればいゝのに。

すると、いつの間にか傍へ来て坐つた、野だが、鈴ちやん逢ひたい人に逢つたと思つたら、すぐ御帰りで、御気の毒さま見た様でげすと相変らず噺し家見た様な言葉使ひをする。知りまへんと藝者はつんと澄ました。野だは頓着なく、たま〳〵逢ひは逢ひながら……と、いやな聲を出して義太夫の真似をやる。おきなはれと藝者は平手で野だの膝を叩いたら野だは恐悦して笑つてる。此藝者は赤シャツに挨拶をした奴だ。藝者に叩かれて笑ふなんて、野だも御目出度い者だ。鈴ちやん僕が紀伊の國を踊るから、一つ弾いて頂戴と云ひ出した。野だは此上まだ踊る気で居る。

向うの方で漢學の御爺さんが歯のない口を歪めて、そりや聞えません伝兵衛さん、お前とわたしのその中は……と迄は無事に済ましたが、それから？と藝者に聞いて居る。爺さんなんて物覚えのわるいものだ。一人が博物を捕まへて、近頃こないなのが、でけましたぜ、弾いて見まほうか。よう聞いて居なはれや――花月巻、白いリボンのハイカラ頭、乗るは自転車弾くはヴァイオリン、半可の英語でぺら〳〵と、I am glad to see you と唄ふと、博物は成程面白い、英語入りだねと感心して居る。

山嵐は馬鹿に大きな聲を出して、藝者、藝者と呼んで、おれが剣舞をやるから、三味線を弾けと号令を下した。藝者はあまり乱暴な聲なので、あつけに取られて返事もしない。山嵐は委細構はず、ステッキを持つて来て、踏破千山萬岳烟と真中へ出て、独りで隠し藝を演じて居る。所へ野だが既に紀伊の國を済まして、かつぽれを済まして、棚の達磨さんを済まして、丸裸の越中褌一つになつて、棕梠箒を小脇に抱い込んで、日清談判破裂して……と座敷中練りあるき出した。まるで気狂だ。

おれはさつきから苦しさうに袴も脱がず控

へつて居るうらなり君が氣の毒でたまらなかつたが、なんぼ自分の送別會だつて、越中褌の裸踊まで羽織袴で我慢して見て居る必要はあるまいと思つたから、そばへ行つて、古賀さんもう歸りませうと退去を勸めて見た。するとうらなり君は今日は私の送別會だから、私が先へ歸つては失禮です、どうぞ御遠慮なくと動く氣色もない。なに構ふもんですか、送別會なら、送別會らしくするがいゝです、あの樣を御覧なさい、氣狂會です、さあ行きませうと、進まないのを無理に勸めて、座敷を出かゝる所へ、野だが箒を振り〳〵進行して來て、や御主人が先へ歸るとはひどい。日清談判だ。歸せないと箒を横にして行く手を塞いだ。おれはさつきから肝癪が起つて居る所だから、日清談判なら貴樣はちやん〳〵だらうと、いきなり拳骨で、野だの頭をぽかりと喰はしてやつた。野だは二三秒の間毒氣を抜かれた體で、ぼんやりして居たが、おや是はひどい。御撲ちになつたのは情ない。この吉川を御打擲とは恐れ入つた。愈以て日清談判だ。とわからぬ事をならべて居る所へ、うしろから山嵐が何か騷動が始まつたと見て取つて、劍舞をやめて、飛んで來たが、此ていたらくを見て、いきなり頸筋をうんと攫んで引き戻した。日清……いたい。いたい。どうも是は亂暴だと振りもがく所を横に捩つたら、すとんと倒れた。あとはどうなつたか知らない。途中でうらなり君に別れて、うちへ歸つたら十一時過ぎだつた。

十一

祝勝會で學校は御休みだ。練兵場で式があると云ふので、狸は生徒を引率して參列しなくてはならない。おれも職員の一人として一所にくつついて行くんだ。町へ出ると日の丸だらけで、まぼしい位である。學校の生徒は八百人もあるのだから、體操の教師が隊伍を整へて、一組一組の間を少しづゝ明けて、それへ職員が一人か二人宛監督として割り込む仕掛である。仕掛だけは頗る巧妙なものだが、實際は頗る不手際である。生徒は子供の上に、生意氣で、規律を破らなくつては生徒の體面にかゝはると思つてる奴等だから、職員が幾人ついて行つたつて何の役に立つもんか。命令も下さないのに勝手な軍歌をうたつたり、軍歌をやめるとワーと譯もないのに鬨の聲を揚げたり、丸で浪人が町内をねり歩いて居る樣なものだ。軍歌も鬨の聲も揚げない時はがや〳〵何か喋舌つてる。喋舌らないでも歩行けさうなもんだが、日本人はみな口から先へ生れるのだから、いくら小言を云つたつて聞きつこない。喋舌るのも只喋舌るのではない、教師のわる口を喋舌るんだから、下等だ。おれは宿直事件で生徒を謝罪さして、まあ是ならよからうと思つて居た。所が實際は大違ひである。下宿の婆さんの言葉を借りて云へば、正に大違ひの勘五郎である。生徒があやまつたのは心から後悔してあやまつたのではない。只校長から、命令されて、形式的に頭を下げたのである。商人が頭計り下げて、狡い事をやめないと一般で生徒も謝罪丈はするが、いたづらは決してやめるものでない。よく考へて見ると世の中はみんな此生徒の樣なものから成立して居るかも知れない。人があやまつたり詫びたりするのを、眞面目に受けて勘辨するのは正直過ぎる馬鹿と云ふんだらう。あやまるのも假りにあやまるので、勘辨するのも假りに勘辨するのだと思つてれば差し支へはない。本當にあやまらせる氣なら、本當に後悔する迄叩きつけなくてはいけない。

おれが組と組の間に這入つて行くと、天麩羅だの、團子だの、と云ふ聲が絶えずする。而も大勢だから、誰が云ふのだか分らない。よし分

つてもおれの事を天麩羅と云つたんぢやありません、團子と申したのぢやありません、それは先生が神經衰弱だから、ひがんでさう聞くんだ位云ふに極まつてる。こんな卑劣な根性は封建時代から養成した此土地の習慣なんだから、いくら云つて聞かしたつて、教へてやつたつて、到底直りつこない。こんな土地に一年も居ると、潔白なおれも、この眞似をしなければならなく、なるかも知れない。向うでうまく言ひ拔けられる樣な手段で、おれの顏を汚すのを拋つて置く、樗蒲一はない。向うが人ならおれも人だ。生徒だつて、子供だつて、づう體はおれより大きいや。だから刑罰として何か返報をしてやらなくては義理がわるい。所がこつちから返報をする時分に尋常の手段で行くと、向うから逆捩ぢを食はして來る。貴樣がわるいからだと云ふと、初手から逃げ路が作つてある事だから、滔々と辯じ立てる。辯じ立てて置いて、自分の方を表向き丈立派にして夫から、こつちの非を攻撃する。もと〳〵、返報にした事だから、こちらの辯護は向うの非が擧がらない上は辯護にならない。つまりは向うから手を出して置いて、世間體はこつちが仕掛けた喧嘩の樣に、見傚されて仕舞ふ。大變な不利益だ。夫なら向うのやるなり、愚迂多良童子を極め込んで居れば、向うは益増長する計り、大きく云へば世の中の爲にならない。そこで仕方がないから、こつちも向うの筆法を用ひて捕まへられないで、手の附け樣のない返報をしなくてはならなくなる。さうなつては江戸つ子も駄目だ。駄目だが一年もかうやられる以上は、おれも人間だから駄目でも何でも左樣ならなくつちや始末がつかない。どうしても早く東京へ歸つて清と一所になるに限る。こんな田舍に居るのは墮落しに來て居る樣なものだ。新聞配達をしたつて、こ迄墮落するよりはましだ。

かう考へて、いや〳〵、附いてくると、何だか先鋒が急にがや〳〵騷ぎ出した。同時に列はぴたりと留まる。變だから、列を右へはつして、向うを見ると、大手町を突き當つて藥師町へ曲がる角の所で、行き詰まつたぎり、押し返したり、押し返されたりして揉み合つて居る。前の方から靜かに靜かにと聲を嗄らして來た體操教師に何ですと聞くと、曲り角で中學校と師範學校が衝突したんだと云ふ。

中學と師範とはどこの縣下でも犬と猿の樣に仲がわるいさうだ。なぜだかわからないが、丸で氣風が合はない。何かあると喧嘩をする。大方狹い田舍で退屈だから、暇潰しにやる仕事なんだらう。おれは喧嘩は好きな方だから、衝突と聞いて、面白半分に馳け出して行つた。すると前の方にゐる連中は、しきりに何だ地方稅の癖に、引き込めと、怒鳴つてる。後からは押せ押せと大きな聲を出す。おれは邪魔になる生徒の間をくゞり拔けて、曲り角へもう少しで出ようとした時に、前へ！と云ふ高い鋭い號令が聞こえたと思つたら師範學校の方は肅々として進行を始めた。先を爭つた衝突は、折合がついたには相違ないが、つまり中學校が一歩を讓つたのである。資格から云ふと師範學校の方が上ださうだ。

祝勝の式は頗る簡單なものであつた。旅團長が祝詞を讀む、知事が祝詞を讀む。參列者が萬歲を唱へる。それで御仕舞だ。餘興は午後にあると云ふ話だから、一先づ下宿へ歸つて、此間から氣に掛かつてゐた、清への返事を書きかけた。今度はもつと詳しく書いてくれとの注文だから、可成念入に認めなくつちやならない。然しいざとなつて、半切を取り上げると、書く事は澤山あるが、何から書き出していゝか、わからない。あれにしようか、あれにしようか、あれは面倒臭い。これにしようか、是は詰まらない。

何か、すら〱と出て、筆が折れなくつて、さらして清が面白がる樣なものはないかしらん、と考へて見ると、そんな注文通りの事件は一つもなさゝうだ。おれは墨を磨つて、筆をしめして、巻紙を眺めて、—巻紙を眺めて、筆をしめして、墨を磨つて—同じ所作を同じ樣に何返も繰り返したあと、おれにはとても手紙はかけるものではないと、諦めて硯の蓋をして仕舞つた。手紙なんぞをかくのは面倒臭い。矢つ張り東京迄出掛けて行つて、逢つて話しをする方が簡便だ。清の心配は察しないでもないが、清の注文通りの手紙をかくのは三七日の斷食よりも苦しい。

おれは筆と巻紙を抛り出して、ごろりと轉がつて肱枕をして庭の方を眺めて見たが、矢つ張り清の事が氣にかゝる。其時おれはかう思つた。かうして遠くへ來て迄、清の身の上を案じてゐてやりさへすれば、おれの眞心は清に通じるに違ひない。通じさへすれば手紙なんぞやる必要はない。やらなければ無事で暮らしてると思つてるだらう。たよりは死んだ時か、病氣の時か、何か事の起こつた時にやりさへすればいい譯だ。

庭は十坪程の平庭で、是と云ふ植木もない。只一本の蜜柑があつて、塀のそとから、目標になる程高い。おれはうちへ歸ると、いつでも此蜜柑を眺める。東京を出た事のないものには蜜柑の生つてゐる所は頗る珍しいものだ。あの青い實が段々熟してきて、黄色になるんだらうが、定めて綺麗だらう。今でも最う半分色の變つたのがある。婆さんに聞いて見ると、頗る水氣の多い、旨い蜜柑ださうだ。今に熟れたら、たんと召し上がれと云つたから、毎日少し宛食つてやらう。もう三週間もしたら、充分食へるだらう。まさか三週間内に此所を去る事もなからう。

おれが蜜柑の事を考へて居るところへ、偶然山嵐が話しにやつて來た。今日は祝勝會だから、君と一所に御馳走を食はうと思つて牛肉を買つて來たと、竹の皮の包を袂から引きずり出して、座敷の眞中へ抛り出した。おれは下宿で芋責め豆腐責めになつてる上、蕎麥屋行き、團子屋行きを禁じられてる際だから、そいつは結構だと、すぐ婆さんから鍋と砂糖をかり込んで、煮方に取りかゝつた。

山嵐は無暗に牛肉を頬張りながら、君あの赤シャツが藝者に馴染のある事を知つてるかと聞くから、知つてるとも、此間うらなりの送別會の時に來た一人がさうだらうと云つたら、さうだ僕は此頃漸く勘づいたのに、君は中々敏捷だと大いにほめた

—あいつは、ふた言目には品性だの、精神的娯樂だのと云ふ癖に、裏へ廻つて、藝者と關係なんかつけとる、怪しからん奴だ。夫もほかの人が遊ぶのを寛容するならいゝが、君が蕎麥屋へ行つたり、團子屋へ這入るのさへ取締上害になると云つて、校長の口を通じて注意を加へたぢやないか。

—うん、あの野郎の考ぢや藝者買ひは精神的娯樂で、天麩羅や、團子は物質的娯樂なんだらう。精神的娯樂なら、もつと大つぴらにやるがいい。何だあの樣は。馴染の藝者が這入つてくると、入れ代りに席をはづして逃げるなんて、どこ迄も人を胡魔化す氣だから氣に食はない。さうして人が攻撃すると、僕は知らないとか、露西亞文學だとか、俳句が新體詩の兄弟分だとか云つて、人を烟にまく積りなんだ。あんな弱蟲は男ぢやないよ。全く御殿女中の生れ變りか何かだぜ。ことによると、彼奴のおやぢは湯島のかげまかも知れない。

「湯島のかげまた何だ」

「何でも男らしくないもんだらう。—君そこ

の所はまだ覺えて居ないぜ。そんなのを食ふと條蟲が湧くぜ」

「さうか、大抵大丈夫だらう。それで赤シャツは人に隱れて、溫泉の町の角屋へ行つて、藝者と會見するさうだ」

「角屋つて、あの宿屋か」

「宿屋兼料理屋さ。だからあいつを一番へこます爲には彼奴が藝者をつれて、あすこへ這入り込む所を見屆けて置いて面詰するんだね」

「見屆けるつて、夜番でもするのかい」

「うん、角屋の前に枡屋と云ふ宿屋があるだらう。あの表二階をかりて障子へ穴をあけて見て居るのさ」

「見て居るときに來るかい」

「來るだらう。どうせ一晩ぢやいけない。二週間許りやる積りでなくつちや」

「隨分疲れるぜ。僕あおやぢの死ぬとき一週間許り徹夜して看病した事があるが、あとでぼんやりして、大いに弱つた事がある」

「少し位身體が疲れたつて構はんさ、あんな奸物をあの儘にして置くと、日本の爲にならないから、僕が天に代つて誅戮を加へるんだ」

「愉快だ。さう事が極まれば、おれも加勢してやる。夫で今夜から夜番をやるのかい」

「まだ枡屋に懸け合つてないから、今夜は駄目だ」

「それぢやいつから始める積りだい」

「近々のうちにやるさ。いづれ君に報知をするから、さうしたら加勢して呉れ給へ」

「よろしい、いつでも加勢する。僕は計略は下手だが、喧嘩とくると是で中々すばしこいぜ」

おれと山嵐がしきりに赤シャツ退治の計略を相談して居ると、宿の婆さんが出て來て學校の生徒さんが一人、堀田先生に御目にかゝりたいて御出でたぞなもし。今御宅へ參じたのぢやが、御留守ぢやけれ、大方こゝぢやらうてゝ搜し當てて御出でたのぢやがなもしと閾の所へ膝を突いて山嵐の返事を待つてる。山嵐はさうですかと玄關迄出て行つたが、やがて歸つて來て、君、生徒が祝勝會の餘興を見に行かないかつて誘ひに來たんだ。今日は高知から何とか踊をしに、わざわざこゝ迄多人數乘り込んで來てゐるのだから、是非見物しろ滅多に見られない踊だと云ふんだ、君も一所に行つて見給へと山嵐は大いに乘り氣で、おれに同行を勸める。おれは踊なら東京で澤山見て居る。毎年八幡樣の御祭には屋臺が町內へ廻つてくるんだから汐酌でも何でもちやんと心得て居る。

土佐つぽの馬鹿踊なんか見たくもないと思つたけれども、折角山嵐が勸めるもんだから、つい行く氣になつて門へ出た。山嵐を誘ひに來たものは誰かと思つたら赤シャツの弟だ。妙な奴が來たもんだ。

會場へ這入ると回向院の相撲か本門寺の御會式の樣に幾流となく長い旗を所々に植ゑ附けた上に、世界萬國の國旗を悉く借りて來た位、繩から繩、綱から綱へ渡しかけて、大きな空がいつになく賑やかに見える。東の隅に一夜作りの舞臺を設けて、こゝで所謂高知の何とか踊をやるんださうだ。舞臺を右へ半町許りをくると葭簀の圍ひをして、活花が陳列してある。みんなが感心して眺めて居るが、一向くだらないものだ。あんなに草や竹を曲げて嬉しがるなら、脊蟲の色男や、跛の亭主を持つて自慢するがよからう。

舞臺とは反對の方面で、頻りに花火を揚げる。花火の中から風船が出た。帝國萬歲とかいてある。天主の松の上をふはり〳〵と飛んで營所のなかへ落ちた。次はぽんと音がして黑い團子が、しゆつと秋の空を射拔く樣に揚がると、それがおれの頭の上で、ぽかりと割れて、青い烟が傘の骨の樣に開いて、だら〳〵と空中に流れ込ん

だ。風船がまた上がつた。今度は陸海軍萬歲と赤地に白く染め拔いた奴が風に搖られて、溫泉の町から相生村の方へ飛んでいつた。大方觀音樣の境內へでも落ちたらう。

　式の時は左程でもなかつたが、今度は大變な人出だ。田舍にもこんなに人間が住んでるかと驚いた位うぢや〱して居る。利口な顏はあまり見當たらないが、數から云ふと慥かに馬鹿に出來ない。其うち評判の高知の何とか踊が始まつた。踊といふから藤間か何ぞのやる踊かと早合點して居たが、是は大間違であつた。

　いかめしい後鉢卷をして、立つ附け袴を穿いた男が十人許り宛、舞臺の上に三列に並んで、其三十人が悉く拔き身を携げて居るには魂消た。前列と後列の間は僅か一尺五寸位だらう、左右の間隔は夫より短かいとも長くはない。たつた一人列を離れて舞臺の端に立つてるのがある許りだ。此仲間外れの男は袴丈はつけて居るが、後鉢卷は儉約して、拔き身の代りに、胸へ太鼓を懸けて居る。太鼓は太神樂の太鼓と同じ物だ。此男がやがて、いやあ、はあゝと吞氣な聲を出して、妙な謠をうたひながら、太鼓をぼこぼん、ぼこぼんと叩く。歌の調子は前代未聞の不思議なものだ。三河萬歲と普陀洛やの合併したものと思へば大した間違ひにはならない。

　歌は頗る悠長なもので、夏分の水飴の樣に、だらしがないが、句切りをとる爲にぼこぼんを入れるから、のべつの樣でも拍子は取れる。此拍子に應じて三十人の拔き身がぴか〱と光るのだが、是は又頗る迅速な御手際で、拜見して居ても冷々する。隣も後も一尺五寸以內に生きた人間が居て、其人間が又切れる拔き身を自分と同じ樣に振り舞はすのだから、餘程調子が揃はなければ、同志擊ちを始めて怪我をする事になる。夫も動かないで刀丈前後とか上下とかに振るのなら、まだ危險もないが、三十人が一度に足踏をして横を向く時がある。ぐるりと廻る事がある。膝を曲げる事がある。隣のものが一秒でも早過ぎるか遲過ぎれば、自分の鼻は落ちるかも知れない。隣の頭はそがれるかも知れない。拔き身の動くのは自由自在だが、其動く範圍は一尺五寸角の柱のうちにかぎられた上に、前後左右のものと同方向に同速度にひらめかなければならない。こいつは驚いた、中々以て汐酌や關の戶の及ぶ所でない。聞いて見ると、是は甚だ熟練の入るもので容易な事では、かう云ふ風に調子が合はないさうだ。ことに六づかしいのは、かの萬歲節のぼこぼん先生ださうだ。三十人の足の運びも、手の働きも、腰の曲げ方も、悉くこのぼこぼん君の拍子一つで極まるのださうだ。傍で見て居ると、此大將が一番吞氣さうに、いやあ、はあゝと氣樂にうたつてるが、其實は甚だ責任が重くつて非常に骨が折れるとは不思議なものだ。

　おれと山嵐が感心のあまり此踊を餘念なく見物して居ると、半町許り、向うの方で急にわつと云ふ鬨の聲がして、今迄穩やかに諸所を縱覽して居た連中が、俄かに波を打つて、右左に搖ぎ始める。喧嘩だ喧嘩だと云ふ聲がすると思ふと、人の袖を潛り拔けて來た、赤シャツの弟が、先生又喧嘩です、中學の方で、今朝の意趣返しをするんで、又師範の奴と決戰を始めた所です、早く來て下さいと云ひながら又人の波のなかへ潛り込んでどつかへ行つて仕舞つた。

　山嵐は世話の燒ける小僧だ又始めたのか、いい加減にすればいゝのにと逃げる人を避けながら一散に馳け出した。見て居る譯にも行かないから取り鎭める積りだらう、おれは無論の事逃げる氣はない。山嵐の踵をふんであとからすぐ現場へ馳けつけた。喧嘩は今が眞最中であ

る。師範の方は五六十人もあらうか、中學は慥かに三割方多い。師範は制服をつけてゐるが、中學は式後大抵は日本服に着換へてゐるから、敵味方はすぐわかる。然し入り亂れて組んづ、解れつ戰つてるから、どこから、どう手を附けて引き分けていゝか分らない。山嵐は困つたなと云ふ風で、暫らく此の亂雜な有樣を眺めて居たが、かうなつちや仕方がない。巡査がくると面倒だ。飛び込んで分けようと、おれの方を見て云ふから、おれは返事もしないでいきなり一番喧嘩の烈しさうな所へ躍り込んだ。止せ〳〵、そんな亂暴をすると學校の體面に關はる。よさないかと、出る丈の聲を出して敵と味方の分界線らしい所を突き貫けようとしたが、中々さう旨くは行かない。一二間這入つたら、出る事も引く事も出來なくなつた。目の前に比較的大きな師範生が、十五六の中學生と組み合つてゐる。止せと云つたら、止さないかと師範生の肩を持つて、無理に引き分けようとする途端にだれか知らないが、下からおれの足をすくつた。おれは不意を打たれて握つた肩を放して、横に倒れた。堅い靴でおれの背中の上へ乘つた奴がある。兩手と膝を突いて下から、跳ね起きたら、乘つた奴は右の方へころがり落ちた。起き上がつて見ると、三間許り向ふに山嵐の大きな身體が生徒の間に挾まりながら、止せ〳〵、喧嘩は止せ〳〵と揉み返されてるのが見えた。おい到底駄目だと云つて見たが聞こえないのか返事もしない。

ひゆうと風を切つて飛んで來た石が、いきなりおれの頰骨へ中つたなと思つたら、後からも、背中を棒でどやした奴がある。教師の癖に出て居る、打て打てと云ふ聲がする。教師は二人だ。大きい奴と、小さい奴だ。石を抛げろ。と云ふ聲もする。おれは、なに生意氣な事をぬかすな、田舍者の癖にと、いきなり傍に居た師範生の頭を張りつけてやつた。石が又ひゆうと來る。今度はおれの五分刈の頭を掠めて後ろの方へ飛んで行つた。山嵐はどうなつたか見えない。かうなつちや仕方がない。始めは喧嘩をとめに這入つたんだが、どやされたり、石をなげられたりして恐れ入つて引き下がるうんでれがんがあるものか。おれを誰だと思ふんだ。身長は小さくつても喧嘩の本場で修業を積んだ兄さんだと無茶苦茶に張り飛ばしたり張り飛ばされたりして居ると、やがて巡査だ巡査だ逃げろ逃げろと云ふ聲がした。今迄葛練りの中で泳いでる樣に身動きも出來なかつたのが、急に樂になつたと思つたら、敵も味方も一度に引き上げて仕舞つた。田舍者でも退却は巧妙だ。クロパトキンより旨い位である。

山嵐はどうしたかと見ると、紋附の一重羽織をずた〳〵にして、向ふの方で鼻を拭いて居る。鼻柱をなぐられて大分出血したんださうだ。鼻がふくれ上がつて眞赤になつて頗る見苦しい。おれは飛白の袷を着て居たから泥だらけになつたけれども、山嵐の羽織程な損害はない。然し頰ぺたがぴり〳〵して堪らない。山嵐は大分血が出て居るぜと教へてくれた。

巡査は十五六名來たのだが、生徒は反對の方面から退却したので、捕まつたのは、おれと山嵐丈である。おれらは姓名をつげて、一部始終を話したら、とも角も警察迄來いと云ふから、警察へ行つて、署長の前で事の顚末を述べて下宿へ歸つた。

十一

あくる日眼が覺めて見ると身體中痛くて堪らない。久しく喧嘩をしつけなかつたから、こんなに答へるんだらう。これぢやあんまり自慢も出來ないと床の中で考へて居ると、婆さんが四國新聞を持つて來て枕元へ置いてくれた。實は

新聞を見るのも退儀なんだが、男がこれしきの事に閉口たれて仕樣があるものかと無理に腹這ひになつて、寐ながら、二頁を開けて見ると、驚いた。昨日の喧嘩がちやんと出て居る。喧嘩の出て居るのは驚かないのだが、中學の教師堀田某と、近頃東京から赴任した生意氣なる某とが、順良なる生徒を使嗾して、此騒動を喚起せるのみならず、兩人は現場にあつて生徒を指揮したる上漫りに師範生に向つて暴行を擅にしたりと書いて、次にこんな意見が附記してある。本縣の中學は昔時より善良温順の氣風を以て全國の羨望する所なりしが、輕薄なる二豎子の爲に吾校の特權を毀損せられて、此不面目を全市に受けたる以上は、吾人は奮然として起つて其責任を問はざるを得ず。吾人は信ず、吾人が手を下す前に當局者は相當の處分を此無賴漢の上に加へて、彼等をして再び教育界に足を入るゝ餘地なからしむる事を。さうして一字毎にみんな黑點を加へて、御灸を据ゑた積りで居る。おれは床の中で、糞でも喰らへと云ひながら、むつくり飛び起きた。不思議な事に今迄身體の關節が非常に痛かつたのが、飛び起きると同時に忘れた樣に輕くなつた。

おれは新聞を丸めて庭へ抛げつけたが、まだ氣に入らなかつたから、わざ〳〵後架へ持つて行つて棄てゝ來た。新聞なんて無暗な嘘を吐くもんだ。世の中に何が一番法螺を吹くと云つて、新聞程の法螺吹きはあるまい。おれの云つて然る可き事をみんな向うで並べて居やがる。それに近頃東京から赴任した生意氣な某とは何だ。天下に某と云ふ名前の人があるか。考へて見ろ。是でも歴然とした姓もあり名もあるんだ。系圖が見たけりや多田滿仲以來の先祖を一人殘らず拜ましてやらあ。——顏を洗つたら、頰ぺたが急に痛くなつた。婆さんに鏡をかせと云つたら、けさの新聞を御見たかなもしと聞く。讀んで後架へ棄てゝ來た。欲しけりや拾つて來いと云つたら、驚いて引き下がつた。鏡で顏を見ると昨日と同じ樣に傷がついてゐる。是でも大事な顏だ、顏へ傷まで附けられた上、生意氣なる某などと某呼ばはりをされゝば澤山だ。

今日の新聞に辟易して學校を休んだ抔と云はれちや一生の名折れだから、飯を食つていの一番に出頭した。出てくる奴も、出て來る奴もおれの顏を見て笑つてゐる。何が可笑しいんだ。貴樣達にこしらへて貰つた顏ぢやあるまいし。其うち、野だが出て來て、いや昨日は御手柄で、——名譽の御負傷でげすか、と送別會の時に擲つた返報と心得たのか、いやに冷かしたから、餘計な事を言はずに繪筆でも舐めて居ろと云つてやつた。するとこりや恐れ入りやした。然し嘸御痛い事でげせうと云ふから、痛からうが痛くなからうがおれの面だ。貴樣の世話になるもんかと怒鳴りつけてやつたら、向う側の自席へ着いて矢つ張りおれの顏を見て隣の歴史の教師と何か內所話しをして笑つてゐる。

夫から山嵐が出頭した。山嵐の鼻に至つては、紫色に膨脹して、掘つたら中から膿が出さうに見える。自惚の所爲か、おれの顏より餘つ程手ひどく遣られてゐる。おれと山嵐は机を並べて、隣同志の近しい仲で、御負けに其机が部屋の戶口から眞正面にあるんだから運がわるい。妙な顏が二つ塊まつてゐる。ほかの奴は退屈にさへなると屹度此方ばかり見る。飛んだ事でと口で云ふが、心のうちでは此馬鹿がと思つてるに相違ない。夫でなければあゝ云ふ風に私語き合つてはくす〳〵笑ふ譯がない。教場へ出ると生徒は拍手を以て迎へた。先生萬歲と云ふものが二三人あつた。景氣がいゝんだか、馬鹿にされてるんだか分らない。おれと山嵐がこんなに注意の燒點となつてるなかに、赤シャツ計りは平常の通り傍へ來て どうも飛んだ災

難でした。僕は君等に對して御氣の毒でなりません。新聞の記事は校長とも相談して、正誤を申し込む手續にして置いたから、心配しなくてもいゝ。僕の弟が堀田君を誘ひに行つたから、こんな事が起つたので、僕は實に申し譯がない。それで此件に就いては可成く盡力する積りだから、どうかあしからず、抔と半分謝罪的な言葉を竝べて居る。校長は三時間目に校長室から出て來て、困つた事を新聞がかき出しましたね。六づかしくならなければいゝがと多少心配さうに見えた。おれには心配なんかない。先で免職をするなら、免職される前に辭表を出して仕舞ふ丈だ。然し自分がわるくないのにこつちから身を引くのは法螺吹きの新聞屋を益増長させる譯だから、新聞屋を正誤させておれが意地にも務めるのが順當だと考へた。歸りがけに新聞屋に談判に行かうと思つたが、學校から取消の手續はしたと云ふから、やめた。

おれと山嵐は校長と教頭に時間の合間を見計らつて、噓のない所を一應說明した。校長と教頭はさうだらう、新聞屋が學校に恨を抱いて、あんな記事をことさらに掲げたんだらうと論斷した。赤シャツはおれらの行爲を辯解しながら控所を一人ごとに廻つてあるいて居た。ことに自分の弟が山嵐を誘ひ出したのを自分の過失であるかの如く吹聽して居た。みんなは全く新聞屋がわるい、怪しからん、兩君は實に災難だと云つた。

歸りがけに山嵐は君赤シャツは臭いぜ用心しないとやられるぜと注意した。どうせ臭いんだ、今日から臭くなつたんぢやなからうと云ふと、君まだ氣が附かないか、きのふわざ〳〵僕等を誘ひ出して、喧嘩のなかへ、捲き込んだのは策だぜと敎へてくれた。成程そこ迄は氣がつかなかつた。山嵐は粗暴な樣だが、おれより智慧のある男だと感心した。

「あゝやつて喧嘩をさせて置いて、すぐあとから新聞屋へ手を廻してあんな記事をかゝせたんだ。實に奸物だ」

「新聞迄も赤シャツか。そいつは驚いた。然し新聞が赤シャツの云ふ事をさう容易く聽くかね」

「聽かなくつて。新聞屋に友達が居りや譯はないさ」

「友達が居るのかい」

「居なくても譯ないさ。噓をついて、事實是々だと話しや、すぐ書くさ」

「ひどいもんだな。本當に赤シャツの策なら、僕等は此事件で免職になるかも知れないね」

「わるくすると、遣られるかも知れない」

「そんなら、おれは明日辭表を出して直ぐ東京へ歸つちまはあ。こんな下等な所に賴んだつて居るのはいやだ」

「君が辭表を出したつて、赤シャツは困らない」

「それもさうだな。どうしたら困るだらう」

「あんな奸物の遣る事は、何でも證據の擧がらない樣に、擧がらない樣にと工夫するんだから反駁するのは六づかしいね」

「厄介だな。それぢや濡衣を着るんだね。面白くもない。天道是耶非耶だ」

「まあ、もう二三日樣子を見ようぢやないか。それで愈となつたら、溫泉の町で取つて抑へるより仕方がないだらう」

「喧嘩事件は、喧嘩事件としてか」

「さうさ。こつちはこつちで向うの急所を抑へるのさ」

「それもよからう。おれは策略は下手なんだから、萬事宜しく賴む。いざとなれば何でもする」

おれと山嵐は是で分かれた。赤シャツが果し

て山嵐の策略をやつたのなら、實にひどい奴だ。到底智慧比べで勝てる奴ではない。どうしても腕力でなくつちや駄目だ。成程世界に戰爭は絶えない譯だ。個人でも、とどの詰りは腕力だ。

あくる日、新聞のくるのを待ちかねて、披いて見ると、正誤所か取消も見えない。學校へ行つて狸に催促すると、あした位出すでせうと云ふ。明日になつて六號活字で小さく取消が出た。然し新聞屋の方で正誤は無論して居らない。又校長に談判すると、あれより手續のしやうはないのだと云ふ答だ。校長なんて狸の様な顏をして、いやにフロツク張つてゐるが存外無勢力なものだ。虚僞の記事を掲げた田舍新聞一つ詫らせる事が出來ない。あんまり腹が立つたから、それぢや私が一人で行つて主筆に談判すると云つたら、それはいかん、君が談判すれば又惡口を書かれる計りだ。つまり新聞屋にかゝれた事は、うそにせよ、本當にせよ、詰りどうする事も出來ないものだ。あきらめるより外に仕方がないと、坊主の說敎じみた說諭を加へた。新聞がそんな者なら、一日も早く打つ潰して仕舞つた方が、われ〱の利益だらう。新聞にかゝれるのと、泥鼈に喰ひつかれるとが似たり寄つたりだとは今日只今狸の說明に因つて始めて承知仕つた。

夫から三日許りして、ある日の午後、山嵐が憤然とやつて來て、愈時機が來た、おれは例の計畫を斷行する積りだと云ふから、さうかそれぢやおれもやらうと、即座に一味徒黨に加盟した。所が山嵐が、君はよす方がよからうと首を傾けた。何故と聞くと君は校長に呼ばれて辭表を出せと云はれたかと尋ねるから、いや云はれない。君は？ と聽き返すと、今日校長室で、まことに氣の毒だけれども、事情已むを得んから處決してくれと云はれたとの事だ。

「そんな裁判はないぜ。狸は大方腹鼓を叩き過ぎて、胃の位置が顚倒したんだ。君とおれは、一所に祝勝會へ出てさ、一所に高知のぴか〱踊を見てさ、一所に喧嘩をとめに這入つたぢやないか。辭表を出せといふなら公平に兩方へ出せと云ふがいゝ。なんで田舍の學校はさう理窟が分らないんだらう。焦慮いな」

「それが赤シャツの指金だよ。おれと赤シャツとは今迄の行き掛り上到底兩立しない人間だが、君の方は今の通り置いても害にならないと思つてるんだ」

「おれだつて赤シャツと兩立するものか。害にならないと思ふなんて生意氣だ」

「君はあまり單純過ぎるから、置いたつて、どうでも胡魔化されると考へてるのさ」

「猶惡いや。誰が兩立してやるものか」

「夫に先達て古賀が去つてから、まだ後任が事故の爲めに到着しないだらう。其上に君と僕を同時に追ひ出しちや、生徒の時間に明きが出來て、授業にさし支へるからな」

「夫ぢやおれを間のくさびに一席伏はせる氣なんだな。こん畜生、だれが其手に乘るものか」

翌日おれは學校へ出て校長室へ入つて談判を始めた。

「何で私に辭表を出せと云はないんですか」

「へえ？」と狸はあつけに取られて居る。

「堀田には出せ、私には出さないで好いと云ふ法がありますか」

「それは學校の方の都合で……」

「其都合が間違つてまさあ。私が出さなくつて濟むなら堀田だつて、出す必要はないでせう」

「其邊は說明が出來かねますが――堀田君は去られても已むを得んのですが、あなたは辭表を御出しになる必要を認めませんから」

成程狸だ、要領を得ない事ばかり並べて、しかも落ち附き拂つてる。おれは仕樣がないから

「それぢや私も辭表を出しませう。堀田君一人辭職させて、私が安閑として留まつて居られると思つて入らつしやるかも知れないが、私にはそんな不人情な事は出來ません」

「それは困る。堀田君も去りあなたも去つたら、學校の數學の授業が丸で出來なくなつて仕舞ふから……」

「出來なくなつても私の知つた事ぢやありません」

「君さう我儘を云ふものぢやない、少しは學校の事情も察して呉れなくつちや困る。夫に來てから一月立つか立たないのに辭職したと云ふと、君の將來の履歷に關係するから、其邊も少しは考へたらいゝでせう」

「履歷なんか構ふもんですか、履歷より義理が大切です」

「そりや御尤も――君の云ふ所は一々御尤もだが、わたしの云ふ方も少しは察して下さい。君が是非辭職すると云ふなら辭職されてもいいから、代りのある迄どうかやつて貰ひたい。とにかく、うちでもう一返考へ直して見て下さい」

考へ直すつて、直し樣のない明々白々たる理由だが、狸が蒼くなつたり、赤くなつたりして、可哀相になつたから一先づ考へ直す事として引き下がつた。赤シャツには口もきかなかつた。どうせ遣つ附けるなら塊めて、うんと遣つ附ける方がいゝ。

山嵐に狸と談判した模樣を話したら、大方そんな事だらうと思つた。辭表の事はいざとなる迄其儘にして置いても差し支へあるまいとの話だつたから、山嵐の云ふ通りにした。どうも山嵐の方がおれよりも利口らしいから萬事山嵐の忠告に從ふ事にした。

山嵐は愈辭表を出して、職員一同に告別の挨拶をして濱の港屋迄下がつたが、人に知れない樣に引き返して、溫泉の町の枡屋の表二階へ潛んで障子へ穴をあけて覗き出した。是を知つてるものはおれ許りだらう。赤シャツが忍んで來ればどうせ夜だ。しかも宵の口は生徒や其他の目があるから少くとも九時過ぎに極まつてる。最初の二晩はおれも十一時頃迄張番をしたが、赤シャツの影も見えない。三日目には九時から十時半迄覗いたが矢張り駄目だ。駄目を踏んで夜なかに下宿へ歸る程馬鹿氣た事はない。四五日すると、うちの婆さんが少々心配を始めて、奥さんの御有りるのに、夜遊びはおやめたがえゝぞなもしと忠告した。そんな夜遊びとは夜遊びが違ふ。こつちのは天に代つて誅戮を加へる夜遊びだ。とは云ふものゝ、一週間も通つて、少しも驗が見えないと、いやになるもんだ。おれは性急な性分だから、熱心になると徹夜でもして仕事をするが、其代り何によらず長持ちのした試しがない。如何に天誅黨でも飽きる事に變りはない。六日目には少々いやになつて、七日目にはもう休まうかと思つた。そこへ行くと山嵐は頑固なものだ。宵から十二時過ぎ迄は眼を障子へつけて、角屋の丸ぼやの瓦斯燈の下を睨めつきりである。おれが行くと今日は何人客があつて、泊りが何人、女が何人と色々な統計を示すのには驚いた。どうも來ない樣ぢやないかと云ふと、うん、慥かに來る筈だがと時々腕組をして溜息をつく。可哀相に、もし赤シャツが此所へ一度來てくれなければ、山嵐は、生涯天誅を加へる事は出來ないのである。

八日目には七時頃から下宿を出て、先づ緩りと湯に入つて、夫から町で鷄卵を八つ買つた。是は下宿の婆さんの芋責めに應ずる策である。其玉子を四つ宛左右の袂へ入れて、例の赤手拭を肩へ乘せて、懷手をしながら、枡屋の階子段を登つて山嵐の座敷の障子をあけると、お

い有望有望と韋駄天の様な顔は急に活氣を呈した。昨夜迄は少し塞ぎの氣味で、はたで見て居るおれさへ、陰氣臭いと思つた位だが、此顔色を見たら、おれも急にうれしくなつて、何も聞かない先から、愉快愉快と云つた。

「今夜七時半頃あの小鈴と云ふ藝者が角屋へ這入つた」

「赤シャツと一所か」

「いゝや」

「それぢや駄目だ」

「藝者は二人づれだが、――どうも有望らしい」

「どうして」

「どうしてつて、あゝ云ふ狡い奴だから藝者を先へよこして後から忍んでくるかも知れない」

「さうかも知れない。もう九時だらう」

「今九時十二分許りだ」と帯の間からニッケル製の時計を出して見ながら云つたが「おい洋燈を消せ、障子へ二つ坊主頭が寫つては可笑しい。狐はすぐ疑ぐるから」

おれは一閑張の机の上にあつた置き洋燈をふつと吹きけした。星明りで障子丈は少々あかるい。月はまだ出て居ない。おれと山嵐は一生懸命に障子へ面をつけて、息を凝らして居る。チーンと九時半の柱時計が鳴つた。

「おい來るだらうかな。今夜來なければ僕はもう厭だぜ」

「おれは錢のつゞく限りやるんだ」

「錢つていくらあるんだい」

「今日迄で八日分五圓六十錢拂つた。いつ飛び出しても都合のいゝ様に毎晩勘定するんだ」

「夫は手廻しがいゝ。宿屋で驚いてるだらう」

「宿屋はいゝが、氣が放せないから困る」

「其代り晝寐をするだらう」

「晝寐はするが、外出が出來ないんで窮屈で堪らない」

「天誅も骨が折れるな。是で天網恢々疎にして洩らしちまつたり、何かしちや、詰まらないぜ」

「なに今夜は屹度くるよ。――おい見ろ見ろ」と小聲になつたから、おれは思はずどきりとした。黒い帽子を戴いた男が角屋の瓦斯燈を下から見上げた儘暗い方へ通り過ぎた。違つて居る。おや／＼と思つた。其うち帳場の時計が遠慮もなく十時を打つた。今夜もとう／＼駄目らしい。

世間は大分靜かになつた。遊廓で鳴らす太鼓が手に取る様に聞こえる。月が温泉の山の後からのつと顔を出した。往來はあかるい。すると、下の方から人聲が聞こえだした。窓から首を出す譯には行かないから、姿を突き留める事は出來ないが、段々近附いて來る模様だ。からん／＼と駒下駄を引き摺る音がする。眼を斜にするとやつと二人の影法師が見える位に近附いた。

「もう大丈夫ですね。邪魔ものは追つ拂つたから」正しく野だの聲である。「強がる計りで策がないから、仕様がない」是は赤シャツだ。「あの男もべらんめえに似て居ますね。あのべらんめえと來たら、勇み肌の坊つちやんだから愛嬌がありますよ」「増給がいやだの辭表が出したいのつて、ありやどうしても神經に異狀があるに相違ない」おれは窓をあけて、二階から飛び下りて、思ふ様打ちのめして遣らうと思つたが、やつとの事で辛抱した。二人はハヽヽヽと笑ひながら、瓦斯燈の下を潜つて、角屋の中へ這入つた。

「おい」

「おい」

「來たぜ」

「とう／＼來た」

「是で漸く安心した」

「野だの畜生、おれの事を勇み肌の坊つちやん

だと抜かしやがつた」
「邪魔物と云ふのはおれの事だぜ、失敬千萬な」
おれと山嵐は二人の歸路を要撃しなければならない。然し二人はいつ出て來るか見當がつかない。山嵐は下へ行つて今夜ことによると夜中に用事があつて出るかも知れないから、出られる樣にして置いてくれと頼んで來た。今思ふとよく宿のものが承知したものだ。大抵なら泥棒と間違へられる所だ。
赤シャツの來るのを待ち受けたのはつらかつたが、出て來るのを凝として待つてるのは猶つらい。寢る譯には行かないし、始終障子の隙から睨めて居るのもつらいし、どうも、かうも心が落ちつかなくつて、是程難儀な思ひをした事は未だにない。いつその事角屋へ踏みこんで現場を取つて抑へようと發議したが、山嵐は一言にして、おれの申し出を斥けた。自分共が今時分飛び込んだつて、亂暴者だと云つて途中で遮られる。譯を話して面會を求めれば居ないと逃げるか別室へ案內をする。不用意の所へ踏み込めると假定した所で何十とある座敷のどこに居るか分るものではない、退屈でも出るのを待つより外に策はないと云ふから、漸くの事でとう〳〵朝の五時迄我慢した。
角屋から出る二人の影を見るや否や、おれと山嵐はすぐあとを尾けた。一番汽車はまだないから、二人とも城下迄あるかなければならない。温泉の町をはづれると一丁許りの杉並木があつて左右は田圃になる。それを通りこすとこゝかしこに藁葺があつて、畠の中を一筋に城下迄通る土手へ出る。町さへはづれゝば、どこで追ひ附いても構はないが、可成なら、人家のない、杉並木で捕まへてやらうと、見えがくれについて來た。町を外れると急に馳け足の姿勢で、はやての樣に後から追ひ附いた。何が來たかと驚いて振り向く奴を待てと云つて肩に手をかけた。野だは狼狽の氣味で逃げ出さうと云ふ景色だつたから、おれが前へ廻つて行手を塞いで仕舞つた。
「教頭の職をもつてるものが何で角屋へ行つて泊まつた」と山嵐はすぐ詰りかけた。
「教頭は角屋へ泊まつて悪いといふ規則がありますか」と赤シャツは依然として丁寧な言葉を使つてる。顔の色は少々蒼い。
「取締上不都合だから、蕎麥屋や團子屋へさへ這入つて行かんと、云ふ位謹直な人が、なぜ藝者と一所に宿屋へ泊り込んだ」野だは隙を見ては逃げ出さうとするからおれはすぐ前に立ち塞がつて「べらんめえの坊つちやんた何だ」と怒鳴り附けたら「いえ君の事を云つたんぢやないんです、全くないんです」と鐵面皮に言譯がましい事をぬかした。おれは此時氣がついて見たら兩手で自分の袂を握つてる。追つかける時に袂の中の卵がぶら〳〵して困るから、兩手で握りながら來たのである。おれはいきなり袂へ手を入れて、玉子を二つ取り出して、やつと云ひながら、野だの面へ擲き附けた。玉子がぐちやりと割れて鼻の先から黄味がだら〳〵流れだした。野だは餘つ程仰天した者と見えて、わつと言ひながら、尻持をついて、助けて吳れと云つた。おれは食ふ爲に玉子は買つたが、打つける爲に袂へ入れてる譯ではない。只肝癪のあまりに、ついぶつけるともなしに打つけて仕舞つたのだ。然し野だが尻持を突いた所を見て始めて、おれの成功した事に氣がついたから、此畜生、此畜生と云ひながら殘る六つを無茶苦茶に擲き附けたら、野だは顔中黄色になつた。
おれが玉子をたゝきつけて居るうち、山嵐と赤シャツはまだ談判最中である。
「藝者を連れて僕が宿屋へ泊まつたと云ふ證

事がありますか」
一晩に貴樣のなじみの藝者が角屋へ這入つたのを見て云ふ事だ。誤魔化せるものか」
「誤魔化す必要はない。僕は吉川君と二人で泊まつたのである。藝者が宵に這入らうが、這入るまいが、僕の知つた事ではない」
「だまれ」と山嵐は拳骨を食らはした。赤シャツはよろ／＼したが「是は亂暴だ、狼藉である。理非を辨じないで腕力に訴へるのは無法だ」
「無法で澤山だ」とまたぽかりと撲る。「貴樣の樣な奸物はなぐらなくつちや、答へないんだ」とぽか／＼なぐる。おれも同時に野だを散々に擲き据ゑた。仕舞ひには二人とも杉の根方にうづくまつて動けないのか、眼がちら／＼するのか逃げようともしない。
「もう澤山か、澤山でなけりや、まだ撲つてやる」とぽかん／＼と兩人でなぐつたら「もう澤山だ」と云つた。野だに「貴樣も澤山か」と聞いたら「無論澤山だ」と答へた。
「貴樣等は奸物だから、かうやつて天誅を加へるんだ。これに懲りて以來つゝしむがいゝ。いくら言葉巧みに辯解が立つても正義は許さんぞ」と山嵐が云つたら兩人共だまつてゐた。ことによると口をきくのが退儀なのかも知れない。
「おれは逃げも隱れもせん。今夜五時迄は濱の港屋に居る。用があるなら巡査なりなんなり、よこせ」と山嵐が云ふから、おれも「おれも逃げも隱れもしないぞ。堀田と同じ所に待つてるから警察へ訴へたければ、勝手に訴へろ」と云つて、二人してすた／＼あるき出した。
おれが下宿へ歸つたのは七時少し前である。部屋へ這入るとすぐ荷造りを始めたら、婆さんが驚いて、どう御爲るのぞなもしと聞いた。御婆さん、東京へ行つて奧さんを連れてくるんだと答へて勘定をすまして、すぐ汽車へ乘つて濱へ來て港屋へ着くと、山嵐は二階で寐て居た。おれは早速辭表を書かうと思つたが、何と書いていゝか分らないから、私儀都合有之辭職の上東京へ歸り申候につき左樣御承知被下度候以上とかいて、校長宛にして郵便で出した。
汽船は夜六時の出帆である。山嵐もおれも疲れて、ぐう／＼寐込んで眼が覺めたら、午後二時であつた。下女に巡査は來ないかと聞いたら參りませんと答へた。「赤シャツも野だも訴へなかつたなあ」と二人で大きに笑つた。
其夜おれと山嵐は此不淨な地を離れた。船が岸を去れば去る程いゝ心持ちがした。神戸から東京迄は直行で新橋へ着いた時は、漸く娑婆へ出た樣な氣がした。山嵐とはすぐ分かれたぎり今日迄逢ふ機會がない。
清の事を話すのを忘れて居た。——おれが東京へ着いて下宿へも行かず、革鞄を提げた儘、清や歸つたよと飛び込んだら、あら坊つちやん、よくまあ早く歸つて來て下さつたと涙をぽたぽたと落とした。おれも餘り嬉しかつたから、もう田舍へは行かない、東京で清とうちを持つんだと云つた。
其後ある人の周旋で街鐵の技手になつた。月給は二十五圓で、家賃は六圓だ。清は玄關附きの家でなくつても至極滿足の樣子であつたが氣の毒な事には今年の二月肺炎に罹つて死んで仕舞つた。死ぬ前日おれを呼んで坊つちやん後生だから清が死んだら、坊つちやんの御寺へ埋めて下さい。御墓のなかで坊つちやんの來るのを樂しみに待つて居りますと云つた。だから清の墓は小日向の養源寺にある。

草枕

一

山路を登りながら、かう考へた。

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。

住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生れて、畫が出來る。

人の世を作つたものは神でもなければ鬼でもない。矢張り向う三軒兩隣りにちら／＼する唯の人である。唯の人が作つた人の世が住みにくいからとて、越す國はあるまい。あれば人でなしの國へ行く許りだ。人でなしの國は人の世よりも猶住みにくからう。

越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか、寛容げて、束の間の命を、束の間でも住みよくせねばならぬ。こゝに詩人といふ天職が出來て、こゝに畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の士は人の世を長閑にし、人の心を豐かにするが故に尊い。

住みにくき世から、住みにくき煩ひを引き拔いて、難有い世界をまのあたりに寫すのが詩である、畫である。あるは音樂と彫刻である。こまかに云へば寫さないでもよい。只まのあたりに見れば、そこに詩も生き、歌も湧く。着想を紙に落さぬとも璆鏘の音は胸裏に起る。丹靑は畫架に向つて塗抹せんでも五彩の絢爛は自ら心眼に映る。只おのが住む世を、かく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに澆季溷濁の俗界を淸くうらゝかに收め得れば足る。この故に無聲の詩人には一句なく、無色の畫家には尺縑なきも、かく人生を觀じ得るの點に於て、かく煩惱を解脫するの點に於て、かく淸淨界に出入し得るの點に於て、又この不同不二の乾坤を建立し得るの點に於て、我利私慾の覊絆を掃蕩するの點に於て、——千金の子よりも、萬乘の君よりも、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。

世に住むこと二十年にして、住むに甲斐ある世と知つた。二十五年にして明暗は表裏の如く、日のあたる所には屹度影がさすと悟つた。三十の今日はかう思うて居る。——喜びの深きとき憂ひ愈深く、樂しみの大いなる程苦しみも大きい。之を切り放さうとすると身が持てぬ。片附けようとすれば世が立たぬ。金は大事だ、大事なものが殖えれば寐る間も心配だらう。戀はうれしい、嬉しい戀が積もれば、戀をせぬ昔がかへつて戀しかろ。閣僚の肩は數百萬人の足を支へて居る。背中には重い天下がおぶさつて居る。うまい物も食はねば惜しい。少し食へば飽き足らぬ。存分食へばあとが不愉快だ。……

余の考へがこゝ迄漂流して來た時に、余の右足は突然坐りのわるい角石の端を踏み損なつた。平衡を保つ爲めに、すはやと前に飛び出した左足が、仕損じの埋め合せをすると共に、余の腰は具合よく方三尺程な岩の上に卸りた。肩にかけた繪の具箱が腋の下から躍り出した丈で、幸ひと何の事もなかつた。

立ち上がる時に向うを見ると、路から左の方にバケツを伏せた樣な峯が聳えて居る。杉か檜か分からないが根本から頂迄悉く蒼黑い中に、山櫻が薄赤くだんだらに棚引いて、續ぎ目が確と見えぬ位靄が濃い。少し手前に禿

山が一つ、群をぬきんでて眉に逼る。禿げた側面は巨人の斧で削り去つたか、鋭き平面をやけに谷の底に埋めて居る。天邊に一本見えるのは赤松だらう。枝の間の空さへ判然して居る。行く手は二丁程で切れて居るが、高い所から赤い毛布が動いて來るのを見ると、登ればあすこへ出るのだらう。路は頗る難儀だ。

土をならす丈なら左程手間も入るまいが、土の中には大きな石がある。土は平にしても石は平にならぬ。石は切り碎いても、岩は始末がつかぬ。掘り崩した土の上に悠然と峙つて、吾等の爲に道を讓る氣色はない。向うで聞かぬ上は乘り越すか、廻らなければならん。巖のない所でさへ歩きよくはない。左右が高くつて、中心が窪んで、丸で一間幅を三角に穿つて、其頂點が眞中を貫いてゐると評してもよい。路を行くと云はんより川底を渉ると云ふ方が適當だ。固より急ぐ旅でないから、ぶら〱と七曲りへかゝる。

忽ち足の下で雲雀の聲がし出した。谷を見下ろしたが、どこで鳴いてるか影も形も見えぬ。只聲だけが明かに聞こえる。せつせと忙しく、絶間なく鳴いて居る。方幾里の空氣が一面に蚤に刺されて居たたまれない様な氣がする。あの鳥の鳴く音には瞬時の餘裕もない。のどかな春の日を鳴き盡くし、鳴きあかし、又鳴き暮らさなければ氣が濟まんと見える。其上どこ迄も登つて行く、いつ迄も登つて行く。雲雀は屹度雲の中で死ぬに相違ない。登り詰めた揚句は、流れて雲に入つて、漂うて居るうちに形は消えてなくなつて、只聲丈が空の裡に殘るのかも知れない。

巖角は鋭く廻つて、按摩なら眞逆樣に落つる所を、際どく右へ切れて、横に見下ろすと、菜の花が一面に見える。雲雀はあすこへ落ちるのかと思つた。いゝや、あの黃金の原から飛び上がつてくるのかと思つた。次には落ちる雲雀と、上がる雲雀が十文字にすれ違ふのかと思つた。最後に、落ちる時も、上がる時も、また十文字に擦れ違ふときにも元氣よく鳴きつゞけるだらうと思つた。

春は眠くなる。猫は鼠を捕る事を忘れ、人間は借金のある事を忘れる。時には自分の魂の居所さへ忘れて正體なくなる。只菜の花を遠く望んだときに眼が醒める。雲雀の聲を聞いたときに魂のありかが判然する。雲雀の鳴くのは口で鳴くのではない、魂全體が鳴くのだ。魂の活動が聲にあらはれたもののうちで、あれ程元氣のあるものはない。あゝ愉快だ。かう思つて、かう愉快になるのが詩である。

忽ちシェレーの雲雀の詩を思ひ出して、口のうちで覺えた所だけ暗誦して見たが、覺えて居る所は二三句しかなかつた。其二三句のなかにこんなのがある。

We look before and after
And pine for what is not:
Our sincerest laughter
With some pain is fraught;
Our sweetest songs are those that
[tell of saddest thought.

「前を見ては、後へを見ては、物欲しと、あこがるゝかなわれ。腹からの、笑ひといへど、苦しみの、そこにあるべし。うつくしき、極みの歌に、悲しさの、極みの想、籠るとぞ知れ」

成程いくら詩人が幸福でも、あの雲雀の様に思ひ切つて、一心不亂に、前後を忘却して、わが喜びを歌ふ譯には行くまい。西洋の詩は無論の事、支那の詩にも、よく萬斛の愁などと云ふ字がある。詩人だから萬斛で素人なら一合で濟むかも知れぬ。して見ると詩人は常の人よりも苦勞性で、凡骨の倍以上に神經が鋭敏なのかも知れん。超俗の喜びもあらうが、無量

の悲しみも多からう。そんならば詩人になるのも考へ物だ。

しばらくは路が平で、右は雜木山、左は菜の花の見つゞけである。足の下に時々蒲公英を踏みつける。鋸の様な葉が遠慮なく四方へのして眞中に黃色な珠を擁護して居る。菜の花に氣を取られて、踏みつけたあとで、氣の毒な事をしたと、振り向いて見ると、黃色な珠は依然として鋸のなかに鎭座して居る。呑氣なものだ。又考へをつゞける。

詩人に憂はつきものかも知れないが、あの雲雀を聞く心持ちになれば微塵の苦もない。菜の花を見ても、只うれしくて胸が躍る許りだ。蒲公英も其通り、櫻も――櫻はいつか見えなくなつた。かう山の中へ來て自然の景物に接すれば、見るものも聞くものも面白い。面白い丈で別段の苦しみも起らぬ。起るとすれば足が草臥れて、旨いものが食べられぬ位の事だらう。

然し苦しみのないのは何故だらう。只此景色を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は地面を貰つて、開拓する氣にもならねば、鐵道をかけて一と儲けする了見も起らぬ。只此景色が――腹の足しにもならぬ、月給の補ひにもならぬ此景色が景色としてのみ、余が心を樂しませつゝあるから苦勞も心配も伴はぬのだらう。自然の力は是に於て尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して醇乎として醇なる詩境に入らしむるのは自然である。

戀はうつくしかろ、孝もうつくしかろ、忠君愛國も結構だらう。然し自身が其局に當たれば利害の旋風に捲き込まれて、うつくしき事にも、結構な事にも、目は眩んで仕舞ふ。從つてどこに詩があるか自身には解しかねる。

これがわかる爲めには、わかる丈の餘裕のある第三者の地位に立たねばならぬ。三者の地位に立てばこそ芝居は觀て面白い。小說も見て面白い。芝居を見て面白い人も、小說を讀んで面白い人も、自己の利害は棚へ上げて居る。見たり讀んだりする間丈は詩人である。

それすら、普通の芝居や小說では人情を免かれぬ。苦しんだり、怒つたり、騷いだり、泣いたりする。見るものもいつか其中に同化して苦しんだり、怒つたり、騷いだり、泣いたりする。取柄は利慾が交らぬと云ふ點に存するかも知れぬが、交らぬ丈に其他の情緒は常よりは餘計に活動するだらう。それが嫌だ。

苦しんだり、怒つたり、騷いだり、泣いたりは人の世につきものだ。余も三十年の間それを仕通して、飽き〳〵した。飽き〳〵した上に芝居や小說で同じ刺激を繰り返しては大變だ。余が欲する詩はそんな世間的の人情を鼓舞する樣なものではない。俗念を放棄して、しばらくでも塵界を離れた心持ちになれる詩である。いくら傑作でも人情を離れた芝居はない。理非を絶した小說は少からう。どこ迄も世間を出る事が出來ぬのが彼等の特色である。ことに西洋の詩になると、人事が根本になるから所謂詩歌の純粹なるものも此境を解脫する事を知らぬ。どこ迄も同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の勸工場にあるものだけで用を辨じて居る。いくら詩的になつても地面の上を馳けあるいて、錢の勘定を忘れるひまがない。シェレーが雲雀を聞いて嘆息したのも無理はない。

うれしい事に東洋の詩歌はそこを解脫したのがある。採菊東籬下、悠然見南山。只それぎりの裏に暑苦しい世の中を丸で忘れた光景が出てくる。垣の向うに隣りの娘が覗いてる譯でもなければ、南山に親友が奉職して居る次第でもない。超然と出世間的に利害損得の汗を流し去つた心持ちになれる。獨坐幽篁裏、彈琴

彈琴復長嘯、深林人不知、明月來相照。只二十字のうちに優に別乾坤を建立して居る。此乾坤の功德は「不如歸」や「金色夜叉」の功德ではない。汽船、汽車、權利、義務、道德、禮義で疲れ果てた後、凡てを忘却してぐつすりと寐込む樣な功德である。

二十世紀に睡眠が必要ならば、二十世紀に此出世間的の詩味は大切である。惜しい事に今の詩を作る人も、詩を讀む人もみんな、西洋人にかぶれて居るから、わざ〳〵呑氣な扁舟を泛べて此桃源に溯るものはない樣だ。余は固より詩人を職業にして居らんから、王維や淵明の境界を今の世に布教して廣げようと云ふ心掛も何もない。只自分にはかう云ふ感興が演藝會よりも舞踏會よりも藥になる樣に思はれる。ファウストよりも、ハムレットよりも難有く考へられる。かうやつて、只一人繪の具箱と三脚几を擔いで春の山路をのそ〳〵あるくのも全く之が爲めである。淵明、王維の詩境を直接に自然から吸收して、すこしの間でも非人情の天地に逍遙したいからの願。一つの醉興だ。

勿論人間の一分子だから、いくら好きでも、非人情はさう長く續く譯には行かぬ。淵明だつて年が年中南山を見詰めて居たのでもあるまいし、王維も好んで竹藪の中に蚊帳を釣らずに寐た男でもなからう。矢張り餘つた菊は花屋へ賣りこかして、生えた筍は八百屋へ拂ひ下げたものと思ふ。かう云ふ余も其通り。いくら雲雀と菜の花が氣に入つたつて、山のなかへ野宿する程非人情が募つては居らん。こんな所でも人間に逢ふ。じん〳〵端折りの頬冠りや、赤い腰卷の姉さんや、時には人間より顏の長い馬にまで逢ふ。百萬本の檜に取り圍まれて、海面を拔く何百尺の空氣を呑んだり吐いたりしても、人の臭ひは中々取れない。夫所か、山を越えて落ちつく先の、今宵の宿は那古井の温泉場だ。

唯、物は見樣でどうでもなる。レオナルド・ダ・ギンチが弟子に告げた言に、あの鐘の音を聞け、鐘は一つだが、音はどうとも聞かれるとある。一人の男、一人の女も見樣次第で如何樣とも見立てがつく。どうせ非人情をしに出掛けた旅だから、其積りで人間を見たら、浮世小路の何軒目に狹苦しく暮らした時とは違ふだらう。よし全く人情を離れる事が出來んでも、責めて御能拜見の時位な淡い心持ちにはなれさうなものだ。能にも人情はある。七騎落でも、墨田川でも泣かぬとは保證が出來ん。然しあれは情三分藝七分で見せるわざだ。我等が能から享ける難有味は下界の人情をよく其儘に寫す手際から出てくるのではない。其儘の上へ藝術といふ着物を何枚も着せて、世の中にあるまじき悠長な振舞をするからである。

しばらく此旅中に起る出來事と、旅中に出逢ふ人間を能の仕組と能役者の所作に見立てたらどうだらう。丸で人情を棄てる譯には行くまいが、根が詩的に出來た旅だから、非人情のやり序に、可成節儉してそこ迄は漕ぎ附けたいものだ。南山や幽篁とは性の違つたものに相違ないし、又雲雀や菜の花と一所にする事も出來まいが、可成之に近づけて、近づき得る限りは同じ觀察點から人間を視てみたい。芭蕉と云ふ男は枕元へ馬が尿するのをさへ雅な事と見立てて發句にした。余も是から逢ふ人物を――百姓も、町人も、村役場の書記も、爺さんも婆さんも――悉く大自然の點景として描き出されたものと假定して取りこなして見よう。尤も畫中の人物と違つて、彼等はおのがじゝ勝手な眞似をするだらう。然し普通の小説家の樣に其勝手な眞似の根本を探つて、心理作用に立ち入つたり、人事葛藤の詮議立てをしては俗になる。動いても構はない。畫中の人間が動くと見れば差し支へない。畫中の人物はどう動いても平面

以外に出られるものでない。平面以外に飛び出して立方的に動くと思へばこそ、此方と衝突したり、利害の交渉が起つたりして面倒になる。面倒になればなる程美的に見て居る譯に行かなくなる。是から逢ふ人間には超然と遠き上から見物する氣で、人情の電氣が無暗に双方で起らない樣にする。さうすれば相手がいくら動いても、こちらの懐には容易に飛び込めない譯だから、つまりは畫の前へ立つて、畫中の人物が畫面の中をあちらこちらと騒ぎ廻るのを見るのと同じ譯になる。間三尺も隔てゝ居れば落付いて見られる。あぶな氣なしに見られる。言を換へて云へば、利害に氣を奪はれないから、全力を擧げて彼等の動作を藝術の方面から觀察する事が出來る。餘念もなく美か美でないかと鑒識する事が出來る。

こゝ迄決心をした時、空があやしくなつて來た。煮え切れない雲が、頭の上へ靠垂れ懸かつて居たと思つたが、いつのまにか、崩れ出して、四方は只雲の海かと怪しまれる中から、しとしとと春の雨が降り出した。菜の花は疾くに通り過ごして、今は山と山の間を行くのだが、雨の絲が濃やかで殆ど霧を欺く位だから、隔りはどれ程かわからぬ。時々風が來て、高い雲を吹き拂ふとき、薄黒い山の背が右手に見える事がある。何でも谷一つ隔てゝ向うが脈の走つて居る所らしい。左はすぐ山の裾と見える。深く罩める雨の奥から松らしいものが、ちよく〳〵顔を出す。出すかと思ふと、隠れる。雨が動くのか、木が動くのか、夢が動くのか、何となく不思議な心持だ。

路は存外廣くなつて、且平だから、あるくに骨は折れんが、雨具の用意がないので急ぐ。帽子から雨垂れがぽたり〳〵と落つる頃、五六間先から、鈴の音がして、黒い中から、馬子がふうとあらはれた。

「こゝらに休む所はないかね」

「もう十五丁行くと茶屋がありますよ。大分濡れたね」

まだ十五丁かと、振り向いて居るうちに、馬子の姿は影畫の樣に雨につゝまれて、又ふうと消えた。

糠の樣に見えた粒は次第に太く長くなつて、今は筋毎に風に捲かれる樣迄が目に入る。羽織はとくに濡れ盡して肌着に浸み込んだ水が、身體の温度で生暖く感ぜられる。氣持ちがわるいから、帽を傾けてすた〳〵歩行く。

茫々たる薄墨色の世界を、幾條の銀箭が斜に走るなかを、ひたぶるに濡れて行くわれを、われならぬ人の姿と思へば、詩にもなる、句にも咏まれる。有體なる己を忘れ盡して純客觀に眼をつくる時、始めてわれは畫中の人物として、自然の景物と美しき調和を保つ。只降る雨の心苦しくて、踏む足の疲れたるを氣に掛ける瞬間に、われは既に詩中の人にもあらず、畫裡の人にもあらず。依然として市井の一豎子に過ぎぬ。雲烟飛動の趣も眼に入らぬ。落花啼鳥の情も心に浮ばぬ。蕭々として獨り春山を行く吾の、いかに美しきかは猶更に解せぬ。初めは帽を傾けて歩行いた。後には唯足の甲のみを見詰めてあるいた。終りには肩をすぼめて、恐る〳〵歩行いた。雨は滿目の樹梢を揺かして四方より孤客に逼る。非人情がちと強過ぎた樣だ。

二

「おい」と聲を掛けたが返事がない。

軒下から奥を覗くと煤けた障子が立て切つてある。向う側は見えない。五六足の草鞋が淋しさうに庇から釣るされて、屈託氣にふらり〳〵と搖れる。下に駄菓子の箱が三つ許り並んで、そばに五厘錢と文久錢が散らばつて居る。

「おい」と又聲をかける。土間の隅に片寄せて

ある臼の上に、ふくれて居た鷄が、驚いて眼をさます。クヽヽ、クヽヽと騒ぎ出す。敷居の外に土竈が、今しかたの雨に濡れて、半分程色が變つてる上に、眞黑な茶釜がかけてあるが、土の茶釜か、銀の茶釜かわからない。幸ひ下は焚きつけてある。

返事がないから無斷でずつと這入つて、床几の上へ腰を卸した。鷄は羽搏きをして臼から飛び下りる。今度は疊の上へあがつた。障子がしめてなければ奥迄馳けぬける氣かも知れない。雄が太い聲でこけつこつこと云ふと、雌が細い聲でけゝつこつこと云ふ。丸で余を狐か狗の樣に考へてゐるらしい。床几の上には一升桝程な煙草盆が閑靜に控へて、中にはとぐろを捲いた線香が、日の移るのを知らぬ顔で、頗る悠長に燻つて居る。雨は次第に收まる。

しばらくすると、奥の方から足音がして、煤けた障子がさらりと開く。なかから一人の婆さんが出る。

どうせ誰か出るだらうとは思つて居た。竈に火は燃えてゐる。菓子箱の上に錢が散らばつて居る。線香は呑氣に燻つてゐる。どうせ出るには極まつてゐる。しかし自分の見世を明け放しても苦にならないと見える所が、少し都とは違つてゐる。返事がないのに床几に腰をかけて、いつ迄も待つてるのも少し二十世紀とは受け取れない。こゝらが非人情で面白い。其上出て來た婆さんの顔が氣に入つた。

二三年前寶生の舞臺で高砂を見た事がある。その時これはうつくしい活人畫だと思つた。箒を擔いだ爺さんが橋懸りを五六歩來て、そろりと後向きになつて、婆さんと向ひ合ふ。その向ひ合うた姿勢が今でも眼につく。余の席からは婆さんの顔が殆ど眞むきに見えたから、あゝうつくしいと思つた時に、其表情はぴしやりと心のカメラへ焼き附いて仕舞つた。茶店の婆さんの顔は此寫眞に血を通はした程似て居る。

「お婆さん、此所を一寸借りたよ」

「はい、是は一向、存じませんで」

「大分降つたね」

「生憎な御天氣で、嘸御困りで御座んしよ。おゝ大分御濡れなさつた。今火を焚いて乾かして上げましよ」

「そこをもう少し燃し附けてくれゝば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた」

「へえ、只今焚いて上げます。まあ御茶を一つ」

と立ち上がりながら、しつ〳〵と二聲で鷄を追ひ下げる。こゝゝゝと馳け出した夫婦は、焦茶色の疊から、駄菓子箱の中を踏みつけて、往來へ飛び出す。雄の方が逃げるとき駄菓子の上へ糞を垂れた。

「まあ一つ」と婆さんはいつの間にか刳り拔き盆の上に茶碗をのせて出す。茶の色の黑く焦げて居る底に、一筆がきの梅の花が三輪無雜作に焼き附けられて居る。

「御菓子を」と今度は鷄の踏みつけた胡麻ねぢと微塵棒を持つてくる。糞はどこぞに着いて居らぬかと眺めて見たが、それは箱のなかに取り殘されてゐた。

婆さんは袖無しの上から、襷をかけて、竈の前へうづくまる。余は懷から寫生帖を取り出して、婆さんの横顔を寫しながら、話しをしかける。

「閑靜でいゝね」

「へえ、御覽の通りの山里で」

「鶯は鳴くかね」

「えゝ毎日の樣に鳴きます。此邊は夏も鳴きます」

「聞きたいな、ちつとも聞こえないと猶聞きたい」

「生憎今日は――先刻の雨で何處ぞへ逃げまし

た」

折から、竹のうち、はた〳〵と云つて、赤い火が風を起して一尺あまり吹き出す。

「さあ、御あたり。御寒かろ」と云ふ。軒端を見ると青い烟が、突き当たつて崩れながらに、微かな痕をまだ板庇にからんで居る。

「あゝ、好い心持ちだ。御蔭で生き返つた」

「いゝ具合に雨も晴れました。そら天狗巌が見え出しました」

逡巡として曇り勝ちなる春の空を、もどかしと許りに吹き払ふ山嵐の、思ひ切りよく通り抜けた前山の一角は、未練もなく晴れ尽して、老媼の指さす方に巉岏と、あら削りの柱の如く聳えるのが天狗巌ださうだ。

余は先づ天狗巌を眺めて、次に婆さんを眺めて、三度目には半々に両方を見比べた。画家として余が頭のなかに存在する婆さんの顔は高砂の媼と、蘆雪のかいた山姥のみである。蘆雪の図を見たとき、理想の婆さんは物凄いものだと感じた。紅葉のなかか、寒い月の下に置くべきものと考へた。宝生の別会能を観るに及んで、成程老女にもこんな優しい表情があり得るものかと驚いた。あの面は定めて名人の刻んだものだらう。惜しい事に作者の名は聞き落したが、老人もかうあらはせば、穏かに、あたゝかに見える。金屏にも、春風にも、あるは桜にもあしらつて差し支へない道具である。余は天狗巌よりは、腰をのして、手を翳して、遠く向うを指さしてゐる、袖無し姿の婆さんを、春の山路の景物として恰好なものだと考へた。余が写生帖を取り上げて、今暫らくといふ途端に、婆さんの姿勢は崩れた。

手持無沙汰に写生帖を、火にあてて乾かしながら、

「御婆さん、丈夫さうだね」と訊ねた。

「はい。難有い事に達者で――針も持ちます、苧もうみます、御団子の粉も磨きます」

此御婆さんに石臼を挽かして見たくなつた。然しそんな注文も出来ぬから、

「こゝから那古井迄は一里足らずだつたね」と別な事を聞いて見る。

「はい、二十八丁と申します。旦那は湯治に御越しで……」

「込み合はなければ、少し逗留しようかと思ふが、まあ気が向けばさ」

「いえ、戦争が始まりましてから、頓と参るものは御座いません。丸で締め切り同様で御座います」

「妙な事だね。それぢや泊めて呉れないかも知れんね」

「いえ、御頼みになればいつでも宿めます」

「宿屋はたつた一軒だつたね」

「へえ、志保田さんと御聞きになればすぐわかります。村のものもちで、湯治場だか、隠居所だかわかりません」

「ぢや御客がなくても平気な訳だ」

「旦那は始めてゞ」

「いや、久しい以前一寸行つた事がある」

会話はちよつと途切れる。帳面をあけて先刻の鶏を静かに写生して居ると、落ち付いた耳の底へじやらん〳〵と云ふ馬の鈴が聞こえ出した。此声がおのづと、拍子をとつて頭の中に一種の調子が出来る。眠りながら、夢に隣の臼の音に誘はれる様な心持ちである。余は鶏の写生をやめて、同じページの端に、

春風や惟然が耳に馬の鈴

と書いて見た。山を登つてから、馬には五六匹逢つた。逢つた五六匹は皆腹掛をかけて、鈴を鳴らして居る。今の世の馬とは思はれない。

やがて長閑な馬子唄が、春に更けた空山一路の夢を破る。憐れの底に気楽な響がこもつて、どう考へても画にかいた声だ。

馬子唄の鈴鹿越ゆるや春の雨

と今度は斜に書き付けたが、書いて見て、是は自分の句でないと氣が附いた。

「又誰ぞ來ました」と婆さんが半ば獨り言の樣に云ふ。

只一條の春の路だから、行くも歸るも皆近附と見える。最前逢うた五六匹のぢやらん／＼も悉く此婆さんの腹の中で又誰ぞ來たと思はれては山を下り、思はれては山を登つたのだらう。路寂寞と古今の春を貫いて、花を厭へば足を着くるに地なき小村に、婆さんは幾年の昔から、ぢやらん／＼を數へ盡して、今日の白頭に至つたのだらう。

馬子唄や白髮も染めで暮るゝ春

と次のページへ認めたが、是では自分の感じを云ひ終せない、もう少し工夫のありさうなものだと、鉛筆の先を見詰めながら考へた。何でも白髮といふ字を入れて、幾代の節と云ふ句を入れて、馬子唄といふ題も入れて、春の季も加へて、それを十七字に纏めたいと工夫して居るうちに、

「はい、今日は」と實物の馬子が店先に留まつて大きな聲をかける。

「おや源さんか。又城下へ行くかい」

「何か買物があるなら頼まれて上げよ」

「さうさ、鍛冶町を通つたら、娘に靈嚴寺の御札を一枚もらつてきて御呉れなさい」

「はい、貰つてきよ。一枚か。――お秋さんは善い所へ片附いて仕合せだ。な、叔母さん」

「難有い事に今日には困りません。まあ仕合せと云ふのだらうか」

「仕合せとも、御前。あの那古井の孃さまと比べて御覽」

「本當に御氣の毒な。あんな器量を持つて。近頃はちつとは具合がいゝかい」

「なあに、相變らずさ」

「困るなあ」と婆さんが大きな息をつく。

「困るよう」と源さんが馬の鼻を撫でる。

枝繁き山櫻の葉も花も、深い空から落ちた儘なる雨の塊りを、しつぽりと宿して居たが、此時わたる風に足をすくはれて、居たゝまれずに、假の住居を、さら／＼と轉け落ちる。馬は驚いて、長い鬣を上下に振る。

「コーラッ」と叱り附ける源さんの聲が、ぢやらん、ぢやらんと共に余の瞑想を破る。

御婆さんが云ふ。「源さん、わたしや、お嫁入りのときの姿が、まだ眼先に散らついて居る。裾模樣の振袖に、高島田で、馬に乘つて……」

「さうさ、船ではなかつた。馬であつた。矢張り此所で休んで行つたな、太作さん」

「あい、其櫻の下で孃樣の馬がとまつたとき、櫻の花がほろ／＼と落ちて、折角の島田に斑が出來ました」

余は又寫生帖をあける。此景色は畫にもなる、詩にもなる。心のうちに花嫁の姿を浮べて、當時の樣を想像して見てしたり顔に、

花の頃を越えてかしこし馬に嫁

と書き附ける。不思議な事には衣裳も髮も馬も櫻もはつきりと目に映じたが、花嫁の顔だけは、どうしても思ひつけなかつた。しばらくあの顔か、この顔か、と思案して居るうちに、ミレーのかいた、オフェリヤの面影が忽然と出て來て、高島田の下へすぽりとはまつた。是は駄目だと、折角の圖面を早速取り崩す。衣裳も髮も馬も櫻も一瞬間に心の道具立から綺麗に立ち退いたが、オフェリヤの合掌して水の上を流れて行く姿丈は、朦朧と胸の底に殘つて、棕梠箒で烟を拂ふ樣に、さつぱりしなかつた。空に尾を曳く彗星の何となく妙な氣になる。

「それぢや、まあ御免」と源さんが挨拶する。

「歸りに又御寄り。生憎の降りで七曲りは難儀だろ」

「はい、少し骨が折れよ」と源さんは歩行き出す。源さんの馬も歩行き出す。ぢやらん〳〵。

「あれは那古井の男かい」

「はい、那古井の源兵衛で御座んす」

「あの男がどこぞの嫁さんを馬へ乗せて、峠を越したのかい」

「志保田の嬢様が城下へ御輿入のときに、嬢様を青馬に乗せて、源兵衛が覊絏を牽いて通りました。――月日の立つのは早いもので、もう今年で五年になります」

鏡に対ふときのみ、わが頭の白きを喞つものは幸の部に属する人である。指を折つて始めて、五年の流光に、転輪の疾き趣を解し得たる婆さんは、人間としては寧ろ仙に近づける方だらう。余は斯う答へた。

「嘸美しかつたらう。見にくればよかつた」

「ハヽ、今でも御覧になれます。湯治場へ御越しなされば、屹度出て御挨拶をなされませう」

「はあ、今では里に居るのかい。矢張り裾模様の振袖を着て、高島田に結つて居ればいゝが」

「たのんで御覧なされ。着て見せましよ」

余はまさかと思つたが、婆さんの様子は存外真面目である。非人情の旅にはこんなのが出なくては面白くない。婆さんが云ふ。

「嬢様と長良の乙女とはよく似て居ります」

「顔がかい」

「いゝえ。身の成り行きがで御座んす」

「へえ、其長良の乙女と云ふのは何者かい」

「昔し此村に長良の乙女と云ふ、美しい長者の娘が御座りましたさうな」

「へえ」

「所が其娘に二人の男が一度に懸想して、あなた」

「なる程」

「さゝだ男に靡かうか、さゝべ男に靡かうかと、娘はあけくれ思ひ煩つたが、どちらへも靡きかねて、とう〳〵

　あきづけばをばなが上に置く露の、けぬべくもわは、おもほゆるかも

と云ふ歌を咏んで、淵川へ身を投げて果てました」

余はこんな山里へ来て、こんな婆さんから、こんな古雅な言葉で、こんな古雅な話をきかうとは思ひがけなかつた。

「是から五丁東へ下ると、道端に五輪塔が御座んす。序に長良の乙女の墓を見て御行きなされ」

余は心のうちに是非見て行かうと決心した。

婆さんは、そのあとを語りつゞける。

「那古井の嬢様にも二人の男が祟りました。一人は嬢様が京都へ修行に出て御出での頃御逢ひなさつたので、一人はこゝの城下で随一の物持で御座んす」

「はあ、御嬢さんはどつちへ靡いたかい」

「御自身は是非京都の方へと御望みなさつたのを、そこには色々な理由もありましたろが、親御様が無理にこちらへ取り極めて……」

「目出度、淵川へ身を投げんでも済んだ訳だね」

「所が――先方でも器量望みで御貰ひなさつたのだから、随分大事にはなさつたかも知れませぬが、もと〳〵強ひられて御出でなさつたのだから、どうも折合がわるくて、御親類でも大分御心配の様子で御座んした。所へ今度の戦争で、旦那様の勤めて御出での銀行がつぶれました。それから嬢様は又那古井の方へ御帰りになります。世間では嬢様の事を不人情だとか、薄情だとか色々申します。もとは極々内気の優しいかたが、此頃では大分気が荒くなつて、何だか心配だと源兵衛が来るたびに申します。……」

是からさきを聞くと、折角の趣向が壊れる。漸く仙人になりかけた所を、誰か来て羽衣を

返せ／＼と催促する様な気がする。七曲りの険を冒して、やつとの思ひで、こゝ迄来たものを、さう無暗に俗界に引きずり下ろされては、飄然と家を出た甲斐がない。世間話しもある程度以上に立ち入ると、浮世の臭ひが毛孔から染み込んで、垢で身體が重くなる。

―御婆さん、那古井へは一筋道だね―と十錢銀貨を一枚床几の上へかちりと投げ出して立ち上がる。

―長良の五輪塔から右へ御下りなさると、六丁程の近道になります。路はわるいが、御若い方には其方がよろしかろ。――是は多分に御茶代を――氣を附けて御越しなされ―

三

昨夕は妙な氣持ちがした。

宿へ着いたのは夜の八時頃であつたから、家の具合庭の作り方は無論、東西の區別さへわからなかつた。何だか廻廊の様な所をしきりに引き廻されて、仕舞ひに六疊程の小さな座敷に入れられた。昔來た時とは丸で見當が違ふ。晩餐を濟まして、湯に入つて、室へ歸つて茶を飮んで居ると、小女が來て床を延べよかと云ふ。

不思議に思つたのは、宿へ着いた時の案内も、晩食の給仕も、湯壺への案内も、床を敷く面倒も、悉く此小女一人で辨じて居る。それで口は滅多にきかぬ。と云うて、田舎染みても居らぬ。赤い帯を色氣なく結んで、古風な紙燭をつけて、廊下の様な、梯子段の様な所をぐる／＼廻らされた時、同じ帯の同じ紙燭で、同じ廊下とも階段ともつかぬ所を、何度も降りて、湯壺へ連れて行かれた時は、既に自分ながら、カンヴスの中を往來して居る様な氣がした。

給仕の時には、近頃は客がないので、ほかの座敷は掃除がしてないから、普段使つて居る部屋で我慢してくれと云つた。床を延べる時にはゆるりと御休みと人間らしい言葉を述べて、出て行つたが、其足音が、例の曲りくねつた廊下を、次第に下の方へ遠ざかつた時に、あとがひつそりとして、人の氣がしないのが氣になつた。

生れてから、こんな經驗はたゞ一度しかない。昔房州を館山から向うへ突き拔けて、上總から銚子迄濱傳ひに歩行いた事がある。其時ある晩、ある所へ宿まつた。ある所と云ふより外に言ひ様がない。今では土地の名も宿の名も、丸で忘れて仕舞つた。第一宿屋へとまつたのかが問題である。棟の高い大きな家に女がたつた二人居た。余がとめるかと聞いたとき、年を取つた方がはいと云つて、若い方が此方へと案内をするから、ついて行くと、荒れ果てた、廣い間をいくつも通り越して一番奥の、中二階へ案内をした。三段登つて廊下から部屋へ這入らうとすると、板庇の下に傾きかけて居た一叢の修竹が、そよりと夕風を受けて、余の肩から頭を撫でたので、既にひやりとした。縁板は既に朽ちかゝつて居る。來年は筍が縁を突き拔いて座敷のなかは竹だらけにならうと云つたら、若い女が何も云はずににや／＼と笑つて、出て行つた。

其晩は例の竹が、枕元で婆娑ついて、寐られない。障子をあけたら、庭は一面の草原で、夏の夜の月明らかなるに、眼を走らせると、垣も塀もあらばこそ、まともに大きな草山に續いて居る。草山の向うはすぐ大海原でどゝん／＼と大きな濤が人の世を威嚇かしに來る。余はとうとう夜の明ける迄一睡もせずに、怪し氣な蚊帳のうちに辛抱しながら、丸で草双紙にでもありさうな事だと考へた。

其後旅も色々したが、こんな氣持ちになつた事は、今夜この那古井へ宿まる迄はかつて無かつた。

仰向けに寐ながら、偶然眼を開けて見ると欄

間に、朱塗の縁をとつた額がかゝつてゐる、文字は寐ながらも竹影拂階塵不動と明かに讀まれる。大徹といふ落款も慥かに見える。余は書に於ては皆無鑒識のない男だが、平生から、黄檗の高泉和尚の筆致を愛して居る。隱元も即非も木庵も夫々に面白味はあるが、高泉の字が一番蒼勁でしかも雅馴である。今此七字を見ると、筆のあたりから手の運び具合、どうしても高泉としか思はれない。しかし現に大徹とあるからには別人だらう。ことによると黄檗に大徹といふ坊主が居たかも知れぬ。それにしては紙の色が非常に新しい。どうしても昨今のものとしか受け取れない。

横を向く。床にかゝつてゐる若冲の鶴の圖が目につく。是は商賣柄丈に、部屋に這入つた時、既に逸品と認めた。若冲の圖は大抵精緻な彩色ものが多いが、此鶴は世間に氣兼なしの一筆がきで、一本足ですらりと立つた上に、卵形の胴がふはつと乘つかつてゐる樣子は、甚だ吾意を得て、飄逸の趣は、長い嘴のさき迄籠つてゐる。床の隣は違ひ棚を略して、普通の戸棚につづく。戸棚の中には何があるか分らない。

すや／＼と寐入る。夢に。

長良の乙女が振袖を着て、青馬に乘つて、峠を越すと、いきなり、さゝだ男と、さゝべ男が飛び出して兩方から引つ張る。女が急にオフェリヤになつて、柳の枝へ上つて、河の中を流れながら、うつくしい聲で歌をうたふ。救つてやらうと思つて、長い竿を持つて、向島を追つ懸けて行く。女は苦しい樣子もなく、笑ひながら、うたひながら、行末も知らず流れを下る。余は竿をかついで、おゝい／＼と呼ぶ。

そこで眼が醒めた。腋の下から汗が出てゐる。妙に雅俗混淆な夢を見たものだと思つた。昔し宋の大慧禪師と云ふ人は、悟道の後、何事も意の如くに出來ん事はないが、只夢の中では俗念が出て困ると、長い間これを苦にされたさうだが、成程尤もだ。文藝を生命にするものは今少しうつくしい夢を見なければ幅が利かない。こんな夢では大部分畫にも詩にもならんと思ひながら、寐返りを打つと、いつの間にか障子に月がさして、木の枝が二三本斜に影をひたしてゐる。冴える程の春の夜だ。

氣の所爲か、誰か小聲で歌をうたつてる樣な氣がする。夢のなかの歌が、此世へ拔け出したのか、或は此世の聲が遠き夢の國へ、うつゝながらに紛れ込んだのかと耳を峙てる。慥かに誰かうたつてゐる。細く且低い聲には相違ないが、眠らんとする春の夜に一縷の脈をかすかに搏たせつゝある。不思議な事に、其調子はとにかく、文句をきくと——枕元でやつてるのでないから、文句の分らう筈はない。——其の聞こえぬ筈のものが、よく聞こえる。あきづけば、をばなが上に、おく露の、けぬべくもわは、おもほゆるかもと長良の乙女の歌を、繰り返し繰り返す樣に思はれる。

初めのうちは椽に近く聞こえた聲が、次第次第に細く遠退いて行く。突然と已むものには、突然の感はあるが、憐れはうすい。ふつつりと思ひ切つたる聲をきく人の心には矢張りふつつりと思ひ切つたる感じが起る。是と云ふ句切りもなく自然に細りて、いつの間にか消えるべき現象には、われも亦秒を縮め、分を割いて、心細さの細さが細る。死なんとしては、死なんとする病夫の如く、消えんとしては、消えんとする燈火の如く、今已むか已むかとのみ心を亂す此歌の奧には、天下の春の恨みを悉く萃めたる調べがある。

今迄は床の中に我慢して聞いて居たが、聞く聲の遠ざかるに連れて、わが耳は、釣り出さるると知りつゝも、其聲を追ひかけたくなる。細くなればなる程、耳丈になつても、あとを慕つ

て飛んで行きたい氣がする。もうどう焦慮つても鼓膜に應へはあるまいと思ふ一刹那の前、余は堪らなくなつて、われ知らず布團をすり拔けると共にさらりと障子を開けた。途端に自分の膝から下が斜に月の光を浴びる。寐卷の上にも木の影が搖れながら落ちた。

　障子をあけた時には、そんな事には氣が附かなかつた。あの聲はと、耳の走る見當を見破ると——向ふに居た。花ならば海棠かと思はるゝ幹を背に、よそ〳〵しくも月の光を忍んで朦朧たる影法師が居た。あれかと思ふ意識さへ、確とは心にうつらぬ間に、黑いものは花の影を踏み碎いて右へ切れた。わが居る部屋つゞきの棟の角が、すらりと動く、脊の高い女姿を、すぐに遮つて仕舞ふ。

　借着の浴衣一枚で、障子へつらまつた儘、しばらく茫然として居たが、やがて我に歸ると、山里の春は中々寒いものと悟つた。ともかくもと拔け出でた布團の穴に、再び歸參して考へ出した。括り枕のしたから、袂時計を出して見ると、一時十分過ぎである。再び枕の下へ押し込んで考へ出した。よもや化物ではあるまい。化物でなければ人間で、人間とすれば女だ。あるひは此家の御孃さんかも知れない。然し出歸りのお孃さんとしては夜なかに山つゞきの庭へ出るのがちと不穩當だ。何にしても中中寐られない。枕の下にある時計迄がちく〳〵口をきく。今迄懷中時計の音の氣になつた事はないが、今夜に限つて、さあ考へろ、さあ考へろと催促する如く、寐るな寐るなと忠告する如く口をきく。怪しからん。

　怖いものも只怖いもの其儘の姿と見れば詩になる。凄い事も、己を離れて、只單獨に凄いのだと思へば畫になる。失戀が藝術の題目となるのも全くその通りである。失戀の苦しみを忘れて、其のやさしい所やら、同情の宿る所やら、憂のこもる所やら、一歩進めて云へば失戀の苦しみ其物の溢るゝ所やらを、單に客觀的に眼前に思ひ浮べるから文學美術の材料になる。世には有りもせぬ失戀を製造して、自ら強ひて煩悶して、愉快を貪るものがある。常人は之を評して愚だと云ふ、氣違ひだと云ふ。然し自ら不幸の輪廓を描いて好んで其中に起臥するのは、自ら烏有の山水を刻畫して壺中の天地に歡喜すると、其藝術的の立脚地を得たる點に於て全く等しいと云はねばならぬ。この點に於て世上幾多の藝術家は（日常の人としてはいざ知らず）藝術家として常人よりも愚である、氣違ひである。われ〳〵は草鞋旅行をする間、朝から晩迄苦しい、苦しいと不平を鳴らしつゞけて居るが、人に向つて曾遊を說く時分には、不平らしい樣子は少しも見せぬ。面白かつた事、愉快であつた事は無論、昔の不平をさへ得意に喋々して、したり顏である。これは敢て自ら欺くの、人を僞るのと云ふ了見ではない。旅行をする間は常人の心持ちで、曾遊を語るときは既に詩人の態度にあるから、こんな矛盾が起こる。して見ると、四角な世界から常識と名のつく一角を磨滅して、三角のうちに住むのを藝術家と呼んでもよからう。

　この故に天然にあれ、人事にあれ、衆俗の辟易して近づき難しとなす所に於て、藝術家は無數の琳琅を見、無上の寶璐を知る。俗に之を名づけて美化と云ふ。其實は美化でも何でもない。燦爛たる彩光は、炳乎として昔から現象世界に實在して居る。只一翳眼に在つて空花亂墜するが故に、俗累の羈絏牢として絶ち難きが故に、榮辱得喪のわれに逼る事、念々切なるが故に、ターナーが汽車を寫す迄は汽車の美を解せず、應擧が幽靈を描く迄は幽靈の美を知らずに打ち過ぎるのである。

　余が今見た影法師も、只それ限りの現象とす

れば、[illegible]が見ても、[illegible]に聞いても、[illegible]に詩趣を帯びて居る。—孤村の温泉、—春宵の花影、—月前の低誦、—朧夜の姿—どれも是も藝術家の好題目である。此好題目が眼前にありながら、余は入らざる詮議立てをして、余計な探りを投げ込んで居る。折角の雅境に理窟の筋が立つて、願つてもない風流を、気味の悪さが踏み付けにして仕舞つた。こんな事なら、非人情も標榜する價値がない。もう少し修行をしなければ詩人とも畫家とも人に向つて吹聴する資格はつかぬ。昔し以太利亜の畫家サルヴァトル・ロザは泥棒が研究して見たい一心から、おのれの危險を賭にして、山賊の群に這入り込んだと聞いた事がある。飄然と畫帖を懐にして家を出でたからには、余にも其位の覺悟がなくては恥づかしい事だ。

こんな時にどうすれば詩的な立脚地に歸れるかと云へば、おのれの感じ、其物を、おのが前に据ゑつけて、其感じから一歩退いて有體に落ち附いて、他人らしく之を檢査する餘地さへ作ればいゝのである。詩人とは自分の死骸を、自分で解剖して、其病状を天下に發表する義務を有して居る。其方便は色々あるが一番手近なのは何でも蚊でも手當り次第十七字にまとめて見るのが一番いゝ。十七字は詩形として尤も輕便であるから、顔を洗ふ時にも、厠に上つた時にも、電車に乗つた時にも、容易に出來る。十七字が容易に出來ると云ふ意味は安直に詩人になれると云ふ意味であつて、詩人になると云ふのは一種の悟りであるから輕便だと云つて侮蔑する必要はない。輕便であればある程功徳になるから却つて尊重すべきものと思ふ。まあ一寸腹が立つと假定する。腹が立つた所をすぐ十七字にする。十七字にするときは自分の腹立ちが既に他人に變じて居る。腹を立つたり、俳句を作つたり、さう一人が同時に働けるものではない。一寸涙をこぼす。此涙を十七字にする。するや否やうれしくなる。涙を十七字に纏めた時には、苦しみの涙は自分から遊離して、おれは泣く事の出來る男だと云ふ嬉しさ丈の自分になる。

是が平生から余の主張である。今夜も一つ此主張を實行して見ようと、夜具の中で例の事件を色々と句に仕立てる。出來たら書きつけないと散漫になつて行かぬと、念入りの修業だから、例の寫生帖をあけて枕元へ置く。

「海棠の露をふるふや物狂ひ」と眞先に書き附けて讀んで見ると、別に面白くもないが、さりとて氣味のわるい事もない。次に「花の影、女の影の朧かな」とやつたが、是は季が重なつて居る。然し何でも構はない、氣が落ち付いて呑氣になればいゝ。夫から「正一位、女に化けて朧月」と作つたが、狂句めいて、自分ながら可笑しくなつた。

此調子なら大丈夫と乗氣になつて出る丈の句をみなかき附ける。

春の星を落して夜半のかざしかな
春の夜の雲に濡らすや洗ひ髪
春や今宵歌つかまつる御姿
海棠の精が出てくる月夜かな
うた折々月下の春ををちこちす
思ひ切つて更け行く春の獨りかな

抔と、試みて居るうち、いつしか、うと〳〵眠くなる。

恍惚と云ふのが、こんな場合に用ひるべき形容詞かと思ふ。熟睡のうちには何人も我を認め得ぬ。明覺の際には誰あつて外界を忘るゝものはなからう。只兩域の間に縷の如き幻境が横たはる。醒めたりと云ふには餘り朧にて、眠ると評せんには少しく生氣を剩す。起臥の二界を同瓶裏に盛りて、詩歌の彩管を以て、ひたすらに攪き雜ぜたるが如き状態を云ふの

である。自然の色を夢の手前迄ぼかして、有の儘の宇宙を一段、霞の國へ押し流す。睡魔の妖腕をかりて、ありとある實相の角度を滑らかにすると共に、かく和らげられたる乾坤に、われからと微かに鈍き脈を通はせる。地を這ふ烟の飛ばんとして飛び得ざる如く、わが魂の、わが殼を離れんとして離るゝに忍びざる態である。拔け出でんとして逡巡ひ、逡巡ひては拔け出でんとし、果ては魂と云ふ個體を、もぎどうに保ちかねて、氤氳たる瞑氛が散るともなしに四肢五體に纏綿して、依々たり戀々たる心持ちである。

余が寤寐の境にかく逍遙して居ると、入口の唐紙がすうと開いた。あいた所へまぼろしの如く女の影がふうと現はれた。余は驚きもせぬ。恐れもせぬ。只心地よく眺めて居る。眺めると云うては些と言葉が強過ぎる。余が閉ぢて居る瞼の裏に幻影の女が斷りもなく滑り込んで來たのである。まぼろしはそろり〳〵と部屋のなかに這入る。仙女の波をわたるが如く、疊の上には人らしい音も立たぬ。閉づる眼のなかから見る世の中だから確とは解らぬが、色の白い、髮の濃い、襟足の長い女である。近頃はやる、ぼかした寫眞を灯影にすかす樣な氣がする。

まぼろしは戸棚の前でとまる。戸棚があく。白い腕が袖をすべつて暗闇のなかにほのめいた。戸棚が又しまる。疊の波がおのづから幻影を渡し返す。入口の唐紙がひとりでに閉たる。余が眠りは次第に濃やかになる。人の死して、まだ牛にも馬にも生れ變らない途中はこんなであらう。

いつ迄人と馬の相中に寐てゐたかわれは知らぬ。耳元にきゝつと女の笑ひ聲がしたと思つたら眼がさめた。見れば夜の幕はとくに切り落されて、天下は隅から隅迄明るい。うらゝかな春日が丸窓の竹格子を黒く染めぬいた樣子を見ると、世の中に不思議と云ふものの潜む餘地はなさそうだ。神祕は十萬億土へ歸つて、三途の川の向う側へ渡つたのだらう。

浴衣の儘、風呂場へ下りて、五分ばかり偶然と湯壺のなかで顏を浮かして居た。洗ふ氣にも、出る氣にもならない。第一昨夕はどうしてあんな心持ちになつたのだらう。晝と夜を界にかう天地が、でんぐり返るのは妙だ。

身體を拭くさへ退儀だから、いゝ加減にして、濡れた儘上がつて、風呂場の戸を内から開けたら、又驚かされた。

「御早う。昨夕はよく寐られましたか」

戸を開けるのと、此言葉とは殆ど同時にきた。人の居るさへ豫期して居らぬ出合頭の挨拶だから、さそくの返事も出る遑さへないうちに、

「さあ、御召しなさい」

と後へ廻つて、ふはりと余の背中へ柔らかい着物をかけた。漸くの事「是は難有う……」丈出して、向き直る途端に、女は二三歩退いた。

昔から小説家は必ず主人公の容貌を極力描寫することに相場が極まつてる。古今東西の言語で、佳人の品評に使用せられたるものを列擧したならば、大藏經と其量を爭ふかも知れぬ。此辟易すべき多量の形容詞中から、余と三歩の隔りに立つ、體を斜めに捩つて、後目に余が驚愕と狼狽を心地よげに眺めて居る女を、尤も適當に敍すべき用語を拾ひ來つたなら、どれ程の數になるか知れない。然し生れて三十餘年の今日に至るまで未だかつて、かゝる表情を見た事がない。美術家の評によると、希臘の彫刻の理想は、端肅の二字に歸するさうである。端肅とは人間の活力の動かんとして、未だ動かざる姿と思ふ。動けばどう變化するか、風雲か雷霆か、見わけのつかぬ所に餘韻が縹緲

と信ずるから今者の[illegible]を百世の後に伝ふるのであらう。世上幾多の[illegible]は悉く此渾然たる可能力の裏面に伏在して居る。動けばあらはれる。あらはるれば一か二か三か必ず始末がつく。一も二も三も必ず特殊の能力には相違なからうが、既に一となり、二となり、三となつた暁には、拖泥帯水の陋を遺憾なく示して、本来円満の相に戻る訳には行かぬ。此故に動と名のつくものは必ず卑しい。運慶の仁王も、北斎の漫画も全く此動の一字で失敗して居る。動か静か。是がわれ等画工の運命を支配する大問題である。古来美人の形容も大抵此二大範疇のいづれにか打ち込む事が出来べき筈だ。

所が此女の表情を見ると、余はいづれとも判断に迷つた。口は一文字を結んで静である。眼は五分のすきさへ見出すべく動いて居る。顔は下膨れの瓜実形で、豊かに落ち付きを見せてゐるに引き替へて、額は狭苦しくも、こせ付いて、所謂富士額の俗臭を帯びて居る。のみならず眉は両方から逼つて、中間に数滴の薄荷を点じたる如く、ぴく〳〵焦慮て居る。鼻ばかりは軽薄に鋭どくもない、遅鈍に丸くもない。画にしたら美しからう。かやうに別れ〳〵の道具が皆一癖あつて、乱調にどや〳〵と余の双眼に飛び込んだのだから迷ふのも無理はない。

元来は静であるべき大地の一角に陥欠が起つて、全体が思はず動いたが、動くは本来の性に背くと悟つて、力めて往昔の姿にもどらうとしたのを平衡を失つた機勢に制せられて、心ならずも動きつゞけた今日は、やけだから無理でも動いて見せると云はぬ許りの有様が——そんな有様がもしあるとすれば丁度此女を形容する事が出来る。

それだから軽侮の裏に何となく人に縋りたい景色が見える。人を馬鹿にした様子の底に慎み深い分別がほのめいてゐる。才に任せ、気を負へば百人の男子を物の数とも思はぬ勢の下から温和しい情が吾知らず湧いて出る。どうしても表情に一致がない。悟りと迷が一軒の家に喧嘩をしながらも同居して居る体だ。此女の顔に統一の感じのないのは、心に統一のない証拠で、心に統一がないのは、此女の世界に統一がなかつたのだらう。不幸に圧しつけられながら、其不幸に打ち勝たうとしてゐる顔だ。不仕合せな女に違ひない。

「難有う」と繰り返しながら、一寸会釈した。

「ほゝ、御部屋は掃除がしてあります。往つて御覧なさい。いづれ後程」

と云ひ捨て、ひらりと、腰をひねつて、廊下を軽気に馳けて行つた。頭は銀杏返しに結つてゐる。白い襟がたぼの下から見える。帯の黒繻子は片側丈だらう。

四

ぼかんと部屋へ帰ると、成程奇麗に掃除がしてある。一寸気がゝりだから、念の為め戸棚をあけて見る。下には小さな用箪笥が見える。上から友禅の扱帯が半分垂れかゝつて居るのは、誰か衣類でも取り出して、急いで出て行つたものと解釈が出来る。扱帯の上部はなまめかしい衣裳の間にかくれて先は見えない。片側には書物が少々詰めてある。一番上に白隠和尚の遠良天釜と、伊勢物語の一巻が並んでる。昨夕のうつゝは事実かも知れないと思つた。

何気なく座布団の上へ坐ると、唐木の机の上に例の写生帖が、鉛筆を挟んだ儘、大事さうにあけてある。夢中に書き流した句を、朝見たらどんな具合だらうと手に取る。

「海棠の露をふるふや物狂」の下にだれだか「海棠の露をふるふや朝烏」とかいたものがある。鉛筆だから、書体はしかと解らんが、女にしては硬過ぎる、男にしては柔らか過ぎる。おやと

又吃驚する。次を見ると「花の影、女の影の朧かな」の下に「花の影女の影を重ねけり」とつけてある。「正一位女に化けて朧月」とある。眞似をした積りか、添削した氣か、風流の交はりか、馬鹿か、馬鹿にしたのか、余は思はず首を傾けた。

後刻と云つたから、今に飯の時にでも出て來るかも知れない。出て來たら樣子が少しは解るだらう。ときに何時だなと時計を見ると、もう十一時過ぎである。よく寐たものだ。是では午飯丈で間に合はせる方が胃の爲によからう。

右側の障子をあけて、昨夜の名殘はどの邊かなと眺める。海棠と鑑定したのは、果して海棠であるが、思つたよりも庭は狹い。五六枚の飛石を一面の青苔が埋めて、素足で踏みつけたら、さも心持ちがよささうだ。左は山つゞきの崖に赤松が斜に岩の間から庭の上へさし出して居る。海棠の後には一寸した茂みがあつて、奥は大竹藪が十丈の翠を春の日に曝して居る。右手は屋の棟で遮られて、見えぬけれども、地勢から察すると、だら／＼下りに風呂場の方へ落ちて居るに相違ない。

山が盡きて、岡となり、岡が盡きて、幅三丁程の平地となり、其平地が盡きて、海の底へもぐり込んで、十七里向ふへ行つて又隆然と起き上つて、周圍六里の摩耶島となる。是が那古井の地勢である。溫泉場は岡の麓を出來る丈崖へさしかけて、岨の景色を半分庭へ圍ひ込んだ一構であるから、前面は二階でも、後は平屋になる。椽から足をぶらさげれば、すぐと踵は苔に着く。道理こそ昨夕は階子段を無暗に上つたり、下つたり、異な仕掛の家と思つた筈だ。

今度は左り側の窓をあける。自然と凹む二疊許りの岩のなかに春の水がいつともなく、たまつて靜かに山櫻の影を蘸して居る。二株三株の熊笹が岩の角を彩どる、向ふに枸杞とも見える生垣があつて、外は濱から岡へ上る岨道か、時々人聲が聞える。往來の向ふはだら／＼と南下がりに蜜柑を植ゑて、谷の窮まる所に又大きな竹藪が、白く光る。竹の葉が遠くから見ると、白く光るとは此時初めて知つた。藪から上は、松の多い山で、赤い幹の間から石段が五六段手にとる樣に見える。大方御寺だらう。

入口の襖をあけて椽へ出ると、欄干が四角に曲つて、方角から云へば海の見ゆべき筈の所に、中庭を隔てゝ、表二階の一間がある。わが住む部屋も、欄干に倚れば矢張り同じ高さの二階なのには興が催される。湯壺は地の下にあるのだから、入湯と云ふ點から云へば、余は三層樓上に起臥する譯になる。

家は隨分廣いが、向ふ二階の一間と、余が欄干に添うて、右へ折れた一間の外は、居室台所は知らず、客間と名がつきさうなのは大抵閉て切つてある。客は、余をのぞくの外殆んど皆無なのだらう。締めた部屋は晝も雨戸をあけず、あけた以上は夜も閉てぬらしい。是では表の戸締りさへ、するかしないか解らん。非人情の旅にはもつて來いと云ふ屈強な場所だ。

時計は十二時近くなつたが飯を食はせる氣色は更にない。漸く空腹を覺えて來たが、空山不見人と云ふ詩中にあると思ふと、一かたけ位儉約しても遺憾はない。畫をかくのも面倒だ、俳句は作らんでも既に俳三昧に入つて居るから、作るだけ野暮だ。讀まうと思つて三脚几に括りつけて來た二三冊の書籍もほどく氣にならん。かうやつて、煦々たる春日に背中をあぶつて、椽側に花の影と共に寢ころんで居るのが、天下の至樂である。考へれば外道に墮ちる。動くと危ない。出來るならば鼻から呼吸もしたくない。疊から根の生えた植物のやうにぢつとして二週間許り暮らして見たい。

やがて、廊下に足音がして、段々下から誰か

上がつてくる。近づくのを聞いてゐると、二人らしい。それが部屋の前でとまつたなと思つたら、一人は何も云はず、元の方へ引き返す。襖があいたから、今朝の人と思つたら、矢張り昨夜の小女郎である。何だか物足らぬ。
「遅くなりました」と膳を据ゑる。朝食の言譯も何も言はぬ。燒肴に青いものをあしらつて、椀の蓋をとれば早蕨の中に、紅白に染め拔かれた海老を沈ませてある。あゝ好い色だと思つて、椀の中を眺めて居た。
「御嫌ひか」と下女が聞く。
「いゝや、今に食ふ」と云つたが實際食ふのは惜しい氣がした。ターナーが或晩餐の席で、皿に盛るサラドを見詰めながら、涼しい色だ、是がわしの用ゐる色だと傍の人に話したと云ふ逸事をある書物で讀んだ事があるが、此の海老と蕨の色を一寸ターナーに見せてやりたい。一體西洋の食物で色のいゝものは一つもない。あればサラドと赤大根位なものだ。滋養の點から云つたらどうか知らんが、畫家から見ると頗る發達せん料理である。そこへ行くと日本の獻立は、吸物でも、口取でも、刺身でも物綺麗に出來る。會席膳を前へ置いて、一箸も着けずに、眺めた儘歸つても、目の保養から云へば、御茶屋へ上がつた甲斐は充分ある。
「うちに若い女の人が居るだらう」と椀を置きながら、質問をかけた。
「へえ」
「ありや何だい」
「若い奥樣で御座んす」
「あの外にまだ年寄の奥樣が居るのかい」
「去年御亡くなりました」
「旦那さんは」
「居ります。旦那さんの娘さんで御座んす」
「あの若い人がかい」
「へえ」
「御客は居るかい」
「居りません」
「わたし一人かい」
「へえ」
「若い奥さんは毎日何をして居るかい」
「針仕事を……」
「夫から」
「三味を彈きます」
是は意外であつた。面白いから又
「夫から」と聞いて見た。
「御寺へ行きます」と小女郎が云ふ。
是は又意外である。御寺と三味線は妙だ。
「御寺詣りをするのかい」
「いゝえ、和尚樣の所へ行きます」
「和尚さんが三味線でも習ふのかい」
「いゝえ」
「ぢや何をしに行くのだい」
「大徹樣の所へ行きます」
なある程、大徹と云ふのは此額を書いた男に相違ない。此句から察すると何でも禪坊主らしい。戸棚に遠良天釜があつたのは、全くあの女の所持品だらう。
「此部屋は普段誰か這入つて居る所かね」
「普段は奥樣が居ります」
「それぢや、昨夕、わたしが來る時迄こゝに寢たのだね」
「へえ」
「それは御氣の毒な事をした。それで大徹さんの所へ何をしに行くのだい」
「知りません」
「それから」
「何で御座んす」
「それから、まだ外に何かするのだらう」
「それから、色々……」
「色々つて、どんな事を」
「知りません」

會話は是で切れる。飯は漸く了る。膳を引くとき、小女郎が入口の襖を開けたら、中庭の栽込みを隔てて、向う二階の欄干に銀杏返しが頬杖を突いて、開化した楊柳觀音の様に下を見詰めて居た。今朝に引き替へて、甚だ静かな姿である。俯向いて、瞳の働きが、こちらへ通はないから、相好に斯程な變化を來したものであらうか。昔の人は人に存するもの眸子より良きはなしと云つたさうだが、成程人焉んぞ廋さんや、人間のうちで眼程活きて居る道具はない。寂然と倚る亞字欄の下から、蝶々が二羽寄りつ離れつ舞ひ上がる。途端にわが部屋の襖はあいたのである。襖の音に、女は卒然と蝶から眼を余の方に轉じた。視線は毒矢の如く空を貫いて、會釋もなく余が眉間に落ちる。はつと思ふ間に、小女郎が、又はたと襖を立て切つた。あとは至極呑氣な春となる。

余は又ごろりと寐ころんだ。忽ち心に浮んだのは、

Sadder than is the moon's lost light,
Lost ere the kindling of dawn,
To travellers journeying on,
The shutting of thy fair face from
[my sight.

と云ふ句であつた。もし余があの銀杏返しに懸想して、身を碎いても逢はんと思ふ矢先に、今の様な一瞥の別れを、魂消ゆる迄に、嬉しとも、口惜しとも感じたら、余は必ずこんな意味をこんな詩に作るだらう。其上に

Might I look on thee in death,
With bliss I would yield my breath.

と云ふ二句さへ、附け加へたかも知れぬ。幸ひ、普通ありふれた、戀とか愛とか云ふ境界は既に通り越して、そんな苦しみは感じたくても感じられない。然し今の刹那に起つた出來事の詩趣はゆたかに此五六行にあらはれて居る。余と銀杏返しの間柄に、こんな切ない思ひはないとしても、二人の今の關係を、此詩の中に適用めて見るのは面白い。或は此詩の意味をわれらの身の上に引きつけて解釋しても愉快だ。二人の間には、ある因果の細い絲で、此詩にあらはれた境遇の一部分が、事實となつて、括りつけられて居る。因果も此位絲が細いと苦にはならぬ。其上、只の絲ではない。空を横切る虹の絲、野邊に棚引く霞の絲、露にかゞやく蜘蛛の絲。切らうとすれば、すぐ切れて、見て居るうちは勝れてうつくしい。萬一此絲が見る間に太くなつて井戸繩の様にかたくなつたら？　そんな危險はない。余は畫工である。先は只の女とは違ふ。

突然襖があいた。寐返りを打つて入口を見ると、因果の相手の其銀杏返しが敷居の上に立つて青磁の鉢を盆に乘せたまゝ佇んで居る。

「また寐て入らつしやるか、昨夕は御迷惑で御座んしたらう。何返も御邪魔をして、ほゝゝ」と笑ふ。臆した氣色も、隱す氣色も――恥づる氣色は無論ない。只こちらが先を越されたのみである。

「今朝は難有う」と又禮を云つた。考へると、丹前の禮を是で三返云つた。しかも、三返ながら只難有うと云ふ三字である。

女は余が起き返らうとする枕元へ、早くも坐つた。

「まあ寐て入らつしやい。寐て居ても話しは出來ませう」と、さも氣作に云ふ。余も全くだと考へたから、一先づ腹這ひになつて、兩手で顎を支へ、しばし疊の上へ肘壺の柱を立てる。

「御退屈だらうと思つて、御茶を入れに來ました」

「難有う」又難有うが出た。菓子皿のなかを見ると、立派な羊羹が竝んでゐる。余は凡ての菓

子のうちで尤も羊羹が好だ。別段食ひたくはないが、あの肌合が滑らかに、緻密に、しかも半透明に光線を受ける工合は、どう見ても一個の美術品だ。ことに青味を帯びた煉上げ方は、玉と蠟石の雑種の様で、甚だ見て心持ちがいい。のみならず青磁の皿に盛られた青い煉羊羹は、青磁のなかから今生れた様につや／＼して、思はず手を出して撫でて見たくなる。西洋の菓子で、これ程快感を與へるものは一つもない。クリームの色は一寸柔らかだが、少し重苦しい。ジェリは、一見寶石の樣に見えるが、ぶる／＼顫へて、羊羹程の重味がない。白砂糖と牛乳で五重の塔を作るに至つては、言語道斷の沙汰である。

「うん、中々美事だ」

「今しがた、源兵衛が買つて歸りました。是ならあなたに召し上がられるでせう」

源兵衛は昨夕城下へ留まつたと見える。余は別段の返事もせず羊羹を見て居た。どこで誰が買つて來ても構ふ事はない。只美しければ、美しいと思ふ丈で充分滿足である。

「此青磁の形は大變いゝ。色も美事だ。殆ど羊羹に對して遜色がない」

女はふゝんと笑つた。口元に侮りの波が微かに搖れた。余の言葉を洒落と解したのだらう。成程洒落とすれば、輕蔑される價は慥かにある。智慧の足りない男が無理に洒落れた時には、よくこんな事を云ふものだ。

「是は支那ですか」

「何ですか」と相手は丸で青磁を眼中に置いて居ない。

「どうも支那らしい」と皿を上げて底を眺めて見た。

「そんなものが、御好きなら、見せませうか」

「えゝ、見せて下さい」

「父が骨董が大好きですから、大分色々なものがあります。父にさう云つて、いつか御茶でも上げませう」

茶と聞いて少し辟易した。世間に茶人程勿體振つた風流人はない。廣い詩界をわざとらしく窮屈に繩張りをして、極めて自尊的に、極めてことさらに、極めてせゝこましく、必要もないのに鞠躬如として、あぶくを飲んで結構がるものは所謂茶人である。あんな煩瑣な規則のうちに雅味があるなら、麻布の聯隊のなかは雅味で鼻がつかへるだらう。廻れ右、前への連中は悉く大茶人でなくてはならぬ。あれは商人とか町人とか、丸で趣味の教育のない連中が、どうするのが風流か見當が附かぬ所から、器械的に利休以後の規則を鵜呑みにして、是で大方風流なんだらう、と却て眞の風流人を馬鹿にする爲の藝である。

「御茶つて、あの流儀のある茶ですかな」

「いゝえ、流儀も何もありやしません。御厭なら飲まなくつてもいゝ御茶です」

「そんなら、序に飲んでもいゝですよ」

「ほゝゝゝ。父は道具を人に見て頂くのが大好きなんですから……」

「褒めなくつちあ、いけませんか」

「年寄だから、褒めてやれば、嬉しがりますよ」

「へえ、少しなら褒めて置きませう」

「負けて、澤山御褒めなさい」

「はゝゝゝ、時にあなたの言葉は田舍ぢやない」

「人間は田舍なんですか」

「人間は田舍の方がいゝのです」

「それぢや幅が利きます」

「然し東京に居た事がありませう」

「えゝ、居ました、京都にも居ました。渡りものですから、方々に居ました」

「こゝと都と、どつちがいゝですか」

「同じ事ですわ」

「から云ふ靜かな所が、却て氣樂でせう」

「氣樂も、氣樂でないも、世の中は氣の持ち樣一つでどうでもなります。蚤の國が厭になつたつて、蚊の國へ引つ越しちや、何にもなりません」

「蚤も蚊も居ない國へ行つたら、いゝでせう」

「そんな國があるなら、こゝへ出して御覽なさい。さあ出して頂戴」と女は詰め寄せる。

「御望みなら、出して上げませう」と例の寫生帖をとつて、女が馬へ乘つて、山櫻を見て居る心持ち——無論咄嗟の筆使ひだから、畫にはならない。只心持ち丈をさら〳〵と書いて、

「さあ、この中へ御這入りなさい。蚤も蚊も居ません」と鼻の前へ突き付けた。驚くか、恥づかしがるか、此樣子では、よもや、苦しがる事はなからうと思つて、一寸氣色を伺ふと、

「まあ、窮屈な世界だこと、横幅ばかりぢやありませんか。そんな所が御好きなの、丸で蟹ね」

と云つて退けた。余は

「わはゝゝ」と笑ふ。軒端に近く、啼きかけた鶯が、中途で聲を崩して、遠き方へ枝移りをやる。兩人はわざと話をやめて、しばらく耳を峙てたが、一旦啼き損ねた咽喉は容易に開けぬ。

「昨日は山で源兵衞に御逢ひでしたらう」

「えゝ」

「長良の乙女の五輪塔を見て入らしつたか」

「えゝ」

「あきづけば、をばなが上に置く露の、けぬべくもわは、おもほゆるかも」と說明もなく、女はすらりと節もつけずに歌丈述べた。何の爲か知らぬ。

「其歌はね、茶店で聞きましたよ」

「婆さんが敎へましたか。あれはもと私のうちへ奉公したもので、私がまだ嫁に……」と云ひかけて、是はと余の顏を見たから、余は知らぬ風をして居た。

「私がまだ若い時分でしたが、あれが來るたびに、長良の話をして聞かせてやりました。うた丈は中々覺えなかつたのですが、何遍も聽くうちに、とう〳〵何も蚊も諳誦して仕舞ひました」

「だうれで、六づかしい事を知つてると思つた。——然しあの歌は憐れな歌ですね」

「憐れでせうか。私ならあんな歌は詠みませんね。第一、淵川へ身を投げるなんて、つまらないぢやありませんか」

「成程つまらないですね。あなたなら如何しますか」

「どうするつて、譯ないぢやありませんか。さゝだ男もさゝべ男も、男妾にする許りですわ」

「兩方ともですか」

「えゝ」

「えらいな」

「えらかあない、當り前ですわ」

「成程夫ぢや蚊の國へも、蚤の國へも、飛び込まずに濟む譯だ」

「蟹の樣な思ひをしなくつても、生きてゐられるでせう」

ほーう、ほけきようと忘れかけた鶯が、いつ勢を盛り返してか、時ならぬ高音を不意に張つた。一度立て直すと、あとは自然に出ると見える。身を逆しまにして、ふくらむ咽喉の底を震はして、小さき口の張り裂くる許りに、ほーう、ほけきよーう。ほーう、ほけつーきよう」

と、つゞけ樣に囀る。

「あれが本當の歌です」と女が余に敎へた。

五

「失禮ですが旦那は、矢つ張り東京ですか」

「東京と見えるかい」

「見えるかいつて、一目見りやあ、——第一言葉でわかりまさあ」

「東京は何所だか知れるかい」

「さうさね。東京は馬鹿に廣いからね。——何でも下町ぢやねえやうだ。山の手だね。山の手は麹町かね。え？ それぢや、小石川？ でなければ牛込か四谷でせう」

「まあそんな見當だらう。よく知つてるな」

「から見えて、私も江戸つ子だからね」

「道理で生粋だと思つたよ」

「えへゝゝゝ。からつきし、どうも、人間もかうなつちや、みじめですぜ」

「何で又こんな田舍へ流れ込んで來たのだい」

「ちげえねえ、旦那の仰しやる通りだ。全く流れ込んだんだからね。すつかり食ひ詰めつちまつて……」

「固から髪結床の親方かね」

「親方ぢやねえ、職人さ。え？ 所かね。所は神田松下町でさあ。なあに猫の額見た樣な小さな汚ねえ町でさあ。旦那なんか知らねえ筈さ。あすこに龍閑橋てえ橋がありませう。え？ そいつも知らねえかね。龍閑橋や、名代な橋だがね」

「おい、もう少し、石鹸を塗けて呉れないか、痛くつて、いけない」

「痛うがすかい。私や癇性でね、どうも、かうやつて、逆剃をかけて、一本々々髭の穴を掘らなくつちや、氣が濟まねえんだから、——なあに今時の職人なあ、剃るんぢやねえ、撫でるんだ。もう少しだ我慢おしなせえ」

「我慢はさつきから、もう大分したよ。御願ひだから、もう少し湯か石鹸をつけとくれ」

「我慢しきれねえかね。そんなに痛かあねえ筈だが。全體、髭があんまり延び過ぎてるんだ」

やけに頬の肉をつまみ上げた手を、殘念さうに放した親方は、棚の上から、薄つ片な赤い石鹸を取り卸して、水のなかに一寸浸したと思つたら、夫なり余の顔をまんべんなく一應撫で廻した。裸石鹸を顔へ塗り附けられた事はあまりない。然もそれを濡らした水は、幾日前に汲んだ、溜め置きかと考へると、餘りぞつとしない。

既に髪結床である以上は、御客の權利として、余は鏡に向はなければならん。然し余はさつきから此權利を放棄したく考へて居る。鏡と云ふ道具は平らに出來て、なだらかに人の顔を寫さなくては義理が立たぬ。もし此性質が具はらない鏡を懸けて、之に向へと強ひるならば、強ひるものは下手な寫眞師と同じく、向ふものの器量を故意に損傷したと云はなければならぬ。虚榮心を挫くのは修養上一種の方便かも知れぬが、何も己れの價値以下の顔を見せて、是があなたですよと、此方を侮辱するには及ぶまい。今余が辛抱して向き合ふべく餘儀なくされて居る鏡は慥かに最前から余を侮辱して居る。右を向くと顔中鼻になる。左を出すと口が耳元迄裂ける。仰向くと蟇蛙を前から見た樣に眞平に壓し潰され、少しこゞむと福祿壽の祈誓兒の樣に頭がせり出してくる。苟も此鏡に對する間は一人で色々な化物を兼勤しなくてはならぬ。寫るわが顔の美術的ならぬは先づ我慢するとしても、鏡の構造やら、色合や、銀紙の剥げ落ちて、光線が通り抜ける模樣抔を總合して考へると、此道具その物からが醜體を極めて居る。小人から罵詈されるとき、罵詈其自身は別に痛痒を感ぜぬが、其小人の面前に起臥しなければならぬとすれば、誰しも不愉快だらう。

其上此親方が只の親方ではない。そとから覗いたときは、胡坐をかいて、長煙管で、おもちやの日英同盟國旗の上へ、しきりに煙草を吹きつけて、さも退屈氣に見えたが、這入つて、わ

が首の所置を託する段になつて驚いた。髯を剃る間は首の所有權は全く親方の手にあるのか、將た幾分かは余の上にも存するのか、一人で疑ひ出した位、容赦なく取り扱はれる。余の首が肩の上に釘附けにされて居るにしても是では永く持たない。

彼は髪剃を揮ふに當つて、毫も文明の法則を解して居らん。頬にあたる時はがりゝと音がした。揉み上げの所ではぞきりと動脈が鳴つた。顋のあたりに利刃がひらめく時分にはごり〳〵と霜柱を踏みつける様な怪しい聲が出た。しかも本人は日本一の手腕を有する親方を以て自任して居る。

最後に彼は醉つ拂つてゐる。旦那えと云ふたんびに妙な臭ひがする。時々は異な瓦斯を余が鼻柱へ吹き掛ける。是ではいつ何時、髪剃がどう間違つて、何所へ飛んで行くか解らない。使ふ當人にさへ判然たる計畫がない以上は、顔を貸した余に推察の出來よう筈がない。得心づくで任せた顔だから、少しの怪我なら苦情は云はない積りだが、急に氣が變つて咽喉笛でも掻き切られては事だ。

「石鹸なんぞを、つけて、剃るなあ、腕が生なんだが、旦那のは、髭が髭だから仕方があるめえ」と云ひながら親方は裸石鹸を、裸の儘棚の上へ放り出すと、石鹸は親方の命令に背いて地面の上へ轉がり落ちた。

「旦那え、餘り見受けねえ様だが、何ですかい、近頃來なすつたのかい」

「二三日前來た許りさ」

「へえ、どこに居るんですい」

「志保田に逗まつてるよ」

「うん、あすこの御客さんですか。大方そんな事たらうと思つてた。實あ、私もあの隱居さんを頼つて來たんですよ。――なにね、あの隱居が東京に居た時分、わつしが近所にゐて、――それで知つてるのさ。いゝ人でさあ。ものの解つたね。去年御新造が死んぢまつて、今ぢや道具ばかり捻くつてるんだが――何でも素晴らしいものが、有るてえますよ。賣つたら餘程な金目だらうつて話さ」

「綺麗な御孃さんが居るぢやないか」

「あぶねえね」

「何が？」

「何がつて。旦那の前だが。あれで出返りですぜ」

「さうかい」

「さうかい所の騒ぎぢやねえんだね。全體なら出て來なくつてもいゝ所をさ。――銀行が潰れて贅澤が出來ねえつて、出ちまつたんだから、義理が悪いやね。隱居さんがあゝして居るうちはいゝが、もしもの事があつた日にや、頬返しがつかねえ譯になりまさあ」

「さうかな」

「當り前でさあ。本家の兄たあ、仲がわるしさ」

「本家があるのかい」

「本家は岡の上にありまさあ。遊びに行つて御覧なさい。景色のいゝ所ですよ」

「おい、もう一遍石鹸をつけてくれないか。又痛くなつて來た」

「よく痛くなる髭だね。髭が硬過ぎるからだ。旦那の髭ぢや、三日に一度は是非剃を當てなくつちや駄目ですぜ。わつしの剃で痛けりや、何所へ行つたつて、我慢出來つこねえ」

「是から、さうしよう。何なら毎日來てもいゝ」

「そんなに長く逗留する氣なんですか。あぶねえ。およしなせえ。益もねえ事た。碌でもねえものに引つかゝつて、どんな目に逢ふか解りませんぜ」

「どうして」

「旦那あの娘は面はいゝ様だが、本當はき印ですぜ」

「なぜ」
「なぜつて、旦那、構うものは、みんな氣狂だつて云つてるんでさあ」
「そりや何かの間違ひだらう」
「だつて、現に證據があるんだから、御よしなせえ。けんのんだ」
「おれは大丈夫だが、どんな證據があるんだい」
「可笑しな話さ。まあゆつくり、煙草でも呑んで御出でなせえ話すから。――頭あ洗ひませうか」
「頭はよさう」
「頭垢丈落として置くかね」
親方は垢の溜まつた十本の爪を、遠慮なく、余が頭蓋骨の上に竝べて、斷りもなく、前後に猛烈なる運動を開始した。此爪が、黑髮の根を一本毎に押し分けて、不毛の境を巨人の熊手が疾風の速度で通る如くに往來する。余が頭に何十萬本の髮の毛が生えて居るか知らんが、ありとある毛が悉く根こぎにされて、殘る地面がべた一面に蚯蚓腫れにふくれ上がつた上、餘勢が地盤を通して、骨から腦味噌迄震盪を感じた位烈しく、親方は余の頭を掻き廻した。
「どうです好い心持ちでせう」
「非常な辣腕だ」
「えゝ、かうやると誰でも陶然りするからね」
「首が拔けさうだよ」
「そんなに倦怠うがすかい。全く陽氣の加減だね。どうも春てえ奴あ、やに身體がなまけやがつて――まあ一ぷく御上がんなさい。一人で志保田に居ちや、退屈でせう。ちと話しに御出でなせえ。どうも江戸つ子は江戸つ子同志でなくつちや、話しが合はねえものだから。何ですかい、矢つ張りあの御孃さんが、御愛想に出てきますかい。どうも薩はし、見境のねえ女だから困つちまはあ」
「御孃さんが、どうとか、爲た所で頭垢が飛んで、首が拔けさうになつたつけ」
「違えねえ、がらがらんだから、滅切、話しに締りがねえつたらねえ。――そこで其坊主が逆せちまつて……」
「其坊主たあ、どの坊主だい」
「觀海寺の納所坊主がさ……」
「納所にも住持にも、坊主はまだ一人も出て來ないんだ」
「さうか、急勝だから、いけねえ。苦味走つた、色の出來さうな坊主だつたが、そいつが御前さん、レコに參つちまつて、とう〳〵文をつけたんだ。――おや待てよ、旦那に聞いたんだつけかな。いんにや未だ、話さねえ。するとね――からつと――何だか、行きさつが少し變だが――うん、さうか、矢つ張りさうか。すると奴さん、驚いちまつてからに……」
「誰が驚いたんだい」
「女がさ」
「女が文を受け取つて驚いたんだね」
「所が驚く様な女なら、殊勝らしいんだが、驚くどころぢやねえ」
「ぢや誰が驚いたんだい」
「口說いた方がさ」
「口說かないのぢやないか」
「えゝ、焦心つてえ。間違つてらあ。文をもらつてさ」
「それぢや矢つ張り女だらう」
「なあに男がさ」
「男なら、其坊主だらう」
「えゝ、其坊主がさ」
「坊主がどうして驚いたのかい」
「どうしてつて、本堂で和尚さんと御經を上げてると、突然あの女が飛び込んで來て――ウフ……。どうしても狂印だね」
「どうかしたのかい」

「そんなに可愛いなら、仏様の前で、一所に寝ようって、出し抜けに、泰安さんの頸っ玉へかじりついたんでさあ」

「へえゝ」

「面喰らったなあ、泰安さ。気狂に文をつけて、飛んだ恥を掻かせられて、とうとう、其晩こつそり姿を隠して死んぢまつて……」

「死んだ？」

「死んだらうと思ふのさ。生きちや居られめえ」

「何とも云へない」

「さうさ、相手が気狂ぢや、死んだつて冴えねえから、ことによると生きてるかも知れねえね」

「中々面白い話だ」

「面白いの、面白くないのつて、村中大笑ひでさあ。所が当人丈は、根が気が違つてるんだから、洒唖々々して平気なもんで――なあに旦那の様に確然してゐりや大丈夫ですがね、相手が相手だから、滅多にからかつたり何かすると、大変な目に逢ひますよ」

「ちつと気を附けるかね。はゝゝゝ」

生温い磯から、塩気のある春風がふはりふはりと来て、親方の暖簾を眠たさうに煽る。身を斜にして其下をくゞり抜ける燕の姿が、ひらりと、鏡の裡に落ちて行く。向ふの家では六十許りの爺さんが、軒下に蹲踞りながら、だまつて貝をむいて居る。かちやりと、小刀があたる度に、赤い身が笊のなかに隠れる。殻はきらりと光りを放つて、二尺あまりの陽炎を向ふへ横切る。丘の如くに堆く、積み上げられた、其殻は牡蠣か、馬鹿か、馬刀貝か。崩れた幾分は、砂川の底に落ちて、浮世の表から、暗い国へ葬られる。葬られるあとから、すぐ新しい貝が、柳の下へたまる。爺さんは貝の行方を考ふる暇さへなく、唯空しき殻を陽炎の上へ放り出す。彼の笊には支ふべき底なくして、彼の春の日は無尽蔵に長閑と見える。

砂川は二間に足らぬ小橋の下を流れて、浜の方へ春の水をそゝぐ。春の水が春の海と出合ふあたりには、参差として幾尋の干網が、網の目を抜けて村へ吹く軟風に、腥き微温を與へつゝあるかと怪しまれる。その間から、鈍刀を溶かして、気長にのたくらせた様に見えるのが海の色だ。

此景色と此親方とは到底調和しない。もし此親方の人格が強烈で四辺の風光と拮抗する程の影響を余の頭脳に與へたならば、余は両者の間に立つて頗る円枘方鑿の感に打たれただらう。幸ひにして親方は左程偉大な豪傑ではなかつた。いくら江戸つ子でも、どれ程たんかを切つても、此渾然として駘蕩たる天地の大気象には叶はない。満腹の饒舌を弄して、あく迄此調子を破らうとする親方は、早くも微塵となつて、怡々たる春光の裏に浮遊して居る。矛盾とは、力に於て、量に於て、若しくは意気体躯に於て氷炭相容るゝ能はずして、しかも同程度に位する物若しくは人の間に在つて始めて、見出だし得べき現象である。両者の間隔が甚しく懸絶するときは、此矛盾は漸く漸盡磨滅して、却つて大勢力の一部となつて活動するに至るかも知れぬ。大人の手足となつて才子が活動し、才子の股肱となつて昧者が活動し、昧者の心腹となつて牛馬が活動し得るのは是が為である。今わが親方は限りなき春の景色を背景として、一種の滑稽を演じて居る。長閑な春の感じを壊すべき筈の彼は、却つて長閑な春の感じを刻意に添へつゝある。余は思はず弥生半ばに呑気な弥次と近附になつた様な気持ちになつた。此極めて安価なる気燄家は、太平の象を具したる春の日に尤も調和せる一彩色である。

かう考へると、此親方も中々画にも、詩にもなる男だから、とうに帰るべき所を、わざと尻を据ゑて四方八方の話しをして居た。所へ

暖簾を潜つて小さな坊主頭が

「御免、一寸剃つて貰はうか」

と這入つて来る。白木綿の着物に同じ丸絎の帯をしめて、上から蚊帳の様に粗い法衣を羽織つて、頗る気楽に見える小坊主であつた。

「了念さん。どうだい、此間あ道草あ、食つて、和尚さんに叱られたらう」

「いんにや、褒められた」

「使に出て、途中で魚なんか、とつて居て、了念は感心だつて、褒められたのかい」

「若いに似ず了念は、よく遊んで来て感心ぢや云うて、老師が褒められたのよ」

「道理で頭に瘤が出来てらあ。そんな不作法な頭あ、剃るなあ骨が折れていけねえ。今日は勘弁するから、此次から捩ね直して来ねえ」

「捩ね直す位なら、ますこし上手な床屋へ行きます」

「はゝゝ頭は凸凹だが、口丈は達者なもんだ」

「腕は鈍いが、酒丈強いのは御前だろ」

「箆棒め、腕が鈍いつて……」

「わしが云うたのぢやない。老師が云はれたのぢや。さう怒るまい。年甲斐もない」

「ヘン、面白くもねえ。——ねえ、旦那」

「えゝ？」

「全体坊主なんてえものは、高い石段の上に住んでやがつて、屈託がねえから、自然に口が達者になる訳ですかね。こんな小坊主迄中々口幅つてえ事を云ひますぜ——おつと、もう少し頭を寐かして——寐かすんだてえのに、——言ふ事を聴かなけりや、切るよ、いゝか、血が出るぜ」

「痛いがな。さう無茶をしては」

「此位な辛抱が出来なくつて坊主になれるもんか」

「坊主にはもうなつとるがな」

「まだ一人前ぢやねえ。——時にあの泰安さんは、どうして死んだつけな、御小僧さん」

「泰安さんは死にはせんがな」

「死なねえ？ はてな。死んだ筈だが」

「泰安さんは、その後発憤して、陸前の大梅寺へ行つて、修行三昧ぢや。今に智識になられよう。結構な事よ」

「何が結構だい。いくら坊主だつて、夜逃げをして結構な法はあるめえ。御前なんざ、よく気をつけなくつちやいけねえぜ。とかく、しくじるなあ女だから——女つてえば、あの狂印は矢つ張り和尚さんの所へ行くかい」

「狂印と云ふ女は聞いた事がない」

「通じねえ、味噌擂だ。行くのか、行かねえのか」

「狂印は来ないが、志保田の嬢さんなら来る」

「いくら、和尚さんの御祈禱でもあれ許りや、癒るめえ。全く先の旦那が祟つてるんだ」

「あの嬢さんはえらい女だ。老師がよう褒めて居られる」

「石段をあがると、何でも逆様だから叶はねえ。和尚さんが、何て云つたつて、気狂は気狂だ。——さあ剃れたよ。早く行つて和尚さんに叱られて来ねえ」

「いや、もう少し遊んで行つて賞められよう」

「勝手にしろ、口の減らねえ餓鬼だ」

「咄この乾屎橛」

「何だと？」

青い頭は既に暖簾をくぐつて、春風に吹かれて居る。

六

夕暮の机に向ふ。障子も襖も開け放つ。宿の人は多くもあらぬ上に、家は割合に廣い。余が住む部屋は、多くもあらぬ人の、人らしく振舞ふ境を、幾曲りの廊下に隔てたれば、物の音さへ思索の煩にはならぬ。今日は一層静かである。主人も、娘も、下女も下男も、知らぬ間

に、われを殘して、立ち退いたかと思はれる。立ち退いたとすれば唯の所へ立ち退きはせぬ。霞の國か、雲の國かであらう。或は雲と水が自然に近附いて、舵をとるさへ懶き海の上を、いつ流れたとも心づかぬ間に、白い帆が雲とも水とも見分け難き境に漂ひ來て、果ては帆みづからが、いづこに己を雲と水より差別すべきかを苦しむあたりへ――そんな遙かな所へ立ち退いたと思はれる。夫でなければ卒然と春のなかに消え失せて、是迄の四大が、今頃は目に見えぬ靈氣となつて、廣い天地の間に、顯微鏡の力を藉るとも、此の名殘を留めぬ樣になつたのであらう。或は雲雀に化して、菜の花の黄を鳴き盡したる後、夕暮深き紫のたなびくほとりへ行つたかも知れぬ。又は永き日を、かつ永くする虻のつとめを果したる後、蕋に凝る甘き露を吸ひ損ねて、落椿の下に伏せられ乍ら、世を香ばしく眠つて居るかも知れぬ。とにかく靜かなものだ。

空しき家を、空しく拔ける春風の、拔けて行くは迎へる人への義理でもない。拒むものへの面當でもない。自ら來りて、自ら去る、公平なる宇宙の意である。掌に顎を支へたる余の心も、わが住む部屋の如く空しければ、春風は招かぬに、遠慮もなく行き拔けるであらう。

踏むは地と思へばこそ、裂けはせぬかとの氣遣ひも起る。戴くは天と知る故に、稻妻の米嚙に震ふ怖れも出來る。人と爭はねば一分が立たぬと浮世が催促するから、火宅の苦は免れぬ。東西のある乾坤に住んで、利害の綱を渡らねばならぬ身には、事實の戀は讎である。目に見る富は土である。握る名と奪へる譽とは、小賢しき蜂が甘く釀すと見せて、針を棄て去る蜜の如きものであらう。所謂樂は物に着するより起るが故に、あらゆる苦しみを含む。但詩人と畫客なるものあつて、飽くまで此待對世界の精華を嚼んで、徹骨徹髓の淸きを知る。霞を餐し、露を嚥み、紫を品し、紅を評して、死に至つて悔いぬ。彼等の樂は物に着するのではない。同化して其物になるのである。其物になり濟ました時に、我を樹立すべき餘地は茫々たる大地を極めても見出だし得ぬ。自在に泥團を放下して、破笠裏に無限の青嵐を盛る。いたづらに此境遇を拈出するのは、敢て市井の銅臭兒を鬼嚇して、好んで高く標置するが爲ではない。只這裏の福音を述べて、縁ある衆生を麾くのみである。有體に云へば詩境と云ひ、畫界と云ふも皆人々具足の道である。春秋に指を折り盡して、白頭に呻吟するの徒と雖も、一生を回顧して、閲歷の波動を順次に點檢し來るとき、嘗ては微光の臭骸に洩れて、吾を忘れし、拍手の興を喚び起こす事が出來よう。出來ぬと云はば生き甲斐のない男である。

去れど一事に卽し、一物に化するのみが詩人の感興とは云はぬ。ある時は一瓣の花に化し、あるときは一双の蝶に化し、あるはウォーヅウォースの如く、一團の水仙に化して、心を澤風の裏に撩亂せしむる事もあらうが、何とも知れぬ四邊の風光にわが心を奪はれて、わが心を奪へるは那物ぞとも明瞭に意識せぬ場合がある。ある人は天地の耿氣に觸るゝと云ふだらう。ある人は無絃の琴を靈臺に聽くと云ふだらう。又ある人は知りがたく、解しがたき故に無限の域に儃佪して、縹緲のちまたに彷徨すると形容するかも知れぬ。何と云ふも皆其人の自由である。わが、唐木の机に憑りてぽかんとした心裡の狀態は正にこれである。

余は明かに何事をも考へて居らぬ。又は慥かに何物をも見て居らぬ。わが意識の舞臺に著しき色彩を以て動くものがないから、われは如何なる事物に同化したとも云へぬ。去れども吾は動いて居る。世の中に動いても居らぬ、世の

外に動いて居らぬ。只何となく動いて居る。花に動くにもあらず、鳥に動くにもあらず、人間に対して動くにもあらず、只恍惚と動いて居る。

強ひて説明せよと云はるゝならば、余が心は只春と共に動いて居ると云ひたい。あらゆる春の色、春の風、春の物、春の声を打つて、固めて、仙丹に練り上げて、それを蓬莱の霊液に溶いて、桃源の日で蒸発せしめた精気が、知らぬ間に毛孔から染み込んで、心が知覚せぬうちに飽和されて仕舞つたと云ひたい。普通の同化には刺激がある。刺激があればこそ、愉快であらう。余の同化には、何と同化したか不分明であるから、毫も刺激がない。刺激がないから、窈然として名状しがたい楽がある。風に揉まれて上の空なる波を起す、軽薄で騒々しい趣とは違ふ。目に見えぬ幾尋の底を、大陸から大陸迄動いてゐる滄溟の有様と形容する事が出来る。只夫程に活力がない許りだ。然しそこに反つて幸福がある。偉大なる活力の発現は、此活力がいつか尽き果てるだらうとの懸念が籠る。常の姿にはさう云ふ心配は伴はぬ。常よりは淡きわが心の、今の状態には、わが烈しき力の銷磨しはせぬかとの憂を離れたるのみならず、常の心の可もなく不可もなき凡境をも脱却して居る。淡しとは単に捕へ難しと云ふ意味で、弱きに過ぎる虞を含んでは居らぬ。冲融とか澹蕩とか云ふ詩人の語は尤も此境を切実に言ひ了せたものだらう。

此境界を画にして見たらどうだらうと考へた。然し普通の画にはならないに極まつてゐる。われ等が俗に画と称するものは、只眼前の人事風光を有りの儘なる姿として、若しくは之をわが審美眼に漉過して、絵絹の上に移したものに過ぎぬ。花が花と見え、水が水と映り、人物が人物として活動すれば、画の能事は終つたものと考へられて居る。もし此上に一頭地を抜けば、わが感じたる物象を、わが感じたる儘の趣を添へて、画布の上に淋漓として生動させる。ある特別の感興を、己が捕へたる森羅の裡に寓するのが此種の技術家の主意であるから、彼等の見たる物象観が明瞭に筆端に迸つて居らねば、画を製作したとは云はぬ。己れはしかじかの事を、しかじかに観、しかじかに感じたり、その観方も感じ方も、前人の籬下に立ちて、古来の伝説に支配せられたるにあらず、しかも尤も正しくして、尤も美くしきものなりとの主張を示す作品にあらざれば、わが作と云ふを敢てせぬ。

此二種の製作家に主客深浅の区別はあるかも知れぬが、明瞭なる外界の刺激を待つて、始めて手を下すのは双方共同一である。去れど今、わが描かんとする題目は、左程に分明なものではない。あらん限りの感覚を鼓舞して、之を心外に物色した所で、方円の形、紅緑の色は無論、濃淡の陰、洪繊の線を見出しかねる。わが感じは外から来たのではない、たとひ来たとしても、わが視界に横はる、一定の景物でないから、是が原因だと指を挙げて明かに人に示す訳に行かぬ。あるものは只心持ちである。此心持ちを、どうあらはしたら画になるだらう――否此心持ちを如何なる具体を藉りて、人の合点する様に髣髴せしめ得るかが問題である。

普通の画は感じはなくても物さへあれば出来る。第二の画は物と感じと両立すれば出来る。第三に至つては存するものは只心持ちだけであるから、画にするには是非共此心持ちに恰好なる対象を択ばなければならん。然るに此対象は容易に出て来ない。出て来ても容易に纏まらない。纏まつても自然界に存するものとは丸で趣を異にする場合がある。従つて普通の人から見れば画とは受け取れない。描い

た當人も自然界の局部が再現したものとは認めて居らん、只感興の上した刻下の心持ちを幾分でも傳へて、多少の生命を惝怳しがたきムードに與ふれば大成功と心得て居る。古來から此難事業に全然の績を收め得たる畫工があるかないか知らぬ。ある點迄此流派に指を染め得たるものを擧ぐれば、文與可の竹である。雲谷門下の山水である。下つて大雅堂の景色である。蕪村の人物である。泰西の畫家に至つては、多く眼を具象世界に馳せて、神往の氣韻に傾倒せぬ者が大多數を占めて居るから、此種の筆墨に物外の神韻を傳へ得るものは果して幾人あるか知らぬ。

惜しい事に雪舟、蕪村等の力めて描出した一種の氣韻は、あまりに單純で且つあまりに變化に乏しい。筆力の點から云へば到底此等の大家に及ぶ譯はないが、今わが畫にして見ようと思ふ心持ちはもう少し複雜である。複雜であるだけにどうも一枚のなかへは感じが收まりかねる。頬杖をやめて、兩腕を机の上に組んで考へたが矢張り出て來ない。色、形、調子が出來て、自分の心が、あゝ此處に居たなと、忽ち自己を認識する樣にかゝなければならない。生き別れをした吾子を尋ね當てる爲、六十餘州を囘國して、寢ても寤めても、忘れる間がなかつたある日、十字街頭に不圖邂逅して、稻妻の遮るひまもなきうちに、あつ、此所に居た、と思ふ樣にかかなければならない。それが六づかしい。此調子さへ出れば、人が見て何と云つても構はない。畫でないと罵られても恨はない。苟も色の配合が此心持ちの一部を代表して、線の曲直が此氣合の幾分を表現して、全體の配置が此風韻のどれ程かを傳へるならば、形にあらはれたものは、牛であれ馬であれ、乃至は牛でも馬でも、何でもないものであれ、厭はない。厭はないがどうも出來ない。寫生帖を机の上へ置いて、兩眼が帖のなかへ落ち込む迄、工夫したが、とても物にならん。

余は筆を置いて考へた。こんな抽象的な興趣を畫にしようとするのが、抑もの間違である。人間にさう變りはないから、多くの人のうちには屹度自分と同じ感興に觸れたものがあつて、此感興を何等の手段かで、永久化せんと試みたに相違ない。試みたとすれば其手段は何だらう。

忽ち音樂の二字がぴかりと眼に映つた。成程音樂は斯かる時、斯かる必要に逼られて生れた自然の聲であらう。樂は聽くべきもの、習ふべきものであると、始めて氣が附いたが、不幸にして、その邊の消息は丸で不案内である。

次に詩にはなるまいかと、第三の領分に踏み込んで見る。レッシングと云ふ男は、時間の經過を條件として起る出來事を、詩の本領である如く論じて、詩畫は不一にして兩樣なりとの根本義を立てた樣に記憶するが、さう詩を見ると、今余の發表しようとあせつて居る境界も到底物になりさうにない。余が嬉しいと感ずる心裏の狀況には、時間はあるかも知れないが、時間の流れに沿うて、逓次に展開すべき出來事の內容がない。一が去り、二が來り、二が消えて三が生まるゝが爲に嬉しいのではない。初から窈然として同所に把住する趣で嬉しいのである。既に同所に把住する以上は、よし之を普通の言語に飜譯した所で、必ずしも時間的に材料を按排する必要はあるまい。矢張り繪畫と同じく空間的に景物を配置したのみで出來るだらう。只如何なる景情を詩中に持ち來つて、此曠然として倚託なき有樣を寫すかが問題で、既に之を捕へ得た以上はレッシングの說に從はんでも詩として成功する譯だ。ホーマーがどうでも、ヴージルがどうでも構はない。もし詩が一種のムードをあらはすに適して

居るとすれば、此ムードは時間の制限を受けて、順次に進捗する出來事の助けを藉らずとも、單純に空間的なる繪畫上の要件を充たしさへすれば、言語を以て描き得るものと思ふ。議論はどうでもよい。ラオコーン抔は大概忘れて居るのだから、よく調べたら、此方が怪しくなるかも知れない。兎に角、畫にしそくなつたから、一つ詩にして見ようと、寫生帖の上へ、鉛筆を押しつけて、前後に身をゆすぶつて見た。しばらくは、筆の先の尖つた所を、どうにか運動させたい計りで、毫も運動させる譯に行かなかつた。急に朋友の名を失念して、咽喉迄出かかつて居るのに、出てくれない樣な氣がする。そこで諦めると、出損なつた名は、遂に腹の底へ收まつて仕舞ふ。

葛湯を練るとき、最初のうちは、さら／＼して箸に手應へがないものだ。そこを辛抱すると、漸く粘着が出て、攪き淆ぜる手が少し重くなる。それでも構はず、箸を休ませずに廻すと、今度は廻し切れなくなる。仕舞ひには鍋の中の葛が、求めぬに、先方から、爭つて箸に附着してくる。詩を作るのは正に是だ。

手掛りのない鉛筆が少しづゝ動く樣になるのに勢を得て、彼是二三十分したら、

青春二三月。愁隨芳草長。閑花落空庭。素琴橫虛堂。蠨蛸掛不動。篆煙繞竹梁。

と云ふ六句丈出來た。讀み返して見ると、みな畫になりさうな句許りである。是なら始めから、畫にすればよかつたと思ふ。なぜ畫よりも詩の方が作り易かつたかと思ふ。こゝ迄出たら、あとは大した苦もなく出さうだ。然し畫に出來ない情を、次には咏つて見たい。あれか、これかと思ひ煩つた末とう／＼、

獨坐無隻語。方寸認微光。人間徒多事。此境孰可忘。會得一日靜。正知百年忙。遐懷寄何處。緬邈白雲鄕。

と出來た。もう一返最初から讀み直して見ると、一寸面白く讀まれるが、どうも自分が今しがた入つた神境を寫したものとすると、索然として物足りない。序だから、もう一首作つて見ようかと、鉛筆を握つた儘、何の氣もなしに、入口の方を見ると、襖を引いて、開け放つた幅三尺の空間をちらりと、綺麗な影が通つた。はてな。

余が眼を轉じて、入口を見たときは、綺麗なものが、既に引き開けた襖の陰に半分かくれかけて居た。しかも其姿は余が見ぬ前から、動いて居たものらしく、はつと思ふ間に通り越した。余は詩をすてゝ入口を見守る。

一分と立たぬ間に、影は反對の方から、逆にあらはれて來た。振袖姿のすらりとした女が、音もせず、向う二階の椽側を寂然として歩行いて行く。余は覺えず鉛筆を落として、鼻から吸ひかけた息をぴたりと留めた。

花曇りの空が、刻一刻に天からずり落ちて、今や降ると待たれたる夕暮の欄干に、しとやかに行き、しとやかに歸る振袖の影は、余が座敷から六間の中庭を隔てゝ、重き空氣のなかに蕭寥と見えつ、隱れつする。

女は固より口も利かぬ。傍目も振らぬ。椽に引く裾の音さへおのが耳に入らぬ位靜かに歩行いて居る。腰から下にはつと色づく模樣は、何を染め拔いたものか、遠くて解らぬ。只無地と模樣のつながる中が、おのづから暈されて、夜と晝との境の如き心地である。女は固より夜と晝との境をあるいて居る。

此の長い振袖を着て、長い廊下を何度往き何度戻る氣か、余には解らぬ。いつ頃から此の不思議な裝をして、此の不思議な歩行をつゞけつゝあるかも、余には解らぬ。其主意に至つては固より解らぬ。固より解るべき筈ならぬ事

を、かく迄も端正に、かく迄も静粛に、かく迄も度を重ねて繰り返す人の姿の、入口にあらはれては消え、消えてはあらはるゝ時の余の感じは一種異様である。逝く春の恨を訴ふる所作ならば何が故にかくは無頓着なる。無頓着なる所作ならば何が故にかくは綺羅を飾れる。

暮れんとする春の色の、嬋媛として、しばらくは冥邈の戸口をまぼろしに彩どる中に、眼も醒むる程の帯地は金襴か。あざやかなる織物は往きつ、戻りつ蒼然たる夕べのなかにつゝまれて、幽闃のあなた、遼遠のかしこへ一分毎に消えて去る。燦めき渡る春の星の、暁近くに、紫深き空の底に陥いる趣である。

太玄の闇おのづから開けて、此の華やかなる姿を、幽冥の府に吸ひ込まんとするとき、余はから感じた。金屏を背に、銀燭を前に、春の宵の一刻を千金と、さゞめき暮らしてこそ然るべき此装の、厭ふ気色もなく、争ふ様子も見えず、色相世界から薄れて行くのは、ある点に於て超自然の情景である。刻々と逼る黒き影をすかして見ると、女は粛然として、焦きもせず、狼狽もせず、同じ程の歩調を以て、同じ所を徘徊して居るらしい。身に落ちかゝる災を知らぬとすれば無邪気の極である。知つて、災と思はぬならば物凄い。黒い所が本来の住居で、しばらくの幻影を、元の儘なる冥漠の裏に収めればこそ、かやうに閑静の態度で、有と無の間に逍遥してゐるのだらう。女のつけた振袖に、紛たる模様の尽きて、是非もなき磨墨に流れ込むあたりに、おのが身の素性をほのめかして居る。

またから感じた。うつくしき人が、うつくしき眠りに就いて、その眠りから、さめる暇もなく、幻覚の儘で、此世の呼吸を引き取るときに、枕元に病を護るわれ等の心は嘸つらいだらう。四苦八苦を百苦に重ねて死ぬならば、生き甲斐のない本人は固より、傍に見て居る親しい人も殺すが慈悲と諦められるかも知れない。然しすや〳〵と寐入る児に、死ぬべき何の科があらう。眠りながら冥府に連れて行かれるのは、死ぬ覚悟をまだせぬうちに、だまし打ちに惜しき一命を果たすと同様である。どうせ殺すものなら、とても逃れぬ定業と得心もさせ、断念もして、念仏を唱へたい。死ぬべき条件が具はらぬ先に、死ぬる事実のみが、有り〳〵と確められるときに、南無阿弥陀仏と回向をする声が出る位なら、其声でおうい〳〵と、半ばあの世へ足を踏み込んだものを、無理にも呼び返したくなる。仮りの眠りから、いつの間とも心附かぬうちに、永い眠りに移る本人には、呼び返される方が、切れかゝつた煩悩の綱を無暗に引かるゝ様で苦しいかも知れぬ。慈悲だから、呼んで呉れるな、穏やかに寐かして呉れと思ふかも知れぬ。それでも、われ〳〵は呼び返したくなる。余は今度女の姿が入口にあらはれたなら、呼びかけて、うつゝの裡から救つてやらうかと思つた。然し夢の様に、三尺の幅を、すうと抜ける影を見るや否や、何だか口が利けなくなる。今度はと心を定めて居るうちに、すうと苦もなく通つて仕舞ふ。なぜ何とも云へぬかと考ふる途端に、女は又通る。こちらに窺ふ人があつて、其人が自分の為にどれ程やきもき思うて居るか、微塵も気に掛からぬ有様で通る。面倒にも気の毒にも、初手から、余の如きものに、気をかねて居らぬ有様で通る。今度は今度はと思うて居るうちに、こらへかねた雲の層が、持ち切れぬ雨の絲を、しめやかに落とし出して、女の影を、蕭々と封じ了る。

七

寒い。手拭を下げて、湯壺へ下る。三畳へ着物を脱いで、段々を、四つ下りると、

八畳程な風呂場へ出る。石に不自由せぬ国と見えて、下は御影で敷き詰めた、真中を四尺ばかりの深さに掘り抜いて、豆腐屋程の湯槽を据ゑる。槽とは云ふものゝ矢張り石で畳んである。鉱泉と名のつく以上は、色々な成分を含んで居るのだらうが、色が純透明だから、入り心地がよい。折々は口にさへふくんで見るが別段の味も臭もない。病気にも利くさうだが、聞いて見ぬから、どんな病に利くのか知らぬ。固より別段の持病もないから、実用上の価値はかつて頭のなかに浮んだ事がない。只這入る度に考へ出すのは、白楽天の温泉水滑洗凝脂と云ふ句丈である。温泉と云ふ名を聞けば必ず此句にあらはれた様な愉快な気持ちになる。又此気持ちを出し得ぬ温泉は、温泉として全く価値がないと思つてる。此理想以外に温泉に就いての注文は丸でない。

すぽりと浸かると、乳のあたり迄這入る。湯はどこから湧いて出るか知らぬが、常でも槽の縁を綺麗に越して居る。春の石は乾くひまなく濡れて、あたゝかに、踏む足の、心は穏かに嬉しい。降る雨は、夜の目を掠めて、ひそかに春を潤ほす程のしめやかさであるが、軒のしづくは、漸く繁く、ぽたり、ぽたりと耳に聞こえる。立て籠められた湯気は、床から天井を隈なく埋めて、隙間さへあれば、節穴の細きを厭はず洩れ出でんとする気色である。

秋の霧は冷やかに、たなびく霞は長閑に、夕餉炊く、人の烟は青く立つて、大いなる空に、わが果敢なき姿を託す。様々の憐れはあるが、春の夜の温泉の曇り許りは、浴するものゝ肌を、柔らかにつゝんで、古き世の男かと、われを疑はしむる。眼に写るものゝ見えぬ程、濃くまつはりはせぬが、薄絹を一重破れば、何の苦もなく、下界の人と、己を見出だす様に、浅きものではない。一重破り、二重破り、幾重を破り尽すとも此烟から出す事はならぬ顔に、四方よりわれ一人を、温かき虹の中に埋め去る。酒に酔ふと云ふ言葉はあるが、烟に酔ふと云ふ語句を耳にした事がない。あるとすれば、霧には無論使へぬ、霞には少し強過ぎる。只此語に、春宵の二字を冠したるとき、始めて妥当なるを覚える。

余は湯槽のふちに仰向けの頭を支へて、透き徹る湯のなかの軽き身体を、出来る丈抵抗力なきあたりへ漂はして見た。ふはり、ふはりと魂がくらげの様に浮いて居る。世の中もこんな気になれば楽なものだ。分別の錠前を開けて、執着の栓張をはづす。どうともせよと、温泉のなかで、温泉と同化して仕舞ふ。流れるもの程生きるに苦は入らぬ。流れるもののなかに、魂迄流して居れば、基督の御弟子となつたより難有い。成程此調子で考へると、土左衛門は風流である。スヰンバーンの何とか云ふ詩に、女が水の底で往生して嬉しがつて居る感じを書いてあつたと思ふ。余が平生から苦にして居た、ミレーのオフェリヤも、かう観察すると大分美しくなる。何であんな不愉快な所を択んだものかと今迄不審に思つて居たが、あれは矢張り画になるのだ。水に浮んだ儘、或は水に沈んだ儘、或は沈んだり浮んだりした儘、只其儘の姿で苦なしに流れる有様は美的に相違ない。夫で両岸に色々な草花をあしらつて、水の色と流れて行く人の顔の色と、衣服の色に、落ちついた調和をとつたなら、乾度画になるに相違ない。然し流れて行く人の表情が、丸で平和では殆んど神話か比喩になつてしまふ。痙攣的な苦悶は固より、全幅の精神をうち壊はすが、全然色気のない平気な顔では人情が写らない。どんな顔をかいたら成功するだらう。ミレーのオフェリヤは成功かも知れないが、彼の精神は余と同じ所に存するか疑はしい。ミレーはミレ

ー、余は余であるから、余は余の興味を以て、一つ風流な土左衛門をかいて見たい。然し思ふ様な顔はさう容易く心に浮んで來さうもない。

湯のなかに浮いた儘、今度は土左衛門の賛を作つて見る。

雨が降つたら濡れるだろ。
霜が下りたら冷たかろ。
土のしたでは暗からう。
浮かば波の上、
沈まば波の底、
春の水なら苦はなかろ。

と口のうちで小聲に誦しつゝ漫然と浮いて居ると、何所かで彈く三味線の音が聞こえる。美術家だのにと云はれると恐縮するが、實の所、余が此樂器に於ける知識は頗る怪しいもので二が上がらうが、三が下がらうが、耳には餘り影響を受けた試しがない。しかし、靜かな春の夜に、雨さへ興を添へる、山里の湯槽の中で、魂迄春の温泉に浮かしながら、遠くの三味を無責任に聞くのは甚だ嬉しい。遠いから何を唄つて、何を彈いて居るか無論わからない。そこに何だか趣がある。音色の落ち附いて居る所から察すると、上方の檢校さんの地唄にでも聽かれさうな太棹かとも思ふ。

子供の時分、門前に萬屋と云ふ酒屋があつて、そこにお倉さんと云ふ娘が居た。此お倉さんが、靜かな春の晝過ぎになると、必ず長唄の御浚ひをする。御浚ひが始まると、余は庭へ出る。茶畠の十坪餘りを前に控へて、三本の松が、客間の東側に並んで居る。此松は周り一尺もある大きな樹で、面白い事に、三本寄つて、始めて趣のある恰好を形づくつてゐた。子供心に此松を見ると好い心持ちになる。松の下に黒くさびた鐵燈籠が名の知れぬ赤石の上に、いつ見ても、わからず屋の頑固爺の様にかたく坐つて居る。余は此燈籠を見詰めるのが大好きであつた。燈籠の前後には、苔深き地を拔いて、名も知らぬ春の草が、浮世の風を知らぬ顔に、獨り匂うて獨り樂しんで居る。余は此草のなかに、纔かに膝を容るゝの席を見出だして、ぢつと、しやがむのが此時分の癖であつた。此の三本の松の下に、此燈籠を眺めて、此草の香を嗅いで、さうしてお倉さんの長唄を遠くから聞くのが、當時の日課であつた。

お倉さんはもう赤い手絡の時代さへ通り越して、大分と世帶じみた顔を、帳場へ曝してるだらう。聟とは折合がいゝか知らん。燕は年々歸つて來て、泥を啣んだ嘴を、いそがしげに働かしてゐるか知らん。燕と酒の香とはどうしても想像から切り離せない。

三本の松は未だに好い恰好で殘つて居るかしらん。鐵燈籠はもう壞れたに相違ない。春の草は、昔しやがんだ人を覺えて居るだらうか。その時ですら、口もきかずに過ぎたものを、今に見知ら筈がない。お倉さんの旅の衣は鈴懸のと云ふ、日毎の聲もよも聞き覺えがあるとは云ふまい。

三味の音が思はぬパノラマを余の眼前に展開するにつけ、余は床しい過去の面のあたりに立つて、二十年の昔に住む、頑是なき小僧と、成り濟ましたとき、突然風呂場の戸がさらりと開いた。

誰か來たなと、身を浮かした儘、視線丈を入口に注ぐ。湯槽の縁の最も入口から、隔たりたるに頭を乘せて居るから、槽に下る段々は、間二丈を隔てて斜に余が眼に入る。然し見上げたる余の瞳には未だ何物も映らぬ。しばらくは軒を遶る雨垂の音のみが聞こえる。三味線は何時の間にか已んで居た。

やがて階段の上に何物かあらはれた。廣い風呂場を照らすものは、只一つの小さき釣り洋燈のみであるから、此隔りでは澄み切つた空氣を

控へてゐる。確と物色はむづかしい。況して立ち上がる湯氣の、濃かなる雨に抑へられて逃場を失ひたる今宵の風呂に、立つを誰とは固より定めにくい。一段を下り、二段を踏んで、まともに照らす灯影を浴びたる時でなくては、男とも女とも聲は掛けられぬ。

黒いものが一歩を下へ移した。踏む石は天鵞絨の如く柔らかと見えて、足音を證に之を律すれば、動かぬと評しても差し支へない。が輪廓は少しく浮き上がる。余は畫工丈あつて人體の骨格に就いては、存外視覺が鋭敏である。何とも知れぬものの一段動いた時、余は女と二人、此風呂場の中に在る事を覺つた。

注意をしたものか、せぬものかと、浮きながら考へる間に、女の影は遺憾なく、余が前に、早くもあらはれた。漲り渡る湯烟りの、やはらかな光線を一分子毎に含んで、薄紅の暖かに見える奥に、漾はす黒髮を雲とながして、あらん限りの背丈を、すらりと伸した女の姿を見た時は、禮儀の、作法の、風紀のと云ふ感じは悉く、わが腦裏を去つて、只ひたすらに、うつくしい畫題を見出し得たとのみ思つた。

古代希臘の彫刻はいざ知らず、今世佛國の畫家が命と賴む裸體畫を見る度に、あまりに露骨な肉の美を、極端迄描き盡さうとする痕迹が、ありありと見えるので、どことなく氣韻に乏しい心持ちが、今迄われを苦しめてならなかつた。然し其折々はたゞどことなく下品だと評する迄で、何故下品であるかが、解らぬ故、吾知らず、答へを得るに煩悶して今日に至つたのだらう。肉を蔽へば、うつくしきものが隱れる。かくさねば卑しくなる。今の世の裸體畫と云ふは只かくさぬと云ふ卑しさに、技巧を留めて居らぬ。衣を奪ひたる姿を、其儘に寫す丈にては、物足らぬと見えて、飽く迄も裸體を、衣冠の世に押し出さうとする。服をつけたるが、人間の常態なるを忘れて、赤裸に凡ての權能を附與せんと試みる。十分で事足るべきを、十二分にも、十五分にも、どこ迄も進んで、只管に、裸體であるぞと云ふ感じを強く描出しようとする。技巧が此極端に達したる時、人は其觀者を強ふるを陋とする。うつくしきものを、彌が上に、うつくしくせんと焦るとき、うつくしきものは却つて其度を減ずるが例である。人事に就いても滿は損を招くとの諺は是が爲である。

放心と無邪氣とは餘裕を示す。餘裕は畫に於て、詩に於て、もしくは文章に於て、必須の條件である。今代藝術の一大弊竇は、所謂文明の潮流が、徒らに藝術の士を驅つて、拘々として隨處に齷齪たらしむるにある。裸體畫は其好例であらう。都會に藝妓と云ふものがある。色を賣りて、人に媚びるを商買にして居る。彼等は嫖客に對する時、わが容姿の如何に相手の瞳子に映ずるかを顧慮するの外、何等の表情をも發揮し得ぬ。年々に見るサロンの目録は此藝妓に似たる裸體美人を以て充滿して居る。彼等は一秒時も、わが裸體なるを忘るゝ能はざるのみならず、全身の筋肉をむづかしくして、わが裸體なるを觀者に示さんと力めて居る。

今余が面前に娉婷と現はれたる姿には、一塵も此俗埃の眼に遮るものを帶びて居らぬ。常の人の纏へる衣裳を脱ぎ捨てたる樣と云へば既に人界に墮在する。始めより着るべき服も、振るべき袖も、あるものと知らざる神代の姿を雲のなかに呼び起したるが如く自然である。

室を埋むる湯烟は、埋めつくしたる後から、絶えず湧き上がる。春の夜の灯を半透明に崩し擴げて、部屋一面の虹霓の世界が濃やかに搖れるなかに、朦朧と、黒きかとも思はるゝ程の髮を暈して、眞白な姿が雲の底から次第に浮き上がつて來る。其輪廓を見よ。

頸筋を輕く内輪に、雙方から責めて、苦もなく

肩の方へ、なだれ落ちた線が、豊かに、丸く折れて、流るゝ末は五本の指と分かれるのであらう。ふつくらと浮く二つの乳の下には、しばし引く波が、又滑らかに盛り返して下腹の張りを安らかに見せる。張る勢を後ろへ抜いて、勢の尽くるあたりから、分かれた肉が平衡を保つ為めに少しく前に傾く。逆に受くる膝頭のこのたびは、立て直して、長きうねりの踵につく頃、平たき足が、凡ての葛藤を、二枚の蹠に安々と始末する。世の中に是程錯雑した配合はない。是程統一のある配合もない。是程自然で、是程柔らかで、是程抵抗の少い、是程苦にならぬ輪廓は決して見出だせぬ。

しかも此姿は普通の裸体の如く露骨に、余が眼の前に突きつけられては居らぬ。凡てのものを幽玄に化する一種の霊氛のなかに髣髴として、十分の美を奥床しくもほのめかして居るに過ぎぬ。片鱗を溌墨淋漓の間に点じて、虬龍の怪を、楮毫の外に想像せしむるが如く、芸術的に観じて申し分のない、空気と、あたゝかみと、冥邈なる調子とを具へて居る。六々三十六鱗を丁寧に描きたる龍の、滑稽に落つるが事実ならば、赤裸々の肉を浄洒々に眺めぬうちに神往の余韻はある。余は此輪廓の眼に落ちた時、桂の都を逃れた月界の嫦娥が、彩虹の追手に取り囲まれて、しばらく躊躇する姿と眺めた。

輪廓は次第に白く浮きあがる。今一歩を踏み出せば、折角の嫦娥が、あはれ、俗界に堕落するよと思ふ刹那に、緑の髪は、波を切る霊亀の尾の如くに風を起こして、莽と靡いた。渦捲く烟を劈いて、白い姿は階段を飛び上がる。ホヽヽと鋭く笑ふ女の声が、廊下に響いて、静かなる風呂場を次第に向うへ遠退く。余はがぶりと湯を呑んだ儘槽の中に突つ立つ。驚いた波が、胸へあたる。縁を越す温泉の音がざあ〳〵と鳴る。

八

御茶の御馳走になる。相客は僧一人、観海寺の和尚で名は大徹と云ふさうだ。俗一人、二十四五の若い男である。

老人の部屋は、余が室の廊下を右へ突き当つて、左へ折れた行き留りにある。大きさは六畳もあらう。大きな紫檀の机を真中に据ゑてあるから、思つたより狭苦しい。それへと云ふ席を見ると、布団の代りに花毯が敷いてある。無論支那製だらう。真中を六角に仕切つて、妙な家と、妙な柳が織り出してある。周囲は鉄色に近い藍で、四隅に唐草の模様を飾つた茶の輪を染め抜いてある。支那では之を座敷に用ひたものか疑はしいが、かうやつて布団に代用して見ると頗る面白い。印度の更紗とか、ペルシャの壁掛とか号するものが、一寸間が抜けて居る所に価値がある如く、此花毯もこせつかない所に趣がある。花毯ばかりではない、凡て支那の器具は皆抜けて居る。どうしても馬鹿で気の長い人種の発明したものとほか取れない。見て居るうちに、ぼおつとする所が尊い。日本は巾着切りの態度で美術品を作る。西洋は大きくて細かくて、さうしてどこ迄も娑婆気がとれない。先づかう考へながら席に着く。若い男は余とならんで、花毯の半ばを占領した。

和尚は虎の皮の上へ坐つた。虎の皮の尻尾が余の膝の傍を通り越して、頭は老人の臀の下に敷かれて居る。老人は頭の毛を悉く抜いて、頬と顎へ移植した様に、白い髯をむしや〳〵と生やして、茶托へ載せた茶碗を丁寧に机の上へならべる。

「今日は久し振りで、うちへ御客が見えたから、御茶を上げようと思つて、……」と坊さんの方を向くと、

「いや、御使をありがたう。わしも、大分御無

沙汰をしたから、今日位来て見ようかと思つた所ぢや」と云ふ。此僧は六十近い、丸顔の、達磨を草書に崩した様な容貌を有してゐる。老人は平常からの昵懇と見える。

「此方が御客さんかな」

老人は首肯きながら、朱泥の急須から、緑を含む琥珀色の玉液を、二三滴づゝ、茶碗の底へしたゝらす。清い香がかすかに鼻を襲ふ氣分がした。

「こんな田舎に一人では御淋しかろ」と和尚はすぐ余に話しかけた。

「はあ」と何とも蚊とも要領を得ぬ返事をする。淋しいと云へば、偽りである。淋しからずと云へば、長い説明が入る。

「なんの、和尚さん。此かたは畫を書かれる爲めに来られたのぢやから、御忙しい位ぢや」

「おゝ左様か、それは結構だ。矢張り南宗派かな」

「いゝえ」と今度は答へた。西洋畫だ抔と云つても、此和尚にはわかるまい。

「いや、例の西洋畫ぢや」と老人は、主人役に、又半分引き受けてくれる。

「はゝあ、洋畫か。すると、あの久一さんのやられる様なものかな。あれは、わし此間始めて見たが、随分綺麗にかけたなう」

「いえ、詰まらんものです」と若い男が此時漸く口を開いた。

「御前何ぞ和尚さんに見て頂いたか」と老人が若い男に聞く。言葉から云うても、様子から云うても、どうも親類らしい。

「なあに、見て頂いたんぢやないですが、鏡が池で寫生して居る所を和尚さんに見附かつたのです」

「ふん、さうか——さあ御茶が注げたから、一杯」と老人は茶碗を各自の前に置く。茶の量は三四滴に過ぎぬが、茶碗は頗る大きい。生壁色の地へ、焦げた丹と、薄い黄で、繪だか、模様だか、鬼の面の模様になりかゝつた所か、一寸見當の附かないものが、べたに描いてある。

「杢兵衛です」と老人が簡單に説明した。

「是は面白い」と余も簡單に賞めた。

「杢兵衛はどうも偽物が多くて、——その糸底を見て御覧なさい。銘があるから」と云ふ。

取り上げて、障子の方へ向けて見る。障子には植木鉢の葉蘭の影が暖かさうに寫つて居る。首を曲げて、覗き込むと、杢の字が小さく見える。銘は鑑賞の上に於て、左のみ大切のものとは思はないが、好事者は餘程是が氣にかゝるさうだ。茶碗を下へ置かないで、其儘口へつけた。濃く甘く、湯加減に出た、重い露を、舌の先へ一しづく宛落として味はつて見るのは閑人適意の韻事である。普通の人は茶を飲むものと心得て居るが、あれは間違ひだ。舌頭へぽたりと載せて、清いものが四方へ散れば咽喉へ下るべき液は殆どない。只馥郁たる匂が食道から胃のなかへ沁み渡るのみである。歯を用ひるは卑しい。水はあまりに輕い。玉露に至つては濃やかなる事、淡水の境を脱して、顋を疲らす程の硬さを知らず、結構な飲料である。眠られぬと訴ふるものあらば、眠らぬも、茶を用ひよと勧めたい。

老人はいつの間にやら、青玉の菓子皿を出した。大きな塊を、かく迄薄く、かく迄規則正しく、刳りぬいた匠人の手際は驚くべきものと思ふ。すかして見ると春の日影は一面に射し込んで、射し込んだ儘、逃れ出づる路を失つた様な感じである。中には何も盛らぬがいゝ。

「御客さんが、青磁を賞められたから、今日はちと許り見せようと思うて、出して置きました」

「どの青磁を——うん、あの菓子鉢かな。あれは、わしも好きぢや。時にあなた、西洋畫では襖抔はかけんものかな。かけるなら一つ頼み

たいがな」
「かいて呉れなら、かゝぬ事もないが、此和尚の氣に入るか入らぬかわからない。折角骨を折つて、西洋畫は駄目だ抔と云はれては、骨の折り栄がない。」
「襖には向かないでせう」
「向かんかな。さうさな、此間の久一さんの畫の様ぢや、少し派手過ぎるかも知れん」
「私のは駄目です。あれは丸でいたづらです」と若い男はしきりに、恥づかしがつて謙遜する。
「その何とか云ふ池はどこにあるんですか」と余は若い男に念の爲尋ねて置く。
「一寸觀海寺の裏の谷の所で、幽邃な所です。——なあに學校に居る時分、習つたから、退屈まぎれに、やつて見た丈です」
「觀海寺と云ふと……」
「觀海寺と云ふと、わしの居る所ぢや。いゝ所ぢや、海を一目に見下ろしての——まあ逗留中に一寸來て御覽。なに、此所からはつい五六丁よ。あの廊下から、そら、寺の石段が見えるぢやらうが」
「いつか御邪魔に上がつてもいゝですか」
「あゝいゝとも、何時でも居る。こゝの御孃さんも、よう、來られる。——御孃さんと云へば今日はお那美さんが見えんやうだが——どうかされたかな、隱居さん」
「どこぞへ出ましたかな。久一、御前の方へ行きはせんかな」
「いゝや、見えません」
「又獨り散歩かな、ハヽヽヽ。お那美さんは中中足が強い。此間法用で礪並迄行つたら、姿見橋の所で——どうも、善く似とると思つたら、お那美さんよ。尻を端折つて、草履を穿いて、和尚さん、何を愚圖々々、どこへ行きなさると、いきなり、驚かされたて、ハヽヽヽ。御前はそんな形姿で、地體どこへ、行つたのぞいと聽くと、今芹摘みに行つた戻りぢや、和尚さん少しやらうかと云うて、いきなりわしの袂へ泥だらけの芹を押し込んで、ハヽヽヽ」
「どうも、……」と老人は苦笑ひをしたが、急に立つて「實は是を御覽に入れる積りで」と話しを又道具の方へそらした。
老人が紫檀の書架から、恭しく取り下ろした紋緞子の古い袋は、何だか重さうなものである。
「和尚さん、あなたには、御目に懸けた事があつたかな」
「なんぢや、一體」
「硯よ」
「へえ、どんな硯かい」
「山陽の愛藏したと云ふ……」
「いゝえ、そりや未だ見ん」
「春水の替へ蓋がついて……」
「そりや、未だのやうだ。どれ〳〵」
老人は大事さうに緞子の袋の口を解くと、小豆色の四角な石が、ちらりと角を見せる。
「いゝ色合ぢやなう。端溪かい」
「端溪で鴝鵒眼が九つある」
「九つ？」と和尚大いに感じた樣子である。
「是が春水の替へ蓋」と老人は綸子で張つた薄い蓋を見せる。上に春水の字で七言絶句が書いてある。
「成程。春水はようかく。ようかくが、書は杏坪の方が上手ぢやて」
「矢張り杏坪の方がいゝかな」
「山陽が一番まづい樣だ。どうも才子肌で俗氣があつて、一向面白うない」
「ハヽヽヽ。和尚さんは、山陽が嫌ひだから、今日は山陽の幅を懸け替へて置いた」
「ほんに」と和尚さんは後を振り向く。床は平床を鏡の樣にふき込んで、鏽氣を吹いた古銅瓶

には、木蘭を一尺の高さに活けてある。軸は底光りのある古錦襴に、装幀の工夫を籠めた物徂徠の大幅である。絹地ではないが、多少の時代がついて居るから、字の巧拙に論なく、紙の色が周囲のきれ地とよく調和して見える。あの錦襴も織りたては、あれ程のゆかしさも無かつたらうに、彩色が褪せて、金絲が沈んで、華麗な所が減り込んで、澁い所がせり出して、あんないゝ調子になつたのだと思ふ。焦茶の砂壁に、白い象牙の軸が際立つて、兩方に突つ張つて居る手前に、例の木蘭がふはりと浮き出されて居る外は、床全體の趣は落ち附き過ぎて寧ろ陰氣である。

「徂徠かな」と和尚が、首を向けた儘云ふ。

「徂徠もあまり、御好きでないかも知れんが、山陽よりは善からうと思うて」

「それは徂徠の方が遙かにいゝ。享保頃の學者の字はまづくても、何處ぞに品がある」

「廣澤をして日本の能書ならしめば、われは則ち漢人の拙なるものと云うたのは、徂徠だつたかな、和尚さん」

「わしは知らん。さう威張る程の字でもないて、ワハヽヽヽ」

「時に和尚さんは、誰を習はれたのかな」

「わしか。禪坊主は本も讀まず、手習もせんから、なう」

「しかし、誰ぞ習はれたらう」

「若い時に高泉の字を、少し稽古した事がある。それぎりぢや。それでも人に頼まれゝばいつでも、書きます。ワハヽヽヽ。時に其端溪を一つ御見せ」と和尚が催促する。

とう／＼緞子の袋を取り除ける。一座の視線は悉く硯の上に落ちる。厚さは殆ど二寸に近いから、通例のものの倍はあらう。四寸に六寸の幅も長さも先づ並と云つてよろしい。蓋には、鱗のかたに研きをかけた松の皮を其儘用ひて、上には朱漆で、わからぬ書體が二字許り書いてある。

「此蓋が」と老人が云ふ。「此蓋が、只の蓋ではないので、御覽の通り、松の皮には相違ないが……」

老人の眼は余の方を見て居る。然し松の皮の蓋に如何なる因縁があらうと、畫工として余はあまり感服は出來んから、

「松の蓋は少し俗ですな」

と云つた。老人はまあと云はぬ許りに手を擧げて、

「只松の蓋と云ふ許りでは、俗でもあるが、是はその何ですよ。山陽が廣島に居つた時に庭に生えて居た松の皮を剝いで山陽が手づから製したのですよ」

成程山陽は俗な男だと思つたから、

「どうせ、自分で作るなら、もつと不器用に作れさうなものですな。わざと此鱗のかた抔をぴかぴか研ぎ出さなくつても、よささうに思はれますが」と遠慮のない所を云つて退けた。

「ワハヽヽヽ。左樣よ。此蓋はあまり安つぽい樣だな」と和尚は忽ち余に賛成した。

若い男は氣の毒さうに、老人の顏を見る。老人は少々不機嫌の體に蓋を拂ひのけた。下から愈硯が正體をあらはす。

もし此硯に就いて人の眼を聳つべき特異の點があるとすれば、其表面にあらはれたる匠人の刻である。眞中に袂時計程な丸い肉が、縁とすれ／＼の高さに彫り殘されて、是を蜘蛛の背に象どる。中央から四方に向つて、八本の足が彎曲して走ると見れば、先には各鴝鵒眼を抱へて居る。殘る一個は背の眞中に、黃な汁をしたゝらした如く煮染んで見える。背と足と縁を殘して餘る部分は殆ど一寸餘の深さに掘り下げてある。墨を湛へる所は、よもや此塹壕の底ではあるまい。たとひ一合の水を注ぐとも此深さ

を充たすには足らぬ。思ふに水盂の中から、一滴の水を銀杓にて、蜘蛛の背に落したるを、貴き墨に磨り去るのだらう。夫でなければ、名は硯でも、其實は純然たる文房用の装飾品に過ぎぬ。

老人は涎の出さうな口をして云ふ。

「此肌合と、此眼を見て下さい」

成程見れば見る程いゝ色だ。寒く潤澤を帯びたる肌の上に、はつと、一息懸けたなら、直ちに凝つて、一朶の雲を起こすだらうと思はれる。ことに驚くべきは眼の色である。眼の色と云はんより、眼と地の相交はる所が、次第に色を取り替へて、いつ取り替へたか、殆ど吾眼の欺かれたるを見出し得ぬ事である。形容して見ると紫色の蒸羊羹の奥に、隠元豆を、透いて見える程の深さに嵌め込んだ様なものである。眼と云へば一個二個でも大變に珍重される。九個と云つたら、殆ど類はあるまい。しかも其九個が整然と同距離に按排されて、恰も人造のねりものと見違へらるゝに至つては固より天下の逸品を以て許さざるを得ない。

「成程結構です。觀て心持ちがいゝ計りぢやありません。かうして觸つても愉快です」と云ひながら、余は隣の若い男に硯を渡した。

「久一に、そんなものが解るかい」と老人が笑ひながら聞いて見る。久一君は、少々自棄の氣味で、

「分りやしません」と打ち遣つた様に云ひ放つたが、わからん硯を、自分の前へ置いて、眺めて居ては、勿體ないと氣が附いたものか、又取り上げて、余に返した。余はもう一遍丁寧に撫で廻した後、とうとう之を恭しく禪師に返却した。禪師は篤と掌の上で見澄ました末、夫では飽き足らぬと考へたと見えて、鼠木綿の着物の袖を容赦なく蜘蛛の背へこすりつけて、光澤の出た所を頻りに賞翫して居る。

「隠居さん、どうも此色が實に善いな。使うた事があるかの」

「いゝや、滅多には使ひたうないから、まだ買うたなりぢや」

「さうぢやろ。此様なのは支那でも珍しからうな、隠居さん」

「左様」

「わしも一つ欲しいものぢや。何なら久一さんに頼まうか。どうかな、買うて來て御呉れかな」

「へ、ゝ、ゝ。硯を見附けないうちに、死んで仕舞ひさうです」

「本當に硯どころではないな。時にいつ御立ちか」

「二三日うちに立ちます」

「隠居さん。吉田迄送つて御やり」

「普段なら、年は取つとるし、まあ見合はす所ぢやが、ことによると、もう逢へんかも、知れんから、送つてやらうと思つて居ります」

「伯父さんは送つて呉れんでもいゝです」

若い男は此老人の甥と見える。成程どこか似て居る。

「なあに、送つて貰ふがいゝ。川船で行けば譯はない。なあ隠居さん」

「はい、山越しでは難儀だが、廻り路でも船なら……」

若い男は今度は別に辭退もしない。只默つて居る。

「支那の方へ御出でですか」と余は一寸聞いて見た。

「えゝ」

えゝの二字では少し物足らなかつたが、其上掘つて聞く必要もないから控へた。障子を見ると、蘭の影が少し位置を變へて居る。

「なあに、あなた。矢張り今度の戰爭で――これがもと志願兵をやつたものだから、それで召集されたので」

老人は當人に代つて、滿洲の野に日ならず出征すべき此青年の運命を余に告げた。此の夢の樣な詩の樣な春の里に、啼くは鳥、落つるは花、湧くは溫泉のみと思ひ詰めて居たのは間違である。現實世界は山を越え、海を越えて、平家の後裔のみ住み古したる孤村に迄逼る。朔北の曠野を染むる血潮の何萬分の一かは、此青年の動脈から迸る時が來るかも知れない。此青年の腰に吊る長き劍の先から烟となつて吹くかも知れない。而して其青年は、夢みる事より外に、何等の價値を、人生に認め得ざる一畫工の隣に坐つて居る。耳をそばだつれば彼が胸に打つ心臟の鼓動さへ聞き得る程近くに坐つて居る。其鼓動のうちには、百里の平野を捲く高き潮が今既に響いて居るかも知れぬ。運命は卒然として此二人を一堂のうちに會したるのみにて、其他には何事をも語らぬ。

九

「御勉強ですか」と女が云ふ。部屋に歸つた余は、三脚几に縛り付けた、書物の一册を抽いて讀んで居た。

「御這入りなさい。ちつとも構ひません」

女は遠慮する氣色もなく、つか〳〵と這入る。くすんだ半襟の中から、恰好のいゝ頸の色が、あざやかに、抽き出て居る。女が余の前に坐つた時、此頸と此半襟の對照が第一番に眼についた。

「西洋の本ですか、六づかしい事が書いてあるでせうね」

「なあに」

「ぢや何が書いてあるんです」

「さうですね。實はわたしにも、よく分らないんです」

「ホヽヽヽ。それで御勉強なの」

「勉強ぢやありません。只机の上へ、かう開けて、開いた所をいゝ加減に讀んでるんです」

「夫で面白いんですか」

「夫が面白いんです」

「何故？」

「何故つて、小說なんか、さうして讀む方が面白いです」

「餘つ程變つて入らつしやるのね」

「えゝ、些と變つてます」

「初から讀んぢや、どうして惡いでせう」

「初から讀まなけりやならないとすると、仕舞ひ迄讀まなけりやならない譯になりませう」

「妙な理窟だ事。仕舞ひ迄讀んだつていゝぢやありませんか」

「無論わるくは、ありませんよ。筋を讀む氣なら、わたしだつて、さうします」

「筋を讀まなけりや何を讀むんです。筋の外に何か讀むものがありますか」

余は、矢張り女だなと思つた。多少試驗して見る氣になる。

「あなたは小說が好きですか」

「私が？」と句を切つた女は、あとから「さうですねえ」と判然しない返事をした。あまり好きでもなささうだ。

「好きだか、嫌ひだか自分にも解らないんぢやないですか」

「小說なんか讀んだつて、讀まなくつたつて

——」と眼中には丸で小說の存在を認めて居ない。

「それぢや、初めから讀んだつて、仕舞ひから讀んだつて、いゝ加減な所をいゝ加減に讀んだつて、いゝ譯ぢやありませんか。あなたの樣にさう不思議がらないでもいゝでせう」

「だつて、あなたと私とは違ひますもの」

「どこが？」と余は女の眼の中を見詰めた。試驗をするのは此所だと思つたが、女の眸は少しも動かない。

「ホヽヽ解りませんか」

「然し若いうちは随分御読みなすつたらう」余は一本道で押し合ふのを已めにして、一寸裏へ廻つた。

「今でも若い積りですよ。可哀相に」放した鷹はまたそれかゝる。すこしも油断がならん。

「そんな事が男の前で云へれば、もう年寄のうちですよ」と、やつと引き戻した。

「さう云ふあなたも随分の御年ぢやありませんか。そんなに年をとつても、矢つ張り、惚れたの、腫れたの、にきびが出来たのつてえ事が面白いんですか」

「えゝ、面白いんです、死ぬ迄面白いんです」

「おやさう。それだから画工なんぞになれるんですね」

「全くです。画工だから、小説なんか初めから仕舞ひ迄読む必要はないんです。けれども、どこを読んでも面白いのです。あなたと話しをするのも面白い。こゝへ逗留して居るうちは毎日話しをしたい位です。何ならあなたに惚れ込んでもいゝ。さうなると猶面白い。然しいくら惚れてもあなたと夫婦になる必要はないんです。惚れて夫婦になる必要があるうちは、小説を初めから仕舞ひ迄読む必要があるんです」

「すると不人情な惚れ方をするのが画工なんですね」

「不人情ぢやありません。非人情な惚れ方をするんです。小説も非人情で読むから、筋なんかどうでもいゝんです。かうして、御籤を引くやうに、ぱつと開けて、開いた所を、漫然と読んでるのが面白いんです」

「成程面白さうね。ぢや、今あなたが読んで入らつしやる所を、少し話して頂戴。どんな面白い事が出てくるか伺ひたいから」

「話しちや駄目です。画だつて話しにしちや一文の価値もなくなるぢやありませんか」

「ホヽヽ、夫ぢや読んで下さい」

「英語でですか」

「いゝえ日本語で」

「英語を日本語で読むのはつらいな」

「いゝぢやありませんか、非人情で」

　これも一興だらうと思つたから、余は女の乞に応じて、例の書物をぽつり／＼と日本語で読み出した。もし世界に非人情な読み方があるとすれば正にこれである。聴く女も固より非人情で聴いてゐる。

「情けの風が女から吹く。声から、眼から、肌から吹く。男に扶けられて舳に行く女は、夕暮のヱニスを眺むる為か、扶くる男はわが脈に稲妻の血を走らす為か。——非人情だから、いゝ加減ですよ。所々脱けるかも知れません」

「よござんすとも。御都合次第で、御足しなすつても構ひません」

「女は男とならんで舷に倚る。二人の隔りは、風に吹かるゝリボンの幅よりも狭い。女は男と共にヱニスに去らばと云ふ。ヱニスなるドージの殿楼は今、第二の日没の如く、薄赤く消えて行く。……」

「ドージとは何です」

「何だつて構やしません。昔ヱニスを支配した人間の名ですよ。何代つゞいたものですかね。其御殿が今でもヱニスに残つてるんです」

「それで其男と女と云ふのは誰の事なんでせう」

「誰だか、わたしにも分らないんだ。夫だから面白いのですよ。今迄の関係なんかどうでもいいでさあ。只あなたとわたしの様に、かう一所に居るところなんで、その場限りで面白味があるでせう」

「そんなものですかね。何だか船の中の様ですね」

「船でも岡でも、かいてある通りでいゝんです。

何故と聞き出すと探偵になつて仕舞ふです」

「ホヽヽヽぢや聽きますまい」

「普通の小說はみんな探偵が發明したものですよ。非人情な所がないから、些とも趣がない」

「ぢや非人情の續きを伺ひませう。夫から？」

「ヹニスは沈みつゝ、沈みつゝ、只空に引く一抹の淡き線となる。線は切れる。切れて點となる。蛋白石の空のなかに圓き柱が、こゝ、かしこと立つ。遂には最も高く聳えたる鐘樓が沈む。沈んだと女が云ふ。ヹニスを去る女の心は空行く風の如く自由である。去れど隱れたるヹニスは、再び歸らねばならぬ女の心に羈絏の苦しみを與ふ。男と女は暗き灣の方に眼を注ぐ。星は次第に增す。柔らかに搖ぐ海は泡を濺がず。男は女の手を把る。鳴りやまぬ弦を握つた心地である。……」

「あんまり非人情でもない樣ですね」

「なに是が非人情的に聞けるのですよ。然し厭なら少々略しませうか」

「なに私は大丈夫ですよ」

「わたしは、あなたより猶大丈夫です。――それからと、えゝと、少しく六づかしくなつて來たな。どうも譯し――いや讀みにくい」

「讀みにくければ、御略しなさい」

「えゝ、いゝ加減にやりませう。――この一夜と女が云ふ。一夜？と男がきく。一と限るはつれなし、幾夜を重ねてこそと云ふ」

「女が云ふんですか、男が云ふんですか」

「男が云ふんですよ。何でも女がヹニスへ歸りたくないのでせう。それで男が慰める語なんです。――眞夜中の甲板に帆綱を枕にして橫はりたる、男の記憶には、かの瞬時、熱き一滴の血に似たる瞬時、女の手を確と把りたる瞬時が大濤の如くに搖れる。男は黑き夜を見上げながら、强ひられたる結婚の淵より、是非に女を救ひ出さんと思ひ定めた。かく思ひ定めて男は眼を閉づる。――」

「女は？」

「女は路に迷ひながら、いづこに迷へるかを知らぬ樣である。攫はれて空行く人の如く、只不可思議の千萬無量――あとが一寸讀みにくいですよ。どうも句にならない。――只不可思議の千萬無量――何か動詞はないでせうか」

「動詞なんぞ入るものですか、夫で澤山です」

「え？」

轟と音がして山の樹が悉く鳴る。思はず顏を見合はす途端に、机の上の一輪插に活けた、椿が、ふらふらと搖れる。「地震！」と小聲に叫んだ女は、膝を崩して余の机に靠りかゝる。御互の身軀がすれすれに動く。キヽーと鋭い羽搏きをして一羽の雉子が藪の中から飛び出す。

「雉子が」と余は窓の外を見て云ふ。

「どこに」と女は崩した、からだを擦り寄せる。余の顏と女の顏が觸れぬ許りに近付く。細い鼻の穴から出る女の呼吸が余の髭にさはつた。

「非人情ですよ」と女は忽ち坐住居を正しながら屹と云ふ。

「無論」と言下に余は答へた。

岩の凹みに湛へた春の水が、驚いて、のたりのたりと鈍く搖いてゐる。地盤の響きに、滿泓の波が底から動くのだから、表面が不規則に曲線を描くのみで、碎けた部分は何所にもない。圓滿に動くと云ふ語があるとすれば、こんな場合に用ひられるのだらう。落ち附いて影を蘸してゐた山櫻が、水と共に、延びたり縮んだり、曲がつたり、くねつたりする。然しどう變化しても矢張り明かに櫻の姿を保つてゐる所が非常に面白い。

「こいつは愉快だ。綺麗で、變化があつて。かう云ふ風に動かなくつちや面白くない」

「人間もさう云ふ風にさへ動いて居れば、いく

ら動いても大丈夫ですね」
「非人情でなくつちや、からは動けませんよ」
「ホヽヽ、大變非人情が御好きだこと」
「あなただつて嫌ひな方ぢやありますまい。昨日の振袖なんか……」と言ひかけると、
「何か御褒美を頂戴」と女は急に甘える様に云つた。
「何故です」
「見たいと仰しやつたから、わざ〳〵、見せて上げたんぢやありませんか」
「わたしがですか」
「山越をなさつた畫の先生が、茶店の婆さんにわざ〳〵御頼みになつたさうで御座います」
余は何と答へてよいやら一寸挨拶が出なかつた。女はすかさず、
「そんな忘れつぽい人に、いくら實をつくしても駄目ですわねえ」と嘲るが如く、恨むが如く、又眞向から切りつけるが如く二の矢をついだ。段々旗色がわるくなるが、どこで盛り返したものか、一旦機先を制せられると、中々隙を見出だしにくい。
「ぢや昨夕の風呂場も、全く御親切からなんですね」と際どい所を漸く立て直す。
女は默つてゐる。

「どうも濟みません。御禮に何を上げませう」と出來る丈先へ出て置く。いくら出ても何の利目もなかつた。女は何喰はぬ顔で大徹和尚の額を眺めて居る。やがて、
「竹影拂階塵不動」
と口のうちで靜かに讀み了つて、又余の方へ向き直つたが、急に思ひ出した様に、
「何ですつて」
と、わざと大きな聲で聞いた。その手は喰はない。
「其坊主にさつき逢ひましたよ」と地震に搖れた池の水の様に圓滿な動き方をして見せる。
「觀海寺の和尚ですか。肥つてるでせう」
「西洋畫で唐紙をかいてくれつて、云ひましたよ。禪坊さんなんてものは隨分譯のわからない事を云ひますね」
「それだから、あんなに肥れるんでせう」
「それから、もう一人若い人に逢ひましたよ。……」
「久一でせう」
「えゝ久一君です」
「よく御存じです事」
「なに久一君丈知つてるんです。其外には何も知りやしません。口を利くのが嫌ひな人ですね」

「なに、遠慮して居るんです。まだ子供ですから……」
「子供つて、あなたと同じ位ぢやありませんか」
「ホヽヽ、さうですか。あれは私の從弟ですが、今度戰地へ行くので、暇乞に來たのです」
「こゝに留まつて、ゐるんですか」
「いゝえ、兄の家に居ります」
「ぢや、わざ〳〵御茶を飲みに來た譯ですね」
「御茶より御白湯の方が好きなんですよ。父がよせばいゝのに、呼ぶものですから。麻痺が切れて困つたでせう。私が居れば中途から歸してやつたんですが……」
「あなたは何所へ入らしつたんです。和尚が聞いて居ましたぜ、又一人散歩かつて」
「えゝ鏡が池の方を廻つて來ました」
「その鏡が池へ、わたしも行きたいんだが……」
「行つて御覧なさい」
「畫にかくに好い所ですか」
「身を投げるに好い所です」
「身はまだ中々投げない積りです」
「私は近々投げるかも知れません」
餘りに女としては思ひ切つた冗談だから、余は不圖顔を上げた。女は存外慥かである。

「私が身を投げて浮いて居る所を――苦しんで浮いてる所ぢやないんです――やす〳〵と往生して浮いて居る所を――綺麗な畫にかいて下さい」

「え？」

「驚いた、驚いた、驚いたでせう」

女はすらりと立ち上がる。三歩にして盡くる部屋の入口を出るとき、顧てにこりと笑つた。茫然たる事多時。

十

鏡が池へ來て見る。觀海寺の裏道の、杉の間から谷へ降りて、向うの山へ登らぬうちに、路は二股に岐れて、おのづから鏡が池の周圍となる。池の縁には熊笹が多い。ある所は、左右から生ひ重なつて、殆ど音を立てずには通れない。木の間から見ると、池の水は見えるが、どこで始まつて、どこで終るか一應廻つた上でないと見當がつかぬ。あるいて見ると存外小さい。三丁程よりあるまい。只非常に不規則な形で、所々に岩が自然の儘水際に横はつて居る。縁の高さも、池の形の名狀し難い樣に、波を打つて、色々な起伏を不規則に連ねて居る。

池をめぐりては雜木が多い。何百本あるか勘定がし切れぬ。中には、まだ春の芽を吹いて居らんのがある。割合に枝の込まない所は、依然として、うらゝかな春の日を受けて、萌え出でた下草さへある。壺菫の淡き影が、ちらり〳〵と其間に見える。

日本の菫は眠つて居る感じである。「天來の奇想の樣に」と形容した西人の句は到底あてはまるまい。から思ふ途端に余の足はとまつた。足がとまれば、厭になる迄そこに居る。居られるのは、幸福な人である。東京でそんな事をすれば、すぐ電車に引き殺される。電車が殺さなければ巡査が追ひ立てる。都會は太平の民を乞食と間違へて、掏摸の親分たる探偵に高い月俸を拂ふ所である。

余は草を茵に太平の尻をそろりと卸した。こゝならば、五六日斯うしたなり動かないでも、誰も苦情を持ち出す氣遣ひはない。自然の難有い所はこゝにある。いざとなると容赦も未練もない代りには、人に因つて取り扱ひをかへる樣な輕薄な態度はすこしも見せない。岩崎や三井を眼中に置かぬものは、いくらでも居る。冷然として古今帝王の權威を風馬牛し得るものは自然のみであらう。自然の徳は高く塵界を超越して、絶對の平等觀を無邊際に樹立して居る。天下の羣小を麾いで徒らにタイモンの憤りを招くよりは、蘭を九畹に滋き、蕙を百畦に樹ゑて、獨り其裏に起臥する方が遙かに得策である。世は公平と云ひ無私と云ふ。左程大事なものならば、日に千人の小賊を戮して、滿圃の草花を彼等の屍に培ふがよからう。

何だか考へが理に落ちて一向つまらなくなつた。こんな中學程度の觀想を練りにわざわざ、鏡が池迄來はせぬ。袂から煙草を出して燐寸をシュッと擦る。手應へはあつたが火は見えない。敷島のさきを附けて吸つてみると、鼻から烟が出た。なあるほど、吸つたんだなと漸く氣がついた。燐寸は短かい草のなかで、しばらく雨龍の樣な細い烟りを吐いて、すぐ寂滅した。席をずらせて段々水際迄出て見る。余が茵は天然に池のなかに、ながれ込んで、足を浸せば生温い水につくかも知れぬと云ふ間際で、とまる。水を覗いて見る。

眼の屆く所は左迄深さうにもない。底には細長い水草が、往生して沈んで居る。余は往生と云ふより外に形容すべき言葉を知らぬ。岡の薄なら靡く事を知つて居る。藻の草ならば誘ふ波の情けを待つ。百年待つても動きさうもない、水の底に沈められた此水草は、動くべ

き凡ての姿勢を調へて、朝な夕なに、弄らるゝ期を、待ち暮らし、待ち明かし、幾代の思ひを茎の先に籠めながら、今に至る迄遂に動き得ず、又死に切れずに、生きて居るらしい。

余は立ち上がつて、草の中から、手頃の石を二つ拾つて来る。功徳になると思つたから、眼の先へ、一つ抛り込んでやる。ぶく／＼と泡が二つ浮いて、すぐ消えた。すぐ消えた、すぐ消えたと、余は心のうちで繰り返す。すかして見ると、三茎程の長い髪が、懶げに揺れかゝつて居る。見附かつてはと云はぬ許りに、濁つた水が底の方から隠しに来る。南無阿弥陀佛。

今度は思ひ切つて、懸命に真中へなげる。ぽかんと幽かに音がした。静かなるものは決して取り合はない。もう抛げる気も無くなつた。絵の具箱と帽子を置いた儘右手へ廻る。

二間余りを爪先上りに登る。頭の上には大きな樹がかぶさつて、身体が急に寒くなる。向う岸の暗い所に椿が咲いて居る。椿の葉は緑が深すぎて、昼見ても、日向で見ても、軽快な感じはない。ことに此椿は岩角を、奥へ二三間遠退いて、花がなければ、何があるか気のつかない所に森閑として、かたまつてゐる。其花が！　一日勘定しても無論勘定し切れぬ程多い。然し眼が附けば是非勘定したくなる程鮮やかである。唯鮮やかと云ふ計りで、一向陽気な感じがない。ぱつと燃え立つ様で、思はず、気を奪られた、後は何だか凄くなる。あれ程人を欺す花はない。余は深山椿を見る度にいつでも妖女の姿を連想する。黒い眼で人を釣り寄せて、しらぬ間に、嫣然たる毒を血管に吹く。欺かれたと悟つた頃は既に遅い。向う側の椿が眼に入つた時、余は、えゝ、見なければよかつたと思つた。あの花の色は唯の赤ではない。眼を醒ます程の派手やかさの奥に、言ふに言はれぬ沈んだ調子を持つてゐる。悄然として萎れる雨中の梨花には、只憐れな感じがする。冷やかに艶なる月下の海棠には、只愛らしい気持がする。椿の沈んで居るのは全く違ふ。黒ずんだ、毒気のある、恐ろしい味を帯びた調子である。此調子を底に持つて、上部はどこ迄も派手に装つてゐる。然も人に媚ぶる態もなければ、ことさらに人を招く様子も見えぬ。ぱつと咲き、ぽたりと落ち、ぽたりと落ち、ぱつと咲いて、幾百年の星霜を、人目にかゝらぬ山陰に落ち附き払つて暮らしてゐる。只一眼見たが最後！　見た人は彼女の魔力から金輪際、免るゝ事は出来ない。あの色は只の赤ではない。屠られたる囚人の血が、自ら人の眼を惹いて、自ら人の心を不快にする如く一種異様な赤である。

見てゐると、ぽたりと赤い奴が水の上に落ちた。静かな春に動いたものは只此一輪である。しばらくすると又ぽたりと落ちた。あの花は決して散らない。崩れるよりも、かたまつた儘枝を離れる。枝を離れるときは一度に離れるから、未練のない様に見えるが、落ちてもかたまつて居る所は、何となく毒々しい。又ぽたり落ちる。あゝやつて落ちてゐるうちに、池の水が赤くなるだらうと考へた。花が静かに浮いて居る辺りは今でも少々赤い様な気がする。また落ちた。地の上へ落ちたのか、水の上へ落ちたのか、区別がつかぬ位静かに浮く。また落ちる。あれが沈む事があるだらうかと思ふ。年々落ち尽す幾百輪の椿は、水につかつて、色が溶け出して、腐つて泥になつて、漸く底に沈むのかしらん。幾千年の後には此古池が、人の知らぬ間に、落ちた椿の為に、埋もれて、元の平地に戻るかも知れぬ。又一つ大きいのが血を塗つた、人魂の様に落ちる。又落ちる。ぽたりぽたりと落ちる。際限なく落ちる。

こんな所へ美しい女の浮いてゐる所をか

いたら、どうだらうと思ひながら、元の所へ歸つて、又煙草を吞んで、ぼんやり考へ込む。温泉場のお那美さんが昨日冗談に云つた言葉が、うねりを打つて、記憶のうちに寄せてくる。心は大浪にのる一枚の板子の樣に搖れる。あの顏を種にして、あの椿の下に浮かせて、上から椿を幾輪も落とす。椿が長しなへに落ちて、女が長しなへに水に浮いてゐる感じをあらはしたいが、夫が畫でかけるだらうか。かのラオコーンには――ラオコーン抔はどうでも構はない。原理に背いても、背かなくつても、さう云ふ心持ちさへ出ればいゝ。然し人間を離れないで人間以上の永久と云ふ感じを出すのは容易な事ではない。第一顏に困る。あの顏を借りるにしても、あの表情では駄目だ。苦痛が勝つては凡てを打ち壞して仕舞ふ。と云うて無暗に氣樂では猶困る。一層ほかの顏にしては、どうだらう。あれか、これかと指を折つて見るが、どうも思はしくない。矢張りお那美さんの顏が一番似合ふ樣だ。然し何だか物足らない。物足らないと迄は氣が附くが、どこが物足らないかが、吾ながら不明である。從つて自己の想像でいゝ加減に作り易へる譯に行かない。あれに嫉妬を加へたら、どうだらう。嫉妬では不安の感が多過ぎる。憎惡はどうだらう。憎惡は烈し過ぎる。怒？怒では全然調和を破る。恨？恨でも春恨とか云ふ、詩的のものならば格別、只の恨では餘り俗である。色々に考へた末、仕舞ひに漸くこれだと氣が附いた。多くある情緒のうちで、憐れと云ふ字のあるのを忘れて居た。憐れは神の知らぬ情で、しかも神に尤も近き人間の情である。お那美さんの表情のうちには此の憐れの念が少しもあらはれて居らぬ。そこで物足らぬのである。ある咄嗟の衝動で、此情があの女の眉宇にひらめいた瞬時に、わが畫は成就するであらう。然し――何時それが見られるか解らない。あの女の顏に普段充滿して居るものは、人を馬鹿にする微笑と、勝たう、勝たうと焦る八の字のみである。あれ丈では、とても物にならない。

がさり／＼と足音がする。胸裏の圖案は三分二で崩れた。見ると、筒袖を着た男が、背へ薪を載せて、熊笹のなかを觀海寺の方へわたつてくる。隣の山からおりて來たのだらう。

「よい御天氣で」と手拭をとつて挨拶する。腰を屈める途端に、三尺帶に落とした鉈の刃がぴかりと光つた。四十恰好の逞しい男である。どこかで見た樣だ。男は舊知の樣に馴々しい。

「旦那も畫を御描きなさるか」余の繪の具箱は開けてあつた。

「あゝ。此池でも畫かうと思つて來て見たが、淋しい所だね。誰も通らない」

「はあい。まことに山の中で……旦那あ、峠で御降られなさつて、嘸御困りで御座んしたろ」

「え？ うん御前はあの時の馬子さんだね」

「はあい。かうやつて薪を切つては城下へ持つて出ます」と源兵衛は荷を卸して、其上へ腰をかける。煙草入を出す。古いものだ。紙だか革だか分らない。余は燐寸を借してやる。

「あんな所を毎日越すなあ大變だね」

「なあに、馴れてゐますから――夫に毎日は越しません。三日に一返、ことによると四日目位になります」

「四日に一返でも御免だ」

「アハヽヽヽ。馬が不憫ですから四日目位にして置きます」

「そりやあ、どうも。自分より馬の方が大事なんだね。ハヽヽヽ」

「それ程でもないんで……」

「時に此池は餘程古いもんだね。全體何時頃からあるんだい」

「昔からありますよ」

「昔から？　どの位昔から？」
「なんでも余つ程古い昔から」
「余つ程古い昔からか。成程」
「なんでも昔、志保田の孃様が、身を投げた時分からありますよ」
「志保田つて、あの温泉場のかい」
「はあい」
「御孃さんが身を投げたつて、現に達者で居るぢやないか」
「いんにえ。あの孃さまぢやない。ずつと昔の孃様が」
「ずつと昔の孃様。いつ頃かね、それは」
「なんでも、余程昔の孃様で……」
「その昔の孃様が、どうして又身を投げたんだい」
「その孃様は、矢張り今の孃様の様に美しい孃様であつたさうながな、旦那様」
「うん」
「すると、ある日、一人の梵論字が來て……」
「梵論字と云ふと虚無僧の事かい」
「はあい。あの尺八を吹く梵論字の事で御座んす。其梵論字が志保田の庄屋へ逗留して居るうちに、その美しい孃様が、其梵論字を見染めて——因果と申しますか、どうしても一所になりたいと云うて、泣きました」
「泣きました。ふうん」
「所が庄屋どのが、聞き入れません。梵論字は婿にはならんと云うて、とう／＼追ひ出しました」
「其虚無僧をかい」
「はあい。そこで孃様が、梵論字のあとを追うてこゝ迄來て、——あの向うに見える松の所から、身を投げて——とう／＼、えらい騒ぎになりました。其時何でも一枚の鏡を持つてゐたとか申し傳へて居りますよ。夫で此池を今でも鏡が池と申しまする」
「へえゝ。ぢや、身を投げたものがあるんだね」
「まことに怪しからん事で御座んす」
「何代位前の事かい。それは」
「なんでも余つ程昔の事で御座んすさうな。夫から——これはこゝ限りの話しだが、旦那さん」
「何だい」
「あの志保田の家には、代々氣狂が出來ます」
「へえゝ」
「全く祟りで御座んす。今の孃様も、近頃は少し變だ云うて、皆が囃します」
「ハヽヽそんな事はなからう」
「御座んせんかな。然しあの御袋様が矢張り少し變でな」
「うちにゐるのかい」
「いゝえ、去年亡くなりました」
「ふん」と余は煙草の吸殻から細い烟の立つのを見て、口を閉ぢた。源兵衛は薪を背にして去る。

畫をかきに來て、こんな事を考へたり、こんな話を聽く許りでは、何日かゝつても一枚も出來つこない。折角繪の具箱迄持ち出した以上、今日は義理にも下繪をとつて行かう。幸ひ、向う側の景色は、あれなりで略纏まつてゐる。あすこでも申し譯に一寸描かう。

一丈餘りの蒼黒い岩が、眞直に池の底から突き出して、濃き水の折れ曲がる角に、嵯々と構へる右側には、例の熊笹が斷崖の上から水際迄、一寸の隙間なく叢生してゐる。上には三抱へ程の大きな松が、若蔦にからまれた幹を、斜に捩つて、半分以上水の面へ乗り出してゐる。鏡を懷にした女は、あの岩の上からでも飛んだものだらう。

三脚几に尻を据ゑて、畫面に入るべき材料を見渡す。松と、笹と、岩と水であるが、偖て水はどこでとめてよいか分らぬ。岩の高さが一丈あれば、影も一丈ある。熊笹は、水際でとまら

さに、水の中迄這り込んで居るかと怪しまるゝ位、鮮やかに水底迄寫つて居る。松に至つては空に聳ゆる高さが、見上げる丈、影も亦極めて長い。眼に縮つた丈の寸法では到底收りがつかない。一層の事、實物をやめて影丈描くのも一興だらう。水をかいて、水の中の影をかいて、さうして、是が畫だと人に見せたら驚くだらう。然し只驚かせる丈では詰まらない。成程畫になつて居ると驚かせなければ詰まらない。どう工夫をしたものだらうと、一心に池の面を見詰める。

奇體なもので、影丈眺めて居ては一向畫にならん。實物と見比べて工夫がして見度くなる。余は水面から眸を轉じて、そろり〳〵と上の方へ視線を移して行く。一丈の巖を、影の先から、水際の繼目迄眺めて、繼目から次第に水の上に出る。潤澤の氣合から、皴皺の模樣を逐一吟味して漸々と登つて行く。やうやく登り詰めて、余の双眼が今危巖の頂に達したるとき、余は蛇に睨まれた蟇の如く、はたりと畫筆を取り落とした。

緑の枝を通す夕日を背に、暮れんとする晩春の蒼黒く巖頭を彩どる中に、楚然として織り出されたる女の顔は、――花下に余を驚かし、まぼろしに余を驚かし、振袖に余を驚かし、風呂場に余を驚かしたる女の顔である。

余が視線は、蒼白き女の顔の眞中にぐさと釘付けにされたぎり動かない。女もしなやかなる體躯を伸せる丈伸して、高い巖の上に一指も動かさずに立つて居る。此一刹那！

余は覺えず飛び上つた。女はひらりと身をひねる。帯の間に椿の花の如く赤いものが、ちらついたと思つたら、既に向ふへ飛び下りた。夕日は樹梢を掠めて、幽かに松の幹を染むる。熊笹は愈青い。

又驚かされた。

十一

山里の朧に乘じてそゞろ歩く。觀海寺の石段を登りながら仰數春星一二三と云ふ句を得た。余は別に和尚に逢ふ用事もない。逢うて雜話をする氣もない。偶然と宿を出でて足の向く所に任せてぶら〳〵するうち、つい此石磴の下に出た。しばらく不許葷酒入山門と云ふ石を撫でゝ立つて居たが、急にうれしくなつて、登り出したのである。

トリストラム・シャンデーと云ふ書物のなかに、此書物ほど神の覺召に叶うた書き方はないと云ふ。最初の一句はともかくも自力で綴る。あとは只管に神を念じて、筆の動くに任せる。何をかくか自分には無論見當がつかぬ。かく者は自己であるが、かく事は神の事である。從つて責任は著者にはないさうだ。余が散歩も亦此流儀を汲んだ、無責任の散歩である。只神を賴まぬ丈が一層の無責任である。スターンは自分の責任を免れると同時に之を在天の神に嫁した。引き受けて呉れる神を持たぬ余は遂に之を泥溝の中に棄てた。

石段を登るにも骨を折つては登らない。骨が折れる位なら、すぐ引き返す。一段登つて佇むとき何となく愉快だ。それだから二段登る。二段目に詩が作りたくなる。默然として、余の影を見る。角石に遮られて三段に切れて居るのは妙だ。妙だから又登る。仰いで天を望む。寢ぼけた奧から、小さい星がしきりに瞬きをする。句になると思つて、又登る。かくして、余はとう〳〵、上迄登り詰めた。

石段の上で思ひ出す。昔し鎌倉へ遊びに行つて、所謂五山なるものを、ぐる〳〵尋ねて廻つた時、たしか圓覺寺の塔頭であつたらう、矢張りこんな風に石段をのそり〳〵と登つて行くと、門内から、黄な法衣を着た、頭の鉢の開いた坊

主が出て來た。余は上る、坊主は下る。すれ違つた時、坊主が鋭い聲で何處へ御出でなさると問うた。余は只境内を拜見にと答へて、同時に足を停めたら、坊主は直ちに、何もありませんぞと言ひ捨てゝ、すた／＼下りて行つた。あまり洒落たから、余は少しく先を越された氣味で、段上に立つて、坊主を見送ると、坊主は、かの鉢の開いた頭を振り立て振り立て、遂に姿を杉の木の間に隱した。其間かつて一度も振り返つた事はない。成程禪僧は面白い。きび／＼して居るなと、のつそり山門を這入つて、見ると、廣い庫裏も本堂も、がらんとして、人影は丸でない。余は其時に心からうれしく感じた。世の中にこんな洒落な人があつて、こんな洒落に、人を取り扱つてくれたかと思ふと、何となく氣分が晴々した。禪を心得て居たからと云ふ譯ではない。禪のぜの字も未だに知らぬ。只あの鉢の開いた坊主の所作が氣に入つたのである。

　世の中はしつこい、毒々しい、こせ／＼した、其上ずう／＼しい、いやな奴で埋まつてゐる。元來何しに世の中へ面を曝して居るんだか、解しかねる奴さへゐる。しかもそんな面に限つて大きいものだ。浮世の風にあたる面積の多いのを以て、左も名譽の如く心得てゐる。五年も十年も人の臀に探偵をつけて、人のひる屁の勘定をして、それが人世だと思つてる。さうして人の前へ出て來て、御前は屁をいくつ、ひつた、いくつ、ひつたと頼みもせぬ事を教へる。前へ出て云ふなら、それも參考にして、やらんでもないが、後ろの方から、御前は屁をいくつ、ひつた、いくつ、ひつたと云ふ。うるさいと云へば猶云ふ。よせと云へば益云ふ。分つたと云つても、屁をいくつ、ひつた、ひつたと云ふ。さうして夫が處世の方針だと云ふ。方針は人々勝手である。只ひつた、ひつたと云はずに默つて方針を立てるがいゝ。人の邪魔になる方針は差し控へるのが禮儀だ。邪魔にならなければ方針が立たぬと云ふなら、こつちも屁をひるのを以て、こつちの方針とする許りだ。さうなつたら日本も運の盡きだらう。

　かうやつて、美しい春の夜に、何等の方針も立てずに、あるいてるのは實際高尚だ。興來れば興來るを以て方針とする。興去れば興去るを以て方針とする。句を得れば、得た所に方針が立つ。得なければ、得ない所に方針が立つ。しかも誰の迷惑にもならない。是が眞正の方針である。屁を勘定するのは人身攻撃の方針で、屁をひるのは正當防禦の方針で、かうやつて觀海寺の石段を登るのは隨縁放曠の方針である。

　仰數春星一二三の句を得て、石磴を登りつくしたる時、朧にひかる春の海が帶の如くに見えた。山門を入る。絶句は纏める氣にならなくなつた。即座に已めにする方針を立てる。

　石を甃んで庫裏に通ずる一筋道の右側は、岡つゝじの生垣で、垣の向うは墓場であらう。左は本堂だ。屋根瓦が高い所で、朧かに光る。數萬の甍に、數萬の月が落ちた樣だと見上げる。何所やらで鳩の聲がしきりにする。棟の下にでも住んで居るらしい。氣の所爲か、廂のあたりに白いものが、點々見える。糞かも知れぬ。

　雨垂れ落ちの所に、妙な影が一列に並んでゐる。木とも見えぬ、草では無論ない。感じから云ふと、岩佐又兵衞のかいた鬼の念佛が、念佛をやめて、踊を踊つてゐる姿である。本堂の端から端迄、一列に行儀よく並んで踊つて居る。其影が又本堂の端から端迄一列に行儀よく並んで踊つて居る。朧夜にそゝのかされて、鉦も撞木も、奉加帳も打ちすてて、誘ひ合はせるや否や、此山寺へ踊りに來たのだらう。

　近寄つて見ると大きな覇王樹である。高さは七八尺もあらう、絲瓜程な青い黄瓜を、杓子の

樣に壓しひしやげて、柄の方を下に、上へ上へと繼ぎ合はせた樣に見える。あの杓子がいくつ繋がつたら、御仕舞ひになるのか分らない。今夜のうちにも廂を突き破つて、屋根瓦の上迄出さうだ。あの杓子が出來る時には、何でも不意に、どこからか出て來て、ぴしやりと飛び附くに違ひない。古い杓子が新しい小杓子を生んで、その小杓子が長い年月のうちに段々大きくなる樣には思はれない。杓子と杓子の連續が如何にも突飛である。こんな滑稽な樹はたんとあるまい。しかも澄ましたものだ。如何なる是佛と問はれて、庭前の柏樹子と答へた僧があるよしだが、もし同樣の問に接した場合には、余は一も二もなく、月下の覇王樹と應へるであらう。

少時、晁補之と云ふ人の紀行文を讀んで、未だに暗誦して居る句がある。「時に九月天高く露清く、山空しく、月明かに、仰いで星斗を視れば皆光大、たま〳〵人の上にあるが如し。窓間の竹數十竿、相摩戞して聲切々已まず。竹間の梅棕森然として鬼魅の離立突鬢の狀の如し。二三子相顧み、魄動いて寐ぬるを得ず。遲明皆去る」と又口の内で繰り返して見て、思はず笑つた。此覇王樹も時と場合によれば、余の魄を動かして、見るや否や山を追ひ下げたであらう。刺に手を觸れて見ると、いら〳〵と指をさす。

石甃を行き盡して左へ折れると庫裏へ出る。庫裏の前に大きな木蓮がある。殆んど一抱へもあらう。高さは庫裏の屋根を抜いて居る。見上げると頭の上は枝である。枝の上も、亦枝である。さうして枝の重なり合つた上が月である。普通、枝があゝ重なると、下から空は見えぬ。花があれば猶見えぬ。木蓮の枝はいくら重なつても、枝と枝の間はほがらかに隙いてゐる。木蓮は樹下に立つ人の眼を亂す程の細い枝を徒らには張らぬ。花さへ明かである。此の遙かなる下から見上げても一輪の花は、はつきりと一輪に見える。其一輪がどこ迄簇がつて、どこ迄咲いて居るか分らぬ。それにも關はらず一輪は遂に一輪で、一輪と一輪の間から、薄青い空が判然と望まれる。花の色は無論純白ではない。徒らに白いのは寒過ぎる。專らに白いのは、ことさらに人の眼を奪ふ巧みが見える。木蓮の色は夫ではない。極度の白きをわざと避けて、あたゝかみのある淡黄に、奥床しくも自らを卑下して居る。余は石甃の上に立つて、此のおとなしい花が累々とどこ迄も空裏に蔓る樣を見上げて、しばらく茫然として居た。眼に落つるのは花ばかりである。葉は一枚もない。

　　木蓮の花許りなる空を瞻る

と云ふ句を得た。どこやらで、鳩がやさしく鳴き合うて居る。

庫裏に入る。庫裏は明け放してある。盗人の居らぬ國と見える。狗は固より吠えぬ。

「御免」

と訪問れる。森として返事がない。

「頼む」

と案内をこふ。鳩の聲がくう〳〵と聞える。

「頼みまあゝす」と大きな聲を出す。

「おゝゝゝゝ」と遙かの向うで答へたものがある。人の家を訪うて、こんな返事を聞かされた事は決してない。やがて足音が廊下へ響くと、紙燭の影が、衝立の向う側にさした。小坊主がひよこりとあらはれる。了念であつた。

「和尚さんは御出でかい」

「居られる。何しに御座つた」

「温泉に居る畫工が來たと、取次いで御呉れ」

「畫工さんか。それぢや御上がり」

「斷らないでもいゝのかい」

「よろしかろ」

余は下駄を脱いで上がる。

「行儀がわるい畫工さんぢやな」

「なぜ」

「下駄を、よう御揃へなさい。そらこゝを御覧」と紙燭を差しつける。黒い柱の眞中に、土間から五尺許りの高さを見計らつて、半紙を四つ切りにした上へ、何か認めてある。
「そおら。讀めたろ。脚下を見よ、と書いてあるが」
「成程」と余は自分の下駄を丁寧に揃へる。和尚の室は廊下を鍵の手に曲がつて、本堂の横手にある。障子を恭しくあけて、恭しく敷居越しにつくばつた了念が、
「あのう、志保田から、畫工さんが來られました」と云ふ。甚だ恐縮の體である。余は一寸可笑しくなつた。
「左樣か、是へ」
余は了念と入れ代る。室は頗る狹い。中に圍爐裏を切つて、鐵瓶が鳴る。和尚は向う側に書見をして居た。
「さあ是へ」と眼鏡をはづして、書物を傍へおしやる。
「了念。りようゝねえゝん」
「はあゝゝい」
「座布團を上げんか」
「はあゝゝゝい」と了念は遠くで、長い返事をする。
「よう、來られた。嘸退屈だろ」
「あまり月がいゝから、ぶら〳〵來ました」
「いゝ月ぢやな」と障子をあける。飛び石が二つ、松一本の外には何もない、平庭の向うは、すぐ懸崖と見えて、眼の下に朧夜の海が忽ちに開ける。急に氣が大きくなつた樣な心持ちである。漁火がこゝ、かしこに、ちらついて、遙かの末の空に入つて、星に化ける積りだらう。
「是はいゝ景色。和尚さん、障子をしめて居るのは勿體ないぢやありませんか」
「左樣よ。しかし毎晩見て居るからな」
「何晩見てもいゝですよ、此景色は。私なら寐ずに見て居ます」
「ハヽヽヽ。尤もあなたは畫工だから、わしとは少し違ふて」
「和尚さんだつて、うつくしいと思つてるうちは畫工でさあ」
「なる程それもさうぢやろ。わしも達磨の畫位は是で、書くがの。そら、こゝに掛けてある、此軸は先代がかかれたのぢやが、中々ようかいとる」
成程達磨の畫が小さい床に掛かつてゐる。然し畫としては頗るまづいものだ。只俗氣がない。拙を蔽はうと力めて居る所が一つもない。無邪氣な畫だ。此先代もやはり此畫の樣な構はない人であつたんだらう。
「無邪氣な畫ですね」
「わし等のかく畫はそれで澤山ぢや。氣象さへあらはれて居れば……」
「上手で俗氣があるのより、いゝです」
「ハヽヽまあ、さうでも、賞めて置いてもらはう。時に近頃は畫工にも博士があるかの」
「畫工の博士はありませんよ」
「あ、左樣か。此間、何でも博士に一人逢うた」
「へえゝ」
「博士と云ふとえらいものぢやろな」
「えゝ。えらいんでせう」
「畫工にも博士がありさうなものぢやがな。なぜ無いだらう」
「さういへば、和尚さんの方にも博士がなけりやならないでせう」
「ハヽヽまあ、そんなものかな。――何とか云ふ人ぢやつたて、此間逢うた人は――どこぞに名刺がある筈だが……」
「どこで御逢ひです、東京ですか」
「いやこゝで、東京へは、も二十年も出ん。近頃は電車とか云ふものが出來たさうぢやが、一寸乘つて見たい樣な氣がする」

「つまらんものですよ。やかましくつて」
「さうかな。蜀犬日に吠え、呉牛月に喘ぐと云ふから、わしの様な田舎者は、却て困るかも知れんにならう」
「困りやしませんがね。つまらんですよ」
「左様かな」
鐵瓶の口から湯気が盛に出る。和尚は茶簞笥から茶器を取り出して、茶を注いでくれる。
「番茶を一つ御上がり。志保田の隠居さんの様な甘い茶ぢやない」
「いえ結構です」
「あなたは、さうやつて、方々あるく様に見受けるが矢張り畫をかく爲かの」
「えゝ。道具丈は持つてあるきますが、畫はかかないでも構はないんです」
「はあ、それぢや遊び半分かの」
「さうですね。さう云つても善いでせう。屁の勘定をされるのが、いやですからね」
流石の禪僧も、此語丈は解しかねたと見える。
「屁の勘定た何かな」
「東京に永く居ると屁の勘定をされますよ」
「どうして」
「ハヽヽヽ勘定丈ならいゝですが。人の屁を分析して、臀の穴が三角だの、四角だのつて餘計な事をやりますよ」
「はあ、矢張り衛生の方かな」
「衛生ぢやありません。探偵の方です」
「探偵？ 成程、それぢや警察ぢやの。一體警察の、巡査のて、何の役に立つかの。なけりやならんかいの」
「さうですね、畫工には入りませんね」
「わしにも入らんがな。わしはまだ巡査の厄介になつた事がない」
「さうでせう」
「しかし、いくら警察が屁の勘定をしたて、構はんがな。澄まして居たら、自分にわるい事がなけりや、なんぼ警察ぢやて、どうもなるまいがな」
「屁位で、どうかされちや堪りません」
「わしが小坊主のとき、先代がよう云はれた。人間は日本橋の眞中に臓腑をさらけ出して、恥づかしくない様にしなければ修業を積んだとは云はれんてな。あなたもそれ迄修業をしたらよかろ。旅抔はせんでも濟む様になる」
「畫工になり澄ませば、いつでもさうなれます」
「それぢや畫工になり澄ましたらよかろ」
「屁の勘定をされちや、なり切れませんよ」
「ハヽヽヽ。それ御覧。あの、あなたの泊まつて居る、志保田の御那美さんも、嫁に行つて歸つてきてから、どうも色々な事が氣になつてならん、ならんと云うて仕舞にとう／＼、わしの所へ法を問ひに來たぢやて。所が近頃は大分出來てきて、そら、御覧。あの様な譯のわかつた女になつたぢやて」
「へえゝ、どうも只の女ぢやないと思ひました」
「いや中々機鋒の鋭い女で——わしの所へ修業に來て居た泰安と云ふ若僧も、あの女の爲に、ふとした事から大事を窮明せんならん因緣に逢着して——今によい智識になるやうぢや」
靜かな庭に、松の影が落ちる。遠くの海は、空の光に應ふるが如く、應へざるが如く、有耶無耶のうちに微かなる、耀きを放つ。漁火は明滅す。
「あの松の影を御覧」
「綺麗ですな」
「只綺麗かな」
「えゝ」
「綺麗な上に、風が吹いても苦にしない」
茶碗に餘つた澁茶を飲み干して、絲底を上に、茶托へ伏せて、立ち上がる。
「門迄送つてあげよう。りよう、ねえゝん。御

客が御歸りだぞよ―

送られて、庫裏を出ると、鳩がくうゝ〱と鳴く。

―鳩程可愛いものはない、わしが手をたゝくと、みな飛んでくる。呼んで見よか―

月は愈明るい。しん〱として、木蓮は幾朶の雲華を空裏に擎げて居る。沈寥たる春夜の眞中に、和尚ははたと掌を拍つ。聲は風中に死して一羽の鳩も下りぬ。

―下りんかいな。下りさうなものぢやが―

了念は余の顔を見て、一寸笑つた。和尚は鳩の眼が夜でも見えると思うて居るらしい。氣樂なものだ。

山門の所で、余は二人に別れる。見返ると、大きな丸い影と、小さな丸い影が、石甃の上に落ちて、前後して庫裏の方に消えて行く。

十二

基督は最高度に藝術家の態度を具足したるものなりとは、オスカー・ワイルドの說と記憶して居る。基督は知らず。觀海寺の和尚の如きは、正しく此資格を有して居ると思ふ。趣味があると云ふ意味ではない。時勢に通じてゐると云ふ譯でもない。彼は畫と云ふ名の殆ど下すべからざる達磨の幅を掛けて、よう出來た抔と得意である。彼は畫工に博士があるものと心得て居る。彼は鳩の眼を夜でも利くものと思つて居る。それにも關はらず、藝術家の資格があると云ふ。彼の心は底のない嚢の樣に行き拔けである。何も停滯して居らん。隨處に動き去り、任意に作し去つて、些の塵滓の腹部に沈澱する氣色がない。もし彼の腦裏に一點の趣味を貼し得たならば、彼は之く所に同化して、行屎走尿の際にも、完全たる藝術家として存在し得るだらう。余の如きは、探偵に屁の數を勘定される間は、到底畫家にはなれない。畫架に向ふ事は出來る。小手板を握る事は出來る。然し畫工にはなれない。かうやつて、名も知らぬ山里へ來て、暮れんとする春色のなかに五尺の痩軀を埋めつくして、始めて、眞の藝術家たるべき態度に吾身を置き得るのである。一たび此境界に入れば美の天下はわが有に歸する。尺素を染めず、寸縑を塗らざるも、われは第一流の大畫工である。技に於て、ミケルアンゼロに及ばず、巧みなる事ラフアエルに讓る事ありとも、藝術家たるの人格に於て、古今の大家と歩武を齊しうして、毫も遜る所を見出し得ない。余は此温泉場へ來てから、未だ一枚の畫もかゝない。繪の具箱は醉興に、擔いできたかの感さへある。人はあれでも畫家かと嗤ふかもしれぬ。いくら嗤はれても、今の余は眞の畫家である。立派な畫家である。かう云ふ境を得たものが、名畫をかくとは限らん。然し名畫をかき得る人は必ず此境を知らねばならん。

朝飯をすまして、一本の敷島をゆたかに吹かしたるときの余の觀想は以上の如くである。日は霞を離れて高く上つて居る。障子をあけて、後ろの山を眺めたら、蒼い樹が非常にすき通つて、例になく鮮やかに見えた。

余は常に空氣と、物象と、彩色の關係を宇宙で尤も興味ある研究の一と考へて居る。色を主にして空氣を出すか、物を主にして空氣をかくか。又は空氣を主にして其うちに色と物とを織り出すか。畫は少しの氣合一つで色々な調子が出る。此調子は畫家自身の嗜好で異なつてくる。それは無論であるが、時と場所とで、自から制限されるのも亦當然である。英國人のかいた山水に明るいものは一つもない。明るい畫が嫌ひなのかも知れぬが、よし好きであつても、あの空氣では、どうする事も出來ない。同じ英人でもグーダル抔は色の調子が丸で違ふ。違ふ筈である。彼は英人でありながら、かつて英國の

景色をかいた事がない。彼の畫題は彼の郷土にはない。彼の本國に比すると、空氣の透明の度の非常に缺けて居る、埃及又は波斯邊の光景のみを擇んでゐる。從つて彼のかいた畫を、始めて見ると誰も驚く。英人にもこんな明らかな色を出すものがあるかと疑ふ位鮮明に出來上がつて居る。

個人の嗜好はどうする事も出來ん。然し日本の山水を描くのが主意であるならば、吾々も亦日本固有の空氣と色を出さなければならん。いくら佛蘭西の繪がうまいと云つて、其色を其儘に寫して、此が日本の景色だとは云はれない。矢張り面のあたり自然に接して、朝な夕なに雲容煙態を研究した揚句、あの色こそと思つたとき、すぐ三脚几を擔いで飛び出さなければならん。色は刹那に移る。一たび機を失すれば、同じ色は容易に眼には落ちぬ。余が今見上げた山の端には、滅多に此邊で見る事の出來ない程な好い色が充ちてゐる。折角來て、あれを逃がすのは惜しいものだ。一寸寫してきよう。

襖をあけて、椽側へ出ると、向う二階の障子に身を倚して、那美さんが立つて居る。顎を襟のなかへ埋めて、横顔丈しか見えぬ。余が挨拶をしようと思ふ途端に、女は、左の手を落とした儘、右の手を風の如く動かした。閃めくは稻妻か、二折れ三折れ胸のあたりを、するりと走るや否や、かちりと音がして、閃めきはすぐ消えた。女の左り手には九寸五分の白鞘がある。姿は忽ち障子の蔭に隱れた。余は朝つぱらから歌舞伎座を覗いた氣で宿を出る。

門を出て、左へ切れると、すぐ岨道つゞきの、爪上りになる。鶯が所々で鳴く。左り手がなだらかな谷へ落ちて、蜜柑が一面に植ゑてある。右には高からぬ岡が二つ程並んで、此所にもあるは蜜柑のみと思はれる。何年前か一度此地に來た。指を折るのも面倒だ。何でも寒い師走の頃であつた。其時蜜柑山に蜜柑がべた生りに生る景色を始めて見た。蜜柑取りに一枝賣つてくれと云つたら、幾顆でも上げましよ、持つて入らつしやいと答へて、樹の上で妙な節の唄をうたひ出した。東京では蜜柑の皮でさへ藥種屋へ買ひに行かねばならぬのにと思つた。夜になると、しきりに銃の音がする。何だと聞いたら、獵師が鴨をとるんだと教へてくれた。其時は那美さんの、なの字も知らずに濟んだ。

あの女を役者にしたら、立派な女形が出來る。普通の役者は、舞臺へ出ると、よそ行きの藝をする。あの女は家のなかで、常住芝居をして居る。しかも芝居をして居るとは氣がつかん。自然天然に芝居をして居る。あんなのを美的生活とでも云ふのだらう。あの女の御蔭で畫の修業が大分出來た。

あの女の所作を芝居と見なければ、薄氣味がわるくて一日も居たゝまれん。義理とか人情とか云ふ、尋常の道具立を背景にして、普通の小説家の樣な觀察點からあの女を研究したら、刺激が強過ぎて、すぐいやになる。現實世界に在つて、余とあの女の間に纏綿した一種の關係が成り立つたとするならば、余の苦痛は恐らく言語に絶するだらう。余の此度の旅行は俗情を離れて、あく迄畫工になり切るのが主意であるから、眼に入るものは悉く畫として見なければならん。能、芝居、若しくは詩中の人物としてのみ觀察しなければならん。此覺悟の眼鏡から、あの女を覗いて見ると、あの女は、今迄見た女のうちで尤もうつくしい所作をする。自分でうつくしい藝をして見せると云ふ氣がない丈に役者の所作よりも猶うつくしい。

こんな考へをもつ余を、誤解してはならん。社會の公民として不適當だ抔と評しては尤も不屆きである。善は行ひ難い、德は施しにくい、節操は守り安からぬ、義の爲に命を捨てる

のは惜しい。是等を敢てするのは何人に取つても苦痛である。その苦痛を冒す為には、苦痛に打ち勝つ丈の愉快がどこかに潜んで居らねばならん。畫と云ふも、詩と云ふも、あるは芝居と云ふも、此の悲酸のうちに籠る快感の別號に過ぎん。此趣を解し得て、始めて吾人の所作は壯烈にもなる、閑雅にもなる、凡ての困苦に打ち勝つて、胸中一點の無上趣味を滿足せしめたくなる。肉體の苦しみを度外に置いて、物質上の不便を物とも思はず、勇猛精進の心を驅つて、人道の為に、鼎鑊に烹らるゝを面白く思ふ。若し人情なる狹き立脚地に立つて、藝術の定義を下し得るとすれば、藝術はわれ等教育ある士人の胸裏に潜んで、邪を避け正に就き、曲を斥け直にくみし、弱を扶け強を挫かねば、どうしても堪へられぬと云ふ一念の結晶して、燦として白日を射返すものである。

芝居氣があると人の行為を笑ふ事がある。うつくしき趣味を貫かんが為に、不必要なる犧牲を敢てするの人情に遠きを嗤ふのである。自然にうつくしき性格を發揮するの機會を待たずして、無理矢理に自己の趣味觀を衒ふの愚を笑ふのである。眞に個中の消息を解し得たるものの嗤ふは其意を得て居る。趣味の何物たるをも心得ぬ下司下郎の、わが卑しき心根に比較して他を賤しむに至つては許し難い。昔巖頭の吟を遺して、五十丈の飛瀑を直下して急湍に赴いた青年がある。余の視る所にては、彼の青年は美の一字の為に、捨つべからざる命を捨てたるものと思ふ。死其物は洵に壯烈である、只其死を促すの動機に至つては解し難い。去れども死其物の壯烈をだに體し得ざるものが、如何にして藤村子の所作を嗤ひ得べき。彼等は壯烈の最後を遂ぐるの情趣を味はひ得ざるが故に、たとひ正當の事情のもとにも、到底壯烈の最後を遂け得べからざる制限ある點に於て、藤村子よりは人格として劣等であるから、嗤ふ權利がないものと余は主張する。

余は畫工である。畫工であればこそ趣味專門の男として、たとひ人情世界に墮在するも、東西兩隣の沒風流漢よりも高尚である。社會の一員として優に他を教育すべき地位に立つて居る。詩なきもの、畫なきもの、藝術のたしなみなきものよりは、美しき所作が出來る。人情世界にあつて、美しき所作は正である、義である、直である。正と義と直を行為の上に於て示すものは天下の公民の模範である。

しばらく人情界を離れたる余は、少くとも此旅中に人情界に歸る必要はない。あつては折角の旅が無駄になる。人情世界から、ぢやりぢやりする砂をふるつて、底にある、うつくしい金のみを眺めて暮らさなければならぬ。余自らも社會の一員を以て任じては居らぬ。純粹なる專門畫家として、己さへ、纏綿たる利害の累索を絶つて、優に畫布裏に往來して居る。況んや山をや水をや他人をや。那美さんの行為動作と雖も只其儘の姿と見るより外に致し方がない。

三丁程上ると、向うに白壁の一構が見える。蜜柑のなかの住居だなと思ふ。道は間もなく二筋に切れる。白壁を横に見て左へ折れる時、振り返つたら、下から赤い腰巻をした娘が上がつてくる。腰巻が次第に盡きて、下から茶色の脛が出る。脛が出切つたら、藁草履になつて、其藁草履が段々動いて來る。頭の上に山櫻が落ちかゝる。背中には光る海を負つてゐる。

嶮道を登り切ると、山の出鼻の平な所へ出た。北側は翠を疊む春の峯で、今朝縁から仰いだあたりかも知れない。南側には燒野とも云ふべき地勢が幅半丁程擴がつて、末は崩れた崖となる。崖の下は今過ぎた蜜柑山で、村を跨いで向うを見れば、眼に入るものは言はずも知

れた青海である。

路は幾筋もあるが、合ふては別れ、別れては合ふから、どれが本筋とも認められぬ。どれも路である代りに、どれも路でない。草のなかに、黒赤い地が、見えたり隠れたりして、どの筋につながるか見分けのつかぬ所に變化があつて面白い。

どこへ腰を据ゑたものかと、草のなかを遠近と徘徊する。縁側から見たときは畫になると思つた景色も、いざとなると存外纏まらない。色も次第に變つてくる。草原をのそつくうちに、何時しか描く氣がなくなつた。描かぬとすれば、地位は構はん、どこへでも坐つた所がわが住居である。染み込んだ春の日が、深く草の根に籠つて、どつかと尻を卸すと、眼に入らぬ陽炎を踏み潰した様な心持ちがする。

海は足の下に光る。遮る雲の一片さへ持たぬ春の日影は、普く水の上を照らして、何時の間にかほとぼりは波の底迄浸み渡つたと思はるる程暖かに見える。色は一刷毛の紺青を平に流したる所々に、しろかねの細鱗を疊んで濃やかに動いて居る。春の日は限り無き天が下を照らして、天が下は限りなき水を湛へたる間には、白き帆が小指の爪程に見えるのみである。然も其帆は全く動かない。往昔入貢の高麗船が遠くから渡つてくるときには、あんなに見えたであらう。其外には大千世界を極めて、照らす日の世、照らさるゝ海の世のみである。

ごろりと寝る。帽子が額をすべつて、やけに阿彌陀となる。所々の草を一二尺抜いて、木瓜の小株が茂つてゐる。余が顔は丁度其一つの前に落ちた。木瓜は面白い花である。枝は頑固で、かつて曲がつた事がない。そんなら眞直かと云ふと、決して眞直でもない。只眞直な短かい枝に、眞直な短かい枝が、ある角度で衝突して、斜に構へつゝ全體が出來上つて居る。そこへ、紅だか白だか要領を得ぬ花が安閑と咲く。柔らかい葉さへちらちら着ける。評して見ると木瓜は花のうちで、愚かにして悟つたものであらう。世間には拙を守ると云ふ人がある。此人が來世に生れ變ると屹度木瓜になる。余も木瓜になりたい。

子供のうち花の咲いた、葉のついた木瓜を切つて、面白く枝振を作つて、筆架をこしらへた事がある。それへ二銭五厘の水筆を立てかけて、白い穂が花と葉の間から、隠見するのを机へ載せて楽しんだ。其日は木瓜の筆架ばかり氣にして寝た。あくる日、眼が覺めるや否や、飛び起きて机の前へ行つて見ると、花は萎へ葉は枯れて、白い穂丈が元の如く光つて居る。あんなに綺麗なものが、どうして、かう一晩のうちに、枯れるだらうと、その時は不審の念に堪へなかつた。今思ふと其時分の方が余程出世間的である。

寝るや否や眼についた木瓜は二十年來の舊知己である。見詰めて居ると次第に氣が遠くなつて、いゝ心持ちになる。又詩興が浮ぶ。

寝ながら考へる。一句を得る毎に寫生帖に記して行く。しばらくして出來上つた様だ。始めから讀み直して見る。

出門多所思。春風吹吾衣。芳草生車轍。廢道入霞微。停笻而矚目。萬象帶晴暉。聽黄鳥宛轉。觀落英紛霏。行盡平蕪遠。題詩古寺扉。孤愁高雲際。大空斷鴻歸。寸心何窈窕。縹緲忘是非。三十我欲老。韶光猶依々。逍遙隨物化。悠然對芳菲。

あゝ出來た、出來た。是で出來た。寝ながら木瓜を觀て、世の中を忘れて居る感じがよく出た。木瓜が出なくつても、海が出なくつても、感じさへ出れば夫で結構である、と唸りながら、喜んでゐると、エヘンと云ふ人間の咳拂ひが聞

こえた。こいつは驚いた。

見返りをして、峰の響いた方を見ると、山の出鼻を回つて、雑木の間から、一人の男があらはれた。

茶の中折を被つてゐる。中折の形は崩れて、傾く縁の下から眼が見える。眼の恰好はわからんが、慥かにきよろ／＼ときよろつく様だ。藍の縞物の尻を端折つて、素足に下駄がけの出で立ちは、何だか鑑定がつかない。野生の髯丈で判断すると正に野武士の価値はある。

男は岨道を下りるかと思ひの外、曲り角から又引き返した。もと来た道へ姿をかくすかと思ふと、さうでもない。又あるき直してくる。此草原を、散歩する人の外に、こんなに行きつ戻りつするものはない筈だ。然しあれが散歩の姿であらうか。又あんな男が此近辺に住んで居るとも考へられない。男は時々立ち留まる。首を傾ける。又は四方を見廻す。大いに考へ込む様にもある。人を待ち合はせる風にも取られる。何だかわからない。

余は此物騒な男から、つひに眼をはなす事が出来なかつた。別に恐ろしいでもない、又画にしようと云ふ気も出ない。只眼をはなす事が出来なかつた。右から左、左から右と、男に添うて、眼を働かせてゐるうちに、男ははたと留まつた。留まると共に、又ひとりの人物が、余が視界に点出された。

二人は双方で互に認識した様に、次第に双方から近附いて来る。余が視界は漸々縮まつて、原の真中で一点の狭き間に畳まれて仕舞ふ。二人は春の山を背に、春の海を前に、ぴたりと向き合うた。

男は無論例の野武士である。相手は？　相手は女である。那美さんである。

余は那美さんの姿を見た時、すぐ今朝の短刀を連想した。もしや懐に呑んで居りはせぬかと思つたら、さすが非人情の余もたゞひやりとした。

男女は向き合うた儘、しばらくは、同じ態度で立つて居る。動く気色は見えぬ。口は動かして居るかも知れんが、言葉は丸で聞えぬ。男はやがて首を垂れた。女は山の方を向く。顔は余の眼に入らぬ。

山では鶯が啼く。女は鶯に耳を借して、居るとも見える。しばらくすると、男が屹と、垂れた首を揚げて、半ば踵を回らしかける。尋常の様ではない。女は颯と体を開いて、海の方へ向き直る。帯の間から頭を出して居るのは懐剣らしい。男は昂然として行きかゝる。女は二足許り、男の踵を縫うて進む。女は草履ばきである。男の留まつたのは、呼び留められたのか。振り向く瞬間に女の右手は帯の間へ落ちた。あぶない！

するりと抜け出たのは、九寸五分かと思ひの外、財布の様な包み物である。差し出した白い手の下から、長い紐がふら／＼と春風に揺れる。

片足を前に、腰から上を少しそらして、差し出した白い手頸に、紫の色。此丈の姿勢で充分画にはならう。

紫で一寸切れた図面が、二三寸の間隔をとつて、振り返る男の体のこなし具合で、うまい按排につながれてゐる。不即不離とは此刹那の有様を形容すべき言葉と思ふ。女は前を引く態度で、男は後へに引かれた様子だ。しかもそれが実際に引いても引かれても居らん。両者の縁は紫の財布の尽くる所で、ふつりと切れてゐる。

二人の姿勢が斯くの如く美妙な調和を保つて居ると同時に、両者の顔と、衣服には飽く迄、対照が認められるから、画として見ると一層の興味が深い。

脊のずんぐりした、色黒の、髯づらと、くつきり締まつた細面に、襟の長い、撫肩の、華奢姿。ぶつきら棒に身をひねつた下駄がけの野武士と、不断着の銘仙さへしなやかに着こなした上、腰から上を、おとなしく反り身に控へたる痩形。はげた茶の帽子に、藍縞の尻切り出で立ちと、陽炎さへ燃やすべき櫛目の通つた鬢の色に、黒繻子のひかる奥から、ちらりと見せた帯揚のなまめかしさ。凡てが好畫題である。

男は手を出して財布を受け取る。引きつ引かれつ巧みに平均を保ちつゝあつた二人の位置は忽ち崩れる。女はもう引かぬ、男は引かれうともせぬ。心的状態が繪を構成する上に、斯程の影響を與へようとは、畫家ながら、今迄氣がつかなかつた。

二人は左右へ分かれる。双方に氣合がないから、もう畫としては、支離滅裂である。雑木林の入口で男は一度振り返つた。女は後をも見ぬ。すら〳〵と、こちらへ歩行いてくる。やがて余の真正面迄来て、

「先生、先生」

と二聲掛けた。是はしたり、何時目附かつたらう。

「何です」

と余は木瓜の上へ顔を出す。帽子は草原へ落ちた。

「何をそんな所でして入らつしやる」

「詩を作つて寝て居ました」

「うそを仰しやい。今のを御覧でせう」

「今の？　今の、あれですか。えゝ、少々拝見しました」

「ホヽヽ少々でなくても、澤山御覧なされば いゝのに」

「實の所は澤山拝見しました」

「それ御覧なさい。まあ一寸、こつちへ出て入らつしやい。木瓜の中から出て入らつしやい」

余は唯々として木瓜の中から出て行く。

「まだ木瓜の中に御用があるんですか」

「もう無いんです。歸らうかとも思ふんです」

「それぢや御一所に参りませうか」

「えゝ」

余は再び唯々として、木瓜の中に退いて、帽子を被り、繪の道具を纏めて、那美さんと一所にあるき出す。

「畫を御描きになつたの」

「やめました」

「こゝへ入らしつて、まだ一枚も御描きなさらないぢやありませんか」

「えゝ」

「でも折角こゝいらに入らしつて、些とも御かきなさらなくつちや、詰まりませんわね」

「なに詰まつてるんです」

「おやさう。なぜ？」

「何故でも、ちやんと詰まるんです。畫なんぞ描いたつて、描かなくつたつて、詰まる所は同じ事でさあ」

「そりや洒落なの、ホヽヽ随分呑氣ですねえ」

「こんな所へくるからには、呑氣にでもしなくつちや、来た甲斐がないぢやありませんか」

「なあに何處に居ても、呑氣にしなくつちや、生きてる甲斐はありませんよ。私なんぞは、今の様な所を人に見られても恥づかしくも何とも思ひません」

「思はんでもいゝでせう」

「さうですかね。あなたは今の男を一體何だと御思ひです」

「さうさな。どうもあまり、金持ちやありませんね」

「ホヽヽ善く中りました。あなたは占ひの名人ですよ。あの男は、貧乏して、日本に居られないからつて、私に御金を貰ひに来たのです」

「へえ、どこから来たのです」
「城下から来ました」
「随分遠方から来たもんですね。それで、何所へ行くんですか」
「何でも満洲へ行くさうですが」
「何しに行くんですか」
「何しに行くんですか。御金を拾ひに行くんだか、死にに行くんだか、分りません」
此時余は眼をあげて、ちよと女の顔を見た。今結んだ口元には、微かなる笑の影が消えかゝりつゝある。意味は解せぬ。
「あれは、わたくしの亭主です」
迅雷耳を掩ふに遑あらず、女は突然として一太刀浴びせかけた。余は全く不意撃を喰つた。無論そんな事を聞く気はなし、女も、よもや、此所迄曝け出さうとは考へて居なかつた。
「どうです、驚いたでせう」と女が云ふ。
「えゝ、少々驚いた」
「今の亭主ぢやありません、離縁された亭主です」
「なる程、それで……」
「夫ぎりです」
「さうですか。――あの蜜柑山に立派な白壁の家がありますね。ありや、いゝ地位にあるが、誰の家なんですか」
「あれが兄の家です。帰り路に一寸寄つて行きませう」
「用でもあるんですか」
「えゝ一寸頼まれものがあります」
「一所に行きませう」
岨道の登り口へ出て、村へ下りずに、すぐ、右に折れて、又一丁程を登ると、門がある。門から玄関へかゝらずに、すぐ庭口へ廻る。女が無遠慮につか〳〵行くから、余も無遠慮につか〳〵行く。南向きの庭に、棕梠が三四本あつて、土塀の下はすぐ蜜柑畠である。
女はすぐ、椽鼻へ腰をかけて、云ふ。
「いゝ景色だ。御覧なさい」
「成程、いゝですな」
障子のうちは、静かに人の気合もせぬ。女は音なふ気色もない。只腰をかけて、蜜柑畠を見下ろして平気である。余は不思議に思つた。元来何の用があるのかしら。
仕舞ひには話しもないから、両方共無言の儘で蜜柑畠を見下ろして居る。午に逼る太陽は、まともに暖かい光線を、山一面にあびせて、眼に余る蜜柑の葉は、葉裏迄、蒸し返されて耀いてゐる。やがて、裏の納屋の方で、鶏が大きな声を出して、こけこつこうと鳴く。
「おやもう。御午ですね。用事を忘れて居た。――久一さん、久一さん」
女は及び腰になつて、立て切つた障子を、からりと開ける。内は空しき十畳敷に、狩野派の双幅が空しく春の床を飾つて居る。
「久一さん」
納屋の方で漸く返事がする。足音が襖の向うでとまつて、からりと開くが早いか、白鞘の短刀が畳の上へ転がり出す。
「そら伯父さんの餞別だよ」
帯の間に、いつ手が這入つたか、余は少しも知らなかつた。短刀は二三度とんぼ返りを打つて、静かな畳の上を、久一さんの足下へ走る。作りがゆる過ぎたと見えて、ぴかりと、寒いものが一寸ばかり光つた。

十三

川舟で久一さんを吉田の停車場迄見送る。舟のなかに坐つたものは、送られる久一さんと、送る老人と、那美さんと、那美さんの兄さんと、荷物の世話をする源兵衛と、それから余である。余は無論御招伴に過ぎん。
御招伴でも呼ばれゝば行く、何の意味だか分

らなくても行く。非人情の旅に思慮は入らぬ。舟は筏に縁をつけた樣に、底が平たい。老人を中に、余と那美さんが艫、久一さんと、兄さんが、舳に座をとつた。源兵衛は荷物と共に獨り離れてゐる。

「久一さん、軍さは好きか嫌かい」と那美さんが聞く。

「出て見なければ分らんさ。苦しい事もあるだらうが、愉快な事も出て來るんだらう」と戰爭を知らぬ久一さんが云ふ。

「いくら苦しくつても、國家の爲だから」と老人が云ふ。

「短刀なんぞ貰ふと、一寸、戰爭に出て見たくなりやしないか」と女が又妙な事を聞く。久一さんは、

「さうさね」

と輕く首肯ふ。老人は髯を掀げて笑ふ。兄さんは知らぬ顏をして居る。

「そんな平氣な事で、軍さが出來るかい」と女は、委細構はず、白い顏を久一さんの前へ突き出す。久一さんと、兄さんが一寸眼を見合はせた。

「那美さんが軍人になつたら嘸強からう」兄さんが妹に話しかけた第一の言葉は是である。語調から察すると、たゞの冗談とも見えない。

「わたしが？ わたしが軍人？ わたしが軍人になれりやとうになつてゐます。今頃は死んでゐます。久一さん。御前も死ぬがいゝ。生きて歸つちや外聞がわるい」

「そんな亂暴な事を——まあ〳〵、目出度凱旋をして歸つて來てくれ。死ぬ許りが國家の爲ではない。わしもまだ二三年は生きる積りぢや。まだ逢へる」

老人の言葉の尾を長く手繰ると、尻が細くなつて、末は涙の絲になる。只男丈にそこ迄はだまを出さない。久一さんは何も云はずに、横を向いて、岸の方を見た。

岸には大きな柳がある。下に小さな舟を繋いで、一人の男がしきりに垂綸を見詰めて居る。一行の舟が、ゆるく波足を引いて、其前を通つた時、此男は不圖顏をあげて、久一さんと眼を見合はせた。眼を見合はせた兩人の間には何等の電氣も通はぬ。男は魚の事ばかり考へてゐる。久一さんの頭の中には一尾の鮒も宿る餘地がない。一行の舟は靜かに太公望の前を通り越す。

日本橋を通る人の數は、一分に何百か知らぬ。もし橋畔に立つて、行く人の心に蟠まる葛藤を一々に聞き得たならば、浮世は目眩しくて生きづらからう。只知らぬ人で逢ひ、知らぬ人でわかれるから、結句日本橋に立つて、電車の旗を振る志願者も出て來る。太公望が、久一さんの泣きさうな顏に、何等の說明をも求めなかつたのは幸である。顧り見ると、安心して浮標を見詰めて居る。大方日露戰爭が濟む迄見詰める氣だらう。

川幅はあまり廣くない。底は淺い。流れはゆるやかである。舷に倚つて、水の上を滑つて、どこ迄行くか、春が盡きて、人が騷いで、鉢合せをしたがる所迄行かねば已まぬ。腥き一點の血を眉間に印したる此青年は、余等一行を容赦なく引いて行く。運命の繩は此青年を遠き、暗き、物凄き北の國迄引くが故に、ある日、ある月、ある年の因果に、此青年と絡み附けられたる吾等は、其因果の盡くる所迄此青年に引かれて行かねばならぬ。因果の盡くるとき、彼と吾等の間にふつと音がして、彼一人は否應なしに運命の手元迄手繰り寄せらるゝ。殘る吾等も否應なしに殘らねばならぬ。賴んでも、もがいても、引いていつて貰ふ譯には行かぬ。

舟は面白い程やすらかに流れる。左右の岸には土筆でも生えて居りさうな。土堤の上には柳が

が多く見える。まばらに、低い家が其間から藁屋根を出し、煤けた窓を出し、時によると白い家鴨を出す。家鴨はがあ／＼と鳴いて川の中迄出て來る。

柳と柳の間に的皪と光るのは白桃らしい。とんかたんと機を織る音が聞こえる。とんかたんの絶間から女の唄が、はあゝい、いようう―と水の上迄響く。何を唄ふのやら一向分らぬ。

「先生、わたくしの畫をかいて下さいな」と那美さんが注文する。久一さんは兄さんと、しきりに軍隊の話しをして居る。老人はいつか居眠りをはじめた。

「書いてあげませう」と寫生帖を取り出して、

春風にそら解け繻子の銘は何

と書いて見せる。女は笑ひながら、

「こんな一筆がきではいけません。もつと私の氣象の出る樣に、丁寧にかいて下さい」

「わたしもかきたいのだが、どうも、あなたの顔は夫丈ぢや畫にならない」

「御挨拶です事。それぢや、どうすれば畫になるんです」

「なに今でも畫に出來ますがね、只少し足りない所がある。それが出ない所をかくと惜しいですよ」

「足りないたつて、持つて生れた顔だから仕方がありませんわ」

「持つて生れた顔は色々になるものです」

「自分の勝手にですか」

「えゝ」

「女だと思つて、人をたんと馬鹿になさい」

「あなたが女だから、そんな馬鹿を云ふのですよ」

「それぢや、あなたの顔を色々にして見せて頂戴」

「是程毎日色々になつてれば澤山だ」

女は默つて向うをむく。川縁はいつか、水とすれ／＼に低く着いて、見渡す田のもは、一面のげんげで埋まつてゐる。鮮やかな紅の滴々が、いつの雨に流されてか、半分溶けた花の海は霞のなかに果しなく廣がつて、見上げる半空には崢嶸たる一峯が半腹から微かに春の雲を吐いて居る。

「あの山の向うを、あなたは越して入らしつた」と女が白い手を舷から外へ出して、夢の樣な春の山を指す。

「天狗巖はあの邊ですか」

「あの翠の濃い下の、紫に見える所がありませう」

「あの日影の所ですか」

「日影ですかしら。禿げてるんでせう」

「なあに凹んでるんですよ。禿げて居りや、もつと茶に見えます」

「さうでせうか。ともかく、あの裏あたりになるさうです」

「さうすると、七曲りはもう少し左になりますね」

「七曲りは、向うへ、ずつと外れます。あの山の又一つ先の山ですよ」

「成程さうだつた。然し見當から云ふと、あのうすい雲が懸つてるあたりでせう」

「えゝ、方角はあの邊です」

居眠りをしてゐた老人は、舷から、肘を落として、ほいと眼をさます。

「まだ着かんかな」

胸膈を前へ出して、右の肘を後ろへ張つて、左り手を眞直に伸して、うゝんと欠伸をする序に、弓を絞る眞似をして見せる。女はホヽヽと笑ふ。

「どうも是が癖で、……」

「弓が御好きと見えますね」と余も笑ひながら尋ねる。

「若いうちは七分五厘まで引きました。押しは

存外今でも健かです」と左の肩を叩いて見せる。舟では戰爭談が酣である。
　舟は漸く町らしいなかへ這入る。腰障子に御肴と書いた居酒屋が見える。古風な繩暖簾が見える。材木の置場が見える。人力車の音さへ時々聞こえる。乙鳥がちゝと腹を返して飛ぶ。家鴨があゝ鳴く。一行は舟を捨てゝ停車場に向ふ。
　愈現實世界へ引きずり出された。汽車の見える所を現實世界と云ふ。汽車程二十世紀の文明を代表するものはあるまい。何百と云ふ人間を同じ箱へ詰めて轟と通る。情容赦はない。詰め込まれた人間は皆同程度の速力で、同一の停車場へとまつてさうして、同様に蒸氣の恩澤に浴さねばならぬ。人は汽車へ乗ると云ふ。余は積み込まれると云ふ。人は汽車で行くと云ふ。余は運搬されると云ふ。汽車程個性を輕蔑したものはない。文明はあらゆる限りの手段をつくして、個性を發達せしめたる後、あらゆる限りの方法によつて此個性を踏み附けようとする。一人前何坪何合かの地面を與へて、此地面のうちでは寐るとも起きるとも勝手にせよと云ふのが現今の文明である。同時に此何坪何合の周圍に鐵柵を設けて、これよりさきへは一歩も出てはならぬぞと威嚇かすのが現今の文明である。何坪何合のうちで自由を擅にしたものが、此鐵柵外にも自由を擅にしたくなるのは自然の勢である。憐れむべき文明の國民は日夜に此鐵柵に噛み附いて咆哮して居る。文明は個人に自由を與へて虎の如く猛からしめたる後、之を檻穽の内に投げ込んで、天下の平和を維持しつゝある。此平和は眞の平和ではない。動物園の虎が見物人を睨めて、寐轉んで居ると同様な平和である。檻の鐵棒が一本でも抜けたら――世は滅茶々々になる。第二の佛蘭西革命は此時に起るのであらう。個人の革命は今既に日夜に起りつゝある。北歐の偉人イブセンは此革命の起るべき状態に就いて具さに其例證を吾人に與へた。余は汽車の猛烈に、見界なく、凡ての人を貨物同様に心得て走る様を見る度に、客車のうちに閉ぢ籠められたる個人と、個人の個性に寸毫の注意をだに拂はざる此鐵車とを比較して、――あぶない、あぶない、氣を附けねばあぶないと思ふ。現代の文明は此あぶないで鼻を衝かれる位充滿してゐる。おさき眞闇に盲動する汽車はあぶない標本の一つである。
　停車場前の茶店に腰を下ろして、蓬餅を眺めながら汽車論を考へた。是は寫生帖へかく譯にも行かず、人に話す必要もないから、だまつて、餅を食ひながら茶を飲む。
　向ふの床几には二人かけて居る。等しく草鞋穿きで、一人は赤毛布、一人は千草色の股引の膝頭に繼布をあてて、繼布のあたつた所を手で抑へてゐる。
「矢つ張り駄目かね」
「駄目さあ」
「牛の様に胃袋が二つあるといゝなあ」
「二つあれば申し分はなえさ、一つが惡くなりや、切つて仕舞へば濟むから」
　此田舎者は胃病と見える。彼等は滿洲の野に吹く風の臭ひも知らぬ。現代文明の弊をも認めぬ。革命とは如何なるものか、文字さへ聞いた事もあるまい。或は自己の胃袋が一つあるか二つあるか夫すら辨じ得んだらう。余は寫生帖を出して、二人の姿を描き取つた。
　ぢやらん／＼と號鈴が鳴る。切符は既に買うてある。
「さあ、行きましよ」と那美さんが立つ。
「どうれ」と老人も立つ。一行は揃つて改札場を通り抜けて、プラットフォームへ出る。號鈴がしきりに鳴る。
　轟と音がして、白く光る鐵路の上を、文明の

長蛇が蜿蜒つて來る。文明の長蛇は口から黑い烟を吐く。

「愈御別れか」と老人が云ふ。

「それでは御機嫌よう」と久一さんが頭を下げる。

「死んで御出で」と那美さんが再び云ふ。

「荷物は來たかい」と兄さんが聞く。

蛇は吾々の前でとまる。横腹の戸がいくつもあく。人が出たり、這入つたりする。久一さんは乘つた。老人も兄さんも、那美さんも、余もそとに立つて居る。

車輪が一つ廻れば久一さんは既に吾等が世の人ではない。遠い、遠い世界へ行つて仕舞ふ。其世界では烟硝の臭ひの中で、人が働いて居る。さうして赤いものに滑つて、無暗に轉ぶ。空では大きな音がどゝん〳〵と云ふ。是からさう云ふ所へ行く久一さんは車のなかに立つて無言の儘、吾々を眺めて居る。吾々を山の中から引き出した久一さんと、引き出された吾々の因果はこゝで切れる。もう既に切れかゝつて居る。車の戸と窓があいて居る丈で、御互の顔が見える丈で、行く人と留まる人の間が六尺許り隔たつて居る丈で、因果はもう切れかゝつてゐる。

車掌が、ぴしやり〳〵と戸を閉てながら、此方へ走つて來る。一つ閉てる毎に、行く人と、留まる人の距離は益遠くなる。やがて久一さんの車室の戸もぴしやりとしまつた。世界はもう二つに爲つた。老人は思はず窓側へ寄る。青年は窓から首を出す。

「あぶない。出ますよ」と云ふ聲の下から、未練のない鐵車の音がごつとり〳〵と調子を取つて動き出す。窓は一つ一つ、余等の前を通る。久一さんの顔が小さくなつて、最後の三等列車が、余の前を通るとき、窓の中から又一つ顔が出た。

茶色のはげた中折帽の下から、髯だらけの野武士が名殘惜し氣に首を出した。そのとき、那美さんと野武士は思はず顔を見合はせた。鐵車はごとり〳〵と運轉する。野武士の顔はすぐ消えた。那美さんは茫然として、行く汽車を見送る。其茫然のうちには不思議にも今迄かつて見た事のない「憐れ」が一面に浮いてゐる。

「それだ！　それだ！　それが出れば畫になります」

と余は那美さんの肩を叩きながら小聲に云つた。余が胸中の畫面は此咄嗟の際に成就したのである。

文鳥

十月早稻田に移る。伽藍の樣な書齋に只一人、片附けた顏を頰杖で支へて居ると、三重吉が來て、鳥を御飼ひなさいと云ふ。飼つてもいゝと答へた。然し念の爲だから、何を飼ふのかねと聞いたら、文鳥ですと云ふ返事であつた。

文鳥は三重吉の小說に出て來る位だから奇麗な鳥に違なからうと思つて、ぢや買つて吳れ玉へと賴んだ。所が三重吉は是非御飼ひなさいと、同じ樣な事を繰り返してゐる。うむ買ふよ買ふよと矢張り頰杖を突いた儘で、むにや〳〵云つてるうちに三重吉は默つて仕舞つた。大方頰杖に愛想を盡かしたんだらうと、此時始めて氣が附いた。

すると三分ばかりして、今度は籠を御買ひなさいと云ひだした。是れも宜しいと答へると、是非御買ひなさいと念を押す代りに、鳥籠の講釋を始めた。其講釋は大分込み入つたものであつたが、氣の毒な事に、みんな忘れて仕舞つた。只好いのは二十圓位すると云ふ段になつて、急にそんな高價のでなくつても善からうと云つて置いた。三重吉はにや〳〵して居る。

夫から全體何所で買ふのかと聞いて見ると、なに何所の鳥屋にでもありますと、實に平凡な答をした。籠はと聞き返すと、籠ですか、籠はその何ですよ、なに何所にかあるでせう、と丸で雲を攫む樣な寬大な事を云ふ。でも君あてがなくつちや不可なからうと、恰も不可ない樣な顏をして見せたら、三重吉は頰ぺたへ手を宛てゝ、何でも駒込に籠の名人があるさうですが、年寄ださうですから、もう死んだかも知れませんと、非常に心細くなつて仕舞つた。

何しろ言ひだしたものに責任を負はせるのは當然の事だから、早速萬事を三重吉に依賴する事にした。すると、すぐ金を出せと云ふ。金は慥に出した。三重吉はどこで買つたか、七子の三つ折の紙入を懷中してゐて、人の金でも自分の金でも悉皆此の紙入の中に入れる癖がある。自分は三重吉が五圓札を慥に此の紙入の底に押し込んだのを目擊した。

斯樣にして金は慥に三重吉の手に落ちた。然し鳥と籠とは容易にやつて來ない。

其のうち秋が小春になつた。三重吉は度々來る。よく女の話などをして歸つて行く。文鳥と籠の講釋は全く出ない。硝子戶を透して五尺の緣側には日が好く當る。どうせ文鳥を飼ふなら、こんな暖かい季節に、此の緣側へ鳥籠を据ゑてやつたら、文鳥も定めし鳴き善からうと思ふ位であつた。

三重吉の小說によると、文鳥は千代々々と鳴くさうである。其の鳴き聲が大分氣に入つたと見えて、三重吉は千代々々を何度となく使つてゐる。或は千代と云ふ女に惚れて居た事があるのかも知れない。然し當人は一向そんな事を云はない。自分も聞いて見ない。只緣側に日が善く當る。さうして文鳥が鳴かない。

そのうち霜が降り出した。自分は毎日伽藍の樣な書齋に、寒い顏を片附けて見たり、取亂して見たり、頰杖を突いたり已めたりして暮してゐた。戶は二重に締め切つた。火鉢に炭ばかり繼いでゐる。文鳥は遂に忘れた。

所へ三重吉が門口から威勢よく這入つて來た。時は宵の口であつた。寒いから火鉢の上へ胸から上を翳して、浮かぬ顏をわざとほてらして居たのが、急に陽氣になつた。三重吉は豐隆

を従へてゐる。豐隆はいゝ迷惑である。二人が籠を一つ宛持つてゐる。其の上に三重吉が大きな箱を兄き分に抱へてゐる。五圓札が文鳥と籠と箱になつたのは此の初冬の晩であつた。

三重吉は大得意である。まあ御覧なさいと云ふ。豐隆其の洋燈をもつと此方へ出せ抔と云ふ。其癖寒いので鼻の頭が少し紫色になつてゐる。

成程立派な籠が出來た。臺が漆で塗つてある。竹は細く削つた上に、色が染けてある。それで三圓だと云ふ。安いなあ豐隆と云つてゐる。豐隆はうん安いと云つてゐる。自分は安いか高いか判然と判らないが、まあ安いなあと云つてゐる。好いのになると二十圓もするさうですと云ふ。二十圓は是で二返目である。二十圓に比べて安いのは無論である。

此の漆はね、先生、日向へ出して曝して置くうちに黑味が取れて段々朱の色が出て來ますから、——さうして此の竹は一返善く煮たんだから大丈夫ですよ抔と、しきりに説明をしてくれる。何が大丈夫なのかねと聞き返すと、まあ鳥を御覧なさい、奇麗でせうと云つてゐる。

成程奇麗だ。次の間へ籠を据ゑて四尺許り此方から見ると少しも動かない。薄暗い中に眞白に見える。籠の中にうづくまつて居なければ鳥とは思へない程白い。何だか寒さうだ。

寒いだらうねと聞いて見ると、其の爲に箱を作つたんだと云ふ。夜になれば此の箱に入れてやるんだと云ふ。籠が二つあるのはどうするんだと聞くと、此粗末な方へ入れて時々行水を使はせるのだと云ふ。是は少し手數が掛るなと思つてゐると、夫から糞をして籠を汚しますから、時々掃除をして御遣りなさいとつけ加へた。三重吉は文鳥の爲には中々強硬である。

それをはい〳〵引受けると、今度は三重吉が袂から粟を一袋出した。是を毎朝食はせなくつちや不可ません。もし餌をかへてやらなければ、餌壺を出して殼丈吹いて御遣なさい。さうしないと文鳥が實のある粟を一々拾ひ出さなくつちやなりませんから。水も毎朝かへて御遣んなさい。先生は寐坊だから丁度好いでせうと大變文鳥に親切を極めてゐる。そこで自分もよろしいと萬事受合つた。所へ豐隆が袂から餌壺と水入を出して行儀よく自分の前に并べた。かう一切萬事を調へて置いて、實行を逼られると、義理にも文鳥の世話をしなければならなくなる。内心では餘程覺束なかつたが、まづやつて見ようと迄は決心した。もし出來なければ家のものが、どうかするだらうと思つた。

やがて三重吉は鳥籠を叮嚀に箱の中へ入れて、縁側へ持ち出して、此所へ置きますからと云つて歸つた。自分は伽藍の樣な書齋の眞中に床を展べて冷かに寐た。夢に文鳥を背負ひ込んだ心持は、少し寒かつたが眠つて見れば不斷の夜の如く穩かである。

翌朝眼が覺めると硝子戸に日が射してゐる。忽ち文鳥に餌をやらなければならないなと思つた。けれども起きるのが退儀であつた。今に遣らう、今に遣らうと考へてゐるうちに、とうとう八時過になつた。仕方がないから顔を洗ふ序を以て、冷たい縁を素足で踏みながら、箱の蓋を取つて鳥籠を明海へ出した。文鳥は眼をぱちつかせてゐる。もつと早く起きたかつたらうと思つたら氣の毒になつた。

文鳥の眼は眞黑である。瞼の周圍に細い淡紅色の絹絲を縫ひ附けた樣な筋が入つてゐる。眼をぱちつかせる度に絹絲が急に寄つて一本になる。と思ふと又丸くなる。籠を箱から出すや否や、文鳥は白い首を一寸傾けながら此の黑い眼を移して始めて自分の顔を見た。さうしてちちと鳴いた。

自分は靜かに鳥籠を箱の上に据ゑた。文鳥は

ぱつと留り木を離れた。さうして又留り木に乗つた。留り木は二本ある。黒味がかつた青軸を程よき距離に橋と渡して横に並べた。其一本を軽く踏まへた足を見ると如何にも華奢に出来てゐる。細長い薄紅の端に真珠を削つた様な爪が着いて、手頃な留り木を旨く抱へ込んでゐる。すると、ひらりと眼先が動いた。文鳥は既に留り木の上で方向を換へてゐた。しきりに首を左右に傾ける。傾けかけた首を不図持ち直して、心持前へ伸したかと思つたら、白い羽根が又ちらりと動いた。文鳥の足は向うの留り木の真中あたりに具合よく落ちた。ちゝと鳴く。さうして遠くから自分の顔を覗き込んだ。

自分は顔を洗ひに風呂場へ行つた。帰りに台所へ廻つて、戸棚を明けて、昨夕三重吉の買つて来て呉れた粟の袋を出して、餌壺の中へ餌を入れて、もう一つには水を一杯入れて、又書斎の縁側へ出た。

三重吉は用意周到な男で、昨夕叮嚀に餌を遣る時の心得を説明して行つた。其の説によると、無暗に籠の戸を明けると文鳥が逃げ出して仕舞ふ。だから右の手で籠の戸を明けながら、左の手を其の下へ宛がつて、外から出口を塞ぐ様にしなくつては危険だ。餌壺を出す時も同じ心得で遣らなければならない。と其手つき迄して見せたが、かう両方の手を使つて、餌壺をどうして籠の中へ入れる事が出来るのか、つい聞いて置かなかつた。

自分は已を得ず餌壺を持つた儘手の甲で籠の戸をそろりと上へ押し上げた。同時に左の手で開いた口をすぐ塞いだ。鳥は一寸振り返つた。さうして、ちゝと鳴いた。自分は出口を塞いだ左の手の所置に窮した。人の隙を窺つて逃げる様な鳥とも見えないので、何となく気の毒になつた。三重吉は悪い事を教へた。

大きな手をそろ〳〵籠の中へ入れた。すると文鳥は急に羽搏を始めた。細く削つた竹の目から暖かいむく毛が、白く飛ぶ程に翼を鳴らした。自分は急に自分の大きな手が厭になつた。粟の壺と水の壺を留り木の間に漸く置くや否や、手を引き込ました。籠の戸ははたりと自然に落ちた。文鳥は留り木の上に戻つた。白い首を半は横に向けて、籠の外にゐる自分を見上げた。それから曲げた首を真直にして足の下にある粟と水を眺めた。自分は食事をしに茶の間へ行つた。

其の頃は日課として小説を書いて居る時分であつた。飯と飯の間は大抵机に向つて筆を握つて居た。静かな時は自分で紙の上を走るペンの音を聞く事が出来た。伽藍の様な書斎へは誰も這入つて来ない習慣であつた。筆の音に淋しさと云ふ意味を感じた朝も昼も晩もあつた。然し時々は此の筆の音がぴたりと已む、又已めねばならぬ、折も大分あつた。其の時は指の股に筆を挟んだ儘手の平へ顎を載せて硝子越に吹き荒れた庭を眺めるのが癖であつた。夫れが済むと載せた顎を一応撮んで見る。夫れでも筆と紙が一所にならない時は、撮んだ顎を二本の指で伸して見る。すると縁側で文鳥が忽ち千代々々と二声鳴いた。

筆を擱いて、そつと出て見ると、文鳥は自分の方を向いた儘、留り木の上から、のめりさうに白い胸を突き出して、高く千代と云つた。三重吉が聞いたら嘸喜ぶだらうと思ふ程な美い声で千代と云つた。三重吉は今に馴れると千代と鳴きますよ、屹度鳴きますよ、と受合つて帰つて行つた。

自分は又籠の傍へしやがんだ。文鳥は膨らんだ首を二三度竪横に向け直した。やがて一団の白い体がぽいと留り木の上を抜け出した。と思ふと奇麗な足の爪が半分程餌壺の縁から後へ出た。小指を掛けてもすぐ引つ繰り返りさうな

餌壺は釣鐘の様に靜かである。流石に文鳥は輕いものだ。何だか淡雪の精の様な氣がした。

文鳥はつと嘴を餌壺の眞中に落した。さうして二三度左右に振つた。奇麗に平して入れてあつた粟がはら／＼と籠の底に零れた。文鳥は嘴を上げた。咽喉の所で微な音がする。又嘴を粟の眞中に落す。又微な音がする。其の音が面白い。靜かに聽いて居ると、丸くて細やかで、しかも非常に速かである。菫程な小さい人が、黄金の槌で瑪瑙の碁石でもつゞけ樣に敲いて居る樣な氣がする。

嘴の色を見ると紫を薄く混ぜた紅の樣である。其の紅が次第に流れて、粟をつゝく口尖の邊は白い。象牙を半透明にした白さである。此の嘴が粟の中へ這入る時は非常に早い。左右に振り蒔く粟の珠も非常に輕さうだ。文鳥は身を逆さまにしない許りに尖つた嘴を黄色い粒の中に刺し込んでは、膨くらんだ首を惜氣もなく右左へ振る。籠の底に飛び散る粟の數は幾粒だか分らない。それでも餌壺丈は寂然として靜かである。重いものである。餌壺の直徑は一寸五分程だと思ふ。

自分はそつと書齋へ歸つて淋しくペンを紙の上に走らしてゐた。縁側では文鳥がちゝと鳴く。折々は千代々々とも鳴く。外では木枯が吹いてゐた。

夕方には文鳥が水を飲む所を見た。細い足を壺の縁へ懸けて、小い嘴に受けた一雫を大事さうに、仰向いて呑み下してゐる。此の分では一杯の水が十日位續くだらうと思つて又書齋へ歸つた。晩には箱へ仕舞つて遣つた。寐る時硝子戸から外を覗いたら、月が出て、霜が降つて居た。文鳥は箱の中でことりともしなかつた。

明る日も亦氣の毒な事に遲く起きて、箱から籠を出してやつたのは、矢つ張り八時過ぎであつた。箱の中ではとうから眼が覺めて居たんだらう。それでも文鳥は一向不平らしい顔もしなかつた。籠が明るい所へ出るや否や、いきなり眼をしばたゝいて、心持首をすくめて、自分の顔を見た。

昔し美しい女を知つて居た。此の女が机に凭れて何か考へてゐる所を、後から、そつと行つて、紫の帶上げの房になつた先を、長く垂らして、首筋の細いあたりを、上から撫で廻したら、女はものう氣に後を向いた。其の時女の眉は心持八の字に寄つて居た。夫で眼尻と口元には笑が萠して居た。同時に恰好の好い頸を肩迄すくめて居た。文鳥が自分を見た時、自分は不圖此の女の事を思ひ出した。此の女は今嫁に行つた。自分が紫の帶上でいたづらをしたのは縁談の極つた二三日後である。

餌壺にはまだ粟が八分通り這入つてゐる。然し殼も大分混つてゐた。水入には粟の殼が一面に浮いて、苛く濁つて居た。易へて遣らなければならない。又大きな手を籠の中へ入れた。非常に要心して入れたにも拘らず、文鳥は白い翼を亂して騷いだ。小い羽根が一本拔けても、自分は文鳥に濟まないと思つた。殼は奇麗に吹いた。吹かれた殼は木枯が何處かへ持つて行つた。水も易へてやつた。水道の水だから大變冷たい。

其の日は一日淋しいペンの音を聞いて暮した。其の間には折々千代々々と云ふ聲も聞えた。文鳥も淋しいから鳴くのではなからうかと考へた。然し縁側へ出て見ると、二本の留り木の間を、彼方へ飛んだり、此方へ飛んだり、絶間なく行きつ戻りつしてゐる。少しも不平らしい樣子はなかつた。

夜は箱へ入れた。明る朝眼が覺めると、外は白い霜だ。文鳥も眼が覺めてゐるだらうが、中中起きる氣にならない。枕元にある新聞を手に取るさへ難儀だ。それでも煙草は一本ふかし

た。此の一本をふかして仕舞つたら、起きて籠から出して遣らうと思ひながら、口から出る煙の行方を見詰めて居た。すると此の煙の中に、首をすくめた、眼を細くした、しかも心持眉を寄せた昔の女の顔が一寸見えた。自分は床の上に起き直つた。寝巻の上へ羽織を引掛けて、すぐ縁側へ出た。さうして箱の蓋をはづして、文鳥を出した。文鳥は箱から出ながら、千代千代と二声鳴いた。

三重吉の説によると、馴れるに従つて、文鳥が人の顔を見て鳴く様になるんださうだ。現に三重吉の飼つて居た文鳥は、三重吉が傍にゐさへすれば、しきりに千代々々と鳴きつゞけたさうだ。のみならず三重吉の指の先から餌を食べるといふ。自分もいつか指の先で餌をやつて見たいと思つた。

次の朝は又怠けた。昔の女の顔もつい思ひ出さなかつた。顔を洗つて、食事を済まして、始めて、気が附いた様に縁側へ出て見ると、いつの間にか籠が箱の上に乗つてゐる。文鳥はもう留り木の上を面白さうにあちら、こちらと飛び移つてゐる。さうして時々は首を伸して籠の外を下の方から覗いてゐる。其様子が中々無邪気である。昔紫の帯上でいたづらをした女は襟の長い、背のすらりとした、一寸首を曲げて人を見る癖があつた。

粟はまだある。水もまだある。文鳥は満足してゐる。自分は粟も水も易へずに書斎へ引込んだ。

昼過又縁側へ出た。食後の運動かた〲、五六間の廻り縁を、あるきながら書見する積であつた。所が出て見ると粟がもう七分がた尽きてゐる。水も全く濁つて仕舞つた。書物を縁側へ抛り出して置いて、急いで餌と水を易へて遣つた。

次の日も亦遅く起きた。しかも顔を洗つて飯を食ふまでは縁側を覗かなかつた。書斎に帰つてから、或は昨日の様に、家人が籠を出して置きはせぬかと、一寸縁へ顔丈出して見たら、果して出してあつた。其の上餌も水も新しくなつて居た。自分はやつと安心して首を書斎に入れた。途端に文鳥は千代々々と鳴いた。それで引込めた首を又出して見た。けれども文鳥は再び鳴かなかつた。けげんな顔をして硝子越に庭の霜を眺めてゐた。自分はとう〱机の前に帰つた。

書斎の中では相変らずペンの音がさら〱する。書きかけた小説は大分はかどつた。指の先が冷たい。今朝埋けた佐倉炭は白くなつて、薩摩五徳に懸けた鉄瓶が殆ど冷めてゐる。炭取は空だ。手を敲いたが一寸台所迄聴えない。立つて戸を明けると、文鳥は例に似ず留り木の上にぢつと留つてゐる。能く見ると足が一本しかない。自分は炭取を縁に置いて、上からこゞんで籠の中を覗き込んだ。いくら見ても足は一本しかない。文鳥は此華奢な一本の細い足に総身を託して黙然として、籠の中に片附いてゐる。

自分は不思議に思つた。文鳥に就て万事を説明した三重吉も此の事丈は抜いたと見える。自分が炭取に炭を入れて帰つた時、文鳥の足はまだ一本であつた。しばらく寒い縁側に立つて眺めて居たが、文鳥は動く気色もない。音を立てないで見詰めて居ると、文鳥は丸い眼を次第に細くし出した。大方眠たいのだらうと思つて、そつと書斎へ這入らうとして、一歩足を動かすや否や、文鳥は又眼を開いた。同時に真白な胸の中から細い足を一本出した。自分は戸を閉て火鉢へ炭をついだ。

小説は次第に忙しくなる。朝は依然として寝坊をする。一度家のものが文鳥の世話をしてくれてから、何だか自分の責任が軽くなつた様な心持がする。家のものが忘れる時は、自分が餌

をやる水をやる。籠の出し入れをする。しない時は、家のものを呼んでさせる事もある。自分は只文鳥の聲を聞く丈が役目の様になつた。
　それでも縁側へ出る時は、必ず籠の前へ立留つて文鳥の様子を見た。大抵は狭い籠を苦にもしないで、二本の留り木を滿足さうに往復して居た。天氣の好い時は薄い日を硝子越に浴びて、しきりに鳴き立てゝゐた。然し三重吉の云つた様に、自分の顔を見てことさらに鳴く氣色は更になかつた。
　自分の指からぢかに餌を食ふ杯と云ふ事は無論なかつた。折々機嫌のいゝ時は麺麭の粉などを人指指の先へつけて竹の間から一寸出して見る事があるが文鳥は決して近づかない。少し無遠慮に突き込んで見ると、文鳥は指の太いのに驚いて白い翼を亂して籠の中を騷ぎ廻るのみであつた。二三度試みた後、自分は氣の毒になつて、此の藝丈は永久に斷念して仕舞つた。今の世にこんな事の出來るものが居るかどうだか甚だ疑はしい。恐らく古代の聖徒の仕事だらう。三重吉は嘘を吐いたに違ない。
　或日の事、書齋で例の如くペンの音を立てゝ侘びしい事を書き連ねてゐると、不圖妙な音が耳に這入つた。縁側でさら〳〵さら〳〵云ふ。女が長い衣の裾を捌いてゐる様にも受取れるが、只の女のそれとしては、餘りに仰山である。雛段をあるく、内裏雛の袴の襞の擦れる音とでも形容したらよからうと思つた。自分は書きかけた小説を餘所にして、ペンを持つた儘縁側へ出て見た。すると文鳥が行水を使つて居た。
　水は丁度易へ立てゞあつた。文鳥は輕い足を水入の眞中に胸毛迄浸して時々は白い翼を左右にひろげながら、心持水入の中にしやがむ様に腹を壓し附けつゝ、總身の毛を一度に振つて居る。さうして水入の縁にひよいと飛び上る。しばらくして又飛び込む。水入の直徑は一寸五分位に過ぎない。飛び込んだ時は尾も餘り、頭も餘り、脊は無論餘る。水に浸かるのは足と胸だけである。夫れでも文鳥は欣然として行水を使つてゐる。
　自分は急に易籠を取つて來た。さうして文鳥を此の方へ移した。それから如露を持つて風呂場へ行つて、水道の水を汲んで、籠の上からさあ〳〵と掛けてやつた。如露の水が盡る頃には白い羽根から落ちる水が珠になつて轉がつた。文鳥は絶えず眼をぱち〳〵させてゐた。
　昔紫の帶上でいたづらをした女が、座敷で仕事をしてゐた時、裏二階から懷中鏡で女の顔へ春の光線を反射させて樂しんだ事がある。女は薄紅くなつた頬を上げて、纖い手を額の前に翳しながら、不思議さうに瞬をした。此の女と此の文鳥とは恐らく同じ心持だらう。
　日數が立つに從つて文鳥は善く囀づる。然し能く忘れられる。或る時は餌壺が粟の殼丈になつてゐた事がある。ある時は籠の底が糞で一杯になつてゐた事がある。ある晩宴會があつて遲く歸つたら、冬の月が硝子越に差し込んで、廣い縁側がほの明るく見えるなかに、鳥籠がしんとして、箱の上に乘つて居た。其の隅に文鳥の體が薄白く浮いた儘留り木の上に、有るか無きかに思はれた。自分は外套の羽根を返して、すぐ鳥籠を箱のなかへ入れてやつた。
　翌日文鳥は例の如く元氣よく囀つてゐた。夫れからは時々寒い夜も箱に仕舞つてやるのを忘れることがあつた。ある晩いつもの通り書齋で專念にペンの音を聞いて居ると、突然縁側の方でがたりと物の覆つた音がした。然し自分は立たなかつた。依然として急ぐ小説を書いてゐた。わざ〳〵立つて行つて、何でもないと忌々しいから、氣にかゝらないではなかつたが、矢

喋り一寸聞耳を立てた儘知らん顔で濟ましてゐた。其の晩寐たのは十二時過ぎであつた。便所に行つた序、氣掛りだから、念の爲一應縁側へ廻つて見ると——

籠は箱の上から落ちて居る。さうして横に倒れてゐる。水入も餌壺も引繰返つてゐる。粟は一面に縁側に散らばつてゐる。留り木は抜け出してゐる。文鳥はしのびやかに鳥籠の桟にかじり附いて居た。自分は明日から誓つて此の縁側に猫を入れまいと決心した。

翌日文鳥は鳴かなかつた。粟を山盛入れてやつた。水を漲る程入れてやつた。文鳥は一本足の儘長らく留り木の上を動かなかつた。午飯を食つてから、三重吉に手紙を書かうと思つて、二三行書き出すと、文鳥がちゝと鳴いた。自分は手紙の筆を留めた。文鳥が又ちゝと鳴いた。出て見たら粟も水も大分減つてゐた。手紙は夫限にして裂いて捨てた。

翌日文鳥が又鳴かなくなつた。留り木を下りて籠の底へ腹を壓し附けて居た。胸の所が少し膨らんで、小さい毛が漣の樣に亂れて見えた。自分は此の朝、三重吉から例の件で某所迄來て呉れと云ふ手紙を受取つた。十時迄にと云ふ依頼であるから、文鳥を其の儘にして置いて出た。三重吉に逢つて見ると例の件が色々長くなつて、一所に午飯を食ふ。一所に晩飯を食ふ。其の上明日の會合迄約束して宅へ歸つた。歸つたのは夜の九時頃である。文鳥の事は悉皆忘れて居た。疲れたから、すぐ床へ這入つて寐て仕舞つた。

翌日眼が覺めるや否や、すぐ例の件を思ひだした。いくら當人が承知だつて、そんな所へ嫁に遣るのは行末よくあるまい。まだ子供だから何處へでも行けと云はれる所へ行く氣になるんだらう。一旦行けば無暗に出られるものぢやない。世の中には滿足しながら不幸に陷つて行く者が澤山ある。抔と考へて楊枝を使つて、朝飯を濟まして又例の件を片附けに出掛けて行つた。

歸つたのは午後三時頃である。玄關へ外套を懸けて廊下傳ひに書齋へ這入る積りで例の縁側へ出て見ると、鳥籠が箱の上に出してあつた。けれども文鳥は籠の底に反つ繰り返つて居た。二本の足を硬く揃へて、胴と直線に伸ばしてゐた。自分は籠の傍に立つて、じつと文鳥を見守つた。黒い眼が眠つてゐる。瞼の色は薄蒼く變つた。

餌壺には粟の殼ばかり溜つてゐる。啄むべきは一粒もない。水入は底の光る程涸れてゐる。西へ廻つた日が硝子戸を洩れて斜めに籠に落ちかゝる。臺に塗つた漆は、三重吉の云つた如く、いつの間にか黒味が脱けて、朱の色が出て來た。

自分は冬の日に色づいた朱の臺を眺めた。空になつた餌壺を眺めた。空しく橋を渡してゐる二本の留り木を眺めた。さうして其の下に横はる硬い文鳥を眺めた。

自分はこゞんで兩手に鳥籠を抱へた。さうして、書齋へ持つて這入つた。十疊の眞中へ鳥籠を卸して、其の前へかしこまつて、籠の戸を開いて、大きな手を入れて、文鳥を握つて見た。柔かい羽根は冷切つてゐる。

拳を籠から引き出して、握つた手を開けると、文鳥は靜に掌の上にある。自分は手を開けたまゝ、しばらく死んだ鳥を見詰めて居た。それから、そつと座布團の上に卸した。さうして、烈しく手を鳴らした。

十六になる小女が、はいと云つて敷居際に手をつかへる。自分はいきなり布團の上にある文鳥を握つて、小女の前へ抛り出した。小女は俯向いて疊を眺めた儘默つてゐる。自分は、餌を遣らないから、とう〳〵死んで仕舞つたと云

ひながら、下女の顔を睥めつけた。下女は夫でも默つてゐる。

自分は机の方へ向き直つた。さうして三重吉へ端書をかいた。「家人が餌を遣らないものだから、文鳥はとう〳〵死んで仕舞つた。たのみもせぬものを籠へ入れて、しかも餌を遣る義務さへ盡さないのは殘酷の至りだ」と云ふ文句であつた。

自分は、之れを投函して來い、さうして其の鳥をそつちへ持つて行けと下女に云つた。下女は、どこへ持つて參りますかと聞き返した。どこへでも勝手に持つて行けと怒鳴りつけたら、驚いて臺所の方へ持つて行つた。

しばらくすると裏庭で、子供が文鳥を埋るんだ〳〵と騷いでゐる。庭掃除に頼んだ植木屋が、御孃さん、此處いらが好いでせうと云つてゐる。自分は進まぬながら、書齋でペンを動かしてゐた。

翌日は何だか頭が重いので、十時頃になつて漸く起きた。顏を洗ひながら裏庭を見ると、昨日植木屋の聲のしたあたりに、小さい公札が、蒼い木賊の一株と竝んで立つてゐる。高さは木賊よりもずつと低い。庭下駄を穿いて、日影の霜を踏み碎いて、近附いて見ると、公札の表には、此の土手登るべからずとあつた。筆子の手跡である。

午後三重吉から返事が來た。文鳥は可愛想な事を致しましたとある許りで家人が惡いとも殘酷だとも一向書いてなかつた。

永日小品抄

元日

雑煮を食つて、書齋に引き取ると、しばらくして三四人來た。いづれも若い男である。其内の一人がフロックを着てゐる。着なれない所爲か、メルトンに對して妙に遠慮する傾きがある。あとのものは皆和服で、かつ不斷着の儘だから頓と正月らしくない。此連中がフロックを眺めて、やあ——やあと一ツづゝ云つた。みんな驚いた證據である。自分も一番あとで、やあと云つた。

フロックは白い手巾を出して、用もない顔を拭いた。さうして、頻に屠蘇を飲んだ。ほかの連中も大いに膳のものを突ついてゐる。所へ虚子が車で來た。是は黒い羽織に黒い紋付を着て、極めて舊式に極つてゐる。あなたは黒紋付を持つてゐますが、矢張能をやるから其必要があるんでせうと聞いたら、虚子が、えゝ左うですと答へた。さうして、一つ謠ひませんかと云ひ出した。自分は謠つても宜う御座んすと應じた。

それから二人して東北と云ふものを謠つた。餘程以前に習つた丈で、殆んど復習と云ふ事をやらないから、所々甚だ曖昧である。其上、我ながら覺束ない聲が出た。漸く謠つて仕舞ふと、聞いてゐた若い連中が、申し合せた樣に自分を不味いと云ひ出した。中にもフロックは、あなたの聲はひよろ／＼してゐると云つた。此連中は元來謠のうの字も心得ないもの共である。だから虚子と自分の優劣はとても分らないだらうと思つてゐた。然し、批評をされて見ると、素人でも理の當然な所だから已を得ない。馬鹿を云へといふ勇氣も出なかつた。

すると虚子が近來鼓を習つてゐるといふ話しを始めた。謠のうの字も知らない連中が、一つ打つて御覽なさい、是非御聞かせなさいと所望してゐる。虚子は自分に、ぢや、あなた謠つて下さいと依賴した。是は囃の何物たるを知らない自分に取つては、迷惑でもあつたが、又嶄新といふ興味もあつた。謠ひませうと引き受けた。虚子は車夫を走らして鼓を取り寄せた。鼓がくると、臺所から七輪を持つて來さして、かん／＼いふ炭火の上で鼓の皮を焙り始めた。みんな驚いて見てゐる。自分も此猛烈な焙りかたには驚いた。大丈夫ですかと尋ねたら、ええ大丈夫ですと答へながら、指の先で張切つた皮の上をかんと彈いた。一寸好い音がした。もう宜いでせうと、七輪から卸して、鼓の緒を締めにかゝつた。紋服の男が、赤い緒をいぢくつてゐる所が何となく品が好い。今度はみんな感心して見てゐる。

虚子はやがて羽織を脱いだ。さうして鼓を抱い込んだ。自分は少し待つて呉れと賴んだ。第一彼が何處いらで鼓を打つか見當が付かないから一寸打ち合せをしたい。虚子は、こゝで掛聲をいくつ掛けて、こゝで鼓をどう打つから、御遣りなさいと懇に説明して呉れた。自分にはとても呑み込めない。けれども合點の行く迄研究してゐれば、二三時間はかゝる。已を得ず、好い加減に領承した。そこで羽衣の曲を謠ひ出した。春霞たなびきにけりと半行程來るうちに、どうも出が好くなかつたと後悔し始めた。甚だ無勢力である。けれども途中から急に振るひ出しては、總體の調子が崩れるから、

萎靡因循の儘、少し押して行くと、虚子が突然に大きな掛聲をかけて、鼓をかんと一つ打つた。

自分は虚子が斯う猛烈に來やうとは夢にも豫期してゐなかつた。元來が優美な悠長なものと許り考へてゐた掛聲は、丸で眞劍勝負のそれの樣に自分の鼓膜を動かした。自分の謡は此掛聲で二三度波を打つた。それが漸く靜まりかけた時に、虚子が又腹一杯に横合から威嚇した。自分の聲は威嚇される度によろ／＼する。さうして小さくなる。しばらくすると聞いてゐるものがくす／＼笑ひ出した。自分も内心から馬鹿々々しくなつた。其時フロックが眞先に立つて、どつと吹き出した。自分も調子につれて、一所に吹き出した。

それから散々な批評を受けた。中にもフロックのは尤も皮肉であつた。虚子は微笑しながら、仕方なしに自分の鼓に、自分の謡を合せて、目出度謡ひ納めた。やがて、また廻らなければならない所があると云つて車に乘つて歸つて行つた。あとから又色々若いものに冷かされた。細君迄一所になつて夫を貶した末、高濱さんが鼓を御打ちなさる時、襦袢の袖がぴらぴら見えたが、大變好い色だつたと賞めてゐる。フロックは忽ち贊成した。自分は虚子の襦袢の袖の色も、袖の色のぴら／＼する所も決して好いとは思はない。

泥棒

寝ようと思つて次の間へ出ると、炬燵の臭がぷんとした。厠の歸りに、火が強過ぎる樣だから、氣を付けなくては不可ないと妻に注意して、自分の部屋へ引取つた。もう十一時を過ぎてゐる。床の中の夢は常の如く安らかであつた。寒い割に風も吹かず、半鐘の音も耳に應へなかつた。熟睡が時の世界を盛り潰した樣に、正體を失つた。

すると忽然として、女の泣聲で眼が覺めた。聞けばもよと云ふ下女の聲である。此の下女は驚いて狼狽ると何時でも泣聲を出す。此の間家の赤ん坊を湯に入れた時、赤ん坊が湯氣に上つて、引き付けたといつて五分許泣聲を出した。自分が此下女の異樣な聲を聞いたのは、それが始めてである。啜り上げる樣にして早口に物を云ふ。訴へる樣な、口説く樣な、詫を入れる樣な、情人の死を悲しむ樣な　到底普通の驚愕の場合に出る、鋭くつて短い感投詞の調子ではない。

自分は今云ふ通り此の異樣の聲で、眼が覺めた。聲は慥かに妻の寝てゐる、次の部屋から出る。同時に襖を洩れて赤い火が颯と暗い書齋に射した。今開ける瞼の裏に、此の光が届くや否や自分は火事だと合點して飛び起きた。さうして、突然隔ての唐紙をがらりと開けた。

其の時自分は顛覆返つた炬燵を想像してゐた。焦げた蒲團を想像してゐた。漲ぎる烟と、燃える疊とを想像してゐた。所が開けて見ると、洋燈は例の如く點つてゐる。妻と子供は常の通り寝てゐる。炬燵は宵の位地にちやんとある。凡てが、寝る前に見た時と同じである。平和である。暖かである。たゞ下女丈が泣いて居る。

下女は妻の蒲團の裾を抑へる樣にして早口に物を云ふ。妻は眼を覺まして、ぱち／＼させる許りで別に起きる樣子もない。自分は何事が起つたのか殆ど判じかねて、敷居際に突立つた儘、ぼんやり部屋の中を見廻した。途端に下女の泣聲のうちに、泥棒といふ二字が出た。それが自分の耳に這入るや否や、凡てが解決された樣に自分は忽ち妻の部屋を大股に横切つて、次の間に飛び出しながら、何だ！　と怒鳴りつけた。

けれども覚め出した次の部屋は眞暗である。續く臺所の雨戸が一枚外れて、美しい月の光が部屋の入口迄射し込んでゐる。自分は眞夜中に人の住居の奥を照す月影を見て、おのづから寒いと感じた。素足で板敷の間へ出て臺所の流元迄來て見ると、四邊は寂としてゐる。表を覗くと月許りである。自分は、戸口から一歩も外へ出る氣にならなかつた。

引き返して、妻の所へ來て、泥棒は逃げた、安心しろ、何も竊られやしない、と云つた。妻は此の時漸く起き上つてゐた。何も云はずに洋燈を持つて暗い部屋迄出て來て、箪笥の前に翳した。觀音開きが取り外されてゐる。抽斗が明けた儘になつてゐる。妻は自分の顔を見て、矢つ張り竊られたんですと云つた。自分も漸く泥棒が竊つた後で逃げたんだと氣が付いた。何だか急に馬鹿々々しくなつた。片方を見ると、泣いて起しに來た下女の蒲團が敷いてある。其の枕元にもう一つ箪笥がある。其の箪笥の上に又用箪笥が乘つてゐる。暮の事なので醫者の薬禮其の他が此内に這入つてゐるのださうだ。妻に調べさせると此方の方は元の通りだと云ふ。下女が泣いて縁側の方から飛び出したので、泥棒も已を得ず仕事の中途で逃げたのかも知れない。

其の内、外の部屋に寢て居たものもみんな起きて來た。さうしてみんな色々な事を云ふ。もう少し前に小用に起きたのにとか、今夜は寢つかれないで、二時頃迄は眼が冴えてゐたのにとか、悉く殘念さうである。そのなかで、十になる長女は、泥棒が臺所から這入つたのも、泥棒がみし／＼縁側を歩いたのも、すつかり知つてゐると云つた。あらまあとお房さんが驚いてゐる。お房さんは十八で、長女と同じ部屋に寢る親類の娘である。自分は又床へ這入つて寢た。

明くる日は此騒動で、例よりは少し遲く起きた。顔を洗つて、朝食を遣つてゐると、臺所で下女が泥棒の足痕を見付けたとか、見付けないとか騒いでゐる。面倒だから書齋へ引き取つた。引き取つて十分も經つたかと思ふと、玄關で頼むと云ふ聲がした。勇ましい聲である。臺所の方へ通じない樣だから、自分で取次に出て見たら、巡査が格子の前に立つてゐた。泥棒が這入つたさうですねと笑つてゐる。戸締りは好くしてあつたのですかと聞くから、いや、何うも餘り好くありませんと答へた。ぢや仕方がない、締りが惡いと何處からでも這入りますよ、一枚々々雨戸へ釘を差さなくつちや不可ませんと注意する。自分ははあ／＼と返事をして置いた。此の巡査に遇つてから、惡いものは、泥棒ぢやなくつて、不取締な主人である樣な心持になつた。

巡査は臺所へ廻つた。其處で妻を捉まへて、紛失した物を手帳に書き付けて居る。繻珍の丸帶が一本ですね、——丸帶と云ふのは何ですか、丸帶と書いて置けば解るですか、さう、それでは繻珍の丸帶が一本と、夫から……

下女がにや／＼笑つてゐる。此の巡査は丸帶も腹合せも一向知らない。頗る單簡な面白い巡査である。やがて紛失の目録を十點ばかり書き上げて其の下に價格を記入して、すると〆て百五十圓になりますねと念を押して歸つて行つた。

自分は此の時始めて、何を竊られたかを明瞭に知つた。失くなつたものは十點、悉く帶である。昨夜這入つたのは帶泥棒であつた。御正月を眼前に控へた妻は異な顔をしてゐる。子供が三箇日にも着物を着換へる事が出來ないのださうだ。仕方がない。

晝過には刑事が來た。座敷へ上つて色々見てゐる。桶の中に蠟燭でも立てて仕事をしやしな

いかと云つて、臺所の小桶迄檢べてゐた。まあ御茶でも御上がんなさいと云つて、日當りの好い茶の間へ坐らせて話をした。

泥棒は大抵下谷、淺草邊から電車でやつて來て、明くる日の朝又電車で歸るのださうだ。大抵は捉まらないものださうだ。捉まへると刑事の方が損になるものださうだ。泥棒を電車に乘せると電車賃が損になる。裁判に出ると、辨當代が損になる。機密費は警視廳が半分取つて仕舞ふのださうだ。餘りを各警察へ割り振るのださうだ。牛込には刑事がたつた三四人しかゐないのださうだ　警察の力なら大抵の事は出來る者と信じてゐた自分は、甚だ心細い氣がした。話をして聞かせる刑事も心細い顏をしてゐた。

出入のものを呼んで戸締りを直さうと思つたら生憎、暮で用が立て込んでゐて來られない。其うちに夜になつた。仕方がないから、元の通りにして置いて寢る。みんな氣味が惡さうである。自分も決して好い心持ではない。泥棒は各自勝手に取締るべきものであると警察から宣告されたと一般だからである。

夫でも昨日の今日だから、まあ大丈夫だらうと、氣を樂に持つて枕に就いた。すると又夜中に妻から起された。さつきから、臺所の方ががたがた云つてゐる。氣味がわるいから起きて見て下さいと云ふ。成程がた／＼いふ。妻はもう泥棒が這入つた樣な顏をしてゐる。

自分はそつと床を出た。忍び足に妻の部屋を横切つて、隔ての襖の傍迄くると、次の間では下女が鼾をかいてゐる。自分は出來る丈靜かに襖を開た。さうして、眞暗な部屋の中に一人立つた。ごとり／＼と云ふ音がする。慥かに臺所の入口である。暗いなかを影の動く樣に三歩程音のする方へ近くと、もう部屋の出口である。障子が立つてゐる。そとはすぐ板敷になる。自分は障子に身を寄せて、暗がりで耳を立てた。やがて、ごとりと云つた。しばらくして又ごとりと云つた。自分は此の怪しい音を約四五遍聞いた。さうして、これは板敷の左にある、戸棚の奥から出るに違ないといふ事を慥めた。忽ち普通の步調と、尋常の所作をして、妻の部屋へ歸つて來た。鼠が何か嚙つてゐるんだ、安心しろと云ふと、妻はさうですかと難有さうな返事をした。夫れからは二人とも落付いて寢て仕舞つた。

朝になつて又顏を洗つて、茶の間へ來ると、妻が鼠の嚙つた鰹節を、膳の前へ出して、昨夜のは是れですよと說明した。自分ははあ成程と、一晚中無慘に遣られた鰹節を眺めて居た。すると妻は、あなた序に鼠を逐つて、鰹節を仕舞つて下されば好いのにと少し不平がましく云つた。自分もさうすれば好かつたと此の時始めて氣が付いた。

火鉢

眼が覺めたら、昨夜抱いて寢た懷爐が腹の上で冷たくなつてゐた。硝子戸越に、廂の外を眺めると、重い空が幅三尺程鉛の樣に見えた。胃の痛みは大分除れたらしい。思ひ切つて、床の上に起き上がると、豫想よりも寒い。窓の下には昨日の雪が其の儘である。

風呂場は氷でかち／＼光つてゐる。水道は凍り着いて、栓が利かない。漸くの事で溫水摩擦を濟まして、茶の間で紅茶を茶碗に移してゐると、二つになる男の子が例の通り泣き出した。この子は一昨日も一日泣いてゐた。昨日も泣き續けに泣いた。妻にどうかしたのかと聞くと、どうもしたのぢやない、寒いからだと云ふ。仕方がない。成程泣き方がぐづ／＼で痛くも苦しくもない樣である。けれども泣く位だから、ど

こか不安な所があるのだらう。聞いてゐると、仕舞には此方が不安になつて來る。時によると小惡らしくなる。大きな聲で叱り付け度い事もあるが、何しろ、叱るには餘り小さ過ぎると思つて、つい我慢をする。一昨日も昨日も左うであつたが、今日も亦一日左うなのかと思ふと、朝から心持が好くない。胃が惡いので此の頃は朝飯を食はぬ掟にしてあるから、紅茶茶碗を持つた儘、書齋へ退いた。

火鉢に手を翳して、少し暖たまつてゐると、子供は向ふの方でまだ泣いてゐる。其うち掌丈は烟が出る程熱くなつた。けれども、背中から肩へ掛けては無暗に寒い。殊に足の先は冷え切つて痛い位である。だから仕方なしに凝としてゐた。少しでも手を動かすと、手が何處か冷たい所に觸れる。それが刺にでも觸つた程神經に應へる。首をぐるりと回してさへ、頸の付根が着物の襟にひやりと滑るのが堪へ難い感じである。自分は寒さの壓迫を四方から受けて、十疊の書齋の眞中に竦んでゐた。此の書齋は板の間である。椅子を用ひべき所を、絨氈を敷いて、普通の疊の如くに想像して坐つてゐる。所が敷物が狹いので、四方とも二尺がたは、つるつるした板の間が剝き出しに光つてゐる。凝として此の板の間を眺めて、竦んでゐると、男の子がまだ泣いてゐる。とても仕事をする勇氣が出ない。

所へ妻が一寸時計を拜借と這入つて來て、又雪になりましたと云ふ。見ると、細かいのが何時の間にか、降り出した。風もない濁つた空の途中から、靜かに、急がずに、冷刻に、落ちて來る。

ーおい、去年、子供の病氣で、煖爐を焚いた時には炭代が幾何要つたかなー

ーあの時は月末に卅八圓拂ひましたー

自分は妻の答を聞いて、座敷煖爐を斷念した。座敷煖爐は裏の物置に轉がつてゐるのである。

ーおい、もう少し子供を靜かに出來ないかなー

妻は已を得ないと云ふ樣な顏をした。さうして、云つた。

ーお政さんが御腹が痛いつて、大分苦しさうですから、林さんでも賴んで見て貰ひませうかー

お政さんが二三日寢てゐる事は知つてゐたが、夫程惡いとは思はなかつた。早く醫者を呼んだら可からうと、此方から促す樣に注意すると、妻は左うしませうと答へて、時計を持つた儘出て行つた。襖を閉てるとき、どうも此の部屋の寒い事と云つた。

まだ、かぢかんで仕事をする氣にならない。實を云ふと仕事は山程ある。自分の原稿を一回分書かなければならない。ある未知の青年から賴まれた短篇小說を二三篇讀んで置く義務がある。ある雜誌へ、ある人の作を手紙を付けて紹介する約束がある。此の二三箇月中に讀む筈で讀めなかつた書籍は机の横に堆かく積んである。此の一週間程は仕事をしようと思つて机に向ふと人が來る。さうして、皆何か相談を持ち込んでくる。その上に胃が痛む。其の點から云ふと今日は幸ひである。けれども、いくら考へても、寒くて億劫で、火鉢から手を離す事が出來ない。

すると玄關に車を横付けにしたものがある。下女が來て長澤さんが御出になりましたと云ふ。自分は火鉢の傍に竦んだ儘、上眼遣をして、這入つて來る長澤を見上げながら、寒くて動けないよと云つた。長澤は懷中から手紙を出して、此の十五日は舊の正月だから、是非都合して呉れとか何とか云ふ手紙を讀んだ。相變らず金の相談である。長澤は十二時過に歸つた。けれども、まだ寒くて仕樣がない。いつそ湯にでも行つて、元氣を付けようと思つて、手拭を提げて玄關へ出掛かると、御免下さいと云ふ吉田に

出つ食はした。座敷へ上げて、色々身の上話を聞いてゐると、吉田はほろ／＼涙を流して泣き出した。其内奥の方では醫者が來て何だかごたごたしてゐる。吉田が漸く歸ると、子供が又泣き出した。とう／＼湯に行つた。

湯から上つたら始めて暖つたかになつた。晴々して、家へ歸つて書齋に這入ると、洋燈が點いて窓掛が下りてゐる。火鉢には新しい切炭が活けてある。自分は座布團の上にどつかりと坐つた。すると、妻が奥から寒いでせうと云つて蕎麥湯を持つて來て吳れた。お政さんの容體を聞くと、ことによると盲腸炎になるかも知れないんださうですよと云ふ。自分は蕎麥湯を手に受けて、もし惡い樣だつたら、病院に入れてやるが可いと答へた。妻はそれが宜いでせうと茶の間へ引き取つた。

妻が出て行つたらあとが急に靜かになつた。全くの雪の夜である。泣く子は幸ひに寢たらしい。熱い蕎麥湯を啜りながら、あかるい洋燈の下で、繼ぎ立ての切炭のぱちぱち鳴る音に耳を傾けてゐると、赤い火氣が、圍はれた灰の中で仄に搖れてゐる。時々薄青い焰が炭の股から出る。自分は此の火の色に、始めて一日の暖か味を覺えた。さうして次第に白くなる灰の表を五分程見守つてゐた。

猫の墓

早稻田へ移つてから、猫が段々痩せて來た。一向に子供と遊ぶ氣色がない。日が當ると緣側に寢てゐる。前足を揃へた上に、四角な顎を載せて、じつと庭の植込を眺めた儘、いつ迄も動く樣子が見えない。子供がいくら其の傍で騷いでも、知らぬ顏をしてゐる。子供の方でも、初めから相手にしなくなつた。此猫はとても遊び仲間に出來ないと云はん許りに、舊友を他人扱ひにしてゐる。子供のみではない、下女はたゞ三度の食を、臺所の隅に置いてやる丈で其の外には、殆ど構ひ附けなかつた。しかも其の食は大抵近所にゐる大きな三毛猫が來て食つて仕舞つた。猫は別に怒る樣子もなかつた。喧嘩をする所を見た試しもない。たゞ、じつとして寢てゐた。然し其の寢方に何所となく餘裕がない。伸んびりと樂々と身を橫に、日光を領してゐるのと違つて、動くべきせきがないために——是れでは、まだ形容し足りない。懶さの度をある所迄通り越して、動かなければ淋しいが、動くと猶淋しいので、我慢して、じつと辛抱してゐる樣に見えた。其の眼附は、何時でも庭の植込を見てゐるが、彼れは恐らく木の葉も、幹の形も意識してゐなかつたのだらう。青味がゝつた黃色い瞳子を、ぼんやりと一所に落ち附けてゐるのみである。彼れが家の小供から存在を認められぬ樣に、自分でも、世の中の存在を判然と認めてゐなかつたらしい。

夫れでも時々は用があると見えて、外へ出て行く事がある。すると何時でも近所の三毛猫から追懸けられる。さうして、怖いものだから、緣側を飛び上がつて、立て切つてある障子を突き破つて、圍爐裏の傍迄逃げ込んで來る。家のものが、彼れの存在に氣が附くのは此の時丈である。彼れも此の時に限つて、自分が生きてゐる事實を、滿足に自覺するのだらう。

是れが度重なるにつれて、猫の長い尻尾の毛が段々拔けて來た。始めは所々がぽく／＼穴の樣に落ち込んで見えたが、後には赤肌に脫け廣がつて、見るも氣の毒な程にだらりと垂れてゐた。彼れは萬事に疲れ果てた體軀を壓し曲げて、しきりに痛い局部を舐め出した。

おい猫がどうかしたやうだなと云ふと、さうですね、矢っ張り年を取つた所爲でせうと、妻は至極冷淡である。自分も其の儘にして放つて

置いた。すると、しばらくしてから、今度は三度のものを時々吐く樣になつた。咽喉の所に大きな波を打たして、嚔とも、しやくりとも附かない苦しさうな音をさせる。苦しさうだけれども、已を得ないから、氣が附くと表へ追ひ出す。でなければ疊の上でも、布團の上でも容赦なく汚す。來客の用意に拵へた八反の座布團は、大方彼れの爲に汚されて仕舞つた。

―どうも仕樣がないな。腸胃が惡いんだらう、寶丹でも水に溶いて飲まして遣れ―

妻は何とも云はなかつた。二三日してから、寶丹を飲ましたかと聞いたら、飲ましても駄目です、口を開きませんといふ答をした後で、魚の骨を食べさせると吐くんですと說明するから、ぢや食はせんが好いぢやないかと、少し嶮どんに叱りながら書見をしてゐた。

猫は吐氣がなくなりさへすれば、依然として、大人しく寢てゐる。此の頃では、じつと身を竦める樣にして、自分の身を支へる緣側丈が便であるといふ風に、如何にも切り詰めた蹲踞まりかたをする。眼附も少し變つて來た。始めは近い視線に、遠くのものが映る如く、悄然たるうちに、どこか落付が有つたが、それが次第に怪しく動いて來た。けれども眼の色は段々沈んで行く。日が落ちて微かな稻妻があらはれる樣な氣がした。けれども放つて置いた。妻も氣にも掛けなかつたらしい。小供は無論猫のゐる事さへ忘れてゐる。

ある晚、彼は子供の寢る夜具の裾に腹這になつてゐたが、やがて、自分の捕つた魚を取り上げられる時に出す樣な唸聲を擧げた。此の時變だなと氣が附いたのは自分丈である。子供はよく寢てゐる。妻は針仕事に餘念がなかつた。しばらくすると猫が又唸つた。妻は漸く針の手を已めた。自分は、どうしたんだ、夜中に子供の頭でも嚙られちや大變だと云つた。まさかと妻は又襦袢の袖を縫ひ出した。猫は折々唸つてゐた。

明くる日は圍爐裏の緣に乘つたなり、一日唸つてゐた。茶を注いだり、藥罐を取つたりするのが氣味が惡い樣であつた。が、夜になると猫の事は自分も妻も丸で忘れて仕舞つた。猫の死んだのは實に其の晚である。朝になつて、下女が裏の物置に薪を出しに行つた時は、もう硬くなつて、古い竈の上に倒れて居た。

妻はわざ〳〵其の死態を見に行つた。夫れから今迄の冷淡に引き更へて急に騷ぎ出した。出入の車夫を賴んで、四角な墓標を買つて來て、何か書いて遣つて下さいと云ふ。自分は表に猫の墓と書いて、裏に此の下に稻妻起る宵あらんと認めた。車夫は此の儘、埋めても好いんですかと聞いてゐる。まさか火葬にも出來ないぢやないかと下女が冷かした。

子供も急に猫を可愛がり出した。墓標の左右に硝子の罎を二つ活けて、萩の花を澤山插した。茶碗に水を汲んで、墓の前に置いた。花も水も毎日取り替へられた。三日目の夕方に四つになる女の子が――自分は此の時書齋の窓から見てゐた。――たつた一人墓の前へ來て、しばらく白木の棒を見てゐたが、やがて手に持つた、おもちやの杓子を卸して、猫に供へた茶碗の水をしやくつて飲んだ。それも一度ではない。萩の花の落ちこぼれた水の瀝りは、靜かな夕暮の中に、幾度か愛子の小さい咽喉を潤ほした。

猫の命日には、妻が屹度一切れの鮭と、鰹節を掛けた一杯の飯を墓の前に供へる。今でも忘れた事がない。たゞ此の頃では、庭迄持つて出ずに、大抵は茶の間の簞笥の上へ載せて置くやうである。

行列

不圖机から眼を上げて、入口の方を見ると、

書齋の戸が何時の間にか、半分明いて、廣い廊下が二尺許見える。廊下の盡きる所は唐めいた手摺に遮られて、上には硝子戸が立て切つてある。青い空から、まともに落ちて來る日が、軒端を斜に、硝子を通して、縁側の手前丈を明るく色づけて、書齋の戸口迄ぱつと暖かに射した。しばらく日の照る所を見詰めてゐると、眼の底に陽炎が湧いた樣に、春の思ひが饒かになる。

其の時此の二尺あまりの隙間に、空を踏んで、手摺の高さ程のものがあらはれた。赤に白く唐草を浮き織りにした絹紐を輪に結んで、額から髮の上へすぽりと嵌めた間に、海棠と思はれる花を青い葉ごと、ぐるりと插した。黑髮の地に薄紅の莟が大きな雫の如くはつきり見えた。割合に詰つた顎の眞下から、一襲になつて、たゞ一枚の紫が縁迄ふは／＼と動いてゐる。袖も手も足も見えない。影は廊下に落ちた日を、するりと拔ける樣に通つた。後から、

――今度は少し低い。眞紅の厚い織物を腦天から肩先迄被つて、餘る背中に筋違の笹の葉の模樣を背負つてゐる。胸中にたゞ一葉、消炭色の中に取り殘された緑が見える。夫程笹の模樣は大きかつた。廊下に置く足よりも大きかつた。其の足が赤くちら／＼と三足程動いたら、低いものは、戸口の幅を、音なく行き過ぎた。

第三の頭巾は白と藍の辨慶の格子である。眉の下にあらはれた横顏は丸く膨らんでゐる。其の片頰の眞中が林檎の熟した程に濃い。尻丈見える茶褐色の眉毛の下が急に落ち込んで、思はざる邊から丸い鼻が膨れた頰を少し乘り越して、先丈顏の外へ出た。顏から下は一面に黄色い縞で包まれてゐる。長い袖を三寸餘も縁に牽いた。是れは頭より高い胡麻竹の杖を突いて來た。杖の先には光を帶びた鳥の羽をふさふさと着けて、照る日に輝かした。縁に牽く黄色い縞の、袖らしい裏が、銀の樣に光つたと思つたら是も行き過ぎた。

すると、すぐ後から眞白な顏があらはれた。額から始まつて、平たい頰を塗つて、顎から耳の附根迄遡ぼつて、壁の樣に靜かである。中に眸丈が活きてゐた。脣は紅の色を重ねて、青く光線を反射した。胸のあたりは鳩の色の樣に見えて、下は裾迄ぱつと視線を亂してゐる中に、小さなヴイオリンを抱へて、長い弓を嚴かに擔いでゐる。二足で通り過ぎる後には、背中へ黑い繻子の四角な片を中てゝ、其の眞中にある金絲の刺繡が、一度に日に浮いた。

最後に出たものは、全く小さい。手摺の下から轉げ落ちさうである。けれども大きな顏をしてゐる。其中でも頭は殊に大きい。それへ五色の冠を戴いてあらはれた。冠の中央にあるぽつちが高く聳えてゐる樣に思はれる。身には井の字の模樣のある筒袖に、藤鼠の天鵞絨の房の下つたものを、背から腰の下迄三角に垂れて、赤い足袋を踏んでゐた。手に持つた朝鮮の團扇が身體の半分程ある。團扇には赤と青と黄で巴を漆で描いた。

行列は靜かに自分の前を過ぎた。開け放しになつた戸が、空しい日の光を、書齋の入口に送つて、縁側に幅四尺の寂しさを感じた時、向うの隅で急にヴイオリンを擦る音がした。ついで、小さい咽喉が寄り合つて、どつと笑ふ聲がした。

宅の子供は毎日母の羽織や風呂敷を出して、こんな遊戯をしてゐる。

下宿

始めて下宿をしたのは北の高臺である。赤煉瓦の小じんまりした二階建が氣に入つたので、

割合に高い一週二磅の宿料を拂つて、裏の部屋を一間借り受けた。其の時表を專領してゐるK氏は目下蘇格蘭巡遊中で暫くは歸らないのだと主婦の說明があつた。

主婦と云ふのは、眼の凹んだ、鼻のしやくれた、顎と頰の尖つた、鋭い顏の女で、一寸見ると、年恰好の判斷が出來ない程、女性を超越して居る。疳、僻み、意地、利かぬ氣、疑惑、あらゆる弱點が、穩かな眼鼻を散々に弄んだ結果、かう拗ねくれた人相になつたのではあるまいかと自分に考へた。

主婦は北の國に似合はしからぬ黑い髮と黑い眸を有つてゐた。けれども言語は普通の英吉利人と少しも違つた所がない。引き移つた當日、階下から茶の案內があつたので、降りて行つて見ると、家族は誰もゐない。北向の小さい食堂に、自分は主婦とたつた二人差向ひに坐つた。日の當つた事のない樣に薄暗い部屋を見廻すと、マントルピースの上に淋しい水仙が活けてあつた。主婦は自分に茶だの燒麪麭を勸めながら、四方山の話をした。其の時何かの拍子で、生れ故鄉は英吉利ではない、佛蘭西であるといふ事を打ち明けた。さうして黑い眼を動かして、後の硝子壜に插してある水仙を顧りみながら、英吉利は曇つてゐて、寒くて不可ないと云つた。花でも此の通り奇麗でないと敎へた積りなのだらう。

自分は肚の中で此の水仙の乏しく咲いた模樣と、此の女のひすばつた頰の中を流れてゐる、色の褪めた血の瀨とを比較して、遠い佛蘭西で見るべき暖かな夢を想像した。主婦の黑い髮や黑い眼の裏には、幾年の昔に消えた春の匂の空しき歷史があるのだらう。あなたは佛蘭西語を話しますかと聞いた。いゝやと答へようとする舌先を遮つて、二三句續け樣に、滑らかな南方の言葉を使つた。斯ういふ骨の勝つた咽喉から、どうして出るだらうと思ふ位美しいアクセントであつた。

其の夕、晩餐の時には、頭の禿げた鬚の白い老人が卓に着いた。是が私の親父ですと主婦から紹介されたので始めて主人は年寄であつたんだと氣が附いた。此の主人は妙な言葉遣をする。一寸聞いても決して英人ではない。成程親子して、海峽を渡つて、倫敦へ落ち附いたものだなと合點した。すると老人が私は獨逸人であると、尋ねもせぬのに向ふから名乘つて出た。自分は少し見當が外れたので、さうですかと云つた限りであつた。

部屋へ歸つて、書物を讀んでゐると、妙に下の親子が氣に懸つて堪らない。あの爺さんは骨張つた娘と較べて何處も似た所がない。顏中は腫れ上つた樣に膨れてゐる眞中に、ずんぐりした肉の多い鼻が寢轉んで、細い眼が二つ着いてゐる。南亞の大統領にクルーゲルと云ふのがあつた。あれによく似てゐる。すつきりと心持よく此方の眼に映る顏ではない。其の上娘に對しての物の云ひ方が和氣を缺いてゐる。齒が利かなくつて、もご〳〵してゐる癖に何となく調子の荒い所が見える。娘も阿爺に對するときは、險相な顏がいとど險相になる樣に見える。どうしても普通の親子ではない。自分は斯う考へて寢た。

翌日朝飯を食ひに下りると、昨夕の親子の外に、又一人家族が殖えてゐる。新しく食卓に連なつた人は、血色の好い、愛嬌のある、四十恰好の男である。自分は食堂の入口で此の男の顏を見た時、始めて、生氣のある人間社會に住んでゐる樣な心持がした。My brother と主婦が其の男を自分に紹介した。矢つ張り亭主では無かつたのである。然し兄弟とはどうしても受取れない位人相が違つてゐた。

其の日は中食を外でして、三時過ぎに歸つて、

自分の部屋へ這入ると間もなく、茶を飲みに來いと云つて呼びにきた。今日も曇つてゐる。薄暗い食堂の戸を開けると、主婦がたつた一人煖爐の横に茶器を控へて坐つてゐた。石炭を燃して呉れたので、幾分か陽氣な感じがした。燃えついた許りの焔に照らされた主婦の顔を見ると、うすく火熱つた上に、心持御白粉を塗けてゐる。自分は部屋の入り口で化粧の淋しみと云ふ事を、しみ〴〵と悟つた。主婦は自分の印象を見拔いた樣な眼遣ひをした。自分が主婦から一家の事情を聞いたのは此の時である。

主婦の母は、二十五年の昔、ある佛蘭西人に嫁いで、此の娘を擧げた。幾年か連れ添つた後夫は死んだ。母は娘の手を引いて、再び獨逸人の許へ嫁いだ。その獨逸人が昨夜の老人である。今では倫敦のエスト・エンドで仕立屋の店を出して、毎日々々そこへ通勤してゐる。先妻の子も同じ店で働いてゐるが、親子非常に仲が惡い。一つ家にゐても、口を利いた事がない。息子は夜屹度遲く歸る。玄關で靴を脱いで足袋跣足になつて、爺に知れない樣に廊下を通つて、自分の部屋へ這入つて寢て仕舞ふ。母は餘程前に失くなつた。死ぬ時に自分の事を呉々も云ひ置いて死んだのだが、母の財産はみんな阿爺の手に渡つて、一錢も自由にする事が出來ない。仕方がないから、かうして下宿をして小遣を拵へるのである。アグニスは——

主婦は夫れより先を語らなかつた。アグニスと云ふのは此處のうちに使はれてゐる十三四の女の子の名である。自分は其の時今朝見た息子の顔と、アグニスとの間に何處か似た所がある樣な氣がした。恰もアグニスは燒麵麭を抱へて厨から出て來た。

「アグニス、燒麵麭を食べるかい」

アグニスは默つて、一片の燒麵麭を受けて又厨の方へ退いた。

一箇月の後自分は此の下宿を去つた。

過去の匂ひ

自分が此下宿を出る二週間程前に、K君は蘇格蘭から歸つて來た。其時自分は主婦によつてK君に紹介された。二人の日本人が倫敦の山の手の、とある小さな家に偶然落ち合つて、しかも、まだ互に名乘り換した事がないので、身分も、素性も、經歴も分らない外國婦人の力を藉りて、どうか何分と頭を下げたのは、考へると今以て妙な氣がする。其の時此の老令孃は黑い服を着て居た。骨張つて膏の脫けた樣な手を前へ出して、Kさん、是がNさんと云つたが、全く云ひ切らない先に、又一本の手を相手の方へ寄せて、Nさん、是れがKさんと、公平に雙方を等分に引き合せた。

自分は老令孃の態度が、如何にも、嚴で、一種重要の氣に充ちた形式を具へてゐるのに、尠からず驚かされた。K君は自分の向に立つて、奇麗な二重瞼の尻に皺を寄せながら、微笑を洩らしてゐた。自分は笑ふと云はんよりは寧ろ矛盾の淋しみを感じた。幽靈の媒妁で、結婚の儀式を行つたら、斯んな心持ではあるまいかと、立ちながら考へた。凡て此の老令孃の黑い影の動く所は、生氣を失つて、忽ち古蹟に變化する樣に思はれる。誤つて其の肉に觸れゝば、觸れた人の血が、其所丈冷たくなるとしか想像出來ない。自分は戸の外に消えてゆく女の足音に半ば頭を回らした。

老令孃が出て行つたあとで、自分とK君は忽ち親しくなつて仕舞つた。K君の部屋は美くしい絨氈が敷いてあつて、白絹の窓掛が下がつてゐて、立派な安樂椅子とロッキング・チェアが備へ附けてある上に、小さな寢室が別に附屬してゐる。何より嬉しいのは斷えず煖爐に火を

焚いて、惜氣もなく光つた石炭を崩してゐる事である。

　是れから自分はK君の部屋で、K君と二人で茶を飲むことにした。晝はよく近所の料理店へ一所に出掛けた。勘定は必ずK君が拂つて呉れた。K君は何でも築港の調査に來てゐるとか云つて、大分金を持つてゐた。家にゐると、海老茶の繻子に花鳥の刺繍のあるドレッシング・ガウンを着て、甚だ愉快さうであつた。之に反して自分は日本を出た儘の着物が大分汚れて、見共ない始末であつた。K君は餘りだと云つて新調の費用を貸して呉れた。

　二週間の間K君と自分とは色々な事を話した。K君が、今に慶應内閣を作るんだと云つた事がある。慶應年間に生れたもの丈で内閣を作るから慶應内閣と云ふんださうである。自分に、君は何時の生れかと聞くから慶應三年だと答へたら、それぢや、閣員の資格があると笑つてゐた。K君は慥か慶應二年か元年生れだと覺えてゐる。自分はもう一年の事で、K君と共に樞機に參する權利を失ふ所であつた。

　こんな面白い話をしてゐる間に、時々下の家族が噂に上る事があつた。するとK君は何時でも眉をひそめて、首を振つてゐた。アグニスと云ふ小さい女が一番可哀想だと云つてゐた。アグニスは朝になると、石炭をK君の部屋に持つて來る。晝過には茶とバタと麵麭を持つて來る。だまつて持つて來て、だまつて置いて歸る。いつ見ても蒼褪めた顔をして、大きな潤のある眼で一寸挨拶をする丈である。影の樣にあらはれては影の樣に下りて行く。嘗て足音のした試しがない。

　ある時自分は、不愉快だから、此の家を出ようと思ふとK君に告げた。K君は贊成して、自分はかうして調査の爲方々旅び歩いてゐる身體だから、構はないが、君抔は、もつとコンフォタブルな所へ落ち着いて勉強したら可からうと云ふ注意をした。其の時K君は地中海の向側へ渡るんだと云つて、しきりに旅裝をとゝのへてゐた。

　自分が下宿を出るとき、老令孃は切に思ひとまる樣にと頼んだ。下宿料は負ける、K君のゐない間は、あの部屋を使つても構はないと迄云つたが、自分はとう〳〵南の方へ移つて仕舞つた。同時にK君も遠くへ行つて仕舞つた。

　二三箇月してから、突然K君の手紙に接した。旅から歸つて來た。當分此處にゐるから遊びに來いと書いてあつた。すぐ行きたかつたけれども、色々都合があつて、北の果迄推し掛ける時間がなかつた。一週間程して、イスリントン迄行く用事が出來たのを幸ひに、歸りにK君の所へ回つて見た。

　表二階の窓から、例の羽二重の窓掛が引き絞つた儘硝子に映つてゐる。自分は暖かい煖爐と、海老茶の繻子の刺繍と、安樂椅子と、快活なK君の旅行談を豫想して、勇んで、門を入つて、階段を驅け上る樣に敲子をとん〳〵と打つた。戸の向側に足音がしないから、通じないのかと思つて、再び敲子に手を掛けようとする途端に、戸が自然と開いた。自分は敷居から一歩なかへ足を踏み込んだ。さうして、詫びる樣に自分をじつと見上げてゐるアグニスと顔を合はした。其の時此の三箇月程忘れてゐた、過去の下宿の匂が、狹い廊下の眞中で、自分の嗅覺を、稻妻の閃めく如く、刺激した。其の匂のうちには、黑い髪と黑い眼と、クルーゲルの樣な顔と、アグニスに似た息子と、息子の影の樣なアグニスと、彼等の間に蟠る祕密を、一度に一齊に含んでゐた。自分は此の匂を嗅いだ時、彼等の情意、動作、言語、顔色を、あざやかに暗い地獄の裏に認めた。自分は二階へ上がつてK君に逢ふに堪へなかつた。

暖かい夢

風が高い建物に當つて、思ふ如く眞直に抜けられないので、急に稻妻に折れて、頭の上から、斜に鋪石迄吹き卸して來る。自分は歩きながら被つてゐた山高帽を右の手で抑へた。前に客待の御者が一人ゐる。御車臺から、此有樣を眺めて居たと見えて、自分が帽子から手を離して、姿勢を正すや否や、人指指を竪に立てた。乘らないかと云ふ符徴である。自分は乘らなかつた。すると御者は右の手に拳骨を固めて、烈しく胸の邊を打ち出した。二三間離れて聞いてゐても、どん／＼音がする。倫敦の御者はかうして、已れとわが手を暖めるのである。自分は振り返つて一寸此の御者を見た。剝げ懸つた堅い帽子の下から、霜に侵された厚い髪の毛が食み出してゐる。毛布を繼ぎ合せた樣な粗い茶の外套の背中の右に其の肱を張つて、肩と平行になる迄怒らしつゝ、どん／＼胸を敲いてゐる。まるで一種の器械の活動する樣である。自分は再び歩き出した。

道を行くものは皆追ひ越して行く。女でさへ後れてはゐない。腰の後部でスカートを輕く撮んで、踵の高い靴が曲るかと思ふ位烈しく鋪石を鳴らして急いで行く。よく見ると、何の顔も何の顔も切歯詰つてゐる。男は正面を見たなり、女は傍目も觸らず、ひたすらにわが志す方へと一直線に走る丈である。其の時の口は堅く結んでゐる。眉は深く鎖してゐる。鼻は險しく聳えてゐる。顔は奥行計り延びてゐる。さうして、足は一文字に用のある方へ運んで行く。恰も往來は歩くに堪へん、戸外は居るに忍びん、一刻も早く屋根の下へ身を隱さなければ、生涯の恥辱であると、かの如き態度である。

自分はのそ／＼歩きながら、何となく此の都に居づらい感じがした。上を見ると、大きな空は、何時の世からか、仕切られて、切岸の如く聳える左右の棟に餘された細い帶丈が東から西へかけて長く渡つてゐる。其の帶の色は朝から鼠色であるが、次第々々に鳶色に變じて來た。建物は固より灰色である。それが暖かい日の光に倦み果てた樣に、遠慮なく兩側を塞いでゐる。廣い土地を狹苦しい谷底の日影にして、高い太陽が屆く事の出來ない樣に、二階の上に三階を重ねて、三階の上に四階を積んで仕舞つた。小さい人は其の底の一部分を、黒くなつて、寒さうに往來する。自分は其の黒く動くものゝうちで、尤も緩漫なる一分子である。谷へ挾まつて、出端を失つた風が、此の底を拂ふ樣にして通り抜ける。黒いものは網の目を洩れた雜魚の如く四方にぱつと散つて行く。鈍い自分も遂に此の風に吹き散らされて、家のなかへ逃げ込んだ。

長い廻廊をぐる／＼廻つて、二つ三つ階子段を上ると、彈力仕掛の大きな戸がある。身軀の重みをちよつと寄せ掛けるや否や、音もなく、自然と身は大きなガレリーの中に滑り込んだ。眼の下は眩い程明かである。後を振り返ると、戸は何時の間にか締つて、居る所は春の樣に暖かい。自分はしばらくの間、瞳を慣らす爲に、眼をぱち／＼させた。さうして、左右を見た。左右には人が澤山ゐる。けれども、みんな靜かに落ち附いてゐる。さうして顔の筋肉が殘らず緩んで見える。澤山の人が肩を並べてゐるのに、いくら澤山ゐても、一向苦にならない。悉く互ひと互ひを和げてゐる。自分は上を見た。上は大穹窿の天井で極彩色の濃く眼に應へる中に、鮮かな金箔が、胸を躍らす程に、燦として輝いた。自分は前を見た。前は手欄で盡きてゐる。手欄の外には何にもない。大きな穴である。自分は手欄の傍迄近寄つて、短い首

を伸ばして穴の中を覗いた。すると遙の下は、綺にかいた様な小さな人で埋つてゐた。其の數の多い割に鮮に見えた事。人の海とはこの事である。白、黑、黃、青、紫、赤、あらゆる明かな色が、大海原に起る波紋の如く、爛然として、遠くの底に、五色の鱗を並べた程、小さく且奇麗に、蠢いてゐた。

其の時此の蠢くものが、ぱつと消えて、大きな天井から、遙かの谷底迄一度に暗くなつた。今迄何千となく居ならんでゐたものは闇の中に葬られたぎり、誰あつて聲を立てるものがない。恰も此の大きな闇に、一人殘らず其の存在を打ち消されて、影も形もなくなつたかの如く寂としてゐる。と、思ふと、遙かの底の、正面の一部分が四角に切り拔かれて、闇の中から浮き出した樣に、ぼうつと何時の間にやら薄明るくなつて來た。始めは、たゞ闇の段取が違ふ丈の事と思つてゐると、それが次第々々に暗がりを離れてくる。慥かに柔かな光を受けて居ると意識出來る位になつた時、自分は霧の樣な光線の奥に、不透明な色を見出す事が出來た。其の色は黃と紫と藍であつた。やがて、そのうちの黃と紫が動き出した。自分は兩眼の視神經を疲れる迄緊張して、此の動くものを瞬きもせず凝視て居た。霧は眼の底から忽ち晴れ渡つた。遠くの向うに、明かな日光の暖かに照り輝く海を控へて、黃な上衣を着た美しい男と、紫の袖を長く牽いた美しい女が、青草の上に、判然あらはれて來た。女が橄欖の樹の下に据ゑてある大理石の長椅子に腰を掛けた時に、男は椅子の横手に立つて、上から女を見下した。其時南から吹く温かい風に誘はれて、閑和な樂の音が、細く長く、遠くの波の上を渡つて來た。

穴の上も、穴の下も、一度にざわつき出した。彼等は闇の中に消えたのではなかつた。闇の中で暖かな希臘を夢みてゐたのである。

霧

昨宵は夜中枕の上で、ばち〳〵云ふ響を聞いた。是は近所にクラハム・ジャンクションと云ふ大停車場のある御蔭である。此のジャンクションには一日のうちに、汽車が千いくつか集まつてくる。それを細かに割附けて見ると、一分に一と列車位宛出入をする譯になる。その各列車が霧の深い時には、何かの仕掛で、停車場間際へ來ると、爆竹の樣な音を立てゝ相圖をする。信號の燈光は青でも赤でも全く役に立たない程暗くなるからである。

寢臺を這ひ下りて、北窓の日被を捲き上げて外面を見卸すと、外面は一面に茫としてゐる。下は芝生の底から、三方煉瓦の塀に圍はれた一間餘の高さに至る迄、何も見えない。たゞ空しいものが一杯詰つてゐる。さうして、それが寂として凍つてゐる。隣の庭も其通りである。此庭には奇麗なローンがあつて、春先の暖かい時分になると、白い髯を生した御爺さんが日向ぼつこをしに出て來る。其時此御爺さんは、何時でも右の手に鸚鵡を留まらしてゐる。さうして自分の目を鸚鵡の嘴で突つかれさうに近く、鳥の傍へ持つて行く。鸚鵡は羽搏きをして、しきりに鳴き立てる。御爺さんの出ないときは、娘が長い裾を引いて、斷え間なく芝刈機械をローンの上に轉がしてゐる。此の記憶に富んだ庭も、今は全く霧に埋つて、荒果てた自分の下宿のそれと、何の境もなくのべつに續いてゐる。

裏通りを隔てゝ向う側に高いゴシック式の教會の塔がある。其の塔の灰色に空を刺す天邊で何時でも鐘が鳴る。日曜は殊に甚だしい。今日は鋭く尖つた頂きは無論の事、切石を不揃

に疊み上げた胸中と、所在が丸で分らない。それかと思ふ所が、心持黒いやうでもあるが、鐘の音は丸で響かない。鐘の形の見えない濃い影の奥に深く鎖された。

表へ出ると二間許り先は見える。其の二間を行き盡すと又二間許り先が見えて來る。世の中が二間四方に縮まつたかと思ふと、歩けば歩るく程新しい二間四方が露はれる。其の代り今迄通つて來た過去の世界は通るに任せて消えて行く。

四つ角でバスを待ち合せてゐると、鼠色の空氣が切り拔かれて急に眼の前へ馬の首が出た。それだのにバスの屋根に居る人は、まだ霧を出切らずにゐる。此方から霧を冒して、飛乘つて下を見ると、馬の首はもう薄ぼんやりしてゐる。バスが行き逢ふときは、行き逢つた時丈奇麗だなと思ふ。思ふ間もなく色のあるものは、濁つた空の中に消えて仕舞ふ。漠々として無色の裡に包まれて行つた。エストミンスター橋を通るとき、白いものが一二度眼を掠めて翻がへつた。眸を凝らして、其の行方を見詰めてゐると、封じ込められた大氣の裡に、鷗が夢の樣に微かに飛んでゐた。其の時頭の上でビッグベンが嚴に十時を打ち出した。仰ぐと空の中でたゞ音丈がする。

ヰクトリヤで用を足して、テート畫館の傍を河沿にバタシー迄來ると、今迄鼠色に見えた世界が、突然と四方からばつたり暮れた。泥炭を溶いて濃く、身の周圍に流した樣に、黒い色に染られた重たい霧が、目と口と鼻とに逼つて來た。外套は抑へられたかと思ふ程濕つてゐる。輕い葛湯を呼吸する許りに氣息が詰る。足元は無論穴藏の底を踏むと同然である。

自分は此の重苦しい茶褐色の中に、しばらく茫然と佇立んだ。自分の傍を人が大勢通る樣な心持がする。けれども肩が觸れ合はない限りは果して、人が通つてゐるのか何うだか疑はしい。其の時此の濛々たる大海の一點が、豆位の大きさにどんよりと黄色く流れた。自分は夫を目標に、四歩許りを動かした。するとある店先の窓硝子の前へ顏が出た。店の中では瓦斯を點けてゐる。中は比較的明かである。人は常の如く振舞つて居る。自分はやつと安心した。

バタシーを通り越して、手探りをしない許りに向うの岡へ足を向けたが、岡の上は仕舞屋計りである。同じ樣な横町が幾筋も竝行して、青天の下でも紛れ易い。自分は向つて左の二つ目を曲つた樣な氣がした。夫から二町程眞直に歩いた樣な心持がした。夫から先は丸で分らなくなつた。暗い中にたつた一人立つて首を傾けてゐた。右の方から靴の音が近寄つて來た。と思ふと、それが四五間手前迄來て留まつた。夫から段々遠退いて行く。仕舞には、全く聞えなくなつた。あとは寂としてゐる。自分は又暗い中にたつた一人立つて考へた。どうしたら下宿へ歸れるかしらん。

昔

ピトロクリの谷は秋の眞下にある。十月の日が、眼に入る野と林を暖かい色に染めた中に、人は寢たり起きたりしてゐる。十月の日は靜かな谷の空氣を空の半途で包んで、ぢかには地にも落ちて來ぬ。と云つて、山向へ逃げても行かぬ。風のない村の上に、いつでも落附いて、凝と動かずに霞んでゐる。其の間に野と林の色が次第に變つて來る。酸いものがいつの間にか甘くなる樣に、谷全體に時代が附く。ピトロクリの谷は、此の時百年の昔し、二百年の昔にかへつて、安々と寂びて仕舞ふ。人は世に熟れた顏を揃へて、山の背を渡る雲を見る。其の雲は或時は白くなり、或時は灰色になる。折々は

薄い底から山の地を透かせて見せる。いつ見ても古い雲の心地がする。

自分の家は此の雲と此の谷を眺めるに都合好く、小さな丘の上に立つてゐる。南から一面に家の壁へ日があたる。幾年十月の日が射したものか、何處も彼處も鼠色に枯れてゐる西の端に、一株の薔薇が這ひかゝつて、冷たい壁と、暖かい日の間に挾まつた花をいくつか着けた。大きな瓣は卵色に豐かな波を打つて、萼から翻へる様に口を開けた儘、ひそりと所々に靜まり返つてゐる。香は薄い日光に吸はれて、二間の空氣の裡に消えて行く。自分は其の二間の中に立つて、上を見た。薔薇は高く這ひ上つて行く。鼠色の壁は薔薇の蔓の屆かぬ限りを盡して眞直に聳えてゐる。屋根が盡きた所にはまだ塔がある。日は其の又上の靄の奥から落ちて來る。

足元は丘がピトロクリの谷へ落ち込んで、眼の屆く遙の下が、平たく色で埋まつてゐる。其の向う側の山へ上る所は層々と樺の黄葉が段段に重なり合つて、濃淡の坂が幾階となく出來てゐる。明かで寂びた調子が谷一面に反射して來る眞中を、黒い筋が横に蜿つて動いてゐる。泥炭を含んだ溪水は、染粉を溶いた様に古びた色になる。此山奥に來て始めて、こんな流を見た。

後から主人が來た。主人の髯は十月の日に照らされて七分がた白くなりかけた。形裝も尋常ではない。腰にキルトといふものを着けてゐる。俥の膝掛の様に粗い縞の織物である。それを行燈袴に、膝頭迄裁つて、竪に襞を置いたから、膝脛は太い毛糸の靴足袋で隱すばかりである。歩くたびにキルトの襞が搖れて、膝と股の間がちら〳〵出る。肉の色に恥を置かぬ昔の袴である。

主人は毛皮で作つた、小さい木魚程の蟇口を前にぶら下げてゐる。夜煖爐の傍へ椅子を寄せて、音のする赤い石炭を眺めながら、此の木魚の中から、パイプを出す、烟草を出す。さうしてぷかりぷかりと夜長を吹かす。木魚の名をスポーランと云ふ。

主人と一所に崖を下りて、小暗い路に這入つた。スコッチ・ファーと云ふ常磐木の葉が、刻み昆布に雲が這ひかゝつて、沸つても落ちない様に見える。其の黑い幹をちよろ〳〵と栗鼠が長く太つた尾を搖つて、驅け上つた。と思ふと古く厚みのついた苔の上を又一匹、眸から疾く驅け拔けたものがある。苔は膨れた儘動かない。栗鼠の尾は蒼黒い地を拂子の如くに擦つて暗がりに入つた。

主人は横を振り向いて、ピトロクリの明るい谷を指さした。黒い河は依然として其の眞中を流れてゐる。あの河を一里半北へ遡るとキリクランキーの峽間があると云つた。

高地人と低地人とキリクランキーの峽間で戰つた時、屍が岩の間に挾つて、岩を打つ水を塞いた。高地人と低地人の血を飮んだ河の流れは色を變へて三日の間ピトロクリの谷を通つた。

自分は明日早朝キリクランキーの古戰場を訪はうと決心した。崖から出たら足の下に美しい薔薇の花瓣が二三片散つてゐた。

クレイグ先生

クレイグ先生は燕の様に四階の上に巣をくつてゐる。鋪石の端に立つて見上げたつて、窓さへ見えない。下から段々と昇つて行くと、股の所が少し痛くなる時分に、漸く先生の門前に出る。門と申しても、扉や屋根のある次第ではない。幅三尺足らずの黑い戸に眞鍮の敲子がぶら下がつてゐる丈である。しばらく門前で

休息して、此の敲子の下端をこつ／＼と戸板へぶつけると、内から開けて吳れる。

開けて吳れるものは、何時でも女である。近眼の所爲か眼鏡を掛けて、斷えず驚いてゐる。年は五十位だから、隨分久しい間世の中を見て暮した筈だが、矢つ張りまだ驚いてゐる。戸を敲くのが氣の毒な位大きな眼をして入らつしやいと云ふ。

這入ると女はすぐ消えて仕舞ふ。さうして取附の客間――始めは客間とも思はなかつた。別段装飾も何もない。窓が二つあつて、書物が澤山竝んでゐる丈である。クレイグ先生は大抵其處に陣取つてゐる。自分の這入つて來るのを見ると、やあと云つて手を出す。握手をしろといふ相圖だから、手を握る事は握るが、向ではかつて握り返した事がない。此方もあまり握り心地が好い譯でもないから、一層廢したら可からうと思ふのに、矢つ張りやあと云つて毛だらけな皺だらけな、さうして例によつて消極的な手を出す。習慣は不思議なものである。

この手の所有者は自分の質問を受けて吳れる先生である。始めて逢つた時報酬はと聞いたら、左うさな、と一寸窓の外を見て、一回七志ぢやどうだらう。多過ぎればもつと負けても好いと云はれた。それで自分は一回七志の割で月末に全額を拂ふ事にしてゐたが、時によると不意に先生から催促を受ける事があつた。君、少し金が入るから拂つて行つて吳れんか抔と云はれる。自分は洋袴の隱しから金貨を出して、むき出しにへえと云つて渡すと、先生はやあ濟まんと受取りながら、例の消極的な手を擴げて、一寸掌の上で眺めた儘、やがて是れを洋袴の隱しへ收められる。困る事には先生決して釣を渡さない。餘分を來月へ繰り越さうとすると、次の週に又、ちよつと書物を買ひたいから抔と催促される事がある。

先生は愛蘭土の人で言葉が頗る分らない。少し焦き込んで來ると、東京者が薩摩人と喧嘩をした時位に六づかしくなる。それで大變疎忽しい非常な焦き込み屋なんだから、自分は事が面倒になると、運を天に任せて先生の顏丈見てゐた。

其の顏が又決して尋常ぢやない。西洋人だから鼻は高いけれども、段があつて、肉が厚過ぎる。其處は自分に善く似てゐるのだが、こんな鼻は一見した所がすつきりした好い感じは起らないものである。其の代り其處いら中むしやくしやしてゐて、何となく野趣がある。髯抔はまことに御氣の毒な位黑白亂生してゐた。いつかベーカーストリートで先生に出合つた時には、鞭を忘れた御者かと思つた。

先生の白襯衣や白襟を着けたのは未だ曾て見た事がない。いつでも縞のフラネルをきて、むくむくした上靴を足に穿いて、其の足を煖爐の中へ突き込む位に出して、さうして時々短い膝を敲いて――其の時始めて氣が附いたのだが、先生は消極的の手に金の指環を嵌めてゐた。――時には敲く代りに股を擦つて、敎へて吳れる。尤も何を敎へて吳れるのか分らない。聞いてゐると、先生の好きな所へ連れて行つて、決して歸してくれない。さうして其の好きな所が、時候の變り目や、天氣都合で色々に變化する。時によると昨日と今日で兩極へ引越しをする事さへある。わるく云へば、まあ出鱈目で、よく評すると文學上の座談をして吳れるのだが、今になつて考へて見ると、一回七志位で纏つた規則正しい講義抔の出來る譯のものではないのだから、是は先生の方が尤もなので　それを不平に考へた自分は馬鹿なのである。尤も先生の頭も、其の髯の代表する如く、少しは亂雜に傾いてゐた樣でもあるから、寧ろ報酬の値上をして、えらい講義をして貰はない方が可

かつたかも知れない。
　先生の得意なのは詩であつた。詩を讀むときには顔から肩の邊が陽炎の様に振動する。——嘘ぢやない。全く振動した。其の代り自分に讀んで呉れるのではなくつて、自分が一人で讀んで樂んでゐる事に歸着して仕舞ふから詰りは此方の損になる。いつかスヰンバーンのロザモンドとか云ふものを持つて行つたら、先生一寸見せ玉へと云つて、二三行朗讀したが、忽ち書物を膝の上に伏せて、鼻眼鏡をわざ／＼はづして、あゝ駄目々々スヰンバーンも、こんな詩を書く様に老い込んだかなあと云つて嘆息された。自分がスヰンバーンの傑作アタランタを讀んで見様と思ひ出したのは此の時である。
　先生は自分を子供の様に考へてゐた。君かう云ふ事を知つてるか、あゝ云ふ事が分つてるか杯と愚にも附かない事を度々質問された。かと思ふと、突然えらい問題を提出して急に同格扱に飛び移る事がある。いつか自分の前でワトソンの詩を讀んで、是はシェレーに似た所があると云ふ人と、全く違つてゐると云ふ人とあるが、君はどう思ふと聞かれた。どう思ふたつて、自分には西洋の詩が、先づ眼に訴へて、しかる後耳を通過しなければ丸で分らないのである。そこで好い加減な挨拶をした。シェレーに似てゐる方だつたか、似てゐない方だつたか、今では忘れて仕舞つた。が可笑しい事に、先生は其の時例の膝を叩いて僕もさう思ふと云はれたので、大いに恐縮した。
　ある時窓から首を出して、遥かの下界を忙しさうに通る人を見下しながら、君あんなに人間が通るが、あの内で詩の分るものは百人に一人もゐない、可哀相なものだ。一體英吉利人は詩を解する事の出來ない國民でね。其處へ行くと愛蘭土人はえらいものだ。はるかに高尚だ。——實際詩を味ふ事の出來る君だの僕だのは幸福と云はなければならない。と云はれた。自分を詩の分る方の仲間へ入れてくれたのは甚だ難有いが、其の割合には取扱が頗る冷淡である。自分は此の先生に於て未だ情合といふものを認めた事がない。全く機械的に喋舌つてる御爺さんとしか思はれなかつた。
　けれども斯んな事があつた。自分の居る下宿が甚だ厭になつたから、此の先生の所へでも置いて貰はうかしらと思つて、ある日例の稽古を濟ましたあと、頼んで見ると、先生忽ち膝を敲いて、成程、僕のうちの部屋を見せるから、來給へと云つて、食堂から、下女部屋から、勝手から、一應すつかり引つ張り廻して見せて呉れた。固より四階裏の一隅だから廣い筈はない。二三分かゝると、見る所はなくなつて仕舞つた。先生は其處で、元の席へ歸つて、君斯ういふ家なんだから、何處へも置いて上げる譯には行かないよと斷るかと思ふと、忽ちワルト・ホイットマンの話を始めた。昔ホイットマンが來て自分の家へ少時逗留して居た事がある——非常に早口だから、よく分らなかつたが、どうもホイットマンの方が來たらしい——で、始めはあの人の詩を讀んだ時は丸で物にならない様な心持がしたが、何遍も讀み過してゐるうちに段々面白くなつて、仕舞には非常に愛讀する様になつた。だから
　書生に置いて貰ふ件は、丸で何處かへ飛んで行つて仕舞つた。自分はたゞ成行に任せて、へえへえと云つて聞いてゐた。何でも其の時はシェレーが誰とかと喧嘩をしたとか云ふ事を話して、喧嘩はよくない、僕は兩方共好きなんだから、僕の好きな二人が喧嘩をするのは甚だよくないと故障を申し立てゝ居られた。いくら故障を申し立てゝも、もう何十年か前に喧嘩をして仕舞つたのだから仕方がない。
　先生は疎忽かしいから、自分の本抔をよく置

き遊へる。さうして夫が見當らないと、大いに焦き込んで、臺所に居る婆さんを、ぼやでも起つた樣に、仰山な聲をして呼び立てる。すると例の婆さんが、是れも仰山な顏をして客間へあらはれて來る。

「お、おれの『ウォーヅウォース』は何處へ遣つた」

婆さんは依然として驚いた眼を皿の樣にして一應書棚を見廻してゐるが、いくら驚いても甚だ慥かなもので、すぐに、「ウォーヅウォース」を見附け出す。さうして、「ヒヤ、サー」と云つて、聊かたしなめる樣に先生の前に突き附ける。先生はそれを引つたくる樣に受け取つて、二本の指で汚ない表紙をぴしや〳〵敲きながら、君、ウォーヅウォースが……と遣り出す。婆さんは、益驚いた眼をして臺所へ退つて行く。先生は二分も三分も「ウォーヅウォース」を敲いてゐる。さうして折角搜して貰つた「ウォーヅウォース」を遂に開けずに仕舞ふ。

先生は時々手紙を寄こす。其の字が決して讀めない。尤も二三行だから、何遍でも繰返して見る時間はあるが、どうしたつて判定は出來ない。先生から手紙がくれば差支があつて稽古が出來ないと云ふことゝ斷定して始めから讀む手數を省く樣にした。たまに驚いた婆さんが代筆をする事がある。其の時は甚だよく分る。先生は便利な書記を抱へたものである。先生は、自分に、どうも字が下手で困ると嘆息してゐられた。さうして君の方が餘程上手だと云はれた。

から云ふ字で原稿を書いたら、どんなものが出來るか心配でならない。先生はアーデン・シェクスピヤの出版者である。よくあの字が活版に變形する資格があると思ふ。先生は、それでも平氣に序文をかいたり、ノートを附けたりして濟してゐる。のみならず、此の序文を見ろと云つてハムレットへ附けた緒言を讀まされた事がある。其の次行つて面白かつたと云ふと、君日本へ歸つたら是非此の本を紹介して呉れと依賴された。アーデン・シェクスピヤのハムレットは自分が歸朝後大學で講義をする時に非常な利益を受けた書物である。あのハムレットのノート程周到にして要領を得たものは恐らくあるまいと思ふ。然し其の時は左程にも感じなかつた。然し先生のシェクスピヤ研究には其の前から驚かされてゐた。

客間を鍵の手に曲ると六疊程な小さな書齋がある。先生が高く巣をくつてゐるのは、實を云ふと、此の四階の角で、其の角の又角に先生に取つては大切な寶物がある。――長さ一尺五寸幅一尺程な青表紙の手帳を約十冊ばかり併べて、先生は間がな隙がな、紙片に書いた文句を此の青表紙の中へ書き込んでは、吝坊が穴の開いた錢を蓄る樣に、ぽつり〳〵と殖やして行くのを一生の樂みにして居る。此の青表紙が沙翁字典の原稿であると云ふ事は、こゝへ來出して暫く立つとすぐに知つた。先生は此の字典を大成する爲に、ウエールスのさる大學の文學の椅子を抛つて、毎日ブリチッシ・ミュージアムへ通ふ暇をこしらへたのださうである。大學の椅子さへ抛つ位だから、七志の御弟子を疎末にするのは無理もない。先生の頭のなかには此の字典が終日終夜槃桓磅礴してゐるのみである。

先生、シュミッドの沙翁字彙がある上にまだそんなものを作るんですかと聞いた事がある。すると先生はさも輕蔑を禁じ得ざる樣な樣子で是れを見給へと云ひながら、自己所有のシュミッドを出して見せた。見ると、さすがのシュミッドが前後二卷一頁として完膚なき迄眞黑になつてゐる。自分はへえと云つたなり驚いてシュミッドを眺めてゐた。先生は頗る得意で

ある。何、もしシュミッドと同程度のものを拵へる位なら僕は何もこんなに骨を折りはしないさと云つて、又二本の指を揃へて眞黒なシュミッドをぴしや／＼敲き始めた。

「全體何時頃から、こんな事を御始めになつたんですか」

先生は立つて向うの書棚へ行つて、しきりに何か捜し出したが、又例の通り焦れつたさうな聲でジエーン、ジエーン、おれのダウデンは何うしたと、婆さんが出て來ないうちから、ダウデンの在所を尋ねてゐる。婆さんは又驚いて出て來る。さうして又例の如くヒヤ、サーと窘めて歸つて行くと、先生は婆さんの一擲には丸で頓着なく、餓じさうに本を開けて、うん此處にある。ダウデンがちやんと僕の名を此處へ擧げて呉れてゐる。特別に沙翁を研究するクレイグ氏と書いて呉れてゐる。此の本が千八百七十……年の出版で僕の研究は夫よりずつと前なんだから……自分は全く先生の辛抱に恐れ入つた。序でに、ぢや何時出來上るんですかと尋ねて見た。何時だか分るものか、死ぬ迄遣る丈の事さと先生はダウデンを元の所へ入れた。

自分は其の後暫くして先生の所へ行かなくなつた。行かなくなる少し前に、先生は日本の大學に西洋人の教授は要らんかね。僕も若いと行くがなと云つて、何となく無常を感じた様な顔をしてゐられた。先生の顔にセンチメントの出たのは此の時丈けである。自分はまだ若いぢやありませんかといつて慰めたら、いやいや何時どんな事があるかも知れない。もう五十六だからと云つて、妙に沈んで仕舞つた。

日本へ歸つて二年程したら、新着の文藝雜誌にクレイグ氏が死んだと云ふ記事が出た。沙翁の專門學者であると云ふことが、二三行書き加へてあつた丈である。自分は其の時雜誌を下へ置いて、あの字引はつひに完成されずに、反故になつて仕舞つたのかと考へた。

修善寺日記

――明治四十三年八月六日より明治四十四年一月二十一日まで――

八月六日

十一時の汽車で修善寺に向ふ。東洋城來らず。白切符二枚を懷中して乘る。しまつた事をしたと思ふ。途中車掌が電報を持つて來て、松根は一汽車後れたる故國府津か御殿場で待ち合せろといふ。

○品川から白服の軍人らしき人乘る。絽の小紋の樣に細かい縞の着物をきた人、下女と向側にゐる。紗の羽織に紫の紐をさげてダイヤの指環をはめた男、壯士の親方か辯護士か。義太夫を語る。

○白切符の買ひ餘しの割戻しの件をボイに聞き合はしてもらふ。御殿場で三圓九十六錢を受取る。角の茶屋でいこふ。三時○九分。五時二十九分迄待つ。御殿場は五月燒けたり。家皆新けれども皆粗末なり。目に入るは富士講のみ、西洋人の出入ちよく〱見ゆ。

○三島で四十分待つ。大仁へ着いたら車が一挺もゐない。漸く三臺を驅り出す。荷物は荷車で運ぶ。途中雨來る。車夫の脛丈見ゆ。車に提灯の光映る。夫がぐる〱廻る。道端の草に灯うつる。其外は暗。川かと思ふ。ほろの中から仰向く暗いと思つたものが微かに薄くなつて空につゞいてゐる。黑いのは山か森か近いのか遠いのか分らない。雨ざつと至る。車夫幌をつぐ。蛙の聲夥し。

○菊屋別館着。座敷なし。關子爵の居たといふ部屋に入る。新らしい座敷也。西村家貸切と書いてある。今夜丈の都合なり。入浴。喫飯。強雨の聲をきく。

八月七日

雨聲。雨戸をあくれば溪聲なり。上厠無便。浴槽に下る。混雜。妙な工夫をしてひげをそる。朝飯 鷄卵二個。汁一。飯三。飯後上厠便あり。

○東洋城番頭と談判部屋の都合つきかねる樣也。本店なら一間ある由。今の部屋は前にも山が見え、後ろにも山が見え。寐てゐると頭も足も山なり。好い部屋ならん。十疊と六疊つゞき也。此離れの二階を折れ曲つた角には昨日品川から乘つた軍人が何時の間にか來てゐた。海軍少將の由。

○碧雲山峯をはれやかにす。須臾にして雨。飴賣の笛の聲をきく

○十時本店に移る。三階に入れられる。しばらくして考へると是は宅へ歸るか別の處へ行つた方がよい。十日に來るといふ新築の座敷十疊を談判して借りる事にする。

○胃常ならず。膨滿でもなければ疼痛でもなければ嘈囃でもなくて幾分かそれを具へてゐる。凝と寐てゐる。眠り覺めると多少は好い心持也。とう〱五時頃迄起たず。アイスクリームを一杯呑む。思ふに朝飯を食ひ過ぎたると汁の實の野菜や、海苔を口にせし爲ならん

○日落つ。隣りで觀世流の謠をうたふ。其隣りで三味線を彈き出す。三味線の方聞き手多し。獨りでジェームスの多元的宇宙を讀む何だか意味が分らず。

○九時に寐る。十時に東洋城來。御上が今御休みになつたと云ふ。十一時頃迄話して歸る。宮樣が「猫」を讀んだ由。

八月八日

雨。五時起上。厠便通なし。入浴。浴後胃痙攣を起す。不快堪へがたし。

○十二時頃又入浴又ケイレン。漸く一杯の飯を食ふ。

○隣の客どこかへ行く。雨月半分と蘇渡半分を給ふ。四時過松根より迎へ。足駄をかりて行く。七時頃晩餐。誂ものをわざ／＼杉居から取り寄せる。午よりは食慾あり。松根に含嗽剤を作つてもらつてうがひをする。かんの聲が潰れたので咽喉と鼻の間を濕すと少しは好い心持なり。鼻液を拭ふ。

○殿下が余に話をしてくれと松根迄云はれるも由。袴も羽織もなし、且此所では聞く人も話す人も苦痛故断はる。松根の方でも面倒なき事故御用掛に一任を乞ふ。又来た殿下へは受合はぬよし。

○八時過帰りて眠る。隣りは又、向座敷は義太夫、新慶上使の半頃也。一時間半過入浴帰りて又服薬。忽ち胃ケイレンに罹る、どうしても湯がわるい様に思ふ。

○半夜夢中也、一時に胸苦しく堪へがたし。

○余に取つては湯治よりも胃腸病院の方遙かによし。身體が毫も苦痛の訴へをなかつた、萬事整頓して心持がよかつた、便通が規則正しくあつた。

八月九日

雨。伊豆鐵道がとまるかも知れぬといふ。

八月十日

八月十一日

八月十二日

夢の如く生死の中程に日を送る。膽汁と酸液を一升程吐いてから漸く人心地なり。氷と牛乳のみにて命を養ふ。あれの報知諸所より至る。東京より水害の聞き合せ来る。湯河原の宿屋流れて其荷物がどこかへ行つたといふ。松根が余の病状を報知していつでも来られる支度をせよと妻にいつてやつた。それを後から電報で取り消す。

○半夜一息づゝ胃の苦痛を句切つてせい／＼と生きてゐる心地は苦しい。誰もこれを知るものはない。あつても何うしてくれる事も出来ない。脊汗が頸から背中へ出る。

八月十三日

○今日も亦あれる。隣の人は先達て立つと云つて雨の爲に一日程延ばした。今日は是非と云つてゐたが此模様ではどうするか。

○障子を立てゝ寐る。

○午葛湯、おも湯、玉子豆腐

○晩、重湯、牛掩、刺身、葛練、

○下女に今日は幾日だねと聞く、多分十四日でせうと云ふ。よく知りませんと云ふ。合点也。

あしたから新聞を御取りなさいといふ。

○下女の話に下の八番の御客が何とかいふ處にゐて、水が出て主人が別莊へ逃げてくれと云ふのに藝者をあげて酔つて寐たら四時頃水が出て山が崩れて見る間に押し流された。逃げた御客は東京へも歸られず、三島迄は汽車が通じると云ふので三島迄来てそれから馬車で此處へ来たといふ。

八月十四日

終夜強雨の音を聞く。山聲、樹聲、雨聲、耳を撼かす。三時頃迄眠られず。天明眠込む。胃部不安。上厠排便、入浴、酸出、苦痛。牛乳、チリ玉、重湯にて朝飯。食後うと／＼する。諸

の靜寂に入る。

十五日

十六日

苦痛一字を書く能はず

十七日

十八日

十九日

ノ事を忘れぬ爲に書く

八月二十日の四時過なり。

○十七日吐血、蕃茄の膾の如きもの。醫者見て苦い顏す

○十八日東洋城來り、今社から社員一名と胃腸病院の醫師一名をよこす。十二時四十分の汽車で立つと云ふ電話あり。

○同夜二人來。大和堂から長距離電話をかけたら胃腸病院で社へ知らせて、夫から社で驚ろいた由

十九日又吐血。夫から氷で冷す。安靜療法

硝酸銀

○今朝漸く乳五勺、ソップ五勺、を飲む。二時間後膨滿苦痛。三時間目の藥にて漸く癒る。

○ひるから氣分よし。氷依然。水飴。氷を嚙む。

八月二十一日

○十九日の吐血以後滋養浣腸。食物は流動物丈

○昨日森成氏歸京の筈の處見當たらぬ爲め滯在

○但し院長よりは右以後直ちに當分其地にとゞまり看護に手を盡すべしとの好意の電報あり、

○昨夜終列車にて杉本來。池邊と相談どんな醫者でもどんな器械でも送る事にした由。來て見れば夫程にもなしといふ。醫者のいふ事をきかぬ爲也といふ。

○始め東洋城が宅へ手紙を出して妻に來る用意をうながす。夫から電報にて見合せろといふ。宅からは忙がしい處を長距離電話をかける。細君と知らず町内に問答せり。後にて聞けば山田三良の家の電話のよし

○五時半硝酸銀を呑む。

○昨夕澁川一五〇持參。意味不明。妻にきくと是は坂元のはからひの由。相談の上今月の月給の一分として貰ふ事にする

○朝食牛乳一合。半熟鷄卵一個、水飴三匙。

○昨朝は氷嚢の重みに堪へず。今日は何の苦なし

○澁川十時四十分の汽車で歸る。

○弘法樣の御祭りで四時頃から花火が揚る。目錄を活版にしてある。雷鳴、軍旗、露牡丹、秋の七草色々なり。

八月二十二日

○快晴。牛乳一合、重湯五勺、玉子黃味一つ。

○昨夜は寐ながら弘法樣の花火を見る。秋の景色也。

○坂、森、妻三人にて緣で水瓜を食ふ。

○昨日松根不來。妃殿下は既に山莊へ御立の由。

○家のもの夜山莊で酒を飮む。二時過就寢のよし

○東洋城歸京。十二時頃發

○尺八の大家と三味線と踊子下の廊下で合奏

○坂元森成裏の山で七草を折り來る

○高田早苗投宿。

八月二十三日

○快晴。女郎花、野菊、男郎花、薄、萩、桔梗、紫の玉（藤の如きもの）

○おくび生臭し。猶出血するものと見ゆ。便は無類血色あり。

（高田早苗氏の名刺を番頭持参。坂元に此方の名刺を依頼。高田氏謡をうたひ始む。

「八月二十四日ヨリ以下九月七日迄夏目鏡記」

宿ヨリ電話シ杉本副院長午後四時大仁着ニテ来ル診察ノ結果夜八時急ニ吐血五百ガラムト云フ、ノウヒンケツヲオコシ一時人事不省カンフル注射十五食エン注射ニテヤヽ生気ツク皆朝迄モタヌ者ト思フ

社ニ電報ヲカケル夜中ネムラズ

八月二十五日

朝容態聞ケバキケンナレドゴク安静ニシテ居レバモチナヲスカモ知レヌト云フ杉本氏帰ル

東京ノ宗ノ東カラ電話ガカヽリ今朝一番デ夏目兄上高田姉上御夫婦小供三人高濱さん野上さん森田さん中根倫さんお立ちになりましたと云ふ大塚さん大磯から来ラル

安倍さんも来てクレル一汽車ヲクレテ野村さんも来ル

池邊氏モ来ラル

八月二十六日

容態ヤヽ良好

見舞客 奥村鹿太郎、満鐵ノ山崎氏、鈴木三重吉、春陽堂、湯淺廉孫、高田知一郎、菅虎雄、森巻吉、看ゴ婦二人、春陽堂ハ菓子折ヲクレル

八月二十七日

容態別ニ異状ナシ

見舞客

小宮豊隆渡邊和太郎香水とビスケットヲセラフ高尾忠堅早稲田大學ノ學生、早矢仕四郎元同ジ學校ニ居タ人ノヨシ、奥村又モウ少しヨクナツタラ来マストアツタニカヘル其時小供兄姉上倫野村さん一處ニカヘル

八月二十八日

容態別状ナシ

森成さん東京ニ用事ガ出来テ帰ル病院カラヌカダト云フ先生代理ニヨコシテ呉レル

見舞客

小林郁高須賀淳平石井柏亭行徳二郎野間眞綱

八月二十九日 晴

容態良好ニテ此分ナラバ心配ナシトノ事皆安心シテ東京へカヘラル

大塚さん菅さん森さん野上さん小林さん湯淺さん野間さん

大倉書店ヨリ見舞状ニソヘテ小包デ菓子折ヲクレル名古屋ノ鈴木カラ心配シテ毎日容態ヲ電報デシランテ呉レロト云テクル見舞トシテ金二十五圓クレル其金デ毛ブトンヲ買テ病人ニカケヨウト思ヒ野上さんニタノム

八月三十日

晴 容態別ニ異状ナシ

ヌカダ醫師午後二時ノ汽車ニテ帰ル森成サン入リカワリ東京カラ帰テクル其時行徳サン高須賀サン一處ニ帰ル

夜滿鐵ノ中村サンカラ山崎氏ヲヨコシテ御見舞トシテ金三百圓ヲ下サル

八月三十一日

晴 容態異状ナシ

今日カラソツプヲノマセルト云故朝トリヲ買テ切テモラヒ酒トツクリヲカリテ其中へ入レユセンニカケテ火鉢デソツプヲコシラエル夕方名古屋カラ鈴木ガクル二三日前ニアツラエタハネブトンガクル

九月一日

晴 容態ヤヽ良好ナリ

早稲田大學生小林修二郎ト云フ人ガクル中村さんノ使山崎さん帰ル鈴木モ午後カラ帰ルイロ〱東京へ買物ヲ頼ム夕方野間さんが東京カラクル

九月二日

晴 容態變りなし

今日カラソツプガ三度ニナル食ベル事バカリカンガヘテイルヨシ坂元サンガ七時頃カラゲリヲシテ腹ガイタイト云ヒ出スカイロヲコシラヘテ上ル夜九時頃ニナリ内丸

サンガ來ル

九月三日

雨　容態異狀ナシ

朝十時ノ汽車デ内丸サンガ歸ル野間サンモ午後二時ノ汽車ニテ鹿兒島ヘ歸ル

九月四日

晴　容態同じ

朝九時頃湯淺サンガ東京カラ歸道ニヨル阿部次郎サンガ午後ニクル山形カラ歸リ道東京ヲス通リシテ當地ヘクル病人に話シタラ酒デモノマシテ上ケロト云フ事故ビールヲ二本小宮サント二人デノム湯淺サン三時ノ汽車デ歸ル

九月五日

雨　容態だん／＼よろし

阿部サント小宮サンガサン歩ニ行キ歸リニ草花ヲ取テクル花イケニサス

九月六日

晴　異狀ナシ

今日ハ十時食鹽ノカン腸ヲスル四人ガヽリテオコシテ大便ヲサセル少シ出タヨシ

ハダカニシテセナカヲアルコールテフキ着物ヲネルト取カヘルワラブトンノ上ヘナミノフトンヲ二枚カサネテ上ヘ寐カス皆大變心配シタレド別ニ變リナシ大キニ安心阿部サン午後二時ノ汽車デ東京ヘ歸ル

九月七日

雨　容態よろし

今日一番デ坂元サン歸ルカバンヲ持テ行テモラフ野上サンタガクル御土産ヲクレル

九月八日

○ 別るゝや夢一筋の天の川

○ 秋の江に打ち込む杭の響かな

○ 秋風や唐紅の咽喉佛

○ 赤蜻蛉、燕

○ languid stillness° weak state° painless° passivity

○ 庇護。被庇護。

○ 氷

○ Intellectuality ‖ indifference. Self-assertion ‖ indifference. 人事ノ葛藤ニ indifference

○ goodness, peace, calmness. Out of struggle for existence. material prosperity.

○ nature

○ Essen、住宅。西洋と日本ノ懸隔。

○ 自然淘汰に逆ふ療治。小兒の撫育より手がかかる。半白の人果して此看護をうくる價値ありや

○ 吾より云へば死にたくなし。只勿體なし。

○ 九月九日　十一時と二時に間食。アイスクリームは冷たくていやになる。ペプトン・カーニスを五十グラム位宛

○ 正食　湯煎ソープ三十グ、葛湯百グ、今日から三十を百にス

○ アイスクリームの器械は鈴木送る、

○ 吐血の時モルヒン注射　再度の嘔氣を恐れて

十日

○ 昨夜森成氏と禁烟の約をなす。今朝臥して思ふ左のみ旨くなけれど夫程害にならぬものを禁ずる必要なし。食後一本宛にす

○ 森成氏初診の時の胃の亂調の働をかたる

○ 最後の吐血の時、二回の注射。ブンメルン

○ 紫苑　みそはぎ

○ 萬年筆をふる力なし

○ ひかん白萩梅林より來る。

○病院で一ヶ月半、修善寺で一ヶ月是から何月かゝるか分らない惜い時間也。小宮云ふ牢へ這入つたと思へ。

○時間を惜いと思ふ程人間に精力が出たのだらう

○森成氏又帰京

十一日

○曹達ビスケットは十七日頃より

○子供、手紙を読む。

九月十二日

秋晴。寝ながら空を見る。ひげをそる。

　秋晴に病間あるや髭を剃る

　秋の空浅黄に澄めり杉に斧

昨夕大和堂来りいふ。仰臥不動の忍耐感心なり是でよくならなければ医師の責任

○羽根布団を買はぬ理由

九月十三日

○昨夜森成氏帰来。羽根枕。塩瀬の餡。ソーダビスケット来る。

○暗雲蓄盤

○まだ氷嚢を盛る。

○宮本叔氏

○吐血は医師の責任也と杉本氏いふ

○昨日より妻頭病むとて寝る。

○昼ソップ六十より七十グラムに増す

○秋雨蕭々、三絃琴と三味線を合せてゐる

○白川帰る

○四時頃突然ビスケット一個を森成さんが食はしてくれる。嬉しい事限なし

九月十四日

○夜十分から雨

○　哀れに夜寒過るや雨の音

○　旅にやむ夜寒心や世は情

○一夜眠さめて枕頭に二子を見る

　宵々、雨と聞くらん宵の伽

○　秋風やひゞの入りたる胃の袋

○芸術、議論や人生上の理窟か一時は厭になつた。

　一竿風月、明窓浄几

さういふ趣味が募つた。

　微雨当窓冷、一燈洩竹青

といふ句を得た。

　風流の昔恋しき紙衣かな

○体力日に加はる。床の上にて身体を動かす力、頭を使はずして力にて自分によく分る。

○十一時頃のソーダビスケットを半分喫れる。東京より送るものと云ふ。塩気ありて此の甘味たし

○三兄皆早く死す。死する時一本の白髪なし。余の両鬢漸く白からんとして又一縷の命をつなぐ

　生残る吾恥かしや鬢の霜

○四時に灌腸をせるよし。最後の吐血後一週間にして第一灌腸。今日一週間にして第二灌腸なり。宿便出るや否や。

九月十五日

○秋雨山村を鎖す

○昨日灌腸脱便好成績

○昨夜東来。洪水の写真帖。ロヤルアカデミー土産

○朝飯ソップ百グラム。ソーダビスケット半片

○　立秋の紺落ち付くや伊予絣

○　骨立を吹けば疾む身に野分かな

○今朝髪をけづる。

　円寂の鏡もなくに梳る。

○昨夜より白毛布をかゝへ清楚作意

九月十六日

○暗雨。時々至。

○昨夜重湯を呑むまづき事甚し。

ビスケットに更へる事を談判中々聞いてくれず

○今朝より漸く氷を取り除く

○耕香館畫賸を見る。蘇氏印譜が見たくなる。

○重湯葛湯水飴の力を借りて仰臥僅かに衰弱の回復を待つはまだるこき退屈なり併せて長閑なる美はしき心なり。年四十にして始めて赤子の心を得たり。此丹精を敢てする諸人に謝す

○健全なる人の胃潰瘍は三週間で全治する由。余は最後の出血より計算して今三週間目なり。漸く日に半片のビスケットを許さるゝに過ぎず

九月十七日

○一番にて小宮歸る。雨。

○安心安神靜意靜情。この忙しき世にかゝる境地に住し得るものは至福也。病の賜也。

○昨夜主人鯛一尾を贈る。氷嚢を取り去れる祝の心にや

鯛切れば鱗眼を射る稍寒み

九月十八日

○秋晴洽徹

昨夜は十五夜で美くしき月のよし

○昨夜東洋城歸京の途次寄る。九雲堂の見舞のコップ虞美人艸の模様のものをくれる。戸部の一輪挿是は本人の土産也。

○地方にて知らぬ人余の病氣を心配するもの澤山ある由難有き事也。京都の髪結某余の小さき寫眞を飾る由。金之助といふ藝者も愛讀者のよし　東洋城より聞く

宮樣余によろしくとの事也。

○今日は大分回復と思ふ。明日になると是がイリユージョンである　今日は明日に何か思ふ明日になると是かイリユージョンである。

今朝はソーダビスケットを一枚もらふ　旨くも何ともなかつた

夢中に獻立などをして樂んでゐたがよくなつて見ると馬鹿氣てゐる

○午食に起き返りて始めて粥半椀を食ふ。起き直りつゝある大儀を思へば粥の味も半分は減る位也。吾は是程疲れたりやと驚く

○一等軍醫正矢島氏伊東迄來れる序にと見舞はる森氏の命令也

○　病む日又簾の隙より秋の蝶

○晩に百グラムのオートミール旨し

湯煎ソップ百グラム

玉子豆腐、あん百グラム

九月十九日

○晴

○昨夜は御月見をするとて妻が宿から栗などを取り寄せてゐた。栗がもう出てゐるかと思つて驚いた

病んでより白萩に露の繁く降る事よ

○花が凋むと裏の山から誰かゞ取つて來てくれる。其時は森成さんが大抵一所である。女郎花、薄、桔梗、野菊、あざみに似たものが多い。

○昨日臼川の送つた宇治拾遺を少し讀む。少し讀むと馬鹿々々しくなる。

○瓶に插した薄の葉の上に何時の間にか蟋蟀が一匹留つてゐる。風が搖れるたびに搖れてゐる

○晝のうち恍惚として神遠き思ひあり。生れてより斯の如き遐懷を恣にせる事なし。衰弱の結果にや。夜は却つて寐られず屢眼覺む。

昨夜は修善寺の太鼓の鳴るを待ちたり

蜻蛉の夢や幾度杭の先

蜻蛉や留り損ねて羽の光

○

取り留むる命も細き薄かな

九月二十日

夜來の雨。しばしば眼覺む。

大風鳴萬木　山雨撼高樓
病骨稜如劍　一燈青欲愁

○東云ふ先生は蒼い神々しい顔をしてゐながら食物の事ばかり考へてゐるから可笑しいと。

昨日はソップをやめてオートミールか粥を増す事をねだりて拒絶さる。

間食にミルクとカジノビスケットを食ふは丸で赤子也。

粥を口へ運んでもらふ處は赤子也

佛より痩せて哀れや曼珠沙華

○昨夜看護婦に二度時を聞く。始は四時十分前、後は五時十五分前。修善寺の太鼓は五時頃より鳴るものと知れり。

○昨日より病前に讀みかけた六づかしい本を寐ながら少々讀むに頭の工合は病前と差して異ならず。其癖起き直りて便器にかゝる事は一世の大事業の如く困難である。かほど衰弱したものが何うして哲學的の書物抔を讀む事が出來るかと思ふと不思議である。妻に其事を話すと、あなたは惡かつた二三日頭が判然し過ぎてみんな困りました。

○蘇氏印略が來る。面白いけれども讀めるのは極めて少ない。

○雨中床屋が來て髭を剃る。

○胸も肩も背も觸るとぼろぼろする

○南畫集を買はうと思つたが贅澤過ぎるので躊躇す　妻に話すと御買ひなさいといふ。

九月二十一日

○昨夜始めて普通の人の如く眠りたる感あり。節々の痛柔らぎたるためか。體力回復のためか

○　蟲遠近病む夜ぞ靜なる心

○　餘所心三味聞きゐればそゞろ寒

○　月を亘るわがいたつきや旅に菊

○　起きもならぬわが枕邊や菊を待つ

○朝オートミール百グラムになる。ソーダビスケト一枚ソップ前に同じ

○昨日宮本博士來診の報あり。日取未だ定まらず。博士は一度余に逢ひたき由過日云はれたる由、額田さんは漱石といふ人はどんな顔か見て置きたいと思つて來たと。

○玄耳より醉古堂劒掃と列仙傳を送り來る。(蘇氏印略の一卷を看通した時也)

○爽颯の秋風縁より入る

○嬉しい。生を九仭に失つて命を一簣につなぎ得たるは嬉しい。

生き返るわれ嬉しさよ菊の秋

○遠くにて瓦をたゝく音す

○夜半魚池中に躍る水時あつて池に注ぐ。未だ其狀を見たる事なし

○養其無象　象故常存　守其無體也　全
故眞　全眞相濟　可以長生　天得其眞　故
長　地得其眞　故久　人得其眞　故壽
(長生詮)洞古經よりか?

○(大通經より?)
靜爲之性　心在其中矣　動爲之心　性在其
中矣　心生　性滅　心滅　性生　現如空
無象　湛然圓滿

九月二十二日

○秋冷。昨夜は矢張よく眠らず

○　圓覺曾參文字禪
眉毛今日着前縁
靑山不拒庸人骨
却下九原月在天

○　たそがれに參れと菊の御使ひ

九月二十三日

○昨日より咽喉わろし。濕布

○妻が桑の菓盆を買つてくる。二圓五十錢とい

ふ。桑は陳腐である。もう一つあつた樟のを見てよければ代へたいと思ふ。松の盆一角、六圓程といふ。奇麗也。たゞ全體透明ならず。且つ丸盆が好ましいと思ふ。妻もしかいふ。賴んで外をさがして見る事にする。

○粥も旨い。ビスケットも旨い。オートミールも旨い。人間食事の旨いのは幸福である。其上大事にされて、顏迄人が洗つてくれる。糞小便の世話は無論の事。これを難有いと云はずんば何をか難有いと云はんや。醫師一人、看護婦二人、妻と外に男一人附添うて轉地先にあるは華族樣の贅澤也。

○昨日は雨終日。午前にジェームスの講義をよむ。面白い。蘇氏印略を繰返し見る。面白い。會話の本を讀む。面白い。

○昨雨を聞く。夜もやまず。

○　範賴の墓濡るゝらん秋の雨

　　菊作り門札見れば左京かな

○午前ジェームスを讀み了る　好き本を讀んだ心地す。

○昨夜熱度三十七度一分。輕微の氣管支にて右の方が犯されてゐる由。手を出して本を讀む事を禁ぜらる。

○（病後對鏡）洪水のあとに色なき茄子かな

○家を出る時植木屋の苗から植ゑて庭に下した鷄頭が三四寸になつてゐた。どの位に延びたかと思ふ。其頃は芭蕉の影に花憐元といふものも咲いて居た。

　植木屋が此鷄頭を萬代紅といふ。雁來紅の間違かと思つたらさうぢやない。雁來紅は斑入で是は眞赤になるのだと云つた。

○　菜の花の中の小家や桃一木

○　秋淺き樓に一人や小雨がち

○四時過便通始めて尋常に近き色なり。起きるとき横になつて一寸休んで、起き上つて足をベッドから下して休んで漸く便器にかゝる。手は少し力あれど、足は全く萎て丸で腰の拔けた人の如し。甚しき衰弱なり。

九月二十四日

○　秋淺き樓に一人や小雨がち

○　生きて仰ぐ空の高さよ赤蜻蛉

○今日は新鮮のさしみ、もしあればそを少し食はせてくれる筈。刺身は夫程でもなし

○昨夜右の足の骨が痛むので眠が覺めた。肉がなくて骨許の上へ片々の足を載せたため也。其外尻が痛み手が麻痺して眠の覺むる事多し。

○昨夜痰がつかへて三四度せく。其度に看護婦が起きてくれた。

○今夜は特別列車で觀光團が修善寺へ押かけるよし。其上宮本叔氏と杉本氏もくる由

○　鶴の影穗蓼に長き入日かな

○午飯後髭をそり、髮を梳り、脫糞、衣服を着換へ、坂元の持つて來た新らしい毛布を懸ける。天氣清澄　坂元は昨夜沼津迄來り今朝一番でくる大祭日と日曜と重なる爲也。

○朝 Croce の美學を讀む。

○　一山や秋色々の竹の色

○四時頃楚人冠至る。觀光團と一所也。汽車が一圓いくらとまりが八十五錢馬車が十錢といふ安いもの也。

○腹へる。森成氏へ訴へる。拒絕

九月二十五日

○曇、昨日觀光團のため終夜擾々。相變らず眠らず。夜通し風呂場に人氣あり。朝は暗いうちから顏を洗ふ。夜半に下女の笑ふ聲す。黎明に又下女の聲す。思ふに下女は床に入らざりしなるべし。

○昨夜宮本杉本二氏來診。十時頃喫飯。醫師も規律ある生活は送りがたし。其上觀光團にて恐らく眠り得ざりしならん。

○風流人未死、病裡領清閑。日々山中事、朝々見碧山
○宮本氏云ふ今一週間にて歸京し得べし。まづ二十日と見れば可からんと。診斷の結果なり。同氏は杉本氏と午頃歸る。坂元も同時に歸る。
○　古里に歸るは嬉し菊の頃
○午飯に鯛の刺身四切を食はせらる。平常刺身に嗜好なきも矢張旨し。ソーダビスケットにボターを塗り食鹽をつけて焙りたるを食ふ。是亦旨し。
○昨日觀光團に加はつて見舞に來てくれた畔柳、岡田二人去るとて十一時頃來る。
○　稀なる客に秋の空晴れたり
○　一室に心利きたる下部かな
○午後二時過人去る
　　大切に秋を守れと去りにけり
○十時頃より蒸暑、蝿なく。
○クローチェを讀んで疲勞。
○無言の境、放恣なる安靜、努力なき想像、雲の岫を出るが如く。起りて自然に消ゆ。無抵抗の放任、目的なき計畫、消極に安んずる健忘、悠々たる精神、罣礙なき活動。苦を感ぜざる程の想像、義務なき腦の作用。

九月二十六日
○昨夜始めて起き直つて食事。横に見る世界と竪に見る天地と異なる事を知る。食事うまし。
夜に入つて元氣あり。妻から失心中の事をきく。失心中にも血を吐いて妻の肩に凭れる由。其時間に十分位注射十六筒といふ。坂元がふるへて時々顔をしかめしつかりなさいと云つた。電報をかけるのに手がふるへて字が書けなかつた由。余の見たる吐血は僅かに一部分なりしなり。成程夫では危險な筈である。余は今日迄あれ程の吐血で死ぬのは不思議と思うてゐた。
人間の血の三分一を吐けば昏睡し、二分一を吐けば死する由。
昨夜は藥の所爲か比較的安眠。四時頃迄熟然。夢を始終見たり。ある人の坊主が故郷の家迄うどんを食うたと云つて一時間許りの間に歸つて來た。さうしてうどん程天下に旨いものはないと云つてゐた
○朝始めて起き直つて顔を洗ひ髪を梳る。心地よし。
○始めて床の上に起き上りて坐りたる時、今迄横にのみ見たる世界が竪に見えて新らしき心地なり
　　竪に見て事珍らしや秋の山

　　[illegible]して見る天下も秋に[illegible]月日
○其時松盥に百日紅の殘紅を見る。久しき花なり。余が床に伏したる前既に咲けるものなり
○病中に幸福に移らんとして、今更病を慕ふの情に堪えず。恢復の後はかゝる寛容ある、stressなき生涯、自己の好む儘の心の働きを恣にして朝より夕に至る時間、朝夕余の周圍に奉侍して凡て世話と親切を盡す社會の人、知人、朋友もしくは余を顧ふ人のインダルジェンス。——是等は悉く一朝の夢と消え去りて、殘るものは鐵の如き堅き世界、磨き澄まさねばならぬ意志と、戰はねばならぬ社會丈ならん。
余は一日も今日の幸福を棄るを欲せず。
　一切に移ふれば希望の三分一は物質的狀況にあり　一食を欲するも一切也
○床に就きたる人の天地は床の上に限らるる事無論也。されどもわが病甚しき時の天地は狹き布團の一部分に限られたり。足の付く背の觸るゝ處腰の据わる所丈にて其他はわが領分にあらぬ心地なり。衰弱甚しければ容易に動きもならぬ故也。小さき枕にてもわが領分と領分でなき所ありき頭を動かすは大變な事業也。
○病床のつれ／＼に妻より吐血の時の模樣を

きく、悚然たるものあり。危篤の電報を方々へかけたる由。妻は五六日何も食はなかつた由。森成さんも四五日殆んど飯も食はずに休息せざりし由。顧みれば細き糸の上を歩みて深い谷を渡つた樣なものである。

○看護婦を呼ぶとき杉本さんが早く行かないと間に合はないと云つた由。吐血後一週間は危險なりし由。杉本氏歸る時もう一度吐血すれば助からぬ由を妻に云へる由

九月二十七日

○曇。床の上に起きて顔洗、食事、

○昨夜もよく寐ず。寐れば必ず夢を見る。然し寐てゐる事が大變樂になつた。

○寐られぬ夜

　ともし置いて室明き夜の長かな

○午腹減りて殆んど起き直る事能はず。食後疲れて熟睡三十分藥の時間に看護婦に起さる。

○妻君と森成さんと東と朝日瀧へ行つたらしい。午院閑寂。

○反物屋が雁皮紙織と、眞綿織を持つてくる。眞綿織は伊豆の大島の産也。雅な質で雅な色なり

○三人觀音樣より歸る。堂守から菊を乞うて來る。（金をやつて）

○　堂守に菊乞ひ得たる小錢かな

○　力なや痩せたる吾に秋の粥

○　佳き竹に吾名を刻む日長かな

○　見もて行く蘇氏の印譜や竹の露

○範頼の墓守も花を作るから今度はあすこで貰つてくるといふ。

　秋草を仕立てつ墓を守る身かな

九月二十八日

○曇。昨夜も不眠。去れども眼が冴えるにあらずうと〳〵として天明に至る也。

　秋の蚊の螫さんとすなり夜明方

　（や我を螫さんと

○　瀬家の昔も嘸栗の味

○　鮎の丈日に延びつらん病んでより

○　肌寒をかこつも君の情かな

九月二十八日

○昨日昨夜便通二回。一回を胃腸病院に送る。夜安々と寐る。然し眼未明に覺む。

○桔梗、菊、紫苑、桔梗は濃くふつくらしたり。紫苑は高く大きく薄紫の菊の婆娑たるに似たり

　貧しからぬ秋の便りや枕元

九月二十九日

○　仰臥人如啞　默然對大空
　　大空雲不動　終日杳相同

○昨日も髭剃。細君の注意による。始めは顋の下を剃り落した時は殘り惜さうなりき

○　京に歸る日も近付いて黄菊哉

○晩に玉子の煎りたるを食ふ

九月三十日

陰。漸々寐心よくなる。

○東京より返事。二日前に送つた便に血は交らない由申し來る

○昨夜オレーフ油を十グラム程飲む。是は酸を抑へる功、いたみをとめる功、幽門の出口を滑にする功。及び滋養の功ある由。或病人四十筒の注射をした時オレーフで溶解した（藥液の）ために大いに元氣を回復せる由。

十月一日

○　稻の香や月改まる病心地

○　日似三春永　心隨野水空
　　牀頭花一片　閑落小眠中

○取寄せたる清六家詩鈔、唐賢詩集、宋元明詩集來
○名古屋の鈴木來る
○午　鯛のうしほを食ふ。

十月二日

○夜寐られず。看護婦に小便をさして貰ふ。三時半寐れば夢を見る。夢を見ればすぐ覺める。
○明方戸を明ける時の心持
　天の河消ゆるか夢の覺束な
○
　夢擁銀河白露流
　夜分形影一燈愁
　旗亭病近修禪寺
　聽到晨鐘早上秋
○初めて百舌をきく
　裏座敷林に近き百舌の聲
○
　歸るは嬉し梧桐の未だ青きうち
○雨猶歇まず。細雨也
○午前雲晴日出づ。ミン／＼猶鳴く
○細君、東、森成どこかへ行つたと見えて音なし。
　奥の院。（二十一日の絶食）
○
　歸るべくて歸らぬ吾に月今宵

十月三日

○陰。秋かと思へば夏の末、夏の末かと思へば秋。柿も大分赤き由。栗もとうから出てゐる。稻は半分黄くと。
　雲を洩る日ざしも薄き一葉哉
○小宮が毎日の樣に繪葉書をよこす。歌麿の浮世繪にこんな人になりたいとか、こんな人を演ずる芝居が見たいとか書いてある。たわいもない事である。
　白川も自畫の繪葉書をくれる。御能のスケッチを色取つたものである。松風、鉢の木、山姥等である。たまには文句入である。甚だうまい
○昨夜。鯛の煮たのを食ふ。

十月四日

○陰。雨を帶ぶ。昨夜雨滴千萬點を聞き盡す。
　睡眠狀態漸々平生に近づく
○昨日花を更ゆ。コスモス、菊、菊と野菊の中間にて黄なるもの。東君の取つて來てくれたもの
○氣管支漸く治まる
○昨日妻髮を洗ふ。
○殘骸猶春を盛るに堪へたりと前書して
　甦へる我は夜長に少しづゝ
　骨の上に春滴るや粥の味
○
　米は東京より取り寄せたるものなり
○鶺鴒多き所なり
　・鶺鴒や小松の枝に白き糞
　松濡るゝ、濡るゝは女松。降るは秋雨
○
　寐てゐれば粟に鶉の興もなく
○氣管支にて體を拭く事を禁ぜられたれば觸るとざら／＼して人間の肌とは覺えず。鶏の羽を引きたる如し
　粟の如き肌を切に守る身かな
○午　障子を開けば晴空澄徹久し振也。體を拭く。垢出でゝぼろ／＼す。寐卷を着更ふ。よき心地なり。やがて腹減りて汗出づ。
○夜は朝食を思ひ、朝は晝飯を思ひ、晝は夕飯を思ふ。命は食にありと。此諺の適切なる余の上に若くなし。自然はよく人間を作れり。余は今食事の事をのみ考へて生きてゐる
○
　萬事休時一息回　餘生豈忍比殘灰
　風過梧葉動秋去　露滴竹根沈翠來
　漫道山中三月滯　詎知門外一蹊開
　歸期勿後黄花節　恐有雁聲落舊苔

十月五日

○晴、稍寒。眠無事、殆んど平生に近し。
○
　淋漓鮮血腹中文　嘔照黄昏漾綺紋

入夜通身渾是骨　臥牀如石夢寒雲

○野菜の高き處なりほうれん草の浸し物一人前二十五錢。鷄の高き處也。百目八九十錢。余は日に三百目の湯煎ソップを飲む。其代が日々に二圓乃至三圓也。可驚

○十一日に歸る由。其前にもう一遍便を東京に送りて檢査させると。

○
冷やかな瓦を鳥の遠近す

十月六日

○快晴心地よし。昨夜眠穩。

冷かや人寐静まり水の音

○昨日森成さん畠山入道とかの城跡へ行つて歸りにあけびといふものを取つてくる。ぼけ茄子の小さいのが葡萄のつるになつてゐる樣也うまいよし。女郎花と野菊を澤山取つてくる。莖黃に花青く普通にあらず。野菊が砂壁に映りて暗き所に星の如くに簇がる。

的皪と壁に野菊を照し見る
鳥つゝいて半うつろのあけび哉

○昨日ベアリングの露文學を讀み出す。一昨日にて現今哲學讀了

天下自多事　被吹天下風
高秋知鬢白　衰病夢顏紅

懷友雖無到　讀書道不窮
瘠軀猶裹骨・　愼勿妄磨礱

十月七日

快晴。安眠常人と同じ。

○
朝寒や太鼓に痛き五十棒

○
鏡中人已老　嘔血骨猶存
病起期何日　夕陽復一村

十月八日

○數へると明後々日は東京へ歸る日也。嬉しくもある。又厭でもある。歸りたくもある。歸りたくもない。現狀は餘程の苦痛でなければ變へる事を敢てし得ないものである。

○顏に漸く血の色が出て來た。

十月九日

○雨濛々。朝食。床の上に起き返りて庭を眺めると殘紅をかすかに着けながら、百日紅が既に黃に染つてゐる。

先づ黃なる百日紅に小雨かな

○昨日看護婦が裏の緣側に出てもうあの柚が黃になりましたと云ふ。明後日は東京へ歸る日取なり

いたつきも久しくなりぬ柚は黃に

○コスモスを活けて東が持つて來る。コスモスは干菓子に似てゐると云つたら東は何故ですかと聞いた。何故と聞いちや仕方がないと答へた。花瓶の後ろに銀の袋戸と金の袋戸がある。下が銀で上が金である。中間が砂壁である。其砂壁の所に白と赤の花が點々として美しく映じてゐる。さうして其葉の處が青く銀紙に映つてゐる。

十月十日

○陰・

○昨夜、寄木細工を取り寄せて色々見る。箱を三つ買ふ。皆婦人趣味なり。あけびの箱を買ふ。又誂へた樟の烟草盆と烟草箱が一昨日出來上る。

○愈明日東京へ歸れると思ふと嬉しい。

○
客夢回時一鳥鳴　夜來山雨曉來晴
孤峯頂上孤松色　早映紅暾鬱々明

○
足腰の立たぬ案山子を車かな

○昨夜見やげもの抔を買ふ事を相談する。やるとなると何處も彼處もやらなければならぬので

大變になる、細君が立會人と修善寺節と神主さんと間に合せて置からといふ。それもよからうといふ。

○神代杉の文庫とあけびの籃を買つて池邊滿川両氏にやり更に桑の硯箱を坂元に縮緬の兵兒帶を添へてやる事にする。

○　骨許りになりて案山子の浮世かな

○　扶け起す案山子の足

十月十一日

愈歸る日也。雨濛々、人々天を仰ぐ。荷拵出來。九時出立の筈。

○甘鯛の頭付にて粥二碗、オートミール一碗をしたゝむ。

○雨の中を馬車にのる。人の考案にて檻の如きものにて二階を下る。夫を馬車の中へ入れる。浴客皆出見る。檻は白布で蔽はる。わが第一の葬式の如し

○雨の中を大仁に至る二月目にて始めて戸外の景色を見る。雨ながら樂し。目に入るもの皆新なり。稻の色尤も目を惹く。竹、松山、岩、木槿、蕎麥、柿、薄、曼珠沙華、射干、悉く愉快なり。山々僅かに紅葉す。秋になつて又來たしと願ふ。

○大仁にて宿屋の主人、番頭先づあり。番頭は人足四人をつれて三島迄來る。漸くに汽車を乘りかゆ。人足なかりせば必ず後れたらん。一等室借切りなり。九人のを六人前出す二十二圓。某也、神奈川にて東洋城乘る。大森にて禿人冠乘る。新橋にて人々出迎はる少々驚く直ちに擔架にのる。大抵の人には目禮した積なり。あとで聞けば知らぬ人多し。釣臺で病院に行く暗い中で四邊更に分らず

入院故郷に歸るが如し。修善寺より靜なり。面會謝絕、醫局の札をかゝげたる由。壁を塗り疊をかへて待つてゐると云はれた杉本氏の言葉はまことなり。落付いて寐る。電車の音も左迄ならず。

○終夜雨

十二日

○朝、食パン二片、牛乳一合、ソップ一合、玉子一個を食ふ。修善寺の倍にあたる

○昨日途中にて

○　病んで來り病んで去る吾に案山子哉

○　濡るゝ松の間に蕎麥を見付たる

○　藪陰や濡れて立つ鳥蕎麥の花

○　稻熟し人癒えて去るや温泉の村

○　柿紅葉せり纏はる蔦の青き哉

○　就中竹綠也秋の村

○　數ふべく大きな芋の葉なりけり

○　新らしき命に秋の古きかな

○院長の病氣を昨夜後藤さんに聞く。

えゝ又寒くなつたものですから

今朝妻が來て實はあなたに隱してゐました院長は死んで、葬式には香奠を持て東さんに行つてもらひました。死んだのは先月五日のよし。森成さんが最初に歸つたのは危篤のため後で歸つたのは葬式のためだといふ。わるくなつたのは八月の二十四日頃即ち余の吐血したる頃なり。初め余の森成さんを迎へたる時、院長はわざわざ電報で其地にて充分看護せよと電報をかけたり。治療を受けた余は未だ生きてあり治療を命じたる人は既に死す。驚くべし

逝く人に留まる人に來る雁

○杉本さんが疊替をして待つてゐるといふ。成程疊も新らしく壁も塗りかへ、襖も張り替へたり。居心地頗るよし。

○滿鐵の龍居が來て中村が心配してゐる由を妻に物語る。余が要るなら遠慮なく云へといふ意味らしといふ

十月十三日

○陰雨。

○　鷄頭に後れず或夜月の雁

○　釣台に野菊も見えぬ桐油哉

○夜十二時地震あり

○安倍、坂元、池邊、來。妻來

○ジェームスの死を雜誌で見る。八月末の事、六十九歳。

十月十四日

○陰雨

○病室の新らしくなりたるを喜んで

俳句を書きて前にしてあり。

○昨日滿鐵の山崎氏父見舞を持參。

十月十五日

○　思ひけり既に幾夜の蟋蟀

○曉に氷を摧く音を聞く。はづれの人は胃潰瘍の由。しかも重態と聞く。快復を祈る。

○曉より烈しき雨。恍惚として詩の推敲に價す。何の改竄を夢中になる。

清露下南澗

黄花粲照顔

欲行沿澗遠

却得與雲還

○Dr. Furnivall ノ死セシ月九日の Athenæum = Saturday トアリ

十月十六日

陰。二時半より眼覺む。

天地有無裏　死生交謝時

人間失寄託　如蹈一藕絲

命根來何處　靈臺不可知

窈窕日月遷　茫々萬象危

こゝ迄考へたら看護婦が起きて掃除を始めた。

○昨夜浣腸

○

闡明忽咫尺　乾坤乍輸移

單軀跨雙界　隻眼挂大疑

幸生天子國　未逢當代師

四十猶兀々　斯道果屬誰

○鈴木、森田、小宮次の室に來り語る外にも人ある樣なり

○狩野來る由會はず歸す。昨日の小林醫師も同じ。今朝長與氏父郎氏日迄來て引き返せる由

十月十七日

陰。四時に眼覺む。

縹緲天地外　生死交謝時

杳然無寄託　懸命一藕絲

命根何處在　窈窕不可知

唯覺天日暗　翻怪人間奇

幽明固比隣　乾坤一瞬移

單軀入雙界　隻眼挂大疑

休言闘兩極　曷得窮兩儀

生任天子國　未許稱人師

四十徒兀々　斯道竟屬誰*

朝食前に昨日の詩を改めてこんなものにした。實際の詩である。詩のための詩ではない。だから存して置く。

○病院でも朝五時頃になると太鼓の聲が聞える。始めて聞いた時は恍惚のうちに修善寺に居た樣な心持がした。

○

過ぎし秋を夢みよと打ち覺めよとうつ

*孤愁澹雜語　況逢蕭颯悲

仰臥秋已闌　一病欲銀髭

寥廓天空在　默見高果枝

十月十七日

晴。

○昨服部より銀の貰人を取り寄せて見る。森成さんと相談の上、光澤けしの小さい奴を撰びそ

れに修善寺にて森成國手へと清書して
朝寒も夜寒も人の情かな　といふ句をほる事
にする。價は十三圓五十錢也彫賃は知らず

十月十八日

○昨日品川柳次郎來[illegible]を運ぶ

○同時日[illegible]來。池邊の所に至り余の旨を傳へたる由を話る

○昨日[illegible]てフラネルの柄を擇ぶ。

○昨日、修善寺の菊屋の朝日より電話、御誂への寄木の箱は數不足故新たに作らせるから待つて吳れといふ。妻にきくと十六個注文したといふ。皆[illegible]にやるなり。

○今朝昨日の古詩を作り了へ帳面の末尾に書く。

一帳面の末尾より寫出一

縹緲玄黄外　生死交謝時
杳然無寄託　懸命一藕絲
命根何處是　窈窕不可知
只驚白日晴　翻怪人間奇
單心貫雙界　隻眼挂大疑
闇明咄嗟變　乾坤頃刻移
敢言闘兩極　曷得明二儀
語默共勃窣　吾事問向誰

孤愁來落枕　又搖蕭颯悲
仰臥秋已闌　苦病欲銀髭
寥廓天猶在　高樹空餘枝
對比惆悵久　晩懷無盡期

○秋意譜によろし。

○今朝眼覺めて發句を思ふ遂にならず
鳴かぬ夜は蟬も亦死んだと思ふ
と云ふ樣な意味のものなり。

○鷗外漁史より「消渇」を贈り來る。漱石先生に捧け上ると書いてありたり　恐縮

○宮本叔氏見舞。東京市廳迄來れりといふ。暫時にして歸り去る。

十月十九日

○快晴。昨夜眞人の上へ貼る瓤皮の上へ細字で發句と前書をかく。それを貼り付けて彫る事にする。寫眞では燒き付けがたしといふ。

○朝食前庭便。

○リードのナチュラル　エンド　ソシアル　モラルスを讀み出す。

○菅來る。重武が脚氣で鎌倉へ連れて歸つたと云ふ。自分も大森を引き上げて鎌倉に居る由

○內丸來。東洋城來。皆面會謝絕を無視して來る。東洋城と俳句を作る。宮內省御料地のバタを四斤くれる。

十月二十日　快晴

○昨日實彥より長き手紙届く。病氣の事を內丸の報知で知れる由。旅行中の事など巨細記しあり面白し。

○一思ひ出す事など一一を書き草平に送る。十一時半頃突然花火の音をきく。寺內統監の歸京の由也

十月二十一日

雨。朝東洋城に端書を出す。菊の句をたのまれた故也。昨日草平來。しばらく話す

○妻來。昨夜よりウォードのダイナミック　ソシオロジーを讀む。

獨乙の哲學者の言說は雲の峯の如し。ウォード杯の著述は地を行く人に似たり。平々たり坦坦たり。而して足遂に地を離れず。散文的也

○森成君に病氣前の寫眞を望まれて一句を題す
顧みる我面影やすでに秋

○昨日池邊來。過般來社から出して吳れた金の處置に就いて自分に一任せよといふ。諾す。實は歸り匆々妻を以て辨償の事を申し出でたるなり

○一等に入院の人は食道癌一人。胃潰瘍一人。何れも死ぬ人のみなり。食道癌の人は中途にて退院他の二人はもう二三日で六づかしいといふ。親類抔聚まる模樣也。胃癌の人は死ぬのもあきらめさへすれば何でもないと云ひたる由。

十月二十二日

○陰。昨夜十一時三十分、二時二十分前、四時三十分前に目覺む。

○　曉や夢のこなたに淡き月

是は寐ながらの句也。今朝の實況にはあらず

○緣にベコニヤあり。昨日妻の持つて來たもの。實は菊を買ふ積の處植木屋が十六貫だといふので、森成さんが五貫にまけろと云つたら負けなかつた。歸りに六貫やると云つたら矢張負けなかつた。さうである。今年は水で菊が高いさうである。

○　ぶら下る蜘蛛の糸こそ冷やかに

晝食後始めて室内をあるく。木庵の落款が見たくなりし故也。序に北の廊下口迄出て面會謝絶の貼紙を見る。

十月二十二日

半晴。十一時過。三時半小便をする。

○　嬉しく思ふ蹴鞠の如き菊の影

○昨夜九時半頃胃癌の加藤さんが死んだよし。道理で眼を覺ますと人聲が聞えた。余は看病のため徹夜するのかと思つてゐた。一等室に殘るは胃潰瘍の二人である　其一人は二三日有つか有たぬかといふ所なり。

○　肩に來て人懷かしや赤蜻蛉

○　澁柿も熟れて王維の詩集哉

十月二十三日

○晴。夜十時、三時十五分前に目醒む。兩度共小便

○　つく〴〵と行燈の夜の長さかな

小行燈夜半の秋こそ古めけり

○尻の痛み漸く癒ゆ

○細き足漸く瘠せた身體を支ふ。力石を持ち上げる樣な氣分直る。

○胃潰瘍の人今日晩景に死す。吾等三人のうちわれ一人生殘る。氣の毒の心地す。此病人嘔氣ありて始終げえ〳〵吐きたるに此二三日は靜なる故或は快氣に向へるかと思へるに實は疲勞の極聲を出す元氣を失ひたるものと知れたり。

十月二十五日

○雨と陰の間。

桃花馬上少年時（醉吟時）

笑據銀鞍拂柳枝

綠水如今迢遞去

空留明月照秋思

別懸

猶可。

○　一叢の薄に風の強き哉

○　雨多き今年と案山子聞くからに

○　柿一つ枝に殘りて烏哉

○一等患者三名のうち二名死して余獨り生存す。運命の不思議な事を思ひ。上の句あり。

○昨地震あり。看護婦が見舞に來る。長き地震なり。三時半と覺ゆ。

十月二十六日

陰。二十三か二十四の日記をつけ損つたり。

○一昨夜二十四日の晩澁川玄耳入院。胃カタールか何か分らぬ由。ちつとも知らず。余の病氣につき世話をしてくれた男今は余と同じ樣に病院の患者となる。うその樣なり。

○昨日純一來る。純一を見たのは八月六日ぎりなり。少し背が高くなつた樣なり

○今朝小便出づ。のどえがらつぽし。始めて袷をきる。

○山田美妙齋の死を新聞できく。癌腫のよし。

十月二十七日

○晴。三時頃より眼覺む。眠つたり覺めたりして例刻迄過ぐ。詩一首句一句を褥中に得。

馬上青年老　鏡中白髮新
幸生天子國　願作太平民

○
君が琴塵を拂へば鳴る秋か。
(寅彦のヴァイオリンの事を考へ出して)

○弓削田が來て大分長く話をする。區役所の役人の樣な服裝をしてゐる。

十月二十八日

○晴。身體を拭く。

○昨日東よりボカーの佛譯來る。二三頁讀む。

○明日は霞寳會の日なり。森成さんは行かれるにや。

十月二十九日

○雲出づ。陰晴共に不明。

○昨夜服部より森成さんにやる貰人を持參。綱君不在にて余なき故拂はず。小使又持つて歸る。

○澁川の妻君が來て、ウァーファーとカルヽス煎餅をくれる。

○中根榮といふ名古屋の人「思ひ出す事など」を讀んで長い手紙をくれる。

○中村蓊來。西村醉夢來。

○日課、例によりウェードのダイナミック社會學、ボカーの佛譯。

○森成さんが越後高田の笹飴をくれる。一日に三つ許さる。

○雨の音蕭々の夜

十月三十日

○陰。將に晴んとす

○昨日は客四人に接す。社の山本。澁川の妻君。中村蓊。西村醉夢。

○昨日體量をはかる。フラネルに薄い毛織のシャツを着て四十四キロ五百ありたり。もと病院を出た時は四十九キロなにがしなりき

○坂元來るから、晩妻來。ごた／＼する氣分にて、自分の思ふ事出來ず。不快なり。

○晩に病院の園丁が手作りの菊二鉢を贈り來る。見事なる白菊也。白菊は院長の遺愛の品のよし。院長は菊を愛せるよし。英國から取寄せた菊が咲いた時見せたら口が利けないので、胸に手をあてヽ其手を以て胸を打ち喜を表したりといふ

○森成さんに貰入を贈る。

○願ふ所は閑靜なり、ざわつく事非常に厭なり

十月三十一日

○曉に昨夜の菊を見る。

○風流の友に逢ひたし。人生だの藝術だの何のかのといふものには逢ひたくなし。

○今の余は人の聲よりも禽の聲を好む。女の顏よりも空の色を好む。客よりも花を好む。談笑よりも默想を好む。遊戲よりも讀書を好む。願ふ所は閑適にあり。厭ふものは俗事なり

○妻が昨夜來る時車屋の寄屋で病院へ行くならと云つてダリヤを呉れた。此ダリヤは丸で菊の樣な大きなものである。花瓣の亂れた百合も丸で大輪の菊である。色は赤、薄紅、黄等である。何となく下品で菊とは較べられない。梅もどきの傍へ放り込んだら不釣合な事甚しい。

○余の病中のプログラムを打ち毀して、其損失

を償らて餘りある樣な友人なら余はいつでも驩迎する。余はかくの如き友人を多く持たない事を甚だ口惜く思ふ。

○澁川の室より小さい菊の土鍋の平たいのに入れて、長い蔓をつけて提げる樣にしたものを呉れる。苔の間に白砂を蒔いて、札を立てゝ目黑の里としてある。

○神崎さんがダリヤを呉れる。ダリヤは今年に入つて非常に發達した樣である。大輪の菊の如きもの續々出る。

○　明けの菊色未だしき枕元
　　日盛りやしばらく菊を縁のうち
　　縁に上す君が遺愛の白き菊
　　井戸の水汲む白菊の晨哉
　　蔓で提げる目黑の菊を小鉢哉

十一月二日

陰。昨草平來、丸善と南江堂へ電話をかけてもらふ。坂元來、是は醫師の謝禮につき池邊と宮本兩氏の相談の經過を報告の爲め、

○朝倫敦の大谷正信よりプレイゴーアー、及びソサエチー一部寄贈、修善寺へ屆きたるを回送せり

○身體を拭き爪を剪る。

　　形ばかりの浴す菊の二日哉

十一月三日

雨。　三日の菊雨と變るや昨夕より

十一月四日

晴。からだを拭く。

○小使が貸してくれた二鉢の白菊に蟲がつく、小使がそれを癒してやると云つて代りに別の鉢を貸してくれた。それは黄の蕋に細い長花片が間を置いて出てゐるものである。野菊の大きいものである。普通の菊よりも雅である。

○小西海南見舞にくる。讃岐の話をする。

○太田誧三郎が立派な風月堂の菓子折を置いて行く。四日の日附のある菓子折なり。

十一月五日

○ナゴヤの鈴木より花瓶を送る旨申し來る。

○森成さんが越後の笹飴をくれる。雅なものなれど旨からず。カステラはと聞いたら胃にも腸にも瓦斯があるから御止しなさいと云つて止められる。

○森圓月來る。疲勞を言譯にして不會。一時間程して小使手紙を持て來る。藏澤の墨竹の軸を添ふ。御見舞とも御土産とも致し進呈すとあり。早速床にかく。

○體重四十五キロ三百。前週より一キロ九百グラム增す。十二貫餘なり。

○病院へ入つたら好い花瓶と好い懸物が欲しいと云つてゐたら、偶然にも森圓月が藏澤の竹をくれる。禎次が花瓶をくれるといふ報知をする。人間萬事から思ふ樣に行けば難有いものである。

○　笹飴の笹の香や　原

○菊の鉢は夜見る方よし。
　　燭し見るは白き菊なれば明らさま

○夜鐵瓶の音をきく。

十一月六日

○つね子、えい子、あい子三人來る。有樂座の御伽芝居を見に行く。歸りに又寄る。

十一月七日

晴。

○鈴木より花瓶とゞく。平安萬磯堂と蓋に銘あり。

十一月八日
○昨日丸善よりケンブリヂ、英文學史五六二卷を持參す。
○昨日町井さんに菊を買に行つてもらふ。十輪で十二錢也。直ちに鈴木のくれた瓶に插む。
○胃腸病院長南名宛の手紙をかく。三等の病人喧騒して堪へがたき故なり。

十一月九日
晴。午前陰に變ず。

十一月十日
秋雨蕭々
看護婦が小説を讀んでゐる。奇麗な表紙だから何だと聞いたら笑つてゐる。見ると虞美人草であつた。六づかしい本だから止せと忠告した。

十一月十一日
霧。霧中に電燈を見る。
○金子薫園より短冊と畫帖に題句をたのまる。
○今日は修善寺を出て一ケ月目なり

十一月十二日
晴。是公、三重吉、山口弘一より來信。

○三重吉喇叭を稽古す。
○　藏沢の竹を得てより露の庵
○體重。四十六キロ七百。前週より一キロ四百増加ス

十一月十三日
晴。
○新聞で楠緒子さんの死を知る。九日大磯で死んで、十九日に東京で葬式の由。驚く。
○大塚から楠緒さんの死んだ報知と廣告に友人總代として余の名を用ひて可いかといふ照會が電話でくる。
○池邊義象氏來。倫敦で逢つたぎりなり。
○東　來、洋服を着てゐる。東洋城來。
○妻來。

十一月十四日
晴
○昨日山田の奥さんから鉢植の西洋花をもらふ。雪の下の様な葉に菫の様な紫の花が出てゐる。雪の下の葉よりも遙かによし
○妻來。横濱に行くといふ。森成さんの出診料として五百圓事務に拂ふ。
○菅來。鋼午來。

十一月十五日
○晴。床の中で楠緒子さんの爲に手向の句を作る

　棺には菊抛げ入れよ有らん程
　有る程の菊抛げ入れよ棺の中

○　ひたすらに石を除くれば春の水

十一月十六日
○曇
○昨夜二時頃火事ありと見えて、蒸汽喞筒の鈴の音聞ゆ。今朝きけば麻布長坂の下のよし。

十一月十七日
晴。看護婦が父からもらつて來て瓶に活ける。入院患者に植木屋があつて澤山餘つた花を洗面所に置いてどなたでも好ければ持つて入らつしやいと云ふのださうである。菊の名を知らず
○昨日池邊三山薩天錫の詩集と蛻巖の詩集を持つて來てくれる。
　蛻巖の詩の七言絶句抔はゴマカシもの多し。蛻巖の文章に至つては甚だ整はず、まゝ、を交ゆ。

十一月十八日

晴。始めて微霜を見る。須臾にして日の爲に解く。

○今日午飯に始めてめしを食はせる。粥より旨し。

十一月十九日

晴。今日は楠緒さんの葬式である。好き天氣で幸である。

○妻が昨日電話で風邪の由を言ひ越す。今朝森成さんが來て昨夕見舞に行つたと云ふ。風邪の氣味故處方を置いて歸つたといふ。今日大塚の葬儀には行かれぬらし

十一月二十日

晴。此前入院した時よりは肥ゆ。昨日體重をはかる十二貫九百四十也。一週間に四五百目づつ増して行く。

十一月二十一日

晴。昨日午後五時頃渡邊和太郎さん横濱より來る。八時頃迄話して歸る。

十一月二十二日

晴。午前石井柏亭來。

十一月二十三日

曇。午後黒田朋信來

○蛻巖集後篇の八の終にある梁邦鼐の撰した蛻巖府君行述の一節に曰く

府君年二十業見二毛。未及五十。齒牙豁。眉髪皓々。七十齒牙不復存一根。眉髪成黄。

十一月二十四日

風。坂元來。晩餐の時電燈悉く消ゆ。二十分後又明なり

十一月二十五日

晴。今日より午も晩も普通の飯となる。午食後二時間程寐る。覺めると頭が痛む、晩食後又寐る。八時頃覺めると今度は胸がわるい、さうして頭も依然として痛い。

十一月二十六日

晴。朝、乳をやめる。頭少しよし

○今日より野菜を少し宛食はせる。生返る心地なり

○池邊三山來。社の金を社長が君にやるから隨意に處置したら善からうといふ。余も其處で貰ふ事にする。せめて二三百圓でも取つて公共の事に使つたらといつたら面倒だと云つて歸つた。

十一月二十七日

○久し振りで妻來る。頭が痛いといふ。筆は此間からハラチフス、毎日森成さんの厄介になつてゐた由。始めてきく。

十一月二十八日

晴。山田茂子さんから奇麗な薔薇をくれる。

○二三日前から肴が全くいやになる。副食についてゐる些少の野菜を食ふ。

○龍居賴三來訪 明朝九時是公が新橋へ着く由をいふ。山田さんへ電話をかけてうち、其由を取次いでもらふ

十一月二十九日

晴。能成來、草平來、是公來。是公は馬車に乗つて來たといふ。看護婦の話也

十一月三十日

雨。寒氣を覺ゆ。始めて入浴心地快。

十二月一日

晝晴。韋柳詩集と王孟詩集を買ふ。

十二月二日

晴。菅の重武が死んだので妻が鎌倉へ行く。重武はベースボールで足を怪我して夫から足を切つて片足になつた。夫から脚氣だと云つて菅が東京から鎌倉へ連れて行つた。さうしたら肋膜だといふ。氣の毒な事をした。

十二月三日

晴。玄耳が來て人から頼まれた短册をかけといふ。

松山かくる。夏以來逢はず。

十二月四日

晴。栗原、梅谷來。

(玄耳先生退院。)

十二月五日

欠。

十二月六日

是公が龍居賴三と一所にくる。龍居君がシルクハットを被つてゐるから何處へ行つたかときいたら、野村龍太の御姉さんの葬式に行つた歸りだといふ。

十二月七日

晴。

十二月八日

晴。坂元、小宮、來。夜に入りて東洋城來。

十二月九日

晴。島村苳三來。

十二月十日

晴。生田長江來。行德來。體重五十一キロ(十三貫五百六十六匁)。夜奧村來。

十二月十一日

晴。内丸、野村、下の竹中から花束をくれる。

妻、東、小供

十二月十二日

晴。太田達三郎來る。何時の間にか相場師になつて、結城紬の着物を着てゐるには驚ろいた。

十二月十三日

晴、欠。

十二月十四日

晴、菅來。

十二月十五日

晴。橋口來。水仙をくれる、支那の沙市の話をする

十二月十六日

晴、欠　夜雨。

十二月十七日

晴、高原操來。

十二月十八日

欠　行德歸。

十二月十九日
欠

十二月二十日
曇。能成來。今明日中に歸省すといふ。障子をあけると鳶色の霧なり。倫敦の臭がして不愉快なり

十二月二十一日
陰。橋本左五郎來。午過草平豐隆來。豐隆明夕故郷に出立結婚の爲也。

十二月二十二日
晴。六時草平來。七時山田の奧さん來。西洋花二鉢をくれる。

十二月二十三日
晴。中村是公、龍居頼三、鈴木禎次、高濱虚子、妻

十二月二十四日
晴、體重五二キロ百、

十二月二十五日
晴、三浦見習士官。天生目一治。中村是公、渡邊和太郎。

十二月二十六日
晴。大塚、坂元、竹中、妻、

十二月二十七日
晴。物集和子、草平、本多直次郎、

十二月二十八日
晴。戸川秋骨　橋本左五郎

十二月二十九日
晴。坂本四方太。坂元雪鳥

十二月三十日
晴。森卷吉、妻

十二月三十一日
欠

一月一日
島村、子供、野上

一月二日
妻來、

一月三日
中根倫、坂元、小林修次郎、野村傳四、東新、

一月四日
晴。夜古郷時待。――鹽瀬の大きな菓子折をくれる。重くてやつと持つやうなものなり。風呂敷ごと玄關に置いて行つたのを翌日午になつて漸く病室に擔ひ入る。

一月五日
欠

一月六日
欠

一月七日
神崎、野村、體重五三キロ三百(十四貫百七十八匁)

一月八日
欠

一月九日
山田茂子、服部嘉香、来

一月十日
犬塚武夫、坂元雪鳥、

一月十一日
森田草平、

一月十四日
體重五十四キロ二百（十四貫四百十七匁）
鈴木謙爾、岡田耕三、

一月二十一日
五十四キロ八百（十四貫五百七十六匁）

思ひ出す事など抄

○

(原本十三)

其日は東京から杉本さんが診察に來る手筈になつてゐた。雪鳥君が大仁迄迎に出たのは何時頃か覺えてゐないが、山の中を照す日がまだ山の下に隱れない午過であつたと思ふ。其山の中を照す日を、床を離れる事の出來ない、又室を出る事の叶はない余は、朝から晩迄殆んど仰ぎ見た試しがないのだから、斯う云ふのも實は廂の先に餘る空の端丈を目當に想像した刻限である。――余は修善寺に三月と五日ほど滯在しながら、何方が東で、何方が西か、どれが伊東へ越す山で、どれが下田へ出る街道か、丸で知らずに歸つたのである。

杉本さんは豫定の如く宿へ着いた。余は其少し前に、妻の手から吸飲を受け取つて、細長い硝子の口から生溫い牛乳を一合程飲んだ。血が出てから、安靜狀態と流動食事とは固く守らなければならない掟の樣になつてゐたからである。其上出來る丈病人に營養を與へて、體力の回復の方から、潰瘍の出血を抑へ付けるといふ療治法を受けつゝあつた際だから、否應なしに飲んだ。實を云ふと此日は朝から食欲が萌さなかつたので、吸飲の中に、動く事の出來ぬほど濁つた白い色の漲ぎる樣を見せられた時は、すぐと重苦しく舌の先に溜るしつ濃い乳の味を豫想して、手に取らない前から既に反感を起した。強ひられた時、余は已むなく細長く反り返つた硝子の管を傾けて、湯とも水とも捌けない液を、舌の上に辷らせようと試みた。それが流れて咽喉を下る後には、潔よからぬ粘り強い香が妄りに殘つた。半分は口直しの積りであとから氷クリームを一杯取つて貰つた。所が何時もの爽かさに引き更へて、咽喉を越すと一旦溶けたものが、胃の中で再び固まつた樣に妙に落ち付が惡かつた。夫から二時間ほどして余は杉本さんの診察を受けたのである。

診察の結果として意外にも左程惡くないと云ふ報告を得た時、平生森成さんから病氣の質が面白くないと聞いてゐた雪鳥君は、喜びの餘りすぐ社へ向けて好いといふ電報を打つて仕舞つた。忘るべからざる八百グラムの吐血は、此吉報を逆襲すべく、診察後一時間後の暮方に、突如として起つたのである。

斯く多量の血を一度に吐いた余は、其暮方の光景から、日のない眞夜中を通じて、明る日の天明に至る有樣を巨細殘らず記憶してゐる氣でゐた。程經て妻の心覺に付けた日記を讀んで見て、其中に、ノウヒンケツ(狼狽した妻は腦貧血を斯の如く書いてゐる)を起し人事不省に陷るとあるのに氣が付いた時、余は妻を枕邊に呼んで、當時の模樣を委しく聞く事が出來た。徹頭徹尾明瞭な意識を有して注射を受けたとのみ考へてゐた余は、實に三十分の長い間死んでゐたのであつた。

夕暮間近く、俄かに胸苦しい或物のために襲はれた余は、悶えたさの餘りに、折角親切に床の傍に坐つてゐて吳れた妻に、暑苦しくて不可ないから、もう少し其方へ退いて吳れと邪慳に命令した。夫でも堪へられなかつたので、安靜に身を横ふべき醫師からの注意に背いて、仰向の位地から右を下に寐返らうと試みた。余の記憶に上らない人事不省の狀態は、寐ながら向を換へにかかつた此努力に伴ふ腦貧血の結

果だと云ふ。
　余は其時さつと迸しる血潮を、驚ろいて余に寄り添はうとした妻の浴衣に、べつとり吐き懸けたさうである。雪鳥君は聲を顫はしながら、奥さん確かりしなくては不可ませんと云つたさうである。社へ電報を懸けるのに、手が戰いて字が書けなかつたさうである。醫師は追つ懸け追つ懸け注射を試みたさうである。後から森成さんに其數を聞いたら、十六筒迄は覺えてゐますと答へた。

淋漓絳血腹中文　嘔照黄昏漾綺紋
入夜空疑身是骨　臥牀如石夢寒雲

○　十四

　眼を開けて見ると、右向になつた儘、瀬戸引の金盥の中に、べつとり血を吐いてゐた。金盥が枕に近く押付けてあつたので、血は鼻の先に鮮かに見えた。其色は今日迄の樣に酸の作用を蒙つた不明瞭なものではなかつた。白い底に大きな動物の肝の如くどろりと固まつてゐた樣に思ふ。其時枕元で含嗽を上げませうといふ森成さんの聲が聞えた。
　余は默つて含嗽をした。さうして、つい今しがた傍にゐる妻に、少し其方へ退いてくれと云つた程の煩悶が忽然何處か、消えてなくなつた事を自覺した。余は何より先にまあ可かつたと思つた。金盥に吐いたものが鮮血であらうと何であらうと、そんな事は一向氣に掛からなかつた。日頃からの苦痛の塊を一度にどさりと打ち遣り切つたといふ落付をもつて、枕元の人がざわざわする樣子を殆んど餘所事の樣に見てゐた。余は右の胸の上部に大きな針を刺されて夫から多量の食鹽水を注射された。其時、食鹽を注射される位だから、多少危險な容體に逼つてゐるのだらうとは思つたが、それも殆んど心配にはならなかつた。たゞ管の先から水が洩れて肩の方へ流れるのが厭であつた。左右の腕にも注射を受けた樣な氣がした。然し判然覺えてゐない
　妻が杉本さんに、是でも元の樣になるでせうかと聞く聲が耳に入つた。左樣潰瘍では是まで隨分多量の血を止めた事もありますかと云ふ杉本さんの返事が聞えた。すると床の上に釣るした電氣燈がぐらぐらと動いた。硝子の中に彎曲した一本の光が、線香煙花の樣に疾く閃めいた。余は生れてから此時程強く又恐ろしく光力を感じた事がなかつた。其咄嗟の刹那にすら、稻妻を眸に焼き付けるとは是だと思つた。時に突然電氣燈が消えて氣が遠くなつた。
　カンフル、カンフルと云ふ杉本さんの聲が聞えた。杉本さんは余の右の手頸をしかと握つてゐた。カンフルは非常に能く利くね、注射し切らない内から、もう反響があると杉本さんが又森成さんに云つた。森成さんはえゝと答へた許りで、別にはかばかしい返事はしなかつた。夫からすぐ電氣燈に紙の蔽をした。
　傍が一しきり靜かになつた。余の左右の手頸は二人の醫師に絶えず握られてゐた。其二人は眼を閉ぢてゐる余を中に挾んで下の樣な話をした。其單語は悉く獨逸語であつた。
「弱い」
「えゝ」
「駄目だらう」
「えゝ」
「子供に會はしたら何うだらう」
「さう」
　今迄落付いてゐた余は此時急に心細くなつた。何う考へても余は死にたくなかつたからである。又決して死ぬ必要のない程、樂な氣持でゐたからである。醫師が余を昏睡の狀態にあるものと思ひ誤つて、忌憚なき話を續けて

ゐるうちに、未練な余は、瞑目不動の姿勢にありながら、半無氣味な夢に襲はれてゐた。そのうち自分の生死に關する斯樣に大膽な批評を、第三者として床の上にぢつと聞かせられるのが苦痛になつて來た。仕舞には多少腹が立つた。德義上もう少しは遠慮しても可ささうなものだと思つた。遂に先がさう云ふ料簡なら此方にも考へがあるといふ氣になつた。――人間が今死なうとしつゝある間際にも、まだ是程に機略を弄し得るものかと、回復期に向つた時、余はしばしば當夜の反抗心を思ひ出しては微笑んでゐる。――尤も苦痛が全く取れて、安臥の地位を平靜に保つてゐた余には、充分大丈の餘裕があつたのであらう。

余は今迄閉ぢてゐた眼を急に開けた。さうして出來る丈大きな聲と明瞭な調子で、私は子供抔に會ひたくはありませんと云つた。杉本さんは何事をも意に介せぬ如く、さうですかと輕く答へたのみであつた。やがて食ひ掛けた食事を濟まして來るとか云つて室を出て行つた。夫からは左右の手を左右に開いて、其一つ宛を森成さんと雪鳥君に握られた儘、二人とも無言のうちに天明に達した。

　冷やかな脈を護りぬ夜明方

○

—原本十五—

強ひて寐返りを右に打たうとした余と、枕元の金盥に鮮血を認めた余とは、一分の隙もなく連續してゐるとのみ信じてゐた。其間には一本の髮毛を挾む餘地のない迄に、自覺が働いて來たとのみ心得てゐた。程經て妻から、左樣ぢやありません、あの時三十分許は死んで入らしつたのですと聞いた折は全く驚いた。子供のとき惡戯をして氣絶をした事は二三度あるから、夫から推測して、死とは大方斯んなものだらう位にはかねて想像してゐたが、半時間の長き間、其經驗を繰返しながら、少しも氣が付かずに一ケ月あまりを當然の如くに過したかと思ふと、甚だ不思議な心持がする。實を云ふと此經驗――第一經驗と云ひ得るかが疑問である。普通の經驗と經驗の間に挾まつて毫も其連絡を妨け得ないほど內容に乏しい此――余は何と云つてそれを形容して可いか遂に言葉に窮して仕舞ふ。余は眠から醒めたといふ自覺さへなかつた。陰から陽に出たとも思はなかつた。微かな羽音、遠きに去る物の響、逃げ行く夢の匂ひ、古い記憶の影、消える印象の名殘――凡て人間の神祕を敍述すべき表現を數へ盡して漸く髣髴すべき靈妙な境界を通過したとは無論考へなかつた。たゞ胸苦しくなつて枕の上の頭を右に傾むけ樣とした次の瞬間に、赤い血を金盥の底に認めた丈である。其間に入り込んだ三十分の死は、時間から云つても、空間から云つても經驗の記憶として全く余に取つて存在しなかつたと一般である。妻の說明を聞いた時余は死とは夫程果敢ないものかと思つた。さうして余の頭の上にしかく卒然と閃めいた生死二面の對照の、如何にも急劇で且没交涉なのに深く感じた。何う考へても此懸隔つた二つの現象に、同じ自分が支配されたとは納得出來なかつた。よし同じ自分が咄嗟の際に二つの世界を橫斷したにせよ、其二つの世界が如何なる關係を有するがために、余をして忽ち甲から乙に飛び移るの自由を得せしめたかと考へると、茫然として自失せざるを得なかつた。

生死とは緩急、大小、寒暑と同じく、對照の連想からして、日常一束に使用される言葉である。よし輓近の心理學者の唱ふる如く、この二つのものも亦普通の對照と同じく同類連想の部に屬すべきものと判ずるにした所で、かく掌を翻へすと一般に、唐突なる懸け離れた二象面が前後して我を擒にするならば、我は此懸け離

れた二象面を、何うして同性質のものとして、其關係を連付ける事が出來やう。

　人が余に一個の柿を與へて、今日は半分食へ、明日は殘りの半分の半分を食へ、其翌日は又其半分の半分を食へ、かくして毎日現に餘れるものゝ半分づゝを食へと云ふならば、余は食ひ出してから幾日目かに、遂に此命令に背いて、殘る全部を悉く食ひ盡すか、又は半分に割る能力の極度に達した爲め、手を拱いて空しく殘れる柿の一片を見詰めなければならない時機が來るだらう。もし想像の論理を許すならば、斯の條件の下に與へられたる一個の柿は、生涯食つても食ひ切れる譯がない。希臘の昔ゼノが足の疾きアキリスと歩みの鈍い龜との間に成立する競爭に辭を託して、如何なるアキリスも決して龜に追ひ付く事は出來ないと説いたのは取も直さず此消息である。わが生活の内容を構成する個々の意識も亦此の如くに、日毎か月毎に、其半途を失つて、知らぬ間に何時か死に近づくならば、いくら死に近付いても死ねないと云ふ非事實な論理に愚弄されるかも知れないが、斯う一足飛びに片方から片方に落ち込む樣な思索上の不調和を免がれて、生から死に行く徑路を、何の不思議もなく最も自然に感じ得るだらう。俄然として死し、俄然として吾に還るものは、否、吾に還つたのだと、人から云ひ聞かさるゝものは、たゞ寒くなる計である。

縹緲玄黃外　死生交謝時　寄托冥然去
我心何所之　歸來覓命根　杳窅竟難知
孤愁空遶夢　宛動蕭瑟悲　江山秋已老
粥藥髩將衰　廓寥天尚在　高樹獨餘枝
晚懷如此澹　風露入詩遲

○

（十六）

　安らかな夜は次第に明けた。室を包む影法師が床を離れて遠退くに從つて、余は又常の如く枕邊に寄る人々の顏を見る事が出來た。其顏は常の顏であつた。さうして余の心も亦常の心であつた。病の何處にあるかを知り得ぬ程に落ち付いた身を床の上に横へて、少しだに動く必要を有たぬ余に、死の猶近く徘徊して居やうとは全く思ひ設けぬ所であつた。眼を明けた時余は昨夕の騷ぎをたとひ忘れない迄も、たゞ過去の夢の如く遠くに眺めた。さうして死は明け渡る夜と共に立ち退いたのだらう位の度胸でも据つたものと見えて、何等の掛念もない氣分を、障子から射し込む朝日の光に、心地よく曝してゐた。實は無知な余を詐はり終せた死は、何時の間にか余の血管に潛り込んで、乏しい血を追ひ廻しつゝ、流れてゐたのださうである。「容體を聞くと、危險なれど極安靜にしてゐれば持ち直すかも知れぬといふ」とは、妻の此日の朝の部に書き込んだ日記の一句である。余が夜明迄生きやうとは、誰も期待して居なかつたのだとは後から聞いて始めて知つた。

　余は今でも白い金盥の底に吐き出された血の色と恰好とを、ありありとわが眼の前に思ひ浮べる事が出來る。況して其當分は寒天の樣に固まり掛けた腥いものが常に眼先に散ら付いてゐた。さうして吾が想像に映る血の分量と、それに起因した衰弱とを比較しては、どうしてあれ丈の出血が、斯う劇しく身體に應へるのだらうと何時でも不審に堪へなかつた。人間は脈の中の血を半分失ふと死に、三分の一失ふと昏睡するものだと聞いて、それに吾とも知らず妻の肩に吐き掛けた生血の容積を想像の天秤に盛つて、命の向ふ側に重りとして付け加へた時ですら、余は是程無理な工面をして生き延びたのだとは思へなかつた。

　杉本さんが東京へ歸るや否や、――杉本さんは其朝すぐ東京へ歸つた。もつと居りたいが忙がしいから失禮します、其代り手當は充分す

る積でありますと云つて、新らしい襟と襟飾を着け易へて、余の枕邊に坐つたとき、余は昨夕夜半に、裄丈の足りない宿の浴衣を着たまゝ、そつと障子を開けながら、どうかと一言森成さんに余の樣子を聞いてゐた彼人の樣子を思ひ出した。余の記憶にはたゞそれ丈しか留まらなかつた杉本さんが、出掛に妻を顧みて、もう一遍吐血があれば、何うしても回復の見込はないものと御諦らめなさらなければ不可ませんと注意を與へたさうである。實は昨夕にも此恐るべき再度の吐血が來さうなので、態々モルヒネ迄注射してそれを防ぎ止めたのだとは、後になつて其顛末を審らかにした余に取つて、全く思ひ掛けない報知であつた。あれ程胸の中は落ち付いてゐたものをと云ひたい位に、余は平常の心持で苦痛なく其夜を明したのである。——話がつい外れて仕舞つた。

杉本さんは東京へ歸るや否や、自分で電話を看護婦會へ掛けて、看護婦を二人すぐ余の出先へ送る樣に賴んで呉れた。其時、早く行かんと間に合はないかも知れないからと電話口で急いたので、看護婦は汽車で走る途々も、もう不可ない頃ではなからうかと、絶えず余の生命に疑ひを挾さんでゐた。折角行つても、行き着いて見たら、遲過て間に合はなかつたと云ふ樣な事があつては詰らないと語り合つて來た。——是も回復期に向いた頃、病牀の徒然に看護婦と世間話をした序に、彼等の口からぢかに聞いたたよりである。

斯く凡ての人に十の九迄見放された眞中に、何事も知らぬ余は、曠野に捨てられた赤子の如く、ぼかんとして居た。苦痛なき生は余に向つて何等の煩悶をも與へなかつた。余は寐ながらたゞ苦痛なく生きて居るといふ一事實を認める丈であつた。さうして此事實が、はからざる病のために、周圍の人の丁重な保護を受けて、健康な時に比べると、一歩浮世の風の當り惡い安全な地に移つて來た樣に感じた。實際余と余の妻とは、生存競爭の辛い空氣が、直に通はない山の底に住んでゐたのである。

露けさの里にて靜なる病

〔原本十七〕

○

臆病者の特權として、余はかねてより妖怪に逢ふ資格があると思つてゐた。余の血の中には先祖の迷信が今でも多量に流れてゐる。文明の肉が社會の鋭どき鞭の下に萎縮するとき、余は常に幽靈を信じた。けれども虎列剌を畏れて虎列剌に罹らぬ人の如く、神に祈つて神に棄てられた子の如く、余は今日迄是と云ふ不思議な現象に遭遇する機會もなく過ぎた。それを殘念と思ふ程の好奇心もたまには起るが、平生はまづ出逢はないのを當然と心得て濟まして來た。

自白すれば、八九年前アンドリュ・ラングの書いた夢と幽靈といふ書物を床の中に讀んだ時は、鼻の先の燈火を一時に寒く眺めた。一年程前にも「靈妙なる心力」と云ふ標題に引かされてフランマリオンといふ人の書籍を、わざ〳〵外國から取り寄せた事があつた。先頃は又オリヴァー・ロッヂの、死後の生を讀んだ。

死後の生！　名からしてが既に妙である。我々の個性が我々の死んだ後迄も殘る、活動する、機會があれば地上の人と言葉を換す。スピリチズムの研究を以て有名であつたマイエルは慥かに斯う信じて居たらしい。其マイエルに自己の著述を捧げたロッヂも同じ考への樣に思はれる。つい此間出たポドモアの遺著も恐らくは同系統のものだらう。

獨乙のフェヒナーは十九世紀の中頃既に地球其物に意識の存すべき所以を說いた。石と土と鑛に靈があると云ふならば、有るとするも妨

げる自分ではない。然し切めて此假定から出立して、地球の意識とは如何なる性質のものであら位の想像はあつて然るべきだと思ふ。

我々の意識には敷居の様な境界線があつて、其線の下は暗く、其線の上は明らかであるとは現代の心理學者が一般に認識する議論の様に見えるし、又わが經驗に照しても至極と思はれるが、肉體と共に活動する心的現象に斯様の作用があつたにした所で、わが暗中の意識卽ち是死後の意識とは受取れない。

大いなるものは小さいものを含んで、其小さいものに氣が付いてゐるが、含まれたる小さいものは自分の存在を知るばかりで、己等の寄り集つて拵らへてゐる全部に對しては風馬牛の如く無頓着であるとは、ゼームス等が意識の內容を解き放したり、又結び合せたりして得た結論である。それと同じく、個人全體の意識も亦より大いなる意識の中に含まれながら、しかも其存在を自覺せずに、孤立する如くに考へてゐるのだらうとは、彼が此類推より下し來るスピリチズムに都合よき假定である。

假定は人々の隨意であり、又時にとつて研究上必要の活力でもある。然したゞ假定だけでは、如何に臆病の結果幽靈を見ようとする、又迷信の極不可思議を夢みんとする余も、信力を以て彼等の說を奉ずる事が出來ない。

物理學者は分子の容積を計算して蠶の卵にも及ばぬ長さ高さともに一ミリメターの立方體に一千萬を三乘した數が這入ると斷言した。一千萬を三乘した數とは一の下に零を二十一付けた莫大のものである。想像を恣まにする權利を有する吾々も此一の下に二十一の零を付けた數を思ひ浮べるのは容易でない。

形而下の物質界にあつてすら、――相當の學者が綿密な手續を經て發表した數字上の結果すら、吾々はたゞ數理的の頭腦にのみ尤もと首肯く丈である。數量のあらましさへ應用の利かぬ心の現象に關しては云ふ迄もない。よし物理學者の分子に對する如き明暸な知識が、吾人の內面生活を照らす機會が來たにした所で、余の心は遂に余の心である。自分に經驗の出來ない限り、如何な綿密な學說でも吾を支配する能力は持ち得まい。

余は一度死んだ。さうして死んだ事實を、平生からの想像通りに經驗した。果して時間と空間を超越した。然し其超越した事が何の能力をも意味さなかつた。余は余の個性を失つた。余の意識を失つた。たゞ失つた事丈が明白な計である。どうして幽靈となれよう。どうして自分より大きな意識と冥合出來よう。臆病にして且つ迷信強き余は、たゞ此不可思議を他人に待つばかりである。

迎火を焚いて誰待つ細き哉

○

原本十八

たゞ驚ろかれたのは身體の變化である。騷動のあつた明る朝、何かの必要に促がされて、肋の左右に橫たへた手を、顏の所迄持つて來ようとすると、急に持主でも變つた樣に、自分の腕ながら丸で動かなかつた。人を煩らはす手數を厭つて、無理に肘を杖として、手頸から起し掛けたは掛けたが、僅か何寸かの距離を通して、宙に短かい弧線を描く努力と時間とは容易のものでなかつた。漸く浮き上つた筋の力を利用して、高い方へ引く丈の精氣に乏しいので、途中から斷念して、再び元の位置にわが腕を落さうとすると、それが又安くは落ちなかつた。無論其儘にして心を放せば、自然の重みで故に倒れる丈の事ではあるが、其倒れる時の激動が、如何に全身に響き渡るかと考へると、非常に恐ろしくなつて、つひに思ひ切る勇氣が出なかつた。余は卸す事も上げる事も、又半途に支へ

る事も出來ない腕を意識しつゝ其遣り所に窮した。漸く傍のものゝ氣が付いて、自分の手をわが手に添へて、無理のない樣に顏の所迄持つて來てくれて、歸りにも亦二つ腕を一所にしてやつと床の上まで戻した時には、何うして斯う自己が空虛になつたものか、我ながら殆んど想像が付かなかつた。後から考へて見て、あれは全く護謨風船に穴が開いて、その穴から空氣が一度に走り出したため、風船の皮が忽ちしゆつといふ音と共に收縮したと一般の吐血だから、夫であゝ身體に應へたのだらうと判斷した。夫にしても風船はたゞ縮まる丈である。不幸にして余の皮は血液の外に大きな長い骨を澤山に包んでゐた。其骨が――

余は生れてより以來此時程に吾骨の硬さを自覺した事がない。其朝眼が覺めた時の第一の記憶は、實にわが全身に滿ち渡る骨の痛みの聲であつた。さうして其痛みが、昔に、酒を被つた勢で、多數を相手に劇しい喧嘩を挑んだ末、散々に打ち据ゑられて、手も足も利かなくなつた時の如くに吾を鈍く叩きこなしてゐた。砧に擣たれた布は、斯うもあらうかと迄考へた。夫程正體なく極め付けられ了つた狀態を適當に形容するには、ぶちのめすと云ふ下等社會で用ひる言葉が、たゞ一つある計である。少しでも身體を動かさうとすると、關節がみしみしと鳴つた。

昨日迄狹い布團に劃された余の天地は、急に又狹くなつた。其布團のうちの一部分より外に出る能力を失つた今の余には、昨日迄狹く感ぜられた布團が更に大きく見えた。余の世界と接觸する點は、こゝに至つてたゞ肩と背中と細長く伸べた足の裏側に過ぎなくなつた。――頭は無論枕に着いてゐた。

是程に切り詰められた世界に住む事すら、昨夕は許されさうに見えなかつたのにと、傍のものは心の中で余の爲に觀じて吳れたらう。何事も辨へぬ余にさへ、夫が憐れであつた。たゞ身の布團に觸れる所のみがわが世界である丈に、さうして其觸れる所が少しも變らないために、我と世界との關係は、非常に單純であつた。全くスタチック(靜)であつた。從つて安全であつた。綿を敷いた棺の中に長く寐て、われ棺を出でず、人棺を襲はざる亡者の氣分は――もし亡者に氣分が有り得るならば、――此時の余のそれと餘り懸け隔つては居なかつたらう。

しばらくすると、頭が痲痺れ始めた。腰の骨が骨丈になつて板の上に載せられてゐる樣な氣がした。足が重くなつた。かくして社會的の危險から安全に保證された余一人の狹い天地にも亦相應の苦しみが出來た。さうして其苦痛を逃れるべく余は一寸の外にさへ出る能力を持たなかつた。枕元に何んな人が何うして坐つてゐるか、丸で氣が付かなかつた。余を看護する爲に、余の視線の屆かぬ傍らを占めた人々の姿は、余に取つて神のそれと一般であつた。

余はこの安らかながら痛み多き小世界にじつと仰向けに寐た儘、身の及ばざる所に時々眼を走らした。さうして天井から釣つた長い氷嚢の絲を、屢見詰めた。其絲は冷たい袋と共に、胃の上でぴくりぴくりと鋭どい脈を打つてゐた。

朝寒や生きたる骨を動かさず

〔原本十九〕

○

余は此の心持を何う形容すべきかに迷ふ。力を商ひにする相撲が、四つに組んで、かつきり合つた時、土俵の眞中に立つ彼等の姿は、存外靜かに落ち付いてゐる。けれども其腹は一分と經たないうちに、恐るべき波を上下に描かなければ已まない。さうして熱さうな汗の球が幾條となく背中を流れ出す。

最も安全に見える彼等の姿勢は、此波と此汗

の辛うじて齎らす努力の結果である。静かなのは相剋する血と骨の、僅に平均を得た象徴である。之を互殺の和といふ。二三十秒の現狀を維持するに、彼等が何れほどの氣魄を消耗せねばならぬかを思ふとき、看る人は始めて殘酷の感を起すだらう。

自活の計に追はれる動物として、生を營む一點から見た人間は、正に此相撲の如く苦しいものである。吾等は平和なる家庭の主人として、少くとも衣食の滿足を、吾等と吾等の妻子とに與へんがために、此相撲に等しい程の緊張に甘んじて、日々自己と世間との間に、互殺の平和を見出さうと力めつゝある。戸外に出て笑ふわが顏を鏡に映すならば、さうして其笑ひの中に殺伐の氣に充ちた我を見出すならば、更に此笑ひに伴ふ恐ろしき腹の波と、背の汗を想像するならば、最後にわが必死の努力の、回向院のそれの樣に、一分足らずで引分を期する望みもなく、命のあらん限りは一生續かなければならないといふ苦しい事實に想ひ至るならば、我等は神經衰弱に陷るべき極度に、わが精力を消耗するために、日に生き月に生きつゝあると迄言ひたくなる。

かく單に自活自營の立場に立つて見渡した世の中は悉く敵である。自然は公平で冷酷な敵である。社會は不正で人情のある敵である。もし彼對我の觀を極端に引延ばすならば、朋友もある意味に於て敵であるし、妻子もある意味に於て敵である。さう思ふ自分さへ日に何度となく自分の敵になりつゝある。疲れても已め得ぬ戰ひを持續しながら、煢然として獨り其間に老ゆるものは、見惨と評するより外に評しやうがない。

古臭い愚痴を繰返すなといふ聲が頻りに聞えた。今でも聞える。それを聞き捨てにして、古臭い愚痴を繰返すのは、しみ〴〵さう感じたから計りではない、しみ〴〵さう感じた心持を、急に病氣が來て顚覆したからである

血を吐いた余は土俵の上に仆れた相撲と同じ事であつた。自活のために戰ふ勇氣は無論、戰はねば死ぬといふ意識さへ持たなかつた。余はたゞ仰向けに寢て、纔な呼吸を敢てしながら、怖い世間を遠くに見た。病氣が床の周圍を屏風の樣に取り卷いて、寒い心を暖かにした。

今迄は手を打たなければ、わが下女さへ顏を出さなかつた。人に頼まなければ用は辨じなかつた。いくら仕ようと焦慮つても、調はない事が多かつた。それが病氣になると、がらりと變つた。余は寢てゐた。默つて寢てゐた丈である。すると醫者が來た。社員が來た。妻が來た。仕舞には看護婦が二人來た。さうして悉く余の意志を働かさないうちに、ひとりでに來た。「安心して療養せよ」と云ふ電報が滿洲から、血を吐いた翌日に來た。思ひがけない知己や朋友が代る〴〵枕元に來た。あるものは鹿兒島から來た。あるものは山形から來た。又あるものは眼の前に逼る結婚を延期して來た。余は是等の人に、どうして來たと聞いた。彼等は皆新聞で余の病氣を知つて來たと云つた。仰向に寢た余は、天井を見詰めながら、世の人は皆自分より親切なものだと思つた。住み惡いとのみ觀じた世界に忽ち暖かな風が吹いた。

四十を越した男、自然に淘汰せられんとした男、左したる過去を持たぬ男に、忙しい世が、是程の手間と時間と親切を掛てくれやうとは夢にも待設けなかつた余は、病に生き還ると共に、心に生き還つた。余は病に謝した。又余のために是程の手間と時間と親切とを惜まざる人々に謝した。さうして願はくは善良な人間になりたいと考へた。さうして此幸福な考へをわれに打壞す者を、永久の敵とすべく心に誓つた。

馬上青年老　鏡中白髮新　幸生天子國　願作太平民

〇〔二十一〕

ツルゲニエフ以上の[illegible]として、有力なる方面の[illegible]しつゝあるドストイエフスキーには、人の知らない[illegible]癲癇の發作があつた。われ[illegible]は[illegible]と、たゞ白い泡を連想するに過ぎないが、西洋では古くこれを[illegible]と稱へてゐた。神聖なる疾に冒かされる時、或ひは其[illegible]、ドストイエフスキイは普通の人が大音樂を聞いて始めて到り得るやうな一種微妙の快感に支配されたさうである。それは自我と外界と[illegible]調和した境地で、丁度[illegible]から、無限の空間に足を滑らして落ちるやうな心持だとか聞いた。

「神聖なる疾」に[illegible]のない余は、不幸にして此年になるまで、[illegible]に捕はれた記憶を有たない。たゞ大吐血後五六日――經つか經たないうちに、時々一種の精神狀態に陷つた。それからは每日の樣に同じ狀態を繰り返した。遂には來ぬ先にそれを豫期する樣になつた。さうして自分とは緣の遠いドストイエフスキーの享けたと云ふ不可思議の歡喜をひそかに想像して見た。それを想像するか思ひ出す程に、余の[illegible]狀態は尋常を[illegible]えてゐたからである。ドクインセイ[illegible]し[illegible]つた。け[illegible]の[illegible]しむべき[illegible]料から人工的に[illegible]ふと、それを自分の精神狀態に比較する[illegible]厭になつた。

余は當時十[illegible]に人と話をする煩はしさを感じた。聲となつて耳に響く空氣の波が心に傳つて、平らかな氣分をことさらに騷つかせるやうに覺えた。口を閉ぢて黃金なりといふ古い言葉を思ひ出して、たゞ仰向けに寢てゐた。難有い事に室の廂と、向ふの三階の屋根の間に、青い空が見えた。其空が秋の露に洗はれつゝ次第に高くなる時節であつた。余は默つて此空を見つめるのを日課の樣にした。何事もない、又何物もない此大空は、其靜かな影を傾むけて悉く余の心に映じた。さうして余の心にも何事もなかつた、又何物もなかつた。透明な二つのものがぴたりと合つた。合つて自分に殘るのは、縹緲とでも形容して可い氣分であつた。

其内穩かな心の隅が、何時か薄く暈されて、其所を照す意識の色が微かになつた。すると、ヹイルに似た靄が輕く全面に向つて萬遍なく展びて來た。さうして總體の意識が何處も[illegible]になつた。それは[illegible]ではなかつた。[illegible]でもなかつた。又[illegible]に[illegible]でもなかつた。[illegible]と云つては既に語弊がある。靈が細かい神經の末端に迄行き亙つて、泥で出來た肉體の內部を、輕く淸くすると共に、官能の實覺から杳かに遠からしめた狀態であつた。余は余の周圍に何事が起りつゝあるかを自覺した。同時に其自覺が窈窕として地の臭を帶びぬ一種特別のものであると云ふ事を知つた。床の下に水が廻つて、自然と疊が浮き出すやうに、余の心は己の宿る身體と共に、蒲團から浮き上がつた。より適當に云へば、腰と肩と頭に觸れる堅い蒲團が何處かへ行つて仕舞つたのに、心と身體は元の位置に安く漂つて居た。發作前に起るドストイエフスキーの歡喜は、瞬刻のために十年もしくは終生の命を賭しても然るべき性質のものとか聞いてゐる。余のそれは左樣に强烈のものではなかつた。寧ろ恍惚として幽かな趣を生活面の全部に輕く且つ深く、印し去つたのみであつた。

従つて余にはドストイエフスキーの受けた樣な憂鬱性の反動が來なかつた。余は朝から屢此狀態に入つた。午過にもよく此蕩漾を味つた。さうして覺めたときは何時でも其樂しい記憶を抱いて幸福の記念とした位であつた。

ドストイエフスキーの享け得た境界は、生理上彼の病の將に至らんとする豫言である。生を半に薄めた余の興致は、單に貧血の結果であつたらしい。

仰臥人如啞。　默然見大空。　大空雲不動。
終日杳相同。

○　【原本二十一】

同じドストイエフスキーも亦死の門口迄引き摺られながら、辛うじて後戻りをする事の出來た幸福な人である。けれども彼の命を危めにかかつた災は、余の場合に於るが如き惡辣な病氣ではなかつた。彼は人の手に作り上げられた法と云ふ器械の敵となつて、どんと心臟を打ち貫かれやうとしたのである。

彼は彼の倶樂部で時事を談じた。已むなくんば只一揆あるのみと叫んだ。さうして囚はれた。八ケ月の長い間薄暗い獄舍の日光に浴したのち、彼は蒼空の下に引き出されて、新たに刑壇の上に立つた。彼は自己の宣告を受けるため、二十一度の霜に、襯衣一枚の裸姿となつて、申渡の終るのを待つた。さうして銃殺に處すの一句を突然として鼓膜に受けた。「本當に殺されるのか」とは、自分の耳を信用しかねた彼が、傍に立つ同囚に問うた言葉である。——白い手帛を合圖に振つた。兵士は覘を定めた銃口を下に伏せた。ドストイエフスキーは斯くして法律の捏ね丸めた熱い鉛の丸を呑まずに濟んだのである。其代り四年の月日をサイベリヤの野に暮した。

彼の心は生から死に行き、死から又生に戻つて、一時間と經たぬうちに三たび鋭どい曲折を描いた。さうして其三段落が三段落ともに、妥協を許さぬ強い角度で連結された。其變化丈でも驚くべき經驗である。生きつゝあると固く信ずるものが、突然是から五分のうちに死なければならないと云ふ時、既に死ぬと極つてから、猶餘る五分の命を提げて、將に來るべき死を迎へながら、四分、三分、二分と意識しつゝ進む時、更に突き當ると思つた死が、忽ちとんぼ返りを打つて、新たに生と名づけられる時、——余の如き神經質では此三象面の一つにすら堪へ得まいと思ふ。現にドストイエフスキーと運命を同じくした同囚の一人は、是が爲に其場で氣が狂つて仕舞つた。

夫にも拘はらず、回復期に向つた余は、病牀の上に寐ながら、屢ドストイエフスキーの事を考へた。ことに彼が死の宣告から蘇へつた最後の一幕を眼に浮べた。——寒い空、新らしい刑壇、刑壇の上に立つ彼の姿、襯衣一枚の儘顫へてゐる彼の姿、——悉く鮮やかな想像の鏡に映つた。獨り彼が死刑を免かれたと自覺し得た咄嗟の表情が、何うしても判然映らなかつた。しかも余はたゞ此咄嗟の表情が見たい許に、凡ての畫面を組み立てゝ居たのである。

余は自然の手に罹つて死なうとした。現に少しの間死んでゐた。後から當時の記憶を呼び起した上、猶所々の穴へ、妻から聞いた顚末を埋めて、始めて全く出來上る構圖を振り返つて見ると、所謂慄然と云ふ感じに打たれなければ已まなかつた。其恐ろしさに比例して、九仞に失つた命を一簣に取り留める嬉しさは又特別であつた。此死此生に伴ふ恐ろしさと嬉しさが紙の裏表の如く重なつたため、余は連想上常にドストイエフスキーを思ひ出したのである。

「もし最後の一節を欠いたなら、余は決して正氣ではゐられなかつたらう」と彼自身が物語つ

てゐる。氣が狂ふほどの緊張を幸ひに受けずと濟んだ余には、彼の恐ろしさ嬉しさの程度を料り得ぬと云ふ方が寧ろ適當かも知れぬ。夫であればこそ、畫龍點睛とも云ふべき肝心の刹那の表情が、何う想像しても漠として眼の前に描き出せないのだらう。運命の擒縱を感ずる點に於て、ドストイエフスキーと余とは、殆んど詩と散文ほどの相違がある。

夫にも拘はらず、余は屢ばドストイエフスキーを想像して已まなかつた。さうして寒い空と、新らしい刑壇と、刑壇の上に立つ彼の姿と、襯衣一枚で顫へてゐる彼の姿とを、根氣よく描き去り描き來つて已まなかつた。

今は此想像の鏡も何時となく曇つて來た。同時に、生き返つたわが嬉しさが日に〳〵われを遠ざかつて行く。あの嬉しさが始終わが傍にあるならば、――ドストイエフスキーは自己の幸福に對して、生涯感謝する事を忘れぬ人であつた。

○ 〔原本二十二〕

余はうと〳〵しながら何時の間にか夢に入つた。すると鯉の跳ねる音で忽ち眼が覺めた。

余が寐てゐる二階座敷の下はすぐ中庭の池で、中には鯉が澤山に飼つてあつた。其鯉が五分に一度位は必ず高い音を立てゝばしやりと水を打つ。晝のうちでも折々は耳に入つた。夜は殊に甚しい。隣りの部屋も、下の風呂場も、向うの三階も、裏の山も悉く靜まり返つた眞夜中に、余は絕えず此音で眼を覺ました。

犬の眠りと云ふ英語を知つたのは何時の昔か忘れてしまつたが、犬の眠りと云ふ意味を實地に經驗したのは此頃が始めてゞあつた。余は犬の眠りのために夜每惱まされた。漸く寐付いて難有いと思ふ間もなく、すぐ眼が開いて、まだ空は白まないだらうかと、幾度も曉を待ち侘びた。床に縛り付けられた人の、しんとした夜半に、たゞ獨り生きてゐる長さは存外な長さである。――鯉が勢よく水を切つた。自分の描いた波の上を叩く尾の音で、余は眼を覺ました。

室の中は夕暮よりも猶暗い光で照されてゐた。天井から下がつてゐる電氣燈の球は黑布で隙間なく掩がしてあつた。弱い光りは此黑布の目を洩れて、微かに八疊の室を射た。さうして此薄暗い灯影に、眞白な着物を着た人間が二人坐つてゐた。二人とも口を利かなかつた。二人とも動かなかつた。二人とも膝の上へ手を置いて、互ひの肩を竝べた儘凝としてゐた。

黑い布で包んだ球を見たとき、余は紗で金箔を卷いた弔旗の頭を思ひ出した。此喪章と關係のある球の中から出る光線によつて、薄く照された白衣の看護婦は、靜かなる點に於て、行儀の好い點に於て、幽靈の雛の樣に見えた。さうして其雛は必要のあるたびに無言の儘必ず動いた。

余は聲も出さなかつた。呼びもしなかつた。夫でも余の寐てゐる位置に、少しの變化さへあれば彼等は屹度動いた。手を毛布のうちで、もぞ付かせても、心持肩を右から左へ搖つても、頭を――頭は眼が覺める度に必ず痲痺れてゐた。或は痲痺れるので眼が覺めるのかも知れなかつた。――其頭を枕の上で一寸摺らしても、或は足――足は能く寐覺めの種となつた。平生の癖で時々、片方を片方の上へ重ねて、其儘とろ〳〵となると、下になつた方の骨が澤庵石でも載せられた樣に、みし〳〵と痛んで眼が覺めた。さうして余は必ず強い痛さと重たさとを忍んで足の位置を變へなければならなかつた。――是等のあらゆる場合に、わが變化に應じて、白い着物の動かない事は決してなかつた。時にはわが動作を豫期して、向うから動くと思

まれる[illegible]
かさな[illegible]
すれば、[illegible]
白い[illegible]
かつた[illegible]
の心を[illegible]
に[illegible]
黒い[illegible]に、[illegible]
着物を[illegible]
かさと、[illegible]心のまゝに動
くのは[illegible]であつた。
余は[illegible]
と共に、[illegible]
さうして黒い布で包んだ[illegible]い
布の結目から洩れてくる[illegible]
物を着た[illegible]を見た。見た、[illegible]に[illegible]い
着物が[illegible]
秋[illegible]
一[illegible]

ケーベル先生

[illegible]見えた、[illegible]から濃い藍色の[illegible]先生は[illegible]てゐるなと余は安[illegible]君に云つた。

[illegible]たが、今日見ると僅の間に[illegible]大分樣子が違つてゐる。甲武線の[illegible]新らしい立派な家に[illegible]られて、[illegible]現代的日本の産み出した富の威力と切り放す事の出來ない門構許である。其中に先生の住居丈が過去の記念の如くたつた一軒古びて殘つてゐる。先生は此燻ぶり返つた家の書齋に這入つたなり、滅多に外へ出た事がない。其書齋は取りも直さず、先生の頭が見えた木の葉の間の高い所であつた。

余と安倍君とは先生に導かれて、[illegible]も何も足に觸れない素裸の儘の高い階子段を薄暗がりにがた/\させながら上つて、階上の右手にある書齋に這入つた。さうして先生の今迄[illegible]卸[illegible]から頭を出してゐた一番光に近い椅子に[illegible]窓から射す夕日に照[illegible]い顔に[illegible]先生の顔を熟視した。先生は[illegible]なかつた。先生は自分で六十[illegible]だと云はれた。余が[illegible]の美學の講義を聽きに[illegible]、余が大學院に這入つた年で、[illegible]始めての講義だと思つてゐるが、[illegible]から已に[illegible]でもう[illegible]年にな[illegible]ますかと聞いたら、左樣にはならない、たゞ十八年目だと答へられた。先生の髪も[illegible]も[illegible]語で云ふとオーバーンとか形容すべき、ごく薄い[illegible]の樣な色をしてゐる上に、普通の西洋人の通り非常に細く柔かいから、少しの白髪が[illegible]えても丸で目立たないのだらう。夫にしても血色が元の通りである。十八年を日本で住み古した人とは思へない。

先生の容貌が永久に[illegible]樣に見えるのに引き易へて、先生の[illegible]着け古つた色で包まれてゐた。洋書[illegible]のは、日本や和書よりも装飾的な[illegible]漢籍の[illegible]本當であるのに、此部屋には[illegible]してゐなかつた。たゞ[illegible]がなかつた。色の褪めた椅子が四脚あつた。一ツ[illegible]と埃及煙草と灰皿があつた。余は[illegible]煙草を[illegible]しながら先生と話をした。けれ[illegible]部屋を出て、下の食堂へ案内される迄、余[illegible]書齋にどんな書物がどんなに並んで[illegible]に過ぎた。

[illegible]や赤や青の背表紙が余の眼を[illegible]りではない。純潔な白色で[illegible]には觸れずに濟んだ。先生の食[illegible]必要品とまで認めてゐる白[illegible]なかつた。其代りにくすんだ更紗[illegible]一杯に被さつてゐた。さうして[illegible]家に[illegible]てゐた娘の子を[illegible]時に[illegible]して遣つた布團の表と同じにも[illegible]つた。此卓を前にして坐つた先生は、襟も[illegible]着いてはゐない、[illegible]の襯衣を着[illegible]色の[illegible]無造作に引[illegible]と[illegible]

み入る計であつたが、成程洗ひ立ての白いものが手と首に着いてゐるのが正裝なら、余の方が先生よりも餘程正裝であつた。

余は先生に一人で淋しくはありませんかと聞いたら、先生は少しも淋しくはないと答へられた。西洋へ歸りたくはありませんかと尋ねたら、夫程西洋が好いとも思はない、然し日本には演奏會と芝居と圖書館と畫館がないのが困る、それ丈が不便だと云はれた。一年位暇を貰つて遊んで來ては何うですと促して見たら、そりや無論遣つて貰へる、けれども夫は好まない。私がもし日本を離れる事があるとすれば、永久に離れる。決して二度とは歸つて來ないと云はれた。

先生は斯らいふ風に、夫程故郷を慕ふ様子もなく、あながち日本を嫌ふ氣色もなく、自分の性格とは容れ惡い程に矛盾な亂雜な、空虚にして安つぽい、所謂新時代の世態が、周圍の過渡層の底から次第々々に浮き上つて、自分を其中心に陷落せしめねば已まぬ勢ひを得つゝ進むのを、日毎眼前に目撃しながら、それを別世界に起る風馬牛の現象の如く餘所に見て、極めて落ち付いた十八年を吾邦で過ごされた。先生の生活は、そつと煤烟の巷に棄てられた希臘の彫刻に血が通ひ出した様なものである。雜鬧の中に己れを動かして如何にも靜かである。先生の踏む靴の底には敷石を噛む鋲の響がない。先生は紀元前の半島の人の如くに、しなやかな革で作つたサンダルを穿いて、音なしく電車の傍を歩るいてゐる。

先生は昔し烏を飼つて居られた。何處から來たか分らないのを餌を遣つて放し飼にしたのである。先生と烏とは妙な因縁に聞える。此二つを頭の中で結び付けると一種の氣持が起る。先生が大學の圖書館で書架の中からポーの全集を引卸したのを見たのは昔の事である。先生はポーもホフマンも好きなのだと云ふ。此夕其烏の事を思ひ出して、あの烏は何うなりましたと聞いたら、あれは死にました、凍えて死にました。寒い晩に庭の木の枝に留まつたまんま、翌日になると死んでゐましたと答へられた。

烏の序に蝙蝠の話が出た。安倍君が蝙蝠は懷疑な鳥だと云ふから、何故と反問したら、でも薄暗がりにはた〱飛んでゐるからと謎の様な答をした。余は蝙蝠の翼が好だと云つた。先生はあれは惡魔の翼だと云つた。成程畫にある惡魔は何時でも蝙蝠の羽根を背負つてゐる。

其時夕暮の窓際に近く日暮しが來て朗らかに鋭い聲を立てたので、卓を圍んだ四人はしばらくそれに耳を傾けた。あの鳴聲にも以太利の連想があるでせうと余が先生に尋ねた。是は先生が少し前に蜥蜴が美しいと云つたので、青く澄んだ以太利の空を思ひ出させやしませんかと聞いたら、左様だと答へられたからである。然し日暮しの時には、先生は少し首を傾けて、いや彼は以太利ぢやない、何うも以太利では聞いた事がない様に思ふと云はれた。

余等は蒸い都の中心に餘つて點ぜられたとも見える古い家の中で、靜かにこんな話をした。夫から菊の話と椿の話と鈴蘭の話をした。果物の話もした。其果物のうちで尤も香りの高い遠い國から來たレモンの露を搾つて水に滴らして飲んだ。珈琲も飲んだ。凡ての飲料のうちで珈琲が一番旨いといふ先生の嗜好も聞いた。夫から靜かな夜の中に安倍君と二人で出た。

先生の顏が花やかな演奏會に見えなくなつてから、もう餘程になる。先生はピアノに手を觸れる事すら日本に來ては口外せぬ積であつたと云ふ。先生は夫程騷いだ事が嫌なのである。凡ての演奏會を謝絶した先生は、たゞ自分の部

屋で自分の氣に向いたとき丈樂器の前に坐る、さうして自分の音樂を自分丈で聞いてゐる。其外にはたゞ書物を讀んでゐた。

文科大學へ行つて、此處で一番人格の高い教授は誰だと聞いたら、百人の學生が九十人迄は、數ある日本の教授の名を口にする前に、まづフォン・ケーベルと答へるだらう。斯程に多くの學生から尊敬される先生は、日本の學生に對して終始渝らざる興味を抱いて、十八年の長い間哲學の講義を續けてゐる。先生が疾くに索寞たる日本を去るべくして、未だに去らないのは、實に此愛すべき學生あるが爲である。

京都の深田教授が先生の家にゐる頃、何時でも閑な時に晩餐を食べに來いと云はれてから、行かずに經過した月日を數へると、もう四年以上になる。漸く其約を果して安倍君と一所に大きな暗い夜の中に出た時、余は是から先もう何年位日本に居る積だらうと考へた。さうして一度日本を離れゝばもう歸らないと云はれた時、先生の引用した"no more, never more."といふポーの句を思出した。

硝子戸の中（抄）

○（十四）

つい此間昔の宅へ泥棒の入つた時の話を比較的詳しく聞いた。

姉がまだ二人とも嫁づかずにゐた時分の事だといふから、年代にすると、多分私の生れる前後に當るのだらう。何しろ勤王とか佐幕とかいふ荒々しい言葉の流行つた八釜しい頃なのである。

ある夜一番目の姉が、夜中に小用に起きた後、手を洗ふ爲に、潜り戸を開けると、狹い中庭の隅に、壁を壓し付けるやうな勢で立つてゐる梅の古木の根方が、かつと明るく見えた。姉は思慮をめぐらす暇もないうちに、すぐ潜り戸を締めてしまつたが、締めた後で、今眼の前に見た不思議な明るさを其處に立ちながら考へたのである。

私の幼心に映つた此姉の顔は、いまだに思ひ起さうとすれば、何時でも眼の前に浮ぶ位鮮かである。然し其幻像はもう嫁に行つてお齒黒を染めた以後の姿であるから、其時縁側に立つて考へてゐた娘盛りの彼女を、今胸のうちに描き出す事は少し困難である。

廣い額、淺黒い皮膚、小さいけれども明確りした輪廓を具へてゐる鼻、人並より大きい二重瞼の眼、それから御澤といふ優しい名、——私はたゞ是等を綜合して、其場合に於ける姉の姿を想像するだけである。

暫く立つた儘考へてゐた彼女の頭に、此時もしかすると火事ぢやないかといふ懸念が起つた。それで彼女は思ひ切つて又切戸を開けて外を覗かうとする途端に、一本の光る拔身が、闇の中から、四角に切つた潜り戸の中へすうと出た。姉は驚いて身を後へ退いた。其隙に、覆面をした、龕燈提灯を持つた男が、拔刀の儘、小さい潜り戸から大勢家の中へ入つて來たのださうである。泥棒の數は慥か八人とか聞いた。

彼等は、他を殺めるために來たのではないから、大人しくしてゐさへすれば、家のものに危害は加へない、其代り軍用金を貸せと云つて、父に迫つた。父は無いと斷つた。然し泥棒は承知しなかつた。今角の小倉屋といふ酒屋に這入つて、其處で聞いて來たのだから、隠しても駄目だと云つて動かなかつた。父は不精無精にとう〳〵何枚かの小判を彼等の前に並べた。彼等は金額が餘り少な過ぎると思つたものか、夫でもなか〳〵歸らうとしないので、今まで床の中に寝てゐた母が、あなたの紙入に入つてゐるのも遣つてお上げなさいなと忠告した。其紙入の中には五十兩ばかりあつたとかいふ話である。泥棒が出て行つた後で、余計な事をいふ女だと云つて、父が母を叱り付けたさうである。

其事があつて以來、私の家では柱を切組にして、其中へ有金を隠す方法を講じたが、隠す程の財産も出來ず、又黒装束を着けた泥棒も、それぎり來ないので、私の生長する時分には、どれが切組にしてある柱だか全く分らなくなつてゐた。

泥棒が出て行く時、此家は大變締りの好い宅だと云つて賞めて行つたさうだが、其締りの好い家を泥棒に教へた小倉屋の半兵衛さんの頭には、あくる日から擦り疵がいくつとなく出來た。是は金はありませんと斷る度に、泥棒がそんな筈があるものかと云つては、拔身の先でちよいち

よい牛乳屋さんの頭を突ッついたからだといふ。それでも牛乳屋さんは、どうしても宅には[illegible]、[illegible]あるから、[illegible]、[illegible]して、[illegible]。[illegible]私の[illegible]を[illegible]聞いたのである。

○〔原本十六〕

[illegible]を下りると、一[illegible]の小川に[illegible]した[illegible]あつて、[illegible]側に[illegible]。[illegible]處で[illegible]一度[illegible]た事がある。

[illegible]白い[illegible]の[illegible]で、[illegible]から見えないやうにしてあるので、私は[illegible]の土間に立つて、[illegible]の顔を[illegible]下にゐた。

亭主[illegible]の入つてくるのを見ると、手に持つた新聞を[illegible]、[illegible]した。[illegible]私は[illegible]何處[illegible]ある[illegible]ないといふ[illegible]なかつた。それで[illegible]

私の後へ廻つて、鋏をちよき/\鳴らし出した頃を見[illegible]、[illegible]から[illegible]て見た[illegible]、[illegible]、[illegible]の郵便局の傍に店を持つて、今と同じやうに、散髪を渡世としてゐた事が解つた。

「高田の旦那などにも大分御贔屓になりまして」

[illegible]高田といふのは[illegible]、私[illegible]も[illegible]。

「[illegible]を[illegible]てゐるのかい」

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]なりました

[illegible]

[illegible]、つい昨日の事としつきや思はれないのに、「もう三十年近くにもなるんですから」

[illegible]

「[illegible]……」

[illegible]

「うん、あの二階のある家だらう」

「[illegible]二階がありましたつけ。あすこへ御移[illegible]、[illegible]後[illegible]、[illegible]御引越なすつ[illegible]」

[illegible]

[illegible]

[illegible]見えるやうだね」

「えゝ澤山出來ましたよ。尤も變る筈ですね、考へて見ると、もうやがて卅年にもなるでせうと云[illegible]

[illegible]

つたもんでさあ、東家つてね、丁度そら高田の旦那の贔屓でしたらう、東家の御神燈のぶら下つてゐたのは」

○ 〔原本十七〕

私は其東家をよく覺えてゐた。從兄の宅のつい向なので、兩方のものが出入りの度に、顏を合はせさへすれば挨拶をし合ふ位の間柄であつたから。

其頃從兄の家には、私の二番目の兄かごろごろしてゐた。此兄は大の放蕩もので、よく宅の懸物や刀劍類を盗み出しては、それを二足三文に賣り飛ばすといふ惡い癖があつた。彼が何で從兄の家に轉がり込んでゐたのか、其時の私には解らなかつたけれども、今考へると、或はさうした亂暴を働いた結果、しばらく家を追ひ出されてゐたかも知れないと思ふ。其兄の外に、まだ庄さんといふ、是も私の母方の從兄に當る男が、そこいらにぶら〳〵してゐた。

斯ういふ連中がいつでも一つ所に落ち合つては、寢そべつたり、縁側へ腰を掛けたりして、勝手な出放題を竝べてゐると、時々向うの藝者屋の竹格子の窓から、「今日は」などと聲を掛けられたりする。それを又待ち受けてゞもゐる如くに、連中は「おい一寸御出で、好いものあるから」とか何とか云つて、女を呼び寄せようとする。藝者の方でも晝間は暇だから、三度に一度は御愛嬌に遊びに來る。といつた風の調子であつた。

私は其頃まだ十七八だつたらう、其上大變な含羞屋で通つてゐたので、そんな所に居合しても、何にも云はずに默つて隅の方に引込んでばかりゐた。それでも私は何かの拍子で、此等の人々と一所に、其藝者屋へ遊びに行つて、トランプをした事がある。負けたものは何か奢らなければならないので、私は人の買つた壽司や菓子を大分食つた。

一週間ほど經つてから、私は又此のらくらの兄に連れられて同じ宅へ遊びに行つたら、例の庄さんも席に居合はせて話が大分はずんだ。其時咲松といふ若い藝者が私の顏を見て、「またトランプをしませう」と云つた。私は小倉の袴を穿いて四角張つてゐたが、懷中には一錢の小遣ひさへ無かつた。

「僕は錢がないから厭だ」

「好いわ、私が持つてるから」

此女は其時眼を病んでもゐたのだらう、斯ういひ〳〵、綺麗な襦袢の袖でしきりに薄赤くなつた二重瞼を擦つてゐた。

其後私は、お作が好い御客に引かされた」といふ噂を、從兄の家で聞いた。從兄の家では、此女の事を咲松と云はないで、常にお作お作と呼んでゐたのである。私はその話を聞いた時、心の内でもうお作に會ふ機會も來ないだらうと考へた。

所がそれから大分經つて、私が例の達人と一所に、芝の山内の勸工場へ行つたら、其處で又ぱつたりお作に出會つた。此方の書生姿に引き易へて、彼女はもう品の好い奧樣に變つてゐた。旦那といふのも彼女の傍に付いてゐた。……

私は床屋の亭主の口から出た東家といふ藝者屋の名前の奧に潛んでゐる是丈の古い事實を急に思ひ出したのである。

「あすこに居たお作といふ女を知つてるかね」

と私は亭主に聞いた。

「知つてる所か、ありや私の姪でさあ」

「さうかい」

私は驚いた。

「それで、今何處にゐるのかね」

「お作は亡くなりましたよ、旦那」

私は又驚いた。

「何時」

「何時つて、もう昔の事になりますよ。慥かあれが二十三の年でしたらう」

「へえ」

「然も浦鹽で亡くなつたんです。旦那が領事館に關係のある人だつたもんですから、彼地へ一所に行きましてね。それから間もなくでした、死んだのは」

私は歸つて硝子戸の中に坐つて、まだ死なずに居るものは、自分とあの床屋の亭主丈のやうな氣がした。

○ 〔原本十九〕

私の舊宅は今私の住んでゐる處から、四五町奥の馬場下といふ町にあつた。町とは云ひ條、其實小さな宿場としか思はれない位、子供の時の私には、寂れ切つて淋しく見えた。もと〳〵馬場下とは高田の馬場の下にあるといふ意味なのだから、江戸繪圖で見ても、朱引内か朱引外か分らない邊鄙な隅の方にあつたに違ひないのである。

それでも内藏造りの家が狹い町内に三四軒はあつたらう。坂を上ると、右側に見える近江屋傳兵衞といふ藥種屋などは其一つであつた。それから坂を下り切つた所に、間口の廣い小倉屋といふ酒屋もあつた。尤も此方は倉造りではなかつたけれども、堀部安兵衞が高田の馬場で敵を討つ時に、此處へ立ち寄つて、枡酒を飲んで行つたといふ歴史のある家柄であつた。私はその話を子供の時分から覺えてゐたが、つひぞ其所に仕舞つてあるといふ噂の安兵衞が口を着けた枡を見たことがなかつた。其代り娘の御北さんの長唄は何度となく聞いた。私は子供だから上手だか下手だか丸で解らなかつたけれども、私の宅の玄關から表へ出る敷石の上に立つて、通りへでも行かうとすると、御北さんの聲が其所から能く聞こえたのである。春の日の午過ぎなどに、私はよく恍惚とした魂を、麗かな光に包みながら、御北さんの御浚ひを聽くでもなく聽かぬでもなく、ぼんやり私の家の土藏の白壁に身を靠たせて、佇立んでゐた事がある。其御蔭で私はとう〳〵「旅の衣は篠懸の」などといふ文句を何時の間にか覺えてしまつた。

此外には棒屋が一軒あつた。それから鍛冶屋も一軒あつた。少し八幡坂の方へ寄つた所には、廣い土間を屋根の下に圍ひ込んだやつちや場もあつた。私の家のものは、其處の主人を、問屋の仙太郎さんと呼んでゐた。仙太郎さんは何でも私の父と極遠い親類つゞきになつてゐるんだとか聞いたが、交際からいふと、丸で疎濶であつた。往來で行き會ふ時だけ、「好い御天氣で」などと聲を掛ける位の間柄に過ぎなかつたらしく思はれる。此仙太郎さんの一人娘が講釋師の貞水と好い仲になつて、死ぬの生きるのといふ騷ぎのあつた事も、人聞に聞いて覺えてはゐるが、纒まつた記憶は今頭の何處にも殘つてゐない。子供の私には、それよりか仙太郎さんが高い臺の上に腰を掛けて、矢立と帳面を持つた儘、「いーやつちや幾干」と威勢の好い聲で下にゐる大勢の顏を見渡す光景の方が餘程面白かつた。下からは又二十本も三十本もの手を一度に擧げて、みんな仙太郎さんの方を向きながら、ろいんじだのがれんだのといふ符徵を、罵しるやうに呼び上げるうちに、薑や茄子や唐茄子の籠が、夫等の節太の手で、どし〳〵何處かへ運び去られるのを見てゐるのも勇ましかつた。

どんな田舍へ行つてもありがちな豆腐屋は無論あつた。其豆腐屋には油の臭の染み込んだ繩暖簾がかゝつてゐて門口を流れる下水の水が京都へでも行つたやうに綺麗だつた。其豆腐屋について曲ると半町程先に西閑寺といふ寺の門が小高く見えた。赤く塗られた門の後は、深い竹藪で一面に掩はれてゐるので、中に何んな

[illegible]りは全[illegible]見[illegible]
[illegible]勤の鉦の音[illegible]
[illegible]
吹く冬へ掛けて、かん〳〵と鳴る[illegible]
音は、何時でも[illegible]の心に悲くて冷たい[illegible]
き込むやうに、小さい私の氣分を[illegible]した。

○「[illegible]二十」

[illegible]屋の隣に寄席が一軒あつたのを、私は夢幻のやうにまだ覺えてゐる　こんな場末に[illegible]人[illegible]あらう筈はないといふのが、私の[illegible]を[illegible]る所[illegible]、私はそれを思ひ出す[illegible]に、[illegible]感じに打たれながら、不[illegible]
[illegible]
た。其[illegible]またお[illegible]さんといふ[illegible]があつて、其人[illegible]能く家[illegible]に上つた事も、まだ[illegible]の記憶を離れずにゐる。後[illegible]養子を貰つたが、それ[illegible]だつたので、[illegible]は一寸[illegible]さんの方で[illegible]も[illegible]といふ[illegible]つたが、[illegible]

[illegible]
の宅の軒先にまだ薄暗い[illegible]板が[illegible]
てゐた頃、よく母から小遣を貰つて其[illegible]を聞きに出掛けたものである。[illegible]前は[illegible]
[illegible]に[illegible]出なかつた樣であ[illegible]に何[illegible]あつたか知らないが、何の[illegible]
[illegible]今から見れ[illegible]
[illegible]
[illegible]へられたい[illegible]
[illegible]、と[illegible]
る途[illegible]
[illegible]
になつて[illegible]
か、今で[illegible]
當時[illegible]の家からまづ町らしい町へ出やうとするに、何うしても[illegible]家のない[illegible]とか、[illegible]とか又は長い暗い路[illegible]かを通り抜けなければならなかつた。買物らしい買物[illegible]大抵[illegible]

[illegible]
[illegible]の一筋道[illegible]
[illegible]が曇つたやうに[illegible]
[illegible]の土手の[illegible]に[illegible]
[illegible]、何[illegible]と[illegible]
[illegible]竹藪で寒いでゐたのだから、[illegible]
[illegible]つたら、一日[illegible]に恐らくただの一[illegible]もなかつたのだらう。下[illegible]、日和下駄などを穿いて出やうものなら、道い日にあふに[illegible]よりも雪よりも恐ろしいもののやうに[illegible]染み込んでゐる
其位不便な所でも[illegible]と見えて、矢張町の[illegible]ゐた。さうして其上に[illegible]
[illegible]に有の儘の昔[illegible]
[illegible]下にあつた小さな一[illegible]かんで來る。
[illegible]

子規のまだ生きてゐるうちに、「半鐘と並んで高き冬木哉」といふ句を作つたのは、實は此半鐘の記念のためであつた。

○〔原本二十一〕

私の家に關する私の記憶は、惣じて斯ういふ風に鄙びてゐる。さうして何處かに薄ら寒い憐れな影を宿してゐる。だから今生き殘つてゐる兄から、つい此間、うちの姉達が芝居に行つた當時の樣子を聽いた時には驚いたのである。そんな派出な暮しをした昔もあつたのかと思ふと、私は愈夢のやうな心持になるより外はない。

其頃の芝居小屋はみんな猿若町にあつた。電車も俥もない時分に、高田の馬場の下から淺草の觀音樣の先迄朝早く行き着かうと云ふのだから、大抵の事ではなかつたらしい。姉達はみんな夜半に起きて支度をした。途中が物騒だといふので、用心のため、下男が屹度供をして行つたさうである。

彼等は筑土を下りて、柿の木横町から揚場へ出て、豫て其處の船宿にあつらへて置いた屋根船に乗るのである。私は彼等が如何に豫期に充ちた心をもつて、のろ〳〵砲兵工廠の前から御茶の水を通り越して柳橋迄漕がれつゝ行つたゞらうと想像する。しかも彼等の道中は決して其處で終りを告げる譯に行かないのだから、時間に制限を置かなかつた其の昔が猶ほ更回顧の種になる。

大川へ出た船は、流れを溯つて吾妻橋を通り拔けて、今戸の有明樓の傍に着けたものだといふ。姉達は其處から上つて芝居茶屋迄歩いて、それから漸く設けの席に着くべく、小屋へ送られて行く。設けの席といふのは必ず高土間に限られてゐた。是は彼等の服裝なり顏なり、髮飾なりが、一般の眼によく着く便利のいゝ場所なので、派出を好む人達が、爭つて手に入れたがるからであつた。

幕の間には役者に随いてゐる男が、何うぞ樂屋へ、お遊びに入らつしやいましと云つて案内に來る。すると姉達は此縮緬の模樣のある着物の上に袴を穿いた男の後に跟いて、田之助とか訥升とかいふ贔屓の役者の部屋へ行つて扇子に似顔を畫いて貰つて歸つてくる。是が彼等の見榮だつたのだらう。さうして其見榮は金の力でなければ買へなかつたのである。

歸りには元來た路を同じ船で揚場迄漕ぎ戻す。無用心だからと云つて、下男が又提灯を點けて迎へに行く。宅へ着くのは今の時計で十二時位にはなるのだらう。だから夜半から夜半迄掛つて彼等は漸く芝居を見る事が出來たのである。……

斯んな華麗な話を聞くと、私は果してそれが自分の宅に起つた事か知らんと疑ひたくなる。何處か下町の富裕な町家の昔を語られたやうな氣もする。

尤も私の家も侍分ではなかつた。派出な付合をしなければならない名主といふ町人であつた。私の知つてゐる父は、禿頭の爺さんであつたが、若い時分には、一中節を習つたり、馴染の女に縮緬の積夜具をして遣つたりしたのださうである。青山に田地があつて、其處から上つて來る米丈でも、家のものが食ふには不足がなかつたとか聞いた。現に今生き殘つてゐる三番目の兄などは、其米を搗く音を始終聞いたと云つてゐる。私の記憶によると、町内のものがみんなして私の家を呼んで、玄關々々と稱へてゐた。其時分の私には、何ういふ意味か解らなかつたが、今考へると、式臺のついた嚴めしい玄關付の家は、町内にたつた一軒しかなかつたからだらうと思ふ。其式臺を上つた所に、突棒や、袖搦や、刺股や、又古ぼけた馬

上提灯などが、並んで懸けてあつた昔なら、私でもまだ覺えてゐる。

○　「原本二十三」

今私の住んでゐる近所に喜久井町といふ町がある。是は私の生れた所だから、外の人よりもよく知つてゐる。けれども私が家を出て、方々漂浪して歸つて來た時には、其喜久井町が大分廣がつて、何時の間にか根來の方迄延びてゐた。

私に緣故の深い此町の名は、あまり聞き慣れて育つた所爲か、ちつとも私の過去を誘ひ出す懷かしい響を私に與へて呉れない。然し書齋に獨り坐つて、頰杖を突いた儘、流れを下る船のやうに、心を自由に遊ばせて置くと、時々私の聯想が、喜久井町の四字にぱたりと出會つたなり、其處でしばらく低徊し始める事がある。

此町は江戸と云つた昔には、多分存在してゐなかつたものらしい。江戸が東京に改まつた時か、それともずつと後になつてからか、年代はたしかに分らないが、何でも私の父が拵へたものに相違ないのである。

私の家の定紋が井桁に菊なので、夫にちなんだ菊に井戸を使つて、喜久井町としたといふ話は、父自身の口から聽いたのか、又は他のものから敎はつたのか、何しろ今でもまだ私の耳に殘つてゐる。父は名主がなくなつてから、一時區長といふ役を勤めてゐたので、或はそんな自由も利いたかも知れないが、それを誇りにした彼の虛榮心を、今になつて考へて見ると、厭な心持は疾くに消え去つて、只微笑したくなる丈である。

父はまだ其上に自宅の前から南へ行く時に是非共登らなければならない長い坂に、自分の姓の夏目といふ名を付けた。不幸にして是は喜久井町程有名にならずに、只の坂として殘つてゐる。然し此間、或人が來て、地圖で此邊の名前を調べたら、夏目坂といふのがあつたと云つて話したから、ことによると父の付けた名が今でも役に立つてゐるのかも知れない。

私が早稻田に歸つて來たのは、東京を出てから何年振になるだらう。私は今の住居に移る前、家を探す目的であつたか、又散步の歸り路であつたか、久し振で偶然私の舊家の横へ出た。其時表から二階の古瓦が少し見えたので、まだ生き殘つてゐるのかしらと思つたなり、私は其儘通り過ぎてしまつた。

早稻田に移つてから、私は又其門前を通つて見た。表から覗くと、何だか故と變らないやうな氣もしたが、門には思ひも寄らない下宿屋の看板が懸つてゐた。私は昔の早稻田田圃が見たかつた。然し其處はもう町になつてゐた。私は根來の茶畠と竹藪を一目眺めたかつた。然し其痕迹は何處にも發見する事が出來なかつた。多分此邊だらうと推測した私の見當は、當つてゐるのか、外れてゐるのか、それさへ不明であつた。

私は茫然として佇立した。何故私の家丈が過去の殘骸の如くに存在してゐるのだらう。私は心のうちで、早くそれが崩れて仕舞へば好いのにと思つた。

「時」は力であつた。去年私が高田の方へ散步した序に、何氣なく其處を通り過ぎると、私の家は綺麗に取り壞されて、其あとに新しい下宿屋が建てられつゝあつた。其傍には質屋も出來てゐた。質屋の前に疎らな垣をして、其中に庭木が少し植ゑてあつた。三本の松は、見る影もなく枝を刈り込まれて、殆ど畸形兒の樣になつてゐたが、何處か見覺のあるやうな心持を私に起させた。昔し「影參差松三本の月夜かな」と詠つたのは、或は此松の事ではなかつたらうかと考へつゝ、私はまた家に歸つた。

○ 〔原本二十六〕

益さんが何うしてそんなに零落たものか私には解らない。何しろ私の知つてゐる益さんは郵便脚夫であつた。益さんの弟の庄さんも、家を潰して私の所へ轉がり込んで食客になつてゐたが、是はまだ益さんよりは社會的地位が高かつた。子供の時分本町の鰯屋へ奉公に行つてゐた時、濱の西洋人が可愛がつて、外國へ連れて行くと云つたのを斷つたのが、今考へると殘念だなどゝ始終話してゐた。

二人とも私の母方の從兄に當る男だつたから、其緣故で、益さんは弟に會ふため、又私の父に敬意を表するため、月に一遍位は、牛込の奧迄煎餅の袋などを手土産に持つて、よく訪ねて來た。

益さんは其時何でも芝の外れか、又は品川近くに世帶を持つて、一人暮しの呑氣な生活を營んでゐたらしいので、宅へ來ると能く泊つて行つた。たまに歸らうとすると、兄達が寄つてたかつて、「歸ると承知しないぞ」などと威嚇したものである。

當時二番目と三番目の兄は、まだ南校へ通つてゐた。南校といふのは今の高等商業學校の位置にあつて、そこを卒業すると、開成學校卽ち今日の大學へ這入る組織になつてゐたものらしかつた。彼等は夜になると、玄關に桐の机を並べて、明日の下讀みをする。下讀みと云つた所で、今の書生の遣るのとは大分違つてゐた。グードリッチの英國史といつたやうな本を、一節位づゝ讀んで、それからそれを机の上へ伏せて、口の内で今讀んだ通りを暗誦するのである。

其下讀が濟むと、段々益さんが必要になつて來る。庄さんも何時の間にか其處へ顏を出す。一番目の兄も、機嫌の好い時は、わざ〳〵奧から玄關迄出張つて來る。さうしてみんな一所になつて、益さんに調戯ひ始める。

「益さん、西洋人の所へ手紙を配達する事もあるだらう」

「そりや商賣だから厭だつて仕方がありません、持つて行きますよ」

「益さんは英語が出來るのかね」

「英語が出來る位なら斯んな眞似をしちやゐません」

「然し郵便ッとか何とか大きな聲を出さなくつちやならないだらう」

「そりや日本語で間に合ひますよ。異人だつて、近頃は日本語が解りますもの」

「へえゝ、向でも何とか云ふのかね」

「云ひますとも。ペロリの奧さんなんか、貴方よろしい有難うと、ちやんと日本語で挨拶をする位です」

みんなは益さんを此處迄おびき出して置いて、どつと笑ふのである。それから又「益さん何て云ふんだつて、其奧さんは」と何遍も一つ事を訊いては、何時迄も笑ひの種にしようと巧らんでかゝる。益さんも仕舞には苦笑ひをして、とう〳〵「貴方よろしい」を已めにしてしまふ。すると今度は「ぢや益さん、野中の一本杉を遣つて御覽よ」と誰かが云ひ出す。

「やれつたつて、左右おいそれと遣れるもんぢやありません」

「まあ好いから、御遣りよ。愈野中の一本杉の所迄參りますと……」

益さんは夫でもにや〳〵して應じない。私はとう〳〵益さんの野中の一本杉といふものを聽かずにしまつた。今考へると、それは何でも講釋か人情噺の一節ぢやないかしらと思ふ。

私の成人する頃には益さんはもう宅へ來なくなつた。大方死んだのだらう。生きてゐれば何か消息のある筈である。然し死んだにしても、何時死んだのか私は知らない。

○〔原本二十九〕

私は兩親の晩年になつて出來た所謂末ッ子である。私を生んだ時、母はこんな年齒をして懷妊するのは面目ないと云つたとかいふ話が、今でも折々は繰り返されてゐる。

單に其爲ばかりでもあるまいが、私の兩親は私が生れ落ちると間もなく、私を里に遣つてしまつた。其里といふのは、無論私の記憶に殘つてゐる筈がないけれども、成人の後聞いて見ると、何でも古道具の賣買を渡世にしてゐた貧しい夫婦ものであつたらしい。

私は其道具屋の我樂多と一所に、小さい笊の中に入れられて、毎晩四谷の大通りの夜店に曝されてゐたのである。それを或晩私の姉が何かの序に其處を通り掛つた時見付けて、可哀想とでも思つたのだらう、懷へ入れて宅へ連れて來たが、私は其夜どうしても寐付かずに、とう〱一晩中泣き續けに泣いたとかいふので、姉は大いに父から叱られたさうである。

私は何時頃其里から取り戻されたか知らない。然しぢき又ある家へ養子に遣られた。それは慥か私の四つの歳であつたやうに思ふ。私は物心のつく八九歳迄其處で成長したが、やがて養家に妙なごた〱が起つたため、再び實家へ戻る樣な仕儀となつた。

淺草から牛込へ遷された私は、生れた家へ歸つたとは氣が付かずに、自分の兩親をもと通り祖父母とのみ思つてゐた。さうして相變らず彼等を御爺さん、御婆さんと呼んで毫も怪しまなかつた。向でも急に今迄の習慣を改めるのが變だと考へたものか、私にさう呼ばれながら澄ました顔をしてゐた。

私は普通の末ッ子のやうに決して兩親から可愛がられなかつた。是は私の性質が素直でなかつた爲だの、久しく兩親に遠ざかつてゐた爲だの、色々の原因から來てゐた。とくに父からは寧ろ苛酷に取扱はれたといふ記憶がまだ私の頭に殘つてゐる。それだのに淺草から牛込へ移された當時の私は、何故か非常に嬉しかつた。さうして其嬉しさが誰の目にも付く位に著るしく外へ現はれた。

馬鹿な私は、本當の兩親を爺婆とのみ思ひ込んで、何の位の月日を空に暮らしたものだらう。それを訊かれると丸で分らないが、何でも或夜斯んな事があつた。

私がひとり座敷に寐てゐると、枕元の所で小さな聲を出して、しきりに私の名を呼ぶものがある。私は驚いて眼を覺ましたが、周圍が眞暗なので、誰が其處に蹲踞んでゐるのか、一寸判斷が付かなかつた。けれども私は子供だから唯凝として先方の云ふ事丈を聞いてゐた。すると聞いてゐるうちに、それが私の家の下女の聲である事に氣が付いた。下女は暗い中で私に耳語をするやうに斯ういふのである。――

「貴君が御爺さん御婆さんだと思つてゐらつしやる方は、本當はあなたの御父さんと御母さんなのですよ。先刻ね、大方其所爲であんなに此方の宅が好なんだらう、妙なものだな、と云つて二人で話してゐらしつたのを私が聞いたから、そつと貴君に敎へて上げるんですよ。誰にも話しちや不可せんよ。よござんすか」

私は其時たゞ「誰にも云はないよ」と云つたぎりだつたが、心の中では大變嬉しかつた。さうして其嬉しさは事實を敎へて吳れたからの嬉しさではなくつて、單に下女が私に親切だつたからの嬉しさであつた。不思議にも私はそれ程嬉しく思つた下女の名も顔も丸で忘れてしまつた。覺えてゐるのはたゞ其人の親切丈である。

○〔原本三十一〕

私がまだ小學校に行つてゐた時分に、喜い

ちやんといふ仲の好い友達があつた。喜いちやんは當時中町の叔父さんの宅にゐたので、さう道程の近くない私の所からは、毎日會ひに行く事が出來惡かつた。私は重に自分の方から出掛けないで、喜いちやんの來るのを宅で待つてゐた。喜いちやんはいくら私が行かないでも、屹度向うから來るに極つてゐた。さうして其來る所は、私の家の長屋を借りて、紙や筆を賣る松さんの許であつた。

喜いちやんには父母がない樣だつたが、子供の私には、それが一向不思議とも思はれなかつた。恐らく訊いて見た事もなかつたらう。從つて喜いちやんが何故松さんの所へ來るのか、其譯さへも知らずにゐた。是はずつと後で聞いた話であるが、此喜いちやんの御父さんといふのは、昔し銀座の役人か何かをしてゐた時、贋金を作つたとかいふ嫌疑を受けて、入牢した儘死んでしまつたのだといふ。それであとに取り殘された細君が、喜いちやんを先夫の家へ置いたなり、松さんの所へ再緣したのだから、喜いちやんが時々生の母に會ひに來るのは當り前の話であつた。

何にも知らない私は、此事情を聞いた時ですら、別段變な感じも起さなかつた位だから、喜いちやんと巫山戯廻つて遊ぶ頃に、彼の境遇などを考へた事はたゞの一度もなかつた。

喜いちやんも私も漢學が好きだつたので、解りもしない癖に、能く文章の議論などをして面白がつた。彼は何處から聽いてくるのか、調べてくるのか、能くむづかしい漢籍の名前などを擧げて、私を驚かす事が多かつた。

彼はある日私の部屋同樣になつてゐる玄關に上り込んで、懷から二册つゞきの書物を出して見せた。それは確に寫本であつた。しかも漢文で綴つてあつた樣に思ふ。私は喜いちやんから、其書物を受け取つて、無意味に其處此處を引つ繰返して見てゐた。實は何が何だか私には薩張り解らなかつたのである。然し喜いちやんは、それを知つてるかなどゝ露骨な事をいふ性質ではなかつた。

「是は太田南畝の自筆なんだがね。僕の友達がそれを賣りたいといふので君に見せに來たんだが、買つて遣らないか」

私は太田南畝といふ人を知らなかつた。

「太田南畝つて一體何だい」

「蜀山人の事さ。有名な蜀山人さ」

無學な私は蜀山人といふ名前さへまだ知らなかつた。然し喜いちやんにさう云はれて見ると、何だか貴重の書物らしい氣がした。

「若干なら賣るのかい」と訊いて見た。

「五十錢に賣たいと云ふんだがね。何うだらう」

私は考へた。さうして何しろ價切つて見るのが上策だと思ひついた。

「二十五錢なら買つても好い」

「それぢや二十五錢でも構はないから、買つて遣り給へ」

喜いちやんは斯う云ひつゝ、私から二十五錢受取つて置いて、又しきりに其本の效能を述べ立てた。私には無論其書物が解らないのだから、それ程嬉しくもなかつたけれども、何しろ損はしないのだらうといふ丈の滿足はあつた。私は其夜南畝莠言——たしかそんな名前だと記憶してゐるが、それを机の上に載せて寢た。

○

三十二

翌日になると、喜いちやんが又ぶらりと遣つて來た。

「君昨日買つて貰つた本の事だがね」

喜いちやんはそれ丈云つて、私の顏を見ながら愚圖々々してゐる。私は机の上に載せてあつた書物に眼を注いだ。

「あの本かい。あの本が何うかしたのかい」

「實はあすこの宅の阿爺に知れたもんだから、阿爺が大變怒つてね。どうか返して貰つて來てくれつて僕に賴むんだよ。僕も一遍君に渡したもんだから厭だつたけれども仕方がないから又來たのさ」

「本を取りにかい」

「取りにつて譯でもないけれども、もし君の方で差支がないなら、返して遣つて呉れないか。何しろ二十五錢ぢや安過ぎるつていふんだから」

此最後の一言で、私は今迄安く買ひ得たといふ滿足の裏に、ぼんやり潛んでゐた不快、――不善の行爲から起る不快――を判然自覺し始めた。さうして一方では狡猾い私を怒ると共に、一方では二十五錢で賣つた先方を怒つた。何うして此二つの怒りを同時に和らげたものだらう。私は苦い顏をしてしばらく默つてゐた。

私のこの心理狀態は、今の私が子供の時の自分を回顧して解剖するのだから、比較的明瞭に描き出されるやうなものゝ、其場合の私には殆ど解らなかつた。私さへたゞ苦い顏をしたといふ結果だけしか自覺し得なかつたのだから、相手の喜いちやんには無論それ以上解る筈がなかつた。括弧の中でいふべき事かも知れないが、年齡を取つた今日でも、私には能く斯んな現象が起つてくる。それで能く他から誤解される。

喜いちやんは私の顏を見て、「二十五錢では本當に安過ぎるんだとさ」と云つた。

私はいきなり机の上に載せて置いた書物を取つて、喜いちやんの前に突き出した。

「ぢや返さう」

「どうも失敬した。何しろ安公の持つてるものでないんだから仕方がない。阿爺の宅に昔からあつたやつを、そつと賣つて小遣にしようつて云ふんだからね」

私はぷり〳〵して何とも答へなかつた。喜いちやんは袂から二十五錢出して私の前へ置き掛けたが、私はそれに手を觸れようともしなかつた。

「其金なら取らないよ」

「何故」

「何故でも取らない」

「左右か。然し詰らないぢやないか、たゞ本丈返すのは。本を返す位なら二十五錢も取り給ひな」

私は堪らなくなつた。

「本は僕のものだよ。一旦買つた以上は僕のものに極つてるぢやないか」

「そりや左右に違ひない。違ひないが向の宅でも困つてるんだから」

「だから返すと云つてるぢやないか。だけど僕は金を取る譯がないんだ」

「そんな解らない事を云はずに、まあ取つて置き給ひな」

「僕は遣るんだよ。僕の本だけども、欲しければ遣らうといふんだよ。遣るんだから本だけ持つて行つたら好いぢやないか」

「左右かそんなら、左樣しよう」

喜いちやんはとう〳〵本だけ持つて歸つた。さうして私は何の意味なしに二十五錢の小遣を取られてしまつたのである。

○〔原、三十五〕

私は子供の時分能く日本橋の瀨戸物町にある伊勢本といふ寄席へ講釋を聽きに行つた。今の三越の向側に何時でも晝席の看板が掛かつてゐて、其角を曲ると、寄席はつい小半町行くか行かない右手にあつたのである。

此席は夜になると、色物丈しか掛けないので、私は講釋より外に足を踏み込んだ事がなかつたけれども、度數からいふと一番多く通つた所の

様に思はれる。當時私のゐた家は無論高田の馬場の下ではなかつた。然しいくら地理の便が好かつたからと云つて、何うしてあんなに講釋を聽きに行く時間が私にあつたものか、今考へると寧ろ不思議な位である。

是も今から振返つて遠い過去を眺める所爲でもあらうか、其處は寄席としては寧ろ上品な氣分を客に起させる樣に出來てゐた。高座の右側には帳場格子のやうな仕切を二方に立廻して、其中に定連の席が設けてあつた。それから高座の後が縁側で、その先がまた庭になつてゐた。庭には梅の古木が斜めに井桁の上に突き出たりして、窮屈な感じのしない程の大空が、縁から仰がれる位に餘分の地面を取込んでゐた。其庭を東に受けて離れ座敷のやうな建物も見えた。

帳場格子のうちにゐる連中は、時間が餘つて使ひ切れない有福な人達なのだから、みんな相應な服裝をして、時々呑氣さうに袂から毛拔などを出して根氣よく鼻毛を拔いてゐた。そんな長閑な日には、庭の梅の樹に鶯が來て啼くやうな氣持もした。

中入になると、菓子を箱入の儘茶を賣る男が客の間へ配つて歩くのが此席の習慣になつてゐた。箱は淺い長方形のもので、まづ誰でも欲しいと思ふ人の手の屆く所に一つと云つた風に都合よく置かれるのである。菓子の數は一箱に十位の割だつたかと思ふが、それを食べたい丈食べて、後から其代價を箱の中に入れるのが無言の規約になつてゐた。私は其頃此習慣を珍らしいものゝやうに興がつて眺めてゐたが、今となつて見ると、斯うした鷹揚で呑氣な氣分は、何處の人寄場へ行つても、もう味はふ事が出來まいと思ふと、それが又何となく懷しい。

私はそんなおつとりと物寂びた空氣の中で、古めかしい講釋といふものを色々の人から聽いたのである。其中には、すととこ、のんく\、ずいく\、などといふ妙な言葉を使ふ男もゐた。是は田邊南龍と云つて、もとは何處かの下足番であつたとかいふ話である。其すととこ、のんく\、ずいく\は甚だ有名なものであつたが、其意味を理解するものは一人もなかつた。彼はたゞそれを軍勢の押寄せる形容詞として用ひてゐたらしいのである。

此南龍はとつくの昔に死んでしまつた。其外のものも大抵は死んでしまつた。其後の樣子を丸で知らない私には、其時分私を喜ばせて呉れた人のうちで生きてゐるものが果して何人あるのだか全く分らなかつた。

所がいつか美音會の忘年會のあつた時、其番組を見たら、吉原の幇間だの藝者だの何だのが列べて書いてあるうちに、私はたつた一人の當時の舊友を見出した。私は新富座へ行つて、其人を見た。又其聲を聞いた。さうして彼の顔も咽喉も昔とちつとも變つてゐないのに驚いた。彼の講釋も全く昔の通りであつた。進歩もしない代りに、退歩もしてゐなかつた。二十世紀の此急劇な變化を、自分と自分の周圍に恐ろしく意識しつゝあつた私は、彼の前に坐りながら、絶えず彼と私とを、心のうちで比較して一種の默想に耽つてゐた。

彼といふのは馬琴の事で、昔伊勢本で南龍の中入前をつとめてゐた頃には、琴凌と呼ばれた若手だつたのである。

○ 「原本三十六」

私の長兄はまだ大學とならない前の開成校にゐたのだが、肺を患つて中途で退學してしまつた。私とは大分年齒が違ふので、兄弟としての親しみよりも、大人對子供としての關係の方が、深く私の頭に浸み込んでゐる。ことに怒られた時は左右した感じが強く私を刺戟したやうに思ふ。

兄は色の白い鼻筋の通つた美しい男であつた。然し誰だから云つても、表面から見ても、何處かに嚴しい相を具へてゐて、無暗に近寄れないと云つた風の逼つた心持を他に與へた。

兄の在學中には、まだ地方から出て來た貢進生などの居る頃だつたので、今の青年には想像の出來ないやうな氣風が校内の其處此處に殘つてゐたらしい。兄は或上級生に艶書を付けられたと云つて、私に話した事がある。其上級生といふのは、兄などよりもずつと年齒上の男であつたらしい。斯んな習慣の行はれない東京で育つた彼は、果して其文を何う始末したものだらう。兄はそれ以後學校の風呂で其男と顔を見合せるたびに、極りの悪い思ひをして困つたと云つてゐた。

學校を出た頃の彼は、非常に四角四面で、始終堅苦しく構へてゐたから、父や母も多少彼に氣を置く様子が見えた。其上病氣の所爲でもあらうが、常に陰氣臭い顔をして、宅にばかり引込んでゐた。

それが何時となく融けて來て、人柄が自と柔らかになつたと思ふと、彼は能く古渡唐棧の着物に角帶などを締めて、夕方から宅を外にし始めた。時々は紫色で龜甲型を一面に摺つた縮緬の團扇などが茶の間に放り出される様になつた。それ丈ならまだ好いが、彼は長火鉢の前へ坐つた儘、しきりに假聲を遣ひ出した。しかし宅のものは別段それに頓着する樣子も見えなかつた。私は無論平氣であつた。假聲と同時に藤八拳も始まつた。然し此方は相手が要るので、さう毎晩は繰返されなかつたが、何しろ變に無器用な手を上げたり下げたりして、熱心に遣つてゐた。相手は重に三番目の兄が勤めてゐた樣である。私は眞面目な顔をして、たゞ傍觀してゐるに過ぎなかつた。

此兄はとう〳〵肺病で死んでしまつた。死んだのは慥か明治二十年だと覺えてゐる。すると葬式も濟み、逮夜も濟で、まづ一片付といふ所へ一人の女が尋ねて來た。三番目の兄が出て應接して見ると、其女は彼に斯んな事を訊いた。

「兄さんは死ぬ迄、奥さんを御持ちになりやしますまいね」

兄は病氣のため、生涯妻帶しなかつた。

「いゝえ仕舞迄獨身で暮らしてゐました」

「それを聞いてやつと安心しました。妾のやうなものは、どうせ旦那がなくつちや生きて行かれないから、仕方がありませんけれども……」

兄の遺骨の埋められた寺の名を教はつて歸つて行つた此女は、わざ〳〵甲州から出て來たのであるが、元柳橋の藝者をしてゐる頃、兄と關係があつたのだといふ話を、私は其時始めて聞いた。

私は時々此女に會つて兄の事などを物語つて見たい氣がしないでもない。然し會つたら定めしお婆さんになつて、昔とは丸で違つた顔をしてゐはしまいかと考へる。さうして其心も其顔同様に皺が寄つて、から〳〵に乾いてゐはしまいかとも考へる。もし左右だとすると、彼女が今になつて兄の弟の私に會ふのは、彼女にとつて却つて辛い悲しい事かも知れない。

〇

原本三十七」

私は母の記念の爲に此處で何か書いて置きたいと思ふが、生憎私の知つてゐる母は、私の頭に大した材料を遺して行つて呉れなかつた。

母の名は千枝といつた。私は今でも此千枝といふ言葉を懐かしいものゝ一つに數へてゐる。だから私にはそれがたゞ私の母丈の名前で、決して外の女の名前であつてはならない様な氣がする。幸ひに私はまだ母以外の千枝といふ女に出會つた事がない。

母は私の十三四の時に死んだのだけれども、私の今遠くから呼び起す彼女の幻像は、記憶の糸をいくら辿つて行つても、御婆さんに見える。晩年に生れた私には、母の水々しい姿を覚えてゐる特権が遂に與へられずにしまつたのである。

私の知つてゐる母は、常に大きな眼鏡を掛けて裁縫をしてゐた。其眼鏡は鐵縁の古風なもので、球の大きさが直徑二寸以上もあつたやうに思はれる。母はそれを掛けた儘、すこし顋を襟元へ引き付けながら、私を凝と見る事が屢あつたが、老眼の性質を知らない其頃の私には、それがたゞ彼女の癖とのみ考へられた。私は此眼鏡と共に、何時でも母の背景になつてゐた一間の襖を想ひ出す。古びた張交の中に、生死事大無常迅速云々と書いた石摺なども鮮やかに眼に浮んで來る。

夏になると母は始終紺無地の絽の帷子を着て、幅の狭い黒繻子の帯を締めてゐた。不思議な事に、私の記憶に残つてゐる母の姿は、何時でも此眞夏の服装で頭の中に現れる丈なので、それから紺無地の絽の着物と幅の狭い黒繻子の帯を取り除くと、後に後るものはたゞ彼女の顔ばかりになる。母がかつて縁鼻へ出て、兄と碁を打つてゐた樣などは、彼等二人を組み合はせた圖柄として、私の胸に收めてある唯一の記念なのだが、其處でも彼女は矢張同じ帷子を着て、同じ帯を締めて坐つてゐるのである。

私はつひぞ母の里へ伴れて行かれた覺えがないので、長い間母が何處から嫁に來たのか知らずに暮らしてゐた。自分から求めて訊きたがるやうな好奇心は更になかつた。それで其點も矢張ぼんやり霞んで見えるより外に仕方がないのだが、母が四ツ谷大番町で生れたといふ話丈は確に聞いてゐた。宅は質屋であつたらしい。藏が幾戸前とかあつたのだと、かつて人から教へられたやうにも思ふが、何しろ其大番町といふ所を、此年になる迄今だに通つた事のない私のことだから、そんな細な點は丸で忘れてしまつた。たとひそれが事實であつたにせよ、私の今有つてゐる母の記念のなかに藏屋敷などは決して現れて來ないのである。大方其頃にはもう潰れて仕舞つたのだらう。

母が父の所へ嫁にくる迄御殿奉公をしてゐたといふ話も朧氣に覺えてゐるが、何處の大名の屋敷へ上つて、何の位長く勤めてゐたものか、御殿奉公の性質さへ能く辨へない今の私には、たゞ淡い香を殘して消えた香のやうなものので、殆ど取り留めやうのない事實である。

然しさう云へば、私は錦繪に描いた御殿女中の羽織つてゐるやうな華美な總模樣の着物を宅の藏の中で見た事がある。紅絹裏を付けた其着物の表には、櫻だか梅だかが一面に染め出されて、所々に金絲や銀絲の刺繡も交つてゐた。是は恐らく當時の裲襠とかいふものなのだらう。然し母がそれを打ち掛けた姿は、今想像しても丸で眼に浮かばない。私の知つてゐる母は、常に大きな老眼鏡を掛けた御婆さんであつたから。それのみか私は此美しい裲襠が其後小掻卷に仕立直されて、其頃宅に出來た病人の上に載せられたのを見た位だから。

○〔原本三十八〕

私が大學で教はつたある西洋人が日本を去る時、私は何か餞別を贈らうと思つて、宅の藏から高蒔繪に緋の房の付いた美しい文箱を取り出して來た事も、もう古い昔である。それを父の前へ持つて行つて貰ひ受けた時の私は、全く何の氣も付かなかつたが、今斯うして筆を執つて見ると、その文箱も小掻卷に仕立直された紅絹裏の裲襠同樣に、若い時分の母の面影を濃かに宿してゐるやうに思はれてならない。母

は生涯父から着物を拵へて貰つた事がないといふ話だが、果して拵へて貰はないでも濟む位な支度をして來たものだらうか。私の心に映るあの紺無地の絽の帷子も、幅の狹い黒繻子の帶も、矢張り嫁に來た時から既に箪笥の中にあつたものなのだらうか。私は再び母に會つて、萬事を悉く口づから訊いて見たい。

惡戯で強情な私は、決して世間の末ッ子のやうに母から甘く取扱はれなかつた。それでも宅中で一番私を可愛がつて呉れたものは母だといふ強い親しみの心が、母に對する私の記憶の中には、何時でも籠つてゐる。愛憎を別にして考へて見ても、母はたしかに品位のある床しい婦人に違なかつた。さうして父よりは賢こさうに誰の目にも見えた。氣六づかしい兄も母丈には畏敬の念を抱いてゐた。

「阿母さんは何にも云はないけれども、何處かに怖いところがある」

私は母を評した兄の此言葉を、暗い遠くの方から明かに引張り出してくる事が今でも出來る。然しそれは水に融けて流れかゝつた字體を、屹となつて漸と元の形に返したやうな際どい私の記憶の斷片に過ぎない。其外の事になると、私の母はすべて私に取つて夢である。

斷切れ斷切れに殘つてゐる彼女の面影をいくら丹念に拾ひ集めても、母の全體はとても髣髴する譯に行かない。其斷切れ〳〵に殘つてゐる昔さへ、半以上はもう薄れ過ぎて、しつかりとは摑めない。

或時私は二階へ上つて、たつた一人で、晝寐をした事がある。其頃の私は晝寐をすると、よく變なものに襲はれがちであつた。私の親指が見る間に大きくなつて、何時迄經つても留らなかつたり、或は仰向に眺めてゐる天井が段々上から下りて來て、私の胸を抑へ付けたり、又は眼を開いて普段と變らない周圍を現に見てゐるのに、身體丈が睡魔の擒となつて、いくら藻掻いても、手足を動かす事が出來なかつたり、後で考へてさへ、夢だか正氣だか譯の分らない場合が多かつた。さうして其時も私は此變なものに襲はれたのである。

私は何時何處で犯した罪か知らないが、何しろ自分の所有でない金銭を多額に費消してしまつた。それを何の目的で何に遣つたのか、其邊も明瞭でないけれども、子供の私には到底償ふ譯に行かないので、氣の狹い私は寐ながら大變苦しみ出した。さうして仕舞に大きな聲を揚げて下にゐる母を呼んだのである。

二階の梯子段は、母の大眼鏡と離す事の出來ない、生死事大無常迅速云々と書いた石摺の張交にしてある襖の、すぐ後に附いてゐるので、母は私の聲を聞き付けると、すぐ二階へ上つて來て呉れた。私は其處に立つて私を眺めてゐる母に、私の苦しみを話して、何うかして下さいと頼んだ。母は其時微笑しながら、「心配しないでも好いよ。御母さんがいくらでも御金を出して上げるから」と云つて呉れた。私は大變嬉しかつた。それで安心してまたすやすや寐てしまつた。

私は此出來事が、全部夢なのか、又は半分丈本當なのか、今でも疑つてゐる。然し何うしても私は實際大きな聲を出して母に救ひを求め、母は又實際の姿を現して私に慰藉の言葉を與へて呉れたとしか考へられない。さうして其時の母の服裝は、いつも私の眼に映る通り、やはり紺無地の絽の帷子に幅の狹い黒繻子の帶だつたのである。

道草

一

健三が遠い所から歸つて來て駒込の奥に世帶を持つたのは東京を出てから何年目になるだらう。彼は故郷の土を踏む珍らしさのうちに一種の淋し味さへ感じた。

彼の身體には新しく後に見捨てた遠い國の臭がまだ付着してゐた。彼はそれを忌んだ。一日も早く其臭を振ひ落さなければならないと思つた。さうして其臭のうちに潜んでゐる彼の誇りと滿足には却つて氣が付かなかつた。

彼は斯うした氣分を有つた人に有勝な落付のない態度で、千駄木から追分へ出る通りを日に二遍づゝ規則のやうに往來した。

ある日小雨が降つた。其時彼は外套も雨具も着けずに、たゞ傘を差した丈で、何時もの通りを本郷の方へ例刻に歩いて行つた。すると車屋の少しさきで思ひ懸けない人にはたりと出會つた。其人は根津權現の裏門の坂を上つて、彼と反對に北へ向いて歩いて來たものと見えて、健三が行手を何氣なく眺めた時、十間位先から既に彼の視線に入つたのである。さうして思はず彼の眼をわきへ外させたのである。

彼は知らん顏をして其人の傍を通り拔けようとした。けれども彼にはもう一遍此男の眼鼻立を確める必要があつた。それで御互が二三間の距離に近づいた頃又眸を其人の方角に向けた。すると先方ではもう疾くに彼の姿を凝と見詰めてゐた。

往來は靜であつた。二人の間にはたゞ細い雨の絲が絕間なく落ちてゐる丈なので、御互が御互の顏を認めるには何の困難もなかつた。健三はすぐ眼をそらして又眞正面を向いた儘歩き出した。けれども相手は道端に立ち留まつたなり、少しも足を運ぶ氣色なく、ぢつと彼の通り過ぎるのを見送つてゐた。健三は其男の顏が彼の步調につれて、少しづゝ動いて廻るのに氣が着いた位であつた。

彼は此男に何年會はなかつたらう。彼が此男と緣を切つたのは、彼がまだ二十歲になるかならない昔の事であつた。それから今日迄に十五六年の月日が經つてゐるが、その間彼等はつひぞ一度も顏を合せた事がなかつたのである。

彼の位地も境遇も其時分から見ると丸で變つてゐた。黑い髯を生やして山高帽を被つた今の姿と坊主頭の昔の面影とを比べて見ると、自分でさへ隔世の感が起らないとも限らなかつた。然しそれにしては相手の方があまりに變らな過ぎた。彼は何う勘定しても六十五六であるべき筈の其人の髮の毛が、何故今でも元の通り黑いのだらうと思つて、心のうちで怪しんだ。帽子なしで外出する昔ながらの癖を今でも押通してゐる其人の特色も、彼には異な氣分を與へる媒介となつた。

彼は固より其人に出會ふ事を好まなかつた。萬一出會つても其人が自分より立派な服裝でもしてゐて吳れゝば好いと思つてゐた。然し今目前に見た其人は、あまり裕福な境遇に居るとは誰が見ても決して思へなかつた。帽子を被らないのは當人の自由としても、羽織なり着物なりに就いて判斷したところ、何うしても中流以下の活計を營んでゐる町家の年寄としか受取れなかつた。彼は其人の差してゐた洋傘が、重さうな毛繻子であつた事に迄氣が付いてゐた。

其日彼は家へ歸つても途中で會つた男の事を忘れ得なかつた。折々は道端へ立ち止まつて凝と彼を見送つてゐた其人の眼付に悩まされた。然し細君には何も打ち明けなかつた。機嫌のよくない時は、いくら話したい事があつても、細君に話さないのが彼の癖であつた。細君も默つてゐる夫に對しては、用事の外決して口を利かない女であつた。

二

次の日健三は又同じ時刻に同じ所を通つた。其次の日も通つた。けれども帽子を被らない男はもう何處からも出て來なかつた。彼は器械のやうに又義務のやうに何時もの道を往つたり來たりした。

斯うした無事の日が五日續いた後、六日目の朝になつて帽子を被らない男は突然又根津權現の坂の蔭から現はれて健三を脅かした。それが此前と略同じ場所で、時間も殆ど此前と違はなかつた。

其時健三は相手の自分に近付くのを意識しつゝ、何時もの通り器械のやうに又義務のやうに歩かうとした。けれども先方の態度は正反對であつた。何人をも不安にしなければ已まない程な注意を雙眼に集めて彼を凝視した。隙さへあれば彼に近付かうとする其人の心が曇よりした眸のうちにあり／＼と讀まれた。出來る丈容赦なく其傍を通り抜けた健三の胸には變な豫覺が起つた。

「とても是丈では濟むまい」

然し其日家へ歸つた時も、彼はつひに帽子を被らない男の事を細君に話さずにしまつた。

彼と細君と結婚したのは今から七八年前で、もう其時分には此男との關係がとくの昔に切れてゐたし、其上結婚地が故郷の東京でなかつたので、細君の方ではぢかに其人を知る筈がなかつた。然し噂として丈なら或は健三自身の口から既に話してゐたかも知れず、又彼の親類のものから聞いて知つてゐないとも限らなかつた。それは何れにしても健三にとつて問題にはならなかつた。

たゞ此事件に關して今でも時々彼の胸に浮んでくる結婚後の事實が一つあつた。五六年前彼がまだ地方にゐる頃、ある日女文字で書いた厚い封書が突然彼の勤め先の机の上へ置かれた。其時彼は變な顔をして其手紙を讀んだ。然しいくら讀んでも／＼讀み切れなかつた。半紙二十枚ばかりへ隙間なく細字で書いたものの、五分の一ほど眼を通した後、彼はつひにそれを細君の手に渡してしまつた。

其時の彼には自分宛でこんな長い手紙をかいた女の素性を細君に説明する必要があつた。それから其女に關聯して、是非とも此帽子を被らない男を引合に出す必要もあつた。健三はさうした必要にせまられた過去の自分を記憶してゐる。然し機嫌買な彼がどの位綿密な程度で細君に説明してやつたか其點になると、彼はもう忘れてゐた。細君は女の事だから未だ判然覺えてゐるだらうが、今の彼にはそんな事を改めて彼女に問ひ訊して見る氣も起らなかつた。彼は此長い手紙を書いた女と、此帽子を被らない男とを一所に並べて考へるのが大嫌ひだつた。それは彼の不幸な過去を遠くから呼び起す媒介となるからであつた。

幸な彼の目下の狀態はそんな事に屈託してゐる餘裕を彼に與へなかつた。彼は家へ歸つて衣服を着換へると、すぐ自分の書齋へ這入つた。彼は始終その六疊敷の狭い畳の上に自分のする事が山のやうに積んであるやうな氣持でゐるのである。けれども實際から云ふと、仕事をするよりも、しなければならないといふ刺戟の方が、遙に強く彼を支配してゐた。自然彼はいら

いらしなければならなかつた。
彼が遠い所から持つて來た書物の箱を此六疊の中で開けた時、彼は山のやうな洋書の裡に胡坐をかいて、一週間も二週間も暮らしてゐた。さうして何でも手に觸れるものを片端から取り上げては二三頁づゝ讀んだ。それがため肝心の書齋の整理は何時迄經つても片付かなかつた。しまひに此體たらくを見るに見かねた或友人が來て、順序にも冊數にも頓着なく、ある丈の書物をさつさと書棚の上に並べてしまつた。彼を知つてゐる多數の人は彼を神經衰弱だと評した。彼自身はそれを自分の性質だと信じてゐた。

三

健三は實際其日々々の仕事に追はれてゐた。家へ歸つてからも氣樂に使へる時間は少しもなかつた。其上彼は自分の讀みたいものを讀んだり、書きたい事を書いたり、考へたい問題を考へたりしたかつた。それで彼の心は殆ど餘裕といふものを知らなかつた。彼は始終机の前にこびり着いてゐた。
娯樂の場所へも滅多に足を踏み込めない位忙しがつてゐる彼が、ある時友達から謠の稽古を勸められて、體よくそれを斷つたが、彼は心のうちで、他人には何うしてそんな暇があるのだらうと驚いた。さうして自分の時間に對する態度が、恰も守錢奴のそれに似通つてゐる事には、丸で氣がつかなかつた。
自然の勢ひ彼は社交を避けなければならなかつた。人間をも避けなければならなかつた。彼の頭と活字との交渉が複雜になればなる程、人としての彼は孤獨に陷らなければならなかつた。彼は朧氣にその淋しさを感ずる場合さへあつた。けれども一方ではまた心の底に異樣の熱塊があるといふ自信を持つてゐた。だから索寞たる曠野の方角へ向けて生活の路を歩いて行きながら、それが却つて本來だとばかり心得てゐた。溫い人間の血を枯らしに行くのだとは決して思はなかつた。
彼は親類から變人扱ひにされてゐた。然しそれは彼に取つて大した苦痛にもならなかつた。
「教育が違ふんだから仕方がない」
彼の腹の中には常に斯ういふ答辯があつた。
「矢つ張り手前味噌よ」
是は何時でも細君の解釋であつた。
氣の毒な事に健三は斯うした細君の批評を超越する事が出來なかつた。さう云はれる度に氣不味い顏をした。ある時は自分を理解しない細君を心から忌々しく思つた。ある時は叱り付けた。又ある時は頭ごなしに遣り込めた。すると彼の癇癪が細君の耳に空威張をする人の言葉のやうに響いた。細君は「手前味噌」の四字を「大風呂敷」の四字に訂正するに過ぎなかつた。
彼には一人の腹違の姉と一人の兄があるぎりであつた。親類と云つた所で此二軒より外に持たない彼は、不幸にして其二軒ともあまり親しく往來をしてゐなかつた。自分の姉や兄と疎遠になるといふ變な事實は、彼に取つても餘り氣持の好いものではなかつた。然し親類づきあひよりも自分の仕事の方が彼には大事に見えた。それから東京へ歸つて以後既に三四回彼等と顏を合せたといふ記憶も、彼には多少の言譯になつた。もし帽子を被らない男が突然彼の行手を遮らなかつたなら、彼は何時もの通り千駄木の町を毎日二返規則正しく往來する丈で、當分外の方角へは足を向けずにしまつたらう。もし其間に身體の樂に出來る日曜が來たなら、ぐたりと疲れ切つた四肢を疊の上に横たへて半日の安息を貪るに過ぎなかつたらう。
然し次の日曜が來た時、彼は不圖途中で二度

會つた男の事を思ひ出した。さうして急に思ひ立つたやうに姉の所へ出掛けた。姉の宅は四谷の津の守坂の横で、大通りから一町ばかり奥へ引込んだ所にあつた。彼女の夫といふのは健三の従兄にあたる男だから、つまり姉にも従兄であつた。然し年齢は同年か一つ違で、健三から見ると双方とも、一廻りも上であつた。此夫がもと四谷の區役所へ勤めた縁故で、彼が其處を已めた今日でも、まだ馴染の多い土地を離れるのが厭だといつて、姉は今の勤先に不便なのも構はず、矢つ張り元の古ぼけた家に住んでゐるのである。

四

此姉は喘息持であつた。年が年中ぜい／＼云つてゐた。それでも生れ付が非常な癇性なので、餘程苦しくないと決して凝としてゐなかつた。何か用を拵へて狭い家の中を始終ぐるぐる廻つて歩かないと承知しなかつた。其落付のないがさつな態度が健三の眼には如何にも氣の毒に見えた。

姉は又非常に喋舌る事の好な女であつた。さうして其喋舌り方に少しも品位といふものがなかつた。彼女と對坐する健三は屹度苦い顔をして默らなければならなかつた。

「是が己の姉なんだからなあ」

彼女と話をした後の健三の胸には何時でも斯ういふ述懐が起つた。

其日健三は例の如く襷を掛けて戸棚の中を掻きまはしてゐる此姉を見出した。

「まあ珍しく能く來て呉れたこと。さあ御敷きなさい」

姉は健三に座蒲團を勸めて縁側へ手を洗ひに行つた。

健三は其留守に座敷のなかを見廻した。欄間には彼が子供の時から見覺えのある古ぼけた額が懸つてゐた。其落款に書いてある筒井憲といふ名は、たしか旗本の書家か何かで、大變字が上手なんだと、十五六の昔此處の主人から教へられた事を思ひ出した。彼は其主人をその頃は兄さん兄さんと呼んで始終遊びに行つたものである。さうして年から云へば叔父甥程の相違があるのに、二人して能く座敷の中で相撲をとつては姉から怒られたり、屋根へ登つて無花果を捥いで食つて、其皮を隣の庭へ投げたため、尻を持ち込まれたりした。主人が箱入りのコンパスを買つて遣ると云つて彼を騙したなり何時迄經つても買つてくれなかつたのを非常に恨めしく思つた事もあつた。姉と喧嘩をして、もう向うから詫罪つて來ても堪忍してやらないと覺悟を極めたが、いくら待つてゐても、姉が詫らないので、仕方なしに此方からのこのこ出掛けて行つた癖に、手持無沙汰なので、向うで御這入りといふ迄、默つて門口に立つてゐた滑稽もあつた。……

古い額を眺めた健三は、子供の時の自分に明かな記憶の探照燈を向けた。さうして夫程世話になつた姉夫婦に、今は大した好意を有つ事が出來にくゝなつた自分を不快に感じた。

「近頃は身體の具合はどうです。あんまり非道く起る事もありませんか」

彼は自分の前に坐つた姉の顔を見ながら斯う訊ねた。

「えゝ有難う。御蔭さまで陽氣が好いもんだから、まあ何うか斯うか家の事丈は遣つてるんだけれども、――でも矢張り年が年だからね。とても昔の様にがせいに働く事は出來ないのさ。昔健ちやんの遊びに來てくれた時分にや、隨分尻つ端折りで、夫こそ御釜の御尻迄洗つたもんだが、今ぢやとてもそんな元氣はありやしない。だけど御蔭様で斯う遣つて毎日牛乳も飲んでるし……」

健三は些少ながら月々いくらかの小遣を姉に遣る事を忘れなかつたのである。
「少し瘦せた樣ですね」
「なに是や私の持前だから仕方がない。昔から肥つた事のない女なんだから。矢つ張り癇が强いもんだからね。癇で肥る事が出來ないんだよ」
姉は肉のない細い腕を捲つて健三の前に出して見せた。大きな落ち込んだ彼女の眼の下を薄黑い半圓形の暈が、怠さうな皮で物憂げに染めてゐた。健三は默つて其ぱさ〳〵した手の平を見詰めた。
「でも健ちやんは立派になつて本當に結構だ。御前さんが外國へ行く時なんか、もう二度と生きて會ふ事は六づかしからうと思つてたのに、それでもよくまあ達者で歸つて來られたのね。御父さんや御母さんが生きて御出でだつたら嘸御喜びだらう」
姉の眼にはいつか淚が溜つてゐた。姉は健三の子供の時分、「今に姉さんに御金が出來たら、健ちやんに何でも好きなものを買つて上げるよ」と口癖のやうに云つてゐた。さうかと思ふと、「こんな偏窟ぢや此子はとても物にやならない」とも云つた。健三は姉の昔の言葉やら語氣やらを思ひ浮べて、心の中で苦笑した。

五

そんな古い記憶を喚び起すにつけても、久しく會はなかつた姉の老けた樣子が一層健三の眼についた。
「時に姉さんは幾何でしたかね」
「もう御婆さんさ。取つて一だもの御前さん」
姉は黃色い疎らな齒を出して笑つて見せた。實際五十一とは健三にも意外であつた。
「すると私とは一廻以上違ふんだね。私や又精々違つて十か十一だと思つてゐた」
「どうして一廻どころか。健ちやんとは十六違ふんだよ。姉さんは、良人が未の三碧で姉さんが四綠なんだから。健ちやんは慥か七赤だつたね」
「何だか知らないが、とにかく三十六ですよ」
「繰つて見て御覽、屹度七赤だから」
健三はどうして自分の星を繰るのかそれさへ知らなかつた。年齡の話はそれぎり已めてしまつた。
「今日は御留守なんですか」と比田の事を訊いて見た。
「昨夕も宿直でね。なに自分の分だけなら月に三度か四度で濟むんだけれども、他に賴まれるもんだからね。それに一晩でも餘計泊りさへすればやつぱり若干かになるだらう、それでつい他の分迄引受ける氣にもなるのさ。此頃ぢや彼方へ寢るのと此方へ歸るのと、まあ半々位なものだらう。ことによると、向うへ泊る方が却つて多いかも知れないよ」
健三は默つて障子の傍に据ゑてある比田の机を眺めた。硯箱や狀袋や卷紙がきちりと行儀よく並んでゐる傍に、簿記用の帳面が赤い背皮を此方へ向けて、二三册立て懸けてあつた。それから綺麗に光つた小さい算盤も其下に置いてあつた。
噂によると比田は此頃變な女に關係をつけて、それを自分の勤め先のつい近くに圍つてゐるといふ評判であつた。宿直だ宿直だと云つて宅へ歸らないのは、或はその所爲ぢやなからうかとも健三には思へた。
「比田さんは近頃どうです。大分年を取つたから元とは違つて眞面目になつたでせう」
「なに矢つ張り相變らずさ。ありや一人で遊ぶために生れて來た男なんだから仕方がないよ。やれ寄席だ、やれ芝居だ、やれ相撲だつて、御金さへありや年が年中飛んで步いてるんだから

「ねーでも奇麗なもんで、年の所爲だか何だか知らないが、昔に比べると、少しは優しくなつたやうだよ。もとは健ちやんも知つてる通りの始末で、隨分烈しかつたもんだがね。蹴つたり、敲いたり、髮の毛を持つて座敷中引摺廻したり……」

「其代り姉さんも負けてる方ぢやなかつたんだからな」

「なに私や手出しなんかした事あ、ついの一度だつてありやしない」

健三は勝氣な姉の昔を想ひ出してつい可笑しくなつた。二人の立ち廻りは今姉の自白するやうに受身のものばかりでは決してなかつた。ことに口は姉の方が比田に比べると十倍も達者だつた。それにしても此利かぬ氣の姉が、夫に騙されて、彼が宅へ歸らない以上、屹度會社へ泊つてゐるに違ないと信じ切つてゐるのが妙に不憫に思はれて來た。

「久し振に何か奢りませうか」と姉の顏を眺めながら云つた。

「ありがと、今御鮨をさういつたから、珍らしくもあるまいけれども、食べてつて御呉れ」

姉は客の顏さへ見れば、時間に關係なく、何か食はせなければ承知しない女であつた。

健三は仕方がないから尻を落付けてゆつくり腹の中に持つて來た話を姉に切り出す氣になつた。

六

近頃の健三は頭を餘計遣ひ過ぎる所爲か、どうも胃の具合が好くなかつた。時々思ひ出したやうに運動して見ると、胸も腹も却つて重くなる丈であつた。彼は要心して三度の食事以外には成るべく物を口へ入れないやうに心掛けてゐた。それでも姉の惡強には敵はなかつた。

「海苔卷なら身體に障りやしないよ。折角姉さんが健ちやんに御馳走しようと思つて取つたんだから、是非食べて御呉れな。厭かい」

健三は仕方なしに旨くもない海苔卷を頰張つて、好い加減煙草で荒らされた口のうちをもぐもぐさせた。

姉が餘り饒舌るので、彼は何時迄も自分の云ひたい事が云へなかつた。訊きたい問題を持つてゐながら、斯う受身な會話ばかりしてゐるのが、彼には段々むづ痒くなつて來た。然し姉にはそれが一向通じないらしかつた。

他に物を食はせる事の好きなのと同時に、物を遣る事の好きな彼女は、健三が此前買つてあた古ぼけた達磨の掛物を彼に遣らうかと云ひ出した。

「あんなものあ、宅にあつたつて仕方がないんだから、持つて御出でよ。なに比田たつて要りやしないやね、汚い達磨なんか」

健三は貰ふとも貰はないとも云はずにたゞ苦笑してゐた。すると姉は何か秘密話でもするやうに急に調子を低くした。

「實は健ちやん、御前さんが歸つて來たら、話さう〳〵と思つて、つい今日迄默つてたんだがね。健ちやんも歸りたてゞ嘸忙しからうし、夫に姉さんが出掛けて行くにしたところで、お住さんが居ちや、少し話し惡い事だしね。さうかつて、手紙を書かうにも御存じの無筆だらう……」

姉の前置は長たらしくもあり、又滑稽でもあつた。小さい時分いくら手習をさせても記憶が惡くつて、どんなに平易しい字も、とう〳〵頭へ這入らず仕舞に、五十の今日迄生きて來た女だと思ふと、健三にはわが姉ながら氣の毒でもあり又うら恥づかしくもあつた。

「それで姉さんの話つてえな、一體どんな話なんです。實は私も今日は少し姉さんに話があつて來たんだが」

「さうかい。夫ぢや御前さんの方のから先へ聴くのが順だつたね。何故早く話さなかつたの」
「だつて話せないんだもの」
「そんなに遠慮しないでもいゝやね。姉弟の間ぢやないか、御前さん」
姉は自分の多辯が相手の口を塞いでゐるのだといふ明白な事實には毫も氣が付いてゐなかつた。
「まあ姉さんの方から先へ片付けませう。何ですか、あなたの話つていふのは」
「實は健ちやんにはまことに氣の毒で、云ひ惡いんだけれども、あたしも段々年を取つて身體は弱くなるし、夫に良人があの通りの男で、自分一人さへ好けりや女房なんか何うなつたつて、己の知つた事ぢやないつて顔をしてゐるんだから。――尤も月々の取高が少い上に、交際もあるんだから、仕方がないと云へば夫迄だけれどもね……」
姉の云ふ事は女丈に隨分曲りくねつてゐた。中々容易な事で目的地へ達しさうになかつたけれども、其主意は健三によく解つた。つまり月々遣る小遣をもう少し増して呉れといふのだらうと思つた。今でさへそれをよく夫から借りられてしまふといふ話を耳にしてゐる彼には、此請求が哀れでもあり、又腹立たしくもあつた。
「どうか姉さんを助けると思つてね、姉さんだつて此身體ぢやどうせ長い事もあるまいから」
是が姉の口から出た最後の言葉であつた。健三はそれでも厭だとは云ひかねた。

七

彼は是から宅へ歸つて今夜中に片付けなければならない明日の仕事を有つてゐた。時間の價値といふものを少しも認めない此姉と對坐して、何時迄も、べん／＼と喋舌つてゐるのは、彼にとつて多少の苦痛に違なかつた。彼は好加減に歸らうとした。さうして歸る間際になつてやつと帽子を被らない男の事を云ひ出した。
「實は此間島田に會つたんですがね」
「へえ何處で」
姉は吃驚したやうな聲を出した。姉は無教育な東京ものによく見るわざとらしい仰山な表情をしたがる女であつた。
「太田の原の傍です」
「ぢや御前さんのつい近所ぢやないか。どうしたい、何か言葉でも掛けたかい」
「掛けるつて、別に言葉の掛けやうもないんだから」
「さうさね。健ちやんの方から何とか云はなきや、向うで口なんぞ利けた義理でもないんだから」
姉の言葉は出來る丈健三の意を迎へるやうな調子であつた。彼女は健三に「どんな服裝をしてゐたい」と訊き足した後で、「ぢや矢つ張り樂でもないんだね」と云つた。其處には多少の同情も籠つてゐるやうに見えた。然し男の昔を話し出した時にはさも／＼惡らしさうな語氣を用ひ始めた。
「なんぼ因業だつて、あんな因業な人つたらありやしないよ。今日が期限だから、是が非でも取つて行くつて、いくら言譯を云つても、坐り込んで動かないんだもの。仕舞に此方も腹が立つたから、お氣の毒さま、お金はありませんが、品物で好ければ、お鍋でもお釜でも持つてつて下さいつて云つたらね、ぢや釜を持つてくつて云ふんだよ。あきれるぢやないか」
「釜を持つて行くつたつて、重くつて到底持てやしないでせう」
「ところがあの業突張の事だから、どんな事をして持つてかないとも限らないのさ。そら其日の御飯をあたしに炊かせまいと思つて、さういふ意地の惡い事をする人なんだからね。どうせ

先へ寄つて好い事あない筈だあね」
健三の耳には此話がたゞの滑稽としては聞こえなかつた。其人と姉との間に起つた斯んな交渉のなかに引絡まつてゐる古い自分の影法師は、彼に取つて可笑しいといふよりも寧ろ悲しいものであつた。
「私や島田に一度会つたんですよ、姉さん。是から先又何時会ふか分らないんだ」
「いゝから知らん顔をして御出でよ。何度会つたつて構はないぢやないか」
「然しわざ／＼彼処いらを通つて、私の宅でも探してゐるんだか、また用があつて通りかゝりに偶然出つくはしたんだか、それが分らないんでね」
此疑問は姉にも解けなかつた。彼女はたゞ健三に都合の好ささうな言葉を無意味に使つた。それが健三には空御世辞のごとく響いた。
「此方へは其後丸で来ないんですか」
「あゝ此二三年は丸つきり来ないよ」
「其前は？」
「其前はね、ちよく／＼つて程でもないが、それでも時々は来たのさ。それが又可笑しいんだよ。来ると何時でも十一時頃でね、鰻飯かなにか食べさせないと決して帰らないんだからね。三度の御まんまを一かたけでも好いから他の家で食べようつていふのがつまりあの人の腹なんだよ。其癖服装なんか可なりなものを着てゐるんだがね」
姉のいふ事は脱線しがちであつたけれども、それを聴いてゐる健三には、矢張り金銭上の問題で、自分が東京を去つたあとも、なほ多少の交際が二人の間に持続されてゐたのだといふ見当はついた。然しそれ以上何も知る事は出来なかつた。目下の島田に就いては全く分らなかつた。

八

「島田は今でも元の処に住んでゐるんだらうか」
斯んな簡単な質問さへ、姉には判然答へられなかつた。健三に少し的が外れた。けれども自分の方から進んで島田の現在の居所を突き留めようと迄は思つてゐなかつたので、大した失望も感じなかつた。彼は此場合まだそれ程の手数を尽す必要がないと信じてゐた。たとひ尽すにした所で、一種の好奇心を満足するに過ぎないとも考へてゐた。其上今の彼は斯ういふ好奇心を軽蔑しなければならなかつた。彼の時間はそんな事に使用するには余りに高価すぎた。
彼はたゞ想像の眼で、子供の時分見た其人の家と、其家の周囲とを、心のうちに思ひ浮べた。
其処には往来の片側に幅の広い大きな堀が一丁も続いてゐた。水の変らない其堀の中は腐つた泥で不快に濁つてゐた。所々に蒼い色が湧いて厭な臭さへ彼の鼻を襲つた。彼はその汚ならしい一廓を――様のお屋敷といふ名で覚えてゐた。
堀の向ふ側には長屋がずつと並んでゐた。其長屋には一軒に一つ位の割で四角な暗い窓が開けてあつた。石垣とすれ／＼に建てられた此長屋が何処迄も続いてゐるので、お屋敷のなかは丸で見えなかつた。
此お屋敷と反対の側には小さな平家が疎らに並んでゐた。古いのも新しいのもごちや／＼に交つてゐた其町並は無論不揃であつた。老人の歯のやうに所々が空いてゐた。その空いてゐる所を少し許り買つて島田は彼の住居を拵へたのである。
健三はそれが何時出来上つたか知らなかつた。然し彼が始めてそこへ行つたのは新築後まだ間もないうちであつた。四間しかない狭い家

だつたけれども、木口抔は可成吟味してあるらしく子供の眼にも見えた。間取にも工夫があつた。六疊の座敷は東向で、松葉を敷き詰めた狹い庭に、大き過ぎる程立派な御影の石燈籠が据ゑてあつた。

綺麗好きな島田は、自分で尻端折りをして、絶えず濡雑巾を縁側や柱へ掛けた。それから跣足になつて、南の居間の前栽へ出て、草毟りをした。あるときは鍬を使つて、門口の泥溝も浚つた。其泥溝には長さ四尺ばかりの木の橋が懸つてゐた。

島田はまた此住居以外に粗末な貸家を一軒建てた。さうして雙方の家の間を通り抜けて裏へ出られるやうに三尺ほどの路を付けた。裏は野とも畠とも片のつかない濕地であつた。草を踏むとじく／＼水が出た。一番凹んだ所などは始終淺い池のやうになつてゐた。島田は追々其處へも小さな貸家を建てる積であるらしかつた。然し其企ては何時迄も實現されなかつた。冬になると鴨が下りるから、今度は一つ捕つてやらう抔と云つてゐた。……

健三は斯ういふ昔の記憶を夫から夫へと繰り返した。今其處へ行つて見たら定めし驚く程變つてゐるだらうと思ひながら、彼はなほ二十年前の光景を今日の事のやうに考へた。

「ことによると、良人では年始状位まだ出してゐるかも知れないよ」

健三の歸る時、姉は斯んな事を云つて、暗に比田の戻る迄話して行けと勸めたが、彼にはそれ程の必要もなかつた。

彼は其日無沙汰見舞かた／＼市ケ谷の藥王寺前にゐる兄の宅へも寄つて、島田の事を訊いて見ようかと考へてゐたが、時間の遲くなつたのと、どうせ訊いたつて仕方がないといふ氣が次第に強くなつたのとで、それなり駒込へ歸つた。其晩は又翌日の仕事に忙殺されなければならなかつた。さうして島田の事は丸で忘れてしまつた。

九

彼はまた平生の我に歸つた。活力の大部分を擧げて自分の職業に使ふ事が出來た。彼の時間は靜かに流れた。然し其靜かなうちには始終いら／＼するものがあつて、絶えず彼を苦しめた。遠くから彼を眺めてゐなければならなかつた細君は、別に手の出しやうもないので澄ましてゐた。それが健三には妻にあるまじき冷淡としか思へなかつた。細君はまた心の中で彼と同じ非難を夫の上に投げ掛けた。夫の書齋で暮らす時間が多くなればなる程、夫婦間の交渉は、用事以外に少くならなければならない筈だと云ふのが細君の方の理窟であつた。

彼女は自然の勢ひ健三を一人書齋に遺して置いて、子供丈を相手にした。其子供たちはまた滅多に書齋へ這入らなかつた。たまに這入ると、乾度何か惡戯をして健三に叱られた。彼は子供を叱る癖に、自分の傍へ寄り付かない彼等に對して、矢張り一種の物足りない心持を抱いてゐた。

一週間後、日曜が來た時、彼は丸で外出しなかつた。氣分を變へるため四時頃風呂へ行つて歸つたら、急にうつとりした好い氣持に襲はれたので、彼は手足を疊の上へ伸ばしたまゝ、つい假寐をした。さうして晩食の時刻になつて、細君から起される迄は、首を切られた人のやうに何事も知らなかつた。然し起きて膳に向つた時、彼には微かな寒氣が脊筋を上から下へ傳はつて行くやうな感じがあつた。その後で烈しい嚔が二つ程出た。傍にゐる細君は默つてゐた。健三も何も云はなかつたが、腹の中では斯うした同情に乏しい細君に對する厭な心持を意識しつゝ箸を取つた。細君の方ではまた夫

が何故自分に何もかも隔意なく話して、能働的に細君らしく振舞はせないのかと、その方を却つて不愉快に思つた。

其晩彼は明かに多少風邪氣味であるといふ事に氣が付いた。用心して早く寢ようと思つたが、ついしかけた仕事に妨げられて、十二時過迄起きてゐた。彼の床に入る時には家内のものはもう皆寢てゐた。熱い葛湯でも飲んで、發汗したい希望をもつてゐた健三は、已むを得ず其儘冷たい夜具の裏に潛り込んだ。彼は例にない寒さを感じて、寢付が大變惡かつた。然し頭腦の疲勞は程なく彼を深い眠りの境に誘つた。

翌る日眼を覺した時は存外安靜であつた。彼は床の中で、風邪はもう癒つたものと考へた。然し愈起きて顏を洗ふ段になると、何時もの冷水摩擦が退儀な位身體が倦怠くなつてきた。勇氣を鼓して食卓に着いて見たが、朝食は少しも旨くなかつた。いつもは規定として三膳食べる所を、其日は一膳で濟ました後、梅干を熱い茶の中に入れてふう〳〵吹いて呑んだ。然し其意味は彼自身にも解らなかつた。此時も細君は健三の傍に坐つて給仕をしてゐたが、別に何も云はなかつた。彼には其態度がわざと冷淡に構へてゐる技巧の如く見えて多少腹が立つた。彼はことさらな咳を二度も三度もして見せた。夫でも細君は依然として取り合はなかつた。

健三はさつさと頭から白襯衣を被つて洋服に着換へたなり例刻に宅を出た。細君は何時もの通り帽子を持つて夫を玄關迄送つて來たが、此時の彼にはそれがたゞ形式丈を重んずる女としか受取れなかつたので、彼は猶厭な心持がした。

外ではしきりに惡感がした。舌が重々しくばさついて、熱のある人のやうに身體全體が倦怠かつた。彼は自分の脈を取つて見て、其早いのに驚いた。指頭に觸れるピン〳〵いふ音が、秒を刻む袂時計の音と錯綜して、彼の耳に異様な節奏を傳へた。それでも彼は我慢して、爲る丈の仕事を外でした。

十

彼は例刻に宅へ歸つた。洋服を着換へる時、細君は何時もの通り、彼の不斷着を持つた儘、彼の傍に立つてゐた。彼は不快な顏をして其方を向いた。

「床を取つて呉れ。寢るんだ」

「はい」

細君は彼のいふが儘に床を延べた。彼はすぐ其中に入つて寢た。彼は自分の風邪氣の事を一口も細君に云はなかつた。細君の方でも一向其處に注意してゐない様子を見せた。それで雙方とも腹の中には不平があつた。

健三が眼を塞いでうつら〳〵してゐると、細君が枕元へ來て彼の名を呼んだ。

「あなた御飯を召上がりますか」

「飯なんか食ひたくない」

細君はしばらく默つてゐた。けれどもすぐ立つて部屋の外へ出て行かうとはしなかつた。

「あなた、何うかなすつたんですか」

健三は何も答へずに、顏を半分ほど夜具の襟に埋めてゐた。細君は無言のまゝ、そつと其手を彼の額の上に加へた。

晩になつて醫者が來た。たゞの風邪だらうと云ふ診察を下して、水藥と頓服を呉れた。彼はそれを細君の手から飲まして貰つた。

翌日は熱が猶高くなつた。醫者の注意によつて護謨の氷嚢を彼の頭の上に載せた細君は、蒲團の下に差し込むニッケル製の器械を下女が買つてくる迄、自分の手で落ちないやうにそれを抑へてゐた。

魔に襲はれたやうな氣分が二三日つゞいた。健三の頭には其間の記憶といふものが殆ど

ない位であつた。正氣に歸つた時、彼は平氣な顔をして天井を見た。それから枕元に坐つてゐる細君を見た。さうして急に其細君の世話になつたのだといふ事を思ひ出した。然し彼は何も云はずに又顔を背けてしまつた。それで細君の胸には夫の心持が少しも映らなかつた。

「あなた何うなすつたんです」

「風邪を引いたんだつて、醫者が云ふぢやないか」

「そりや解つてます」

會話はそれで途切れてしまつた。細君は厭な顔をしてそれぎり部屋を出て行つた。健三は手を鳴らして又細君を呼び戻した。

「己が何うしたといふんだい」

「何うしたつて、――あなたが御病氣だから、私だつて斯うして氷嚢を更へたり、薬を注いだりして上げるんぢやありませんか。それを彼方へ行けの、邪魔だのつて、あんまり……」

細君は後を云はずに下を向いた。

「そんな事を云つた覺えはない」

「そりや熱の高い時仰しやつた事ですから、多分覺えちや居らつしやらないでせう。けれども平生からさう考へてさへ居らつしやらなければ、いくら病氣だつて、そんな事を仰しやる譯がないと思ひますわ」

斯んな場合に健三は細君の言葉の奥に果して何の位な眞實が潜んで居るだらうかと反省して見るよりも、すぐ頭の力で彼女を抑へつけたがる男であつた。事實の問題を離れて、單に論理の上から行くと、細君の方が此場合も負であつた。熱に浮かされた時、魔睡薬に醉つた時、もしくは夢を見る時、人間は必ずしも自分の思つて居る事ばかり物語るとは限らないのだから。然しさうした論理は決して細君の心を服するに足らなかつた。

「よござんす。何うせあなたは私を下女同様に取り扱ふ積で居らつしやるんだから。自分一人さへ好ければ構はないと思つて、……」

健三は座を立つた細君の後姿を腹立たしさうに見送つた。彼は論理の權威で自己を佯つてゐる事には丸で氣が付かなかつた。學問の力で鍛へ上げた彼の頭から見ると、この明白な論理に心底から大人しく從ひ得ない細君は、全くの解らずやに違なかつた。

十一

其晩細君は土鍋へ入れた粥をもつて、また健三の枕元に坐つた。それを茶椀に盛りながら、「御起きになりませんか」と訊いた。

彼の舌にはまだ苔が一杯生えてゐた。重苦しいやうな厚ぼつたいやうな口の中へ物を入れる氣には殆どなれなかつた。それでも彼は何故だか床の上に起き返つて、細君の手から茶椀を受取らうとした。然し舌障りの惡い飯粒が、ざら〳〵と咽喉の方へ滑り込んで行く丈なので、彼はたつた一膳で口を拭つたなり、すぐ故の通り横になつた。

「まだ食氣が出ませんね」

「少しも旨くない」

細君は帶の間から一枚の名刺を出した。

「斯ういふ人が貴方の寝て居らつしやるうちに來たんですが、御病氣だから斷つて歸しました」

健三は寢ながら手を出して、鳥の子紙に刷つた其名刺を受取つて、姓名を讀んで見たが、まだ會つた事も聞いた事もない人であつた。

「何時來たのかい」

「たしか一昨日でしたらう。一寸御話しようと思つたんですが、まだ熱が下らないから、わざと默つてゐました」

「丸で知らない人だがな」

「でも島田の事で一寸御目にかゝり

たいつて、来たんださうですよ」

細君はとくに島田といふ二字に力を入れて斯う云ひながら、健三の顔を見た。すると彼の頭に此間途中で会つた帽子を被らない男の影がすぐ閃めいた。然し細君に促された彼には、それ迄此男の事を思ひ出す機会が丸でなかつたのである。

「御前島田の事を知つてるのかい」

「あの長い手紙がお常さんつて女から届いた時、貴方が御話しなすつたぢやありませんか」

健三は何とも答へずに一旦下へ置いた名刺を又取り上げて眺めた。島田の事を其時どれ程詳しく彼女に話したかそれが彼には不確であつた。

「ありや何時だつたかね。余つ程古い事だらう」

健三は其長々しい手紙を細君に見せた時の心持を思ひ出して苦笑した。

「さうね。もう七年位になるでせう。私達がまだ千本通りにゐた時分ですから」

千本通りといふのは、彼等が其頃住んでゐた或都会の外れにある町の名であつた。

細君はしばらくして、「島田の事なら、あなたに何はないでも、御兄さんからも聞いて知つてますわ」と云つた。

「兄が何んな事を云つたかい」

「何んな事つて、――なんでも余り善くない人だつていふ話ぢやありませんか」

細君はまだ其男の事に就いて、健三の心を知りたい様子であつた。然し彼にはまた反対にそれを避けたい意向があつた。彼は黙つて眼を閉ぢた。盆に載せた土鍋と茶碗を持つて席を立つ前、細君はもう一度斯う云つた。

「其名刺の名前の人はまた来るさうですよ。いづれ御病気が御癒りになつたら又伺ひますからつて、帰つて行つたさうですから」

健三は仕方なしに又眼を開いた。

「来るだらう。どうせ島田の代理だと名乗る以上は又来るに極つてるさ」

「然しあなた御会ひになつて？　若し来たら」

実をいふと彼は会ひたくなかつた。細君はなほの事夫を此変な男に会はせたくなかつた。

「御会ひにならない方が好いでせう」

「会つても好い。何も怖い事はないんだから」

細君には夫の言葉が、また例の我だと取れた。健三にはそれを厭だけれども正しい方法だから仕方がないのだと考へた。

十二

健三の病気は日ならず全快した。活字に眼を曝したり、萬年筆を走らせたり、又は腕組をしてたゞ考へたりする時が再び続くやうになつた頃、一度無駄足を踏まされた男が突然また彼の玄関先に現れた。

健三は鳥の子紙に刷つた吉田虎吉といふ見覚のない名刺を受取つて、しばらくそれを眺めてゐた。細君は小さな声で「御会ひになりますか」と訊ねた。

「会ふから座敷へ通してくれ」

細君は断りたさうな顔をして少し躊躇してゐた。然し夫の様子を見てとつた彼女は、何も云はずにまた書斎を出て行つた。

吉田といふのは、でつぷり肥つた、かつぷくの好い、四十恰好の男であつた。縞の羽織を着て、其頃迄流行つた白縮緬の兵児帯にぴか／＼する時計の鎖を巻付けてゐた。言葉使ひから見ても、彼は全くの町人であつた。さうかと云つて、決して堅気の商人とは受取れなかつた。「成程」といふべき所を、わざと「なある」と引張つたり、「御尤も」の代りに、さも感服したらしい調子で、「いかさま」と答へたりした。

健三には會見の順序として、まづ吉田の身元から訊いてかゝる必要があつた。然し彼よりは能辯な吉田は、自分の方で、訊かれない先に、素性や概略を說明した。

彼はもと高崎に居た。さうして其處にある兵營に出入して、糧秣を納めるのが彼の商賣であつた。

「そんな關係から、段々將校方の御世話になるやうになりまして、其内でも柴野の旦那には特別御贔屓になつたものですから」

健三は柴野といふ名を聞いて急に思ひ出した。それは島田の後妻の娘が嫁に行つた先の軍人の姓であつた。

「其緣故で島田を御承知なんですね」

二人はしばらくその柴野といふ士官に就いて話し合つた。彼が今高崎に居ない事や、もつと遠くの方へ轉任してから幾年目になるといふ事や、相變らずの大酒で家計があまり裕でないといふ事や、すべて是等は、健三に取つて耳新しい報知に違なかつたが、同時に大した興味を惹く話題にもならなかつた。此夫婦に對して何等の惡感も抱いてゐない健三は、たゞ左右かと思つて平氣に聞いてゐる丈であつた。然し話が本筋に入つて、愈々島田の事を持ち出された時、彼には自然嚴肅な心持がした。

吉田はしきりに此老人の窮迫の狀を訴へ始めた。

「人間があまり好過ぎるもんですから、つい人に騙されてみんな損つちまふんです。とても取れる見込のないのに無暗に金を出してやつたり何かするもんですからな」

「人間が好過ぎるんでせうか。あんまり慾張るからぢやありませんか」

たとひ吉田のいふ通り老人が困窮して居るとした所で、健三には斯うより外に解釋の道はなかつた。しかも困窮といふからしてが既に怪しかつた。肝心の代表者たる吉田も強ひて其點は辯護しなかつた。「或はさうかも知れません」と云つたなり、後は笑に紛らしてしまつた。其癖月々若干か貢いで遣つて呉れる譯には行くまいかといふ相談をすぐ其後から持ち出した。

正直な健三はつい自分の經濟事情を打明けて、此一面識しかない男に話さなければならなくなつた。彼は自己の手に入る百二三十圓の月收が、何う消費されつゝあるかを詳しく說明して、月々あとに殘るものは零だと云ふ事を相手に納得させようとした。吉田は例の「なある」と「いかさま」を時々使つて、神妙に健三の辯解を聽いた。然し彼が何處迄彼を信用して、何處から彼を疑ひ始めてゐるか、其點は健三にも分らなかつた。たゞ先方は何處迄も下手に出る手段を主眼としてゐるらしく見えた。不穩の言葉は無論、強請がましい樣子は噯にも出さなかつた。

十三

是で吉田の持つて來た用件の片が付いたものと解釋した健三は、心のうちで暗に彼の歸るのを豫期した。然し彼の態度は明かに此豫期の裏を行つた。金の問題にはそれぎり觸れなかつたが、毒にも藥にもならない世間話を何時迄も續けて動かなかつた。さうして自然天然話頭をまた島田の身の上に戾して來た。

「何んなものでせう。老人も取る年で近頃は大變心細さうな事ばかり云つてゐますが、――何卒元通りの御交際は願へないものでせうか」

健三は一寸返答に窮した。仕方なしに默つて二人の間に置かれた煙草盆を眺めてゐた。彼の頭のなかには、重たさうに毛繻子の洋傘をさして、異樣の瞳を彼の上に据ゑた其老人の面影がありありと浮かんだ。彼は其人の世話になつた昔を忘れる譯に行かなかつた。同時に人格の

反對から云へば、其人に對しての嫌惡の情を禁ずる事が出來なかつた。兩方の間に板挾みとなつた彼は、しばらく口を開き得なかつた。

「手前も折角ああして上がつたものですから、是丈は何うぞ曲げて御承知を願ひたいもので」

吉田の樣子は愈丁寧になつた。何う考へても交際ふ事は厭でならなかつた健三は、また何うしてもそれを斷るのを不義理と認めなければ濟まなかつた。彼は厭でも正しい方に從はうと思ひ極めた。

「さういふ譯なら宜しう御座います。承知の旨を向うへ傳へて下さい。然し交際は致しても、昔のやうな關係ではとても出來ませんから、それも誤解のないやうに申し傳へて下さい。それから私の今の狀況では、私の方から時々出掛けて行つて老人に慰藉を與へるなんて事は六づかしいのですが……」

「するとまあたゞ御出入りをさせて戴くといふ譯になりますな」

健三には御出入といふ言葉を聞くのが辛かつた。左右だとも左右でないとも云ひかねて、また口を閉ぢた。

「いえなに夫で結構で、――昔と今とは事情も丸で違ひますから」

吉田は自分の役目が漸く濟んだといふ顏付をして、斯う云つた後、今迄持ち扱つてゐた煙草入を腰へ差したなり、さつさと歸つて行つた。

健三は彼を玄關迄送り出すと、すぐ書齋へ入つた。其日の仕事を早く片付けようといふ氣があるので、いきなり机へ向つたが、心の何處かに引懸りが出來て、中々思ふ通りに捗取らなかつた。

其處へ細君が一寸顏を出した。「あなた」と二遍ばかり聲を掛けたが、健三は机の前に坐つたなり振り向かなかつた。細君が其儘默つて引込んだ後、健三は進まぬながら仕事を夕方迄續けた。

平生よりは遲くなつて漸く夕飯の食卓に着いた時、彼は始めて細君と言葉を換はした。

「先刻來た吉田つて男は一體何なんですか」と細君が訊いた。

「元高崎で陸軍の用達か何かしてゐたんださうだ」と健三が答へた。

問答は固より夫丈で盡きる筈がなかつた。彼女は吉田と柴野との關係やら、彼と島田との間柄やらに就いて、自分に納得の行く迄夫から說明を求めようとした。

「何うせ御金か何か呉れつていふんでせう」

「まあ左右だ」

「それで貴方何うなすつて。――どうせ御斷りになつたでせうね」

「うん、斷つた。斷るより外に仕方がないからな」

二人は腹の中で、自分等の家の經濟狀態を別々に考へた。月々支出してゐる、又支出しなければならない金額は、彼に取つて隨分苦しい努力の結果であると同時に、それで凡てを賄つて行く細君に取つても、少しも裕なものとは云はれなかつた。

十四

健三はそれぎり席を立たうとした。然し細君にはまだ訊きたい事が殘つてゐた。

「それで素直に歸つて行つたんですか、あの男は。少し變ね」

「だつて斷られゝば仕方がないぢやないか。喧嘩をする譯にも行かないんだから」

「だけど、又來るんでせう。あゝして大人しく歸つて置いて」

「來ても構はないさ」

「でも厭ですわ、蒼蠅くつて」

健三は細君が次の間で先刻の會話を殘らず聽いてゐたものと察した。

「御前聞いてたんだらう、最初」

細君は夫の言葉を肯定しない代りに否定もしなかつた。

「おや夫で好いぢやないか」

健三は斯う云つたなり又立つて書齋へ行かうとした。彼は獨斷家であつた。これ以上細君に說明する必要は始めからないものと信じてゐた。細君もさうした點に於いて夫の權利を認める女であつた。けれども表向夫の權利を認める丈に、腹の中には何時も不平があつた。事々について出て來る權柄づくな夫の態度は、彼女に取つて決して心持の好いものではなかつた。何故もう少し打ち解けて呉れないのかといふ氣が、絕えず彼女の胸の奧に働いた。其癖夫を打ち解けさせる天分も技倆も自分に十分具へてゐないといふ事實には全く無頓着であつた。

「あなた島田と交際つても好いと受合つて居らしつたやうですね」

「あゝ」

健三はそれが何うしたといつた風の顏付をした。細君は何時でも此處迄來て默つてしまふのを例にしてゐた。彼女の性質として、夫が斯ういふ態度に出ると、急に厭氣がさして、それから先一歩も前へ出る氣になれないのである。その不愛想な樣子が又夫の氣質に反射して、益彼を權柄づくにしがちであつた。

「御前や御前の家族に關係した事でないんだから、構はないぢやないか、己一人で極めたつて」

「そりや私に對して何も構つて頂かなくつても宜ござんす。構つて下さる方ぢやないんだから……」

學問をした健三の耳には、細君のいふ事が丸で脫線であつた。さうして其脫線は何うしても頭の惡い證據としか思はれなかつた。「又始まつた」といふ氣が腹の中でした。然し細君はすぐ當の問題に立ち戻つて、彼の注意を惹かなければならないやうな事を云ひ出した。

「然し御父さまに惡いでせう。今になつてあの人と御交際になつちやあ」

「御父さまつて己のおやぢかい」

「無論貴方の御父さまですわ」

「己のおやぢはとうに死んだぢやないか」

「然し御亡くなりになる前、島田とは絕交だから、向後一切付合をしちやならないつて仰しやつたさうぢやありませんか」

健三は自分の父と島田とが喧嘩をして義絕した當時の光景をよく覺えてゐた。然し彼は自分の父に對して左程情愛の籠つた優しい記憶を有つてゐなかつた。其上絕交云々に就いても、さう嚴重に云ひ渡された覺えはなかつた。

「御前誰からそんな事を聞いたのかい。己は話した積りはないがな」

「貴方ぢやありません。御兄さんに伺つたんです」

細君の返事は健三に取つて不思議でも何でもなかつた。同時に父の意志も兄の言葉も、彼には大した影響を與へなかつた。

「おやぢは阿爺、兄は兄、己は己なんだから仕方がない。己から見ると、交際を拒絕する丈の根據がないんだから」

斯う云ひ切つた健三は、腹の中で其交際が厭で堪らないのだといふ事實を意識した。けれどもその腹の中は丸で細君の胸に映らなかつた。彼女はたゞ自分の夫が又例の頑固を張り通して、徒らに皆の意見に反對するのだとばかり考へた。

十五

健三は昔其人に手を引かれて歩いた。其人は健三のために小さい洋服を拵へて呉れた。大人さへあまり外國の服裝に親しみのない古い時分の事なので、裁縫師も子供の着るスタイルなどには頓着しなかつた。彼の上着には腰のあたりに釦が二つ並んでゐて、胸は開いた儘であつた。霜降の羅紗も硬くごは／＼して、極めて手觸りが粗かつた。ことに洋袴は薄茶色に竪溝の通つた調馬師でなければ穿かないものであつた。然し當時の彼はそれを着て得意に手を引かれて歩いた。

彼の帽子もまた當時の彼には珍らしかつた。淺い鍋底の樣な形をしたフェルトをすぽりと坊主頭へ頭巾のやうに被るのが、彼に大した滿足を與へた。例の如く其人に手を引かれて、寄席へ手品を見に行つた時、手品師が彼の帽子を借りて、大事な黒羅紗の山の裏から表へ指を突き通して見せたので、彼は驚きながら心配さうに、再びわが手に歸つた帽子を、何遍か撫でまはして見た事もあつた。

其人は又彼のために尾の長い金魚をいくつも買つて呉れた。武者繪、錦繪、二枚つゞき三枚つゞきの繪も彼の云ふがまゝに買つて呉れた。彼は自分の身體にあふ緋縅の鎧と龍頭の兜さへ持つてゐた。彼は日に一度位づゝ其具足を身に着けて、金紙で拵へた采配を振り舞はした。

彼はまた子供の差す位な短かい脇差の所有者であつた。其脇差の目貫は、鼠が赤い唐辛子を引いて行く彫刻で出來上つてゐた。彼は銀で作つた此鼠と珊瑚で拵へた此唐辛子とを、自分の寶物のやうに大事がつた。彼は時々此脇差の光る身を拔いて見たくなつた。また何度も拔かうとした。けれども脇差は何時も拔けなかつた。――この封建時代の裝飾品も矢張其人の好意で小さな健三の手に渡されたのである。

彼はまた其人に連れられて、よく船に乘つた。船には屹度腰蓑を着けた船頭が居て網を打つた。いなだの鯔だのが水際迄來て跳ね躍る樣が小さな彼の眼に白金のやうな光を與へた。船頭は時々一里も二里も沖へ漕いで行つて、海鼠といふものを捕つた。さういふ場合には高い波が來て舟を搖り動かすので、彼の頭はすぐ重くなつた。さうして舟の中へ寢てしまふ事が多かつた。彼の最も面白がつたのは河豚の網にかゝつた時であつた。彼は杉箸で河豚の腹をかんかららと太鼓のやうに叩いて、その膨れたり怒つたりする樣子を見て樂しんだ。……

吉田と會見した後の健三の胸には、不圖斯うした幼時の記憶が續々湧いて來る事があつた。凡てそれらの記憶は、斷片的な割に鮮明に彼の心に映るものばかりであつた。さうして斷片的ではあるが、どれもこれも決して其人と引離す事の出來ないものばかりであつた。零碎の事實を手繰り寄せれば寄せる程、種が無盡藏にあるやうに見えた時、又其無盡藏にある種の各自のうちには必ず帽子を被らない男の姿が織り込まれてゐるといふ事を發見した時、彼は苦しんだ。

「斯んな光景をよく覺えてゐる癖に、何故自分の有つてゐた其頃の心が思ひ出せないのだらう」

これが健三にとつて大きな疑問になつた。實際彼は幼少の時分是程世話になつた人に對する當時のわが心持といふものを丸で忘れてしまつた。

「然しそんな事を忘れる筈がないんだから、ことによると、始めから其人に對して丈は、恩義相應の情合が缺けてゐたのかも知れない」

健三は斯うも考へた。のみならず多分此方だらうと自分を解釋した。

彼は此事件に就いて思ひ出した幼少の時の記憶を細君に話さなかつた。感情に脆い女の事だから、もし左右でもしたら、或は彼女の反感を和げるに都合が好からうとさへ思はなかつた。

十六

待ち設けた日がやがて來た。吉田と島田とはある日の午後連れ立つて健三の玄關に現はれた。

健三は此昔の人に對して何んな言葉を使つて、何んな態度をして好いか解らなかつた。思慮なしにそれ等を極めて呉れる自然の衝動が今の彼には丸で缺けてゐた。彼は二十年餘も會はない人と膝を突き合せながら、大した懷かしみも感じ得ずに、寧ろ冷淡に近い受答へばかりしてゐた。

島田はかねて横風だといふ評判のある男であつた。健三の兄や姉は單にそれ丈でも彼を忌み嫌つてゐる位であつた。實は健三自身も心のうちでそれを恐れてゐた。今の健三は、單に言葉遣ひの末でさへ、斯んな男から自尊心を傷けられるには、あまりに高過ぎると、自分を評價してゐた。

然し島田は思つたよりも丁寧であつた。普通初見の人が挨拶に用ひる「ですか」とか、「ませんか」とかいふことにはで、言葉の語尾を切る注意をわざと怠らないやうに見えた。健三はむかし其人から健坊々々と呼ばれた幼い時分を思ひ出した。關係が絶えてからも、會ひさへすれば、矢張り同じ健坊々々で通すので、彼はそれを厭に感じた過去も、自然胸のうちに浮かんだ。

「然しこの調子なら好いだらう」

健三はそれで、出來る丈不快の顔を二人に見せまいと力めた。向うも成るべく穩かに歸る積りと見えて、少しも健三の氣を惡くするやうな事は云はなかつた。それがために、當然雙方の間に話題となるべき懷舊談抔も殆ど出なかつた。從つて談話はやゝともすると途切れ勝になつた。

健三はふと雨の降つた朝の出來事を考へた。

「此間一二度途中で御目にかゝりましたが、時々あの邊を御通りになるんですか」

「實はあの高橋の總領の娘が片付いてゐる所がつい此先にあるもんですから」

高橋といふのは誰の事だか健三には一向解らなかつた。

「はあ」

「そら知つてるでせう。あの芝の」

島田の後妻の親類が芝にあつて、其處の家は何でも神主か坊主だといふ事を健三は子供心に聞いて覺えてゐるやうな氣もした。然しその親類の人には、要さんといふ彼とおない年位な男に二三度會つたぎりで、他のものに顔を合せた記憶は丸でなかつた。

「芝といふと、たしかお藤さんの妹さんに當る方の御嫁に入らしつた所でしたね」

「いえ姉ですよ。妹ではないんです」

「はあ」

「要三丈は死にましたが、あとの姉妹はみんな好い所へ片付いてね、仕合せですよ。そら總領のは、多分知つておいでだらう、――へ行つたんです」

――といふ名前は成程健三に耳新しいものではなかつた。然しそれはもう餘程前に死んだ人であつた。

「あとが女と子供ばかりで困るもんだから、何かにつけて、叔父さん〳〵つて重寶がられましてね。それに近頃は宅に手入をするんで監督の必要が出來たものだから、殆ど毎日のやうに此處の前を通ります」

健三は昔此男につれられて、池の端の本屋で法帖を買つて貰つた事をわれ知らず思ひ出した。たとひ一錢でも二錢でも負けさせなければ物を買つた例のない此人は、其時も僅か五厘の釣錢を取るべく店先へ腰を卸して頑として動かなかつた。董其昌の折手本を抱へて傍に佇立んでゐる彼に取つては其態度が如何にも見苦しくまた不愉快であつた。

「こんな人に監督される大工や左官はさぞ腹の立つ事だらう」

健三は斯う考へながら、島田の顔を見て苦笑を洩らした。しかし島田は一向それに氣が付かないらしかつた。

十七

「でも御蔭さまで、本を遺して行つて呉れたもんですから、あの男が亡くなつても、あとはまあ困らないで、何うにか斯うにか遣つて行けるんです」

島田は比田の作つた書物を世の中の誰でもが知つてゐなければならない筈だといつた風の口調で斯う云つた。然し健三は不幸にして其著書の名前を知らなかつた。字引か教科書だらうとは推察したが、別に訊いて見る氣にもならなかつた。

「本といふものは實に有難いもので、一つ作つて置くとそれが何時迄も賣れるんですからね」

健三は默つてゐた。仕方なしに吉田が相手になつて、何でも儲けるには本に限るやうな事を云つた。

「御葬儀は濟んだが、——比田が死んだ時後が女だけだもんだから、實は私が本屋に懸け合ひましてね。それで年々若干と極めて、向うから收めさせるやうにしたんです」

「へえ、大したもんですな。成程何うも學問をなさる時は、それ丈資金が要るやうで、一寸損な氣もしますが、さて仕上げて見ると、つまり其方が利廻りの好い譯になるんだから、無學のものはとても敵ひませんな」

「結局得ですよ」

彼等の應對は健三に何の興味も與へなかつた。其上いくら相槌を打たうにも打たれないやうな變な見當へ向いて進んで行くばかりであつた。手持無沙汰な彼は、已むを得ず二人の顔を見比べながら、時々庭の方を眺めた。

其庭はまた見苦しく手入の屆かないものであつた。何時綠をとつたか分らないやうな一本の松が、見苦しさうに蒼黒い葉を垣根の傍に茂らしてゐる外に、木らしい木は殆どなかつた。箒目に馴染まない地面は小石交りに凸凹してゐた。

「此方の先生も一つ御儲けになつたら如何です」

吉田は突然健三の方を向いた。健三は苦笑しない譯に行かなかつた。仕方なしに「えゝ儲けたいものですね」と云つて調子を合せた。

「なに譯はないんです。洋行迄すりや」

是は年寄の言葉であつた。それが恰も自分で學資でも出して、健三を洋行させたやうに聞こえたので、彼は厭な顔をした。然し老人は一向そんな事に頓着する樣子も見えなかつた。迷惑さうな健三の體を見ても澄ましてゐた。仕舞に吉田が傍の煙草入を腰へ差して「では今日は是で御暇を致す事にしませうか」と催促したので、彼は漸く歸る氣になつたらしかつた。

二人を送り出して又一寸座敷へ戻つた健三は、再び座蒲團の上に坐つたまゝ、腕組をして考へた。

「一體何の爲に來たのだらう。是ぢや他を厭がらせに來るのと同じ事だ。あれで向うは面白いのだらうか」

彼の前には先刻島田の持つて來た手土産が其

儘置いてあつた。彼はぼんやり其粗末な菓子折を眺めた。

何も云はずに茶碗だの烟草盆だのを片付け始めた細君は、仕舞に黙つて坐つてゐる彼の前に立つた。

「あなたまだ其處に坐つて居らつしやるんですか」

「いやもう立つても好い」

健三はすぐ立上らうとした。

「あの人達はまた來るんでせうか」

「來るかも知れない」

彼は斯う言ひ放つた儘、また書齋へ入つた。

一しきり箒で座敷を掃く音が聞えた。それが濟むと、菓子折を奪り合ふ子供の聲がした。凡てがやがて靜かになつたと思ふ頃、蒼暗い空から又雨が落ちて來た。健三は買はう／＼と思ひながら、ついまだ買はずにゐるオヷーシューの事を思ひ出した。

十八

雨の降る日が幾日も續いた。それがからりと晴れた時、染付けられたやうな空から深い輝きが大地の上に落ちた。毎日鬱陶しい思ひをして、縫針にばかり氣をとられてゐた細君は、縁鼻へ出て此蒼い空を見上げた。それから急に簞笥の抽斗を開けた。

彼女が服装を改めて夫の顔を覗きに來た時、健三は頰杖を突いたまゝ盆槍汚ない庭を眺めてゐた。

「あなた何を考へて居らつしやるの」

健三は一寸振り返つて細君の餘所行姿を見た。其刹那に鬱熱した彼の眼は不圖した新らしい味を自分の妻の上に見出した。

「何處かへ行くのかい」

「えゝ」

細君の答は彼に取つて餘りに簡潔過ぎた。彼はまたもとの佗びしい我に歸つた。

「子供は」

「子供も連れて行きます。置いて行くと八釜しくつて御蒼蠅いでせうから」

其日曜の午後を健三は獨り靜かに暮らした。

細君の歸つて來たのは、彼が夕飯を濟まして又書齋へ引き取つた後なので、もう灯が點いてから一二時間經つてゐた。

「只今」

遲くなりましたとも何とも云はない彼女の無愛嬌が、彼には氣に入らなかつた。彼は一寸振り向いた丈で口を利かなかつた。するとそれが又細君の心に暗い影を投げる媒介となつた。細君も其儘立つて茶の間の方へ行つてしまつた。

話をする機會はそれぎり二人の間に絶えた。彼等は顔さへ見れば自然何か云ひたくなるやうな仲の好い夫婦でもなかつた。又それ丈の親しみを現すには、御互が御互に取つてあまりに陳腐過ぎた。

二三日經つてから細君は始めて其日外出した折の事を食事の時話題に上せた。

「此間宅へ行つたら、門司の叔父に會ひましてね。隨分驚いちまひました。まだ臺灣にゐるのかと思つたら、何時の間にか歸つて來てゐるんですもの」

門司の叔父といふのは油斷のならない男として彼等の間に知られてゐた。健三がまだ地方にゐる頃、彼が突然汽車で遣つて來て、急に入用が出來たから、是非共少し都合して呉れまいかと頼むので、健三は地方の銀行に預けて置いた貯金を些少ながら用立てたら、立派に印紙を貼つた證文を後から郵便で送つて來た。其中に「但し利子の儀は」といふ文句迄書き添へてあつたので、健三は寧ろ堅過ぎる人だと思つたが、貸した金はそれぎり戻つて來なかつた。

「今何をしてゐるのかね」
「何をしてゐるんだか分りゃしません。何とかの会社を起すんで、是非健三さんにも賛成して貰ひたいから、其内上る積だって云ってました」
健三には其後を訊く必要もなかった。彼が昔し金を借りられた時分にも、此叔父は何かの会社を建てゝゐるとかいふので彼はそれを本当にしてゐた。細君の父もそれを疑はなかった。叔父は其父を旨く説きつけて、門司迄引張って行った。さうして是が今建築中の会社だと云って、縁もゆかりもない他人の建てゝゐる家を見せた。彼は實に此手段で細君の父から何千かの資本を捲き上げたのである。
健三は此人に就いてこれ以上何も知りたがらなかった。細君も云ふのが厭らしかった。然し何時もの通り会話は其處で切れてしまはなかった。
「あの日はあまり好い御天気だったから、久し振りで御兄さんの所へも廻って来ました」
「さうか」
細君の里は小石川台町で、健三の兄の家は市ケ谷薬王寺前だから、細君の訪問は大した迂回でもなかった。

十九

「御兄さんに島田の来た事を話したら驚いて居らっしゃいましたよ。今更来られた義理ぢゃないんだって。健三もあんなものを相手にしなければ好いのにって」
細君の顔には多少諷諫の意が現れてゐた。
「それを聞きに、御前わざ／＼薬王寺前へ廻ったのかい」
「またそんな皮肉を仰しゃる。あなたは何うしてさう他のする事を悪くばかり御取りになるんでせう。妾あんまり御無沙汰をして済まないと思ったから、たゞ帰りに一寸伺った丈です」
彼が滅多に行った事のない兄の家へ、細君がたまに訪ねて行くのは、つまり夫の代りに交際の義理を立てゝゐるやうなものなので、いかな健三もそれには苦情をいふ余地がなかった。
「御兄さんは貴夫のために心配してゐらっしゃるんですよ。あゝ云ふ人と交際ひだして、また何んな面倒が起らないとも限らないからって」
「面倒って何んな面倒を指すのかな」
「そりゃ起って見なければ、御兄さんにだって分りっこないでせうけれども、何しろ碌な事はないと思ってゐらっしゃるんでせう」
碌な事があらうとは健三にも思へなかった。
「然し義理が悪いからね」
「だって御金を遣って縁を切った以上、義理の悪い訳はないぢゃありませんか」
手切れの金は昔し養育料の名前の下に、健三の父の手から島田に渡されたのである。それはたしか健三が二十二の春であった。
「其上その御金をやる十四五年も前から貴夫は、もう貴夫の宅へ引取られてゐらしったんでせう」
いくつの年からいくつの年迄彼が全然島田の手で養育されたのか、健三にも判然分らなかった。
「三つから七つ迄ですって。御兄さんが左右仰いましたよ」
「左右かしら」
健三は夢のやうに消えた自分の昔を回顧した。彼の頭の中には眼鏡で見るやうな細かい絵が澤山出た。けれども其絵には何れを見ても日付がついてゐなかった。
「證文にちゃんとさう書いてあるさうですから大丈夫間違はないでせう」
彼は自分の離籍に関した書類といふものを

見た事がなかつた。

「見ない譯はないわ。屹度忘れて居らつしやるんですよ」

「然し八つで宅へ歸つたにした所で復籍する迄には多少往來もしてゐたんだから仕方がないさ。全く緣が切れたといふ譯でもないんだからね」

細君は口を噤んだ。それが何故だか健三には淋しかつた。

「己も實は面白くないんだよ」

「ぢや御止しになれば好いのに。つまらないわ、今になつてあんな人と交際ふのは。一體貴夫、何ういふ氣なんでせう、先方は」

「それが己には些とも解らない。向ふでも嘸詰らないだらうと思ふんだがね」

「御兄さんは何でもまた金にしようと思つて遣つて來たに違ないから、用心しなくつちや不可いつて云つて居らつしやいましたよ」

「然し金は始めから斷つちまつたんだから、構はないさ」

「だつて是から先何を云ひ出さないとも限らないわ」

細君の胸には最初から斯うした豫感が働いてゐた。其處を既に防ぎ止めたとばかり信じてゐた理に强い健三の頭に、微かな不安が又新しく萌した。

二十

其不安は多少彼の仕事の上に即いて廻つた。けれども彼の仕事はまた其不安の影を何處かへ埋めてしまふ程忙しかつた。さうして島田が再び健三の玄關へ現れる前に、月は早くも末になつた。

細君は鉛筆で汚ならしく書き込んだ會計簿を持つて彼の前に出た。

自分の外で働いて取る金額の全部を擧げて細君の手に委ねるのを例にしてゐた健三は、それが意外であつた。彼に未だ曾て月末に細君の手から支出の明細書を突き付けられた例がなかつた。

「まあ何うにかしてゐるんだらう」

彼は常に斯う考へた。それで自分に金の要る時は遠慮なく細君に請求した。月々買ふ書物の代價丈でも随分の多額に上る事があつた。それでも細君は澄ましてゐた。經濟に暗い彼は時として細君の放漫を疑つた。

「月々の勘定はちやんとして己に見せなければ不可いぜ」

細君は厭な顏をした。彼女自身から云へば自分程忠實な經濟家は何處にも居ない氣なのである。

「えゝ」

彼女の返事は是限であつた。さうして月末が來ても會計簿はつひに健三の手に渡らなかつた。健三も機嫌の好い時はそれを默認した。けれども惡い時は意地になつてわざと見せろと逼る事があつた。其癖見せられるとごちや〳〵して中々解らなかつた。たとひ帳面づらは細君の説明を聽いて解るにしても、實際月に肴をどれ丈食つたものか、またそれが高過ぎるのか、又は米がどれ程要つたものか、安過ぎるのか、更に見當が付かなかつた。

此場合にも彼は細君の手から帳簿を受取つて、ざつと眼を通した丈であつた。

「何か變つた事でもあるのかい」

「何うかして頂かないと……」

細君は目下の暮し向に就いて詳しい説明を夫にして聞かせた。

「不思議だね。それで能く今日迄遣つて來られたものだね」

「實は毎月餘らないんです」

餘らうとは健三にも思へなかつた。先月末に

若い女と二人で何處かへ遠足に行くとかいふので、彼にも勸誘の端書をよこした時、彼は二圓の會費がない丈の理由で、同行を斷つた事もあつた。

「然しそれ位の會には行きさうなものだがな」

「行つても行かなくつても、是丈の收入で遣つて行くより仕方がないんですけれども」

細君は云ひ悪さうに、箪笥の抽斗に仕舞つて置いた自分の着物と帶を質に入れた顛末を話した。

彼は昔自分の姉や兄が彼等の晴着を風呂敷へ包んで、こつそり外へ持つて出たり又持つて入つたりしたのをよく目撃した。他に知れないやうに氣を配りがちな彼等の態度は、恰も罪を犯した日影者のやうに見えて、彼の子供心に淋しい印象を刻み付けた。斯うした聯想が今の彼を殊更に侘びしく思はせた

「質を置いたつて、御前が自分で置きに行つたのかい」

彼自身いまだ質屋の暖簾を潜つた事のない彼は、自分より貧苦の經驗に乏しい彼女が、平氣でそんな所へ出入する筈がないと考へた。

「いゝえ賴んだんです」

「誰に」

「山野のうちの御婆さんにです。あすこには通ひつけの質屋があつて便利ですから」

健三は其先を訊かなかつた。夫が碌な着物一枚さへ拵へてやらないのに、細君が自分の宅から持つてきたものを質に入れて、家計の足にしなければならないといふのは、夫の恥に相違なかつた。

二十一

健三はもう少し働かうと決心した。その決心から來る努力が、月々幾枚かの紙幣に變形して、細君の手に渡るやうになつたのは、それから間もない事であつた。

彼は自分の新たに受取つたものを洋服の内隱袋から出して封筒の儘疊の上へ放り出した。默つてそれを取り上げた細君は裏を見て、すぐ其紙幣の出所を知つた。家計の不足は斯の如くにして無言のうちに補はれたのである。

其時細君は別に嬉しい顔もしなかつた。然し若し夫が優しい言葉に添へて、それを渡して呉れたなら、屹度嬉しい顔をする事が出來たらうにと思つた。健三は又若し細君が嬉しさうにそれを受取つてくれたら優しい言葉も掛けられたらうにと考へた。それで物質的の要求に應ずべく工面された此金は、二人の間に存在する精神上の要求を充たす方便としては寧ろ失敗に歸してしまつた。

細君は其折の物足らなさを回復するために、二三日經つてから、健三に一反の反物を見せた。

「あなたの着物を拵へようと思ふんですが、是は何うでせう」

細君の顔は晴々しく輝いてゐた。然し健三の眼にはそれが下手な技巧を交へてゐるやうに映つた。彼は其不純を疑つた。さうしてわざと彼女の愛嬌に誘はれまいとした。細君は寒さうに座を立つた。細君の座を立つた後で、彼は何故自分の細君を寒がらせなければならない心理狀態に自分が制せられたのかと考へて益不愉快になつた。

細君と口を利く次の機會が來た時、彼は斯う云つた。

「己は決して御前の考へてゐるやうな冷刻な人間ぢやない。たゞ自分の有つてゐる溫かい情愛を堰き止めて、外へ出られないやうに仕向けるから、仕方なしに左右するのだ」

「誰もそんな意地の惡い事をする人は居ないぢやありませんか」

「御前は始終してゐるぢやないか」

細君は恨めしさうに健三を見た。健三の論理は丸で細君に通じなかつた。

「貴夫の神經は近頃餘つ程變ね。何うしてもつと穩當に私を觀察して下さらないのでせう」

健三の心には細君の言葉に耳を傾ける餘裕がなかつた。彼は自分に不自然な冷かさに對して腹立たしい程の苦痛を感じてゐた。

「あなたは誰も何もしないのに、自分一人で苦しんでゐらつしやるんだから仕方がない」

二人は互に徹底する迄話し合ふ事のつひに出來ない男女のやうな氣がした。從つて二人とも現在の自分を改める必要を感じ得なかつた。

健三の新たに求めた餘分の仕事は、彼の學問なり教育なりに取つて、さして困難のものではなかつた。たゞ彼はそれに費やす時間と努力とを厭つた。無意味に暇を潰すといふ事が目下の彼には何よりも恐ろしく見えた。彼は生きてゐるうちに、何か爲遂せる、又仕遂せなければならないと考へる男であつた。

彼が其餘分の仕事を片付けて家に歸るときは何時でも夕暮になつた。

或日彼は疲れた足を急がせて、自分の家の玄關の格子を手荒く開けた。すると奥から出て來た細君が彼の顔を見るなり「あなた彼の人が又來ましたよ」と云つた。細君は島田の事を始終あの人あの人と呼んでゐたので、健三も彼女の樣子と言葉から、留守のうちに誰が來たのか略見當が付いた。彼は無言の儘茶の間へ上つて、細君に扶けられながら洋服を和服に改めた。

二十二

彼が火鉢の傍に坐つて、烟草を一本吹かしてゐると、間もなく夕飯の膳が彼の前に並べられた。彼はすぐ細君に質問を掛けた。

「上つたのかい」

細君には何が上つたのか解らない位此質問は突然であつた。一寸驚いて健三の顔を見た彼女は、返事を待ち受けてゐる夫の樣子から始めて其意味を悟つた。

「あの人ですか。――でも御留守でしたから」

細君には座敷へ島田を上げなかつたのが、恰も夫の氣に障る事でもしたやうな調子で、言譯がましい答をした。

「上げなかつたのかい」

「えゝ。たゞ玄關で一寸」

「何とか云つてゐたかい」

「とうに伺ふ筈だつたけれども、少し旅行してゐたものだから御無沙汰をして濟みませんつて」

濟みませんといふ言葉が一種の嘲弄のやうに健三の耳に響いた。

「旅行なんぞするのかな。田舎に用のある身體とも思へないが。御前にその行つた先を話したかい」

「そりや何とも云ひませんでした。たゞ娘の所で來て呉れつて賴まれたから行つて來たつて云ひました。大方あのお縫さんて人の宅なんでせう」

お縫さんの嫁いた柴野といふ男には健三も昔會つた記憶があつた。柴野の今の任地先も此間吉田から聞いて知つてゐた。それは師團か旅團のある中國邊の或都會であつた。

「軍人なんですか、其お縫さんて人の御嫁に行つた所は」

健三が急に話を途切らしたので、細君はしばらく間を置いたあとで斯んな問を掛けた。

「能く知つてるね」

「何時か御兄さんから伺ひましたよ」

健三は心のうちで昔見た柴野とお縫さんの姿を並べて考へた。柴野は肩の張つた色の黒い人であつたが、眉鼻立からいふと寧ろ立派な部類に屬すべき男に違なかつた。お縫さんは又

すらりとした恰好の好い女で、顔は面長の色白といふ出來であつた。ことに美しいのは睫毛の多い切長の眼のやうに思はれた。彼等の結婚したのは柴野がまだ少尉か中尉の頃であつた。健三は一度その新宅の門を潜つた記憶を有つてゐた。其時柴野は隊から歸つて來た身體を大きくして、長火鉢の猫板の上にある洋盃から冷酒をぐい〳〵飲んだ。お縫さんは白い肌をあらはに、鏡臺の前で髪を撫でつけてゐた。彼はまた自分の分として取り配けられた握り鮨を頻りに皿の中から撮んで食べた。……

「お縫さんて人はよつぽど容色が好いんですか」

「何故」

「だつて貴夫の御嫁にするつて話があつたんださうぢやありませんか」

成程そんな話もない事はなかつた。健三がまだ十五六の時分、ある友達を往來へ待たせて置いて、自分一人一寸島田の家へ寄らうとした時、偶然門前の泥溝に掛けた小橋の上に立つて往來を眺めてゐたお縫さんは、一寸微笑しながら出合頭の健三に會釋した。それを目撃した彼の友達は獨逸語を習ひ始めの子供であつたので、「フラウ門に倚つて待つ」と云つて彼をひやかした。然しお縫さんは年歯からいふと彼より一つ上であつた。其上その頃の健三は、女に對する美醜の鑑別もなければ好惡も有たなかつた。夫から羞恥に似たやうな一種妙な情緒があつて、女に近寄りたがる彼を、自然の力で、護謨球のやうに、却つて女から彈き飛ばした。彼とお縫さんとの結婚は、他に面倒のあるなしを差措いて、到底物にならないものとして放棄されてしまつた。

二十三

「貴夫何うして其お縫さんて人をお貰ひにならなかつたの」

健三は膳の上から急に眼を上げた。追憶の夢を愕かされた人のやうに。

「丸で問題にやならない。そんな料簡は島田にあつた丈なんだから。それに己はまだ子供だつたしね」

「あの人の本當の子ぢやないんでせう」

「無論さ。お縫さんはお藤さんの連れつ子だもの」

お藤さんと云ふのは島田の後妻の名であつた。

「だけど、もしそのお縫さんて人と一所になつておいでだつたら、何うでせう。今頃は」

「何うなつてるか解らないぢやないか、なつて見なければ」

「でも事によると、幸福かも知れませんわね」

「左右かも知れない」

健三は少し忌々しくなつた。細君はそれぎり口を噤んだ。

「何故そんな事を訊くのだい。詰らない」

細君は窘められるやうな氣がした。彼女にはそれを乘り越す丈の勇氣が出なかつた。

「どうせ私は始めから御氣に入らないんだから……」

健三は箸を放り出して、手を頭の中に突込んだ。さうして其處に溜つてゐる雲脂をごし〳〵落し始めた。

二人はそれなり別々の室で別々の仕事をした。健三は御機嫌ようと挨拶に來た子供の去つた後で、例の如く書物を讀んだ。細君は其子供を寢かした後で、晝の殘りの縫物を始めた。お縫さんの話がまた二人の間の問題になつたのは、中一日置いた後の事で、それも偶然の切つ懸けからであつた。

其時細君は一枚の端書を持つて、健三の部屋

へ這入つて來た。それを夫の手に渡した彼女は、何時ものやうに其儘立ち去らうともせずに、彼の傍に腰を卸した。健三が受取つた端書を手に持つたなり何時迄も讀みさうにしないので、我慢しきれなくなつた細君はつひに夫を促した。

「あなた其端書は比田さんから來たんですよ」

健三は漸く書物から眼を放した。

「あの人の事で何か用事が出來たんですつて」

成程端書には島田の事で會ひたいから一寸來てくれと書いた上に、日と時刻が明記してあつた。わざ〳〵彼を呼び寄せる失禮も丁寧に詫びてあつた。

「何うしたんでせう」

「丸で判明らないね。相談でもなからうし。此方から相談を持ち懸けた事なんか丸でないんだから」

「みんなで交際つちや不可いつて忠告でもなさるんぢやなくつて。御兄さんも入らつしやると書いてあるでせう、其處に」

端書には細君の云つた通りの事がちやんと書いてあつた。

兄の名前を見た時、健三の頭に不圖又お縫さんの影が差した。島田が彼と此女を一所にして、後まで兩家の關係をつながうとした如く、此女の生母はまた彼の兄と自分の娘とを夫婦にしたいやうな希望を有つてゐたらしかつたのである。

「健ちやんの宅と斯んな間柄にならないとね、あたしも始終健ちやんの家へ行かれるんだけれども」

お藤さんが健三に斯んな事を云つたのも、顧れば古い昔であつた。

「だつてお縫さんが今嫁いてる先は元からの許嫁なんでせう」

「許嫁でも場合によつたら斷る氣だつたんだらうよ」

「一體お縫さんは何方へ行きたかつたんでせう」

「そんな事が判然るもんか」

「ぢや御兄さんの方は何うなの」

「それも判明らんさ」

健三の子供の時分の記憶の中には、細君の問に應ぜられるやうな人情がゝつた材料が一つもなかつた。

二十四

健三はやがて返事の端書を書いて承知の旨を答へた。さうして指定の日が來た時、約束通り又津の守坂へ出掛けた。

彼は時間に對して頗る正確な男であつた。一面に於いて愚直に近い彼の性格は、一面に於いて却つて彼を神經的にした。彼は途中で二度ほど時計を出して見た。實際今の彼は起きると寢る迄、始終時間に追ひ懸けられてゐるやうなものであつた。

彼は途々自分の仕事に就いて考へた。其仕事は決して自分の思ひ通りに進行してゐなかつた。一歩目的へ近付くと、目的は又一歩彼から遠ざかつて行つた。

彼は又彼の細君の事を考へた。其當時強烈であつた彼女の歇私的里は、自然と輕くなつた今でも、彼の胸に猶暗い不安の影を投げて已まなかつた。彼はまた其細君の里の事を考へた。經濟上の壓迫が家庭を襲はうとしてゐるらしい氣配が、細君に乘つた時の鈍い動搖を彼の精神に與へる種となつた。

彼はまた自分の姉と兄と、それから島田の事も一所に纏めて考へなければならなかつた。凡てが頽廢の影であり凋落の色であるうちに、血と肉と歷史とで結び付けられた自分をも併せて考へなければならなかつた。

姉の家へ來た時、彼の心は沈んでゐた。それと反對に彼の氣は興奮してゐた。
「いや何うもわざ／＼御呼び立て申して」と比田が挨拶した。是は昔の健三に對する彼の態度ではなかつた。然し變つて行く世相のうちに、己がひとり姉の夫たる此人にだけ優者になり得たといふ誇りは、健三にとつて滿足であるよりも、寧ろ苦痛であつた。
「一寸上がらうにも、何うにも斯うにも忙しくつて遣り切れないもんですから。現に昨夜なども宿直でしてね。今夜も實は頼まれたんですけれども、貴方と御約束があるから、斷つてやつとの事で今歸つて來た所で」
比田のいふ所を默つて聽いてゐると彼が妙な女を其勤先の近所に圍つてゐるといふ噂はまるで嘘のやうであつた。
古風な言葉で形容すれば、たゞ算盤に達者だといふ事の外に、大した學問も才幹もない彼が、今時の會社で、さう重寶がられる筈がないのに——健三の心には斯んな疑問さへ湧いた。
「姉さんは」
「それにお夏が又例の喘息でね」
姉は比田のいふ通り針箱の上に載せた括り枕に倚りかゝつて、ぜい／＼云つてゐた。茶の間を覗きに立つた健三の眼に、其亂れた髮の毛がむごたらしく映つた。
「何うです」
彼女は頭を眞直に上げる事さへ叶はないで、小さな顏を横にした儘健三を見た。挨拶をしようと思ふ努力が、すぐ咽喉に障つたと見えて、今迄多少落ち付いてゐた咳嗽の發作が一度に來た。其咳嗽は一つがまだ濟まないうちに、後から／＼仕切りなしに出て來るので、傍で見てゐても氣が退けた。
「苦しさうだな」
彼は獨り言のやうに斯う呟いて、眉を顰めた。
見馴れない四十恰好の女が、姉の後から背中を撫つてゐる傍に、一本の杉箸を添へた水飴の入物が盆の上に載せてあつた。女は健三に會釋した。
「何うも一昨日からね、あなた」
姉は斯うして三日も四日も不眠絶食の姿で衰へて行つたあと、又活作用の彈力で、ぢりぢり元へ戻るのを、年來の習慣としてゐた。それを知らない健三ではなかつたが、目前此猛烈な咳嗽と消え入るやうな呼息遣とを見てゐると、病氣に罹つた當人よりも自分の方が却つて不安で堪らなくなつた。
「口を利かうとすると咳嗽を誘ひ出すのでせう。靜かにしてゐらつしやい。私は彼方へ行くから」
發作の一仕切收まつた時、健三は斯う云つて、またもとの座敷へ歸つた。

二十五

比田は平氣な顏をして本を讀んでゐた。「いえなに又例の持病ですから」と云つて、健三の慰問には丸で取り合はなかつた。同じ事を年に何度となく繰返して行くうちに、自然と末枯れて來る氣の毒な女房の姿は、此男にとつて毫も感傷の種にならないやうに見えた。實際彼は三十年近くも同棲して來た彼の妻に、たゞの一つも優しい言葉を掛けた例のない男であつた。
健三の這入つて來るのを見た彼は、すぐ讀みかけの本を伏せて、鐵縁の眼鏡を外した。
「今一寸貴方が茶の間へ行つてゐらしつた間に、下らないものを讀み出したんです」
比田と讀書——是は又極めて似つかはしくない取合せであつた。
「何ですか、それは」
「なに健ちやんなんぞの讀むもんぢやありませ

ん、古いもんで――」
比田は笑ひながら、机の上に伏せた本を取つて健三に渡した。それが意外にも常山紀談だつたので健三は少し驚いた。それにしても自分の細君が今にも絶息しさうな勢ひで咳き込んでゐるのを、丸で餘所事のやうに聽いて、こんなものを平氣で讀んでゐられる所が、如何にも能く此男の性質をあらはしてゐた。
「私や舊弊だから斯ういふ古い講談物が好きでしてね」
彼は常山紀談を普通の講談物と思つてゐるらしかつた。然しそれを書いた湯淺常山を講釋師と間違へる程でもなかつた。
「矢つ張り學者なんでせうね、其男は。曲亭馬琴と何方でせう。私や馬琴の八犬傳も持つてゐるんだが――」
成程彼は桐の本箱の中に、日本紙へ活版で刷つた豫約の八犬傳を綺麗に重ね込んでゐた。
「健ちやんは江戸名所圖繪を御持ちですか」
「いゝえ」
「ありや面白い本ですね。私や大好きだ。なんなら貸して上げませうか。なにしろ江戸と云つた昔の日本橋や櫻田がすつかり分るんだからね」
彼は床の間の上にある別の本箱の中から、美濃紙版の淺黄の表紙をした古い本を一二冊取り出した。さうして恰も健三を江戸名所圖繪の名さへ聞いた事のない男のやうに取扱つた。其健三には子供の時分その本を藏から引き摺り出して來て、頁から頁へと丹念に挿繪を拾つて見て行くのが、何よりの樂みであつた時代の、懷かしい記憶があつた。中にも駿河町といふ所に描いてある越後屋の暖簾と富士山とが、彼の記憶を今代表する燒點となつた。
「此分では迚もその頃の悠長な心持で、自分の研究と直接關係のない本などを讀んでゐる暇は、樂にしたくつても出て來まい」
健三は心のうちで斯う考へた。たゞ焦燥りに焦燥つてばかりゐる今の自分が、恨めしくもあり又氣の毒でもあつた。
兄が約束の時間迄に顏を出さないので、比田は其間を繋ぐためか、しきりに書物の話をつゞけようとした。書物の事なら何時迄話してゐても、健三にとつて迷惑にならないといふ自信でも持つてゐるやうに見えた。不幸にして彼の知識は、常山紀談を普通の講談ものとして考へる程度であつた。それでも彼は昔出た風俗畫報を一冊殘らず綴ぢて持つてゐた。
本の話が盡きた時、彼は仕方なしに問題を變へた。
「もう來さうなもんですね、長さんも。あれ程云つてあるんだから忘れる筈はないんだが。それに今日は明けの日だから、遲くとも十一時頃迄には歸らなきやならないんだから。何なら一寸迎に遣りませうか」
此時又變化が來たと見えて、火の着くやうに咳き入る姉の聲が茶の間の方で聞こえた。

二十六

やがて門口の格子を開けて、沓脱へ下駄を脱ぐ音がした。
「やつと來たやうですぜ」と比田が云つた。
然し玄關を通り拔けた其足音はすぐ茶の間へ這入つた。
「また惡いの。驚いた。些とも知らなかつた。何時から」
短い言葉が感投詞のやうに又質問のやうに、座敷に坐つてゐる二人の耳に着いた。その聲は比田の推察通りやつぱり健三の兄であつた。
「長さん、先刻から待つてるんだ」
性急な比田はすぐ座敷から聲を掛けた。女房の喘息などは何うなつても構はないといつた風

の其調子が、如何にも此男の特性をよく現はしてゐた。「本當に手前勝手な人だ」とみんなから云はれる丈あつて、彼は此場合にも、自分の都合より外に何も考へてゐないやうに見えた。

「今行きますよ」

長太郎も少し癪だと見えて、中々茶の間から出て來なかつた。

「重湯でも少し飲んだら好いでせう。厭？　でもさう何も食べなくつちや身體が疲れる丈だから」

姉が息苦しくつて、受答へが出來かねるので、背中を撫つてゐた女が一口ごとに適宜な挨拶をした。平生健三よりは親しく其宅へ出入する兄は、見馴れない此女とも近付と見えた。其所爲か彼等の應對は容易に盡きなかつた。

比田はぷりつと膨れてゐた。朝起きて顏を洗ふ時のやうに、兩手で黑い顏をごし／＼擦つた。仕舞ひに健三の方を向いて、小さな聲で斯んな事を云つた。

「健ちやんあれだから困るんですよ。口ばかり多くつてね。此方も手がないから仕方なしに賴むんだが」

比田の非難は明かに健三の見知らない女の上に投げ掛けられた。

「何ですあの人は」

「そら梳手のお勢ですよ。昔健ちやんの遊びに來る時分、よく居たぢやありませんか、宅に」

「へえ」

健三には比田の家でそんな女に會つた覺えが全くなかつた。

「知りませんね」

「なに知らない事があるもんですか、お勢だもの。彼奴はね、御承知の通りまことに親切で實意のある好い女なんだが、あれだから困るんです。喋舌るのが病なんだから」

よく事情を知らない健三には、比田のいふ事が、たゞ自分丈に都合のいゝ誇張のやうに聞こえるばかりで、大した感銘も與へなかつた。

姉はまた咳き出した。その發作が一段落片付く迄は、さすがの比田も默つてゐた。長太郎も茶の間を出て來なかつた。

「何だか先刻より劇しい樣ですね」

少し不安になつた健三は、さう云ひながら席を立たうとした。比田は一も二もなく留めた。

「なあに大丈夫、大丈夫。あれが持病なんですから大丈夫。知らない人が見ると一寸吃驚しますがね。私なんざあもう年來馴れつ子になつてるから平氣なもんですよ。實際又あれを一々苦にしてゐるやうぢや、とても今日迄一所に住んでる事は出來ませんからね」

健三は何とも答へる譯に行かなかつた。たゞ腹の中で、自分の細君が歇私的里の發作に冒された時の苦しい心持を、自然の對照として描き出した。

姉の咳嗽が一收まり收まつた時、長太郎は始めて座敷へ顏を出した。

「何うも濟みません。もつと早く來る筈だつたが、生憎珍らしく客があつたもんだから」

「來たか長さん待つてたほい。冗談ぢやないよ。使でも出さうかと思つてた所です」

比田は健三の兄に向つてこの位な氣安い口調で話の出來る地位にあつた。

二十七

三人はすぐ用談に取り掛つた。比田が最初に口を開いた。

彼は一寸した相談事にも仔細ぶる男であつた。さうして仔細ぶれば仔細ぶる程、自分の存在が周圍から強く認められると考へてゐるらしかつた。「比田さん比田さんつて、立てゝ置きさへすりや好いんだ」と皆が蔭で笑つてゐた。

「一時に長さん何うしたもんだらう」

「さう」
「何うもこりや天から筋が違ふんだから、健ちやんに話をする迄もなからうと思ふんだがね、私や」
「左右さ、今更そんな事を持ち出して來たつて、此方で取り合ふ必要もないだらうぢやないか」
「だから私も突つ跳ねたのさ。今時分そんな事を持ち出すのは、丸で自分の殺した子供を、もう一返生かして呉れつて、御寺樣へ賴みに行くやうなものだからお止しなさいつて。だけど大將いくら何と云つても、坐り込んで動かないんだからね、仕方がない。然しあの男があゝやつて今頃私の宅へのんこのしやあで遣つて來るのも、實はといふと、矢つ張り昔〇の關係があつたからの事さ。だつてそりや昔も昔、ずつと昔の話でさあ。其上たゞで借りやしまいしね……」
「またたゞで貸す風でもなしね」
「さうさ。口ぢや親類付合だとか何とか云つてる癖に、金にかけちやあかの他人より阿漕なんだから」
「來た時にさう云つて遣れば好いのに」
　比田と兄との談話は中々元へ戾つて來なかつた。ことに比田は其處に健三のゐるのさへ忘れてしまつたやうに見えた。健三は好加減に何とか口を出さなければならなくなつた。
「一體何うしたんです。島田が此方へでも突然伺つたんですか」
「いやわざ／＼御呼び立て申して置いて、つい自分の勝手ばかり喋舌つて濟みません。――ぢや長さん私から健ちやんに一應其顚末を御話する事にしようか」
「えゝ何うぞ」
　話は意外にも單純であつた。――ある日島田が突然比田の所へ來た。自分も年を取つて賴りにするものがゐないので心細いといふ理由の下に、昔通り島田姓に復歸して貰ひたいから何うぞ健三にさう取次いでくれと賴んだ。比田も其要求の突飛なのに驚いて最初は拒絕した。然し何と云つても動かないので、兎も角も彼の希望丈は健三に通じようと受合つた。――たゞ是だけなのである。
「少し變ですねえ」
　健三には何う考へても變としか思はれなかつた。
「變だよ」
　兄も同じ意見を言葉にあらはした。
「何うせ變にや違ない、何しろ六十以上になつて、少しやきが廻つてるからね」
「慾でやきが廻りやしないか」
　比田も兄も可笑しさうに笑つたが、健三は獨り其仲間へ入る事が出來なかつた。彼は何時迄も變だと思ふ氣分に制せられてゐた。彼の頭から判斷すると、そんな事は到底ありよう筈がなかつた。彼は最初に吉田が來た時の談話を思ひ出した。次に吉田と島田が一所に來た時の光景を思ひ出した。最後に彼の留守に旅先から歸つたと云つて、島田が一人で訊ねて來た時の言葉を思ひ出した。然し何處を何う思ひ出しても、其處から斯んな結果が生れて來ようとは考へられなかつた。
「何うしても變ですね」
　彼は自分の爲に同じ言葉をもう一度繰返して見た。それから漸と氣を換へて斯う云つた。
「然しそりや問題にやならないでせう。たゞ斷りさへすりや好いんだから」

二十八

　健三の眼から見ると、島田の要求は不思議な位理に合はなかつた。從つてこれを片付けるのも容易であつた。たゞ簡單に斷りさへすれば濟んだ。

「然し一旦は貴方の御耳迄入れて置かないと、私の落度になりますからね」と北田は自分を弁護するやうに云つた。彼は何處迄も此曖昧を眞面目なものにしなければ氣が濟まないらしかつた。それで言ふ事も時によつて變化した。

「それに相手が相手ですからね。まかり間違へば何をするか分らないんだから、用心しなくつちやいけませんよ」

「焼が廻つてるなら構はないぢやないか」と兄が冗談半分に彼の矛盾を指摘すると、北田は猶眞面目になつた。

「焼が廻つてるから怖いんです。なに先が當り前の人間なら、私だつて其場ですぐ斷つちまひますさあ」

斯んな曲折に富んだ會談中に時々起つたが、要するに話は最初に戻つて、つまり北田が代表者として島田の要求を斷るといふ事になつた。それは三人が三人ながら始めから豫期してゐた結局なので、其處へ行き着く迄の筋道は、健三から見ると、寧ろ時間の空費に過ぎなかつた。然し彼はそれに對して北田に禮を述べる義理があつた。

「いえ何御禮なんぞ仰有られると恐縮します」といつた北田の方は却つて得意であつた。

誰が見ても宅へも寄らずに忙しがつてゐる人の様子とは受取れない程、調子づいて來た。

彼は其處にある煎餅を取つて矢鱈にぼりぼり嚙んだ。さうしてその相間々々には大きな湯呑へ茶を何杯も注ぎ替へて飲んだ。

「相變らず能く食べますね　今でも鰻飯を二つ位遣るんでせう」

「いや人間も五十になるともう駄目ですね。もとは健ちやんの見てゐる前で天ぷら蕎麦を五杯位ぺろりと片付けたもんでしたがね」

北田は其頃から食氣の強い男であつた。さうして食ふのを自慢にしてゐた。それから腹の太いのを賞められたがつて、時機さへあれば始終叩いて見せた。

健三は昔此人に連れられて寄席などに行つた歸りに、能く二人して屋臺店の暖簾を潛つて、鮨や天麩羅の立食をした當時を思ひ出した。彼は健三に其寄席で聽いたしい、い、かをどりとかいふ三味線の手を教へたり、又はさばを讀むといふ隱語などを習ひ覺えさせたりした。

「どうも矢ッ張り立食に限るやうですね。私も此年になる迄、段々方々食つて歩いて見たが、健ちやん、一遍輕井澤で蕎麦を食つて御覽なさい、騙されたと思つて。汽車の停つてるうちに、降りて食ふんです、プラットホームの上へ立つてね。流石に本場丈あつて旨うがすぜ」

彼は信心を名として能く方々遊び歩く男であつた。

「それよか、善光寺の境内に元祖[illegible]所といふ看板が懸つてゐたには驚いたね、上さん」

「道八つて一つ遣つて來やしないか。だつて東海道が要るんだからね、信」

斯んな談話を聞いてゐると、健三は何時か昔の我に歸つたやうな氣持になつた。同時に今の自分が、何んな意味で彼等から離れて何處に立つてゐるかも明かに意識しなければならなくなつた。然し北田は一向そこに氣が付かなかつた。

「健ちやんはたしか京都へ行つた事がありましたね。彼處に、いい、いい、ちんちらでんき風持つて汁粉ましよつて鳴く鳥がゐるのを御存じですか」などと訊いた。

先刻から落付いてゐた姉が、又騒しく咳き出した時、彼は漸く口を閉ぢた。さうして左もくさくさしたと云はぬ許りに、左右の手の平を揃へて、黑い顔をごしごし擦つた。

兄と健三は一寸茶の間の様子を覗きに立つた。二人共發作の治まる迄姉の枕元に坐つてゐる

た後で、別々に北田の家を出た。

二十九

健三は自分の背後にこんな世界の控へてゐる事を遂に忘れることが出來なくなつた。此世界は平生の彼にとつて遠い過去のものであつた。然しいざといふ場合には、突然現在に變化しなければならない性質を帯びてゐた。

彼の頭には眠たい坊主に似た北田の毬栗頭が浮いたり沈んだりした。猫のやうに顋の詰つた姉の息苦しく喘いでゐる姿が薄暗く見えた。血の氣の竭きかけた兄に特有なひすばつた長い顔も出たり引込んだりした。

昔この世界に人となつた彼は、その後自然の力でこの世界から獨り駈け出してしまつた。さうして駈け出したまゝ永く東京の地を踏まなかつた。彼は今再びその中へ後戻りをして、久し振に過去の臭を嗅いだ。それは彼に取つて、三分の一の懐かしさと、三分の二の厭らしさとを齎す混合物であつた。

彼は又其世界とは丸で關係のない方角を眺めた。すると其處には時々彼の前を横切る若い血と輝いた眼を有つた青年がゐた。彼は其人々の笑ひに耳を傾けた。未來の希望を打ち出す鐘のやうに朗かなその響が、健三の暗い心を躍らした。

或日彼は其青年の一人に誘はれて、池の端を散歩した歸りに、廣小路から切通しへ抜ける道を曲つた。彼等が新しく建てられた見番の前へ來た時、健三は不圖思ひ出したやうに青年の顔を見た。

彼の頭の中には自分と丸で縁故のない或女の事が閃いた。其女は昔し藝者をしてゐた頃人を殺した罪で、二十年餘りも牢屋の中で暗い月日を送つた後、漸と世の中へ顔を出す事が出來るやうになつたのである。

「嘸辛いだらう」

容色を生命とする女の身になつたら、殆ど堪へられない淋しみが其處にあるに違ないと健三は考へた。然しいくらでも春が永く自分の前に續いてゐるとしか思はない伴の青年には、彼の言葉が何程の效果にもならなかつた。此青年はまだ二十三四であつた。彼は始めて自分と青年との距離を悟つて驚いた。

「さういふ自分も矢つ張り此藝者と同じ事なのだ」

彼は腹の中で自分と自分に斯う云ひ渡した。若い時から白髪の生えたがる性質の彼の頭には、氣の所爲か近頃めつきり白い筋が増して來た。自分はまだ〳〵と思つてゐるうちに、十年は何時の間にか過ぎた。

「然し他事ぢやないね。其實僕も青春時代を全く牢獄の裡で暮したのだから」

青年は驚いた顔をした。

「牢獄とは何です」

「學校さ、それから圖書館さ。考へると兩方ともまあ牢獄のやうなものだね」

青年は答へなかつた。

「然し僕が若し長い間の牢獄生活をつゞけなければ、今日の僕は決して世の中に存在してゐないんだから仕方がない」

健三の調子は半ば辯解的であつた。半ば自嘲的であつた。過去の牢獄生活の上に現在の自分を築き上げた彼は、其現在の自分の上に是非共未來の自分を築き上げなければならなかつた。それが彼の方針であつた。さうして彼から見ると正しい方針に違なかつた。けれども其方針によつて前へ進んで行くのが、此時の彼には徒に老ゆるといふ結果より外に何物をも持ち來さないやうに見えた。

「學問ばかりして死んでしまつても人間は詰らないね」

「そんな事はありません」

彼の意味はつひに青年に通じなかつた。彼は今の自分が、結婚當時の自分と、何んなに變つて、細君の眼に映るだらうかを考へながら歩いた。其細君はまた子供を生むたびに老けて行つた。髪の毛なども氣の引ける程拔ける事があつた。さうして今は既に三番目の子を胎内に宿してゐた。

三十

家へ歸ると細君は奥の六疊に手枕をしたなり寐てゐた。健三は其傍に散らばつてゐる赤い片端だの物指だの針箱だのを見て、又かといふ顏をした。

細君はよく寐る女であつた。朝もことによると健三より遲く起きた。健三を送り出してから又横になる日も少くはなかつた。斯うして飽く迄眠りを貪らないと、頭が痺れたやうになつて、其日一日何事をしても判然しないといふのが、常に彼女の辯解であつた。健三は或は左右かも知れないと思つたり、又はそんな事があるものかと考へたりした。ことに小言を云つたあとで、寐られるときは、後の方の感じが強く起つた。

「不貞寐をするんだ」

彼は自分の小言が、歇私的里性の細君に對して、何う反應するかを、よく觀察してやる代りに、單なる面當のために、斯うした不自然の態度を彼女が彼に示すものと解釋して、苦々しい咳きを口の内で漏らす事がよくあつた。

「何故夜早く寐ないんだ」

彼女は宵つ張であつた。健三に斯う云はれる度に、夜は眼が冴えて寐られないから起きてゐるのだといふ答辯を屹度した。さうして自分の起きてゐたい時迄は必ず起きて縫物の手を已めなかつた。

健三は斯うした細君の態度を惡んだ。同時に彼女の歇私的里を恐れた。それからもしや自分の解釋が間違つてゐはしまいかといふ不安にも制せられた。

彼は其處に立つた儘、しばらく細君の寐顏を見詰めてゐた。肱の上に載せられた其横顏は寧ろ蒼白かつた。彼は默つて立つてゐた。お住といふ名前さへ呼ばなかつた。

彼は不圖眼を轉じて、あらはな白い腕の傍に放り出された一束の書物に氣を付けた。それは普通の手紙の重なり合つたものでもなければ、又新しい印刷物を一纏めに括つたものとも見えなかつた。總體が茶色がかつて既に多少の時代を帶びてゐる上に、古風なかんじん撚で丁寧な結び目がしてあつた。其書ものゝ一端は、殆ど細君の頭の下に敷かれてゐると思はれる位、彼女の黑い髪で、健三の目を遮つてゐた。

彼はわざ〳〵それを引き出して見る氣にもならずに、又眼を蒼白い細君の額の上に注いだ。彼女の頰は滑り落ちるやうにこけてゐた。

「まあ御痩せなすつた事」

久し振に彼女を訪問した親類のある女は、近頃の彼女の顏を見て驚いたやうに、斯んな評を加へた事があつた。其時健三は何故だか此細君を痩せさせた凡ての原因が自分一人にあるやうな心持がした。

彼は書齋に入つた。

三十分も經つたと思ふ頃、門口を開ける音がして、二人の子供が外から歸つて來た。坐つてゐる健三の耳には、彼等と子守との問答が手に取るやうに聞こえた。子供はやがて驅け込むやうに奥へ入つた。其處では又細君が蒼蠅いといつて、彼等を叱る聲がした。

夫からしばらくして細君は先刻自分の枕元にあつた一束の書き物を手に持つた儘、健三の前にあらはれた。

「先程御留守に御兄いさんが入らつしやいましてね」
健三は萬年筆の手を止めて、細君の顏を見た。
「もう歸つたのかい」
「えゝ。今一寸散歩に出掛けましたから、もうぢき歸りませうつて御止めしたんですけれども、時間がないからつて御上りになりませんでした」
「さうか」
「何でも谷中に御友達とかの御葬式があるんですつて。それで急いで行かないと間に合はないから、上つてゐられないんだと仰しやいました。然し歸りに暇があつたら、もしかすると寄るかも知れないから、歸つたら待つてるやうに云つて呉れつて、云ひ置いて行らつしやいました」
「何の用なのかね」
「矢つ張りあの人の事なんださうです」
兄は島田の事で來たのであつた。

三十一

細君は手に持つた書付の束を健三の前に出した。
「是を貴夫に上げて呉れと仰しやいました」
健三は怪訝な顏をしてそれを受取つた。
「何だい」
「みんなあの人に關係した書類なんださうです。健三に見せたら參考になるだらうと思つて、用簞笥の抽匣の中に仕舞つて置いたのを、今日出して持つて來たつて仰しやいました」
「そんな書類があつたのかしら」
彼は細君から受取つた一括りの書付を手に載せた儘、ぼんやり時代の付いた紙の色を眺めた。それから何の意味なしに、裏表を引繰返して見た。書類は厚さにして略二寸もあつたが、風の通らない濕氣た所に長い間放り込んであつた所爲か、蟲に食はれた一筋の痕が偶然健三の眼を懷古的にした。彼は其不規則な筋を指の先でざら〳〵撫でゝ見た。けれども今更丁寧に絡げたかんじん撚の結び目を解いて、一々中を檢める氣も起らなかつた。
「開けて見たつて何が出て來るものか」
彼の心は此一句でよく代表されてゐた。
「御父さまが後々の爲にちやんと一纏にして取つて御置になつたんですつて」
「左右か」
健三は自分の父の分別と理解力に對して大した尊敬を拂つてゐなかつた。
「おやぢの事だから屹度何でもかんでも取つて置いたんだらう」
「然しそれも皆貴夫に對する御親切からなんでせう。あんな奴だから己のゐなくなつた後に、何んな事を云つて來ないとも限らない、其時には是が役に立つつて、わざ〳〵一纏にして、御兄さんに御渡になつたんださうですよ」
「左右かね、己は知らない」
健三の父は中氣で死んだ。その父のまだ達者でゐるずつと前から彼はもう東京にゐなかつた。彼は親の死目にさへ會はなかつた。斯んな書付が自分の眼に觸れないで、長い間兄の手元に保管されてゐたのも、別段の不思議ではなかつた。
彼は漸く書類の結目を解いて一所に重なつてゐるものを、一々ほどし始めた。手續書と書いたものや、取替せ一札の事と書いたものや、明治二十一年子一月約定金請取の證と書いた半紙二つ折の帳面やらが、順々にあらはれて來た。其帳面の仕舞には、右本日受取右月賦金は皆濟相成候事と島田の手蹟で書いて黑い判がべたりと捺してあつた。
「おやぢは月々三圓か四圓づゝ取られたんだ

な。」

「あの人にですか」

細君は其帳面を逆さまに覗き込んでゐた。

「〆て若干になるかしら。然し此外にまだ一時に遣つたものがある筈だ。おやぢの事だから、屹度その受取を取つて置いたに違ない。何處かにあるだらう」

書付は夫から夫へと續々出て來た。けれども、健三の眼には何れも是もごちや／＼して容易に解らなかつた。彼はやがて四つ折にして一纏に重ねた厚みのあるものを取り上げて中を開いた。

「小學校の卒業證書迄入れてある」

其小學校の名は時によつて變つてゐた。一番古いものには第一大學區第五中學區第八番小學などゝいふ朱印が押してあつた。

「何ですかそれは」

「何だか己も忘れてしまつた」

「よつぽど古いものね」

證書のうちには賞狀も二三枚交つてゐた。昇り龍と降り龍で丸い輪廓を取つた眞中に、甲科と書いたり乙科と書いたりしてある下に、いつも筆墨紙と横に斷つてあつた。

「書物も貰つた事があるんだがな」

彼は勸善訓蒙だの輿地誌略だのを抱いて喜びの餘り飛んで宅へ歸つた昔を思ひ出した。御褒美をもらふ前の晩夢に見た蒼い龍と白い虎の事も思ひ出した。是等の遠いものが、平生と違つて今の健三には甚だ近く見えた。

三十二

細君には此古臭い免狀が猶の事珍らしかつた。夫の一旦下へ置いたのを又取り上げて、一枚一枚丁寧に剝繰つて見た。

「變ですわね。下等小學第五級だの六級だのつて。そんなものが在つたんでせうか」

「在つたんだね」

健三は其儘外の書付に手を着けた。讀みにくい彼の父の手蹟が大いに彼を苦しめた。

「之を御覽、迚も讀む勇氣がないね。只でさへ判明らない所へ持つて來て、無暗に朱を入れたり棒を引いたりしてあるんだから」

健三の父と島田との懸合に就いて必要な下書らしいものが細君の手に渡された。細君は女丈あつて、綿密にそれを讀み下した。

「貴夫の御父さまはあの島田つて人の世話をなすつた事があるのね」

「そんな話は己も聞いてはゐるが」

「此處に書いてありますよ。――同人幼少にて勤向相成りかたく當方へ引き取り五箇年間養育致候緣合を以てと」

細君の讀み上げる文章は、丸で幕府時代の町人が町奉行か何かへ出す訴狀のやうに聞えた。其口調に動かされた健三は、自然古風な自分の父を眼の前に髣髴した。其父から、將軍の鷹狩に行く時の模樣などを、それ相當の敬語で聞かされた昔も思ひ合された。然し事實の興味が主として働きかけてゐる細君の方では丸で文體などに頓着しなかつた。

「その緣故で貴夫はあの人の所へ養子に遣られたのね。此處にさう書いてありますよ」

健三は因果な自分を自分で憐んだ。平氣な細君は其續きを讀み出した。

「右健三三歲の砌り養子に差遣はし置候處平吉儀妻常と不和を生じ、遂に離別と相成候につき當時八歲の健三を當方へ引き取り今日迄十四箇年間養育致し、――あとは眞赤でごちや／＼して讀めないわね」

細君は自分の眼の位置と書付の位置とを色々に配合して後を讀まうと企てた。健三は腕組をして默つて待つてゐた。細君はやがてくす／＼笑ひ出した。

「何が可笑しいんだ」

「だつて―」

細君は何も云はずに、書付を夫の方に向け直した。さうして人さし指の頭で、細かく割註のやうに朱で書いた所を抑へた。

「一寸其處を讀んで御覧なさい」

健三は八の字を寄せながら、其一行を六づかしさうに讀み下した。

「一取扱ひ所勤務中遠山藤と申す後家へ通じ合ひ候が事の起り。――何だ下らない」

「然し本當なんでせう」

「本當は本當さ」

「それが貴夫の八つの時なのね。それから貴夫は御自分の宅へ御歸りになつた譯ね」

「然し籍を返さないんだ」

「あの人が？」

細君はまた其書付を取り上げた。讀めない所は其儘にして置いて、讀める所丈眼を通しても、自分のまだ知らない事實が出て來るだらうといふ興味が、少からず彼女の好奇心を唆つた。

書付の仕舞の方には、島田が健三の戸籍を元通りにして置いて實家へ返さないのみならず、いつの間にか戸主に改めた彼の印形を濫用して金を借り散らした例などが舉げてあつた。

愈手を切る時に養育料として島田に渡した金の證文も出て來た。それには、然る上は健三離縁本籍と引換に當金――圓御渡し被下、殘金――圓は毎月三十日限り月賦にて御差入の積相談相成候云々と長たらしく書いてあつた。

「凡て變梃な文句許りだね」

「親類取扱人比田寅八つて下に印が押してあるから、大方比田さんでも書いたんでせう」

健三はつい此間會つた比田の萬事に心得顏な樣子と、此證文の文句とを引き比べて見た。

三十三

葬式の歸りに寄るかも知れないと云つた兄は遂に顏を見せなかつた。

「あんまり遲くなつたから、すぐ御歸りになつたんでせう」

健三には其方が便宜であつた。彼の仕事は前の日か前の晩を潰して調べたり考へたりしなければ義務を果す事の出來ない性質のものであつた。從つて必要な時間を他に食ひ削られるのは、彼に取つて甚だしい苦痛になつた。

彼は兄の置いて行つた書類をまた一纏めにして、元のかんじんよりで括らうとした。彼が指先に力を入れた時、其かんじん撚はぷつりと切れた。

「あんまり古くなつて、腐つたのね」

「まさか」

「だつて書付の方は蟲が食つてる位ですもの、貴夫」

「左右云へばさうかも知れない。何しろ抽斗に投げ込んだなり、今日迄放つて置いたんだから。然し兄貴も能くまあ斯んなものを取つて置いたものだね。困つちや何でも賣る癖に」

細君は健三の顏を見て笑ひ出した。

「誰も買ひ手がないでせう。そんな蟲の食つた紙なんか」

「だがさ。能く紙屑籠の中へ入れてしまはなかつたと云ふ事さ」

細君は赤と白で撚つた細い紐を火鉢の抽斗から出して來て、其處に置かれた書類を新しく絡げた上、それを夫に渡した。

「己の方にや仕舞つて置く所がないよ」

彼の周圍は書物で一杯になつてゐた。手文庫には文殻とノートがぎつしり詰つてゐた。空地のあるのは夜具蒲團の仕舞つてある一間の戸棚丈であつた。細君は苦笑して立ち上つた。

「御兄さんは二三日うち屹度また入らつしやいますよ」

「あの事でかい」
「それも左右ですけれども、今日御葬式に入らつしやる時に、袴が要るから借してくれつて、此處で穿いて入らしつたんですもの。屹度又返しに入らつしやるに極つてゐますわ」
健三は自分の袴を借りなければ葬式の供に立てない兄の境遇を、一寸考へさせられた。始めて學校を卒業した時彼は其兄から貰つたべろべろの薄羽織を着て友達と一所に池の端で寫眞を撮つた事をまだ覺えてゐた。其友達の一人が健三に向つて、此中で一番先に馬車へ乘るものは誰だらうと云つた時に、彼は返事をしないで、たゞ自分の着てゐる羽織を淋しさうに眺めた。其羽織は古い絽の紋付に違ひなかつたが、惡く云へば申し譯の爲めに破けずにゐる位な見すぼらしい程度のものであつた。懇意な友人の新婚披露に招かれて星が岡の茶寮に行つた時も、着るものがないので、袴羽織共凡て兄のを借りて間に合せた事もあつた。
彼は細君の知らない斯んな記憶を頭の中に呼び起した。然しそれは今の彼を得意にするよりも却つて悲しくした。今昔の感――さう云ふ在來の言葉で一番よく現せる情緒が自然と彼の胸に湧いた。
「袴位ありさうなものだがね」
「みんな長い間に失くして御仕舞ひなすつたんでせう」
「困るなあ」
「どうせ宅にあるんだから、要る時に貸して上げさへすりや夫で好いでせう。毎日使ふものぢやなし」
「宅にある間はそれで好いがね」
細君は夫に内證で自分の着物を質に入れたつい此間の事件を思ひ出した。夫には何時自分が兄と同じ境遇に陷らないものでもないといふ悲觀的な哲學があつた。
昔の彼は貧しいながら一人で世の中に立つてゐた。今の彼は切り詰めた餘裕のない生活をしてゐる上に、周圍のものからは、活力の心棒のやうに思はれてゐた。それが彼には辛かつた。自分のやうなものが親類中で一番好くなつてゐると考へられるのは猶更情なかつた。

三十四

健三の兄は小役人であつた。彼は東京の眞中にある或大きな局へ勤めてゐた。其宏壯な建物のなかに永い間憐れな自分の姿を見出す事が、彼には一種の不調和に見えた。
「僕なんぞはもう老朽なんだからね。何しろ若くつて役に立つ人が後から後からと出て來るんだから」
其建物のなかには何百といふ人間が日となく夜となく烈しく働いてゐた。氣力の盡きかけた彼の存在は丸で形のない影のやうなものに違なかつた。
「あゝ厭だ」
活動を好まない彼の頭には常に斯んな觀念が潛んでゐた。彼は病身であつた。年齡より早く老けた。年齡より早く干乾びた。さうして色澤の惡い顏をしながら、死にでも行く人のやうに働いた。
「何しろ夜寢ないんだから、身體に障つてね」
彼はよく風邪を引いて咳嗽をした。ある時は熱も出た。すると其熱が必ず肺病の前兆でなければならないやうに彼を脅した。
實際彼の職業は强壯な青年にとつても苦しい性質のものに違なかつた。彼は隔晩に局へ泊らせられた。さうして夜通し起きて働かなければならなかつた。翌日の朝彼はぼんやりして自分の宅へ歸つて來た。其日一日は何をする氣もなく、只ぐたりと寢て暮らす事さへあつた。
それでも彼は自分のため又家族のために働く

く餘儀なくされた。

「今度は少し危險いやうだから、誰かに賴んで貰れないか」

改革とか整理とかいふ噂のある度に、健三はよく斯んな言葉を彼の口から聞かされた。東京を離れてゐる時などは、わざ〳〵手紙で依賴して來た事も一遍や二遍ではなかつた。彼は其都度誰それにと云つて、わざ〳〵要路の人を指名した。然し健三にはたゞ名前が知れてゐる丈で、自分の兄の位置を保證してもらふ程の親しみのあるものは一人もなかつた。健三は頰杖を突いて考へさせられる許りであつた。

彼は斯うした不安を何度となく繰返しながら、昔から今日迄同じ職務に從事して、動きもしなければ發展もしなかつた。健三よりも七つ許り年上な彼の半生は、恰も變化を許さない器械の樣なもので、次第に消耗して行くより外には何の事實も認められなかつた。

「二十四五年もあんな事をしてゐる間には何か出來さうなものだがね」

健三は時々自分の兄を斯んな言葉で評した。其兄の派出好で勉強嫌であつた昔も眼の前に見えるやうであつた。三味線を彈いたり、一絃琴を習つたり、白玉を丸めて鍋の中へ放り込んだり、寒天を煮て切溜で冷したり、凡ての時間は其頃の彼に取つて食ふ事と遊ぶ事ばかりに費されてゐた。

「みんな自業自得だと云へば、まあそんなものさね」

是が今の彼の折々他に洩す述懷になる位彼は怠け者であつた。

兄弟が死に絕えた後、自然健三の生家の跡を襲ぐやうになつた彼は、父が亡くなるのを待つて、家屋敷をすぐ賣り拂つてしまつた。それで元からある借金を濟して、自分は小さな宅へ這入つた。それから其處に納まり切らない道具類を賣拂つた。

間もなく彼は三人の子の父になつた。そのうちで彼の最も可愛がつてゐた總領の娘が、年頃になる少し前から惡性の肺結核に罹つたので、彼は其娘を救ふために、あらゆる手段を講じた。然し彼のなし得る凡ては殘酷な運命に對して全くの徒勞に歸した。二年越煩つた後で彼女が遂に斃れた時、彼の家の簞笥は丸で空になつてゐた。儀式に要る袴は無論、一寸した紋付の羽織さへなかつた。彼は健三の外國で着古した洋服を貰つて、それを大事に着て毎日局へ出勤した。

三十五

二三日經つて健三の兄は果して細君の豫想通り袴を返しに來た。

「何うも遲くなつて御氣の毒さま。有難う」

彼は腰板の上に雙方の端を折返して小さく疊んだ袴を、風呂敷の中から出して細君の前に置いた。大の見榮坊で、一寸した包物を持つのも厭がつた昔に比べると、今の兄は全く色氣が拔けてゐた。其代り脂氣もなかつた。彼はばさばさした手で、汚れた風呂敷の隅を抓んで、それを鄭寧に折つた。

「こりや好い袴だね。近頃拵へたの」

「いゝえ。中々そんな勇氣はありません。昔からあるんです」

細君は結婚のとき此袴を着けて勿體らしく坐つた夫の姿を思ひだした。遠い所で極簡略に行はれた其結婚の式に兄は列席してゐなかつた。

「へえゝ。左右かね。成程さう云はれると何處かで見たやうな氣もするが。然し昔のものは矢つ張り丈夫なんだね。ちつとも敗んでゐないぢやないか」

「滅多に穿かないんですもの。それでも一人で

ゐるうちに能くそんな物を買ふ氣になれたのね、あの人が。私今でも不思議だと思ひますわ」

「或は婚禮の時に穿く積でわざ〳〵拵へたのかも知れないね」

二人は其時の異樣な結婚式に就いて笑ひながら話し合つた。

東京からわざ〳〵彼女を伴れに來た細君の父は、娘に振袖を着せながら、自分は一通りの禮裝さへ調へてゐなかつた。セルの單衣を着流しの儘で仕舞には胡坐さへ搔いた。婆さん一人より外に誰も相談する相手のない健三の方では猶の事困つた。彼は結婚の儀式に就いて全くの無方針であつた。もと〳〵東京へ歸つてから貰ふといふ約束があつたので、媒妁人も其地にはゐなかつた。健三は參考のため此媒妁人が書いて送つて呉れた注意書のやうなものを讀んで見た。それは立派な紙に楷書で認められた嚴しいものには違なかつたが、中には東鑑などが例に引いてある丈で、何の實用にも立たなかつた。

「雌蝶も雄蝶もあつたもんぢやないのよ貴方。だいち御盃の縁が缺けてゐるんですもの」

「それで三々九度を遣つたのかね」

「えゝ、だから夫婦中が斯んなにがたぴしするんでせう」

兄は苦笑した。

「健三も中々の氣六かしやだから、お住さんも骨が折れるだらう」

細君はたゞ笑つてゐた。別段兄の言葉に取り合ふ氣色も見えなかつた。

「もう歸りさうなものですがね」

「今日は待つてゝ例の事件を話して行かなくつちや……」

兄はまだ其後を云はうとした。細君はふいと立つて茶の間へ時計を見に這入つた。其處から出て來た時、彼女は此間の書類を手にしてゐた。

「是が要るんでせう」

「いえ夫はたゞ參考迄に持つて來たんだから、多分要るまい。もう健三に見せて呉れたんでせう」

「えゝ見せました」

「何と云つてたかね」

細君は何とも答へやうがなかつた。

「隨分澤山色々な書付が這入つてゐますわね。此中には」

「御父さんが、今に何か事があると不可いつて、丹念に取つて置いたんだから」

細君は夫から頼まれて其中の最も大切らしい一部分を彼の爲に代讀した事は云はなかつた。二人は健三の歸る迄の時間をたゞの世間話に費した。其健三は約三十分程して歸つて來た。

三十六

彼が何時もの通り服裝を改めて座敷へ出た時、赤と白と撚り合はせた細い絲で括られた例の書類は兄の膝の上にあつた。

「先達ては」

兄は油氣の拔けた指先で、一度解きかけた絲の結び目を元の通りに締めた。

「今一寸見たら此中には君に不必要なものが紛れ込んでゐるね」

「左右ですか」

此大事さうに仕舞込まれてあつた書付に、兄が長い間眼を通さなかつた事を健三は知つた。兄は又自分の弟がそれ程熱心にそれを調べてゐない事に氣が付いた。

「お由の送籍願が這入つてるんだよ」

お由といふのは兄の妻の名であつた。彼が其人と結婚する當時に必要であつた區長宛の願

昔が其處から出て來ようとは、二人とも思ひがけなかつた。

兄は最初の妻を離別した。次の妻に死なれた。其二度目の妻が病氣の時、彼は大して心配の樣子もなく能く出歩いた。病症が惡阻だから大丈夫といふ安心もあるらしく見えたが、容體が險惡になつて後も、彼は依然として其態度を改める樣子がなかつたので、人はそれを氣に入らない妻に對する仕打とも解釋した。健三も或は左右だらうと思つた。

三度目の妻を迎へる時、彼は自分から望みの女を指名して父の許諾を求めた。然し弟には一言の相談もしなかつた。それがため我の強い健三の、兄に對する不平が、罪もない義姉の方に迄影響した。彼は教育も身分もない人を自分の姉と呼ぶのは厭だと主張して、氣の弱い兄を苦しめた。

「なんて捌けない人だらう」

蔭で批評の口に上る斯うした言葉は、彼を反省させるよりも却つて頑固にした。習俗を重んずるために學問をしたやうな惡い結果に陷つて自ら知らなかつた彼には、とかく自分の不見識を認めて見識と誇りたがる弊があつた。彼は慚愧の眼をもつて當時の自分を回顧した。

「送籍願が紛れ込んでゐるなら、それを御返しするから、持つて行つたら好いでせう」

「いゝえ寫だから、僕も要らないんだ」

兄は紅白の紐に手も觸れなかつた。健三は不圖其日附が知りたくなつた。

「一體何時頃でしたかね。それを區役所へ出したのは」

「もう古い事さ」

兄は是丈云つたぎりであつた。其脣には微笑の影が差した。最初も二返目も失敗つて、最後にやつと自分の氣に入つた女と一所になつた昔を忘れる程、彼は耄碌してゐなかつた。同時にそれを口へ出す程若くもなかつた。

「御幾つでしたかね」と細君が訊いた。

「お由ですか。お由はお住さんと一つ違ですよ」

「まだ御若いのね」

兄はそれには何とも答へずに、先刻から膝の上に置いた書類の帶を急に解き始めた。

「まだ斯んなものが這入つてゐたよ。是も君に關係のないものだ。さつき見て僕もちよいと驚いたが、こら」

彼はごた〳〵した故紙の中から、何の雜作もなく一枚の書付を取出した。それは喜代子といふ彼の長女の出產屆の下書であつた。「右者本月二十三日午前十一時五十分出生致し候」といふ文句の、「本月二十三日」丈に棒が引懸けて消してある上に、蟲の食つた不規則な線が筋違に入つてゐた。

「是も御父さんの手蹟だ。ねえ」

彼は其一枚の反故を大事らしく健三の方へ向け直して見せた。

「御覽、蟲が食つてるよ。尤も其筈だね。出產屆ばかりぢやない、もう死亡屆迄出てゐるんだから」

結核で死んだ其子の生年月を、兄は口のうちで靜かに讀んでゐた。

三十七

兄は過去の人であつた。華美な前途はもう彼の前に横たはつてゐなかつた。何かに付けて後を振り返り勝な彼と對坐してゐる健三は、自分の進んで行くべき生活の方向から逆に引き戻されるやうな氣がした。

「淋しいな」

健三は兄の道伴になるには餘りに未來の希望を多く持ち過ぎた。其癖現在の彼も可なりに淋しいものに違なかつた。其現在から順に推した未來の、當然淋しかるべき事も彼にはよく解

てゐた。
兄は此間の相談通り島田の要求を斷つた旨を健三に話した。然し何んな手續きでそれを斷つたのか、又先方がそれに對して何んな挨拶をしたのか、さういふ細かい點になると、全く要領を得た返事をしなかつた。
「何しろ比田からさう云つて來たんだから慥だらう」
其比田が島田に會ひに行つて話を付けたとも、又は手紙で會見の始末を知らせて遣つたとも、健三には判明らなかつた。
「多分行つたんだらうと思ふがね。それとも彼の人の事だから、手紙丈で濟まして仕舞つたのか。其處はつい聽いて來るのを忘れたよ。尤もあの後一遍姉さんの見舞かた〴〵行つた時にや、比田が相變らず留守だつたので、つい會ふ事が出來なかつたのさ。然し其時姉さんの話ぢや、何でも忙しいんで、まだ其儘にしてあるやうだつて云つてたがね。あの男も隨分無責任だから、ことによると行かないのかも知れないよ」
健三の知つてゐる比田も無責任の男に相違なかつた。其代り頼むと何でも引き受ける性質であつた。たゞ他から頭を下げて頼まれるのが嬉しくつて物を受合ひたがる彼は、頼み方が氣に入らないと容易に動かなかつた。
「然しこんだの事なんざあ、島田がぢかに比田の所へ持ち込んだんだからねえ」
兄は暗に比田自身が先方へ出向いて話合を付けなければ義理の惡いやうな事を云つた。其癖彼はこんな場合に決して自分が懸合事抔に出掛ける人ではなかつた。少し氣を遣はなければならない面倒が起ると必ず顏を背けた。さうして事情の許す限り凝と辛抱して獨り苦しんだ。健三には此矛盾が腹立たしくも可笑しくもない代りに何となく氣の毒に見えた。
「自分も兄弟だから他から見たら何處か似てゐるのかも知れない」
斯う思ふと、兄を氣の毒がるのは、つまり自分を氣の毒がるのと同じ事にもなつた。
「姉さんはもう好いんですか」
問題を變へた彼は、姉の病氣に就いて經過を訊ねた。
「あゝ。どうも喘息つてものは不思議だねえ。あんなに苦しんでゐても直癒るんだから」
「もう話が出來ますか」
「出來るどころか、中々好く饒舌つてね。例の調子で。――姉さんの考へぢや、島田はお縫さんの所へ行つて、智慧を付けられて來たんだらうつて云ふんだがね」
「まさか。それよりあの男だから彼んな非常識な事を云つて來るのだと解釋する方が適當でせう」
「さう」
兄は考へてゐた。健三は馬鹿らしいといふ顏付をした。
「でなければね。此度年を取つて皆から邪魔にされるんだらうつて」
健三はまだ默つてゐた。
「何しろ淋しいには違ないんだね。それも彼奴の事だから、人情で淋しいんぢやない、慾で淋しいんだ」
兄はお縫さんの所から毎月彼女の母の方へ手當が屆く事を何うしてか知つてゐた。
「何でも金鵄勳章の年金か何かをお藤さんが貰つてるんだとさ。だから島田も何處からか貰はなくつちや淋しくつて堪らなくなつたんだらうよ。何しろあの位慾張つてるんだから」
健三は慾で淋しがつてる人に對して大した同情も起し得なかつた。

三十八

事件のない日が又少し續いた。事件のない日

は、彼に取つて沈默の日に過ぎなかつた。

彼は其間に時々己の追憶を辿るべく餘儀なくされた。自分の兄を氣の毒がりつゝも、彼は何時の間にか、其兄と同じく過去の人となつた。

彼は自分の生命を兩斷しようと試みた。すると綺麗に切り棄てられべき筈の過去が、却つて自分を追掛けて來た。彼の眼は行手を望んだ。然し彼の足は後へ歩きがちであつた。

さうして其行き詰まりには、大きな四角な家が建つてゐた。家には幅の廣い階子段のついた二階があつた。其二階の上も下も、健三の眼には同じやうに見えた。廊下で圍まれた中庭もまた眞四角であつた。

不思議な事に、其廣い宅には人が誰も住んでゐなかつた。それを淋しいとも思はずにゐられる程の幼い彼には、まだ家といふものゝ經驗と理解が缺けてゐた。

彼は幾つとなく續いてゐる部屋だの、遠く迄眞直に見える廊下だのを、恰も天井の付いた町のやうに考へた。さうして人の通らない往來を一人で歩く氣でそこいら中驅け廻つた。

彼は時々表二階へ上つて、細い格子の間から下を見下した。鈴を鳴らしたり、腹掛を掛けたりした馬が何匹も續いて彼の眼の前を過ぎた。路を隔てた眞ん向うには大きな唐金の佛樣があつた。其佛樣は胡坐をかいて蓮臺の上に坐つてゐた。太い錫杖を擔いでゐた。それから頭に笠を被つてゐた。

健三は時々薄暗い土間へ下りて、其處からすぐ向側の石段を下りるために馬の通る往來を横切つた。彼は斯うしてよく佛樣へ攀ぢ上つた。着物の襞へ足を掛けたり、錫杖の柄へ捉まつたりして、後から肩に手が屆くか、又は笠に自分の頭が觸れると、其先はもう何うする事も出來ずにまた下りて來た。

彼はまた四角な家と唐金の佛樣の近所にある赤い門の家を覺えてゐた。赤い門の家は狹い往來から細い小路を二十間も折れ曲つて這入つた突き當りにあつた。其奧は一面の高藪で蔽はれてゐた。

此狹い往來を突き當つて左へ曲ると長い下り坂があつた。健三の記憶の中に出てくる其坂は、不規則な石段で下から上迄疊み上げられてゐた。古くなつて石の位置が動いた爲か、段の方々には凸凹があつた。石と石の罅隙からは青草が風に靡いた。それでも其處は人の通行する路に違なかつた。彼は草履穿の儘で、何度か其高い石段を上つたり下つたりした。

坂を下り盡すと又坂があつて、小高い行手に杉の木立が蒼黒く見えた。丁度其坂と坂の間の、谷になつた窪地の左側に、又一軒の萱葺があつた。家は表から引込んでゐる上に、少し右側の方へ片寄つてゐたが、往來に面した一部分には掛茶屋の樣な雜な構が拵へられて、常には二三脚の床几さへ體よく据ゑてあつた。

葭簀の隙から覗くと、奧には石で圍んだ池が見えた。その池の上には藤棚が釣つてあつた。水の上に差し出された兩端を支へる二本の棚柱は池の中に埋まつてゐた。周圍には躑躅が多かつた。中には緋鯉の影があちこちと動いた。濁つた水の底を幻影の樣に赤くする其魚を健三は是非捕りたいと思つた。

或日彼は誰も宅にゐない時を見計らつて、不細工な布袋竹の先へ一枚絲を着けて、餌と共に池の中に投げ込んだら、すぐ絲を引く氣味の惡いものに脅された。彼を水の底に引つ張り込まなければ已まない其強い力が二の腕迄傳はつた時、彼は恐ろしくなつて、すぐ竿を放り出した。さうして翌日靜かに水面に浮いてゐた一尺餘りの緋鯉を見出した。彼は獨り怖かつ

た。……
「自分は其時分誰と共に住んでゐたのだらう」
彼には何等の記憶もなかつた。彼の頭は丸で白紙のやうなものであつた。けれども理解力の索引に訴へて考へれば、何うしても島田夫婦と共に暮したと云はなければならなかつた。

三十九

それから舞臺が急に變つた。淋しい田舎が突然彼の記憶から消えた。
すると表に櫺子窓の付いた小さな宅が朧氣に彼の前にあらはれた。門のない其宅は裏通りらしい町の中にあつた。町は細長かつた。さうして右にも左にも折れ曲つてゐた。
彼の記憶がぼんやりしてゐるやうに、彼の家も始終薄暗かつた。彼は日光と其家とを連想する事が出來なかつた。
彼は其處で疱瘡をした。大きくなつて聞くと、種痘が元で、本疱瘡を誘ひ出したのだとかいふ話であつた。彼は暗い櫺子のうちで轉げ廻つた。惣身の肉を所嫌はず掻き挘つて泣き叫んだ。
彼はまた偶然廣い建物の中に幼い自分を見出した。區切られてゐる樣で續いてゐる仕切のうちには人がちらほら居た。空いた場所の疊だか薄縁だかゞ、黄色く光つて、あたりを伽藍堂の如く淋しく見せた。彼は高い所にゐた。其處で辨當を食つた。さうして油揚の胴を干瓢で結へた稻荷鮨の恰好に似たものを、上から下へ落した。彼は勾欄につらまつて何度も下を覗いて見た。然し誰もそれを取つて呉れるものはなかつた。伴の大人はみんな正面に氣を取られてゐた。正面ではぐら／＼と柱が搖れて大きな宅が潰れた。すると其の潰れた屋根の間から、髭を生やした軍人が威張つて出て來た。――其頃の健三はまだ芝居といふものゝ觀念を有つてゐなかつたのである。
彼の頭には此芝居と外れ鷹とが何の意味なしに結び付けられてゐた。突然鷹が向うに見える青い竹藪の方へ筋違に飛んで行つた時、誰だか彼の傍に居るものが、「外れた／＼」と叫んだ。すると誰だかまた手を叩いて其鷹を呼び返さうとした。――健三の記憶は此處でぷつりと切れてゐた。芝居と鷹と何方を先に見たのか、夫さへ彼には不分明であつた。從つて彼が田圃や藪ばかり見える田舎に住んでゐたのと、狹苦しい町内の往來に向いた薄暗い宅に住んでゐたのと、何方が先になるのか、それも彼にはよく判明らなかつた。さうして其時代の彼の記憶には、殆ど人といふものゝ影が働いてゐなかつた。
然し島田夫婦が彼の父母として明瞭に彼の意識に上つたのは、それから間もない後の事であつた。
其時夫婦は變な宅にゐた。門口から右へ折れると、他の塀際傳ひに石段を三つ程上らなければならなかつた。そこからは幅三尺ばかりの路地で、拔けると賑やかな通りへ出た。左は廊下を曲つて、今度は反對に二三段下りる順になつてゐた。すると其處に長方形の座敷があつた。座敷に沿うた土間も長方形であつた。土間から表へ出ると、大きな河が見えた。其上を白帆を懸けた船が何艘となく往つたり來たりした。河岸には柵を結つた中に、薪が一杯積んであつた。柵と柵の間にある空地は、だら／＼下りに水際迄續いた。石垣の間からは蟹がよく鋏を出した。
島田の家は此細長い屋敷を三つに區切つたものゝ眞中にあつた。もとは大きな町人の所有で、河岸に面した長方形の廣間が其店になつてゐたらしく思はれるけれども、その持主の何者であつたか、又何うして彼が其處を立ち退いた

ものか、それらは凡て健三の知識の外に横はる秘密であつた。

一頃その廣い部屋をある西洋人が借りて英語を教へた事があつた。まだ西洋人を異人といふ昔の時代だつたので、島田の妻のお常は、化物と同居でもしてゐるやうに氣味を惡がつた。尤も此西洋人は上靴を穿いて、島田の借りてゐる部屋の縁側迄のそのそ歩いてくる癖を有つてゐた。お常が癪の氣味だとか云つて蒼い顏をして寢てゐると、其處の縁側へ立つて座敷を覗き込みながら、見舞を述べたりした。その見舞の言葉は日本語か、英語か、又はたゞ手眞似だけか、健三には丸で解つてゐなかつた。

四十

西洋人は何時の間にか去つてしまつた。小さい健三が不圖心付いて見ると、其廣い室は既に扱所といふものに變つてゐた。

扱所といふのは今の區役所の樣なものらしかつた。みんなが低い机を一列に並べて事務を執つてゐた。テーブルや椅子が今日のやうに廣く用ひられない時分の事だつたので、疊の上に長く坐るのが、大體の不便でもなかつたのだらう。呼び出されるものも、また自分から進んで來るものも、悉く自分の下駄を土間へ脱ぎ捨てゝ、掛りの机の前へ畏まつた。

島田は此扱所の頭であつた。從つて彼の席は入口からずつと遠い一番奥の突當りに設けられた。其處から直角に折れ曲つて、河の見える櫺子窓の際迄に、人の數が何人ゐたか、机の數が幾個あつたか、健三の記憶は判然にそれを彼に語り得なかつた。

島田の住居と扱所とは、もとより細長い一つ家を仕切つた迄の事なので、彼は出勤と云はず退出と云はず、少からぬ便宜を有つてゐた。彼には天氣の好い時でも土を踏む面倒がなかつた。雨の降る日には傘を差す億劫を省く事が出來た。彼は自宅から縁側傳ひで勤めに出た。さうして同じ縁側を歩いて宅へ歸つた。

斯ういふ關係が、小さい健三を少からず大膽にした。彼は時々公の場所へ顏を出して、みんなから相手にされた。彼は好い氣になつて、書記の硯箱の中にある朱墨を弄つたり、小刀の鞘を拂つて見たり、他に厭がられるやうな惡戲を續けざまにした。島田はまた出來る限りの專横をもつて、此小暴君の態度を是認した。

島田は吝嗇な男であつた。妻のお常は島田よりも猶吝嗇であつた。

「爪に火を點すつてえのは、あの事だね」

彼が實家に歸つてから後、斯んな評が時々彼の耳に入つた。然し當時の彼は、お常が長火鉢の傍へ坐つて、下女に味噌汁をよそつて遣るのを何の氣もなく眺めてゐた。

「それぢや何ぼ何でも下女が可哀さうだ」

彼の實家のものは苦笑した。

お常はまた飯櫃や御菜の這入つてゐる戸棚に、いつでも錠を卸した。たまに實家の父が訪ねて來ると、屹度蕎麥を取寄せて食はせた。其時は彼女も健三も同じものを食つた。その代り飯時が來ても決して何時ものやうに膳を出さなかつた。それを當然のやうに思つてゐた健三は、實家へ引き取られてから、間食の上に三度の食事が重なるのを見て、大いに驚いた。

然し健三に對する夫婦は金の點に掛けて寧ろ不思議な位寛大であつた。外へ出る時は黄八丈の羽織を着せたり、縮緬の着物を買ふために、わざわざ越後屋迄引つ張つて行つたりした。其越後屋の店へ腰を掛けて、柄を擇り分けてゐる間に、夕暮の時間が逼つたので、大勢の小僧が廣い間口の雨戸を、端から一度に締め出した時、彼は急に恐ろしくなつて、大きな聲を揚げて泣き出した事もあつた。

彼の望む玩具は無論彼の自由になつた。其中には寫し繪の道具も交つてゐた。彼はよく紙を繼ぎ合はせた幕の上に、三番叟の影を映して、烏帽子姿に鈴を振らせたり足を動かさせたりして喜んだ。彼は新しい獨樂を買つて貰つて、時代を着けるために、それを河岸際の溝泥の中に浸けた。所が其泥溝は薪積場の柵と柵との間から流れ出して河へ落ち込むので、彼は獨樂の失くなるのが心配さに、日に何遍となく扱所の土間を抜けて行つて、何遍となくそれを取り出して見た。そのたびに彼は石垣の間へ逃げ込む蟹の穴を棒で突つついた。それから逃げ損つたもの丶甲を抑へて、いくつも生捕りにして袂へ入れた。……

要するに彼は此吝嗇な島田夫婦に、餘所から貰ひ受けた一人つ子として、異數の取扱ひを受けてゐたのである。

四十一

然し夫婦の心の奥には健三に對する一種の不安が常に潜んでゐた。

彼等が長火鉢の前で差向ひに坐り合ふ夜寒の宵などには、健三によく斯んな質問を掛けた。

「御前の御父さんは誰だい」

健三は島田の方を向いて彼を指した。

「ぢや御前の御母さんは」

健三はまたお常の顔を見て彼女を指した。是で自分達の要求を一應滿足させると、今度は同じやうな事を外の形で訊いた。

「ぢや御前の本當の御父さんと御母さんは」

健三は厭々ながら同じ答を繰返すより外に仕方がなかつた。然しそれが何故だか彼等を喜ばした。彼等は顔を見合せて笑つた。

或時はこんな光景が殆ど毎日のやうに三人の間に起つた。或時は單に是丈の問答では濟まなかつた。ことにお常は執濃かつた。

「御前は何處で生れたの」

斯う聞かれるたびに健三は、彼の記憶のうちに見える赤い門――高藪で蔽はれた小さな赤い門の家を擧げて答へなければならなかつた。お常は何時此質問を掛けても、健三が差支なく同じ返事の出來るやうに、彼を仕込んだのである。彼の返事は無論器械的であつた。けれども彼女はそんな事には一向頓着しなかつた。

「健坊、御前本當は誰の子なの。隱さずにさう御云ひ」

彼は苦められるやうな心持がした。時には苦しいより腹が立つた。向うの聞きたがる返事を與へずに、わざと默つてゐたくなつた。

「御前誰が一番好きだい。御父さん？　御母さん？」

健三は彼女の意を迎へるために、向うの望むやうな返事をするのが厭で堪らなかつた。彼は無言のまゝ棒のやうに立つてゐた。それを只年齒の行かないためとのみ解釋したお常の觀察は、寧ろ簡單に過ぎた。彼は心のうちで彼女の斯うした態度を忌み惡んだのである。

夫婦は全力を盡して健三を彼等の專有物にしようと力めた。また事實上健三は彼等の專有物に相違なかつた。從つて彼等から大事にされるのは、つまり彼等のために彼の自由を奪はれるのと同じ結果に陷つた。彼には既に身體の束縛があつた。然しそれよりも猶恐ろしい心の束縛が、何も解らない彼の胸に、ぼんやりした不滿足の影を投げた。

夫婦は何かに付けて彼等の恩惠を健三に意識させようとした。それで或時は「御父さんが」といふ聲を大きくした。或時はまた「御母さんが」といふ言葉に力を入れた。御父さんと御母さんを離れたたゞの菓子を食つたり、たゞの着物を着たりする事は、自然健三には禁じられてゐた。

自分達の親切を、無理にも子供の胸に外部から叩き込まうとする彼等の努力は、却つて反對の結果を其子供の上に引き起した。健三は蒼蠅がつた。

「なんでそんなに世話を焼くのだらう」

「御父さんが」とか「御母さんが」とかゞ出るたびに、健三は己れ獨りの自由を欲しがつた。自分の買つて貰ふ玩具を喜んだり、錦繪を飽かず眺めたりする彼は、却つてそれ等を買つてくれる人を嬉しがらなくなつた。少くとも兩つのものを綺麗に切り離して、純粹な樂みに耽りたかつた。

夫婦は健三を可愛がつてゐた。けれども其愛情のうちには變な報酬が豫期されてゐた。金の力で美しい女を圍つてゐる人が、其女の好きなものを、云ふが儘に買つて呉れるのと同じ様に、彼等は自分達の愛情そのものゝ發現を目的として行動する事が出來ずに、たゞ健三の歡心を得るために親切を見せなければならなかつた。さうして彼等は自然のために彼等の不純を罰せられた。しかも自ら知らなかつた。

四十二

同時に健三の氣質も損はれた。順良な彼の天性は次第に表面から落ち込んで行つた。さうして其陷缺を補ふものは強情の二字に外ならなかつた。

彼の我儘は日増に募つた。自分の好きなものが手に入らないと、往來でも何でも構はずに、すぐ其處へ坐り込んで動かなかつた。ある時は小僧の脊中から彼の髮の毛を力に任せて挘り取つた。ある時は神社に放し飼の鳩を何うしても宅へ持つて歸るのだと主張して已まなかつた。養父母の寵を欲しいまゝに專有し得る狹い世界の中に起きたり寝たりする事より外に何も知らない彼には、凡ての他人が、たゞ自分の命令を聞くために生きてゐるやうに見えた。彼は云へば通るとばかり考へるやうになつた。

やがて彼の横着はもう一歩深入りをした。

ある朝彼は親に起こされて、眠い眼を擦りながら縁側へ出た。彼は毎朝寢起きに其處から小便をする癖を有つてゐた。所が其日は何時もより眠かつたので、彼は用を足しながらつい途中で寢てしまつた。さうして其後を知らなかつた。

眼が覺めて見ると、彼は小便の上に轉げ落ちてゐた。不幸にして彼の落ちた縁側は高かつた。大通りから河岸の方へ滑り込んでゐる地面の中途に當るので、普通の倍程あつた。彼はその出來事のためにとう〳〵腰を拔かした。

驚いた養父母はすぐ彼を千住の名倉へ伴れて行つて出來る丈の治療を加へた。然し強く痛められた腰は容易に立たなかつた。彼は酢の臭のする黄色いどろ〳〵したものを毎日局部に塗つて座敷に寢てゐた。それが幾日續いたか彼は知らなかつた。

「まだ立てないかい。立つて御覽」

お常は毎日のやうに催促した。然し健三は動けなかつた。動けるやうになつてもわざと動かなかつた。彼は寢ながらお常のやきもきする顏を見てひそかに喜んだ。

彼は仕舞に立つた。さうして平生と何の異なる所なく其處いら中歩き廻つた。するとお常の驚いて嬉しがりやうが、如何にも芝居じみた表情に充ちてゐたので、彼はいつそ立たずにもう少し寢てゐればよかつたといふ氣になつた。

彼の弱點がお常の弱點とまともに相搏つ事も少くはなかつた。

お常は非常に嘘を吐く事の巧い女であつた。それから何んな場合でも、自分に利益があるとさへ見れば、すぐ涙を流す事の出來る重寶な女であつた。健三をほんの子供だと思つて氣

な許してゐた彼女は、其裏面をすつかり彼に曝露して自ら知らなかつた。

或日一人の客と相對して坐つてゐたお常は、其席で話題に上つた甲といふ女を、傍で聽いてゐても聽きづらい程罵つた。所が其客が歸つたあとで、甲が又偶然彼女を訪ねて來た。するとお常は甲に向つて、そら／＼しい御世辭を使ひ始めた。遂に、今誰さんとあなたの事を大變賞めてゐた所だといふやうな不必要な嘘迄吐いた。健三は腹を立てた。

「あんな嘘を吐いてらあ」

彼は一徹な子供の正直を其儘甲の前に披瀝した。甲の歸つたあとでお常は大變に怒つた。

「御前と一所にゐると顏から火の出るやうな思ひをしなくつちやならない」

健三はお常の顏から早く火が出れば好い位に感じた。

彼の胸の底には彼女を忌み嫌ふ心が我知らず常に何處かに働いてゐた。いくらお常から可愛がられても、それに酬いる丈の情合が此方に出て來得ないやうな醜いものを、彼女は彼女の人格の中に藏してゐたのである。さうして其醜いものを一番能く知つてゐたのは、彼女の懷に溫められて育つた駄々つ子に外ならなかつたのである。

四十三

其中變な現象が島田とお常との間に起つた。

ある晩健三が不圖眼を覺まして見ると、夫婦は彼の傍ではげしく罵り合つてゐた。出來事は彼に取つて突然であつた。彼は泣き出した。

其翌晩も彼は同じ爭ひの聲で熟睡を破られた。彼はまた泣いた。

斯うした騷がしい夜が幾つとなく重なつて行くに連れて、二人の罵る聲は次第に高まつて來た。仕舞には雙方共手を出し始めた。打つ音、踏む音、叫ぶ音が、小さな彼の心を恐ろしがらせた。最初彼が泣き出すと已んだ二人の喧嘩が、今では寢ようが覺めようが、彼に用捨なく進行するやうになつた。

幼稚な健三の頭では何の爲めに、ついぞ見馴れない此光景が每夜深更に起るのか、丸で解らなかつた。彼はたゞそれを嫌つた。道德も理非も持たない彼に、自然はたゞそれを嫌ふやうに教へたのである。

やがてお常は健三に事實を話して聞かせた。其話によると、彼女は世の中で一番の善人であつた。これに反して島田は大變な惡ものであつた。然し最も惡いのはお藤さんであつた。「あいつが」とか「あの女が」とかいふ言葉を使ふとき、お常は口惜しくつて堪らないといふ顏付をした。眼から淚を流した。然しさうした劇烈な表情は却つて健三の心持を惡くする丈で、外に何の效果もなかつた。

「彼奴は讐だよ。御母さんにも御前にも讐だよ。骨を粉にしても仇討をしなくつちや」

お常は齒をぎり／＼嚙んだ。健三は早く彼女の傍を離れたくなつた。

彼は始終自分の傍にゐて、朝から晩迄彼を味方にしたがるお常よりも、寧ろ島田の方を好いた。其島田は以前と違つて、大抵は宅にゐない事が多かつた。彼の歸る時刻は何時も夜更らしかつた。從つて日中は滅多に顏を合せる機會がなかつた。

然し健三は每晩暗い灯火の影で彼を見た。其險惡な眼と怒りに顫へる脣とを見た。咽喉から渦捲く烟のやうに洩れて出る其憤りの聲を聞いた。

それでも彼は時々健三を伴れて以前の通り外へ出る事があつた。彼は一口も酒を飮まない代りに大變甘いものを嗜んだ。ある晩彼は健三とお藤さんの娘のお縫さんとを伴れて、賑やかな

通りを散歩した歸りに汁粉屋へ寄つた。健三のお藤さんに會つたのは此時が始めてであつた。それで彼等は常に顔さへ見合せなかつた。口は丸で利かなかつた。

宅へ歸つた時、健三はお常から、まづ島田に何處へ伴れて行かれたかを訊かれた。それからお藤さんの宅へ寄りはしないかと念を押された。最後に汁粉屋へは誰と一所に行つたといふ質問を受けた。健三は島田の注意に拘らず、事實を有の儘に告げた。然しお常の疑ひはそれでも中々解けなかつた。彼女はいろ〳〵な鎌を掛けて、それ以上の事實を釣り出さうとした。

「彼奴も一所なんだらう。本當を御云ひ。云へば御母さんが好いものを上げるから御云ひ。あの女も行つたんだらう。さうだらう」

彼女は何うしても行つたと云はせようとした。同時に健三は何うしても云ふまいと決心した。彼女は健三を疑つた。健三は彼女を卑しんだ。

「ぢや彼の子に御父さんが何と云つたい。彼の子の方に餘計口を利くかい、御前の方にかい」

何の答もしなかつた健三の心には、たゞ不愉快の念のみ募つた。然しお常は其處で留まる女ではなかつた。

「汁粉屋で御前を何方へ坐らせたい。右の方かい、左の方かい」

嫉妬から出る質問は何時迄經つても盡きなかつた。その質問のうちに自分の人格を會釋なく露はして顧みない彼女は、十にも足りないわが養ひ子から、愛想を盡かされて毫も氣が付かずにゐた。

四十四

間もなく島田は健三の眼から突然消えて失くなつた。河岸を向いた裏通りと賑やかな表通りとの間に挾まつてゐた今迄の住居も急に何處へか行つてしまつた。お常とたつた二人ぎりになつた健三は、見馴れない變な宅の中に自分を見出した。

其家の表には門口に繩暖簾を下げた米屋だか味噌屋だかゞあつた。彼の記憶は此大きな店と、茹でた大豆とを彼に連想せしめた。彼は毎日それを食つた事をいまだに忘れずにゐた。然し自分の新しく移つた住居については何の影像も浮かべ得なかつた。「時」は綺麗に此佗しい記念を彼のために拂ひ去つてくれた。

お常は會ふ人毎に島田の話をした。口惜しい口惜しいと云つて泣いた。

「死んで祟つてやる」

彼女の權幕は健三の心をます〳〵彼女から遠ざける媒介となるに過ぎなかつた。

夫と離れた彼女は健三を自分一人の專有物にしようとした。また專有物だと信じてゐた。

「是からは御前一人が依怙だよ。好いかい。確かりして呉れなくつちや不可いよ」

斯う頼まれるたびに健三は云ひ澁つた。彼はどうしても素直な子供のやうに心持の好い返事を彼女に與へる事が出來なかつた。

健三を物にしようといふお常の腹の中には愛に驅られる衝動よりも、寧ろ慾に押し出される邪氣が常に働いてゐた。それが頑是ない健三の胸に、何の理窟なしに、不愉快な影を投げた。然し其他の點について彼は全くの無我夢中であつた。

二人の生活は僅の間しか續かなかつた。物質的の缺乏が原因になつたのか、又はお常の再縁が現狀の變化を餘儀なくしたのか、年齒の行かない彼には丸で解らなかつた。何しろ彼女は又突然健三の眼から消えて失くなつた。さうして彼は何時の間にか彼の實家へ引き取られてゐた。

「考へると丸で他の身の上のやうだ。自分の事とは思へない」

健三の記憶に上せた事柄は餘りに今の彼と懸隔してゐた。それでも彼は他人の生活に似た自分の昔を思ひ浮べなければならなかつた。しかも或る不快な意味に於いて思ひ浮べなければならなかつた。

「お常さんて人は其時にあの波多野とか云ふ宅へ又御嫁に行つたんでせうか」

細君は何年前か夫の所へお常から來た長い手紙の上書をまだ覺えてゐた。

「左右だらうよ。己も能く知らないが」

「其波多野といふ人は大方まだ生きてるんでせうね」

健三は波多野の顔さへ見た事がなかつた。生死抔は無論考への中になかつた。

「警部だつて云ふぢやありませんか」

「何んだか知らないね」

「あら、貴夫が自分でさう仰しやつた癖に」

「何時」

「あの手紙を私に御見せになつた時よ」

「左右かしら」

健三は長い手紙の内容を少し思ひ出した。其中には彼女が幼い健三の世話をした時の辛苦ばかりが並べ立てゝあつた。乳がないので最初からおぢや丈で育てた事だの、下性が惡くつて寢小便の始末に困つた事だの、凡てさうした顚末を、飽きる程委しく述べた中に、甲府とかにゐる親類の裁判官が、月々彼女に金を送つてくれるので、今では大變仕合せだと書いてあつた。然し肝腎の彼女の夫が警部であつたか何うか、其處になると健三には全く覺えがなかつた。

「ことによると、もう死んだかも知れないね」

「生きてゐるかも分りませんわ」

二人の間には波多野の事ともつかず、又お常の事ともつかず、斯んな問答が取り換はされた。

「あの人が不意に遣つて來たやうに、其女の人も、何時突然訪ねて來ないとも限らないわね」

細君は健三の顔を見た。健三は腕組をしたなり默つてゐた。

四十五

健三も細君もお常の書いた手紙の傾向をよく覺えてゐた。彼女とはさして縁故のない人ですら、親切に毎月若干かづゝの送金をして呉れるのに、小さい時分あれ程世話になつて置きながら、今更知らん顔をしてゐられた義理でもあるまいと云つた風の筆意が、一頁ごとに見透かされた。

其時彼は此手紙を東京にゐる兄の許に送つた。勤先へこんなものを度々寄こされては迷惑するから、少し氣を付けるやうに先方へ注意してくれと頼んだ。兄からはすぐ返事が來た。もと／＼養家先を離縁になつて、他家へ嫁に行つた以上は他人である、其上健三はその養家さへ既に出て仕舞つた後なのだから、今になつて直接本人へ文通などされては困るといふ理由を持ち出して、先方を承知させたから安心しろと、其返事には書いてあつた。

お常の手紙は其後ふつつり來なくなつた。健三は安心した。然し何處かに心持の惡い所があつた。彼はお常の世話を受けた昔を忘れる譯に行かなかつた。同時に彼女を忌み嫌ふ念は昔の通り變らなかつた。要するに彼のお常に對する態度は、彼の島田に對する態度と同じ事であつた。さうして島田に對するよりも一層嫌惡の念が劇しかつた。

「島田一人でも澤山な所へ、又新しくそんな女が遣つて來られちや困るな」

健三は腹の中で斯う思つた。夫の過去に就い

て、それ程知識のない細君の腹の中には猶の事であつた。細君の同情は今其生家の方にばかり注がれてゐた。もと可なりの地位にあつた彼女の父は、久しく浪人生活を續けた結果、漸々經濟上の苦境に陷つて來たのである。

健三は時々宅へ話しに來る青年と對坐して、晴々しい彼等の樣子と自分の內面生活とを對照し始めるやうになつた。すると彼の眼に映ずる青年は、みんな前ばかり見詰めて、愉快に先へ／＼と步いて行くやうに見えた。

或日彼は其青年の一人に向つて斯う云つた。

「君等は幸福だ。卒業したら何にならうとか、何をしようとか、そんな事ばかり考へてゐるんだから」

青年は苦笑した。さうして答へた。

「それは貴方方時代の事でせう。今の青年はそれ程呑氣でもありません。何にならうとか、何をしようとか思はない事は無論ないでせうけれども、世の中が、さう自分の思ひ通りにならない事も亦能く承知してゐますから」

成程彼の卒業した時代に比べると、世間は十倍も世知辛くなつてゐた。然しそれは衣食住に關する物質的の問題に過ぎなかつた。從つて青年の答には彼の思はくと多少喰ひ違つた點があつた。

「いや君等は僕のやうに過去に煩はされないから仕合せだと云ふのさ」

青年は解しがたいといふ顏をした。

「あなただつて些とも過去に煩はされてゐるやうには見えませんよ。矢つ張り己の世界は是からだといふ所があるやうですね」

今度は健三の方が苦笑する番になつた。彼は其青年に佛蘭西のある學者が唱へ出した記憶に關する新說を話した。

人が溺れかゝつたり、又は絕壁から落ちようとする間際に、よく自分の過去全體を一瞬間の記憶として、其頭に描き出す事があるといふ事實に、此哲學者は一種の解釋を下したのである。

「人間は平生彼等の未來ばかり望んで生きてゐるのに、其未來が咄嗟に起つたある危險のために突然塞がれて、もう己は駄目だと事が極ると、急に眼を轉じて過去を振り向くから、そこで凡ての過去の經驗が一度に意識に上るのだといふんだね。その說によると」

青年は健三の紹介を面白さうに聽いた。けれども事狀を一向知らない彼は、それを健三の身の上に引直して見る事が出來なかつた。健三も一刹那にわが全部の過去を思ひ出すやうな危險な境遇に置かれたものとして今の自分を考へる程の馬鹿でもなかつた。

四十六

健三の心を不愉快な過去に捲き込む端緒になつた島田は、それから五六日程して、つひに又彼の座敷にあらはれた。

其時健三の眼に映じた此老人は正しく過去の幽靈であつた。また現在の人間でもあつた。それから薄暗い未來の影にも相違なかつた。

「何處迄此影が己の身體に付いて回るだらう」

健三の胸は好奇心の刺戟に促されるよりも寧ろ不安の漣漪に搖れた。

「此間比田の所を一寸訪ねて見ました」

島田の言葉遣ひは此前と同じやうに鄭重であつた。然し彼が何で比田の家へ足を運んだのか、其點になると、彼は全く知らん顏をして澄ましてゐた。彼の口振は丸で無沙汰見舞かたがた其方へ用のあつた序に立ち寄つた人の如くであつた。

「あの邊も昔と違つて大分變りましたね」

健三は自分の前に坐つてゐる人の眞面目さの程度を疑つた。果して此男が彼の復籍を比田

を頼みに來たのだらうか、又は比田が自分達と相談の結果通り、自然それを實行したのだらうか、健三は此眞面目な事實さへ疑はずには居られなかつた。

「館はその時分[illegible]であつて、みんな夏になると能く出掛けたものですがね」

島田は相手に頓着なくたゞ自分の言葉を進めて行つた。健三の方では無論自分から進んで不愉快な問題に觸れる必要を認めないので、たゞ老人の後に跟いて引つ張られて行く丈であつた。すると何時の間にか島田の言葉が途切れて來た。仕舞に彼は健三の顔を眺め捨てゝ始めた。

「お夏も年を取つたね。己ももう大分久しく會はないには違ないが、昔はあれで中々勝氣な女で、能く私に喰つて掛つたり何かしたものさ。其代り兄弟同様だから、いくら喧嘩をしたつて、仲の直るのも早いには早いが。何しろ困ると私の所へ泣き付いて來るんで、私も可哀想だからその度に何とか都合して遣つたよ」

島田の云ふ事は、姉が蔭で聽いてゐたら驚怒するだらうと思ふ程に横柄であつた。それから手前勝手な立場からばかり見た歪んだ事實を他に押しつけようとする邪氣に充ちてゐた。

健三は次第に言葉少なになつた。仕舞には黙つたなり凝と島田の顔を見詰めた。

島田は妙に鼻の下の長い男であつた。其上何か凝と物を見るときは必ず口を開けてゐた。だから一寸見ると馬鹿のやうであつた。けれども善良な馬鹿としては決して他に許され得る男ではなかつた。落ち込んだ彼の眼の中には常に反動の何物かを語つてゐた。眼は寧ろ險しかつた。低くした彼の額の上にある髪は、若い時分から左右に分けられた事がなかつた。法印か何ぞのやうに常に後へ撫で付けられてゐた。

彼は不圖健三の眼を見た。さうして相手の瞳を讀んだ。一旦健三の前に這入つた彼の言葉遣ひが又何時の間にか現在の無禮さに立ち返つて來た。彼は健三に對して過去の己に返らうとする試みを遂に斷念してしまつた。

彼は室の内をきよろ／＼見廻し始めた。殺風景を極めた健三の室の中には生憎額も掛物も掛つてゐなかつた。

「李鴻章の書は好きですか」

彼は突然斯んな問を發した。健三は好きとも嫌ひとも云ひ兼ねた。

「好きなら上げても好ござんす。あれでも價値にしたら今ぢや餘つ程するでせう」

昔し島田は藤田東湖の僞筆に時代を着けるのだと云つて、白髪蒼顔萬死餘と書いた半切の唐紙を、臺所の竈の上に釣るしてゐた事があつた。彼の健三に呉れるといふ李鴻章も、何處の誰が書いたものか頗る疑はしかつた。島田から物を貰ふ氣の絶對になかつた健三は取り合はずにゐた。島田は漸く歸つた。

四十七

「何しに來たんでせう、あの人は」

目的なしに只來る筈がないといふ感じが細君には強くあつた。健三も丁度同じ感じに多少支配されてゐた。

「解らないね、何うも。一體魚と獸程違ふんだから」

「何がです」

「あゝ云ふ人と己なんとはさ」

細君は突然自分の家族と夫との關係を思ひ出した。兩者の間には自然の作つた溝があつて、御互を隔離してゐた。片意地な夫は決してそれを飛び越えて呉れなかつた。溝を拵へたものゝ方で、それを埋めるのが當然ぢやないかと云つた風の氣分で何時迄も押し通してゐた。里ではまた反對に、夫が自分の勝手で此溝を掘

り始めたのだから、彼の方で其處を平にしたら好からうと云ふ考へを有つてゐた。細君の同情は無論自分の家族の方に在つた。彼女はわが夫を世の中と調和する事の出來ない偏窟な學者だと解釋してゐた。同時に夫が里と調和しなくなつた原因の中に、自分が主な要素として這入つてゐる事も認めてゐた。

細君は默つて話を切上げようとした。然し島田の方にばかり氣を取られてゐた健三には其意味が通じなかつた。

「お前はさう思はないかね」

「そりや彼の人と貴夫となら魚と獸位違ふでせう」

「無論外の人と己と比較してゐやしない」

話はまた島田の方へ戻つて來た。細君は笑ひながら訊いた。

「李鴻章の掛物を何うとか云つてたのね」

「己に遣らうかつて云ふんだ」

「御止しなさいよ。そんな物を貰つてまた後から何んな無心を持ち掛けられるかも知れないわ。遣るつて云ふのは、大方口の先丈なんでせう。本當は買つて呉れつていふ氣なんですよ、屹度」

夫婦には李鴻章の掛物よりもまだ外に買ひたいものが澤山あつた。段々大きくなつて來る女の子に、相當の着物を着せて表へ出す事の出來ないのも、細君から云へば、夫の氣の付かない心配に違ひなかつた。二圓五十錢の月賦で、此間拵へた雨合羽の代を、月々洋服屋に拂つてゐる夫も、あまり長閑な心持になれよう筈がなかつた。

「復籍の事は何も云ひ出さなかつた樣ですね」

「うん何も云はない。丸で狐に抓まれたやうなものだ」

始めから此方の氣を引く爲にわざとそんな突飛な要求を持ち出したものか、又は眞面目な懸合として、それを比田が持ち込んだ後、比田からきつぱり斷られたので、始めて駄目だと覺つたものか、健三には丸で見當が付かなかつた。

「何方でせう」

「到底解らないよ、あゝいふ人の考へは」

島田は實際何方でも遣りかねない男であつた。

彼は三日程して又健三の玄關を開けた。其時健三は書齋に灯火を點けて机の前に坐つてゐた。丁度彼の頭に思想上のある問題が一筋の端緒を見せかけた所であつた。彼は一圖にそれを手近迄手繰り寄せようとして骨を折つた。彼の思索は突然截ち切られた。彼は苦い顔をして室の入口に手を突いた下女の方を顧た。

「何もさう度々來て、他の邪魔をしなくつても好ささうなものだ」

彼は腹の中で斯う呟いた。斷然面會を謝絶する勇氣を有たない彼は、下女を見たなり少時默つてゐた。

「御通し申しますか」

「うん」

彼は仕方なしに答へた。それから「奥さんは」と訊ねた。

「少し御氣分が惡いと仰しやつて先刻から伏せつてゐらつしやいます」

細君の寢るときは歇私的里の起つた時に限るやうに健三には思へてならなかつた。彼は漸く立ち上つた。

四十八

電氣燈のまだ戸毎に點されない頃だつたので、客間には例の通り暗い洋燈が點いてゐた。其洋燈は細長い竹の臺の上に油壺を嵌め込むやうに拵へたもので、鼓の胴の恰好に似た平たい底が疊へ据わるやうに出來てゐた。

健三が客間へ出た時、島田はそれを自分の手元に引き寄せて心を出したり引っ込ましたりしながら灯火の具合を眺めてゐた。彼は改まった挨拶もせずに、「少し油煙がたまる様ですね」と云った。

成程火屋が薄黒く燻ってゐた。丸心の切方が平に行かない所を、無暗に灯を高くすると、斯んな変調を来すのが此洋燈の特徴であった。

「換へさせませう」

家には同じ型のものが三つばかりあった。健三は下女を呼んで茶の間にあるのと取り換へさせようとした。然し島田は生返事をする限で、容易に煤で曇った火屋から眼を離さなかった。

「何うした加減だらう」

彼は独り言を云って、草花の模様を不透明に擦った丸い蓋の中を覗き込んだ。

健三の記憶にある彼は、斯んな事を能く気にするといふ点に於いて、頗る几帳面な男に相違なかった。彼は寧ろ潔癖であった。持って生れた倫理上の不潔癖と金銭上の不潔癖の償ひにでもなるやうに、座敷や縁側の塵を気にした。彼は尻をからげて、拭掃除をした。跣足で庭へ出て要らざる所迄掃いたり水を打ったりした。

物が壊れると彼は屹度自分で修復した。或は修復さうとした。それがために何の位な時間が要っても、又何んな労力が必要になって来ても、彼は決して厭はなかった。さういふ事が彼の性にある許りでなく、彼には手に握った一銭の銭貨の方が、時間や労力よりも遥に大切に見えたのである。

「なにそんなものは宅で出来る。金を出して頼むがものはない。損だ」

損をするといふ事が彼には何よりも恐ろしかった。さうして目に見えない損には幾何しても気が付かなかった。

「宅の人はあんまり正直過ぎるんで」

お藤さんは昔健三に向って、自分の夫を評するときに、斯んな言葉を使った。世の中をまだ知らない健三にも其真実でない事はよく解ってゐた。たゞ自分の手前、嘘と承知しながら、夫の品性を取り繕ふのだらうと善意に解釈した彼は、其時お藤さんに向って何とも云はなかった。併し今考へて見ると、彼女の批評にはもう少し穿った根柢があるらしく思へた。

「畢竟大きな損に気のつかない所が正直なんだらう」

健三はたゞ金銭上の慾を満たさうとして、其慾に伴はない程度の幼稚な頭脳を精一杯に働かせてゐる老人を寧ろ憐れに思った。さうして凹んだ眼を今擦り硝子の蓋の傍へ寄せて、研究でもする時のやうに、暗い灯を見詰めてゐる彼を気の毒な人として眺めた。

「彼はかうして老いた」

島田の一生を煎じ詰めたやうな一句を眼の前に味った健三は、自分は果して何うして老ゆるのだらうかと考へた。彼は神といふ言葉が嫌であった。然し其時の彼の心にはたしかに神といふ言葉が出た。さうして、若し其神が神の眼で自分の一生を通して見たならば、此強慾な老人の一生と大した変りはないかも知れないといふ気が強くした。

其時島田は洋燈の螺旋を急に廻したと見えて、細長い火屋の中が、赤い火で一杯になった。それに驚いた彼は、又螺旋を逆に廻し過ぎたらしく、今度はたゞでさへ暗い灯火を猶の事暗くした。

「何うも何処か調子が狂ってますね」

健三は手を敲いて下女に新しい洋燈を持って来さした。

四十九

其晩の島田は此前来た時と態度の上に於いて

何の異る所もなかつた。健三には何處迄も健三を獨立した人と認めるやうな言葉ばかり使つた。

然し彼はもう先達の掛物に就いては丸で忘れてゐるかの如くに見えた。李鴻章の李の字も口にしなかつた。復籍の事は猶更であつた。噫にさへ出す樣子を見せなかつた。

彼は成るべく唯の話をしようとした。然し二人に共通した興味のある問題は、何處を何う探しても落ちてゐる筈がなかつた。彼のいふ事の大部分は、健三に取つて全くの無意味から餘り遠く隔たつてゐるとも思へなかつた。

健三は退屈した。然し其退屈のうちには一種の注意が籠つてゐた。彼は此老人が或日或物を持つて、今より判明した姿で、屹度自分の前に現れてくるに違ないといふ豫覺に支配された。其或物がまた必ず自分に不愉快な若くは不利益な形を具へてゐるに違ないといふ推測にも支配された。

彼は退屈のうちに細いながら可なり鋭い緊張を感じた。その所爲か、島田の自分を見る眼が、さつき擦硝子の蓋を通して油煙に燻つた洋燈の灯を眺めてゐた時とは全く變つてゐた。

「隙があつたら飛び込まう」

落ち込んだ彼の眼は鈍い癖に明かに此意味を物語つてゐた。自然健三はそれに抵抗して身構へなければならなくなつた。然し時によると、其身構へをさらりと投げ出して、相手の眼に、落付を與へて遣りたくなるやうな場合もあつた。

其時突然奥の間で細君の唸るやうな聲がした。健三の神經は此聲に對して普通の人以上の敏感を有つてゐた。彼はすぐ耳を峙てた。

「誰か病氣ですか」と島田が訊いた。

「えゝ妻が少し」

「左右ですか、それはいけませんね。何處が惡いんです」

島田はまだ細君の顏を見た事がなかつた。何時何處から嫁に來た女かさへ知らないらしかつた。從つて彼の言葉にはたゞ挨拶がある丈であつた。健三も此人から自分の妻に對する同情を求めようとは思つてゐなかつた。

「近頃は時候が惡いから、能く氣を付けないといけませんね」

子供は疾うに寢付いた後なので奥は寂としてゐた。下女は一番懸け離れた臺所の傍の三疊に寢てゐるらしかつた。斯んな時に細君をたつた一人で置くのが健三には何より苦しかつた。彼は手を叩いて下女を呼んだ。

「一寸奥へ行つて奥さんの傍に坐つてゐて呉れ」

「へえゝ」

下女は何の爲だか解らないと云つた樣子をして間の襖を締めた。健三は又島田の方へ向き直つた。けれども彼の注意は寧ろ老人を離れてゐた。腹の中で早く歸つて呉れゝば好いと思ふので、其腹が言葉にも態度にもあり〳〵と現れた。

夫でも島田は容易に立たなかつた。話の接穗がなくなつて、手持無沙汰で仕方なくなつた時、始めて座蒲團から滑り落ちた。

「何うも御邪魔をしました。御忙しい所を。何れまた其内」

細君の病氣に就いては何事も云はなかつた彼は、沓脱へ下りてから又健三の方を振り向いた。

「夜分なら大抵御暇ですか」

健三は生返事をしたなり立つてゐた。

「實は少し御話したい事があるんですが」

健三は何の御用ですかとも聞き返さなかつた。老人は健三の手に持つた暗い灯影から、鋭い眼を光らして又彼を見上げた。其眼には矢つ張り何處かに隙があつたら彼の懷に滑り込ま

うといふ人の悪い顔な色が動いてゐた。
「ぢや御免」
最後に格子を開けて外へ出た島田は斯う云つて、とう／＼暗がりに消えた。健三の門には軒燈さへ點いてゐなかつた。

五十

健三はすぐ奥へ来て細君の枕元に立つた。
「何うかしたのか」
細君は眼を開けて天井を見た。健三は蒲團の横からまた其眼を見下した。
襖の影に置かれた洋燈の灯は客間のよりも暗かつた。細君の眸が何處に向つて注がれてゐるのか能く分らない位暗かつた。
「何うかしたのか」
健三は同じ問をまた繰返さなければならなかつた。それでも細君は答へなかつた。
彼は結婚以來斯ういふ現象に何度となく遭遇した。然し彼の神經はそれに慣らされるには餘りに鋭敏過ぎた。遭遇するたびに、同じ程度の不安を感ずるのが常であつた。彼はすぐ枕元に腰を卸した。
「もう彼方へ行つても好い。此處には己が居るから」
ぼんやり蒲團の裾に坐つて、退屈さうに健三の様子を眺めてゐた下女は無言の儘立ち上つた。さうして「御休みなさい」と敷居の所へ手を突いて御辭儀をしたなり襖を立て切つた。後には赤い筋を引いた光るものが疊の上に落ちてゐた。彼は眉を顰めながら下女の振り落して行つた針を取り上げた。何時もなら婢を呼び返して小言を云つて渡す所を、今の彼は黙つて手に持つたまゝ、しばらく考へてゐた。彼は仕舞に其針をぷつりと襖に立てた。さうして又細君の方へ向き直つた。
細君の眼はもう天井を離れてゐた。然し判然何處を見てゐるとも思へなかつた。黒い大きな眸子には生きた光があつた。けれども生きた働が欠けてゐた。彼女は魂と直接に繋がつてゐないやうな眼を一杯に開けて、漫然と瞳孔の向いた見當を眺めてゐた。
「おい」
健三は細君の肩を搖つた。細君は返事をせずに只首丈をそろりと動かして心持健三の方に顔を向けた。けれども其處に夫の存在を認める何等の輝きもなかつた。
「おい、己だよ。分るかい」
斯ういふ場合に彼の何時でも用ひる陳腐で簡略でしかもぞんざいな此言葉のうちには、他に知れないで自分にばかり解つてゐる憐憫と苦痛と悲哀があつた。それから跪いて天に禱る時の誠と願もあつた。
「何うぞ口を利いて呉れ。後生だから己の顔を見て呉れ」
彼は心のうちで斯う云つて細君に頼むのである。然し其痛切な頼みを決して口へ出して云はうとはしなかつた。感傷的な氣分に支配され易い癖に、彼は決して外表的になれない男であつた。
細君の眼は突然平生の我に歸つた。さうして夢から覺めた人のやうに健三を見た。
「貴夫？」
彼女の聲は細くかつ長かつた。彼女は微笑しかけた。然しまだ緊張してゐる健三の顔を認めた時、彼女は其笑ひを止めた。
「あの人はもう歸つたの」
「うん」
二人はしばらく黙つてゐた。細君は又頭を曲げて、傍に寝てゐる子供の方を見た。
「能く寝てゐるのね」
子供は一つ床の中に小さな枕を並べてすやすや寝てゐた。

健三は細君の額の上に自分の右の手を載せた。

「水で頭でも冷して遣らうか」

「いゝえ、もう好ござんす」

「大丈夫かい」

「えゝ」

「本當に大丈夫かい」

「えゝ。貴夫ももう御休みなさい」

「己はまだ寐る譯に行かないよ」

健三はもう一遍書齋へ入つて靜な夜を一人更かさなければならなかつた。

五十一

彼の眼が冴えてゐる割に彼の頭は澄み渡らなかつた。彼は思索の綱を中斷された人のやうに、考察の進路を遮る霧の中で苦しんだ。

彼は明日の朝多くの人より一段高い所に立たなければならない憐れな自分の姿を想ひ見た。其憐れな自分の萎た熱心に見詰めたり、または不得意な自分の云ふ事を眞面目に筆記したりする青年に對して濟まない氣がした。自分の虚榮心や自尊心を傷けるのも、それらを超越する事の出來ない彼には、大きな苦痛であつた。

「明日の講義もまた纏まらないのかしら」

斯う思ふと彼は自分の努力が急に厭になつた。愉快に考への筋道が運んだ時、折々何者にか煽動されて起る、「己の頭は惡くない」といふ自信も己惚も忽ち消えてしまつた、同時に此頭の働きを攪き亂す自分の周圍に就いての不平も常時よりは高まつて來た。

彼は仕舞に投げるやうに洋筆を放り出した。

「もう已めた。何うでも構はない」

時計はもう一時過ぎてゐた。洋燈を消して暗い間を縁側傳ひに廊下へ出ると、突當りの奥の間の障子二枚丈が灯に映つて明るかつた。健三は其一枚を開けて内に入つた。

子供は犬ころのやうに塊つて寐てゐた。細君も靜かに眼を閉ぢて仰向に眠つてゐた。

音のしないやうに氣を付けて其傍に坐つた彼は、心持頸を延ばして、細君の顔を上から覗き込んだ。それからそつと手を彼女の寐顔の上に翳した。彼女は口を閉ぢてゐた。彼の掌には細君の鼻の穴から出る生暖かい呼息が微かに感ぜられた。其呼息は規則正しかつた。また穩かだつた。

彼は漸く出した手を引いた。するともう一度細君の名を呼んで見なければまだ安心が出來ないといふ氣が彼の胸を衝いて起つた。けれども彼は直に其衝動に打勝つた。次に彼はまた細君の肩へ手を懸けて、再び彼女を搖り起さうとしたが、それも已めた。

「大丈夫だらう」

彼は漸く普通の人の斷案に歸着する事が出來た。然し細君の病氣に對して神經の鋭敏になつて居る彼には、それが何人も斯ういふ場合に取らなければならない尋常の手續きのやうに思はれたのである。

細君の病氣には熟睡が一番の藥であつた。長時間彼女の傍に坐つて、心配さうに其顔を見詰めて居る健三に、何よりも有難い其眠りが、靜かに彼女の瞼の上に落ちた時、彼は天から降る甘露をまのあたり見るやうな氣が常にした。然し其眠りがまた餘り長く續き過ぎると、今度は自分の視線から隱された彼女の眼が却つて不安の種になつた。つひに睫毛の鎖してゐる奥を見るために、彼は正體なく寢入つた細君を、態々搖り起して見る事が折々あつた。細君がもつと寢かして置いて吳れゝば好いのにといふ訴へを疲れた顔色に現はして重い瞼を開くと、彼は其時始めて後悔した。然し彼の神經は斯んな氣の毒な眞似をして迄も、彼女の實在を確めな

ければ承知しなかつたのである。

やがて彼は寝衣を着換へて、自分の床に入つた。さうして濁りながら動いてゐるやうな彼の頭を、静かな夜の支配に任せた。夜は其濁りを清めて呉れるには餘りに暗過ぎた。然し騒がしい其動きを止めるには十分静かであつた。

翌朝彼は自分の名を呼ぶ細君の聲で眼を覺ました。

「貴夫もう時間ですよ」

まだ床を離れない細君は、手を延ばして彼の枕元から取つた袂時計を眺めてゐた。下女が俎板の上で何かを刻む音が臺所の方で聞こえた。

「婢はもう起きてるのか」

「えゝ。先刻起しに行つたんです—」

細君は下女を起して置いて又床の中に這入つたのである。健三はすぐ起き上つた。細君も同時に立つた。

昨夜の事は二人共丸で忘れたやうに何とも云はなかつた。

五十二

二人は自分達の此態度に對して何の注意も省察も拂はなかつた。二人は二人に特有な因果關係を有つてゐる事を、冥々の裡に自覺してゐた。さうして其因果關係が一切の他人には全く通じないのだといふ事も能く呑み込んでゐた。だから事状を知らない第三者の眼に、自分達が或は變に映りはしまいかといふ疑念さへ起さなかつた。

健三は黙つて外へ出て、例の通り仕事をした。然し其仕事の最中に彼は突然細君の病氣を想像する事があつた。彼の眼の前に、夢を見てゐるやうな細君の黒い眼が不意に浮んだ。すると彼はすぐ自分の立つてゐる高い壇から降りて宅へ歸らなければならないやうな氣がした。或は今にも宅から迎が來るやうな心持になつた。彼は廣い室の片隅に居て眞ん向うの突當りにある遠い戸口を眺めた。彼は仰向いて兜の鉢金を伏せたやうな高い丸天井を眺めた。假漆で塗り上げた角材を幾段にも組み上げて、高いものを一層高く見えるやうに工夫した其天井は、小さい彼の心を包むに足りなかつた。最後に彼の眼は自分の下に黒い頭を並べて、神妙に彼の云ふ事を聴いてゐる多くの青年の上に落ちた。さうして復卒然として現實に歸るべく彼等から餘儀なくされた。

是程細君の病氣に惱まされてゐた健三は、比較的島田のために祟られる恐れを抱かなかつた。彼は此老人を因業で強欲な男と思つてゐた。然し一方では又それ等の性質を十分發揮する能力が無いものとして寧ろ見縊つてもゐた。たゞ要らぬ會見に惜しい時間を潰されるのが、健三には或種類の人の受ける程度より以上の苦痛になつた。

「何を云つて來る氣かしら、此次は—」

襲はれる事を豫期して、暗にそれを苦にするやうな健三の口振が、細君の言葉を促した。

「何うせ分つてゐるぢやありませんか。そんな事を氣になさるより早く絶交した方が餘つ程得ですわ」

健三は心の裡で細君のいふ事を肯がつた。然し口では却つて反對な返事をした。

「それ程氣にしちや居ないさ、あんな者。もともと恐ろしい事なんかないんだから—」

「恐ろしいつて誰も云やしませんわ。けれども面倒臭いにや違ひないでせう、いくら貴夫だつて—」

「世の中にはたゞ面倒臭い位な單純な理由で已める事の出來ないものが幾何でもあるさ」

多少片意地の分子を含んでゐる斯んな會話を細君と取り換はせた健三は、その次島田の來た時、何時よりは忙しい頭を抱へてゐるにも拘はず

らず、つひに面會を拒絶する譯に行かなかつた。

島田のちと話したい事があると云つたのは、細君の推察通り矢っ張り金の問題であつた。隙があつたら飛び込まうとして、此間から覗ひを付けてゐた彼は、何時迄待つても際限がないとでも思つたものか、機會のあるなしに頓着なく、つひに健三に肉薄し始めた。

「何うも少し困るので。外に何處と云つて頼みに行く所もない私なんだから、是非一つ」

老人の言葉の何處かには、義務として承知して貰はなくつちや困ると云つた風の横着さが潜んでゐた。然しそれは健三の神經を自尊心の一角に於いて傷め付ける程強くも現れてゐなかつた。

健三は立つて書齋の机の上から自分の紙入を持つて來た。一家の會計を司どつてゐない彼の財嚢は無論輕かつた。空の儘硯箱の傍に幾日も横たはつてゐる事さへ珍らしくはなかつた。彼は其中から手に觸れる丈の紙幣を攫み出して島田の前に置いた。島田は變な顔をした。

「何らせ貴方の請求通り上げる譯には行かないんです。それでも有つ丈悉皆上げたんですよ」

健三は紙入の中を開けて島田に見せた。さうして彼の歸つたあとで、空の財布を客間へ放り出した儘また書齋へ入つた。細君には金を遣つた事を一口も云はなかつた。

五十三

翌日例刻に歸つた健三は、机の前に坐つて、大事らしく何時もの所に置かれた昨日の紙入に眼を付けた。革で拵へた大型の此二つ折は彼の持物として寧ろ立派過ぎる位上等な品であつた。彼はそれを倫敦の最も賑やかな町で買つたのである。

外國から持つて歸つた記念が、何の興味も惹かなくなりつゝある今の彼には、此紙入も無用の長物と見える外はなかつた。細君が何故丁寧にそれを元の場所へ置いて呉れたのだらうかとさへ疑つた彼は、皮肉な一瞥を空つぽうの入物に與へたぎり、手も觸れずに幾日かを過ごした。

其内何かで金の要る日が來た。健三は机の上の紙入を取り上げて細君の鼻の先へ出した。

「おい少し金を入れて呉れ」

細君は右の手で物指を持つた儘夫の顔を下から見上げた

「這入つてる筈ですよ」

彼女は此間島田の歸つたあとで何事も夫から聽かうとしなかつた。それで老人に金を奪られたことも全く夫婦間の話題に上つてゐなかつた。健三は細君が事狀を知らないで斯ういふのかと思つた。

「あれはもう遣つちやつたんだ。紙入は疾うから空つぽうになつてゐるんだよ」

細君は依然として自分の誤解に氣が付かないらしかつた。物指を疊の上へ投げ出して手を夫の方へ差し延べた。

「一寸拜見」

健三は馬鹿々々しいと云ふ風をして、それを細君に渡した。細君は中を檢めた。中からは四五枚の紙幣が出た。

「そら矢っ張り入つてるぢやありませんか」

彼女は手垢の付いた皺だらけの紙幣を、指の間に挾んで、一寸胸のあたり迄上げて見せた。彼女の擧動は自分の勝利に誇るものゝ如く微な笑に伴つた。

「何時入れたのか」

「あの人の歸つた後でです」

健三は細君の心遣を嬉しく思ふよりも寧ろ珍らしく眺めた。彼の理解してゐる細君は斯んな氣の利いた事を滅多にする女ではなかつた

のである。

「己が内證で島田に金を奪られたのを氣の毒とでも思つたものかしら」

彼は斯う考へた。然し口へ出して其理由を彼女に訊き糺して見る事はしなかつた。夫と同じ態度をつひに失はずにゐた彼女も、自ら進んで己を説明する面倒を敢てしなかつた。彼女の塡補した金は斯くして默つて受取られ、又默つて消費されてしまつた。

其内細君の御腹が段々大きくなつて來た。起居に重苦しさうな氣息をし始めた。氣分も能く變化した。

「私今度はことによると助からないかも知れませんよ」

彼女は時々何に感じてか斯う云つて涙を流した。大抵は取り合はずにゐる健三も、時として相手にさせられなければ濟まなかつた。

「何故だい」

「何故だかさう思はれて仕方がないんですもの」

質問も説明も是以上には上る事の出來なかつた言葉のうちに、ぼんやりした或ものが常に潜んでゐた。其或ものは單純な言葉を傳はつて、言葉の屆かない遠い所へ消えて行つた。鈴の音が鼓膜の及ばない幽かな世界に潜り込むやうに。

彼女は悪阻で死んだ健三の兄の細君の事を思ひ出した。さうして自分が長女を生む時に同じ病で苦しんだ昔と照し合せて見たりした。もう二三日食物が通らなければ滋養浣腸をする筈だつた際どい時を、よく通り拔けたものだなどと考へると、生きてゐる方が却つて偶然の樣な氣もした。

「女は詰らないものね」

「それが女の義務なんだから仕方がない」

健三の返事は世間並であつた。けれども彼自身の頭で批判すると、全くの出鱈目に過ぎなかつた。彼は腹の中で苦笑した。

五十四

健三の氣分にも上り下りがあつた。出任せにもせよ細君の心を休めるやうな事ばかり云つてはゐなかつた。時によると、不快さうに寢てゐる彼女の體たらくが癪に障つて堪らなくなつた。枕元に突つ立つた儘、わざと慳貪に要らざる用を命じて見たりした。

細君も動かなかつた。大きな腹を疊へ着けたなり打つとも蹴るとも勝手にしろといふ態度をとつた。平生からあまり口數を利かない彼女は益沈默を守つて、それが夫の氣を焦立たせるのを目の前に見ながら澄ましてゐた。

「詰りしぶといのだ」

健三の胸には斯んな言葉が細君の凡ての特色ででもあるかのやうに深く刻み付けられた。彼は外の事を丸で忘れて仕舞はなければならなかつた。しぶといといふ觀念丈があらゆる注意の焦點になつて來た。彼は餘所を眞闇にして置いて、出來る丈強烈な憎惡の光を此四字の上に投げ懸けた。細君は又魚か蛇のやうに默つて其憎惡を受取つた。從つて人目には、細君が何時でも品格のある女として映る代りに、夫は何うしても氣違染みた癇癪持として評價されなければならなかつた。

「貴方がさう邪慳になさると、また歇私的里を起しますよ」

細君の眼からは時々斯んな光が出た。何ういふものか健三は非道くその光を怖れた。同時に劇しくそれを惡んだ。我慢な彼は内心に無事を祈りながら、外部では強ひて勝手にしろといふ風を裝つた。其強硬な態度の何處かに何時でも假裝に近い弱點があるのを細君に能く承知してゐた。

「どうせ御産で死んでしまふんだから構やしない」

　彼女は健三に聞えよがしに呟いた。健三は死んぢまへと云ひたくなつた。

　或晩彼は不圖眼を覺まして、大きな眼を開いて天井を見詰めてゐる細君を見た。彼女の手には彼が西洋から持つて歸つた髪剃があつた。彼女が黒檀の鞘に折り込まれた其刃を眞直に立てずに、たゞ黒い柄丈を握つてゐたので、寒い光は彼の視覺を襲はずに濟んだ。それでも彼はぎよつとした。半身を床の上に起して、いきなり細君の手から髪剃を捥ぎ取つた。

「馬鹿な眞似をするな」

　斯ういふと同時に、彼は髪剃を投げた。髪剃は障子に嵌め込んだ硝子に中つて其一部分を摧いて向う側の縁に落ちた。細君は茫然として夢でも見てゐる人のやうに一口も物を云はなかつた。

　彼女は本當に情に逼つて刃物三昧をする氣なのだらうか、又は病氣の發作に自己の意志を捧げべく餘儀なくされた結果、無我夢中で切ものを弄ぶのだらうか、或は單に夫に打ち勝たうとする女の策略から斯うして人を驚かすのだらうか、驚かすにしても其眞意は果して何處にあるのだらうか。自分に對する夫を平和で親切な人に立ち返らせる積なのだらうか、又はたゞ淺薄な征服慾に驅られてゐるのだらうか、――健三は床の中で一つの出來事を五條にも六條にも解釋した。さうして時々眠れない眼をそつと細君の方に向けて其動靜をうかゞつた。寢てゐるとも起きてゐるとも付かない細君は、丸で動かなかつた。恰も死を衒ふ人のやうであつた。健三は又枕の上で自分の問題の解決に立ち歸つた。

　其解決は彼の實生活を支配する上に於いて、學校の講義よりも遙に大切であつた。彼の細君に對する基調は、全く其解決一つでちやんと定められなければならなかつた。今よりずつと單純であつた昔、彼は一圖に細君の不可思議な擧動を、病の爲とのみ信じ切つてゐた。其時代には發作の起るたびに、神の前に己を懺悔する人の誠を以つて、彼は細君の膝下に跪いた。彼はそれを夫として最も親切で又最も高尚な處置と信じてゐた。

「今だつて其原因が判然分りさへすれば」

　彼には斯ういふ慈愛の心が充ち滿ちてゐた。けれども不幸にして其原因は昔のやうに單純には見えなかつた。彼はいくらでも考へなければならなかつた。到底解決の付かない問題に疲れて、とろ／＼と眠ると又すぐ起きて講義をしに出掛けなければならなかつた。彼は昨夕の事に就いて、つひに一言も細君に口を利く機會を得なかつた。細君も日の出と共にそれを忘れてしまつたやうな顏をしてゐた。

五十五

　斯ういふ不愉快な場面の後には大抵仲裁者としての自然が二人の間に這入つて來た。二人は何時となく普通夫婦の利くやうな口を利き出した。

　けれども或時の自然は全くの傍觀者に過ぎなかつた。夫婦は何處迄行つても背中合の儘で暮した。二人の關係が極端な緊張の度合に達すると、健三はいつも細君に向つて生家へ歸れと云つた。細君の方ではまた歸らうが歸るまいが此方の勝手だといふ顏をした。その態度が憎らしいので、健三は同じ言葉を何遍でも繰返して憚らなかつた。

「ぢや當分子供を伴れて宅へ行つてゐませう」

　細君は斯う云つて一旦里へ歸つた事もあつた。健三は彼等の食料を毎月送つて遣るといふ條件の下に、また昔のやうな書生生活に立

ち歸れた自分を喜んだ。彼は比較的廣い屋敷に下女とたつた二人ぎりになつた此突然の變化を見て、少しも淋しいとは思はなかつた。

あゝ晴々して好い心持だ

彼は八疊の座敷の眞中に小さな餉臺を据ゑて其上で朝から夕方迄ノートを書いた。丁度極暑の頃だつたので、身體の強くない彼は、よく仰向になつてばたりと疊の上に倒れた。何時替へたとも知れない時代の着いた其疊には、彼の背中を蒸すやうな黄色い古びが心迄透つてゐた。

彼のノートもまた暑苦しい程細かな字で書き下された。蠅の頭といふより外に形容のしやうのない其原稿を、成る可くだけ餘計拵へるのが、其時の彼に取つては何よりの愉快であつた。そして苦痛であつた。又義務であつた。

巣鴨の植木屋の娘とかいふ下女は、彼のために二三の盆栽を宅から持つて來て呉れた。それを茶の間の縁に置いて、彼が飯を食ふ時給仕をしながら色々な話をした。彼は彼女の親切を喜んだ。けれども彼女の盆栽を輕蔑した。それは何處の縁日へ行つても、二三十錢出せば、鉢ごと買へる安價な代物だつたのである。

彼は細君の事をかつて考へずにノートばかり作つてゐた。彼女の里へ顔を出さうなどゝいふ氣は丸で起らなかつた。彼女の病氣に對する懸念も悉く消えてしまつた。

「病氣になつても父母が付いてゐるぢやないか。もし惡ければ何とか云つて來るだらう」

彼の心は二人一所にゐる時よりも遙に平穩であつた。

細君の關係者に會はないのみならず、彼はまた自分の兄や姉にも會ひに行かなかつた。其代り向うでも來なかつた。彼はたつた一人で、日中の勉強につゞく涼しい夜を散歩に費やした。さうして繼布のあたつた青い蚊帳の中に入つて寢た。

一箇月あまりすると細君が突然遣つて來た。其時健三は日のかぎつた夕暮の空の下に、廣くもない庭先を逍遙してゐた。彼の歩みが書齋の縁側の前へ來た時、細君は半分朽ち懸けた枝折戸の影から急に姿を現はした。

「貴方故のやうになつて下さらなくつて」

健三は細君の穿いてゐる下駄の表が變にささくれて、其後の方が如何にも見苦しく擦り減らされてゐるのに氣が付いた。彼は憐れになつた。紙入の中から三枚の一圓紙幣を出して細君の手に握らせた。

「見つともないから是で下駄でも買つたら好いだらう」

細君が歸つてから幾日目か經つた後彼女の母は始めて健三を訪れた。用事は細君が健三に頼んだのと大同小異で、もう一返彼等を引取つて呉れといふ主意を疊の上で布衍したに過ぎなかつた。既に本人に歸りたい意志があるのを拒絶するのは、健三から見ると無情な擧動であつた。彼は一も二もなく承知した。細君は又子供を連れて駒込へ歸つて來た。然し彼女の態度は里へ行く前と毫も違つてゐなかつた。健三は心のうちで彼女の母に騙されたやうな氣がした。

斯うした夏中の出來事を自分丈で繰り返して見るたびに、彼は不愉快になつた。是が何時迄續くのだらうかと考へたりした。

五十六

同時に島田はちよい／＼健三の所へ顔を出す事を忘れなかつた。利益の方面で一度手掛りを得た以上、放したらそれつ切だといふ懸念が猶更彼を執濃くした。健三は時々書齋に入つて、懷の紙入を老人の前に持ち出さなければならなかつた。

「好い紙入ですね。へえゝ。外國のものは矢

つ張り何處か違ひますね」
　島田は大きな二つ折を手に取つて、左も感服したらしく、裏表を打返して眺めたりした。
「失禮ながら是で何の位します。彼方では」
「たしか十志だつたと思ひます。日本の金にすると、まあ五圓位なものでせう」
「五圓？――五圓は隨分好い値ですね。淺草の黑船町に古くから私の知つてる袋物屋があるが、彼處ならもつとずつと安く拵へて呉れますよ。こんだ要る時にや、私が賴んで上げませう」
　健三の紙入は何時も充實してゐなかつた。全く空虛の時もあつた。左ういふ場合には、仕方がないので何時迄經つても、立ち上がらなかつた。島田も何かに事寄せて尻を長くした。
「小遣を遣らないうちは歸らない。厭な奴だ」
　健三は腹の內で憤つた。然しいくら迷惑を感じても細君の方から特別に金を取つて老人に渡す事はしなかつた。細君も其位の事ならと云つた風をして別に苦情を鳴らさなかつた。
　左う斯うしてゐるうちに、島田の態度が段々積極的になつて來た。二十三十と纏まつた金を、平氣に向うから請求し始めた。
「何うか一つ。私も此年になつて倚る子はないし、依怙にするのは貴方一人なんだから」
　彼は自分の言葉遣ひの横着さ加減にさへ氣が付いてゐなかつた。それでも健三がむつとして默つてゐると、凹んだ鈍い眼を狡猾らしく動かして、じろ〳〵彼の樣子を眺める事を忘れなかつた。
「是丈の生活をしてゐて、十や二十の金が出來ない筈はない」
　彼は斯んな事迄口へ出して云つた。彼が歸ると、健三は厭な顏をして細君に向つた。
「ありや成し崩しに己を侵蝕する氣なんだね。始め一度に攻め落さうとして斷られたもんだから、今度は遠卷にしてじり〳〵寄つて來ようつてんだ。實に厭な奴だ」
　健三は腹が立ちさへすれば、よく實にとか一番とか大とかいふ最大級を使つて鬱憤の一端を洩らしたがる男であつた。斯んな點になると細君の方はしぶとい代りに大分落付いてゐた。
「貴夫が引つ掛かるから惡いのよ。だから初めから用心して寄せ付けないやうになされば好いのに」
　健三は其位の事なら最初から心得てゐると云はぬばかりの樣子をして、むつとした頰と脣とに見せた。
「絶交しようと思へば何時だつて出來るさ」
「然し今迄付合つた丈が損になるぢやありませんか」
「そりや何の關係もない御前から見れば左うさ。然し己は御前とは違ふんだ」
　細君には健三の意味が能く通じなかつた。
「何うせ貴夫の眼から見たら、私なんぞは馬鹿でせうよ」
　健三は彼女の誤解を正してやるのさへ面倒になつた。
　二人の間に感情の行違ひでもある時は是丈の會話すら交換されなかつた。彼は島田の後影を見送つたまゝ默つてすぐ書齋へ入つた。そこで書物も讀まず筆も執らずたゞ凝と坐つてゐた。細君の方でも、家庭と切り離されたやうな此孤獨な人に何時迄も構ふ氣色を見せなかつた。夫が自分の勝手で座敷牢へ入つてゐるのだから仕方がない位に考へて、丸で取り合はずにゐた。

五十七

　健三の心は紙屑を丸めた樣にくしや〳〵した。時によると癇癪の電流を何かの機會に應

じて外へ洩らなさければ苦しくつて居堪れなくなつた。彼は子供が母に強請つて買つて貰つた草花の鉢などを、無意味に縁側から下へ蹴飛ばして見たりした。赤ちやけた素焼の鉢が彼の思ひ通りにがら〳〵と破れるのさへ彼には多少の滿足になつた。けれども殘酷たらしく摧かれた其花と莖の、憐れな姿を見るや否や、彼はすぐ又一種の果敢ない氣分に打ち勝たれた。何も知らない我子の、嬉しがつてゐる美しい慰みを、無慈悲に破壞したのは、彼等の父であるといふ自覺が、猶更彼を悲しくした。彼は半自分の行爲を悔いた。然し其子供の前にわが非を自白する事は敢てし得なかつた。

「己の責任ぢやない。畢竟こんな氣違じみた眞似を己にさせるものは誰だ。其奴が惡いんだ」

彼の腹の底には何時でも斯ういふ辯解が潛んでゐた。

平靜な會話は波だつた彼の氣分を沈めるに必要であつた。然し人を避ける彼に、その會話の屆きよう筈がなかつた。彼は一人居て一人自分の熱で熱るやうな心持がした。常でさへ有難くない保險會社の勸誘員などの名刺を見ると、大きな聲をして罪もない取次の下女を叱つた。其の聲は玄關に立つてゐる勸誘員の耳にも明かに響いた。彼はあとで自分の態度を恥ぢた。少くとも好意を以て一般の人類に接する事の出來ない己を怒つた。同時に子供の草花の鉢を蹴飛ばした場合と同じやうな言譯を、堂々と心の裡で讀み上げた。

「己が惡いのぢやない。己の惡くない事は、假令彼の男に解つてゐなくつても、己には能く解つてゐる」

無信心な彼は何うしても「神には能く解つてゐる」と云ふ事が出來なかつた。もし左右いひ得たならばどんなに仕合せだらうといふ氣さへ起らなかつた。彼の道德は何時でも自己に始つた。さうして自己に終るぎりであつた。

彼は時々金の事を考へた。何故物質的の富を目標として今日迄働いて來なかつたのだらうと疑ふ日もあつた。

「己だつて、專門に其方ばかり遣りや――」

彼の心には斯んな己惚もあつた。

彼はけち臭い自分の生活狀態を馬鹿らしく感じた。自分より貧乏な親類の、自分より切り詰めた暮し向に惱んでゐるのを氣の毒に思つた。極めて低級な欲望で、朝から晩迄齷齪してゐるやうな島田をさへ憐れに眺めた。

「みんな金が欲しいのだ。さうして金より外には何も欲しくないのだ」

斯う考へて見ると、自分が今迄何をして來たのか解らなくなつた。

彼は元來儲ける事の下手な男であつた。儲けられても其方に使ふ時間を惜しがる男であつた。卒業したてに、悉く他の口を斷つて、たゞ一つの學校から四十圓貰つて、それで滿足してゐた。彼はその四十圓の半分を阿爺に取られた。殘る二十圓で、古い寺の座敷を借りて、芋や油揚ばかり食つてゐた。然し彼は其間に遂に何事も仕出かさなかつた。

其時分の彼と今の彼とは色々な點に於いて大分變つてゐた。けれども經濟に餘裕のないのと、遂に何事も仕出かさないのとは、何處迄行つても變りがなささうに見えた。

彼は金持になるか、偉くなるか、二つのうち何方かに中途半端な自分を片付けたくなつた。然し今から金持になるのは迂闊な彼に取つてもう遲かつた。偉くならうとすれば又色々な塵勞が邪魔をした。其塵勞の種をよく〳〵調べて見ると、矢つ張り金のないのが大原因になつてゐた。何うして好いか解らない彼はしきりに焦れた。金の力で支配出來ない眞に偉大なもの

が彼の眼に這入つて來るにはまだ大分間があつた。

五十八

健三は外國から歸つて來た時、既に金の必要を感じた。久し振にわが生れ故郷の東京に新しい世帶を持つ事になつた彼の懷中には一片の銀貨さへなかつた。

彼は日本を立つ時、其妻子を細君の父に託した。父は自分の邸内にある小さな家を空けて彼等の住居に充てた。細君の祖父母が亡くなる迄居た其家は狹いながら左程見苦しくもなかつた。張交の襖には南湖の畫だの鵬齋の書だの、すべて亡くなつた人の趣味を偲ばせる記念と見るべきものさへ故の通り貼り付けてあつた。

父は官吏であつた。大して派手な暮しの出來る身分ではなかつたけれども、留守中手元に預かつた自分の娘や娘の子に、苦しい思ひをさせる程窮してもゐなかつた。其上健三の細君へは月々若干かの手當が公から下りた。健三は安心してわが家族を後に遺した。

彼が外國にゐるうち、内閣が變つた。其時細君の父は比較的安全な閑職からまた引張出されて劇しく活動しなければならない或位地に就いた。不幸にして其新しい内閣はすぐ倒れた。父は崩壞の渦の中に捲き込まれなければならなかつた。

遠い所で此變化を聽いた健三は、同情に充ちた眼を故郷の空に向けた。けれども細君の父の經濟狀態に關しては別に顧慮する必要のないものとして、殆ど心を惱ませなかつた。

迂闊な彼は歸つてからも其處に注意を拂はなかつた。また氣も付かなかつた。彼は細君が月々貰ふ二十圓丈でも子供二人に下女を使つて十分遣つて行ける位に考へてゐた。

「何しろ家賃が出ないんだから」

斯んな呑氣な想像が、實際を見た彼の眼を驚愕で丸くさせた。細君は夫の留守中に自分の不斷着をことごとく着切つてしまつた。仕方がないので、仕舞には健三の置いて行つた地味な男物を縫ひ直して身に纏つた。同時に蒲團からは綿が出た。夜具は裂けた。それでも傍に見てゐる父は何うして遣る譯にも行かなかつた。彼は自分の位地を失つた後、相場に手を出して、多くもない貯蓄を悉く亡くして仕舞つたのである。

首の廻らない程高い襟を掛けて外國から歸つて來た健三は、此慘憺な境遇に置かれたわが妻子を默つて眺めなければならなかつた。ハイカラな彼はアイロニーの爲めに手非道く打ち据ゑられた。彼の脣は苦笑する勇氣さへ有たなかつた。

其内彼の荷物が着いた。細君に指輪一つ買つて來なかつた彼の荷物は、書籍丈であつた。狹苦しい隱居所のなかで、彼は其箱の蓋さへ開ける事の出來ないのを馬鹿らしく思つた。彼は新しい家を搜し始めた。同時に金の工面もしなければならなかつた。

彼は唯一の手段として、今迄繼續して來た自分の職を辭した。彼は其行爲に伴つて起る必然な結果として、一時賜金を受け取る事が出來た。一年勤めれば役を已めた時に月給の半額を呉れるといふ規定に從つて彼の手に入つた其金額は、無論大したものではなかつた。けれども彼はそれで漸と日常生活に必要な家具家財を調へた。

彼は僅ばかりの金を懷にして、或る舊い友達と一所に方々の道具屋などを見て歩いた。其友達がまた品物の如何に拘らず無暗に價切り倒す癖を有つてゐるので、彼はたゞ歩くために少からぬ時間を費やさゝれた。茶盆、煙草盆、火鉢、丼鉢、眼に入るものは幾何でもあつた

が、買へるのは滅多に出て來なかつた。是又に負けて置けと命令するやうに云つて、もし主人が其通りにしないと、友達は健三を店先に殘したまゝ、さつさと先へ歩いて行つた。健三も仕方なしに後を追驅けなければならなかつた。たまに愚圖々々してゐると、彼は大きな聲を出して遠くから健三を呼んだ。彼は親切な男であつた。同時に自分の物を買ふのか他の物を買ふのか、其區別を辨へてゐないやうに猛烈な男であつた。

五十九

健三は又日常使用する家具の外に、本棚だの机だのを新調しなければならなかつた。彼は洋風の指物を渡世にする男の店先に立つて、しきりに算盤を彈く主人と談判した。

彼の誂へた本棚には硝子戸も後部も着いてゐなかつた。塵埃の積る位は懷中に餘裕のない彼の意とする所ではなかつた。木がよく枯れてゐないので、重い洋書を載せると、棚板が氣の引ける程撓つた。

斯んな粗末な道具ばかりを揃へるのにさへ彼は少からぬ時間を費やした。わざ〳〵辭職して貰つた金は何時の間にかもう無くなつてゐた。迂闊な彼は不思議さうな眼を開いて、索然たる彼の新居を見廻した。さうして外國にゐる時、衣服を作る必要に逼られて、同宿の男から借りた金は何うして返して好いか分らなくなつて仕舞つた樣に思ひ出した。

そこへ其男から若し都合が付くなら算段して貰ひたいといふ催促状が屆いた。健三は新しく拵へた高い机の前に坐つて、少時彼の手紙を眺めてゐた。

僅の間とは云ひながら、遠い國で一所に暮らした其人の記憶は、健三に取つて淡い新しさを帶びてゐた。其人は彼と同じ學校の出身であつた。卒業の年もさう違はなかつた。けれども立派な御役人として、ある重要な事項取調の爲といふ名義の下に、官命で遣つて來た其人の財力と健三の給費との間には、殆ど比較にならない程の懸隔があつた。

彼は寢室の外に應接間も借りてゐた。夜になると繻子で作つた刺繍のある綺麗な寢衣を着て、暖かさうに暖爐の前で書物などを讀んでゐた。北向の狹苦しい部屋で押込められたやうに凝と竦んでゐる健三は、ひそかに彼の境遇を羨んだ。

其健三には晝食を節約した憐れな經驗さへあつた。ある時の彼は表へ出た歸り掛に途中で買つたサンドヰツチを食ひながら、廣い公園の中を目的もなく歩いた。斜に吹きかける雨を片方の手に持つた傘で防けつゝ、片々の手で薄く切つた肉と麵麭を何度にも頰張るのが非常に苦しかつた。彼はいくたびか其處にあるベンチへ腰を卸さうとしては躊躇した。ベンチは雨の爲に悉く濡れてゐたのである。

ある時の彼は町で買つて來たビスケツトの罐を午になると開いた。さうして湯も水も呑まずに、硬くて脆いものをぼり〳〵嚙み摧いては、生唾の力で無理に嚥み下した。

ある時の彼はまた馭者や勞働者と一所に如何はしい一膳飯屋で形ばかりの食事を濟ました。其處の腰掛の後部は高い屛風のやうに切立つてゐるので、普通の食堂の如く、廣い室を一目に見渡す事は出來なかつたが、自分と一列に竝んでゐるものの顏丈は自由に眺められた。それは皆何時湯に入つたか分らない顏であつた。

斯んな生活をしてゐる健三が、此同宿の男の眼には左も氣の毒に映つたと見えて、彼は能く健三を午餐に誘ひ出した。錢湯へも案内した。茶の時刻には向うから呼びに來た。健三が彼から金を借りたのは斯うして彼と大分懇意になつ

た時の事であつた。

其時彼は反故でも棄てるやうに無雜作な態度を見せて、五磅のバンクノートを二枚健三の手に渡した。何時返して呉れとは無論云はなかつた。健三の方でも日本へ歸つたら何うにかなるだらう位に考へた。

日本へ歸つた健三は能く此バンクノートの事を覺えてゐた。けれども催促狀を受取る迄は、それ程急に返す必要が出て來ようとは思はなかつた。行き詰つた彼は仕方なしに、一人の古い友達の所へ出掛けて行つた。彼は其友達の大した金持でない事を承知してゐた。然し自分よりも少しは融通の利く地位にある事も呑み込んでゐた。友達は果して彼の請求を容れて、要る丈の金を彼の前に揃へて呉れた。彼は早速それを外國で恩を受けた人の許へ返しに行つた。新らしく借りた友達へは月に十圓宛の割で成し崩しに取つて貰ふ事に極めた。

六十

斯んな具合にして漸と東京に落付いた健三は、物質的に見た自分の、如何にも貧弱なのに氣が付いた。それでも、金力を離れた他の方面に於いて自分が優者であるといふ自覺が絶えず彼の心に往來する間は幸福であつた。其自覺が遂に金の問題で色々に攪き亂されてくる時、彼は始めて反省した。平生何心なく身に着けて外へ出る黑木綿の紋付さへ、無能力の證據のやうに思はれ出した。

「此己をまた強請りに來る奴がゐるんだから非道い」

彼は最も質の惡い其種の代表者として島田の事を考へた。

今の自分が何の方角から眺めても島田より好い社會的地位を占めてゐるのは明白な事實であつた。それが彼の虛榮心に少しの反響も與へないのも亦明白な事實であつた。昔し自分を呼び捨てにした人から今となつて鄭寧な挨拶を受けるのは、彼に取つて何の滿足にもならなかつた。小遣の財源のやうに見込まれるのは、自分を貧乏人と見傚してゐる彼の立場から見て、腹が立つ丈であつた。

彼は念のために姉の意見を訊ねて見た。

「一體何の位困つてるんでせうね、あの男は」

「左右さね。さう度々無心を云つて來るやうぢや、隨分苦しいのかも知れないね。だけど健ちやんだつてさう〳〵他にばかり貢いでゐた日にや際限がないからね。いくら御金が取れたつて」

「御金がそんなに取れるやうに見えますか」

「だつて宅なんぞに比べれば、御前さん、御金がいくらでも取れる方ぢやないか」

姉は自分の宅の活計を標準にしてゐた。相變らず口數の多い彼女は、比田が月々貰ふものを滿足に持つて歸つた例のない事や、俸給の少い割に交際費の要る事や、宿直が多いので辨當代だけでも隨分の額に上る事や、毎月の不足はやつと盆暮の賞與で間に合はせてゐる事などを詳しく健三に話して聞かせた。

「その賞與だつて、そつくり私の手に渡して呉れるんぢやないんだからね。だけど近頃ぢや私達二人はまあ隱居見たやうなもので、月々食料を彥さんの方へ遣つて賄つて貰つてるんだから、少しは樂にならなけりやならない譯さ」

養子と經濟を別々にしながら一所の家に住んでゐた姉夫婦は、自分達の搗いた餅だの、自分達の買つた砂糖だのといふ特別な食物を有つてゐた。自分達の所へ來た客に出す御馳走なども屹度自分達の懷中から拂ふ事にしてゐるらしかつた。健三は殆ど考への及ばないやうな眼付をして、極端に近い一種の個人主義の下に

存在してゐる此一家の經濟狀態を眺めた。然し主義も理窟も有たない姉にはまた是程自然な現象はなかつたのである。

「健ちやんなんざ、斯んな眞似をしなくつても濟むんだから好いやあね。それに腕があるんだから、稼ぎさへすりや幾何でも欲しい丈の御金は取れるしさ」

彼女のいふ事を默つて聞いてゐると、島田などは何處へ行つたか分らなくなつてしまひ勝であつた。それでも彼女は最後に付け加へた。

「まあ好いやね。面倒臭くなつたら、其内都合の好い時に上げませうとか何とか云つて歸して仕舞へば。それでも蒼蠅いなら留守をお遣ひよ。構ふ事はないから」

此注意は如何にも姉らしく健三の耳に響いた。

姉から要領を得られなかつた彼はまた比田を捉まへて同じ質問を掛けて見た。比田はたゞ、大丈夫といふ丈であつた。

「何しろ故の通りあの地面と家作を有つてるんだから、さう困つてゐない事は慥でさあ。それにお藤さんの方へはお縫さんの方からちやんちやんと送金はあるしさ。何でも好い加減な事を云つて來るに違ないから放つて御置きなさい」

比田の云ふ事も矢つ張り好い加減の範圍を脱し得ない上つ調子のものには相違なかつた。

六十一

仕舞には健三は細君に向つた。

「一體何ういふんだらう、今の島田の實際の境遇つて云ふのは。姉に訊いても比田に訊いても、本當の所が能く分らないが」

細君は氣のなささうに夫の顏を見上げた。彼女は產に間もない大きな腹を苦しさうに抱へて、朱塗の船底枕の上に亂れた頭を載せてゐた。

「そんなに氣になさるなら、御自分で直に調べて御覽になるが好いぢやありませんか。左右すればすぐ分るでせう。御姉さんだつて、今あの人と交際つて居らつしやらないんだから、そんな確な事の知れてゐる筈がないと思ひますわ」

「己にはそんな暇なんかないよ」

「それぢや放つて御置きになれば夫迄でせう」

細君の返事には、男らしくもないといふ意味で、健三を非難する調子があつた。腹で思つてゐる事もさう無暗に口へ出して云はない性質に出來上つた彼女は、自分の生家と夫との面白くない間柄に就いてさへ、餘り言葉に現してつべこべ辯じ立てなかつた。自分と關係のない島田の事などは丸で知らない振をして澄ましてゐる日も少くなかつた。彼女の持つた心の鏡に映る神經質な夫の影は、いつも度胸のない偏窟な男であつた。

「放つて置け？」

健三は反問した。細君は答へなかつた。

「今迄だつて放つて置いてるぢやないか」

細君は猶答へなかつた。健三はぷいと立つて書齋へ入つた。

島田の事に限らず二人の間には斯ういふ光景が能く繰返された。其代り前後の關係で反對の場合も時には起つた。——

「お縫さんが脊髓病なんださうだ」

「脊髓病ぢや六づかしいでせう」

「到底助かる見込はないんだとさ。それで島田が心配してゐるんだ。あの人が死ぬと柴野とお藤さんとの緣が切れてしまふから、今迄每月送つてくれた例の金が來なくなるかも知れないつてね」

「可哀想ね今から脊髓病なんぞに罹つちや。まだ若いんでせう」

「己より一つ上だつて話したぢやないか」

「子供はあるの」

「何でも澤山あるやうな様子だ。幾人だか能く訊いて見ないが—」

細君は成人しない多くの子供を後へ遺して死に丶行く、まだ四十に充たない夫人の心持を想像に描いた。間近に逼つたわが産の結果も新に氣遣はれ始めた。重さうな腹を眼の前に見ながら、それ程心配もして呉れない男の氣分が、情なくもあり又羨ましくもあつた。夫は丸で氣が付かなかつた。

「島田がそんな心配をするのも必竟は平生が惡いからなんだらうよ。何でも嫌はれてゐるらしいんだ。島田に云はせると、其柴野といふ男が酒食ひで喧嘩早くつて、それで何時迄經つても出世が出來なくつて、仕方がないんださうだけれども、何うも夫許ぢやないらしい。矢つ張島田の方が愛想を盡かされてゐるに違ないんだ」

「愛想を盡かされなくつたつて、そんなに子供が澤山あつちや何うする事も出來ないでせう」

「さうさ。軍人だから大方己と同じやうに貧乏してゐるんだらうよ」

「一體あの人は何うして其お藤さんて人と——」

細君は少し躊躇した。健三には意味が解らなかつた。細君は云ひ直した。

「何うして其お藤さんて人と懇意になつたんでせう」

お藤さんがまだ若い未亡人であつた頃、何かの用で扱所へ出なければならない事の起つた時、島田はさういふ場所へ出つけない女一人を、氣の毒に思つて、色々親切に世話をして遣つたのが、二人の間に關係の付く始りだと、健三は小さい時分に誰かから聽いて知つてゐた。然し戀愛といふ意味を何う島田に應用して好いか、今の彼には解らなかつた。

「慾も手傳つたに違ないね—」

細君は何とも云はなかつた。

六十二

不治の病氣に惱まされてゐるといふお縫さんに就いての報知が健三の心を和げた。何年振にも顏を合せた事のない彼と其人とは、度々會はなければならなかつた昔でさへ、殆ど親しく口を利いた例がなかつた。席に着くときも座を立つときも、大抵は默禮を取り換はせる丈で濟ましてゐた。もし交際といふ文字を斯んな間柄にも使ひ得るならば、二人の交際は極めて淡くさうして輕いものであつた。強烈な好い印象のない代りに、少しも不快の記憶に濁されてゐない其人の面影は、島田やお常のそれよりも、今の彼に取つて遙に尊かつた。人類に對する慈愛の心を、硬くなりかけた彼から唆り得る點に於いて、また漠然として散漫な人類を、比較的判明した一人の代表者に縮めて呉れる點に於いて。——彼は死なうとしてゐる其人の姿を、同情の眼を開いて遠くに眺めた。

それと共に彼の胸には一種の利害心が働いた。何時起るかも知れないお縫さんの死は、狡猾な島田にまた彼を強請る口實を與へるに違なかつた。明かにそれを豫想した彼は、出來る限りそれを避けたいと思つた。然し彼は此場合何うして避けるかの策略を講ずる男ではなかつた。

「衝突して破裂する迄行くより外に仕方がない」

彼は斯う觀念した。彼は手を拱いて島田の來るのを待ち受けた。其島田の來る前に突然彼の敵のお常が訪ねて來ようとは、彼も思ひ掛けなかつた。

細君は何時もの通り書齋に坐つてゐる彼の前に出て「あの波多野つて御婆さんがとう／＼遣つて來ましたよ」と云つた。彼は驚くよりも寧ろ迷惑さうな顏をした。細君には其態度が愚圖

黙圖してゐる臆病な女の様に見えた。

「御會ひになりますか」

それは、會ふなら會ふ、斷るなら斷る、早く何方かに極めたら好からうといふ言葉の遣ひ方であつた。

「會ふから上げろ」

彼は島田の來た時と同じ挨拶をした。細君は重苦しさうに身を起して奥へ立つた。

座敷へ出た時、彼は粗末な衣服を身に纏つて、丸まつちく坐つてゐる一人の婆さんを見た。彼の心で想像してゐたお常とは全く變つてゐる其質朴な風采が、島田よりも遙に強く彼を驚かした。

彼女の態度も島田に比べると寧ろ反對であつた。彼女は丸で身分の懸隔でもある人の前へ出たやうな様子で、鄭寧に頭を下げた。言葉遣も慇懃を極めたものであつた。

健三は子供の時分能く聞かされた彼女の生家の話を思ひ出した。田舎にあつたその住居も庭園も、彼女の叙述によると、善を盡し美を盡した立派なものであつた。床の下を水が縦横に流れてゐるといふ特色が、彼女の何時でも繰返す重要な點であつた。南天の柱――さういふ言葉もまだ健三の耳に殘つてゐた。然し小さい健三は其の宏大な屋敷が何處の田舎にあるのか丸で知らなかつた。それから一度も其處へ連れて行かれた例がなかつた。彼女自身も、健三の知つてゐる限り、一度も自分の生れた其の大きな家へ歸つたことがなかつた。彼女の性格を朧氣ながら見抜くやうに、彼の批評眼がだんだん肥えて來た時、彼はそれも亦彼女の空想から出る例の法螺ではないかと考へ出した。

健三は自分を出來る丈富有に、上品に、そして善良に、見せたがつた其女と、今彼の前に畏まつて坐つてゐる白髪頭の御婆さんとを比較して、時間の齎した對照に不思議さうな眼を注いだ。

お常は昔から肥り肉の女であつた。今見るお常も依然として肥つてゐた。何方かといふと、昔よりも今の方が却つて肥つてゐはしまいかと疑はれる位であつた。それにも拘はらず、彼女は全く變化してゐた。何處から見ても田舎育ちの御婆さんであつた。多少誇張していへば、籠に入れた蒸焦しを脊中へ背負つて近在から出て來る御婆さんであつた。

六十三

「あゝ變つた」

顔を見合せた刹那に双方は同じ事を一度に感じ合つた。けれどもわざ〳〵訪ねて來たお常の方には、此變化に對する豫期と準備が十分にあつた。所が健三にはそれが殆ど缺けてゐた。從つて不意に打たれたものは客よりも寧ろ主人であつた。それでも健三は大して驚いた様子を見せなかつた。彼の性質が彼にさうしろと命令する外に、彼はお常の技巧から溢れ出る戯曲的動作を恐れた。今更此女の遣る芝居を事新しく觀せられるのは、彼に取つて堪へがたい苦痛であつた。成るべくなら彼は先方の弱點を未然に防ぎたかつた。それは彼女の爲めでもあり、又自分の爲めでもあつた。

彼は彼女から今迄の經歴をあらまし聞き取つた。其間には人生と切り離す事の出來ない多少の不幸が相應に纏綿してゐるらしく見えた。

島田と別れてから二度目に嫁いだ波多野と彼女との間にも子が生れなかつたので、二人は或所から養女を貰つて、それを育てる事にした。波多野が死んで何年目にか、或はまだ生きてゐる時分にか、それはお常も云はなかつたが、其貰ひ娘に養子が來たのである。

養子の商賣は酒屋であつた。店は東京のうちでも隨分繁華な所にあつた。何の位な程度

の活計をしてゐたものか能く分らないが、困つたとか、窮したとかいふ弱い言葉はお常の口を洩れなかつた。
其内養子が戰爭に出て死んだので、女丈では店が持ち切れなくなつた。親子は已むを得ずそれを疊んで、郊外近くに住んでゐる或身緣を頼りに、ずつと邊鄙な所へ引越した。其處で娘に二度目の夫が出來る迄は、死んだ養子の遺族へ毎年下がる扶助料丈で活計を立てゝ行つた。……
お常の物語は健三の豫期に反して寧ろ平靜であつた。誇張した身振だの、仰山な言葉遣だの、當込の臺詞だのは、それ程多く出て來なかつた。それにも拘らず彼は自分と此御婆さんの間に、少しの氣脈も通じてゐない事に氣が付いた。
「あゝ左右ですか、それは何うも」
健三の挨拶は簡單であつた。普通の受答へとしても短過ぎる此一句を彼女に與へたぎりで、彼は別段物足りなさを感じ得なかつた。
「昔の因果が今でも矢つ張り祟つてゐるんだ」
斯う思つた彼は流石に好い心持がしなかつた。何方かといふと泣きたがらない質に生れながら、時々は何故本當に泣ける人や、泣ける場合が、自分の前に出て來て呉れないのかと考へるのが彼の持前であつた。
「已の眼は何時でも涙が湧いて出るやうに出來てゐるのに」
彼は丸まつちくなつて座蒲團の上に坐つてゐる御婆さんの姿を熟視した。さうして自分の眼に涙を宿す事を許さない彼女の性格を悲しく觀じた。
彼は紙入の中にあつた五圓紙幣を出して彼女の前に置いた。
「失禮ですが、車へでも乘つて御歸り下さい」
彼女はさういふ意味で訪問したのではないと云つて一應辭退した上、健三からの贈りものを受け納めた。氣の毒な事に、其贈り物の中には、疎い同情が入つてゐる丈で、露はな眞心は籠つてゐなかつた。彼女はそれを能く承知してゐるやうに見えた。さうして何時の間にか離れ離れになつた人間の心と心は、今更取り返しの付かないものだから、諦めるより外に仕方がないといふ風に振舞つた。彼は玄關に立つて、お常の歸つて行く後姿を見送つた。
「もしあの憐れな御婆さんが善人であつたなら、私は泣く事が出來たらう。泣けない迄も、相手の心をもつと滿足させる事が出來たらう。零落した昔の養ひ親を引き取つて死水を取つて遣る事も出來たらう」
默つて斯う考へた健三の腹の中は誰も知る者がなかつた。

六十四

「とう〳〵遣つて來たのね、御婆さんも。今迄は御爺さん丈だつたのが、御爺さんと御婆さんと二人になつたのね。是からは二人に祟られるんですよ、貴夫は」
細君の言葉は珍らしく乾燥いでゐた。笑談とも付かず、冷評とも付かない其態度が、感想に沈んだ健三の氣分を不快に刺戟した。彼は何とも答へなかつた。
「又あの事を云つたでせう」
細君は同じ調子で健三に訊いた。
「あの事た何だい」
「貴夫が小さいうち寢小便をして、あの御婆さんを困らしたつて事よ」
健三は苦笑さへしなかつた。
けれども彼の腹の中には、お常が何故それを云はなかつたかの疑問が既に横はつてゐた。彼女の名前を聞いた刹那の健三は、すぐその藉口

に思ひ到つた位、お常は能く喋舌る女であつた。ことに自分を護る事に巧な技倆を有つてゐた。他の口車に乘せられ易い、又見え透いた御世辭を嬉しがり勝な健三の實父は、何時でも彼女を賞める事を忘れなかつた。

「感心なもんだよ。だいち身上持が好いからな」

島田の家庭に風波の起つた時、彼女は有るだけの言葉を父の前に並べ立てた。さうして其言葉の上にまた悲しい涙と口惜しい涙とを多量に振り掛けた。父は全く感動した。すぐ彼女の味方になつて仕舞つた。

御世辭が上手だといふ點に於いて健三の父は彼の姉をも大變可愛がつてゐた。無心に來られるたんびに、「さう／＼は己だつて困るよ」とか何とか云ひながら、いつか入用丈の金子は手文庫から取出されてゐた。

「比田はあんな奴だが、お夏が可哀想だから」

姉の歸つた後で、父は何時でも辯解らしい言葉を傍のものに聞えるやうに云つた。

然し是程父を自由にした姉の口先は、お常に比べると遙に下手であつた。眞しやかといふ點に於いて遠く及ばなかつた。實際十六七になつた時の健三は彼女と接觸した自分以外のもので、果してその性格を見拔いたものが何人あるだらうかと、一時疑つて見た位、彼女の口は旨かつた。

彼女に會ふときの健三が、心中迷惑を感じたのは大部分此口にあつた。

「御前を育てたものは此私だよ」

この一句を二時間でも三時間でも敷衍して、幼少の時分恩になつた記憶を又新しく復習させられるのかと思ふと、彼は辟易した。

「島田は御前の敵だよ」

彼女は自分の頭の中に殘つてゐる此古い主觀を、活動寫眞のやうに誇張して、又彼の前に露け出すに極つてゐた。彼はそれにも辟易しない譯に行かなかつた。

何方を聽くにしても涙が交るに違ひなかつた。彼は裝飾的に使用される其涙を見るに堪へないやうな心持がした。彼女は話す時に姉のやうな大きな聲を出す女ではなかつた。けれども自分の必要と思ふ場合には、其言葉に厭らしい強い力を入れた。圓朝の人情噺に出て來る女が、長い火箸を灰の中に突き刺し突き刺し、人に騙された恨みを述べて、相手を困らせるのと略同じ態度で又同じ口調であつた。

彼の豫期が外れた時、彼はそれを仕合せと考へるよりも寧ろ不思議に思ふ位、お常の性格が牢として崩すべからざる判明した一種の型になつて、彼の頭の何處かに入つてゐたのである。

細君は彼の爲に說明した。

「もう十年近くにもなる古い事ぢやありませんか。向うだつて今となりや少しは遠慮があるでせう。それに大抵の人はもう忘れてしまひまさあね。それから人間の性質だつて長い間には少しづつ變つて行きますから」

遠慮、忘却、性質の變化、それ等のものを前に並べて考へて見ても、健三には少しも合點が行かなかつた。

「そんな淡泊した女ぢやない」

彼は腹の中で斯う云はなければ何うしても承知が出來なかつた。

六十五

お常を知らない細君は却つて夫の執拗を笑つた。

「それが貴夫の癖だから仕方がない」

不斷彼女の眼に映る健三の一部分はたしかに斯うなのであつた。ことに彼と自分の生家との關係に就いて、夫の此惡い癖が著しく出てゐるやうに彼女は思つてゐた。

「己が執拗なのぢやない、あの女が執拗なのだ」

あの女と交際つた事のない御前には、己の批評の正しさ加減が解らないからそんなあべこべを云ふのだ」

「だつて現に貴夫の考へてゐた女とは丸で違つた人になつて貴夫の前へ出て來た以上は、貴夫の方で昔の考へを取り消すのが當然ぢやありませんか」

「本當に違つた人になつたのなら何時でも取消すが、左右ぢやないんだ。違つたのは上部丈で腹の中は故の通りなんだ」

「それが何うして分るの。新しい材料も何もないのに」

「御前に分らないでも己にはちやんと分つてるよ」

「隨分獨斷的ね、貴夫も」

「批評が中つてさへゐれば獨斷的で一向差支ないものだ」

「然しもし中つてゐなければ迷惑する人が大分出て來るでせう。あの御婆さんは私と關係のない人だから、何うでも構ひませんけれども」

健三には細君の言葉が何を意味してゐるのか能く解つた。然し細君はそれ以上何も云はなかつた。腹の中で自分の父母兄弟を辯護してゐる彼女は、表向夫と遣り合つて、行ける所迄行く氣はなかつた。彼女は理智に富んだ性質ではなかつた。

「面倒臭い」

少し込み入つた議論の筋道を辿らなければならなくなると、彼女は屹度斯う云つて當面の問題を投げた。さうして解決を付ける迄進まないために起る面倒臭さは何時迄も辛抱した。然し其辛抱は自分自身に取つて決して快いものではなかつた。健三から見ると猶更心持が惡かつた。

「執拗だ」

「執拗だ」

二人は兩方で同じ非難の言葉を御互の上に投げかけ合つた。さうして御互の腹の中にある蟠りを御互の素振から能く讀んだ。しかも其の非難に理由のある事も亦御互に認め合はなければならなかつた。

我慢な健三は遂に細君の生家へ行かなくなつた。何故行かないとも訊かず、又時々行つて吳れとも賴まずにたゞ默つてゐた細君は、依然として「面倒臭い」を心の中に繰り返すぎりで、少しも其態度を改めようとしなかつた。

「是で澤山だ」

「己も是で澤山だ」

また同じ言葉が雙方の胸のうちで屢繰り返された。

それでも護謨紐のやうに彈力性のある二人の間柄には、時により日によつて多少の伸縮があつた。非常に緊張して何時切れるか分らない程に行き詰つたかと思ふと、それがまた自然の勢ひで徐々元へ戻つて來た。さうした日和の好い精神狀態が少し繼續すると、細君の脣から暖い言葉が洩れた。

「是は誰の子？」

健三の手を握つて、自分の腹の上に載せた細君は、彼に斯んな問を掛けたりした。其頃細君の腹はまだ今のやうに大きくはなかつた。然し彼女は此時既に自分の胎内に蠢き掛けてゐた生の脈搏を感じ始めたので、その微動を同情のある夫の指頭に傳へようとしたのである。

「喧嘩をするのは詰り兩方が惡いからですね」

彼女は斯んな事も云つた。夫程自分が惡いと思つてゐない頑固な健三も、微笑するより外に仕方がなかつた。

「離れゝばいくら親しくつても夫切になる代りに、一所にゐさへすれば、たとひ敵同志でも何うにか斯うにかなるものだ。つまりそれが人間なんだらう」

健三は立派な哲理でも考へ出したやうに首を捻つた。

六十六

お常や島田の事以外に、兄と姉の消息も折々健三の耳に入つた

毎年時候が寒くなると能く身體に故障の起る兄は、秋口から又風邪を引いて一週間ほど局を休んだ揚句、氣分の悪いのを押して出勤した結果、幾日經つても熱が除れないで苦しんでゐた。

「つい無理をするもんだから」

無理をして月給の壽命を長くするか、養生をして免職の時期を早めるか、彼には二つの内何方かを撰ぶより外に仕方がない樣に見えたのである

「何うも肋膜らしいつていふんだがね」

彼は心細い顔をした。彼は死を恐れた。肉の消滅について何人よりも強い畏怖の念を抱いてゐた。さうして何人よりも強い速度で、其肉塊を減らして行かなければならなかつた。

健三は細君に向つて云つた。――

「もう少し平氣で休んでゐられないものかな。責めて熱の失くなる迄でも好いから」

「左右したいのは山々なんでせうけれども、矢つ張さうは出來ないんでせう」

健三は時々兄が死んだあとの家族を、たゞ活計の方面からのみ眺める事があつた。彼はそれを残酷ながら自然の眺め方として許してゐた。同時にさういふ觀察から逃れる事の出來ない自分に對して一種の不快を感じた。彼は苦い臉を作めた。

「死にやしまいな」

「まさか」

細君は取り合はなかつた。彼女はたゞ自分の大きな腹を持て餘してばかりゐた。生家と縁故のある産婆が、遠い所から俥に乗つて時々遣つて來た。彼は其産婆が何をしに來て、又何をして歸つて行くのか全く知らなかつた。

「腹でも揉むのかい」

「まあ左右です」

細君ははか〲しい返事さへしなかつた。

其内兄の熱がころりと除れた。

「御祈禱をなすつたんですつて」

迷信家の細君は加持、祈禱、占ひ、神信心、大抵の事を好いてゐた。

「御前が勸めたんだらう」

「いゝえ私なんぞの知らない妙な御祈禱なのよ。何でも髪剃を頭の上へ載せて遣るんですつて」

健三には髪剃の御蔭で、しつこい熱が除れようとも思へなかつた。

「氣の所爲で熱が出るんだから、氣の所爲でそれが又直ぐ除れるんだらうよ。髪剃でなくつたつて、杓子でも金盥で、同じ事さ」

「然しいくら御醫者の藥を飲んでも癒らないもんだから、試しに遣つて見たら何うだらうつて勸められて、とう〱遣る氣になつたんですつて。何うせ高い御祈禱代を拂つたんぢやないんでせう」

健三は腹の中で兄を馬鹿だと思つた。また熱の除れる迄藥を飲む事の出來ない彼の内状を氣の毒に思つた。髪剃の御蔭でも何でも熱が除れさへすればまづ仕合せだとも思つた。

兄が癒ると共に姉がまた喘息で惱み出した。

「又かい」

健三は我知らず斯う云つて、不圖女房の持病を苦にしない比田の樣子を想ひ浮べた。

「しかし今度は何時もより重いんですつて。ことによると六づかしいかも知れないから、健三に見舞に行くやうに左右云つて呉れつて仰しやいました」

見の注意を健三に傳へた細君は、寧ろ苦しさうに自分の尻を壁の上に着けた。

「少し立つてゐると御腹の具合が變になつて來て仕方がないんです。手なんぞ延ばして棚に載つてゐるものなんか到底取れやしません」

産が逼る程妊婦は運動すべきものだ位に考へてゐた健三は意外な顏をした。下腹部だの腰の周圍の感じが何んなに退儀であるかは全く彼の想像の外にあつた。彼は活動を強ひる勇氣も自信も失つた。

「私迚も御見舞には參れませんよ」

「無論御前は行かなくつても好い。己が行くから」

六十七

其頃の健三は宅へ歸ると甚しい倦怠を感じた。たゞ仕事をした結果とばかりは考へられない此疲勞が、一層彼を出不精にした。彼はよく晝寢をした。机に倚つて書物を眼の前に開けてゐる時ですら、睡魔に襲はれる事が屢あつた。愕然として假寢の夢から覺めた時、失はれた時間を取り返さなければならないといふ感じが一層強く彼を刺戟した。彼は遂に机の前を離れる事が出來なくなつた。括り付けられた人のやうに書齋に凝としてゐた。彼の良心はいくら勉強が出來なくつても、いくら揚圖々々してゐても、左右いふ風に凝と坐つてゐろと彼に命令するのである。

斯くして四五日は徒に過ぎた。健三が漸く津の守坂へ出掛けた時は六づかしいかも知れないと云つた姉が、もう回復期に向つてゐた。

「まあ結構です」

彼は尋常の挨拶をした。けれども腹の中では狐にでも抓まれたやうな氣がした。

「あゝ、でも御蔭さまでね。――姉さんなんざあ、生きてゐたつて何うせ他の厄介になるばかりで何の役にも立たないんだから、好い加減な時分に死ぬと丁度好いんだけれども、矢つ張り持つて生れた壽命だと見えて是計りは仕方がない」

姉は自分の云ふ裏を健三から聽きたい樣子であつた。然し彼は默つて烟草を吹かしてゐた。斯んな些細の點にも姉弟の氣風の相違は現れた。

「でも比田のゐるうちは、いくら病身でも無能でも私が生きてゐて遣らないと困るからね」

親類は亭主孝行といふ名で姉を評し合つてゐた。それは女房の心盡しなどに對して條りに無頓着過ぎる比田を一方に置いて此姉の態度を見ると、寧ろ氣の毒な位親切だつたからである。

「私や本當に損な生れ付でね。良人とは丸であべこべなんだから」

姉の夫思ひは全く天性に違なかつた。けれども比田が時として理の徹らない我儘を云ひ募るやうに、彼女は譯の解らない實意立をして却つて夫を厭がらせる事があつた。それに彼女は縫針の道を心得てゐなかつた。手習をさせても遊藝を仕込んでも何一つ覺える事の出來なかつた彼女は、嫁に來てから今日迄、つひぞ夫の着物一枚縫つた例がなかつた。それでゐて彼女は人一倍勝氣な女であつた。子供の時分強情を張つた罰として土藏の中に押し込められた時、小用に行きたいから是非出して呉れ、もし出さなければ倉の中で用を足すが好いかと云つて、網戸の内外で母と論判をした話はいまだに健三の耳に殘つてゐた。

さう思ふと自分とは大變懸け隔たつたやうでゐて、其實何處か似通つた所のある此腹違の姉の前に、彼は反省を強ひられた。

姉はたゞ露骨な丈なんだ。教育の皮を剝けば己だつて大した變りはないんだ

平生の彼は教育の力を信じ過ぎてゐた。今の彼は其教育の力で何うする事も出來ない野生的な自分の存在を明かに認めた。斯く事實の上に於いて突然人間を平等に視た彼は、不斷から輕蔑してゐた姉に對して多少極りの惡い思ひをしなければならなかつた。然し姉は何にも氣が付かなかつた。

「お住さんは何うです。もう直生れるんだらう」

「えゝ落つこちさうな腹をして苦しがつてゐます」

「御産は苦しいもんだからね。私も覺があるが」

久しく不姙性と思はれてゐた姉は、片付いて何年目かになつて始めて一人の男の子を生んだ。年齒を取つてからの初産だつたので、當人も傍のものも大分心配した割に、それ程の危險もなく胎兒を分娩したが、其子はすぐ死んで仕舞つた。

「輕はずみをしないやうに用心おしよ。――宅でも彼子がゐると少しは依怙になるんだがね」

六十八

姉の言葉には昔亡くしたわが子に對する思ひ出の外に、今の養子に飽き足らない意味も含まれてゐた。

「彦ちやんがもう少し確乎してゐて呉れると好いんだけれども」

彼女は時々傍のものに斯んな述懷を洩らした。彦ちやんは彼女の豫期するやうな大した働き手でないにせよ、至極穩かな好人物であつた。朝つぱらから酒を飲まなくつちやゐられない人だといふ噂を耳にした事はあるが、其他の點に就いて深い交渉を有たない健三には、何處が不足なのか能く解らなかつた。

「もう少し御金を取つて呉れると好いんだけどもね」

無論彦ちやんは養父母を樂に養へる丈の收入を得てゐなかつた。然し比田も姉も彼を育てた時の事を思へば、今更そんな贅澤の云へた義理でもなかつた。彼等は彦ちやんを何處の學校へも入れて遣らなかつた。僅ばかりでも彼が月給を取るやうになつたのは、養父母に取つては寧ろ僥倖と云はなければならなかつた。健三は姉の不平に對して眼に見えるほどの注意を拂ひかねた。昔死んだ赤ん坊については、猶の事同情が起らなかつた。彼は其生顏を見た事がなかつた。其死顏も知らなかつた。名前さへ忘れてしまつた。

「何とか云ひましたね、あの子は」

「作太郎さ。あすこに位牌があるよ」

姉は健三のために茶の間の壁を切り拔いて拵へた小さい佛壇を指し示した。薄暗いばかりでなく小汚い其中には先祖からの位牌が五つ六つ竝んでゐた。

「あの小さい奴がさうですか」

「あゝ、赤ん坊のだからね、わざと小さく拵へたんだよ」

立つて行つて戒名を讀む氣にもならなかつた健三は、矢張故の所に坐つた儘、黑塗の上に金字で書いた小形の札のやうなものを遠くから眺めてゐた。

彼の顏には何の表情もなかつた。自分の二番目の娘が赤痢に罹つて、もう少しで命を奪られる所だつた時の心配と苦痛とさへ、聯想し得なかつた。

「姉さんも斯んなだから何時あゝなるか分らないよ、健ちやん」

彼女は佛壇から眼を放して健三を見た。健三はわざと其視線を避けた。

心細い事を口にしながら腹の中では決して死ぬと思つてゐない彼女の云ひ草には、世間並の

年寄と少し趣を異にしてゐる所があつた。慢性の病氣が何時迄も停滯するやうに、慢性の壽命が又何時迄も繼續するだらうと彼女には見えたのである。

其處へ彼女の癇性が手傳つた。彼女は何んなに氣分が惡くつても、いくら他から忠告されても、何うしても居なかつた形を見せやうと云はなかつた。這ふやうにしてゞも厠迄行つた。それから子供の時からの習慣で、朝は必度肌拔になつて手水を遣つた。寒い風が吹かうが冷たい雨が降らうが決して已めなかつた。

「そんな心細い事を云はずに、出來る丈養生をしたら好いでせう」

「養生はしてゐるよ。健ちやんから貰ふ御小遣の中で牛乳丈は屹度飲む事に極めてゐるんだから」

田舍ものが米の飯を食ふやうに、彼女は牛乳を飲むのが凡ての養生でゝもあるかのやうな事を云つた。日に〳〵損はれて行く胃腸を意識しつゝ、此姉に養生を勸める健三の心の中にも、「仕方がない」といふ馬鹿らしさが遠くに働いてゐた。

「私も近頃は具合が惡くつてね。ことによると貴方より早く位牌になるかも知れませんよ」

彼の言葉は無論根のない笑談として姉の耳に響いた。彼もそれを承知の上でわざと笑つた。然し自ら健康を損ひつゝあると常に心得ながら、それを何うする事も出來ない境遇に置かれた彼は、姉よりも却つて自分の方を憐れんだ。

「己のは默つて成し崩しに自殺するのだ。氣の毒だと云つて呉れるものは一人もありやしない」

彼はさう思つて姉の凹み込んだ眼と、瘦けた頰と、肉のない細い手とを、微笑しながら見てゐた。

六十九

姉は細かい所に氣の付く女であつた。從つて細かい事に迄よく好奇心を働かせたがつた。一面に於いて馬鹿正直な彼女は、一面に於いてまた變な廻り氣を出す癖を有つてゐた。

健三が外國から歸つて來た時、彼女は自家の生計に就いて、他の同情に訴へ得るやうな憐れつぽい事實を彼の前に並べた。仕舞に兄の口を借りて、若干でも好いから月々自分の小遣として送つて呉れまいかといふ依賴を持ち出した。健三は自分相應な額を定めた上、また兄の手を經て先方へ其旨を通知して貰ふ事にした。

すると姉から手紙が來た。長さんの話では御前さんが月々若干私に遣るといふ事だが、實際御前さんの呉れると云つた金高は何の位なのか、長さんに内證で一寸知らせて呉れないかと書いてあつた。姉はこれから毎月中取次をする役に當るかも知れない兄の心事を疑つたのである。

健三は馬鹿々々しく思つた。腹立たしくも感じた。然し何より先に淺間しかつた。「默つてゐろ」と怒鳴り付けて遣りたくなつた。彼の姉に宛てた返事は、一枚の端書に過ぎなかつたけれども、斷らした彼の氣分を能く現はしてゐた。無筆な姉はそれぎり何とも云つて來なかつた。彼女は其時の手紙を、他に頼んで書いて貰つたのである。

此出來事が健三に對する姉を前よりは一層遠慮がちにした。何でも蚊でも訊きたがる彼女も、健三の家庭に就いては、當り障りのない事の外、多くは口を開かなかつた。健三も自分達夫婦の間柄を彼女の前で問題にしようなどゝは決して想ひも寄らなかつた。

「近頃お住さんは何うだい」

「まあ相變らずです」

會話は此位で切り上げられる場合が多かつ

た。
胃腸に関係の病氣を知つてゐる姉の質問には、好奇心以外に、親切から來る懸念も大分交つてゐた。然し其懸念は健三に取つて何の役にも立たなかつた。從つて彼女の眼に見える健三は、何時も親しみがたい無愛想な變人に過ぎなかつた。

淋しい心持で、姉の家を出た健三は、足に任せてぶら／\と歩いて行つた。さうしてつひぞ見た事もない、新開地のやうな汚い町の中へ入つた。東京で生れた彼は方角の上に於いて、自分の今踏んでゐる場所を能く辨へてゐた。けれども其處には彼の追憶を誘ふ何物も殘つてゐなかつた。過去の記念が悉く彼の眼から奪はれてしまつた大地の上を、彼は不思議さうに歩いた。

彼は昔あつた青田と、其青田の間を走る眞直な徑とを思ひ出した。田の盡きる所には三四軒の藁葺屋根が見えた。菅笠を脱いで床几に腰を掛けながら、心太を食つてゐる男の姿などが眼に浮んだ。前には野原のやうに廣い紙漉場があつた。其處を折れ曲つて町つゞきへ出ると、狹い川に橋が懸つてゐた。川の左右は高い石垣で積み上げられてゐるので、上から見下す水の流れには存外の距離があつた。橋の袂にある古風な錢湯の暖簾や、其隣の八百屋の店先に並んでゐる唐茄子などが、若い時の健三によく廣重の風景畫を聯想させた。

然し今では凡てのものが夢のやうに悉く消え失せてゐた。殘つてゐるのはたゞ大地ばかりであつた。

「何時斯んなに變つたんだらう」

人間の變つて行く事にのみ氣を取られてゐた健三は、それよりも一層劇しい自然の變り方に驚かされた。

彼は子供の時分比田と將棋を差した事を偶然思ひだした。比田は盤に向ふと、是でも所澤の藤吉さんの御弟子だからなといふのが癖であつた。今の比田も將棋盤を前に置けば、矢張り同じ事を云ひさうな男であつた。

「己自身は必竟何うなるのだらう」

衰へるだけで案外變らない人間のさまと、變るけれども日に榮えて行く郊外の樣子とが、健三に想ひがけない對照の材料を與へた時、彼は考へない譯に行かなかつた。

七十

元氣のない顏をして宅へ歸つて來た彼の樣子がすぐ細君の注意を惹いた。

「御病人は何うなの」

あらゆる人間は何時か一度は到着しなければならない最後の運命を、彼女は健三の口から判然聞かうとするやうに見えた。健三は答を與へる先に、まづ一種の矛盾を意識した。

「何うも好いんだ。寢てはゐるが危篤でも何でもないんだ。まあ兄貴に騙されたやうなものだね」

馬鹿らしいといふ氣が幾分か彼の口振に出た。

「騙されても其方がいくら好いか知れやしませんわ、貴夫。若しもの事でもあつて御覽なさい、それこそ……」

「兄貴が惡いんぢやない。兄貴は姉に騙されたんだから、其姉は又病氣に騙されたんだ。つまり皆騙されてゐるやうなものさ、世の中は。一番利口なのは比田かも知れないよ。いくら女房が煩つたつて、決して騙されないんだからね」

「矢つ張宅にゐないの」

「居るもんか。尤も非道く惡かつた時は何うだか知らないが」

健三は比田の振り下げてゐる金時計と金鎖

の事を思ひ出した。兄はそれを天麩羅だらうと云つて陰で評してゐたが、當人は何處迄も本物らしく見せびらかしたがつた。金着せにせよ、本物にせよ、彼が何處で幾何で買つたのか知るものは誰もなかつた。斯ういふ點に掛けては無頓着でゐられない性分の姉も、たゞ好い加減に其出處を推察するに過ぎなかつた。

「月賦で買つたに違ないよ」

ことによると質の流れかも知れない――姉は聽かれもしないのに、兄に向つて色々な說明をした。健三には殆ど問題にならない事が、彼等の間に想像の種を色々に卸した。左右されゝばされる程、又比田は得意らしく見えた。健三が毎月送る小遣さへ、時々借りられてしまふ癖に、姉はいかに夫の手元に入る、又は現在手元にある、金高を決して知る事が出來なかつた。

「近頃は何でも大分金を持つてゐるやうだよ」

姉の言葉は丸で隣の宅の旦那の事でも云ひ中てるやうに大分遠ざかつてゐた。

姉を斯ういふ地位に立たせて平氣でゐる比田は、健三から見ると領解しがたい人間に違なかつた。それが已むを得ない夫婦關係のやうに心得て辛抱してゐる姉自身も健三には分らなかつた。然し金錢上飽く迄秘密主義を守りながら、時々姉の豫期に釣り合はないやうなものを買ひ込んだり着込んだりして、妄りに彼女を驚かせたがる料簡に至つては想像さへ及ばなかつた。妻に對する虛榮心の發現、焦らされながらも夫を腕利と思ふ妻の滿足。――此二つのもの丈では到底十分な說明にならなかつた。

「金の要る時も他人、病氣の時も他人、それぢやたゞ一所にゐる丈ぢやないか」

健三の謎は容易に解けなかつた。考へる事の嫌ひな細君はまた何といふ評も加へなかつた。

「然し己達夫婦も世間から見れば隨分變つてるんだから、さう他の事ばかり兎や角云つちやゐられないかも知れない」

「矢つ張り同じ事ですわ。みんな自分丈は好いと思つてるんだから」

健三はすぐ癪に障つた。

「御前でも自分が好い積でゐるのかい」

「ゐますとも。貴夫が好いと思つてゐらつしやる通りに」

彼等の爭ひは能く斯ういふ所から起つた。さうして折角穩かに靜まつてゐる雙方の心を攪き亂した。健三はそれを愼みの足りない細君の責に歸した。細君はまた偏窟で強情な夫の所爲だとばかり解釋した。

「字が書けなくつても、裁縫が出來なくつても、矢つ張り姉のやうな亭主孝行な女の方が己は好きだ」

「今時そんな女が何處の國にゐるもんですか」

細君の言葉の奥には、男ほど手前勝手なものはないといふ大きな反感が横はつてゐた。

七十一

纏つた頭を有つてゐない彼女には存外新しい點があつた。彼女は形式的な昔風の倫理觀に囚はれる程嚴重な家庭に人とならなかつた。政治家を以て任じてゐた彼女の父は、教育に關して殆ど無定見であつた。母は又普通の女の樣に八釜しく子供を育て上げる性質ではなかつた。彼女は宅にゐて比較的自由な空氣を呼吸した。さうして學校は小學校を卒業した丈であつた。彼女は考へなかつた。けれども考へた結果を野性的に能く感じてゐた。

「單に夫といふ名前が付いてゐるからと云ふ丈の意味で、其人を尊敬しなくてはならないと強

ひられても自分には出來ない。もし尊敬を受けたければ、受けられる丈の實質を有つた人間になつて自分の前に出て來るが好い。夫といふ肩書などは無くつても構はないから」

不思議にも學問をした健三の方は此點に於いて却つて舊式であつた。自分は自分の爲に生きて行かなければならないといふ主義を實現したがりながら、夫の爲にのみ存在する妻を最初から假定して憚らなかつた。

「あらゆる意味から見て、妻は夫に從屬すべきものだ」

二人が衝突する大根は此處にあつた。

夫と獨立した自己の存在を主張しようとする細君を見ると健三はすぐ不快を感じた。動ともすると、「女の癖に」といふ氣になつた。それが一段劇しくなると忽ち「何を生意氣な」といふ言葉に變化した。細君の腹には「いくら女だつて」といふ挨拶が何時でも貯へてあつた。

「いくら女だつて、さう踏み付にされて堪るものか」

健三は時として細君の顏に出る是丈の表情を明かに讀んだ。

「女だから馬鹿にするのではない、馬鹿だから馬鹿にするのだ、尊敬されたければ尊敬される丈の人格を拵へるがいゝ」

健三の論理は何時の間にか、細君が彼に向つて投げる論理と同じものになつてしまつた。

彼等は斯くして圓い輪の上をぐる〳〵廻つて歩いた。さうしていくら疲れても氣が付かなかつた。

健三は其輪の上にはたりと立ち留る事があつた。彼の留る時は彼の激昂が靜まる時に外ならなかつた。細君も其輪の上で不圖動かなくなる事があつた。然し細君の動かなくなる時は彼女の沈滯が融け出す時に限つてゐた。其時健三は漸く怒號を已めた。細君は始めて口が利き出した。二人は手を携へて談笑しながら、矢張り圓い輪の上を離れる譯に行かなかつた。

細君が産をする十日ばかり前に、彼女の父が突然健三を訪問した。生憎留守だつた彼は、夕暮に歸つてから細君に其話を聞いて首を傾けた。

「何か用でもあつたのかい」

「えゝ少し御話したい事があるんですつて」

「何だい」

細君は答へなかつた。

「知らないのかい」

「えゝ。また二三日うちに上つて能く御話をするからつて歸りましたから、今度參つたら直に聞いて下さい」

健三はそれより以上何も云ふ事が出來なかつた。

久しく細君の父を訪ねないでゐた彼は、用事のあるなしに拘はらず、向ふがわざ〳〵此方へ出掛けて來ようなどゝは夢にも豫期しなかつた。その不審が何より彼の口數を多くする原因になつた。それとは反對に細君の言葉は却つて常よりも少なかつた。然しそれは彼がよく彼女に於いて發見する不平や無愛嬌から來る寡言とも違つてゐた。

夜は何時の間にやら全くの冬に變化してゐた。細い燈火の影を凝と見詰めてゐると、灯は動かないで風の音丈が烈しく雨戸に當つた。ひゆう〳〵と樹木の鳴るなかに、夫婦は靜かな洋燈を間に置いて、しばらく森と坐つてゐた。

七十二

「今日父が來ました時、外套がなくつて寒さうでしたから、貴方の古いのを出して遣りました」

田舍の洋服屋で拵へた其二重廻しは、殆ど健三の記憶から消えかゝつてゐる位古かつた。

細君が何うしてまたそれを彼女の父に與へたものか、健三には理解出來なかつた。

「あんな汚ならしいもの」

彼は不思議といふよりも寧ろ恥かしい氣がした。

「いゝえ、喜んで着て行きました」

「御父さんは外套を有つてゐないのかい」

「外套どころか、もう何も有つちやゐないんです」

健三は驚いた。細い灯に照らされた細君の顏が急に憐れに見えた。

「そんなに窮つてゐるのかなあ」

「えゝ。もう何うする事も出來ないんですつて」

口數の寡い細君は、自分の生家に關する詳しい話を今迄夫の耳に入れずに通して來たのである。職に離れて以來の不如意を薄々知つてゐながら、まさか是程とも思はずにゐた健三は、急に眼を轉じて其人の昔を見なければならなかつた。

彼は絹帽にフロックコートで勇ましく官邸の石門を出て行く細君の父の姿を鮮かに思ひ浮べた。堅木を久の字形に切り組んで作つた其玄關の床は、つる／＼光つて、時によると馴れない健三の足を滑らせた。前に廣い芝生を控へた應接間を左へ折れ曲ると、それと接續いて長方形の食堂があつた。結婚する前健三は其處で細君の家族のものと一所に晩餐の卓に着いた事を未だに覺えてゐた。二階には疊が敷いてあつた。正月の寒い晩、歌留多に招かれた彼は、そのうちの一間で暖い宵を笑ひ聲の裡に更かした記憶もあつた。

西洋館に續いて日本建も一棟付いてゐた此屋敷には、家族の外に五人の下女と二人の書生が住んでゐた。職務柄客の出入の多い此家の用事には、それ丈の召仕が必要かも知れなかつたが、もし經濟が許さないとすれば、其必要も充たされる筈はなかつた。

健三が外國から歸つて來た時ですら、細君の父はさう困つてゐるやうには見えなかつた。彼が駒込の奥に住居を構へた當座、彼の新宅を訪ねた父は、彼に向つて斯う云つた。——

「まあ自分の宅を有つといふ事が人間には何うしても必要ですね。然しさう急にも行くまいから、それは後廻しにして、精々貯蓄を心掛けたら好いでせう。二三千圓の金を有つてゐないと、いざといふ場合に、大變困るもんだから。なに千圓位出來ればそれで結構です。それを私に預けて御置きなさると、一年位經つうちには、ぢき倍にして上げますから」

貨殖の道に心得の足りない健三は其時不思議の感に打たれた。

「何うして一年のうちに千圓が二千圓になり得るだらう」

彼の頭では此疑問の解決が遂に付かなかつた。利慾を離れる事の出來ない彼は、驚愕の念を以て、細君の父にのみあつて、自分には全く缺乏してゐる、一種の怪力を眺めた。しかし千圓拵へて預ける見込の到底付かない彼は、細君の父に向つて其方法を訊く氣にもならずについ今日迄過ぎたのである。

「そんなに貧乏する筈がないだらうぢやないか。何ぼ何だつて」

「でも仕方がありませんわ、廻り合せだから」

産といふ肉體の苦痛を眼前に控へてゐる細君の氣息遣はたゞでさへ苦々しかつた。健三は默つて氣の毒さうな其腹と、光澤の惡い其頬とを眺めた。

昔田舍で結婚した時、彼女の父が何處からか浮世繪風の美人を描いた下等な團扇を四五本買つて持つて來たので、健三は其一本をぐる／＼廻しながら、隨分俗なものだと評したら、父は

すぐ所置を付けようと答へた事があつたが、健三は今自分が新調して作つた外套を細君の父に遣つて、寧ろ満足だらうといふ気には迚もなれなかつた。いくら困つたつて彼んなものを着と思ふと寧ろ情なくなつた。

「でもよく着られるね」

「見つともなくつても寒いよりは好いでせう」

細君は淋しさうに笑つた。

七十三

中一日置いて彼が来た時、健三は久し振で細君の父に会つた。

年輩から云つても、経歴から見ても、健三よりずつと世間馴れた父は、何時も自分の娘婿に対して鄭寧であつた。或時は不自然に映る位鄭寧過ぎた。然しそれが彼を現はす凡てではなかつた。裏側には反対のものが所々に起伏してゐた。

官僚式に出来上つた彼の眼には、健三の態度が最初から頗る横着に見えた。超えてはならない階段を無躾に飛び越すやうにも思はれた。其上彼は無暗に自ら任じてゐるらしい健三の高慢ちきな所を喜ばなかつた。腹にある事を何でも口外して憚らない健三の無作法も気に入らなかつた。乱暴とより外に取りやうのない一徹一図な点も非難の標的になつた。

健三の稚気を軽蔑した彼は、形式の心得もなく無茶苦茶に近付いて来ようとする健三を表面上鄭寧な態度で遠ざけた。すると二人は其処で留まつたなり動けなくなつた。二人は或る間隔を置いて、相手の短所を眺めなければならなかつた。だから相手の長所も判然と理解する事が出来悪くなつた。さうして二人共自分の有つてゐる欠点の大部分には決して気が付かなかつた。

然し今の彼は健三に対して疑ひもなく一時的の弱者であつた。他に頭を下げる事の嫌な健三は窮迫の結果、余儀なく自分の前に出て来た彼を見た時、すぐ同じ眼で同じ境遇に置かれた自分を想像しない訳に行かなかつた。

「如何にも苦しいだらう」

健三は此一念に制せられた。さうして彼の持ち来した金策談に耳を傾けた。けれども好い顔は為し得なかつた。心のうちでは好い顔を為し得ない其自分を呪つてゐた。

「金の話だから好い顔が出来ないんぢやない。金とは独立した不愉快の為に好い顔が出来ないのです。誤解してはいけません。私は斯んな場合に敵討をするやうな卑怯な人間とは違ひます」

細君の父の前に是丈の弁解がしたくつて堪らなかつた健三は、黙つて誤解の危険を冒すより外に仕方がなかつた。

此ぶつきら棒な健三に比べると、細君の父は余程鄭寧であつた。又落付いてゐた。傍から見れば遥に紳士らしかつた。

彼は或人の名を挙げた。

「向ふでは貴方を知つてゐるといひますが、貴方も知つてゐるんでせうね」

「知つてゐます」

健三は昔し学校にゐた時分に其男を知つてゐた。けれども深い交際はなかつた。卒業して独逸へ行つて帰つて来たら、急に職業が変つて、或大きな銀行へ入つたとか人の噂に聞いた位より外に、彼の消息は健三に伝はつてゐなかつた。

「まだ銀行にゐるんですか」

細君の父は首肯いた。然し二人が何処で何う知合になつたのか、健三には想像さへ付かなかつた。又それを詳しく訊いて見た所で仕方がなかつた。要点はたゞ其人が金を貸してくれるか、呉れないかの問題にあつた。

「で當人のいふには、貸しても好い、好いが慥な人を證人に立てゝ貰ひたいと斯ういふんです」

「成程」

「おや誰を立てたら好いのかと聞くと、貴方ならば貸しても好いと、向うでわざ／＼指名した譯なんです」

健三は自分自身を慥なものと認めるには躊躇しなかつた。然し自分自身の財力に乏しい事も職業の性質上他に知れてゐなければならない筈だと考へた。其上細君の父は交際範圍の極めて廣い人であつた。平生彼の口にする知合のうちには、健三より何の位世間から信用されて好いか分らない程有名な人がいくらでもゐた。

「何故私の判が必要なんでせう」

「貴方なら貸さうと云ふのです」

健三は考へた。

七十四

彼は今日迄證書を入れて他から金を借りた經驗のない男であつた。つい義理で判を捺いて遣つたのが本で、立派な腕を有ちながら生涯社會の底に沈んだ儘、藻搔き通しに藻搔いてゐる人の話は、いくら迂闊な彼の耳にも屢傳へられてゐた。彼は出來るなら自分の未來に關るやうな所作を避けたいと思つた。然し頑固な彼の半面には至つて氣の弱い煮え切らない或物が能く働きたがつた。此場合斷然連印を拒絶するのは、彼に取つて如何にも無情で、冷刻で、心苦しかつた。

「私でなくつちや不可いのでせうか」

「貴方なら好いといふんです」

彼は同じ事を二度訊いて同じ答へを二度受けた。

「何うも變ですね」

世事に疎い彼は、細君の父が何處へ賴んでも、もう判を押して吳れるものがないので、しまひに仕方なしに彼の所へ持つて來たのだといふ明白な事情さへ、推察し得なかつた。彼は親しく交際つた事もない其銀行家から夫程信用されるのが却つて怖くなつた。

「何んな目に逢はされるか分りやしない」

彼の心には未來に於ける自己の安全といふ懸念が十分に働いた。同時にたゞ夫丈の利害心で此問題を片付けてしまふ程彼の性格は單純に出來て居なかつた。彼の頭が彼に適當な解決を與へる迄彼は逡巡しなければならなかつた。其解決が最後に來た時ですら、彼はそれを細君の父の前に持ち出すのに多大の努力を拂つた。

「印を捺す事は何うも危險ですから已めたいと思ひます。然し其代り私の手で出來る丈の金を調へて上げませう。無論貯蓄のない私の事だから、調へるにした所で、どうせ何處から借りるより外に仕方がないのですが、出來るなら證文を書いたり判を捺したりするやうな形式上の手續を踏む金は借りたくないのです。私の有つてゐる狹い交際の方面で安全な金を工面した方が私には心持が好いのですから、先づ其方の方を一つ中つて見ませう。無論御入用丈の額は駄目です。私の手で調へる以上、私の手で返さなければならないのは無論の事ですから、身分不相當の借金は出來ません」

幾何でも融通が付けば付いた丈助かるといつた風の苦しい境遇に置かれた細君の父は、それより以上健三を強ひなかつた。

「何うぞ夫ぢや何分」

彼は健三の着古した外套に身を包んで、寒い日の下を歩いて歸つて行つた。書齋で話を濟ませた健三は、玄關から又同じ書齋に戻つたなり細君の顏を見なかつた。細君も父を玄關に

迫り出した時、夫と並んで沓脱の上に立つた丈で、遂に書齋へは入つて來なかつた。金策の事は疾うから二人に了解されてゐたから、遂に二人の間の話題にも上らずにしまつた。

けれども健三の心には既に責任の荷があつた。彼はそれを果たさなければならなかつた。彼は世帯を持つときに、火鉢や煙草盆を一所に買つて貰つた友達の宅へ、又出掛けた。

「金を貸して呉れないか」

彼は藪から棒に斯う持ち掛けた。金などを有つてゐない友達は驚いた眼をして彼を見た。彼は火鉢に手を翳しながら友達の前に逐一事情を話した。

「何うだらう」

三年間田舎のある學校で教鞭を取つてゐた頃に蓄へた友達の金は、みんな電鐵か何かの株に變形してゐた。

「おや清水に頼んで見て呉れないか」

友達の妹婿に當る清水は、下町の可なり繁華な場所で、病院を開いてゐた。

「さあ何うかなあ。彼奴も其位な金はあるだらうが、動かせるやうになつてゐるかしら。まあ訊いて見てやらう」

友達の好意は幸い徒勞にならずに濟んだ。健三の借り受けた四百圓の金が、細君の父の手に入つたのは、それから四五日經つた後の事であつた。

七十五

「己は精一杯の事をしたのだ」

健三の腹には斯ういふ安心があつた。從つて彼は自分の調達した金の價値に就いて餘り考へなかつた。感謝もするだらうとも思はない代りに、是位の補助が何の役に立つものかといふ氣も起さなかつた。それが何の方面に何う消費されたかの問題になると、全くの無知識で澄ましてゐた。細君の父も其處迄内情を打ち明ける程彼に接近して來なかつた。

從來の牆壁を取り拂ふには此機會があまりに脆弱過ぎた。若しくは二人の性格があまりに固着し過ぎてゐた。

父は健三よりも世間的に虚榮心の強い男であつた。成るべく自分を他に能く了解させようと力めるよりも、出來るだけ自分の價値を明るい光線に曝させたがる性質であつた。從つて彼を圍繞する妻子近親に對する彼の樣子は幾分か誇大に傾きがちであつた。

境遇が急に失意の方面に一轉した時、彼は自分の平生を顧みない譯に行かなかつた。彼はそれを辯解するため、健三に向つて能ふ限り左あらぬ態度を裝つた。それで遂に押し通せなくなつた揚句、彼はとう／＼健三に助力を求めたのである。けれども彼の何の位な負債に何う苦しめられてゐるかといふ巨細の事實は、遂に健三の耳に入らなかつた。健三も訊かなかつた。

二人は今迄の距離を保つた儘で互に手を出し合つた。一人が渡す金を一人が受け取つた時、二人は出した手を又引き込めた。傍でそれを見てゐた細君は默つて何とも云はなかつた。

健三が外國から歸つた當座の二人は、まだ是程に離れてゐなかつた。彼が新宅を構へて間もない頃、彼は細君の父がある鑛山事業に手を出したといふ話を聞いて驚いた事があつた。

「山を掘るんだつてね」

「えゝ、何でも新しく會社を拵へるんださうです」

彼は眉を顰めた。同時に彼は父の怪力に幾分か信用を置いてゐた。

「旨く行くのかね」

「何うですか」

健三と細君との間に斯んな簡單な會話が取り換はされた後、彼はその用事を帶びて北國のある都會へ向けて出發したといふ父の報知を細君から受け取つた。すると一週間ばかりして彼女の母が突然健三の所へ遣つて來た。父が旅先で急に病氣に罹つたので、是から自分も行かなければならないと思ふが、それに就いて旅費の都合は出來まいかといふのが母の用向であつた。

「えゝ／＼旅費位何うでもして上げますから、すぐ行つて御上げなさい―」

宿屋に寢てゐる苦しい人と、汽車で立つて行く寒い人とを心から氣の毒に思つた健三は、自分の見た事もない遠くの空の侘しさを想像の眼に浮べた。

「何しろ電報が來た丈で、詳しい事は丸で分りませんのですから」

「ぢや猶御心配でせう。成るべく早く御立ちになる方が好いでせう」

幸ひにして父の病氣は輕かつた。然し彼の手を着けかけたといふ鑛山事業はそれぎり立消になつてしまつた。

「まだ何も見付からないのかね、口は」

「有るにはあるさうですけれども旨く纏まらないんですつて―」

細君は父がある大きな都會の市長の候補者になつた話をして聞かせた。其運動費は財力のある彼の舊友の一人が負擔してくれるやうであつた。然し市の有志家が何名か打ち揃つて上京した時に、有名な政治家のある伯爵に會つて、父の適不適を問ひ訊したら、其伯爵が何うも不向だらうと答へたので、話はそれぎりで已めになつたのださうである。

「何うも困るね」

「今に何とかなるでせう」

細君は健三よりも自分の父の方を遙に餘計信用してゐた。健三も例の怪力を知らないではなかつた。

「たゞ氣の毒だからさう云ふ丈さ」

彼の言葉に嘘はなかつた。

七十六

けれども其次に細君の父が健三を訪問した時には、二人の關係がもう變つてゐた。自ら進んで母に旅費を用立つた女婿は、一歩退かなければならなかつた。彼は比較的遠い距離に立つて細君の父を眺めた。然し彼の眼に漂ふ色は冷淡でも無頓着でもなかつた。寧ろ黑い瞳から閃かうとする反感の稻妻であつた。力めて其稻妻を隱さうとした彼は、已むを得ず此鋭く光るものに冷淡と無頓着の假裝を着せた。

父は悲境にゐた。まのあたり見る父は鄭寧であつた。此二つのものが健三の自然に壓迫を加へた。積極的に突つ掛る事の出來ない彼は控へなければならなかつた。單なる無愛想の程度で我慢すべく餘儀なくされた彼には、相手の苦しい現狀と慇懃な態度とが、却つてわが天眞の流露を妨げる邪魔物となつた。彼から云へば、父は斯ういふ意味に於いて彼を苦しめに來たと同じ事であつた。父から云へば、普通の人としてさへ不都合に近い愚劣な應對振を、自分の女婿に見出すのは、堪へがたい馬鹿らしさに違ひなかつた。前後と關係のない此場丈の光景を眺める傍觀者の眼にも健三は矢張馬鹿であつた。それを承知してゐる細君にすら、夫は決して賢い男ではなかつた。

「私も今度といふ今度は困りました」

最初に斯う云つた父は健三からはか〴〵しい返事すら得なかつた。

父はやがて財界で有名な或人の名を擧げた。其人は銀行家でもあり、又實業家でもあつた。

「實は此間ある人の周旋で會つて見ましたが、

何うか旨く出來さうですよ。三井と三菱を除けば日本ではまあ彼處位なもんですから、使用人になつたからと云つて、別に私の體面に關る事もありませんし、それに仕事をする區域も廣い樣ですから、面白く働けるだらうと思ふんです」

此有力家によつて細君の父に豫約された地位といふのは、關西にある或私立の鐵道會社の社長であつた。會社の株の大部分を一人で所有してゐる其人は、自分の意志の儘に、其處の社長を選ぶ特權を有してゐたのである。然し何十株か何百株かの持主として、豫め資格を作つて置かなければならない父は、何うして金の工面をするだらう。實業に通じない健三には此疑問を解く智慧がなかつた。

「一時必要な株數だけを私の名儀に書換へて貰ふんです」

健三は父の言葉に疑ひを挾む程、彼の才能を見縊つてゐなかつた。彼と彼の家族とを目下の苦境から救濟させるといふ意味に於いても、其成功を希望しない譯に行かなかつた。然し依然として元の立場に立つてゐる事も改める譯に行かなかつた。彼の挨拶は形式的であつた。さうして幾分か彼の心の柔かい部分をわざと堅苦しくした。老巧な父は丸で其處に注意を拂はないやうに見えた。

「然し困る事に、是は今が今といふ譯に行かないのです。時機があるものですからな」

彼は懷から又一枚の辭令見たやうなものを出して健三に見せた。それには或保險會社が彼に顧問を囑託するといふ文句と、其報酬として月々彼に百圓を贈與するといふ條件が書いてあつた。

「今御話した一方の方が出來たら是は已めるか、又は出來ても續けてやるか、其邊はまだ分らないんですが、兎に角百圓でも當座の凌ぎにはなりますから」

昔し彼が政府の内意で或官職を抛つた時、當路の人は山陰道筋のある地方の知事なら轉任させても好いといふ條件を付けた事があつた。然し彼は斷然それを斥けた。彼が今大して隆盛でもない保險會社から百圓の金を貰つて、別に厭な顏をしないのも、矢張境遇の變化が彼の性格に及ぼす影響に相違なかつた。

斯うした際限のない父の態度は、動ともすると健三を自分の立場から前へ押し出さうとした。其傾向を意識するや否や彼は又後戻りをしなければならなかつた。彼の自然は不自然らしく見える彼の態度を倫理的に認可したのである。

七十七

細君の父は事務家であつた。動ともすると仕事本位の立場からばかり人を評價したがつた。乃木將軍が一時臺灣總督になつて間もなくそれを已めた時、彼は健三に向つて斯んな事を云つた。

「個人としての乃木さんは義に堅く情に篤く實に立派なものです。然し總督としての乃木さんが果して適任であるか何うかといふ問題になると、議論の餘地がまだ大分あるやうに思ひます。個人の徳は自分に親しく接觸する左右のものには能く及ぶかも知れませんが、遠く離れた被治者に利益を與へようとするには不十分です。其處へ行くと矢つ張手腕ですね。手腕がなくつちや、何んな善人でもたゞ坐つてゐるより外に仕方がありませんからね」

彼は在職中の關係から或會の事務一切を管理してゐた。侯爵を會頭に頂く其會は、彼の力で設立の主意を綺麗に事業の上で完成した後、彼の手元に一萬圓程の剩餘金を委ねた。官途に緣がなくなつてから、不如意に不如

意の藏いた彼は、つい其委託金に手をつけた。さうして何時の間にか全部を消費してしまつた。然し彼は自家の信用を維持するために誰にもそれを打ち明けなかつた。從つて彼は此預金から當然生まれて來る百圓近くの利子を毎月調達して、帳面を繕はなければならなかつた。自家の經濟よりも却つて此方を苦に病んでゐた彼が、公生涯の持續に絶對に必要な其百圓を、月々保險會社から貰ふやうになつたのは、當時の彼の心中に立入つて考へて見ると、全く嬉しいに違なかつた。

餘程後になつて始めて此話を細君から聽いた健三は、彼女の父に對して新たな同情を感じた丈で、不德義漢として彼を惡む氣は更に起らなかつた。さういふ男の娘と夫婦になつてゐるのが恥づかしいなどゝは更に思はなかつた。然し細君に對しての健三は、此點に關して殆ど無言であつた。細君は時々彼に向つて云つた。――

「私、どんな夫でも構ひませんわ、たゞ自分に好くして呉れさへすれば」

「泥棒でも構はないのかい」

「えゝえゝ、泥棒だらうが、詐欺師だらうが何でも好いわ。たゞ女房を大事にして呉れゝば、それで澤山なのよ。いくら偉い男だつて、立派な人間だつて、宅で不親切ぢや私にや何にもならないんですもの」

實際細君は此言葉通りの女であつた。健三も其意見には贊成であつた。けれども彼の推察は月の暈の樣に細君の言外迄滲み出した。學問許りに屈託してゐる自分を、彼女が斯ういふ言葉で餘所ながら非難するのだと云ふ臭が何處やらでした。然しそれよりも遙に強く、夫の心を知らない彼女が斯んな態度で暗に自分の父を辯護するのではないかといふ感じが健三の胸を打つた。

「己はそんな事で人と離れる人間ぢやない」

自分を細君に説明しようと力めなかつた彼も、獨り辯解の言葉を繰り返す事は忘れなかつた。

然し細君の父と彼との交情に、自然の溝渠が出來たのは、やはり父の重きを置き過ぎてゐる手腕の結果としか彼には思へなかつた。

健三は正月に父の所へ禮に行かなかつた。恭賀新年といふ端書丈を出した。父はそれを寛假さなかつた。表向それを咎める事もしなかつた。彼は十二三になる末の子に、同じく恭賀新年といふ曲りくねつた字を書かして、其子の名前で健三に賀狀の返しをした。斯ういふ手腕で彼に返報する事を巨細に心得てゐた彼は、何故健三が細君の父たる彼に、賀正を口から述べなかつたかの原因に就いては全く無反省であつた。

一事は萬事に通じた。利が利を生み、子に子が出來た。二人は次第に遠ざかつた。已むを得ないで犯す罪と、遣らんでも濟むのにわざと遂行する過失との間に、大變な區別を立てゝゐる健三は、性質の宜しくない此後者を非常に惡み出した。

七十八

「與し易い男だ」

實際に於いて與し易い或物を多量に有つてゐると自覺しながらも、健三は他から斯う思はれるのが癪に障つた。

彼の神經は此癇癪を乘り超えた人に向つて鋭い懷かしみを感じた。彼は群集のうちにあつて直ぐさういふ人を物色する事の出來る眼を有つてゐた。けれども彼自身は何うしても其域に達せられなかつた。だから猶さういふ人が眼に着いた。又さういふ人を餘計尊敬したくなつた。

同時に彼は自分を罵つた。然し自分を罵らせるやうにした相手をば更に烈しく罵つた。

斯くして細君の父と彼との間には自然の造つた溝渠が次第に出来上つた。彼に對する細君の態度も暗にそれを手傳つたには相違なかつた。

二人の間柄が離れ〳〵になると、細君の心は段々生家の方へ傾いて行つた。生家でも同情の結果、冥々の裡に細君の肩を持たなければならなくなつた。然し細君の肩を持つといふ事は、或場合に於いて、健三を敵とする意味に外ならなかつた。二人は益離れる丈であつた。

幸ひにして自然は緩和剤としての歇私的里を細君に與へた。發作は都合好く二人の關係が緊張した間際に起つた。健三は時々便所へ通ふ廊下に俯伏になつて倒れてゐる細君を抱き起して床の上迄連れて來た。眞夜中に雨戸を一枚明けた縁側の端に蹲踞つてゐる彼女を、後から兩手で支へて、寢室へ戻つて來た經驗もあつた。

そんな時に限つて、彼女の意識は何時でも朦朧として夢よりも分別がなかつた。瞳孔が大きく開いてゐた。外界はたゞ幻影のやうに映るらしかつた。

枕元に坐つて彼女の顔を見詰めてゐる健三の眼には何時でも不安が閃いた。時としては不憫の念が凡てに打ち勝つた。彼は能く氣の毒な細君の亂れかゝつた髪に櫛を入れて遣つた。汗ばんだ額を濡れ手拭で拭いて遣つた。たまには氣を慥にするために、顔へ霧を吹き掛けたり、口移しに水を飲ませたりした。

發作の今よりも劇しかつた昔の樣も健三の記憶を刺戟した、

或時の彼は毎夜細い紐で自分の帯と細君の帯とを繋いで寝た。紐の長さを四尺程にして、寝返りが充分出來るやうに工夫された此用意は、細君の抗議なしに幾晩も繰り返された。

或時の彼は細君の鳩尾へ茶碗の糸底を宛がつて、力任せに押し付けた。それでも踏ん反り返らうとする彼女の魔力を此一點で喰ひ留めなければならない彼は冷たい油汗を流した。

或時の彼は不思議な言葉を彼女の口から聞かされた。

「御天道さまが來ました。五色の雲へ乗つて來ました。大變よ、貴夫―」

「私の赤ん坊は死んぢまつた。私の死んだ赤ん坊が來たから行かなくつちやならない。そら其處にゐるぢやありませんか。桔槹の中に。私一寸行つて見て來るから放して下さい」

流産してから間もない彼女は、抱き竦めにかゝる健三の手を振り拂つて、斯う云ひながら起き上らうとしたのである。

細君の發作は健三に取つての大いなる不安であつた。然し大抵の場合には其不安の上に、より大いなる慈愛の雲が靉靆いてゐた。彼は心配よりも可哀想になつた。弱い憐れなものゝ前に頭を下げて、出來得る限り機嫌を取つた。細君も嬉しさうな顔をした。

だから發作に故意だらうといふ疑ひの掛からない以上、また餘りに顰蹙を強ひられて、何うでも勝手にしろといふ氣にならない以上、最後に其度數が自然の同情を妨げて、何でも己が苦しめるのかといふ不平が高まらない以上、細君の病氣は二人の仲を和げる方法として、健三に必要であつた。

不幸にして細君の父と健三との間には斯ういふ重寶な緩和剤が存在してゐなかつた。從つて細君が本で出來た兩者の疎隔は、たとひ夫婦の關係が常に復した後でも、一寸埋める譯に行かなかつた。それは不思議な現象であつた。けれども事實に相違なかつた。

七十九

不合理な事の嫌な健三は心の中でそれを苦に病んだ。けれども別に何うする料簡も出さなかつた。彼の性質はむきでもあり一図でもあつたと共に頗る消極的な傾向を帯びてゐた。

「己にそんな義務はない」

自分に訊いて、自分に答を得た彼は、其答を根本的なものと信じた。彼は何時までも不愉快の中で起臥する決心をした。成行が自然に解決を付けて呉れるだらうとさへ予期しなかつた。

不幸にして細君も亦此点に於いて何処迄も消極的な態度を離れなかつた。彼女は何か事件があれば動く女であつた。他から頼まれると男より邁進する場合もあつた。然しそれは眼前に手で触れられる丈の明瞭な或物を摑まへた時に限つてゐた。所が彼女から見た夫婦関係には、そんな物が何処にも存在してゐなかつた。自分の父と健三の間にも是といふ程の破綻は認められなかつた。大きな具象的な変化でなければ事件と認めない彼女は其他を閑却した。自分と、自分の父と、夫との間に起る精神状態の動揺は、手の着けやうのないものだと観じてゐた。

「だつて何もないぢやありませんか」

裏面に其動揺を意識しつゝ、彼女は斯う答へなければならなかつた。彼女に最も正当と思はれた此答が、時として虚偽の響をもつて健三の耳を打つ事があつても、彼女は決して動かなかつた。仕舞に何うなつても構はないといふ投げ遣りの気分が、単に消極的な彼女を猶の事消極的に練り固めて行つた。

斯くして夫婦の態度は悪い所で一致した。相互に不調和を永続するために一致と評されても仕方のない此一致は、根強い彼等の性格から割り出されてゐた。偶然といふよりも寧ろ必然の結果であつた。互に顔を見合せた彼等は、相手の人相で自分の運命を判断した。

細君の兄が健三の手で調達された金を受取つて帰つてから、それを特別の問題ともしなかつた夫婦は、却つて余事を話し合つた。

「産婆は何時頃生れると云ふのかい」

「何時つて別段云ひもしませんが、もう直です」

「用意は出来てるのかい」

「えゝ、奥の戸棚の中に入つてゐます」

健三には何が這入つてゐるのか分らなかつた。細君は苦しさうに大きな溜息を吐いた。

「何しろ斯う重苦しくつちや堪らない。早く生れてくれなくつちや」

「今度は死ぬかも知れないつて云つてたぢやないか」

「えゝ、死んでも何でも構はないから、早く生んぢまひたいわ」

「どうも御気の毒さまだな」

「好いわ、死ねば貴方の所為だから」

健三は遠い田舎で細君が長女を生んだ時の光景を憶ひ出した。不安さうに苦い顔をしてゐた彼が、産婆から少し手を貸して呉れと云はれて産室へ入つた時、彼女は骨に応へるやうな恐ろしい力でいきなり健三の腕に獅噛み付いた。さうして拷問でもされる人のやうに唸つた。彼は自分の細君が身体の上に受けつゝある苦痛を精神的に感じた。自分が罪人ではないかといふ気さへした。

「産をするのも苦しいだらうが、それを見てゐるのも苦いものだぜ」

「だから何処かへ遊びにでも入らつしやいな」

「一人で生めるかい」

細君は何とも答へなかつた。夫が外国へ行つてゐる留守に、次の娘を生んだ時の事などは丸で口にしなかつた。健三も訊いて見ようとは思はなかつた。生れ付き心配性な彼は、細君の

唸声を余所にして、ぶら〳〵外を歩いてゐられるやうな男ではなかつた。

産婆が次に顔を出した時、彼は念を押した。

「一週間以内かね」

「いえもう少し後でせう」

健三も細君も其気でゐた。

八十

日取が狂つて豫期より早く産氣づいた細君は、苦しさうな聲を出して、側に寢てゐる夫の夢を驚かした。

「先刻から急に御腹が痛み出して……」

「もう出さうなのかい」

健三には何の位の程度で細君の腹が痛んでゐるのか分らなかつた。彼は寒い夜の中に夜具から顔丈出して、細君の様子をそつと眺めた

「少し撫つて遣らうか」

起き上る事の億劫な彼は出來る丈口先で間に合せやうとした。彼は產に就いての經驗をたゞ一度しか有つてゐなかつた。其經驗も大方は忘れてゐた。けれども長女の生れる時には、斯ういふ痛みが、潮の滿干のやうに、何度も來たり去つたりしたやうに思へた。

「さう急に生れるもんぢやないだらうな、子供つてものは。一仕切痛んではまた一仕切治まるんだらう」

「何だか知らないけれども段々痛くなる丈ですわ」

細君の態度は明かに彼女の言葉を證據立てた。凝と蒲團の上に落付いてゐられない彼女は、枕を外して右を向いたり左へ動いたりした。男の健三には手の着けやうがなかつた。

「產婆を呼ばうか」

「えゝ、早く」

職業柄產婆の宅には電話が掛つてゐたけれども、彼の家にそんな氣の利いた設備のあらう筈はなかつた。至急を要する場合が起るたびに、彼は何時でも掛りつけの近所の醫者の所へ驅けつけるのを例にしてゐた。

初冬の暗い夜はまだ明け離れるのに大分間があつた。彼は其人と其人の門を敲く下女の迷惑を察した。然し夜明迄安閑と待つ勇氣がなかつた。寢室の襖を開けて、次の間から茶の間を通つて、下女部屋の入口迄來た彼は、すぐ召使の一人を急き立てゝ暗い夜の中へ追ひ遣つた。

彼が細君の枕元へ歸つて來た時、彼女の痛みは益劇しくなつた。彼の神經は一分毎に門前で停る車の響を待受けなければならない程に緊張して來た。

產婆は容易に來なかつた。細君の唸る聲が絶間なく靜かな夜の室を不安に攪き亂した。五分經つか經たないうちに、彼女は「もう生れます」と夫に宣告した。さうして今迄我慢に我慢を重ねて來たやうな叫び聲を一度に揚げると共に胎兒を分娩した。

「確かりしろ」

すぐ立つて蒲團の裾の方に廻つた健三は、何うして好いか分らなかつた。其時例の洋燈は細長い火蓋の中で、死のやうに靜かな光を薄暗く室内に投げた。健三の眼を落してゐる邊は、夜具の縞柄さへ判然しないぼんやりした陰で一面に裹まれてゐた。

彼は狼狽した。けれども洋燈を移して其處を照すのは、男子の見るべからざるものを强ひて見るやうな心持がして氣が引けた。彼は已を得ず、暗中に摸索した。彼の右手は忽ち一種異様の觸覺をもつて、今迄經驗した事のない或物に觸れた。其或物は寒天のやうにぷり〳〵してゐた。さうして輪廓からいつても恰好の判然しない何かの塊に過ぎなかつた。彼は氣味の惡い感じを彼の全身に傳へる此塊を輕く指頭で撫でゝ見た。塊は動きもしなければ泣きも

しなかつた。たゞ撫でるたんびにぷり／＼した寒天のやうなものが剥げ落ちるやうに思へた。若し強く抑へたり持つたりすれば、全體が屹度崩れて仕舞ふに違ないと彼は考へた。彼は恐ろしくなつて急に手を引込めた。

「然し此儘にして放つて置いたら、風邪を引くだらう、寒さで凍えてしまふだらう」

死んでゐるか生きてゐるかさへ辨別のつかない彼にも斯ういふ懸念が湧いた。彼は忽ち出産の用意が戸棚の中に入れてあるといつた細君の言葉を思ひ出した。さうしてすぐ自分の後部にある唐紙を開けた。彼は其處から多量の綿を引き摺り出した。脱脂綿といふ名さへ知らなかつた彼は、それを無暗に千切つて、柔かい塊の上に載せた。

八十一

其内待ちに待つた産婆が來たので、健三は漸く安心して自分の室へ引取つた。

夜は間もなく明けた。赤ん坊の泣く聲が家の中の寒い空氣を顫はせた。

「御安産で御目出たう御座います」

「男かね女かね」

「女の御子さんで」

産婆は少し氣の毒さうに中途で句を切つた。

「又女か」

健三にも多少失望の色が見えた。一番目が女、二番目が女、今度生れたのも亦女、都合三人の娘の父になつた彼は、さう同じものばかり生んで何うする氣だらうと、心の中で暗に細君を非難した。然しそれを生ませた自分の責任には思ひ到らなかつた。

田舎で生れた長女は肌理の濃やかな美しい子であつた。健三はよく其子を乳母車に乗せて町の中を後から押して歩いた。時によると、天使のやうに安らかな眠りに落ちた顔を眺めながら宅へ歸つて來た。然し當にならないのは想像の未來であつた。健三が外國から歸つた時、人に伴れられて彼を新橋に迎へた此娘は、久し振りに父の顔を見て、もつと好いお父さまかと思つたと傍のものに語つた如く、彼女自身の容貌もしばらく見ないうちに悪い方に變化してゐた。彼女の顔は段々丈が詰つて來た。輪廓に角が立つた。健三は此娘の容貌の中に、いつか成長しつゝある自分の相好の悪い所を明かに認めなければならなかつた。

次女は年が年中腫物だらけの頭をしてゐた。風通しが悪いからだらうといふのが本で、とうとう髪の毛をぢよぎ／＼に剪つてしまつた。顋の短い眼の大きな其子は、海坊主の化物のやうな風をして、其處いらをうろ／＼してゐた。

三番目の子丈が器量好く育たうとは親の慾目にも思へなかつた。

「あゝ云ふものが續々生れて來て、必竟何うするんだらう」

彼は親らしくもない感想を起した。その中には、子供ばかりではない、斯ういふ自分や自分の細君なども、必竟何うするんだらうといふ意味も朧氣に交つてゐた。

彼は外へ出る前に一寸寝室へ顔を出した。細君は洗ひ立てのシーツの上に穏かに寝てゐた。子供も小さな附屬物のやうに、厚い綿の入つた新調の夜具蒲團に包まれたまゝ、傍に置いてあつた。其子供は赤い顔をしてゐた。昨夜暗闇で彼の手に觸れた寒天のやうな肉塊とは全く感じの違ふものであつた。

一切が綺麗に始末されてゐた。其處いらには汚れ物の影さへ見えなかつた。夜來の記憶は跡形もない夢らしく見えた。彼は産婆の方を向いた。

「蒲團は換へて遣つたのかい」

「えゝ、蒲團も敷布も換へて上げました」

「まあ好く早く片付けてくれたんだね」

産婆はさも不足さうであつた。若い時から獨身で通して來た此女の言語態度に何處となく男らしかつた。

「貴方が脱脂綿を皆な使つて御仕舞になつたもんだから、足りなくつて大變困りましたよ」

「左右だらう、隨分驚いたからね」

斯う答へながら健三は大して氣の毒な思ひもしなかつた。それよりも多量に血を失つて蒼い顏をしてゐる細君の方が懸念の種になつた。

「何うだ」

細君は微に眼を開けて、枕の上で輕く肯いた。健三は其儘外へ出た。

例刻に歸つた時、彼は洋服のまゝで又細君の枕元に坐つた。

「何うだ」

然し細君はもう肯かなかつた。

「何だか變な樣です」

彼女の顏に今朝見た折と違つて熱で火熱つてゐた。

「心持が惡いのかい」

「えゝ」

「產婆を呼びに遣らうか」

「もう來るでせう」

產婆は來る筈になつてゐた。

八十二

やがて細君の腰の下に洗滌器が宛がはれた。

「血が少し出ましたね」

產婆は斯う云つて度盛の柱の中に上つた水銀を振り落した。彼女は比較的言葉寡であつた。用心のため產科の醫者を呼んで診て貰つたら何うだといふ注意さへせずに歸つてしまつた。

「大丈夫なのかな」

「何うですか」

健三は全くの無知識であつた。熱さへ出ればすぐ產褥熱ではなからうかといふ危惧の念を起した。然し掛り付けに來た產婆に信賴してゐる細君の方が却つて平氣であつた。

「何うですかつて、御前の身體ぢやないか」

細君は何とも答へなかつた。健三から見ると、死んだつて構はないといふ表情が其處に出てゐるやうに思へた。

「人が斯んなに心配して遣るのに」

此感じを[illegible]る日[illegible]持ち續けた彼は、何時もの通り朝早く出て行つた。さうして午後に歸つて來て、細君の熱がもう退めてゐる事に氣が付いた。

「矢つ張何でもなかつたのかな」

「えゝ、たゞ何時又出て來るか分りませんわ」

「產をすると、そんなに熱が出たり引つ込んだりするものかね」

健三は眞面目であつた。細君は淋しい頰に微笑を洩らした。

熱は幸ひにしてそれきり出なかつた。產後の經過は先づ順當に行つた。健三は既定の三週間を床の上に過すべく命ぜられた細君の枕元へ來て、時々話をしながら坐つた。

「今度は死ぬ死ぬつて云ひながら、平氣で生きてゐるぢやないか」

「死んだ方が好ければ何時でも死にます」

「それは御隨意だ」

夫の言葉を冗談半分に聽いてゐられるやうになつた細君は、自分の生命に對して鈍いながらも一種の危險を感じた其當時を顧みなければならなかつた。

「實際今度は死ぬと思つたんですもの」

「何ういふ譯で」

「譯はないわ、たゞ思ふのに」

死ぬと思つたのに却つて普通の人より輕い產をして、豫想と事實が丁度裏表になつた事さへ、細君は氣に留めてゐなかつた。

「御前は暢気だね」
「貴方こそ暢氣よ」
細君は嬉しさうに自分の傍に寐てゐる赤ん坊の顔を見た。さうして指の先で小さい頬片を突ついて、あやし始めた。其赤ん坊はまだ人間の體裁を具へた眼鼻を有つてゐるとは云へない程變な顔をしてゐた。
「産が輕い丈あつて、少し小さ過ぎる樣だね」
「今に大きくなりますよ」
健三は此小さい肉の塊が今の細君のやうに大きくなる未來を想像した。それは遠い先にあつた。けれども中途で命の綱が切れない限り何時か來るに相違なかつた。
「人間の運命は中々片付かないもんだな」
細君には夫の言葉があまりに突然過ぎた。さうして其意味が解らなかつた。
「何ですつて」
健三は彼女の前に同じ文句を繰返すべく餘儀なくされた。
「それが何うしたの」
「何うもしないけれども、左右だから左右だといふのさ」
「詰らないわ。他に解らない事さへ云ひや、好いかと思つて」
細君は夫を捨てゝ又自分の傍に赤ん坊を引き寄せた。健三は厭な顔もせずに書齋へ入つた。
彼の心のうちには死なない細君と、丈夫な赤ん坊の外に、免職にならうとしてならずにゐる兄の事があつた。喘息で斃れようとして未だ斃れずにゐる姉の事があつた。新しい位地が手に入るやうでまだ手に入らない細君の父の事があつた。其他島田の事もお常の事もあつた。さうして自分と是等の人々との關係が皆まだ片付かずにゐるといふ事もあつた。

八十三

子供は一番氣樂であつた。生きた人形でも買つて貰つたやうに喜んで、閑さへあると、新しい妹の傍に寄りたがつた。其妹の瞬き一つさへ驚嘆の種になる彼等には、嚏でも欠でも何でも彼でも不可思議な現象と見えた。
「今に何んなになるだらう」
當面に忙殺される彼等の胸には嘗て斯うした問題が浮かばなかつた。自分達自身の今に何んなになるかをすら了解し得ない子供等は、無論今に何うするだらう抔と考へる筈がなかつた。此意味で見た彼等は細君よりも尚遠く健三を離れてゐた。外から歸つた彼は、時々洋服も脱がずに、敷居の上に立ちながら、ぼんやり是等の一團を眺めた。
「又塊つてゐるな」
彼はすぐ踵を回らして部屋の外へ出る事があつた。
時によると彼は服も改めずにすぐ其處へ胡坐をかいた。
「斯う始終湯婆ばかり入れてゐちや子供の健康に惡い。出してしまへ。第一幾何入れるんだ」
彼は何も解らない癖に好い加減な小言を云つて却つて細君から笑はれたりした。
日が重なつても彼は赤ん坊を抱いて見る氣にならなかつた。それでゐて一つ室に塊つてゐる子供と細君とを見ると、時々別な心持を起した。
「女は子供を専領してしまふものだね」
細君は驚いた顔をして夫を見返した。其處には自分が今迄無自覺で實行して來た事を、夫の言葉で突然悟らされたやうな趣もあつた。
「何で藪から棒にそんな事を仰しやるの」
「だつて左右ぢやないか。女はそれで氣に入らない亭主に敵討をする積なんだらう」
「馬鹿を仰しやい。子供が私の傍へばかり寄

り付くのは、貴夫が構ひ付けて御遣りなさらないからです」

「己を構ひ付けなくさせたものは、取も直さず御前だらう」

「何うでも勝手になさい。何ぞといふと僻みばかり云つて。どうせ口の達者な貴夫には敵ひませんから」

健三は寧ろ眞面目であつた。僻みとも口巧者とも思はなかつた。

「女は策略が好きだから不可い」

細君は床の上で寢返りをして彼方を向いた。さうして涙をぽた／＼と枕の上に落した。

「そんなに何も私を虐めなくつても……」

細君の樣子を見てゐた子供はすぐ泣き出しさうにした。健三の胸は重苦しくなつた。彼は征服されると知りながらも、まだ産褥を離れ得ない彼女の前に慰藉の言葉を竝べなければならなかつた。然し彼の理解力は依然として此同情とは別物であつた。細君の涙を拭いてやつた彼は、其涙で自分の考を訂正する事が出來なかつた。

次に額を合せた時、細君は突然夫の弱點を刺した。

「貴夫何故其子を抱いて御遣りにならないの」

「何だか抱くと險呑だからさ。首でも折ると大變だからね」

「噓を仰しやい。貴夫には女房や子供に對する情合が缺けてゐるんですよ」

「だつて御覽な、ぐた／＼して抱き慣けない男に手なんか出せやしないぢやないか」

實際赤ん坊はぐた／＼してゐた。骨などは何處にあるか丸で分らなかつた。それでも細君は承知しなかつた。彼女は昔一番目の娘に水疱瘡の出來た時、健三の態度が俄に一變した實例を證據に擧げた。

「それ迄每日抱いて遣つて居たのに、それから急に抱かなくなつたぢやありませんか」

健三は事實を打消す氣もなかつた。同時に自分の考を改めようともしなかつた。

「何と云つたつて女には技巧があるんだから仕方がない」

彼は深く斯う信じてゐた。恰も自分自身は凡ての技巧から解放された自由の人であるかのやうに。

八十四

退屈な細君は貸本屋から借りた小說を能く床の上で讀んだ。時々枕元に置いてある厚紙の汚らしい其表紙が健三の注意を惹く時、彼は細君に向つて訊いた。

「斯んなものが面白いのかい」

細君は自分の文學趣味の低い事を嘲られるやうな氣がした。

「可いぢやありませんか、貴夫に面白くなくつたつて、私にさへ面白けりや」

色々な方面に於いて自分と夫の隔離を意識してゐた彼女は、すぐ斯んな口が利きたくなつた。

健三の所へ嫁ぐ前の彼女は、自分の父と自分の弟と、それから官邸に出入する二三の男を知つてゐるぎりであつた。さうして其人々はみんな健三とは異つた意味で生きて行くものばかりであつた。男性に對する觀念をその數人から抽象して健三の所へ持つて來た彼女は、全く豫期と反對した一個の男を、彼女の夫に於いて見出した。彼女は其何方かゞ正しくなければならないと思つた。無論彼女の眼には自分の父の方が正しい男の代表者の如くに見えた。彼女の考は單純であつた。今に此夫が世間から教育されて、自分の父のやうに、型が變つて行くに違ひないといふ確信を有つてゐた。

案に相違して健三は頑強であつた。同時に細君の膠着力も固かつた。二人は二人同士で

輕蔑し合つた。自分の父を何かにつけて標準におきたがる細君は、動ともすると心の中で夫に反抗した。健三は又自分を認めない細君を忌々しく感じた。一刻な彼は遠慮なく彼女を眼下に見下す態度を公にして憚らなかつた。

「ぢや貴夫が教へて下されば好いのに。そんなに他を馬鹿にばかりなさらないで」

「御前の方に教へて貰はうといふ氣がないからさ。自分はもう是で一人前だといふ腹があつちや、己にや何うする事も出來ないよ」

誰が盲從するものかといふ氣が細君の胸にあると同時に、到底啓發しやうがないではないかといふ辯解が夫の心に潜んでゐた。二人の間に繰返される斯うした言葉爭ひは古いものであつた。然し古い丈で埒は一向開かなかつた。

健三はもう飽きたといふ風をして、手摺れのした貸本を投げ出した。

「讀むなと云ふんぢやない。それは御前の隨意だ。然し餘り眼を使はないやうにしたら好いだらう」

細君は裁縫が一番好きであつた。夜眠が冴えて寢られない時などは、一時でも二時でも構はずに、細い針の目を洋燈の下に運ばせてゐた。長女か次女が生れた時、若い元氣に任せて、相當の時期が經過しないうちに、縫物を取上げたのが本で、大變視力を惡くした經驗もあつた。

「えゝ、針を持つのは毒ですけれども、本位構はないでせう。それも始終讀んでゐるんぢやありませんから」

「然し疲れる迄讀み續けない方が好からう。でないと後で困る」

「なに大丈夫です」

まだ三十に足りない細君には過勞の意味が能く解らなかつた。彼女は笑つて取り合はなかつた。

「お前が困らなくつても己が困る」

健三はわざと手前勝手らしい事を云つた。自分の注意を無にする細君を見ると、健三はよく斯んな言葉遣ひをしたがつた。それが又夫の惡い癖の一つとして細君には數へられてゐた。

同時に彼のノートは益細かくなつて行つた。最初蠅の頭位であつた字が次第に蟻の頭程に縮まつて來た。何故そんな小さな文字を書かなければならないのかとさへ考へて見なかつた彼は、殆ど無意味に洋筆を走らせて已まなかつた。日の光の弱つた夕暮の窓の下、暗い洋燈から出る薄い灯火の影、彼は暇さへあれば彼の視力を濫費して顧みなかつた。細君に向つてした注意をかつて自分に拂はなかつた彼は、それを矛盾とも何とも思はなかつた。細君もそれで平氣らしく見えた。

八十五

細君の床が上げられた時、冬はもう荒れ果てた彼等の庭に霜柱の錐を立てようとしてゐた。

「大變荒れた事、今年は例より寒いやうね」

「血が少くなつた所爲で、さう思ふんだらう」

「左右でせうかしら」

細君は始めて氣が付いたやうに、両手を火鉢の上に翳して、自分の爪の色を見た。

「鏡を見たら顔の色でも分りさうなものだのにね」

「えゝ、そりや分つてますわ」

彼女は再び火の上に差し延べた手を返して蒼白い頰を二三度撫でた。

「然し寒い事も寒いんでせう、今年は」

健三には自分の説明を肯かない細君が可笑しく見えた

「そりや冬だから寒いに極つてゐるさ」

細君を笑ふ健三はまた人よりも一倍寒がる男であつた。ことに近頃の冬は彼の身體に嚴しく中つた。彼は已むを得ず書齋に炬燵を入れ

に、向側から腰のあたりに浸み込む冷を防いだ。神經衰弱の結果斯う感ずるのかも知れないとまでは思はなかつた彼は、自分に對する注意の足りない點に於いて、細君と異る所がなかつた。

毎朝夫を送り出してから髪に櫛を入れる細君の手には、長い髪の毛が何本となく殘つた。彼女は梳くたびに櫛の歯に絡まる其拔毛を殘り惜氣に眺めた。それが彼女には失はれた血潮よりも却つて大切らしく見えた。

「新しく生きたものを拵へ上げた自分は、其償ひとして衰へて行かなければならない」

彼女の胸には微かに斯ういふ感じが湧いた。然し彼女は其微かな感じを言葉に纏める程の頭を有つてゐなかつた。同時に其感じには手柄をしたといふ誇りと、罰を受けたといふ恨みと、が交つてゐた。いづれにしても、新しく生れた子が可愛くなるばかりであつた。

彼女はぐた〳〵して手應へのない赤ん坊を手際よく抱き上げて、其丸い頬へ自分の脣を持つて行つた。すると自分から出たものは何うしても自分の物だといふ氣が理窟なしに起つた。

彼女は自分の傍に其子を置いて、また裁ものの板の前に坐つた。さうして時々針の手を已めては、暖かさうに寢てゐるその顏を、心配さうに上から覗き込んだ。

「そりや誰の着物だい」

「矢つ張此子のです」

「そんなに幾何も要るのかい」

「えゝ」

細君は默つて手を運ばしてゐた。

健三は漸と氣が付いた樣に、細君の膝の上に置かれた大きな模樣のある切地を眺めた。

「それは姉から祝つて呉れたんだらう」

「左右です」

「下らない話だな。金もないのに止せば好いのに」

健三から貰つた小遣の中を割いて、斯ういふ贈り物をしなければ氣の濟まない姉の心持が、彼には理解出來なかつた。

「つまり己の金で己が買つたと同じ事になるんだからな」

「でも貴夫に對する義理だと思つてゐらつしやるんだから仕方がありませんわ」

姉は世間でいふ義理を克明に守り過ぎる女であつた。他から物を貰へば屹度それ以上のものを贈り返さうとして苦しがつた。

「何うも困るね、さう義理々々つて、何が義理だか解りやしない。そんな形式的な事をするより、自分の小遣を比田に借りられないやうな用心でもする方が餘程増しだ」

斯んな事に掛けると存外無頓着な細君は、強ひて姉を辯護しようともしなかつた。

「今に又何か御禮をしますから夫で好いでせう」

他を訪問する時に殆ど土産ものを持參した例のない健三は、それでもまだ不審さうに細君の膝の上にあるメリンスを見詰めてゐた。

八十六

「だから元は御姉さんの所へ皆が色んな物を持つて來たんですつて」

細君は健三の顏を見て突然斯んな事を云ひ出した。

「十のものには十五の返しをなさる御姉さんの氣性を知つてるもんだから、皆其御禮を目的に何か呉れるんださうですよ」

「十のものに十五の返しをするたつて、高が五十錢が七十五錢になる丈ぢやないか」

「夫で澤山なんでせう。さういふ人達は」

他から見ると醉興としか思はれない程細かなノートばかり拵へてゐる健三には、世の中に

そんな人間が生きてゐようとさへ思へなかつた。

「隨分厄介な交際だね。だいち馬鹿々々しいぢやないか」

「傍から見れば馬鹿々々しいやうですけれども、其中に入ると、矢つ張仕方がないんでせう」

健三は此間餘所から臨時に受取つた三十圓を、自分が何う消費してしまつたかの問題に就いて考へさせられた。

今から一箇月餘り前、彼は或る知人に賴まれて其男の經營する雜誌に長い原稿を書いた。それ迄細かいノートより外に何も作る必要のなかつた彼に取つての此文章は、違つた方面に働いた彼の頭腦の最初の試みに過ぎなかつた。彼はたゞ筆の先に滴る面白い氣分に驅られた。彼の心は全く報酬を豫期してゐなかつた。依賴者が原稿料を彼の前に置いた時、彼は意外なものを拾つた樣に喜んだ。

兼てから自分の座敷の如何にも殺風景なのを苦に病んでゐた彼は、すぐ團子坂にある唐木の指物師の所へ行つて、紫檀の懸額を一枚作らせた。彼はその中に、支那から歸つた友達に貰つた北魏の二十品といふ石摺のうちにある一つを擇り出して入れた。それから其額を環の着いた細長い胡麻竹の下へ振ら下げて、床の間の釘へ懸けた。竹に丸味があるので壁に落付かないせゐか、額は靜かな時でも斜に傾いた。

彼は又團子坂を下りて谷中の方へ上つて行つた。さうして其處にある陶器屋から一個の花瓶を買つて來た。花瓶は朱色であつた。中に薄い黃で大きな草花が描かれてゐた。高さは一尺餘りであつた。彼はすぐそれを床の間の上へ載せた。大きな花瓶とふら／＼する比較的小さい懸額とは何うしても釣合が取れなかつた。彼は少し失望したやうな眼をして此不調和な配合を眺めた。けれども丸で何も無いよりは增しだと考へた。趣味に贅澤をいふ餘裕のない彼は、不滿足なうちに滿足しなければならなかつた。

彼は又本鄉通りにある一軒の呉服屋へ行つて反物を買つた。織物に就いて何の知識もない彼はたゞ番頭が見せて呉れるもののうちから好い加減な選擇をした。それは無暗に光る綿であつた。幼稚な彼の眼には光らないものより光るものの方が上等に見えた。番頭に揃ひの羽織と着物を拵へるべく勸められた彼は、遂に一匹の伊勢崎銘仙を抱へて店を出た。其伊勢崎銘仙といふ名前さへ彼はそれ迄ついぞ聞いた事がなかつた。

是等の物を買ひ調へた彼は毫も他人に就いて考へなかつた。新しく生れる子供さへ眼中になかつた。自分より困つてゐる人の生活などはてんから忘れてゐた。俗社會の義理を過重する姉に比べて見ると、彼は憐れなものに對する好意すら失つてゐた。

「さう損をして迄も義理が盡されるのは偉いね。然し姉は生れ付いての見榮坊なんだから、仕方がない。偉くない方がまだ增しだらう」

「親切氣は丸でないんでせうか」

「左右さな」

健三は一寸考へなければならなかつた。姉は親切氣のある女に違ひなかつた。

「ことによると己の方が不人情に出來てゐるのかも知れない」

八十七

此會話がまだ健三の記憶を新しく彩つてゐた頃、彼はお常から第二回の訪問を受けた。先達て見た時と略同じやうに粗末な服裝をしてゐる彼女の恰好は、寒さと共に襦袢胴着の類でも重ねたのだらう、前よりは益丸まつちくなつてゐた。健三は客のために出した火鉢をすぐ其人の方へ押し遣つた。

「いえもう御構ひ下さいますな。今日は大分御暖かで御座いますから」

外部には穏かな日が、障子に嵌めた硝子越に薄く光つてゐた。

「あなたは年を取つて段々御肥りになるやうですね」

「えゝ御蔭さまで身體の方はまことに丈夫で御座います」

「そりや結構です」

「其代り身上の方はたゞ痩せる一方で」

健三には老後になつてから斯うむく〳〵肥る人の健康が疑はれた。少なくとも不自然に思はれた、何處か不氣味に見える處もあつた。

「酒でも飲むんぢやなからうか」

斯んな推察さへ彼の胸を横切つた。

お常の肌身に着けてゐるものは悉く古びてゐた。幾度水を潜つたか分らない其着物なり羽織なりは、何處かに絹の光が殘つてゐるやうで、又變にごつ〳〵してゐた。たゞ何んなに時代を食つても、綺麗に洗張が出來てゐる所に彼女の氣性が見える丈であつた。健三は丸いながら如何にも窮屈さうな其人の姿を眺めて、彼女の生活狀態と彼女の口に距離のない事を知つた。

「何處を見ても困る人だらけで弱りますね」

「此方などが困つてゐらしつちやあ、世の中に困らないものは一人も御座いません」

健三は辯解する氣にさへならなかつた。彼はすぐ考へた。

「此人は己を自分より金持と思つてゐるやうに、己を自分より丈夫だとも思つてゐるのだらう」

近頃の健三は實際健康を損つてゐた。それを自覺しつゝ、彼は醫者にも診て貰はなかつた。友達にも話さなかつた。たゞ一人で不愉快を忍んでゐた。然し身體の未來を想像するたんびに彼はむしやくしやした。或時は他が自分を斯んなに弱くしてしまつたのだといふ樣な氣を起して、相手のないのに腹を立てた。

「年が若くつて起居に不自由さへなければ丈夫だと思ふんだらう。門構の宅に住んで下女さへ使つてゐれば金でもあると考へるやうに」

健三は默つてお常の顔を眺めてゐた。同時に彼は新しく床の間に飾られた花瓶と其後に懸つてゐる懸額とを眺めた。近いうちに袖を通すべきぴか〳〵する反物も彼の心の中にあつた。彼は何故此年寄に對して同情を起し得ないのだらうかと怪しんだ。

「ことによると己の方が不人情なのかも知れない」

彼は姉の上に加へた評をもう一遍腹の中で繰返した。さうして「何不人情でも構ふものか」といふ答を得た。

お常は自分の厄介になつてゐる娘婿の事に就いて色々な話をし始めた。世間一般によく見る通り、其人の手腕がすぐ彼女の問題になつた。彼女の手腕といふのは、つまり月々入る金の意味で、其金より外に人間の價値を定めるものは、彼女に取つて、廣い世界に一つも見當らないらしかつた。

「何しろ取高が少ないもんですから仕方が御座いません。もう少し稼いで呉れると好いのですけれども」

彼女は自分の娘婿を捉まへて愚鈍だとも無能だとも云はない代りに、毎月彼の勞力が産み出す收入の高を健三の前に竝べて見せた。恰も物指で反物の寸法さへ計れば、縞柄だの地質だのは、丸で問題にならないと云つた風に。

生憎健三はさうした尺度で自分を計つて貰ひたくない商賣をしてゐる男であつた。彼は冷淡に彼女の不平を聞き流さなければならなかつた。

八十八

好い加減な時分に彼は立つて書齋に入つた。机の上に載せてある紙入を取つて、そつと中を改めると、一枚の五圓札があつた。彼はそれを手に握つた儘元の座敷へ歸つて、お常の前へ置いた。

「失禮ですがこれで俥へでも乘つて行つて下さい」

「そんな御心配を掛けては濟みません。さういふ積で上つたのでは御座いませんから」

彼女は辭退の言葉と共に紙幣を受け納めて懷へ入れた。

小遣を遣る時の健三が此前と同じ挨拶を用ひたやうに、それを貰ふお常の辭令も最初と全く違はなかつた。其上偶然にも五圓といふ金高さへ一致してゐた。

「此次來た時に、もし五圓札が無かつたら何うしよう」

健三の紙入がそれ丈の實質で始終充たされてゐない事は其所有主の彼に知れてゐるばかりで、お常に分る筈がなかつた。三度目に來るお常を豫想した彼が、三度目に遣る五圓を豫想する譯に行かなかつた時、彼は不圖馬鹿々々しくなつた。

「是からあの人が來ると、何時でも五圓遣らなければならないやうな氣がする。つまり姉が要らざる義理立をするのと同じ事なのかしら」

自分の關係した事ぢやないと云つた風に熨斗を動かして居た細君は、手を休めずに斯ういつた。

「無いときは遣らないでも好いぢやありませんか。何もさう見榮を張る必要はないんだから」

「無い時に遣らうたつて、遣れないのは分つてるさ」

二人の問答はすぐ途切れてしまつた。消えかかつた炭を熨斗から火鉢へ移す音が其間に聞えた。

「何うして又今日は五圓入つてゐたんです。貴夫の紙入に」

健三は床の間に釣り合はない大きな朱色の花瓶を買ふのに四圓いくらか拂つた。懸額を誂へるとき五圓なにがしか取られた。指物師が百圓に負けて置くから買はないかと云つた立派な紫檀の書棚をじろ〱見ながら、彼は其十分の一にも足らない代價を大事さうに懷中から出して職人の手に渡した。彼はまたぴか〱する一匹の伊勢崎銘仙を買ふのに十圓餘りを費やした。友達から受取つた原稿料が斯う形を變へたあとに、手垢の付いた五圓札がたつた一枚殘つたのである。

「實はまだ買ひたいものがあるんだがな」

「何を御買ひになる積だつたの」

健三は細君の前に特別な品物の名前を擧げる事が出來なかつた。

「澤山あるんだ」

慾に際限のない彼の言葉は簡單であつた。夫と懸け離れた好尚を有つてゐる細君は、それ以上追窮する面倒を省いた代りに、外の質問を彼に掛けた。

「あの御婆さんは御姉さんなんぞより餘程落付いてゐるのね。あれぢや島田つて人と宅で落ち合つても、さう喧嘩もしないでせう」

「落ち合はないからまだ仕合せなんだ。二人が一所の座敷で顏を見合せでもして見るがいゝ、それこそ堪らないや。一人づゝ相手にしてゐるんでさへ澤山な所へ持つて來て」

「一分でも矢つ張り喧嘩が始まるでせうか」

「喧嘩は兎に角、己の方が厭ぢやないか」

「二人ともまだ知らないやうね。片つ方が宅へ來る事を」

「何うだか」

島田はかつてお常の事を口にしなかつた。お常も健三の豫期に反して、島田に就いては何も語らなかつた。

「あの御婆さんの方がまだ彼の人より好いでせう」

「何うして」

「金を貰ふと默つて歸つて行くから」

島田の請求が一回毎に増長するのに比べると、お常の態度は寧ろ尋常に違なかつた。

八十九

日ならず鼻の下の長い島田の顔が又健三の座敷に現はれた時、彼はすぐお常の事を聯想した。

彼等だつて生れ付いての敵同志でない以上、仲の好い昔もあつたに違ひない。他から爪に灯を點すやうだと云はれるのも構はずに、金ばかり溜めた當時は、何んなに樂しかつたらう。何んな未來の希望に支配されてゐただらう。彼等に取つて睦ましさの唯一の記念とも見るべき其金が何處かへ飛んで行つてしまつた後、彼等は夢のやうな自分達の過去を、果して何う眺めてゐるだらう。

健三はもう少しでお常の話を島田にする所であつた。然し過去に無感覺な表情しか有たない島田の顔は、何事も覺えてゐないやうに鈍かつた。昔の怨惡、古い愛執、そんなものは當時の金と共に彼の心から消え失せて仕舞つたとしか思はれなかつた。

彼は腰から煙草入を出して、刻み煙草を雁首へ詰めた。吸殼を落すときには、左の掌で煙管を受けて、火鉢の縁を敲かなかつた。脂が詰つてゐると見えて、吸ふときにじゆう／＼音がした。彼は無言で懷中を探つた。それから健三の方を向いた。

「少し紙はありませんか、生憎煙管が詰つて」

彼は健三から受取つた半紙を割いて小撚を拵へた。それで二返も三返も羅宇の中を掃除した。彼は斯ういふ事をするのに最も馴れた人であつた。健三は默つて其手際を見てゐた。

「段々暮になるんで嘸御忙しいでせう」

彼は疏通の好くなつた煙管をぷつ／＼と心持好ささうに吹きながら斯う云つた。

「我々の家業は暮も正月もありません。年が年中同じ事です」

「そりや結構だ。大抵の人はさうは行きませんよ」

島田がまた何か云はうとしてゐるうちに、奥で子供が泣き出した。

「おや赤ん坊のやうですね」

「えゝ、つい此間生れたばかりです」

「そりや何うも。些とも知りませんでした。男ですか女ですか」

「女です」

「へえゝ、失禮ながら是で幾人目ですか」

島田は色々な事を訊いた。それに相當な受答をしてゐる健三の胸に何んな考へが浮かんでゐるか丸で氣が付かなかつた。

出産率が殖えると死亡率も増すといふ統計上の議論を、つい四五日前ある外國の雜誌で讀んだ健三は、其時赤ん坊が何處かで一人生れれば、年寄が一人何處かで死ぬものだといふやうな理窟とも空想とも付かない變な事を考へてゐた。

「つまり身代りに誰かゞ死なければならないのだ」

彼の觀念は夢のやうにぼんやりしてゐた。詩として彼の頭をぼうつと侵す丈であつた。それをもつと明瞭になる迄理解の力で押し詰めて行けば、其身代りは取りも直さず赤ん坊の母親に違なかつた。次には赤ん坊の父親でもあつた。けれども今の健三は其處迄行く氣はなかつた。

たゞ自分の前にゐる老人にだけ意味のある眼を注いだ。何の爲に生きてゐるか殆ど意義の認めやうのない此年寄は、身代りとして最も適當な人間に違なかつた。

「何ういふ因果で斯う丈夫なのだらう」

健三は殆ど自分の想像の殘酷さ加減さへ忘れてしまつた。さうして人並でないわが健康狀態に就いては、毫も責任がないものゝ如き忌々しさを感じた。其時島田は彼に向つて突然斯う云つた。――

「お縫もとう〱亡くなつてね。御葬儀は濟んだが」

迚も助からないといふ事丈は、脊髓病といふ名前から推して、とうに承知してゐたやうなものゝ、改まつてさう云はれて見ると、健三も急に氣の毒になつた。

「さうですか。可哀想に」

「なに病氣が病氣だから迚も癒りつこないんです」

島田は平然としてゐた。死ぬのが當り前だといつたやうに煙草の輪を吹いた。

九十

然し此不幸な女の死に伴つて起る經濟上の影響は、島田に取つて死そのものよりも遙に重大であつた。健三の豫想はすぐ事實となつて彼の前に現れなければならなかつた。

「それに就いて是非一つ聞いて貰はないと困る事があるんですが」

此處迄來て健三の顏を見た島田の樣子は緊張してゐた。健三は聽かない先から其後を推察する事が出來た。

「又金でせう」

「まあ左右で。お縫が死んだんで、柴野とお藤との縁が切れちまつたもんだから、もう今迄のやうに月々送らせる譯に行かなくなつたんでね」

島田の言葉は變にぞんざいになつたり、又鄭寧になつたりした。

「今迄は金鵄勳章の年金だけはちやん〱と此方へ來たんですがね。それが急に無くなると、丸で目的が外れる樣な始末で、私も困るんです」

彼はまた調子を改めた。

「兎に角斯うなつちや、御前を措いてもう外に世話をして貰ふ人は誰もありやしない。だから何うかして呉れなくつちや困る」

「さう他にのし懸つて來たつて仕方がありません。今の私にはそれ丈の事をしなければならない因縁も何もないんだから」

島田は凝と健三の顏を見た。半ば探りを入れるやうな、半ば弱いものを脅かすやうな其眼付は、單に相手の心を激昂させる丈であつた。健三の此態度から深入の危險を知つた島田は、すぐ問題を區切つて小さくした。

「永い間の事は又緩々御話をするとして、ぢや此急場丈でも一つ」

健三には何ういふ急場が彼等の間に持ち上つてゐるのか解らなかつた。

「此暮を越さなくつちやならないんだ。何處の宅だつて暮になりや百と二百と纏まつた金の要るのは當り前だらう」

健三は勝手にしろといふ氣に成つた。

「私にそんな金はありませんよ」

「笑談云つちや不可い。是丈の構をしてゐて、其位の融通が利かないなんて、そんな筈があるもんか」

「有つても無くつても、無いから無いといふ丈の話です」

「ぢや云ふが、御前の收入は月に八百圓あるさうぢやないか」

健三は此無茶苦茶な言掛りに怒らされるより

は實に驚かされた。

「八百圓たらうが千圓だらうが、私の收入は私の收入です。貴方の關係した事ぢやありません」

島田は其處迄來て默つた。健三の答が自分の豫期に外れたといふやうな風も見えた。づう／＼しい割に頭の發達してゐない彼は、それ以上相手を何うする事も出來なかつた。

「ぢやいくら困つても助けて呉れないと云ふんですね」

「えゝ、もう一文も上げません」

島田は立ち上つた。沓脱へ下りて、開けた格子を締める時に、彼は又振り返つた。

「もう參上りませんから」

最後であるらしい言葉を一句遺した彼の眼は暗い中に輝いた。健三は敷居の上に立つて明らかに其眼を見下した。然し彼はその輝きのうちに何等の凄さも怖ろしさも又不氣味さも認めなかつた。彼自身の眸から出る怒りと不快とは優にそれらの襲撃を跳ね返すに十分であつた。

細君は遠くから暗に健三の氣色を窺つた。

「一體何うしたんです」

「勝手にするが好いや」

「また御金でも呉れろつて來たんですか」

「誰が遣るもんか」

細君は微笑しながら、そつと夫を眺めるやうな態度を見せた。

「あの御婆さんの方が細く長く續くからまだ安全ね」

「島田の方だつて、是で片付くもんかね」

健三は吐出すやうに斯う云つて、來るべき次の幕さへ頭の中に豫想した。

九十一

同時に今迄眠つてゐた記憶も呼び覺まされずには濟まなかつた。彼は始めて新しい世界に臨む人の鋭い眼をもつて、實家へ引き取られた遠い昔を鮮明かに眺めた。

實家の父に取つての健三は、小さな一個の邪魔物であつた。何しに斯んな出來損ひが舞ひ込んで來たかといふ顏付をした父は、殆んど子としての待遇を彼に與へなかつた。今迄と打つて變つた父の此態度が、生の父に對する健三の愛情を、根こぎにして枯らしつくした。彼は養父母の手前始終自分に對してにこ／＼してゐた父と、厄介物を背負ひ込んでからすぐ慳貪に調子を改めた父とを比較して一度は驚いた。次には愛想をつかした。然し彼はまだ悲觀する事を知らなかつた。發育に伴ふ彼の生氣は、いくら抑へ付けられても、下からむく／＼と頭を擡げた。彼は遂に憂鬱にならずに濟んだ。

子供を澤山有つてゐた彼の父は、毫も健三に依怙を寄せなかつた。今に世話にならうといふ下心のないのに、金を掛けるのは一錢でも惜しかつた。繋がる親子の縁で仕方なしに引き取つたやうなものゝ、飯を食はせる以外に、面倒を見て遣るのは、たゞ損になる丈であつた。

其上肝心の本人は歸つて來ても籍は復らなかつた。いくら實家で丹精して育て上げたにした所で、いざといふ時に、又伴れて行かれゝば夫迄であつた。

「食はす丈は仕方がないから食はして遣る。然し其外の事は此方ぢや構へない。先方でするのが當然だ」

父の理窟は斯うであつた。

島田は又島田で自分に都合の宜い方からばかり事狀の成行を觀望してゐた。

「なに實家へ預けて置きさへすれば何うにかするだらう。其内健三が一人前になつて少しでも働けるやうになつたら、其時表沙汰にしてゞも此方へ奪還つてしまへば夫迄だ」

健三は海にも住めなかつた。山にも居られな

かつた。兩方から突き返されて、兩方の間をまごまごしてゐた。同時に海のものも食ひ、時には山のものにも手を出した。

實父から見ても養父から見ても、彼は人間ではなかつた。寧ろ物品であつた。たゞ實父が我樂多として彼を取り扱つたのに對して、養父には今に何かの役に立てゝ遣らうといふ目算がある丈であつた。

「もう此方へ引き取つて、給仕でも何でもさせるから左右思ふが可い」

健三が或日養家を訪問した時に、島田は何かの序に斯んな事を云つた。健三は驚いて逃げ歸つた。酷薄といふ感じが子供心に淡い恐ろしさを與へた。其時の彼は幾歳だつたか能く覺えてゐないけれども、何でも長い間の修業をして立派な人間になつて世間に出なければならないといふ慾が、もう十分萌してゐる頃であつた。

「給仕になんぞされては大變だ」

彼は心のうちで何遍も同じ言葉を繰り返した。幸にして其言葉は徒勞に繰り返されなかつた。彼は何うか斯うか給仕にならずに濟んだ。

「然し今の自分は何うして出來上つたのだらう」

彼は斯う考へると不思議でならなかつた。其不思議のうちには、自分の周圍と能く鬪ひ終せたものだといふ誇りも大分交つてゐた。さうしてまだ出來上らないものを、既に出來上つたやうに見る得意も無論含まれてゐた。

彼は過去と現在との對照を見た。過去が何うして此現在に發展して來たかを疑つた。しかも其現在の爲に苦しんでゐる自分には丸で氣が付かなかつた。

彼と島田との關係が破裂したのは、此現在の御蔭であつた。彼が御常を忌むのも、姉や兄と同化し得ないのも此現在の御蔭であつた。細君の父と段々離れて行くのも亦此現在の御蔭に違ひなかつた。一方から見ると、他と反が合はなくなるやうに、現在の自分を作り上げた彼は氣の毒なものであつた。

九十二

細君は健三に向つて云つた。——

「貴夫に氣に入る人は何うせ何處にもゐないでせうよ。世の中はみんな馬鹿ばかりですから」

健三の心は斯うした諷刺を笑つて受ける程落付いてゐなかつた。周圍の事情は雅量に乏しい彼を益窮屈にした。

「御前は役に立ちさへすれば、人間はそれで好いと思つてゐるんだらう」

「だつて役に立たなくつちや何にもならないぢやありませんか」

生憎細君の父は役に立つ男であつた。彼女の弟もさういふ方面にだけ發達する性質であつた。これに反して健三は甚だ實用に遠い生れ付であつた。

彼には轉宅の手傳ひすら出來なかつた。大掃除の時にも彼は懷手をしたなり澄ましてゐた。行李一つ絡げるにさへ、彼は細紐を何う渡すべきものやら分らなかつた。

「男の癖に」

動かない彼は、傍のものゝ眼に、如何にも氣の利かない鈍物のやうに映つた。彼は猶更動かなかつた。さうして自分の本領を益反對の方面に移して行つた。

彼は此見地から、昔し細君の弟を、自分の住んでゐる遠い田舍へ伴れて行つて教育しようとした。其弟は健三から見ると如何にも生意氣であつた。家庭のうちを横行して誰にも遠慮會釋がなかつた。ある理學士に毎日自宅で課業の復習をして貰ふ時、彼は其人の前で構はず胡坐をかいた。又其人の名を何君々々と君づけに呼んだ。

「あれぢや仕方がない、私に御預けなさい。私が田舎へ連れて行つて育てるから」

健三の申出は細君の父によつて笑つて受け取られた。さうして笑つて捨てられた。彼は眼の前に暴威を恣にする我子を見て、何といふ未来の心配も抱いてゐないやうに見えた。彼ばかりか、細君の母も平気であつた。細君も一向気に掛ける様子がなかつた。

「若し田舎へ遣つて貴夫と衝突したり何かすると、折合が悪くなつて、後が困るから、それで已めたんださうです」

細君の辯解を聞いた時、健三は満更の嘘とも思はなかつた。けれども其他にまだ意味が残つてゐるやうにも考へた。

「馬鹿ぢやありません。そんな御世話にならなくつても大丈夫です」

周囲の様子から健三は謝絶の本意が却つて此処にあるのではなからうかと推察した。

成程細君の弟は馬鹿ではなかつた。寧ろ怜悧過ぎた。健三にも其点はよく解つてゐた。彼が自分と細君の未来の為に、彼女の弟を教育しようとしたのは、全く見当の違つた方面にあつた。さうして遺憾ながら其方面は、今日に至る迄いまだに細君の父母にも細君にも了解されてゐなかつた。

「役に立つばかりが能ぢやない。其位の事が解らなくつて何うするんだ」

健三の言葉は勢ひ権柄づくであつた。傷けられた細君の顔には不満の色があり〳〵と見えた。

機嫌の直つた時細君は又健三に向つた。――

「さう頭からがみ〳〵云はないで、もつと解るやうに云つて聞かして下すつたら好いでせう」

「解るやうに云はうとすれば、理窟ばかり捏ね返すつていふぢやないか」

「だからもつと解り易い様に。私に解らないやうな小六づかしい理窟は已めにして」

「それぢや何うしたつて説明しやうがない。数字を使はずに算術を遣れと注文するのと同じ事だ」

「だつて貴夫の理窟は、他を捻ぢ伏せるために用ひられるとより外に考へやうのない事があるんですもの」

「御前の頭が悪いから左右思ふんだ」

「私の頭も悪いかも知れませんけれども、中味のない空つぽの理窟で捻ぢ伏せられるのは嫌ひですよ」

二人は又同じ輪の上をぐる〳〵廻り始めた。

九十三

面と向つて夫としつくり融け合ふ事の出来ない時、細君は已むを得ず彼に背中を向けた。さうして其処に寝てゐる子供を見た。彼女は思ひ出したやうに、すぐ其子供を抱き上げた。

章魚のやうにぐにや〳〵してゐる肉の塊と彼女との間には、理窟の壁も分別の障もなかつた。自分の触れるものが取りも直さず自分のやうな気がした。彼女は温い心を赤ん坊の上に吐き掛けるために、唇を着けて所嫌はず接吻した。

「貴夫が私のものでなくつても、此子は私の物よ」

彼女の態度から斯うした精神が明かに読まれた。

其赤ん坊はまだ眼鼻立さへ判明してゐなかつた。頭には何時迄待つても殆ど毛らしい毛が生えて来なかつた。公平な眼から見ると、何うしても一個の怪物であつた。

「変な子が出来たものだなあ」

健三は正直な所を云つた。

「何処の子だつて生れたては皆此通りです」

「真逆左右でも無からう。もう少しは整つたのも生れる筈だ」

「今に御覽なさい」

細君は左も自信のあるやうな事を云つた。健三には何といふ見當も付かなかつた。けれども彼は細君が此赤ん坊のために夜中何度となく眼を覺ますのを知つてゐた。大事な睡眠を犧牲にして、少しも不愉快な顏を見せないのも承知してゐた。彼は子供に對する母親の愛情が父親のそれに比べて何の位強いかの疑問にさへ逢着した。

四五日前少し強い地震のあつた時、臆病な彼はすぐ縁から庭へ飛下りた。彼が再び座敷へ上つて來た時、細君は思ひも掛けない非難を彼の顏に投げ付けた。

「貴夫は不人情ね。自分一人好ければ構はない氣なんだから」

何故子供の安危を自分より先に考へなかつたかといふのが細君の不平であつた。咄嗟の衝動から起つた自分の行爲に對して、斯んな批評を加へられようとは夢にも思つてゐなかつた健三は驚いた。

「女にはあゝいふ時でも子供の事が考へられるものかね」

「當り前ですわ」

健三は自分が如何にも不人情のやうな氣がした。

然し今の彼は我物顏に子供を抱いてゐる細君を、却つて冷やかに眺めた。

「譯の分らないものが、いくら束になつたつて仕樣がない」

しばらくすると彼の思索がもつと廣い區域に亙つて、現在から遠い未來に延びた。

「今に其子供が大きくなつて、御前から離れて行く時期が來るに極つてゐる。御前と己と離れても、子供とさへ融け合つて一つになつてゐれば、それで澤山だといふ氣でゐるらしいが、それは間違ひだ。今に見ろ」

書齋に落付いた時、彼の感想が又急に科學的色彩を帶び出した。

「芭蕉に實が結ると翌年から其幹は枯れて仕舞ふ。竹も同じ事である。動物のうちには子を生む爲に生きてゐるのか、死ぬ爲めに子を生むのか解らないものが幾何でもある。人間も緩漫ながらそれに準じた法則に矢つ張支配されてゐる。母は一旦自分の所有するあらゆるものを犧牲にして子供に生を與へた以上、また餘りのあらゆるものを犧牲にして、其生を守護しなければなるまい。彼女が天からさういふ命令を受けて此世に出たとするならば、其報酬として子供を獨占するのは當り前だ。故意といふよりも自然の現象だ」

彼は母の立場を斯う考へ盡した後、父としての自分の立場をも考へた。さうしてそれが母の場合と何う違つてゐるかに思ひ到つた時、彼は心のうちで又細君に向つて云つた。

「子供を有つた御前は仕合せである。然し其仕合を享ける前に御前は既に多大な犧牲を拂つてゐる。是から先も御前の氣の付かない犧牲を何の位拂ふか分らない。御前は仕合せかも知れないが、實は氣の毒なものだ」

九十四

年は段々暮れて行つた。寒い風の吹く中に細かい雪片がちら〳〵と見え出した。子供は日に何度となく「もういくつ寢ると御正月」といふ唄をうたつた。彼等の心は彼等の口にする唱歌の通りであつた。來るべき新年の希望に充ちてゐた。

書齋にゐる健三は時々手に洋筆を持つた儘、彼等の聲に耳を傾けた。自分にもあゝ云ふ時代があつたのかしらと考へた。

子供は又「旦那の嫌ひな大晦日」といふ毬歌をうたつた。健三は苦笑した。然しそれも今の自

分の身の上には痛切に的中らなかつた。彼はただ厚い四つ折の半紙の束を、十も二十も机の上に重ねて、それを一枚毎に讀んで行く努力に惱まされてゐた。彼は讀みながら其紙へ、赤い印氣で棒を引いたり丸を書いたり三角を附けたりした。それから細かい數字を竝べて面倒な勘定もした。

半紙に認められたものは悉く鉛筆の走り書なので、光線の暗い所では字劃さへ判然しないのが多かつた。亂暴で讀めないのも時々出て來た。疲れた眼を上げて、積み重ねた束を見る健三は落膽した。「ペネロピーの仕事」といふ英語の俚諺が何遍となく彼の口に上つた。

「何時まで經つたつて片付きやしない」

彼は折々筆を擱いて溜息をついた。

然し片付かないものは、彼の周圍前後にまだ幾何でもあつた。彼は不審な顔をして又細君の持つて來た一枚の名刺に眼を注がなければならなかつた。

「何だい」

「島田の事に就いて一寸御目に掛りたいつていふんです」

「今差支へるからつて返して呉れ」

一度立つた細君はすぐ又戻つて來た。

「何時何つたら好いか御都合を聞かして頂きたいんですつて」

健三はそれ所ぢやないといふ顔をしながら、自分の傍に高く積み重ねた半紙の束を眺めた。細君は仕方なしに催促した。

「何と云ひませう」

「明後日の午後に來て下さいと云つて呉れ」

健三も仕方なしに時日を指定した。

仕事を中絶された彼はぼんやり烟草を吹かし始めた。所へ細君が又入つて來た。

「歸つたかい」

「えゝ」

細君は夫の前に廣げてある赤い印氣の付いた汚ならしい書きものを眺めた。夜半に何度となく赤ん坊のために起こされる彼女の面倒が健三に解らないやうに、此半紙の山を綿密に讀み通す夫の困難も細君には想像出來なかつた。――調べ物を度外に置いた彼女は、坐るとすぐ夫に訊ねた。――

「また何か左右云つて來る氣でせうね。執つ濃い」

「暮のうちに何うかしようと云ふんだらう。馬鹿らしいや」

細君はもう島田を相手にする必要がないと思つた。健三の心は却つて昔の關係上多少の金を彼に遣る方に傾いてゐた。然し話は其處迄發展する機會を得ずに餘所へ外れてしまつた。

「御前の宅の方は何うだい」

「相變らず困るんでせう」

「あの鐵道會社の社長の口はまだ出來ないのかい」

「あれは出來るんですつて。けれども左右此方の都合の好いやうに、ちよつくら一寸といふ譯には行かないんでせう」

「此暮のうちには六づかしいかね」

「迚も」

「困るだらうね」

「困つても仕方がありませんわ。何も彼もみんな運命なんだから」

細君は割合に落付いてゐた。何事も諦めてゐるらしく見えた。

九十五

見知らない名刺の持參者が、健三の指定した通り、中一日置いて再び彼の玄關に現れた時、彼はまださゝくれた洋筆先で、粗末な半紙の上に、丸だの三角だの色々な符徴を附けるのに忙がしかつた。彼の指頭は赤い印氣で所々汚れ

てゐた。彼は手も洗はずに其儘座敷へ出た。
　島田のために來た其男は、前の吉田に比べると少し型を異にしてゐたが、健三から云へば、雙方共殆ど差別のない位懸け離れた人間であつた。
　彼は縞の羽織に角帯を締めて白足袋を穿いてゐた。商人とも紳士とも片の付かない彼の樣子なり言葉遣ひなりは、健三に差配といふ一種の人柄を思ひ起させた。彼は自分の身分や職業を打明ける前に、卒然として健三に訊いた。
「貴方は私の顔を覺えて御出ですか」
　健三は驚いて其人を見た。彼の顔には何等の特徴もなかつた。強ひて云へば、今日迄たゞ世帯染みて生きて來たといふ位のものであつた。
「何うも分りませんね」
　彼は勝ち誇つた人のやうに笑つた。
「さうでせう。もう忘れても好い時分ですから」
　彼は區切を置いて又附け加へた。
「然し私や是でも貴方の坊ちやん坊ちやんて云はれた昔をまだ覺えてゐますよ」
「左右ですか」
　健三は素氣ない挨拶をしたなり、其人の顔を凝と見守つた。
「何うしても思ひ出せませんかね。ぢや御話しませう。私や昔島田さんが扱所を遣つてゐなすつた頃、あすこに勤めてゐたものです。ほら貴方が惡戯をして、小刀で指を切つて、大騒ぎをしたことがあるでせう。あの小刀は私の硯箱の中にあつたんでさあ。その時金盥に水を取つて、貴方の指を冷したのも私ですぜ」
　健三の頭には左右した事實が明らかにまだ保存されてゐた。然し今自分の前に坐つてゐる人の其時の姿などは夢にも憶ひ出せなかつた。
「その縁故で今度又私が頼まれて、島田さんの爲に上つたやうな譯合なんです」
　彼は直ぐ本題に入つた。さうして健三の豫期してゐた通り金の請求をし始めた。
「もう再び御宅へは伺はないと云つてますから」
「此間歸る時既に左右云つて行つたんです」
「で、何うでせう、此處いらで綺麗に片を付ける事にしたら。それでないと何時迄經つても貴方が迷惑するぎりですよ」
　健三は迷惑を省いてやるから金を出せと云つた風な相手の口氣を快く思はなかつた。
「いくら引つ懸つてゐたつて、迷惑ぢやありません。何うせ世の中の事は引つ懸りだらけなんですから。よし迷惑だとしても、出すまじき金を出す位なら、出さないで迷惑を我慢してゐた方が、私には餘程心持が好いんです」
　其人はしばらく考へてゐた。少し困つたといふ樣子も見えた。然しやがて口を開いた時は思ひも寄らない事を云ひ出した。
「それに貴方も御承知でせうが、離縁の際貴方から島田へ入れた書付がまだ向うの手にありますから、此際若干でも纏めたものを渡して、あの書付と引き替へになすつた方が好くはありませんか」
　健三は其書付を慥に覺えてゐた。彼が實家へ復籍する事になつた時、島田は當人の彼から一札入れて貰ひたいと主張したので、健三の父も已むを得ず、何でも好いから書いて遣れと彼に注意した。何も書く材料のない彼は仕方なしに筆を執つた。さうして今度離縁になつたに就いては、向後御互に不義理不人情な事はしたくないものだといふ意味を僅か二行餘に綴つて先方へ渡した。
「あんなものは反故同然ですよ。向で持つてゐても役に立たず、私が貰つても仕方がないんだ。もし利用出來る氣ならいくらでも利用したら好いでせう」
　健三にはそんな書付を賣り付けに掛る其人の

態度が氣に入らなかつた。

九十六

話が行き詰ると其人は休んだ。それから好い加減な時分にまた同じ問題を取り上げた。云ふ事は散漫であつた。理で押せなければ情に訴へるといふ風でもなかつた。たゞ物にさへすれば好いといふ料簡が露骨に見透かされた。收束する所なく共に動いてゐた健三は仕舞に飽きた。

「書付を買への、今に迷惑するのが厭なら金を出せのと云はれると此方でも斷るより外に仕方がありませんが、困るから何うかして貰ひたい、其代り向後一切無心がましい事は云つて來ないと保證するなら、昔の情義上少しの工面はして上げても構ひません」

「えゝそれが詰り私の來た主意なんですから、出來るなら何うかさう願ひたいもんで」

健三はそんなら何故早くさう云はないのかと思つた。同時に相手も、何故もつと早くさう云つて呉れないのかといふ顔付をした。

「ぢや何の位出して下さいます」

健三は默つて考へた。然し何の位が相當の處だか判明した目安の出て來よう筈はなかつた。其上成るべく少い方が彼の便宜であつた。

「まあ百圓位なものですね」

「百圓」

其人は斯う繰り返した。

「何うでせう、責めて三百圓位にして遣る譯には行きますまいか」

「出すべき理由さへあれば何百圓でも出します」

「御尤もだが、島田さんもあゝして困つてるもんだから」

「そんな事をいやあ、私だつて困つてゐます」

「さうですか」

彼の語氣は寧ろ皮肉であつた。

「元來一文も出さないと云つたつて、貴方の方ぢや何うする事も出來ないんでせう。百圓で惡けりや御止しなさい」

相手は漸く懸引を已めた。

「ぢや兎も角も本人によくさう話して見ます。其上で又上る事にしますから、どうぞ何分」

其人が歸つた後で健三は細君に向つた。

「とう／＼來た」

「何うしたつて云ふんです」

「又金を取られるんだ。人さへ來れば金を取られるに極つてるから厭だ」

「馬鹿らしい」

細君は別に同情のある言葉を口へ出さなかつた。

「だつて仕方がないよ」

健三の返事も簡單であつた。彼は其處へ落付く迄の筋道を委しく細君に話してやるのさへ面倒だつた。

「そりや貴夫の御金を貴夫が御遣りになるんだから、私何も云ふ譯はありませんわ」

「金なんかあるもんか」

健三は擲き付ける樣に斯う云つて、又書齋へ入つた。其處には鉛筆で一面に汚された紙が所々赤く染つた儘机の上で彼を待つてゐた。彼はすぐ洋筆を取り上げた。さうして既に汚れたものを猶更赤く汚さなければならなかつた。

客に會ふ前と會つた後との氣分の相違が、彼を不公平にしはしまいかとの恐れが彼の心に起つた時、彼は一旦讀み了つたものを念のため又讀んだ。それですら三時間前の彼の標準が今の標準であるか何うか、彼には全く分らなかつた。

「神でない以上公平は保てない」

彼はあやふやな自分を辯護しながら、ずんずん眼を通し始めた。然し積重ねた半紙の束は、いくら速力を増しても盡きる期がなかつた。漸く一組を元の樣に折ると又新しく一組を開

かなければならなかつた。

「神でない以上辛抱だつてし切れない」

彼は又洋筆を放り出した。赤い印氣が血のやうに半紙の上に滲んだ。彼は帽子を被つて寒い往來へ飛び出した。

九十七

人通りの少い町を歩いてゐる間、彼は自分の事ばかり考へた。

「御前は必竟何をしに世の中に生れて來たのだ」

彼の頭の何處かで斯ういふ質問を彼に掛けるものがあつた。彼はそれに答へたくなかつた。成るべく返事を避けようとした。すると其聲が猶彼を追窮し始めた。何遍でも同じ事を繰返して已めなかつた。彼は最後に叫んだ。

「分らない」

其聲は忽ちせゝら笑つた。

「分らないのぢやあるまい。分つてゐても、其處へ行けないのだらう。途中で引懸つてゐるのだらう」

「己の所爲ぢやない。己の所爲ぢやない」

健三は逃げるやうにずん／＼歩いた。

賑やかな通りへ來た時、迎年の支度に忙しい外界は驚異に近い新しさを以て急に彼の眼を刺戟した。彼の氣分は漸く變つた。

彼は客の注意を惹くために、あらゆる手段を盡して飾り立てられた店頭を、それからそれと覗き込んで歩いた。或時は自分と全く交渉のない、珊瑚樹の根懸だの、蒔繪の櫛笄だのを、硝子越に何の意味もなく長い間眺めてゐた。

「暮になると世の中の人は屹度何か買ふものかしら」

少くとも彼自身は何も買はなかつた。細君も殆ど何も買はないと云つて可かつた。彼の兄、彼の姉、細君の父、何れを見ても、買へるやうな餘裕のあるものは一人もなかつた。みんな年を越すのに苦しんでゐる連中ばかりであつた。中にも細君の父は一番非道さうに思はれた。

「貴族院議員になつてさへゐれば、何處でも待つて呉れるんださうですけれども」

借金取に責められてゐる父の事情を夫に打ち明けた序に、細君はかつて斯んな事を云つた。

それは内閣の瓦解した當時であつた。細君の父を閑職から引張り出して、彼の辭職を餘儀なくさせた人は、自分達の退く間際に、彼を貴族院議員に推擧して、幾分か彼に對する義理を立てようとした。然し多數の候補者の中から、限られた人員を選ばなければならなかつた總理大臣は、細君の父の名前の上に遠慮なく棒を引いてしまつた。彼はつひに選に洩れた。何かの意味で保險の付いてゐない人にのみ酷薄であつた債權者は直に彼の門に逼つた。官邸を引き拂つた時に召使の數を減らした彼は、少時して自用俥を廢した。仕舞にわが住宅を擧げて人手に渡した頃は、もう何うする事も出來なかつた。日を重ね月を追つて益悲境に沈んで行つた。

「相場に手を出したのが惡いんですよ」

細君は斯んな事も云つた。

「御役人をしてゐる間は、相場師の方で儲けさせて呉れるんですつて。だから好いけれども、一旦役を退くと、もう相場師が構つて呉れないから、みんな駄目になるんださうです」

「何の事だか要領を得ないね。だいち意味さへ解らない」

「貴方に解らなくつたつて、左右なら仕方がないぢやありませんか」

「何を云つてるんだ。それぢや相場師は決して損をしつこないものに極つちまふぢやないか。馬鹿な女だな」

健三は其時細君と取り換はせた談話迄憶ひ出した。

彼は不圖氣が付いた。彼と擦れ違ふ人はみんな急ぎ足に行き過ぎた。みんな忙しさうであつた。みんな一定の目的を有つてゐるらしかつた。それを一刻も早く片付けるために、せつせと活動するとしか思はれなかつた。

或者はまるで彼の存在を認めなかつた。或者は通り過ぎる時、ちよつと一瞥を與へた。

「御前は馬鹿だよ」

稀には斯んな顏付をするものさへあつた。

彼は又宅へ歸つて赤い印氣を汚い半紙へなすくり始めた。

九十八

二三日すると島田に頼まれた男が又刺を通じて面會を求めに來た。行掛り上斷る譯に行かなかつた健三は、座敷へ出て差配じみた其人の前に再び坐るべく餘儀なくされた。

「何うも御忙しい所を度々出まして」

彼は世事慣れた男であつた。口で氣の毒さうな事をいふ割に、それ程殊勝な樣子を彼の態度の何處にも現はさなかつた。

「實は此間の事を島田によく話しました所、さういふ譯なら致し方がないから、金額はそれで宜しい、其代り何うか年内に頂戴致したい、と斯ういふんですがね」

健三にはそんな見込がなかつた。

「年内たつてもう僅かの日數しかないぢやありませんか」

「だから向ふでも急ぐ樣な譯でしてね」

「あれば今すぐ上げても好いんです。然し無いんだから仕方がないぢやありませんか」

「さうですか」

二人は少時無言の儘でゐた。

「何うでせう、其處のところを一つ御奮發は願はれますまいか。私も折角斯うして忙しい中を、島田さんのために、わざ〳〵遣つて來たもんですから」

それは彼の勝手であつた。健三の心を動かすに足る程の手數でも面倒でもなかつた。

「御氣の毒ですが出來ませんね」

二人は又沈默を間に置いて相對した。

「ぢや何時頃頂けるんでせう」

健三には何時といふ目的もなかつた。

「いづれ來年にでもなつたら何うにかしませう」

「私も斯うして頼まれて上つた以上、何とか向へ返事をしなくつちやなりませんから、せめて日限でも一つ御取極めを願ひたいと思ひますが」

「御尤もです。ぢや正月一杯とでもして置きませう」

健三はそれより外に云ひやうがなかつた。相手は仕方なしに歸つて行つた。

其晩寒さと倦怠を凌ぐために蕎麥湯を拵へて貰つた健三は、どろ〳〵した鼠色のものを啜りながら、盆を膝の上に置いて傍に坐つてゐる細君と話し合つた。

「又百圓何うかしなくつちやならない」

「貴夫が遣らないでも好いものを遣るつて約束なんぞなさるから後で困るんですよ」

「遣らないでも可いのだけれども、己は遣るんだ」

言葉の矛盾がすぐ細君を不快にした。

「さう依怙地を仰しやれば夫迄です」

「御前は人を理窟がないとか何とか云つて攻撃する癖に、自分にや大變形式ばつた所のある女だね」

「貴夫こそ形式が御好きなんです。何事にも理窟が先に立つんだから」

「理窟と形式とは違ふさ」

「貴夫のは同じですよ」

「ぢや云つて聞かせるがね、己は口に丈論理た

有つてゐる男ぢやない。口にある論理は己の手にも足にも、身體全體にもあるんだ」

「そんなら貴夫の理窟がさう空つぽうに見える筈がないぢやありませんか」

「空つぽうぢやないんだもの。丁度ころ柿の粉のやうなもので、理窟が中から白く吹き出す丈なんだ。外部からくつ付けた砂糖とは違ふさ」

斯んな說明が既に細君には空つぽうな理窟であつた。何でも眼に見えるものを、しつかと手に摑まなくつては承知出來ない彼女は、此上夫と議論する事を好まなかつた。又しようと思つても出來なかつた。

「御前が形式張るといふのはね。人間の內側はどうでも、外部へ出た所丈を攫まへさへすれば、それで其人間が、すぐ片付けられるものと思つてゐるからさ。丁度御前の御父さんが法律家だもんだから、證據さへなければ文句を付けられる因縁がないと考へてゐるやうなもので……」

「父はそんな事を云つた事なんぞありやしません。私だつてさういふ上部ばかり飾つて生きてる人間ぢやありません。貴夫が不斷からそんな僻んだ眼で他を見てゐらつしやるから……」

細君の眼から涙がぽた／＼落ちた。云ふ事が其間に斷絕した。比田に遣る百圓の話が、飛んだ方角へ外れた。さうして段々こんがらかつて來た。

九十九

又二三日して細君は久し振に外出した。

「無沙汰見舞旁少し方々に廻つて來ました」

乳呑兒を抱いた儘健三の前へ出た彼女は、寒い頰を赤くして、暖い空氣の裡に尻を落付けた。

「御前の宅は何うだい」

「別に變つた事もありません。あゝなると心配を通り越して、却つて平氣になるのかも知れませんね」

健三は挨拶の仕樣もなかつた。

「あの紫檀の机を買はないかつて云ふんですけれども、緣起が惡いか、止しました」

舞葡萄とかいふ木の一枚板で中を張り詰めた其大きな唐机は、百圓以上もする見事なものであつた。かつて親類の破產者からそれを借金の抵當に取つた細君の父は、同じ運命の下に、早晚それをまた何處かに持つて行かれなければならなかつたのである。

「緣起はどうでも好いが、そんな高價いものを買ふ勇氣は當分誰方にもなささうだ」

健三は苦笑して[illegible]を吹かした。

「さう云へば貴夫、あの人に遣る御金を比田さんから請りなくつて」

細君は[illegible]に斯んな事を云つた。

「比田にそれ丈の餘裕があるのかい」

「あるのよ。比田さんは今年限り株式の方を已められたんですつて」

健三は此新しい報知を當然とも思つた。又其樣にも感じた。

「もう老朽だらうからね。然し已められゝば、猶困るだらうぢやないか」

「追つては何うなるか知れないでせうけれども、當分困るやうな事はないんですつて」

彼の會社には自分を引き立てゝ呉れた重役の一人が、或る事件で關係を絕つた事に關聯してゐるらしかつた。けれども永年勤續して來た結果、權利として彼の手に入るべき金は、一時彼の經濟狀態を潤ほすには十分であつた。

「居食をしてゐても詰らないから、誰か確な人があつたら使つて貰ひたいから何うか世話をして呉れつて、今日賴まれて來たんです」

「へえ、とう／＼金貸を遣るやうになつたのかい」

健三は平生から[illegible]の內[illegible]を[illegible]つてゐた比田だつたのを隨分[illegible]へた。自分達の[illegible]が變る

と、昨日一寸[illegible]人を[illegible]て[illegible]と、
て氣が付かない[illegible]は、反省の足りない點に
笑いて[illegible]子供染みてゐた。

「何[illegible]有利な[illegible]だらう」

細君は高利にか低利にか丸で知らなかつた。

「何でも旨く運用すると月に三四十圓の利子になるから、それを二人の小遣にして、是から先細く長く遣つて行く積だつて、御[illegible]さんがさう[illegible]いましたよ」

健三は細君のいふ利子の高から胸算用で元金を勘定して見た。

「悪くすると、又みんな損つちまふ丈だ。それよりか慾張らないで、銀行へでも預けて置いて相當の利子を取る方が安全だがな」

「だから確な人に貸したいつていふんでせう」

「確な人はそんな金は借りないさ。怖いから」

「だけど普通の利子ぢや遣つて行けないんでせうね」

「それぢや己だつて借りるのは厭ださ」

「御兄いさんも困つてるらしいつてよ」

比田は今後の方針を兄に打ち明けると同時に、先づ其手當として、兄に金を借りて呉れと頼んだのださうである。

「あなたなら金を借りて[illegible]て、頼まれたつて此方から頼む必要もないぢやないか。比田だつて金は欲しいだらうが、そんな無理な思ひ迄して借りる必要もあるまいからね」

健三は苦々しいうちにも滑稽を感じた。比田の手前勝手な氣性が此一句で能く表はれた。それを傍で見て澄ましてゐる姉の料簡も彼には不可思議であつた。血が續いてゐても兄弟といふ心持は全くしなかつた。

「御前己が借りるとでも云つたのかい」

「そんな餘計な事云やしません」

百

利子の安い高いは別問題として、比田から融通して貰ふといふ事が、健三には迚も眞面目に考へられなかつた。彼は何時も若干の小遣ひを姉に遣る身分であつた。其姉の亭主から今度は此方で金を借りるとなると、矛盾は誰の眼にも映る位明白であつた。

「辻褄の合はない事は世の中に幾何でもあるにはあるが」

斯う云ひ掛けた彼は突然笑ひたくなつた。

「何だか變だな。考へると可笑しくなる丈だ。まあ好いや己が借りて遣らなくつても何うにかなるんだらうから」

「ええ、[illegible]手はいくらでもあるでせう。現にもう一口は[illegible]たんですつて、[illegible]

[illegible]

待合といふ言葉が健三の耳に[illegible]響い[illegible]。彼は我を忘れたやうに[illegible]た。細君に[illegible]の姉の亭主が待合、小金を貸したといふ事實が不調和に見えた。けれども彼女はそれを夫の前に曝すと思ふやうな性質ではなかつた。たゞ夫と一所になつて面白さうに笑つてゐた。

背徳の感じが其去つた後で反動が來た。健三は比田に續いて不愉快な昔迄思ひ出させられた。

それは彼の二番目の兄が病死する前後の事であつた。病人は平生から自分の持つてゐる兩蓋の銀側時計を弟の健三に見せて、是を今に御前に遣らうと殆ど口癖のやうに云つてゐた。時計を所有した經驗のない若い健三は、欲しくて堪まらない其装飾品が、何時になつたら自分の帯に巻き付けられるだらうかと想像して、暗に未來の得意を豫算に組み込みながら、一二箇月を暮した。

病人が死んだ時、彼の細君は夫の言葉を尊重して、その時計を健三に遣るとみんなの前で明言した。一つは亡くなつた人の記念とも見る

くべき此品物は、不幸にして質に入れてあつた。無論健三にはそれを受出す力がなかつた。彼は義姉から所有權丈を讓り渡されたと同樣で、肝心の時計には手も觸れる事が出來ずに幾日かを過ごした。

或日皆なが一つ所に落合つた。すると其席上で比田が問題の時計を懷中から出した。時計は見違へる樣に磨かれて光つてゐた。新しい紐に珊瑚樹の珠が裝飾として付け加へられた。彼はそれを勿體らしく兄の前に置いた。

「それでは是は貴方に上げる事にしますから」

傍にゐた姉も殆ど比田と同じやうな口上を述べた。

「どうも色々御手數を掛けまして、有難う。ぢや頂戴します」

兄は禮を云つてそれを受取つた。

健三は默つて三人の樣子を見てゐた。三人は殆ど彼の其處にゐる事さへ眼中に置いてゐなかつた。仕舞迄一言も發しなかつた彼は、腹の中で甚しい侮辱を受けたやうな心持がした。然し彼等は平氣であつた。彼等の仕打を仇敵の如く憎んだ健三も、何故彼等がそんな面當がましい事をしたのか、何うしても考へ出せなかつた。

彼は自分の權利も主張しなかつた。又說明も求めなかつた。たゞ無言のうちに愛想を盡かした。さうして親身の兄や姉に對して愛想を盡かす事が、彼等に取つて一番非道い刑罰に違なからうと判斷した。

「そんな事をまだ覺えておらつしやるんですか。貴夫も隨分執念深いわね。御兄いさんが御聞きになつたら嘸御驚きなさるでせう」

細君は健三の顏を見て暗に其氣色を伺つた。

健三はちつとも動かなかつた。

「執念深からうが、男らしくなからうが、事實は事實だよ。よし事實に棒を引いたつて、感情を打ち殺す譯には行かないからね。其時の感情はまだ生きてゐるんだ。生きて今でも何處かで働いてゐるんだ。己が殺しても天が復活させるから何にもならない」

「御金なんか借りさへしなきあ、それで好いぢやありませんか」

斯う云つた細君の胸には、比田ばかりでなく、自分の事も、自分の生家の事も、勘定に入れてあつた。

百一

年が改まつた時、健三は、一夜のうちに變つた世間の外觀を、氣のなささうな顏をして眺めた。

「すべて下らない事だ。人間の小刀細工だ」

實際彼の周圍には大晦日も元日もなかつた。悉く前の年の引續きばかりであつた。彼は人の顏を見て御目出たうといふのさへ厭になつた。そんな殊更な言葉を口にするよりも誰にも會はずに默つてゐる方がまだ心持が好かつた。

彼は普通の服裝をしてぶらりと表へ出た。成るべく新年の空氣の通はない方へ足を向けた。冬木立と荒れた畠、藁葺屋根と細い流、そんなものが茫漠した彼の眼に入つた。然し彼は此可憐な自然に對してももう感興を失つてゐた。

幸ひ天氣は穩かであつた。空風の吹き捲らない野面には春に似た靄が遠く懸つてゐた。其間から落ちる薄い日影もおつとりと彼の身體を包んだ。彼は人もなく路もない所へわざ〳〵迷ひ込んだ。さうして融けかゝつた霜で泥だらけになつた靴の重いのに氣が付いて、しばらく足を動かさずにゐた。彼は一つ所に佇立んでゐる間に、氣分を紛らさうとして繪を描いた。然し其繪があまり不味いので、寫生は却つて彼を自棄にする丈であつた。彼は重たい足を引摺つて又宅へ歸つて來た。途中で島田に遣るべき金の事を考へて、不圖何か書いて見ようといふ

氣を廻した。

細い印氣で汚い手紙をなすくる業は漸く濟んだ。新しい仕事の始まる迄にはまだ十日の間があった。彼は其十日を利用しようとした。彼は又洋筆を執って原稿紙に向った。

健康の次第に衰へつゝある不快な事實を認めながら、それに注意を拂はなかった彼は、猛烈に働いた。恰も自分で自分の身體に反抗でもするやうに、恰もわが衛生を虐待するやうに、又己れの病氣に敵討でもしたいやうに。彼は血に餓ゑた。しかも他を屠る事が出來ないので已むを得ず自分の血を啜って滿足した。

豫定の枚數を書き了へた時、彼は筆を投げて疊の上に倒れた。

「あゝ、あゝ」

彼は獣と同じやうな聲を揚げた。

書いたものを金に換へる段になって、彼は大した困難にも遭遇せずに濟んだ。たゞ何ういふ手續きでそれを島田に渡して好いか一寸迷った。直接の會見は彼も好まなかった、向ふでももう參上りませんと云ひ放った以後の言葉に對して、彼の前へ出て來る氣遣のない事は知れてゐた。何うしても中へ入って取次ぐ人の必要があった。

「矢っ張り兄さんか比田さんに御頼みなさるより外に仕方がないでせう。今迄の行掛りもあるんだから」

「まあ左右でもするのが、一番穩當だらう。あんまり有難くはないが。公けな他人を頼む程の事でもないから」

健三は津守坂へ出掛けて行った。

「百圓遣るの」

聞いた姉は勿體なささうな眼を丸くして健三を見た。

「でも健ちゃんなんぞは額が違ふからね。さうしみったれた眞似も出來まいし、それにあの島田って爺さんが、たゞの爺さんと違って、あの通りの悪黨だから、百圓位仕方がないだらうよ」

姉は健三の腹にない事迄一人合點でべら〳〵喋舌った。

「だけど御正月早々御前さんも隨分好い面の皮さねえ」

「好い面の皮の[illegible]りか」

先刻から傍に胡坐をかいて新聞を見てゐた比田は、此時始めて口を利いた。然し其言葉は姉に通じなかった。健三にも解らなかった。それを左も心得顔にあはゝと笑ふ姉の方が、健三には却って可笑しかった。

「でも健ちゃんは好いね。御金を取らうとすれば幾何でも取れるんだから」

「此方とらとは少し頭の寸法が違ふんだ。[illegible]」

比田は變挺な事ばかり云った。然し頼んだ事は一も二もなく引き受けて呉れた。

百二

比田と兄が揃って健三の宅を訪れたのは月の半ば頃であった。松飾の取り拂はれた往來にはまだ何處となく新年の香がした。暮も春もない健三の座敷の中に坐った二人は、落付かないやうに其處いらを見廻した。

比田は懐から書付を二枚出して健三の前に置いた。

「まあ是で漸く片が付きました」

其一枚には百圓受取った事と、向後一切關係を斷つといふ事が古風な文句で書いてあった。手蹟は誰のとも判斷が付かなかったが、島田の印は慥に捺してあった。

健三は『然る上は後日に至り』とか、『後日のため證約件の如し』とかいふ言葉を馬鹿にしながら默讀した。

「何うも御手數でした、ありがたう」

「斯ういふ證文さへ入れさせて置けばもう大丈夫だからね。それでないと何時迄も蒼蠅く付け纏はられるか分つたもんぢやないよ。ねえ長さん」

「さうさ。是で漸く安心出來たやうなものだ」

比田と兄の會話は少しの感銘も健三に與へなかつた。彼には遣らないでもいゝ百圓を好意的に遣つたのだといふ氣ばかり强く起つた。面倒を避けるために金の力を藉りたとは何うしても思へなかつた。

彼は無言の儘もう一枚の書付を開いて、其處に自分が復籍する時島田に送つた文言を見出した。

「私儀今般貴家御離縁に相成、實父より養育料差出候に就ては、今後とも互に不實不人情に相成らざる樣心掛度と存候」

健三には意味も論理も能く解らなかつた。

「それを賣り付けようといふのが向うの腹さね」

「つまり百圓で買つて遣つたやうなものだね」

比田と兄は又話し合つた。健三は其間に言葉を挾むのさへ厭だつた。

二人が歸つたあとで、細君は夫の前に置いてある二通の書付を開いて見た。

「此方の方は蟲が食つてますね」

「反故だよ。何にもならないもんだ。破いて紙屑籠へ入れてしまへ」

「わざ〳〵破かなくつても好いでせう」

健三はそのまゝ席を立つた。再び顔を合はせた時、彼は細君に向つて訊いた。

「先刻の書付は何うしたい」

「簞笥の抽斗に仕舞つて置きました」

彼女は大事なものでも保存するやうな口振で斯う答へた。健三は彼女の所置を咎めもしない代りに、賞める氣にもならなかつた。

「まあ好かつた。あの人だけは是で片が付いて」

細君は安心したと云はぬばかりの表情を見せた。

「何が片付いたつて」

「でも、あゝして證文を取つて置けば、それで大丈夫でせう。もう來る事も出來ないし、來たつて構ひ付けなければ夫迄ぢやありませんか」

「そりや今迄だつて同じ事だよ。左右しようと思へば何時でも出來たんだから」

「だけど、あゝして書いたものを此方の手に入れて置くと大變違ひますわ」

「安心するかね」

「えゝ安心よ。すつかり片付いちやつたんですもの」

「まだ中々片付きやしないよ」

「何うして」

「片付いたのは上部丈ぢやないか。だから御前は形式張つた女だといふんだ」

細君の顔には不審と反抗の色が見えた。

「ぢや何うすれば本當に片付くんです」

「世の中に片付くなんてものは殆どありやしない。一遍起つた事は何時迄も續くのさ。たゞ色々な形に變るから他にも自分にも解らなくなるだけの事さ」

健三の口調は吐き出す樣に苦々しかつた。細君は默つて赤ん坊を抱き上げた。

「おゝ好い子だ〳〵。御父さまの仰しやる事は何だかちつとも分りやしないわね」

細君は斯う云ひ〳〵、幾度か赤い頰に接吻した。

「夏目漱石集」の後に

何故にかういふ編輯の仕方をしたかに就いて、此所に簡單に私の考へを書いて置くのは、私の義務でもあると思ふ。一般の讀者にとつて此事は、漱石先生を理解する上に、或は何等かの參考になるかも知れない。

「吾輩は猫である」は初めて先生を世間的に有名にした作品である。然もこの作品が先生の一面を最も顯著に代表してゐるものである以上、是はまづ第一に集中に加へられなければならない作品である。然し「猫」の全部を此所に置くといふ事は、限られたる頁數では他の重要な作品を除外しなければならなくなるといふ意味で、到底不可能の事であつた。その上「猫」は元來最初のもの一つで讀み切りにする積りで書かれたものである。それが世評もよく編輯者の勸め方も熱心を極めた爲に、第二を書き第三を書き到頭第十一まで書き續けられた。從つて是には、章は十一まであるとは言つても、先生自身が「猫」上篇の序で「此書は趣向もなく、構造もなく、尾頭の心元なき海鼠の樣な文章であるから、たとひ此一卷で消えてなくなつた所で一向差し支へない」と言つてゐる樣に、章の途中で切りさへしなければ、章と章とでは何所で切つても構はない筈のものである。それで私はその第一から第三までを選み上げた。

「猫」の第一を書く時には無論先生は第二を書く事を豫想しなかつた、第二を書く時にも先生は恐らく第三を書く事をはつきりとは豫想しなかつた。然し第三を書く時には書く事が出來たら先きを書き續けても可い位には考へてゐたに違ひない。――是は無論私の想像である。然しこの想像には、形式の整へ方が第一と第二とではそれ/\一つの纏まつた文章となつてゐるに反して、第三になると殊にその結末の一節が、何かしら後に來るものを待つてゐて、それ自身け充分に終結してゐない樣な感じを與へる所から、主として引き出されたものである。然も「猫」の文章が持つ味の方から見ても、第一には割に愼ましやかな、言はば何所かにおど/\した所があり、第二にも晴れやかな心持も交つてはゐるが、何所となく遠慮けに丁寧に書いてゐる所があるのに、それが第三になると、先生の心持は思ひ切つて自由になり、書きたい事は思ふ存分書きまくると言つた感じに變つて來てゐる。さうして「猫」は、最後まで、この第三の調子を持ち續けて進んで行つてゐるのである。この意味から言つて、「猫」の第三は、丁度三代將軍家光の樣に、「猫」十一章の基礎を確立したものだと見る事も出來る。それ故私は、ある意味からは「猫」の全部を代表させ得るとも考へて、その第一から第三までを選み上げたのである。

先生は「猫」を書いて有名になつた。然し「猫」を書いて有名になつた事で、先生は隨分損をした。なぜなら、當時の世間の多くは、「猫」の笑ひを笑ひ丈として歡迎して、その奥に藏されてゐる先生の血と涙とを少しも讀みとる事がなかつたからである。さうして先生を、眞面目な問題をも不眞面目に受とつて了ふ滑稽作家として、先づ折紙をつけて了つたからである。然しその實先生ほどの眞面目な眞劍な作家は、當時何所にも存在してゐなかつた。今日といへどもその點で先生に雁行し得る作家がそれほど數多くあるとも思はれない。

然し若し今日の讀者の内で、『猫』を讀んで、先生の不眞面目な心に觸れる樣に感じる讀者があるならば、その人は、同時に『道草』を併せ讀んで見るが可いと思ふ。勿論『道草』は獨立して立派な藝術的價値を持つてゐる作品である。私は『猫』の擁護の爲に、是を集中に加へたのではない。然し『道草』に取り扱はれてゐる先生自身の生活上の時期は、凡そ『猫』が書かれてゐる時期と、殆んど重なり合ふ位な時期である。『道草』を通してその時期の先生の生活氣分を感じる人は、『猫』が先生のどういふ生活氣分の下に生れたものであるかを知る事によつて、『猫』の中の眞面目な分子と『猫』の奧に潛んだ悲痛な心持とを、より具體的に感じる事が出來るに違ひない。

もつとも先生の『道草』が書かれたのは、大正四年四月中旬以後の事である。從つてそこに取り扱はれてゐる生活氣分そのものは、丁度『猫』が書かれてゐる前後の生活氣分ではあつても、それを取り扱ふ取り扱ひ方は、明治三十八年の取り扱ひ方ではなく、正に大正四年の取り扱ひ方である。先生が當時の氣分をかういふ風に取り扱ひ得る爲めには、先生はその間に凡そ十年の間隔を置かなければならなかつたのだと言へる。然もそれだけにまた『道草』は、初期の作品に見る事の出來ない、特別な美しさを持つ作品となつてゐるのである。

『道草』の主人公は、遁れ難き過去を持ち、遁れ難き社會的義務を持ち、遁れ難き肉の絆を持ち、また遁れ難き自己完成の衝迫を持ち、振り棄てたくても振り棄てる事が出來ず、愛し徹したくても愛し徹す事が出來ず、どつちにも片づかない心持に、惱み憤り悲しみ苦しんでゐる人間である。然も作者はその主人公の惱みや憤りやを、同情はするが、然し一段高い所から見下ろして描いてゐる。從つて主人公が憎みを感じる相手に對しても、假令主人公のその心持は認めはしても、主人公と一緒になつて、それを憎まうとはしてゐない。それどころか、主人公に對すると同じ程度の寛容を持つて主人公の相手の感情や動作を眺め、ある時は主人公の相手に對する過誤を過誤として穩やかに窘めて遣つてさへもゐる。從つて此所に取り扱はれてゐる材料そのものは、息苦しい樣な材料ではあつても、その材料の取り扱ひ方の奧から洩れ出て來る光は、可也朗らかな靜かな柔らかな美しさを持つた光である。――私は是を、先生のあらゆる長篇小説の内で、最も完成した作品であると思つてゐる。殊に過去から現在へかけて、四十年に亙る主人公の歴史の殆んど全部をその中に盛り込んで、然も現在眼前の事件を着々と進行させ、それに反應して動く主人公の氣分を巨細に描寫し悉す藝術的手腕に至つては、恐らく何所にも其比を求め得まいと思はれる程に、驚嘆に値ひするものである。

元來先生には美しい夢を愛する方面と醜い現實を憎む方面と二つの方面があつた。それが『道草』では、一つの心の中に止揚されて現はれる。然し先生の初期の作品では、この二つの方面が、交互に一つづつ、特に高調されて現はれる事を常とした。明治三十八年に殆んど同時に出た『猫』と『倫敦塔』と『カーライル博物館』とに就いて見ても、『猫』にはその醜い現實を憎む心がより多く活らいて居り、『倫敦塔』にはその美しい夢を愛する心がより多く活らいて居り、『カーライル博物館』にはそれら二つの心が割に等分に活らいてゐる事が、誰にでもすぐに眼につくだらうと思ふ。同じ事が、『薤露行』と『坊つちやん』に就いても言へる。殊に『坊つちやん』は、先生の道義的肝癪を最も直截な形式によつて、紙の上にぶちまけたものである。

『草枕』は先生自身も言つてゐる樣に、まつた

く開闢以來の珍らしい小說である。さうして此所では、醜い現實を憎むが故に美しい夢を愛するといふ事が、最初から堂々と肯じられてゐる。此所では、女がどうするとか坊さんがどうするとか髪結床の亭主がどうするとか、中に出て來る事件そのものはさのみ問題にならない。問題になるのは、その事件を美しく受けとる、その受けとり方である　此所で主人公は、その受けとり方を證明するとともに、自分が受けとつたものを我我に列べて見せて呉れる　然し惜しい事に、主人公の夢は、現實の一角を磨り減して得られた夢であつて、現實そのまゝを美しい夢と見得たのではなかつたために、一旦山を下りると、それは破られなければならない運命を持たされた夢にすぎなかつた。この事は一面に於て、當時の先生の心の中の夢と現實との性質並にその二つのものの調和の仕方を示唆する　然も此所に現はされた先生の人生觀は、後年の則天去私の人生觀と、十年を隔てゝ遙に相呼應するものでもある

　然しからいふ人生觀が後年の則天去私になる爲には、外の言葉で言へば、醜い現實を憎む心と美しい夢を愛する心とがより大きな一つの調和の中に止揚される爲には、先生の內生活は一度激しい力で急回轉をしなければならなかつた。さうして、その急回轉を與へたものは、先生の胃潰瘍であつた　明治四十三年八月修善寺菊屋旅館に於ける大吐血であつた　是を境として先生の人と藝術とは、より良く、より東洋的に、急劇に變化する。

　先生の日記の中から拔き出して、假に「修善寺日記」と命名した日記と、「思ひ出す事など」の中から抄出した大吐血直後から數日間の回想とは、この重大な時機に於ける先生の心持の描寫したものとして、我我に無比に貴重な材料を提供するものである。晩年の心境の開展を問題にする者は、誰でも凡て此所から出立しなくてはならない程、是は先生の研究者にとつて貴重な材料を提供するものである。

　それのみではない、日記には多くの發句と漢詩とが挾まれてゐる。先生の發句と漢詩とを愛する私は、この「日記」を集中に加へる事によつて、特に私が一番可い句が澤山あると信じてゐる、修善寺病中の句を、同時に公けにし得る事を、非常に嬉しく思ふ。先生の句は、修善寺病中以後に於て、先生の誠を吐露する句となつた。私は、修善寺病中以後の句には、先生の一番美しいサイドが、或は一番純粹に現はれてゐるのではないかとさへ思つてゐるのである。

　この事を私は同時に先生の小品に就いても考へる　詩人としての素質を最も豐に惠まれてゐた先生は、詩に於て、さうして詩に最も近い形式の散文に於いて、その素質を最も純粹に表現する事が出來るのではないか。少くとも小品を除外した先生の集は、私にとつては、先生の集としては到底考へられない　從つて私は小品を前期と中期と後期とに分けて、「カーライル博物館」や「文鳥」や「永日小品」抄を前期の代表に、「ケーベル先生」を中期の代表に、「硝子戸の中」抄を後期の代表に選んで見た　同じ小品でも、前期の小品には、何所かに尖尖しい所がある　私はなるべくさういふ味の少ない、圓味の多いものを選ばうとした。「ケーベル先生」は修善寺大患後凡そ一年を經て書かれたものである。是は中期の代表と言はず、先生のあらゆる小品の中で最も美しい小品である。是と、永日小品の中の「クレイグ先生」とを比べて見る時、前期の小品と中期の小品との間にどういふ差があるかを、可也具體的に攫む事が出來るだらうと思ふ。勿論二人に對する先生の感情の動き方の相違が、二つの小品の與へる感じ

の相違をなすものである事には疑ひがないけれども、然しそれよりももつと根本的なものは、それを書く當時の先生の心の相違である。前期の小品には、氣を負つた様な感じの心が往々にして現はれる。中期の小品にはそれが殆んど消えて、あるのは、玲瓏玉の様な、然も脈々として暖か味の通つてゐる玉の様な感じの心のみである。その點で中期のものは後期のものと一緒になつて、前期のものと對照する。私が特に小品を後期まで三つに分けたのは、中期に對しては大した意味をなさない。唯『硝子戸の中』から抄出したものは、年代が大正四年であるといふ事と、纏つて一つの空氣を―全體に亙つて沁やかな潤ひを多分に帯びてゐるといふ事とから、便宜上獨立させた迄の事である。さうしてその潤ひを多分に帯びてゐるといふ事は、是が、懷かし味を持つて回顧せられた、先生の遠い過去であるといふ事に起因する。これ等の小品の持つ味と『道草』の中に點綴された先生の遠い過去の回想が、どういふ所で合ひどういふ所で離れるかを點検して見る事も、ある種の讀者には興味のある事かも知れない。

最後に斷つて置きたい事は、この集が、先生の前期と後期とに觸しい割に中期に疎かである様に見えるといふ事である。是は然しこの集の様に、限られた頁数の集では已むを得ない。なぜなら中期の作品は凡て長篇小説計りで短篇小説は殆んどない、然も『道草』が動かせない以上、長篇小説二つをとるといふ事は、外のものを犠牲にしなければならない事になるからである。然も私は、『日記』と『思ひ出す事など』の抄と『ケーベル先生』と丈あれば、充分に中期を代表し得る筈だとも考へてゐるのである。といふ事は、それほど此三つのものに、重きを置いてゐるといふ事を意味する。

昭和二年五月　小宮豐隆

著作年表

（この年表からは、先生の俳句漢詩序文小論文の類は、紙面に拘らず、大部分省かれてゐる。さういふものを入れだすと、分量が餘り多くなりすぎるからである。唯英文の文章だけは、數が少ないから、長短に拘らず、出來るだけ採錄する事にした。但しこの初期の文章といへども、公衆の眼に觸れる事を豫想して書かれ且つ印刷されたものに限られる。例へば明治二十四年十二月八日脱稿の「方丈記」の譯の樣なものは、「漱石全集」に載せられたといふ丈であるのみで、まだそれが何年後の何號に出てゐるかを調べてゐないために、此所には採錄されてゐない。それから、先生が朝日新聞に入社してから後のものは、單に「朝日」とのみ書いてある日附は、「東京朝日新聞」の日附を意味するものである事を斷つて置きたい。先生入社の際にその作品は必ず東京大阪の兩朝日へ掲載するといふ約束があつたが、掲載の日は兩方必ずしも同じであるといふ譯に行かず、ともすると一方だけで載せて一方では載せそびれるといふ樣な場合さへあつて、それを一々書き記してゐると煩はしくなるから、まづ東京朝日新聞で統一する事にしたのである。然し單に「朝日」とのみあれば、兩方の何れにせよ、同時に掲載されたと考へても間違はないと思ふ。この「朝日新聞」に載つたものの年表は、すべて上野氏を通して東京朝日新聞調査部を煩はして作製して貰つた「著作年表」によつたものである　小宮豐隆）

明治二十五年　二十六歲
東京帝國大學文科大學在學中、七月、藤代禎輔、立花銑三郎、松本文三郎、大島義脩の諸氏とともに『哲學雜誌』編輯員となる。十月の『哲學雜誌』に『文壇に於ける平等主義の代表者ウォルト・ホイットマンの詩について』を掲ぐ。

明治二十六年　二十七歲
一月の文學談話會にて「英國詩人の天地山川に對する觀念」を講演す。三月四月五月六月の『哲學雜誌』に『英國詩人の天地山川に對する觀念』を連載す。
七月文科大學卒業。

明治二十八年　二十九歲
四月、愛媛縣松山中學校に赴任す。十一月の「保惠會雜誌」（松山中學校校友會雜誌）に『愚見數則』を掲ぐ。

明治二十九年　三十歲
四月、松山中學校を辭して、熊本第五高等學校に赴任す。十月の「龍南會雜誌」（第五高等學校校友會雜誌）に『人生』を掲ぐ。

明治三十年　三十一歲
三月の「江湖雜誌」に『トリストラム・シャンデー』を掲ぐ。

明治三十一年　三十二歲
十一月十二月の「ホトトギス」に『不言之言』を連載す。

明治三十二年　三十三歲
・四月の「ホトトギス」に『英國の文人と新聞雜誌』を、八月の「ホトトギス」に『小說エイルヰンの批評』を掲ぐ。

明治三十三年　三十四歲
五月十二日英語研究の爲英國留學を命ぜられ、九月八日横濱發十月二十八日倫敦着。

明治三十四年　三十五歲
正岡子規に宛てたる私信『倫敦消息』の名の下に五月六月の「ホトトギス」に連載さる。

明治三十六年　三十七歳

一月二十四日歸朝。三月末本鄕區駒込千駄木町五十七番地に卜居。第五高等學校を辭して、第一高等學校並に東京帝國大學講師となる。九月より文科大學にて「文學論」を開講す。七月の「ホトトギス」に「自轉車日記」を掲ぐ。

明治三十七年　三十八歳

一月の「帝國文學」に「マクベスの幽靈に就いて」を、二月出版の「英文學會叢誌」に「翻譯、セルマの歌」を、十一月十二月の「ホトトギス」に高濱虛子との合作長篇俳體詩「尼」を掲ぐ。

明治三十八年　三十九歳

一月の「ホトトギス」に「吾輩は猫である」を、同じ月の「帝國文學」に「倫敦塔」を、同じ月の「學燈」に「カーライル博物館」を掲ぐ。二月の「ホトトギス」に「吾輩は猫である」の二を、四月の「ホトトギス」に『幻影の盾』と『猫』の(三)を、五月の「七人」に『琴のそら音』を、六月の「ホトトギス」に『猫』の(四)を、七月の「ホトトギス」に『猫』の(五)を掲ぐ。同じ月『文學論』講了。九月より『十八世紀英文學』後に『文學評論』の名の下に出版さるを開講す。九月の「中央公論」に『一夜』を、同じ月の「ホトトギス」に『猫』の(六)を十一月の「中央公論」に『薤露行』を掲ぐ。

十月『吾輩は猫である』上篇出版。

明治三十九年　四十歳

一月の「帝國文學」に『趣味の遺傳』を、同じ月の「ホトトギス」に『猫』の(七)と(八)とを、三月の「ホトトギス」に『猫』の(九)を、四月の「ホトトギス」に『坊っちやん』と『猫』の(一〇)とを、八月の「ホトトギス」に『猫』の(十一)を、九月の「新小說」に『草枕』を、十月の「中央公論」に『二百十日』を掲ぐ。

五月『漾虛集』出版。十一月『吾輩は猫である』中篇出版。十二月『鶉籠』出版。

十二月二十七日本鄕區駒込西片町十番地ろノ七號へ轉居。

明治四十年　四十一歳

一月の「ホトトギス」に『野分』を掲ぐ。四月第一高等學校並に東京帝國大學講師の職を辭して、朝日新聞社に入る。入社の後東京美術學校文學會の爲に『文藝の哲學的基礎』を講演す。五月三日の『入社の辭』に次いで『文藝の哲學的基礎』を「朝日」に連載す。六月二十三日より十月二十九日まで『虞美人草』を「朝日」に連載す。

五月『文學論』出版。六月『吾輩は猫である』下篇出版。

九月二十九日牛込區早稻田南町七番地へ轉居。

明治四十一年　四十二歳

一月一日より四月六日まで「朝日」に『坑夫』を連載す。二月十五日朝日新聞主催の講演會にて『創作家の態度』を講演す。四月の「ホトトギス」に『創作家の態度』を掲ぐ。六月十三日より「大阪朝日」に『文鳥』を連載す。七月一日より「大阪朝日」に、七月二十五日より「東京朝日」に『夢十夜』を連載す。九月一日より十二月二十九日まで『三四郎』を「朝日」に連載す。

一月『虞美人草』出版。九月『草合』出版。

明治四十二年　四十三歳

一月十四日より三月十四日に亘つて『永日小品』中の二十四篇を「大阪朝日」に掲ぐ(但東

京朝日」はそのうち十六篇を掲げたり。六月二十七日より十月十四日まで『それから』を「朝日」に連載す。九月二日出發滿韓旅行の途につき十月十七日歸京す。十月二十一日より十二月三十一日まで『滿韓ところ〴〵』を「朝日」に連載す。十一月二十五日より「朝日文藝欄」を主任す。

三月『文學評論』出版。五月『三四郎』出版。

明治四十三年　四十四歳

三月一日より六月十二日まで『門』を「朝日」に連載す。六月十八日胃潰瘍の疑にて、七月三十一日まで内幸町胃腸病院入院。八月六日修善寺に轉地。十七日、十九日、二十四日と引續きて吐血。十月十一日快方にして歸京、直に胃腸病院に入院。十九日より『思ひ出す事など』を「朝日」に掲載され始む。

五月『四篇』出版。

明治四十四年　四十五歳

二月十九日『思ひ出す事など』掲載され了る。

二月二十六日胃腸病院退院。七月十六日ケーベル先生』を「朝日」に掲ぐ。七月二十五日より七月三十一日まで「手紙」を掲ぐ。八月十一日出發、朝日新聞社主催の講演會の爲に、明石、堺、和歌山、大阪に赴き、講演後八月十九日大阪にて再び潰瘍の爲め湯川病院に入院、九月十四日歸京。十月末朝日文藝欄を廢止す。十一月一日辭表を提出し、十一月二十一日是を撤回す。

一月『門』出版。八月『切拔帖より』出版。

十一月朝日新聞社の『朝日講演集』出づ。

明治四十五年、大正元年　四十六歳

一月一日より四月二十九日まで『彼岸過迄』を「朝日」に連載す。十月十五日より十月二十八日まで『文展と藝術』を「朝日」に連載す。十二月六日より『行人』連載され始む。

九月『彼岸過迄』出版。

大正二年　四十七歳

三月末より胃潰瘍の爲に臥床。『行人』は「歸つてから」四月七日掲了までにて一時擱筆。九月十六日よりその續稿「塵勞」連載され始め、十一月十五日に至つて完結す。

二月『講演集』『社會と自分』出版。

大正三年　四十八歳

一月七日より一月十二日まで『素人と黑人』を「朝日」に掲ぐ。四月二十日より八月十一日まで『心』を「朝日」に連載す。

一月『行人』出版。十月『心』出版。

大正四年　四十九歳

一月十三日より二月二十三日まで『硝子戸の中』を「朝日」に連載す。三月十九日出發京都に旅行し、潰瘍にて臥床。四月十七日歸京。六月三日より九月十四日まで『道草』を「朝日」に連載す。

四月『硝子戸の中』出版。十月『道草』出版。

大正五年　五十歳

一月一日より一月二十一日まで『點頭錄』を「朝日」に連載す。一月二十八日より二月十六日まで湯河原滯留。五月二十六日より『明暗』「朝日」に連載され始む。十一月二十二日潰瘍。十二月九日逝く。『明暗』は第百八十八回（十二月十四日まで掲載）にて中斷されたり。

昭和二年六月一日印刷
昭和二年六月五日發行

現代日本文學全集　第十九篇

著者　夏目漱石

發行者　山本美
東京市麹町區内幸町一丁目參番地

印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌　改造社
東京市麹町區内幸町一丁目參番地
幸ビルディング壹階

振替　東京八四〇二番
電話　銀座一七三三番
銀座四五五八番
銀座五〇四六番

株式會社秀英舍印刷